

# 流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 2

— 流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器～奈良・平安時代編） —

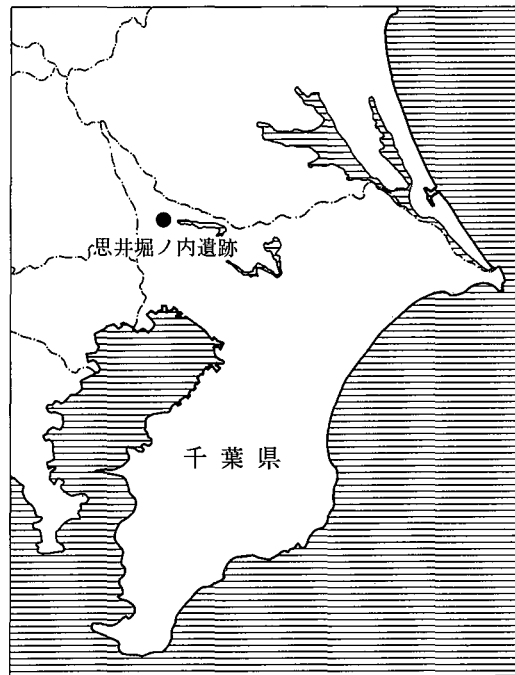
平成22年1月

千葉県県土整備部

財団法人 千葉県教育振興財団

# 流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 2

ながれやま おもいほりのうち  
— 流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器～奈良・平安時代編） —







墨書土器「庄」



緑釉陶器

## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第635集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器～奈良・平安時代編）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物が多数出土していますが、特に奈良・平安時代において、竪穴住居跡や掘立柱建物跡とともに「庄」と書かれた墨書土器が発見され、この地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年 1 月

財団法人 千葉県教育振興財団  
理 事 長 篠 塚 俊 夫

# 凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市思井字堀ノ内523-1ほかに所在する思井堀ノ内遺跡（遺跡コード220-040）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節を上席研究員 落合章雄が、第2章第2節を主席研究員 伊藤智樹が、それ以外を主席研究員 栗田則久が担当した。編集は栗田が行った。
- 6 文字資料については、大学共同利用機関法人人間文化機構国立歴史民俗博物館 平川南館長に、施釉陶器については、(財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 城ヶ谷和広氏から御教示を頂いた。
- 7 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部、流山市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 国土地理院発行 1:25,000「流山」(NI-54-25-1-2)・「松戸」(NI-54-25-2-1)
  - 第2図 柏書房株式会社発行 1989『明治前期 関東平野地誌図集成』1:25,000「流山」・「松戸」
- 9 本書で使用した図版1（遺跡周辺航空写真）は、京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位はすべて座標北で、調査時の旧公共座標（日本測地系座標第Ⅸ系）に準拠している。

## (旧石器時代)

- 11 本書中の遺物分布図で用いた記号の意味については、図中において例示した。
- 12 本書では出土した石器を平面分布上の観点から「ブロック」として括った。各ブロックについて、「出土分布図」「垂直分布図」「垂直ヒストグラム」「石器実測図」「石器組成表」「石器一覧表」「石器出土状況写真」「出土石器写真」を作成した。
  - 出土分布図** 縮尺100分の1を基本とし、器種別、石材別の2種類を作成した。
  - 垂直分布図** 縮尺100分の1を基本とし、器種別分布図に付随して作成した。よって記号の種類は器種別分布図に使用したものと同一である。土層柱状図については不明瞭なものは掲載を控えた。
  - 垂直ヒストグラム** 石器の出土点数を5cm単位で集計し、グラフとして表している。左側には出土地の土層柱状図を基に作成した模式図を掲載した。
  - 石器実測図** 縮尺5分の4を基本としているが、大型の石器については3分の1とした。各実測図にはスケールを配している。番号はブロック毎に1からナンバーリングしている。器種名と石材を表記してあるが、以下のように記号化している。

## 器種

ナイフ形石器：Kn、石斧・打製石斧：Ax、削器：Ss、調整痕のある剥片：RF1、使用痕のある剥片：UF1、剥片：Fl、碎片：Ch、石核：Co、敲石：Hs、礫片：Gr、石鏃：AH、磨製石斧：GAx、石皿：MS、玦状耳飾：SE、垂飾：PT、石棒：Tp

## 石材

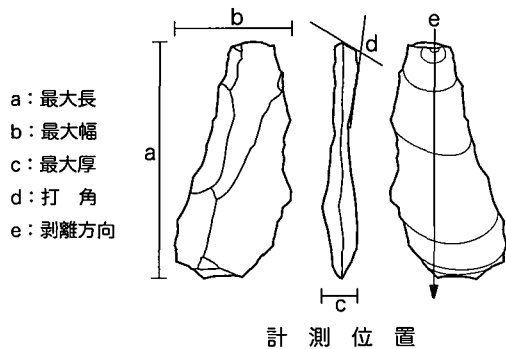
黒曜石：Ob、玉髓：Cc、珪質頁岩：Ss、頁岩：Sh、流紋岩：Rh、安山岩：An、チャート：Ch、凝灰岩：Tu、変成岩：Ho、粘板岩：Sl、蛇紋岩：Se、絹雲母片岩：Ssc、緑泥片岩：Msc、滑石：Pd、石英斑岩：Qp、片麻岩：Gn

**石器組成表** 横項目を器種、縦項目を石材として点数、重量について集計した。セルの上段が点数、下段が重量である。また縦横合計と共に組成比の項目をパーセント表示にて明記している。

**石器一覧表** 番号の若いブロックから順に、ブロック単位でまとめた。各ブロック内の並びはグリッド、遺物番号による。実測図を掲載した石器については、挿図番号（第○図）を付した。器種名、石材については、編集の関係上、上記の記号化したものを使用した。石器の計測は右図に準じて行った。

**出土状況写真** 調査時における出土状況写真を掲載したが、すべてのブロックについて撮影されていないため、写真のあるブロックのみ掲載した。

**出土石器写真** 実測図を掲載した石器について全て掲載した。



凡例 石器計測位置

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法と調査概要	2
第2節 遺跡の位置と環境	2
1 遺跡の地理的環境	2
2 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第2章 検出された遺構と遺物	13
第1節 旧石器時代	13
1 基本層序	13
2 ブロック	13
3 ブロック外出土遺物	48
第2節 縄文時代	55
1 竪穴住居跡	55
2 炉穴	61
3 陥穴	77
4 土坑	86
5 グリッド出土土器	88
6 縄文時代石器	101
第3節 奈良・平安時代	117
1 竪穴住居跡	117
2 竪穴住居内出土遺物	152
3 掘立柱建物跡	157
4 土器焼成遺構	161
5 祭祀遺構	164
6 鍛冶炉跡	164
7 土坑	165
8 グリッド出土遺物	165
第3章 まとめ	179
第1節 旧石器時代	179
第2節 奈良・平安時代	179
1 出土土器と集落の変遷	179
2 墨書土器の様相	183
3 遺跡の性格	189

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	4	第39図	第11ブロック出土石器(3)	48
第2図	遺跡と周辺の地形	6	第40図	ブロック外出土石器	49
第3図	下層確認調査設定図	7	第41図	SI-440・457	57
第4図	遺構分布図	8	第42図	SI-463・464・559	58
第5図	地点別遺構分布図(1)	9	第43図	竪穴住居跡出土縄文土器(1)	59
第6図	地点別遺構分布図(2)	10	第44図	竪穴住居跡出土縄文土器(2)	60
第7図	地点別遺構分布図(3)	11	第45図	SK-294・298・300・323・324	67
第8図	ブロック分布図	14	第46図	SK-360・361・364・366・367B・369	68
第9図	土層柱状図	15	第47図	SK-422~424・431・432・434	69
第10図	第1ブロック器種別分布	16	第48図	SK-433・435・458・461A・B	70
第11図	第1ブロック石材別分布	17	第49図	SK-466A~D・467・469	71
第12図	第1ブロック出土石器(1)	18	第50図	SK-470・474・475B・487	72
第13図	第1ブロック出土石器(2)	19	第51図	SK-500・557・558・560	73
第14図	第1ブロック出土石器(3)	20	第52図	炉穴出土土器(1)	74
第15図	第2ブロック遺物分布	21	第53図	炉穴出土土器(2)	75
第16図	第2ブロック出土石器	22	第54図	炉穴出土土器(3)	76
第17図	第3ブロック遺物分布	23	第55図	SK-030・031・207・296	81
第18図	第3ブロック出土石器	24	第56図	SK-297・299・426・428	82
第19図	第4ブロック遺物分布	25	第57図	SK-473・488・510・592	83
第20図	第4ブロック出土石器	26	第58図	陥穴出土土器(1)	84
第21図	第5ブロック遺物分布	28	第59図	陥穴出土土器(2)	85
第22図	第5ブロック出土石器	29	第60図	陥穴出土土器(3)	86
第23図	第6・7・8ブロック器種別分布	30	第61図	SK-436・475C・566	87
第24図	第6・7・8ブロック石材別分布	31	第62図	土坑出土土器	87
第25図	第6ブロック出土石器	32	第63図	グリッド出土土器(1)	89
第26図	第7ブロック出土石器	33	第64図	グリッド出土土器(2)	90
第27図	第8ブロック出土石器(1)	34	第65図	グリッド出土土器(3)	91
第28図	第8ブロック出土石器(2)	35	第66図	グリッド出土土器(4)	92
第29図	第8ブロック出土石器(3)	36	第67図	グリッド出土土器(5)	93
第30図	第9・10・11ブロック器種別分布	38	第68図	グリッド出土土器(6)	94
第31図	第9・10・11ブロック石材別分布	39	第69図	グリッド出土土器(7)	96
第32図	第9・10・11ブロック石器形状比	40	第70図	グリッド出土土器(8)	97
第33図	第9ブロック出土石器	41	第71図	グリッド出土土器(9)	98
第34図	第10ブロック出土石器(1)	42	第72図	グリッド出土土器(10)	99
第35図	第10ブロック出土石器(2)	43	第73図	グリッド出土土器(11)	100
第36図	第10ブロック出土石器(3)	44	第74図	縄文時代石器(1)	102
第37図	第11ブロック出土石器(1)	46	第75図	縄文時代石器(2)	103
第38図	第11ブロック出土石器(2)	47	第76図	縄文時代石器(3)	104



第77図	縄文時代石器(4).....	105	第110図	SI - 551(1).....	148
第78図	縄文時代石器(5).....	106	第111図	SI - 551(2).....	149
第79図	縄文時代石器(6).....	107	第112図	SI - 554.....	150
第80図	縄文時代石器(7).....	108	第113図	SI - 562・563・565.....	151
第81図	縄文時代石器(8).....	109	第114図	竪穴住居跡出土瓦.....	153
第82図	縄文時代石器(9).....	110	第115図	竪穴住居跡出土土錘・羽口.....	154
第83図	縄文時代石器(10).....	111	第116図	竪穴住居跡出土支脚.....	154
第84図	縄文時代石器(11).....	112	第117図	竪穴住居跡出土石製品.....	155
第85図	縄文時代石器(12).....	113	第118図	竪穴住居跡出土鉄製品.....	156
第86図	縄文時代石器(13).....	114	第119図	竪穴住居跡出土鉄滓.....	158
第87図	縄文時代石器(14).....	115	第120図	SB - 351~353・359.....	159
第88図	SI - 004.....	118	第121図	SB - 489.....	160
第89図	SI - 007.....	119	第122図	SB - 561・006.....	162
第90図	SI - 008.....	121	第123図	SK - 475A.....	163
第91図	SI - 012.....	122	第124図	SK - 303.....	164
第92図	SI - 282(1).....	123	第125図	SK - 438・471B.....	165
第93図	SI - 282(2).....	124	第126図	奈良・平安時代土坑.....	166
第94図	SI - 283(1).....	126	第127図	奈良・平安時代土坑出土土器.....	166
第95図	SI - 283(2).....	127	第128図	グリッド出土土器.....	167
第96図	SI - 284.....	128	第129図	グリッド出土瓦.....	168
第97図	SI - 286.....	129	第130図	グリッド出土土製品他.....	169
第98図	SI - 287.....	131	第131図	グリッド出土鉄製品.....	170
第99図	SI - 358.....	132	第132図	竪穴住居跡出土土器変遷図(1).....	181
第100図	SI - 367A.....	134	第133図	竪穴住居跡出土土器変遷図(2).....	182
第101図	SI - 368.....	135	第134図	竪穴住居跡出土土器変遷図(3).....	183
第102図	SI - 439.....	136	第135図	集落変遷図.....	184
第103図	SI - 462.....	138	第136図	文字資料一覧(1).....	185
第104図	SI - 465(1).....	140	第137図	文字資料一覧(2).....	185
第105図	SI - 465(2).....	141	第138図	主要な文字資料の字形.....	188
第106図	SI - 465(3).....	143	第140図	文字資料出土状況(1).....	190
第107図	SI - 465(4).....	144	第141図	文字資料出土状況(2).....	191
第108図	SI - 471A.....	146	第142図	文字資料出土状況(3).....	192
第109図	SI - 485.....	146	第143図	関東地方の「庄」文字資料.....	194

## 表 目 次

第1表	発掘調査一覧.....	5	第5表	第4ブロック石器組成表.....	26
第2表	第1ブロック石器組成表.....	20	第6表	第5ブロック石器組成表.....	29
第3表	第2ブロック石器組成表.....	21	第7表	第6ブロック石器組成表.....	32
第4表	第3ブロック石器組成表.....	24	第8表	第7ブロック石器組成表.....	32

第9表	第8ブロック石器組成表	32	第15表	奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表	171
第10表	第9ブロック石器組成表	40	第16表	奈良・平安時代出土土器観察表	172
第11表	第10ブロック石器組成表	40	第17表	出土文字資料一覧表	186
第12表	第11ブロック石器組成表	40	第18表	関東地方の文字資料	
第13表	旧石器時代石器属性表	50		「庄」出土遺跡一覧表	193
第14表	縄文時代石器属性表	116			

## 図版目次

巻頭図版	墨書土器「庄」 施釉陶器		図版24	SI-471A、SI-471Aカマド内遺物出土状況、 SI-485
図版1	遺跡周辺航空写真		図版25	SI-551、SI-554、SI-563
図版2	遺跡全景		図版26	SB-351・352、SB-489、SB-561
図版3	第1・第3・第4ブロック		図版27	SK-475A・009~011・293・303・365・437・ 472
図版4	第5・第6~8・第9ブロック		図版28	遺構出土縄文土器(1)
図版5	旧石器時代石器(1)		図版29	遺構出土縄文土器(2)
図版6	旧石器時代石器(2)		図版30	遺構出土縄文土器(3)
図版7	旧石器時代石器(3)		図版31	グリッド出土縄文土器(1)
図版8	旧石器時代石器(4)		図版32	グリッド出土縄文土器(2)
図版9	旧石器時代石器(5)		図版33	グリッド出土縄文土器(3)
図版10	旧石器時代石器(6)		図版34	グリッド出土縄文土器(4)
図版11	旧石器時代石器(7)		図版35	縄文時代石器(1)
図版12	SI-440、SI-440遺物出土状況、SI-457		図版36	縄文時代石器(2)
図版13	SI-463、SI-464、SI-559		図版37	縄文時代石器(3)
図版14	SK-294・298・300・323・324・360・364・ 367・369・422・424		図版38	縄文時代石器(4)
図版15	SK-431・432~435・458・466・467・474・ 475B・C・500・557		図版39	縄文時代石器(5)
図版16	SK-558・560・030・031・207・296・297・ 299・426・428		図版40	奈良・平安時代土器(1)
図版17	SK-473・488・510・592・436・566、SI-004		図版41	奈良・平安時代土器(2)
図版18	SI-004カマド、SI-007、SI-008		図版42	奈良・平安時代土器(3)
図版19	SI-008遺物出土状況、SI-012、SI-282		図版43	奈良・平安時代土器(4)
図版20	SI-283、SI-284、SI-287		図版44	奈良・平安時代土器(5)
図版21	SI-358、SI-358カマド内遺物出土状況、SI- 367A		図版45	竪穴住居跡出土瓦
図版22	SI-368、SI-368カマド内遺物出土状況、SI- 439		図版46	土坑・グリッド出土瓦、竪穴住居跡・ グリッド出土鉄製品
図版23	SI-439カマド内遺物出土状況、SI-462、SI- 465		図版47	土製品
			図版48	墨書土器赤外線写真(1)
			図版49	墨書土器赤外線写真(2)
			図版50	墨書土器赤外線写真(3)



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

常磐新線建設では周辺地区の土地区画整理事業が一体化して、千葉県企業庁により実施されることになった。そのため流山運動公園周辺地区においては、事業地内の埋蔵文化財の取り扱いについて平成10年度に関係諸機関と協議が行われた。その結果、記録保存の措置を講ずることとなり、平成11年2月より財団法人千葉県文化財センター（当時）が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査及び整理作業に係わった各年度の担当職員、作業内容等は下記のとおりである。

(1) 発掘調査

年度	期間	遺跡名	事務所	部長 所長	担当者	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)		
							上層	下層	上層	下層	
平成10	11.2.1～ 11.3.26	思井堀ノ内遺跡	西部調査事務所	沼澤 豊 鈴木定明	調査室長 藪 淳一	7,713	990	-	-	-	
平成11	12.2.10～ 12.2.18	思井堀ノ内遺跡(2)		沼澤 豊 及川淳一	研究員 廣瀬和之 研究員 山田貴久	396	40	-	-	-	
平成12	12.5.1～ 13.3.29	思井堀ノ内遺跡(3)		沼澤 豊 及川淳一	調査室長 藪 淳一 研究員 中道俊一	上席研究員 竹田良男	1,816	平10 実施済	104	1,816	300
	12.9.20～ 13.3.29	思井堀ノ内遺跡(4)			調査室長 藪 淳一 上席研究員 竹田良男	575	平10 実施済	-	575	-	
	13.1.9～ 13.3.29	思井堀ノ内遺跡(5)			2,145	200	-	255	-		
平成13	13.4.5～ 13.8.31	思井堀ノ内遺跡(3)		佐久間豊 田坂 浩	調査室長 郷堀英司 上席研究員 立石圭一	300	平10 実施済	12	300	0	
		思井堀ノ内遺跡(4) その1				488	平10 実施済	36	488	180	
		思井堀ノ内遺跡(4) その2				575	平10 実施済	44	平12 実施済	360	
		思井堀ノ内遺跡(5) その1				300	平12 実施済	15	300	0	
		思井堀ノ内遺跡(5) その2				255	平12 実施済	8	平12 実施済	0	
		思井堀ノ内遺跡(5) その3	441			平12 実施済	8	441	0		
		思井堀ノ内遺跡(6)	1,804			198	56	770	48		
平成14	14.6.3～ 14.8.23	思井堀ノ内遺跡(8)	齊木 勝 田坂 浩	調査室長 郷堀英司	2,971	222	131	2,300	0		
平成14	14.12.2～ 15.1.31	思井堀ノ内遺跡(9)			1,038	平10 実施済	128	1,038	0		
平成15	16.2.9～ 16.2.27	思井堀ノ内遺跡(10)	齊木 勝 田坂 浩	709	平10 実施済	16	709	0			
平成15	16.2.9～ 16.2.27	思井堀ノ内遺跡(10)	齊木 勝 田坂 浩	292	平10 実施済	8	292	0			

(2) 整理作業

年度	期間	遺跡名	事務所	所長 課・所長	担当者	対象面積 (㎡)	内容
平成15	15.5.1～ 15.7.31 16.3.1～ 16.3.31	思井堀ノ内遺跡	西部調査事務所	齊木 勝 田坂 浩	調査室長 郷堀英司	12,088	水洗・注記、記録整理から分類・選別の一部まで
平成17	17.6.1～ 18.3.31	思井堀ノ内遺跡	調査部整理課	矢戸三男 加藤修司	上席研究員 天野 努	12,388	分類・選別の一部から報告書刊行(中世編)まで
平成18	18.6.15～ 19.3.22	思井堀ノ内遺跡	調査研究部整理課	矢戸三男 郷田良一	上席研究員 高木博彦	12,388	分類・選別の一部から実測の一部まで
平成20	20.9.4～ 21.3.31	思井堀ノ内遺跡	調査研究部整理課	大原正義 高田 博	整理課長 高田 博 主席研究員 伊藤智樹 上席研究員 新田浩三 主席研究員 栗田則久 上席研究員 上守秀明 上席研究員 落合章雄	12,388	実測の一部から原稿執筆の一部まで
平成21	21.4.1～ 21.8.31	思井堀ノ内遺跡	調査研究部整理課	及川淳一 高田 博	主席研究員 伊藤智樹 主席研究員 栗田則久	12,388	原稿執筆の一部から報告書刊行まで

## 2 調査の方法と調査概要

調査にあたっては、国土方眼座標を基準に、開発区域の調査対象地を覆うように、40m×40mの方眼網を設定し、基準点測量を行った。これを大グリッドとし、北西に起点を置いて、東西のY軸は西から順にA、B、C・・・、南北のX軸は北から順に1、2、3・・・と記号を付した。このため、開発区域全域の中で、今回報告する当遺跡の調査対象地域は、大グリッドとしては、Y軸がC～G、X軸が58～62までの区域となっている。そして、さらに、この大グリッドを4m×4mの小グリッド100区画に分割し、北西隅を起点に西から東へ00、01、02・・・09、北から南へ00、10、20・・・90と番号を付け、南東隅を99とした。これを組み合わせて表すと、小グリッドの呼称は、例えばC58-58などとなる。なお、Y軸のC～G、X軸の58～62の各公共座標値は第4図の遺構全体図に記したとおりである。

発掘調査は上層の確認調査、本調査に続いて下層の調査へと実施したが、用地問題等の関係で相前後した場合もある。上層の確認調査は対象面積の10%を原則にトレンチを設定し、遺構、遺物の分布状況を調べ、本調査範囲を限定した。下層の確認調査は対象面積の4%を原則にグリッドを設定し、石器の分布状況を調べた。上層の本調査はバックホウによる表土除去後、全域の遺構を調査した。下層の確認調査ではクラムシェルによる掘削を一部で用いている。遺物の取り上げについては、遺構に伴って出土したものについては遺構内の通し番号で、包含層や旧石器時代の遺物についてはグリッド内の通し番号で取り上げている。

これまでの調査で検出された遺構・遺物は旧石器時代から中近世に至るまで数多くに及んでいる。時代別の主な遺構は次のとおりである。

旧石器時代－石器群11地点、

縄文時代－竪穴住居跡5棟（早期～前期）・炉穴23基・陥穴21基（早期）

奈良・平安時代－竪穴住居跡29棟・掘立柱建物跡4棟・土器焼成遺構1基・祭祀遺構1基・小鍛冶跡2基・柵列2・土坑10基

中近世－館跡1か所（掘立柱建物跡6棟・柵列1・ピット列2・ピット多数・堀跡2条・溝状遺構1条・土坑1基）・方形周溝区画墓1基・台地整形区画3地点・溝状遺構27条・井戸状遺構1基・地下式坑13基・土坑59基・集石遺構1基など。

※中近世については平成18年3月に既刊

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の地理的環境

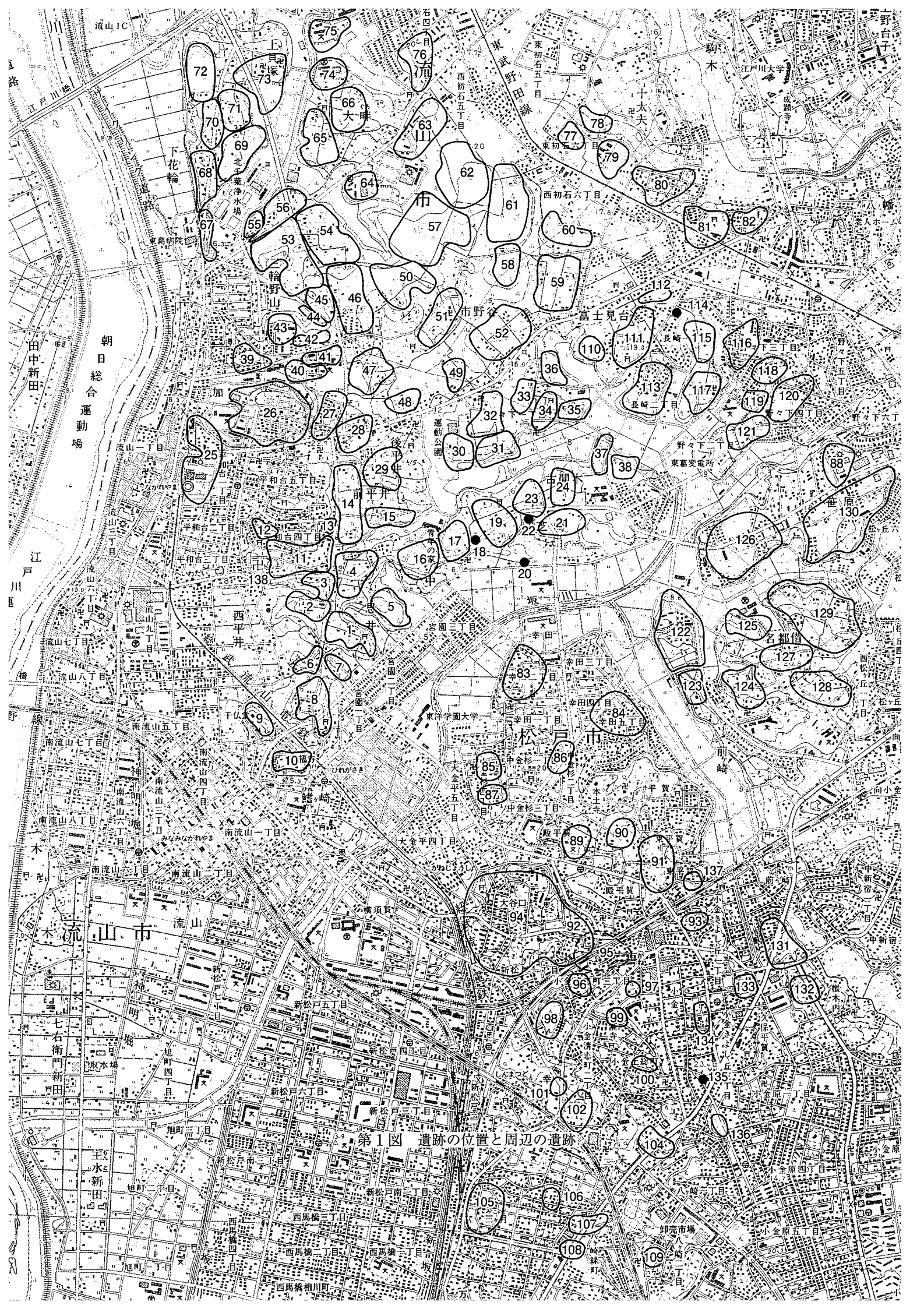
思井堀ノ内遺跡は、流山市思井字堀ノ内に所在している。流山市は千葉県の北西部に位置し、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡は、この流山市の南西部の標高23.5m程の洪積台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ、東京湾へと注いでおり、南側は松戸市との境をなす、支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地から江戸川や坂川の流れる古東京湾によって形域された広い低地へと、半島状に突出す形を呈しており、思井堀ノ内遺跡は、その先端部に位置している。このため本遺跡は立地的にみると、西側の江戸川と南側の坂川、そして台地下に広がる低地をあたかも眼下に納める位置にあると言っても過言ではない。次に、遺跡の南側を流れる坂川についてみると、遺跡付近から南西へ3.5km程の地点で江戸川へと合流する小河川であるが、この坂川の流れる坂川低地は、この地域では最大規模の開析谷であり、東側に

広がる北総台地へと複雑に深く入り込んでいる。このため、その谷頭は遺跡の北東側7.5km程の地にある手賀沼とそこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。ちなみに、遺跡地から東側そして北側の台地へと入り込む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は、分水嶺をなす台地の幅がわずかに300m～500m程である。この手賀沼は、利根川（古鬼怒川）、霞ヶ浦（香取海）を経て太平洋へと通じる水系にある。その意味では、この坂川は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ水路のような位置を占めている。

## 2 周辺の遺跡と歴史的環境

流山市内の旧石器時代の遺跡としては、桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡・中野久木遺跡・若葉台遺跡・桐ヶ谷南割り（上貝塚）遺跡・三輪野山北浦遺跡（56）などで石器群が検出されている。桐ヶ谷南割り（上貝塚）遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて7ブロック、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層のブロックが6か所調査されている。また、若葉台遺跡ではⅣ層からⅥ層にかけてのブロックが6か所とⅧ層上部の1ブロックが確認されており、当該地域最古の石器群として捉えられている。縄文時代の遺跡はきわめて多い。早期では、三輪野山第Ⅲ遺跡（55）で鶴ヶ島台式の竪穴住居や炉穴が調査されている。他に、加地区遺跡群でも炉穴がみられる。前期になると、多くの遺跡で集落が調査されている。松戸市の幸田貝塚（83）では関山式期を主体とした竪穴住居が多数検出された。流山市内では、三輪野山遺跡群で良好な資料がみられる。若葉台遺跡では、黒浜式期の竪穴住居が10軒検出され、内1軒には貝層が含まれている。この貝層を伴う竪穴住居は三輪野山道六神遺跡（53）でも多数調査されている。黒浜式期の竪穴住居は三輪野山北浦遺跡でも検出されている。諸磯式期では、長崎遺跡（116）のやはり貝層を伴う竪穴住居から良好な資料が出土している。中期では、後半に多くの遺跡が見られる。中野久木谷頭遺跡では、中峠式期から加曽利E式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。後期の遺跡も中期に引き続き多くの遺跡が所在する。江戸川台第Ⅰ遺跡や花山東遺跡（76）などで集落が検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚や上新宿貝塚・上貝塚は大規模な環状貝塚として知られている。晩期中頃までは資料が確認されているが、以降はほとんどみられなくなる。弥生時代についてみると、この時代は遺跡の分布が稀薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山第Ⅱ遺跡で中期の須和田式土器が出土し、加村台遺跡（25）と下花輪荒井前（旧下花輪第Ⅱ）遺跡（69）で宮の台式期の住居跡が検出されている程度である。また、坂川流域でも対岸の松戸市内で中芝遺跡（84）、道六神遺跡（85）、原の山遺跡（88）があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が48か所と大きく増加してくる。このうち、前期から中期にかけての集落遺跡は12遺跡ほどである。特に江戸川流域では、三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡（54）三輪野山第Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡等が、また、坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡（62）、市野谷入台遺跡（61）、市野谷向山遺跡（52）等が各々集落群を形成している。このうち、市野谷地区は、坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。なかでも市野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の竪穴住居跡が90軒検出され、そのうちの1軒から東日本で最も古い墨書土器が出土している。後期の集落遺跡は更に増加し、18遺跡程が調査されている。この時期になると、三輪野山地区や市野谷地区以外にもさらに分布域が広がり、思井堀ノ内遺跡に近い江戸川流域の加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡（25）、加町畑遺跡（26）、加北谷津第Ⅰ遺跡（40）、同第Ⅱ遺跡（39）、平和台遺跡（11）等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ、加町畑遺



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	県分布 図番号	遺跡名	時代
1	169	思井堀ノ内遺跡	古墳(中)、平安
2	207	西平井根郷遺跡	縄文、中世
3	228	西平井二階畑遺跡	縄文、中世
4	168	中中ノ台遺跡	平安、近世
5	229	思井上ノ内遺跡	古墳(後)、奈良・平安
6	217	西平井大崎遺跡	縄文
7	193	思井鷹の見遺跡	縄文(早・前)、古墳、近世
8	35	鱒ヶ崎塚の越遺跡	古墳(後)
9	174	鱒ヶ崎塚の越台遺跡	古墳(後)
10	33	鱒ヶ崎貝塚	縄文(早・中・後)、平安
11	170	平和台遺跡	縄文(中)、古墳、平安、中近世
12	184	大原神社遺跡	縄文(早)、古墳(後)、平安
13	204	宮本遺跡	縄文(早)、平安
14	32	前平井遺跡	縄文(前・中)、平安
15	226	前平井堀米遺跡	古墳(後)、奈良・平安
16	167	中中屋敷遺跡	縄文(前・中・後)、平安
17	36	古間木山王第Ⅰ遺跡	縄文(前)、平安
18	191	古間木第Ⅰ塚	近世
19	227	古間木山王第Ⅱ遺跡	縄文、古墳(後)、奈良・平安
20	85	芝崎第2号墳遺跡	古墳
21	159	芝崎大田遺跡	縄文(前・中)、古墳、平安
22	37	芝崎第1号墳遺跡	古墳
23	158	古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡	縄文(前・中)、平安
24	160	古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡	縄文(後)、平安
25	90	加村台遺跡	弥生(中)、古墳(後)、平安、近世
26	186	加町畑遺跡	縄文、古墳、奈良、平安
27	187	加若宮第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
28	212	加東割遺跡	縄文(前)、中近世
29	225	後平井中通遺跡	古墳(後)、奈良・平安
30	42	野々下西方遺跡	縄文(前・中)
31	43	野々下大屋敷遺跡	縄文(後)、平安
32	41	野々下山中遺跡	縄文(前)、平安
33	81	野々下貝塚	縄文(前・中・後・晩)
34	44	野々下根郷第Ⅰ遺跡	平安
35	45	野々下根郷第Ⅱ遺跡	縄文(後)、平安
36	46	野々下塚	縄文(後)、近世
37	82	古間木菜葉木谷遺跡	縄文(早・前・後)
38	83	古間木遠田遺跡	縄文(前)
39	189	加北谷津第Ⅱ遺跡	縄文、古墳、平安
40	188	加北谷津第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
41	190	加若宮第Ⅱ遺跡	縄文、平安
42	197	三輪野山八重塚Ⅱ遺跡	縄文(早)、平安
43	185	三輪野山八重塚	縄文、古墳、平安
44	213	三輪野山低地遺跡	縄文(後・晩)
45	31	三輪野山貝塚	旧石器、縄文(前・中・後・晩)
46	153	三輪野山八幡前遺跡	縄文、古墳、平安、近世
47	215	市野谷地藏谷遺跡	古墳(後)、平安
48	224	市野谷梶内第Ⅱ遺跡	縄文
49	40	市野谷梶内第Ⅰ遺跡	縄文(前・中)、古墳(中・後)
50	220	市野谷宮後遺跡	縄文
51	156	市野谷中島遺跡	縄文(前・中)、平安
52	39	市野谷向山遺跡	縄文(前・中)、古墳(後)
53	211	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、中近世
54	154	三輪野山宮前遺跡	縄文(前)、古墳(後)、平安、近世
55	79	三輪野山第Ⅲ遺跡	縄文、古墳(後)、平安、近世
56	78	三輪野山北浦遺跡	旧石器、縄文(前・後)、古墳、平安、近世
57	219	市野谷幸久保遺跡	縄文(早)
58	222	市野谷二反田遺跡	縄文(前)
59	223	市野谷立野遺跡	縄文(前)、古墳(後)
60	221	大久保遺跡	縄文(前)
61	210	市野谷入台遺跡	古墳(前)
62	218	市野谷宮尻遺跡	古墳(後)、奈良・平安
63	202	西初石5丁目遺跡	縄文
64	208	三輪野山向原古墳	縄文(前)、弥生、古墳(前)
65	151	大畔西割遺跡	縄文(早・中)、古墳(後)、平安
66	152	大畔中ノ割遺跡	縄文(早・前・中)、平安
67	88	花輪城跡	中世
68	30	下花輪林下遺跡	縄文(後)、古墳(後)
69	29	下花輪荒井前遺跡	弥生、古墳、平安
70	209	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世
71	150	下花輪荒井遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
72	27	上貝塚大門遺跡	縄文(前・後)、平安
73	28	桐ヶ谷浅間後遺跡	旧石器、縄文(前・後)、平安
74	80	大畔台遺跡	縄文(前)、古墳、中世

番号	県分布 図番号	遺跡名	時代
75	136	西初石桜窪遺跡	縄文(前・中・後)、近世
76	203	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安
77	147	東初石6丁目第Ⅱ遺跡	縄文(後)、平安
78	145	十太夫第Ⅰ遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
79	146	東初石6丁目第Ⅰ遺跡	縄文(中)、平安
80	206	十太夫第Ⅲ遺跡	縄文、平安
81	194	源訪神社遺跡	縄文(中)
82	142	駒木源助腰遺跡	縄文(前)
83	1	幸田貝塚	旧石器、縄文(前・中・後)、古墳
84	2	中芝遺跡	弥生(後)、古墳(前・中・後)
85	4	道六神遺跡	縄文(早・前・中・晩)、弥生(後)、古墳(後)、奈良・平安
86	3	木戸口(中金)遺跡	縄文(晩)、古墳(中)
87	5	中金杉台遺跡	縄文(後)
88	166	原の山遺跡	縄文(早・前)、弥生、古墳(中・後)、平安
89	6	殿平賀遺跡	縄文(後)
90	181	殿平賀向堀遺跡	縄文(中)
91	16	東平賀遺跡	旧石器、縄文(前・中・後)、中世
92	12	殿平賀向山遺跡	旧石器、縄文(早・前)、古墳(前・中・後)
93	18	東平賀向台遺跡	古墳
94	11	小金城跡(大谷口小金城跡)	縄文、古墳、平安、中世
95	14	小金古墳群	古墳
96	15	西(小金)(北小金)遺跡	縄文(前・中・後)
97	179	鏡外Ⅱ遺跡	旧石器、縄文(前)
98	168	溜ノ上(溜の脇)遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(前・中・後)
99	24	鏡外(北小金駅付近)(東漸寺)遺跡	縄文(前・後)
100	178	山王前遺跡	縄文(前・中)
101	176	熊ノ脇遺跡	縄文(早・前・中)
102	27	幸谷城跡	中世
103	28	観音下遺跡	縄文(後)
104	30	後田遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
105	34	馬橋城跡	中世
106	32	上野台(ニッ木向台Ⅱ)遺跡	弥生(後)
107	31	ニッ木向台(ニッ木)(ニッ木第2)遺跡	縄文(早・前・後)、弥生(後)、古墳(後)
108	33	勢至前遺跡	縄文(早・前)、古墳(後)
109	42	入遺跡	縄文(前)
110	164-1	富士見台(Ⅰ)遺跡	縄文(中)、古墳(中・後)
111	48	長崎天形星遺跡	縄文(中)、古墳(中・後)
112	164-2	富士見台(Ⅱ)遺跡	縄文(中・後)
113	49	長崎五斗代遺跡	縄文(中)
114	50	長崎塚群	近世
115	149	長崎五枚割遺跡	縄文(前・中)、平安
116	51	長崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
117	76	長崎金乗院遺跡	古墳、平安
118	55	野々下長田遺跡	縄文(早・前・中・後)
119	56	野々下元木戸遺跡	縄文(中・後)、古墳(後)、平安
120	54	野々下土手内遺跡	縄文(中)
121	157	向下遺跡	縄文(中・後)、平安
122	86	前ヶ崎城跡	中世
123	68	前ヶ崎遺跡	縄文(前)
124	87	名都借城跡	中世
125	162	清滝院前遺跡	縄文(前)、平安、近世
126	168-1	笹原(Ⅰ)遺跡	縄文(中)、弥生、古墳
127	67	名都借笹堀込遺跡	縄文(前・中)、平安
128	64	名都借並木遺跡	縄文(中)、平安
129	66	名都借宮ノ脇遺跡	縄文(中)
130	168-2	笹原(Ⅱ)遺跡	縄文(中)
131	19	根木内城跡	中近世
132	20	根木内遺跡	縄文(前・中・後)、中近世
133	167-1	行人台遺跡・行人台城跡	縄文(早・前・中)、古墳(中・後)、中世
134	25	久保平賀(殿平賀向山)遺跡	古墳
135	26	久保平賀古墳	古墳
136	29	ニッ木溜台遺跡	縄文(前)
137	17	仲通遺跡	旧石器、縄文(前・中)、古墳(中)
138	47	流山院寺遺跡	奈良
134	25	久保平賀(殿平賀向山)遺跡	古墳
135	26	久保平賀古墳	古墳
136	29	ニッ木溜台遺跡	縄文(前)
137	17	仲通遺跡	旧石器、縄文(前・中)、古墳(中)
138	47	流山院寺遺跡	奈良

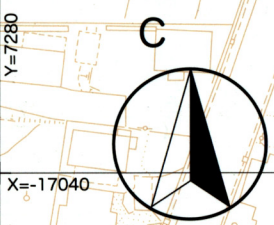
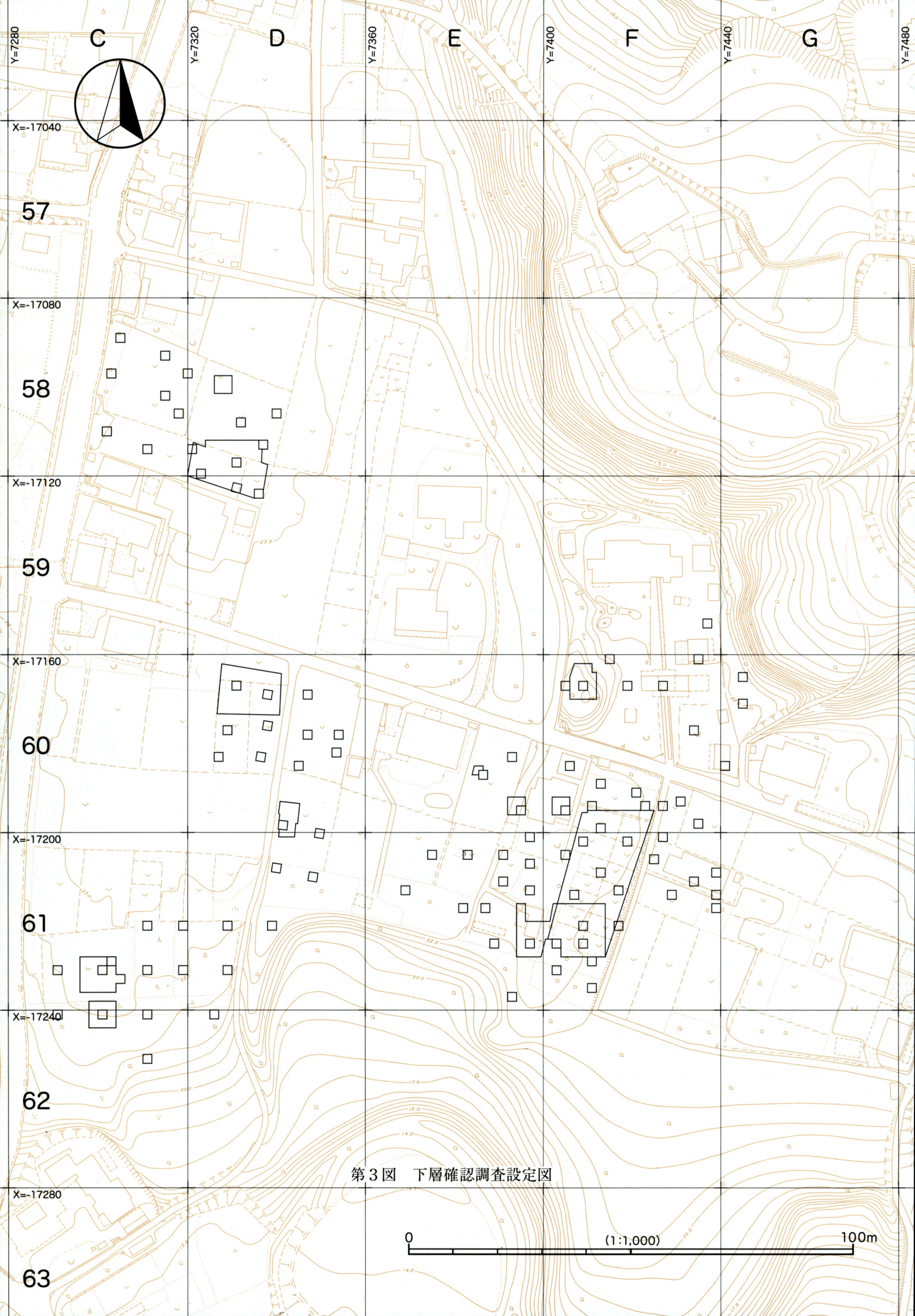




○…思井堀ノ内遺跡

第2図 遺跡と周辺の地形





57

58

59

60

61

62

63

C

D

E

F

G

X=-17040

X=-17080

X=-17120

X=-17160

X=-17200

X=-17240

X=-17280

Y=7320

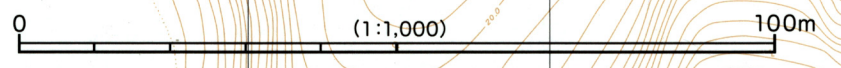
Y=7360

Y=7400

Y=7440

Y=7480

第3図 下層確認調査設定図





第4図 遺構分布図

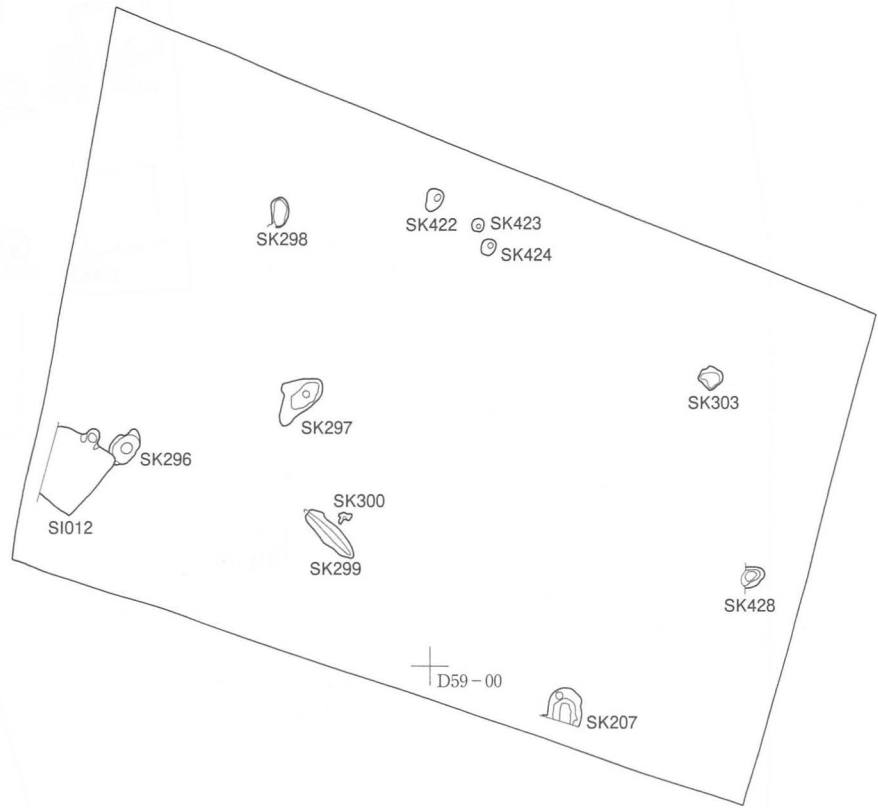
※土坑番号は第5～7図参照



C58-00



D58-00



C59-00

D59-00

0 (1/400) 20m

第5図 地点別遺構分布図(1)



第6図 地点別遺構分布図(2)



第7図 地点別遺構分布図(3)

跡は後期の竪穴住居跡74軒のみならず、奈良・平安時代の竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17軒が検出されている。拠点集落の一つである。一方、古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳（64）が、本遺跡の南500m程の地には前方後円墳の三本松古墳が、そして、加地区に終末期方墳の北谷津古墳が点在している。

次に奈良時代から平安時代になると、遺跡は飛躍的に増大し、72遺跡が知られている。このうち発掘調査された遺跡は本遺跡を含め30遺跡程である。これらの中で本遺跡や思井上ノ内遺跡（5）の所在する思井地区から前平井遺跡（14）や平和台遺跡（11）、加町畑遺跡（26）、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。そして、三輪野山地区には式内社比定社の茂呂神社が、平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺（138）が位置している。このような観点から、これらの遺跡群を古東海道の茜津駅に比定する考えもあり特に奈良・平安時代になると本遺跡周辺地域の重要性がうかがえる。

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### 1 基本層序

思井堀ノ内遺跡は、下総台地北西部の台地上に位置する。遺跡周辺の標高は23m前後を測り、下総台地の中心部にあたる四街道市周辺の標高26m～28mと比較すると、約5mの差がある。

下総台地は、更新世中期から後期の海成砂層（下総層群）を主体とし、その上位を風成層である関東ローム層が覆っている。下総層群の最上部には、常総粘土層と呼称される下末吉ローム起因の凝灰質粘土層が堆積しており、思井堀ノ内遺跡周辺の造成工事に伴う法面でも確認することができる。

下総台地の地形面は、海水・汽水・淡水に起因する浸食・堆積作用がなくなる離水期により、古い段階から下末吉面（下総上位面）、武蔵野面（下総下位面）、立川面（千葉面）と区分される。思井堀ノ内遺跡の所在する台地は、このうちの武蔵野面（下総下位面）に比定できる。

思井堀ノ内遺跡の発掘調査では、立川ローム層の一部のみを確認するに至った。各層の記述は以下のとおりである。

#### 2 ブロック

第1ブロック（第10～14図、第2・13表、図版3・5）

##### 分布

D58-80グリッドからD59-02グリッドにかけて検出された。分布範囲は東西に長い長軸14m、短軸9mの楕円形状を呈する。分布範囲中には特に密集する地点はなく、均等に散布している。出土層位はⅨ層からⅣ層に渡るが、ヒストグラムのピークはⅨ層上面とⅦ層に2つの偏差が認められる。石器の出土レベルの最大値は22.639m、最小値は21.855m、平均は22.104mである。

##### 器種・石材

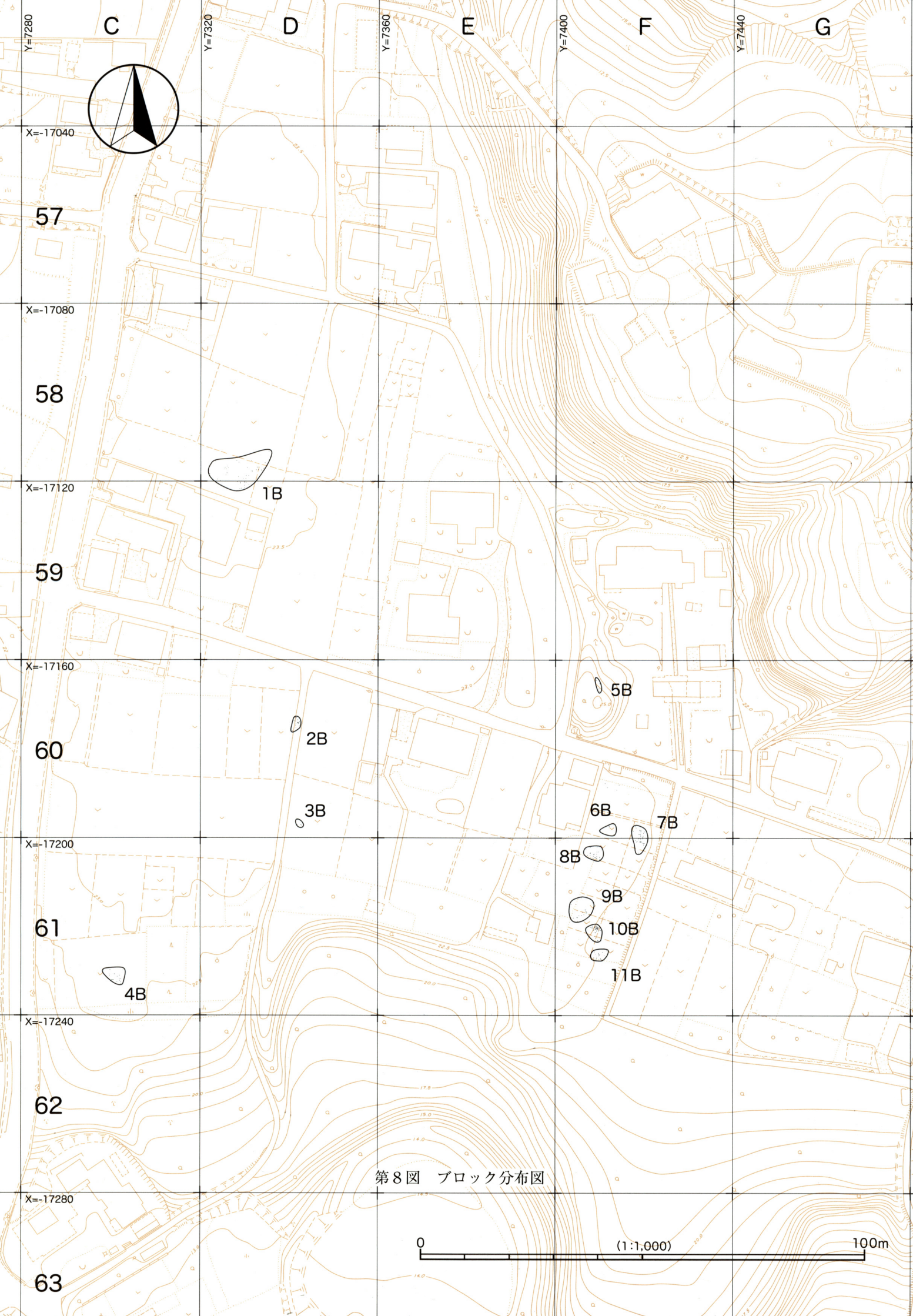
計42点の出土のうち、定型的な石器は安山岩製のナイフ形石器1点のみであり、他は調整痕ある剥片、剥片、碎片である。石材の種類は多く、安山岩、凝灰岩、頁岩、砂岩、チャート、玉髓が使用されるが、安山岩製の石器は点数比・重量比ともに65%以上を占め、石器組成の主体となる。

石器の縦横比は5：1から1：2.5と幅広いが、概して縦長剥片となる傾向があり、1.8：1前後に偏差が認められる。また大型剥片にはより縦長となる傾向がみられ、素材剥片の形状をほぼ留めているナイフ形石器については縦横比が4.6：1となっている。6cm×4cmの範囲に収束する感があるが、この範囲内に均等に分布し、特に偏差は認められない。

各石材の特徴は、安山岩は器表面が風化したもの（1・2・4）と風化が少なく平滑間があるもの（3・8・9）の二種があるが、欠損部は黒色を呈する。凝灰岩の器表面は灰色を呈し、光沢はないが平滑間がある。玉髓については、乳白色を主体とし、橙色の部位がみられる石材である。頁岩の礫面は明るい黄土色、内面は暗茶色を呈し、肌理の細かい石材である。

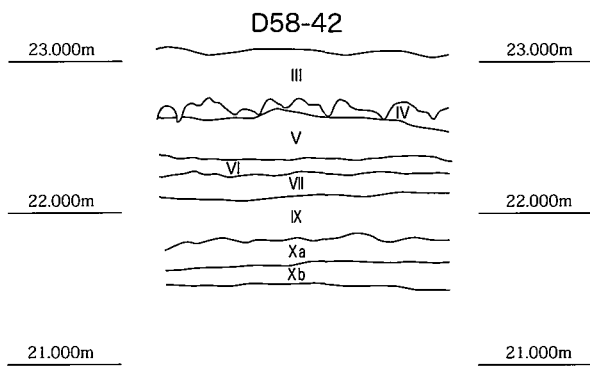
1は安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片の打面付近の両側縁に調整を施す。左側縁の調整は腹面側からであるが、右側縁は背面側から行われている。



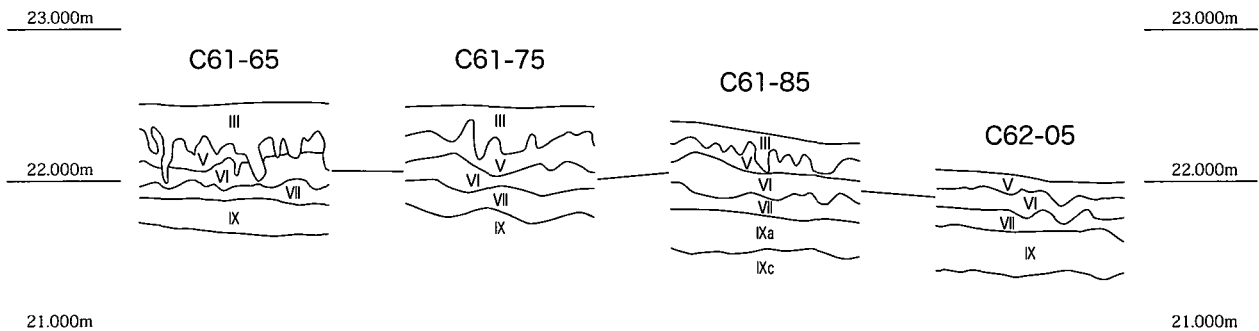


第8図 ブロック分布図

0 (1:1,000) 100m



III 層：黄褐色土、ソフトローム層。  
 IV 層：明褐色土。  
 V 層：褐色土、色調から明瞭に分層可能である。  
 VI 層：明褐色土、AT を含む。  
 VII 層：暗褐色土。  
 IXa 層：暗褐色土、5 mm程のスコリアを含む。  
 IXc 層：暗褐色土、IXa 層より色調暗い。  
 Xa 層：黄褐色土、スコリアの混入認められない。  
 Xb 層：褐色土、粘性が高い。



第9図 土層柱状図

2・3は安山岩製の調整痕のある剥片である。2は末端部に対し腹面側から微細な調整が施される。3は片側縁に腹面側からの調整が施される

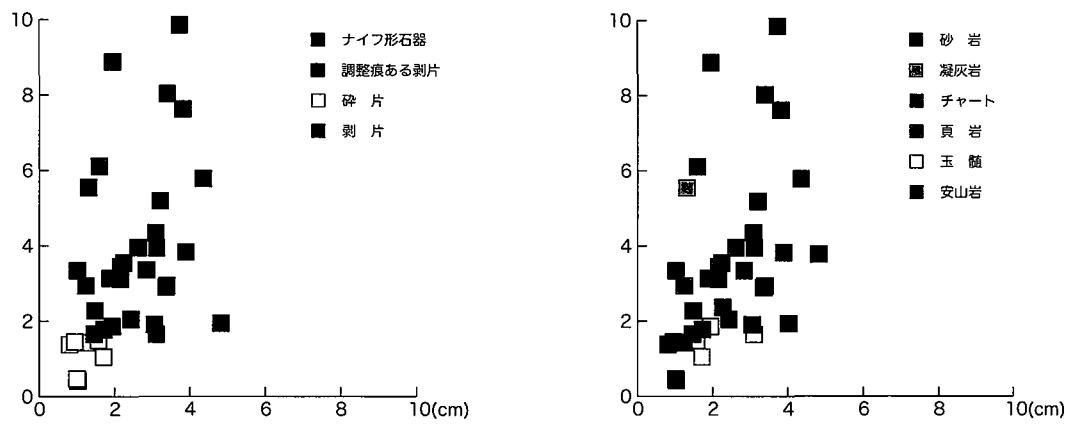
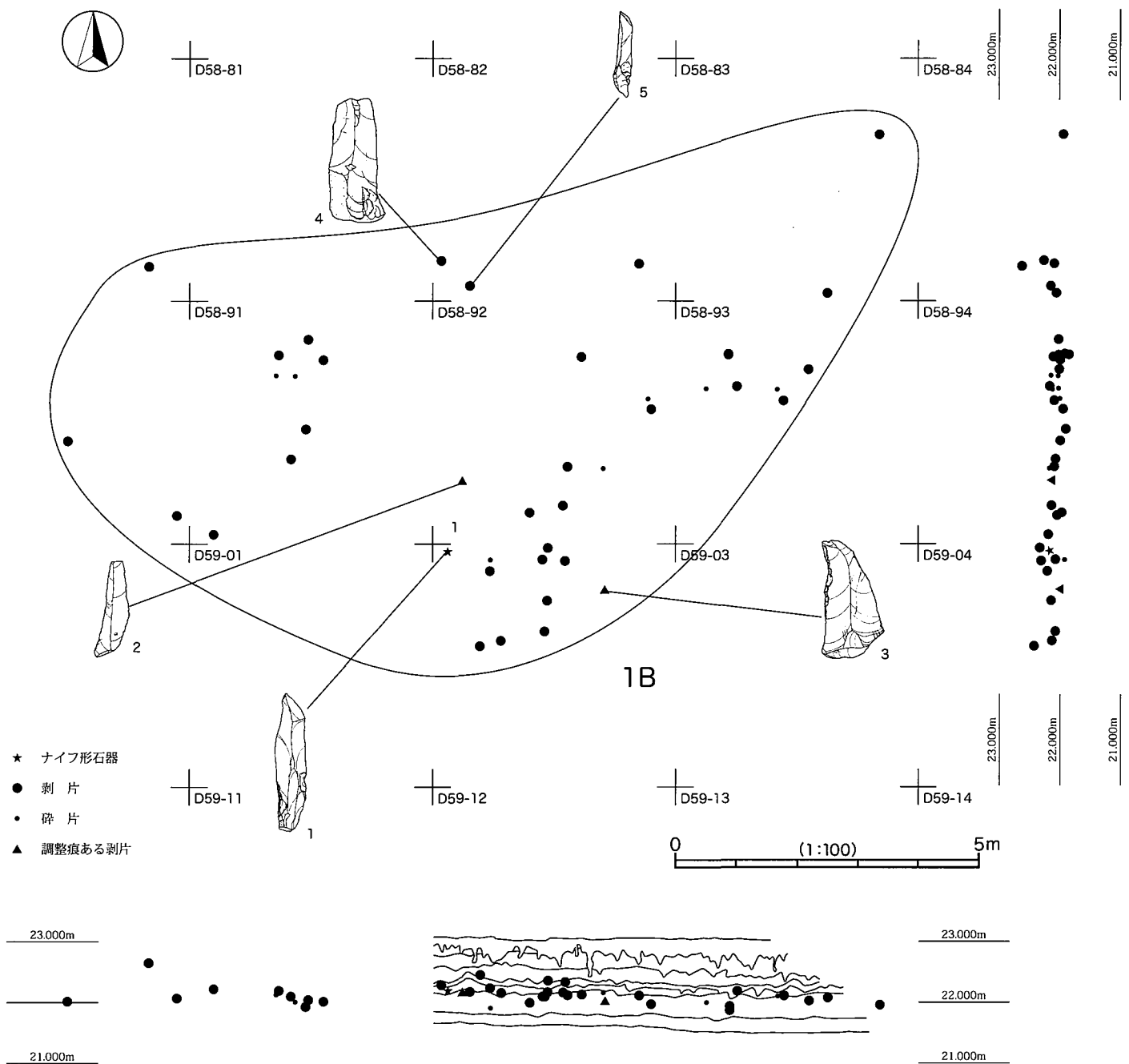
4は安山岩製、5は凝灰岩製の剥片である。いずれも縦長剥片であるが、背面を構成する剥離の方向は一定ではなく、4は横方向、5は末端部側からの剥離が混在する。

#### 接合資料

6は玉髓製の接合資料である。剥片剥離工程初期段階に作出された剥片と、数工程後の剥片が接合している。

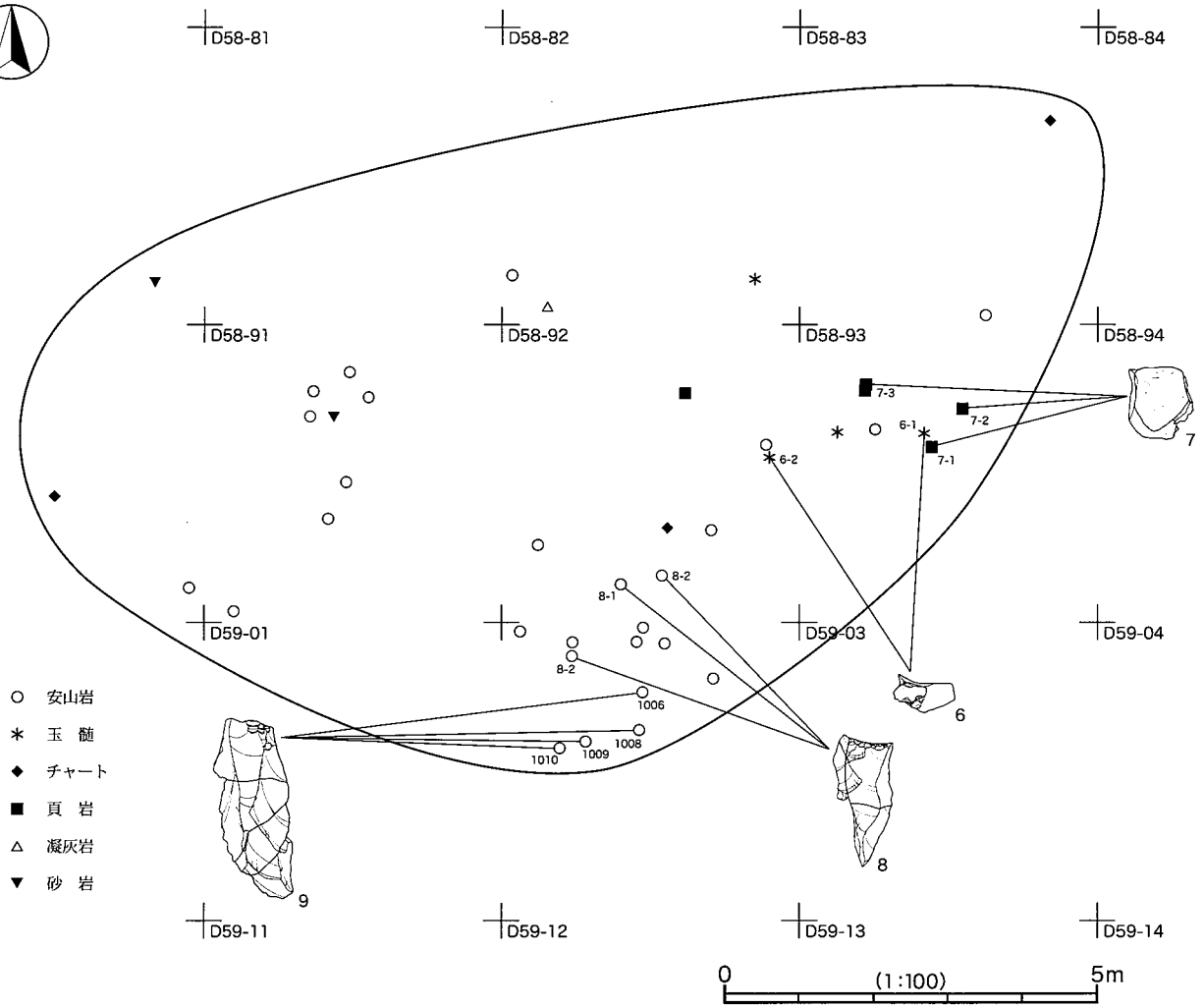
7は頁岩製の接合資料である。3点とも同一工程内に作出されており、打面を共有して連続的に作出される。

8・9は安山岩製の接合資料である。8-1の左側面には8-2の主要剥離面の一部が認められるため、大型剥片作出後、残存する打面からさらに剥片を作出していることが理解できる。8は大型剥片を分割し剥片を作出している。計4点の接合であるが、打面部を折断後に剥片剥離を行っており、この工程で3分割したものである。

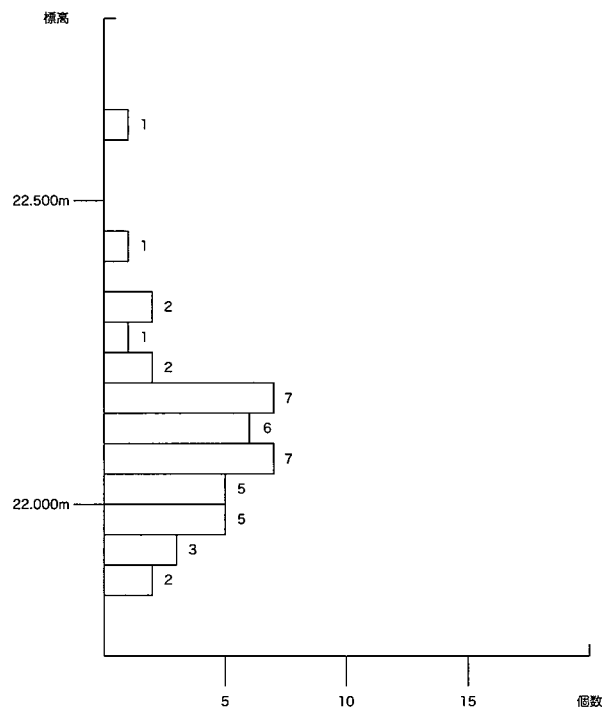
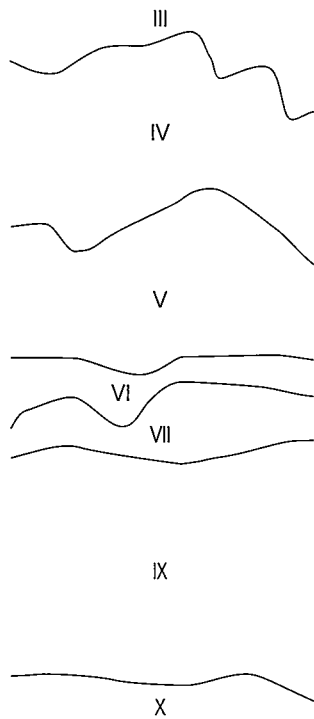


第10図 第1ブロック器種別分布

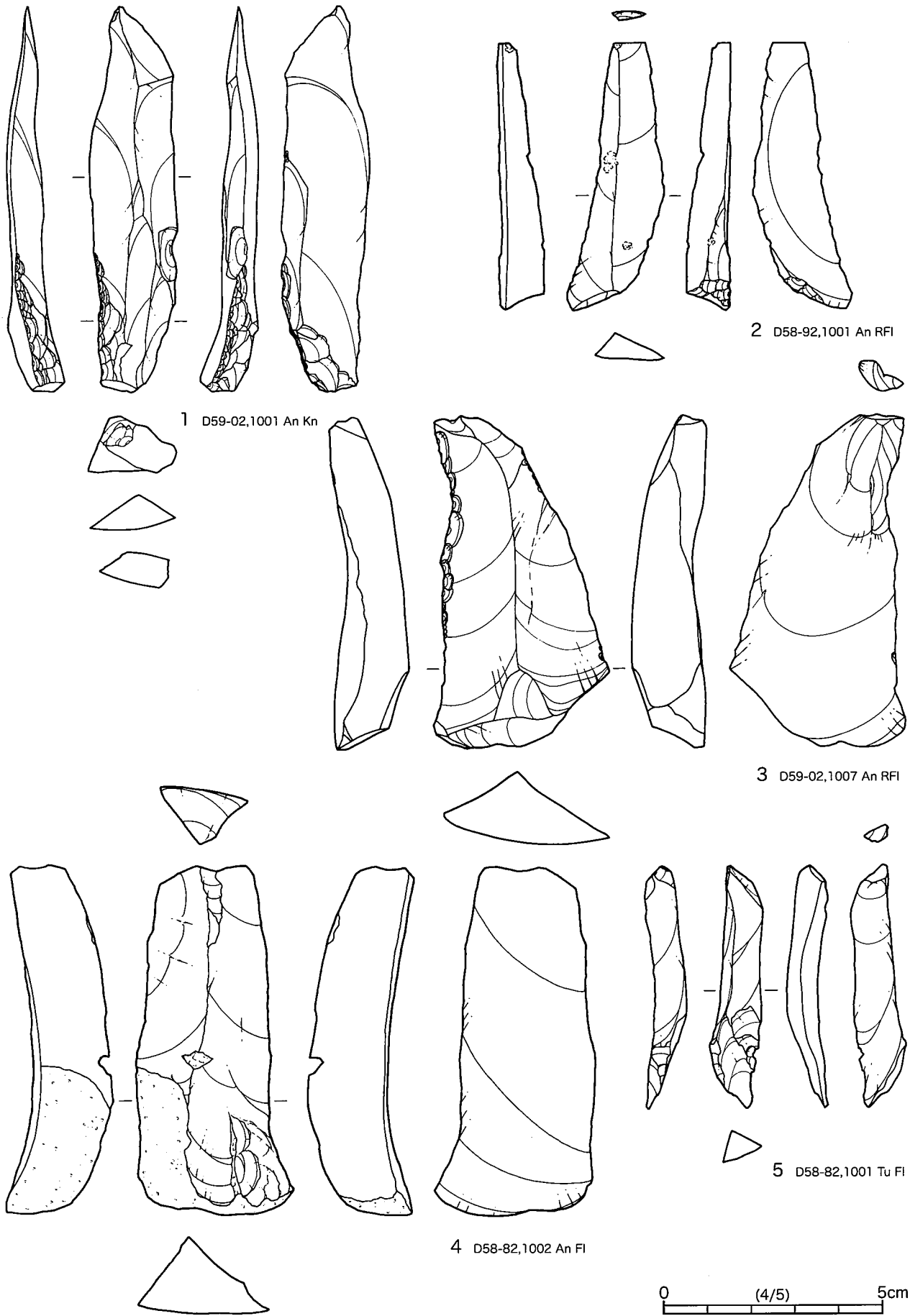




- 安山岩
- \* 玉髓
- ◆ チャート
- 頁岩
- △ 凝灰岩
- ▼ 砂岩

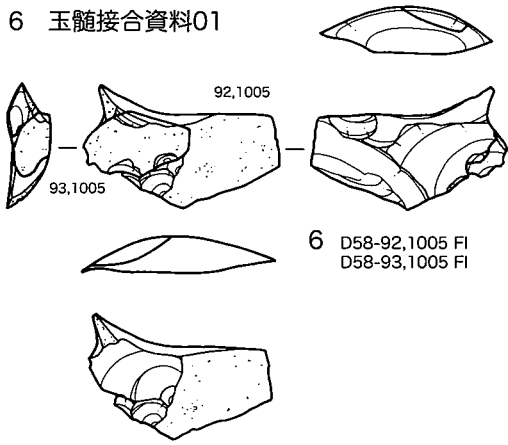


第11図 第1ブロック石材別分布



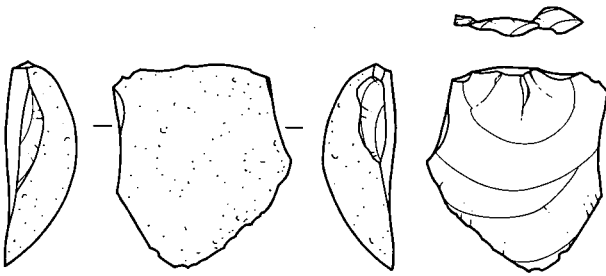
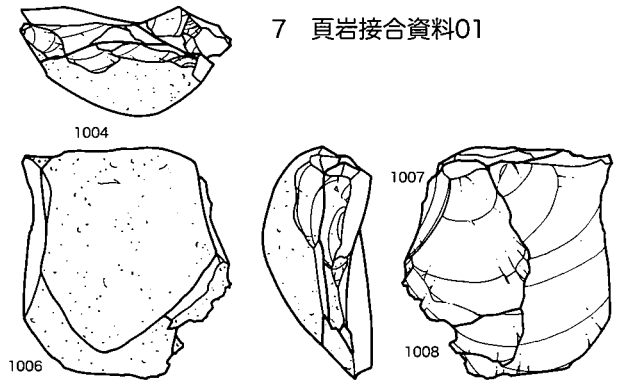
第12図 第1ブロック出土石器(1)

6 玉髓接合資料01



6 D58-92,1005 FI  
D58-93,1005 FI

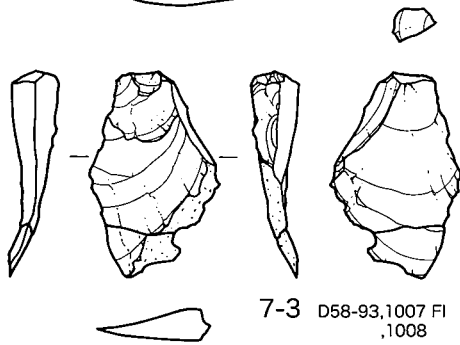
7 頁岩接合資料01



7-1 D58-93,1004 FI

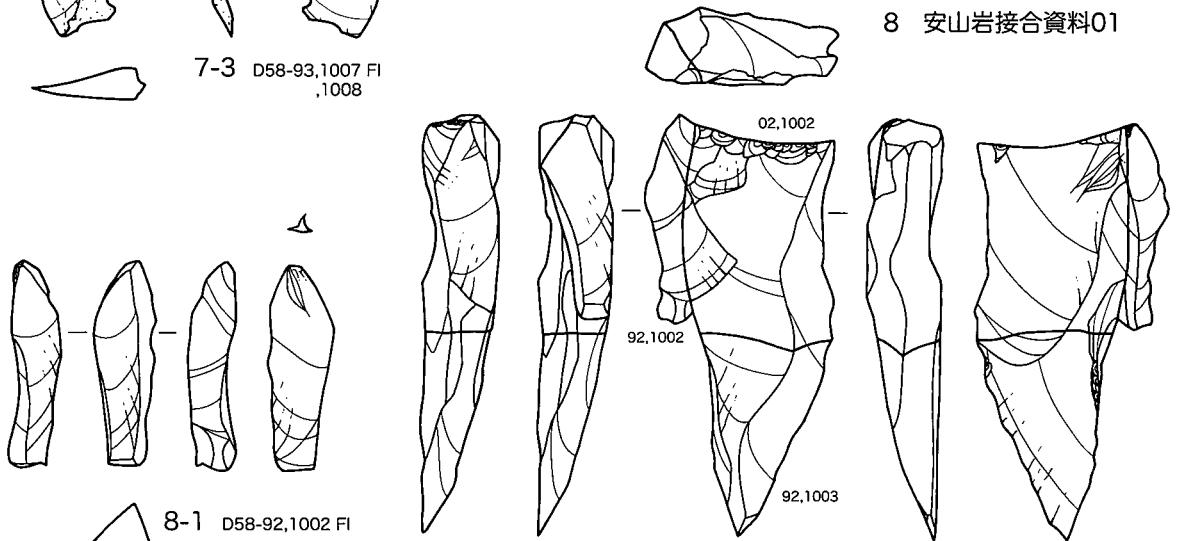


7-2 D58-93,1006 FI



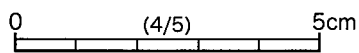
7-3 D58-93,1007 FI  
,1008

8 安山岩接合資料01

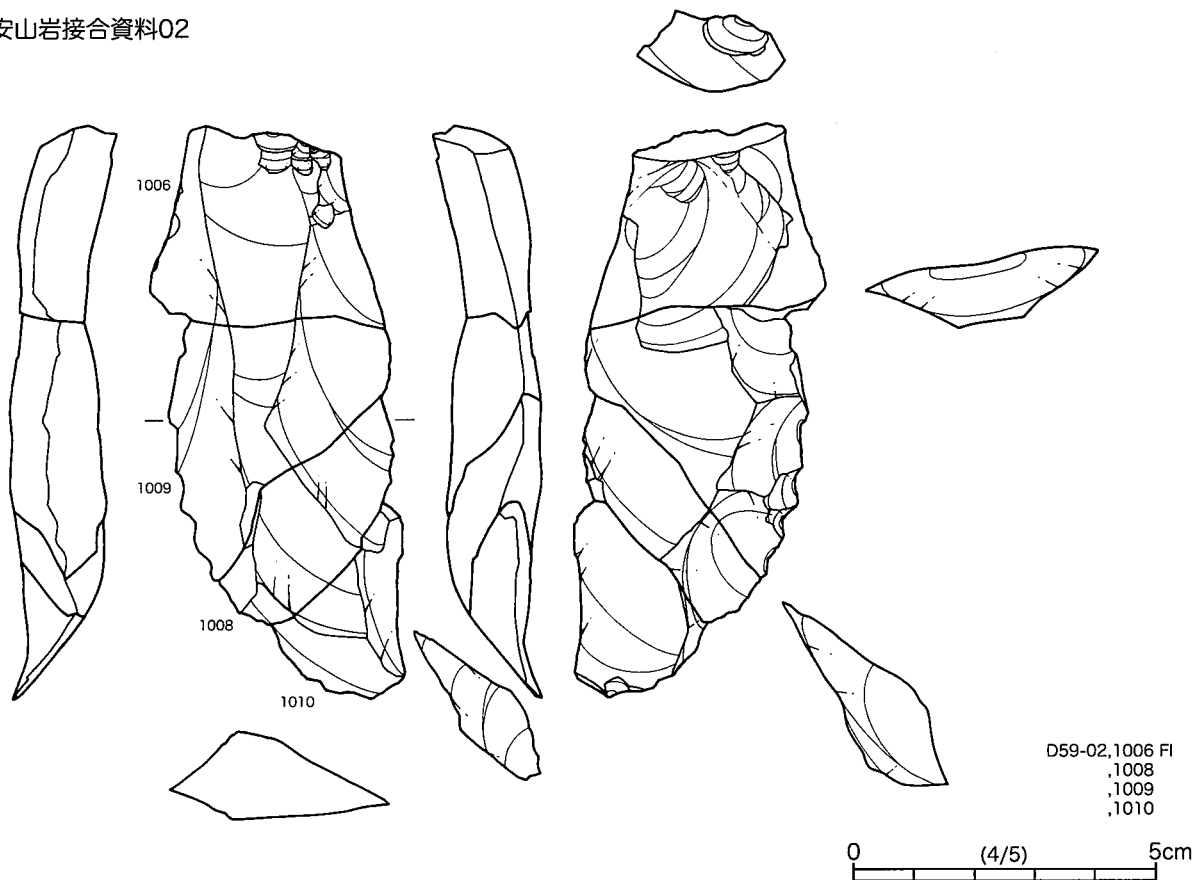


8-1 D58-92,1002 FI

8-2 D58-92,1003 FI  
D59-02,1002



第13図 第1ブロック出土石器(2)



第14図 第1ブロック出土石器(3)

第2ブロック (第15・16図、第2・13表、図版6)

分布

D60-35グリッドで検出された。分布は南北に長い長径4m、短径2mの楕円形状を呈する。

石器の垂直分布は上下のレベル差0.17mを測る。ヒストグラムでは、垂直分布範囲の上方に偏差が認められる。出土層位は明確でないが、後述する第3ブロックより標高の高い台地平坦部に所在するため、ソフトローム層とハードローム層の境界付近に属すると考えられる。

石器の出土レベルの最大値は22.762m、最小値は22.587m、平均は22.694mである。

器種・石材

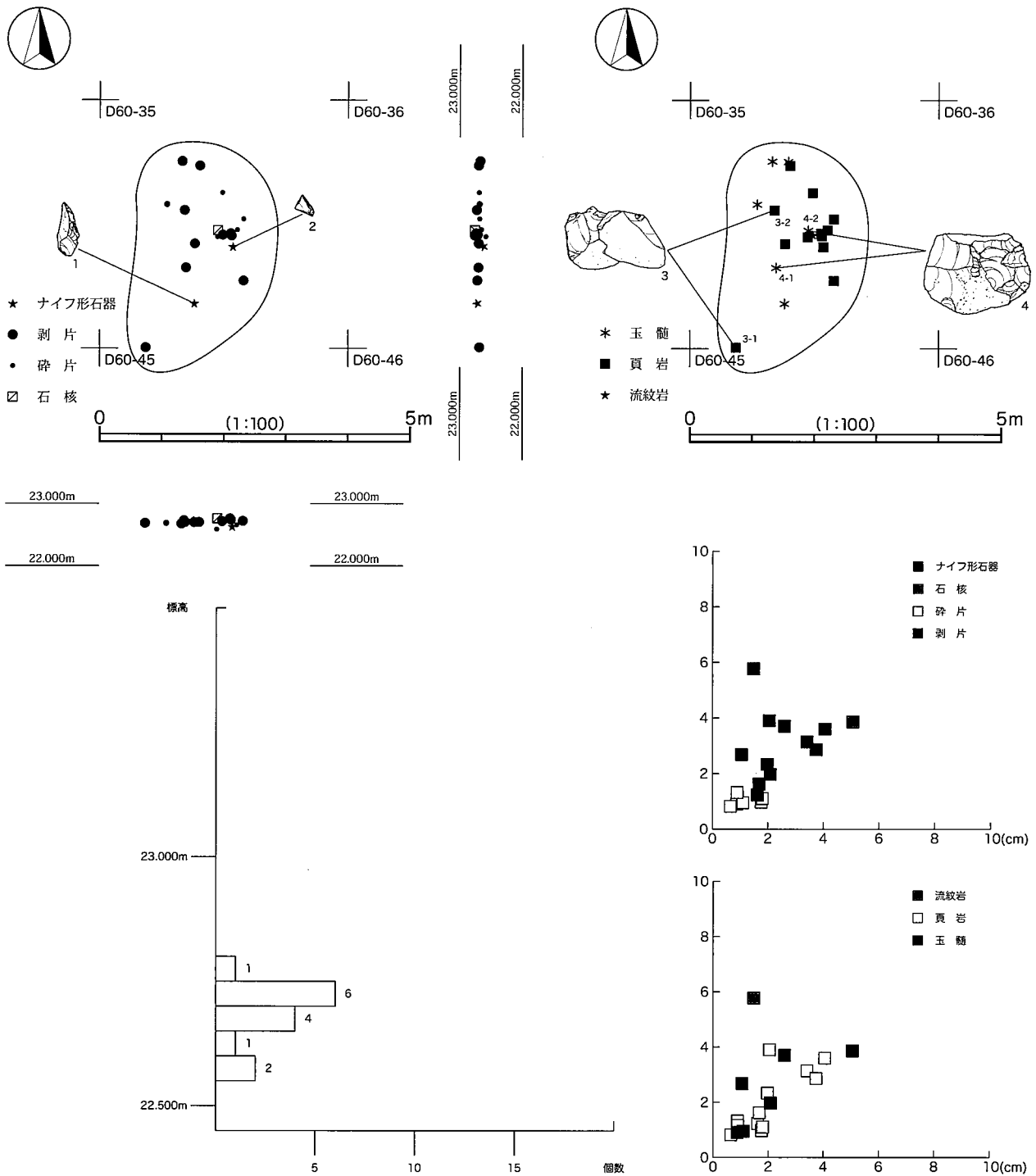
計19点のうち頁岩が12点、玉髓が6点と両者で大半を占める。流紋岩製の剥片は単独出土である。頁岩製、玉髓製のナイフ形石器各1点を組成に含み、他は剥片、碎片、石核である。点数的には頁岩が63%を占めるが、重量比では石核を含む玉髓製の石器が74%となる。

頁岩の特徴は、肌理の細かい黄土色を呈する一種のみである。玉髓は半透明を基調とし、乳白色、橙色の部位が混在するものである。流紋岩は白色を呈し、0.5mmほどの石英粒が混入する。

石器の縦横比は幅があり系統がつかみにくいが、1:1を基本とした不定形剥片が多いことが指摘さ

第2表 第1ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	調整痕ある剥片	剥片	碎片	合計	組成比
安山岩	1 16.4	2 44.4	20 188.6	5 1.5	28 250.9	66.67 65.08
凝灰岩			1 3.9		1 3.9	2.38 1.02
頁岩			5 21.2		5 21.2	11.90 5.50
砂岩			1 17.4		1 17.4	2.38 4.51
チャート			3 85.8		3 85.8	7.15 22.26
玉髓			2 4.8	2 1.5	4 6.3	9.52 1.63
合計	1 16.4	2 44.4	32 321.7	7 3.0	42 385.5	100.00 100.00
組成比	2.38 4.25	4.76 11.52	76.19 83.45	16.67 0.78	100.00 100.00	



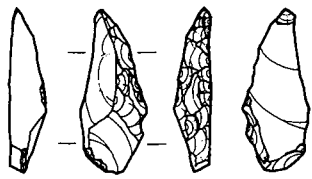
第15図 第2ブロック遺物分布

れ、特に3cm以下の石器について偏差が認められる。

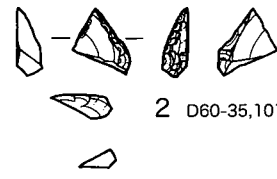
1は玉髓製、2は頁岩製のナイフ形石器である。1は縦長剥片を素材とするが、素材剥片の背面は多方向からの剥離により構成される。調整は打面から片側縁にかけて腹面側から施され、対となる側縁の一部を無調整部位とする。2は先端部のみ遺存する。調整は片側縁のみと

第3表 第2ブロック石器組成表

	ナイフ形石器	剥片	碎片	石核	合計	組成比
頁岩	1 0.2	7 32.2	4 1.2		12 33.6	63.16 22.28
流紋岩		1 5.3			1 5.3	5.26 3.52
玉髓	1 1.4	2 7.5	2 0.5	1 102.5	6 111.9	31.58 74.20
合計	2 1.6	10 45.0	6 1.7	1 102.5	19 150.8	100.00 100.00
組成比	10.53 1.06	52.63 29.84	31.58 1.13	5.26 67.97	100.00 100.00	



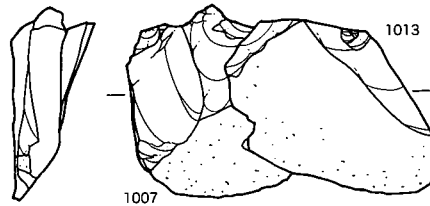
1 D60-35,1012 Cc Kn



2 D60-35,1019 Sh Kn

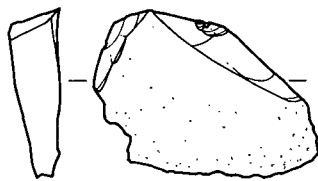


3 頁岩接合資料02

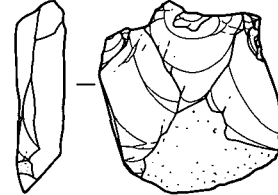


1007

1013

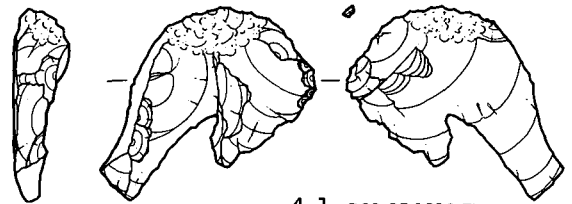
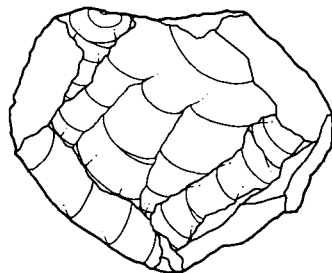


3-1 D60-35,1013 FI

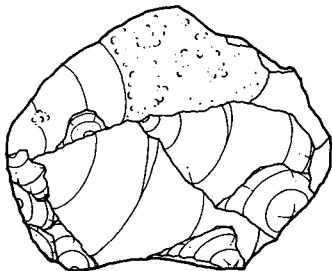
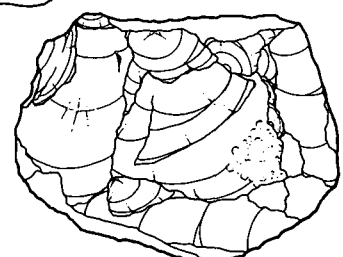
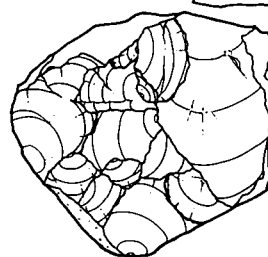
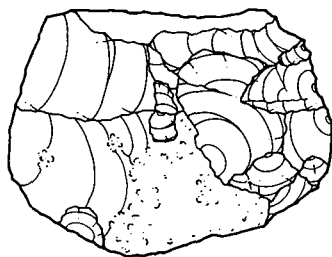
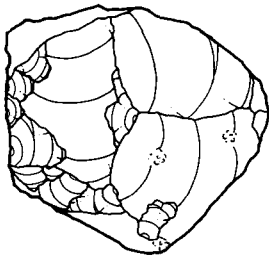


3-2 D60-35,1007 FI

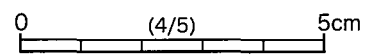
4 玉髓接合資料02



4-1 D60-35,1010 FI



4-2 D60-35,1006 Co

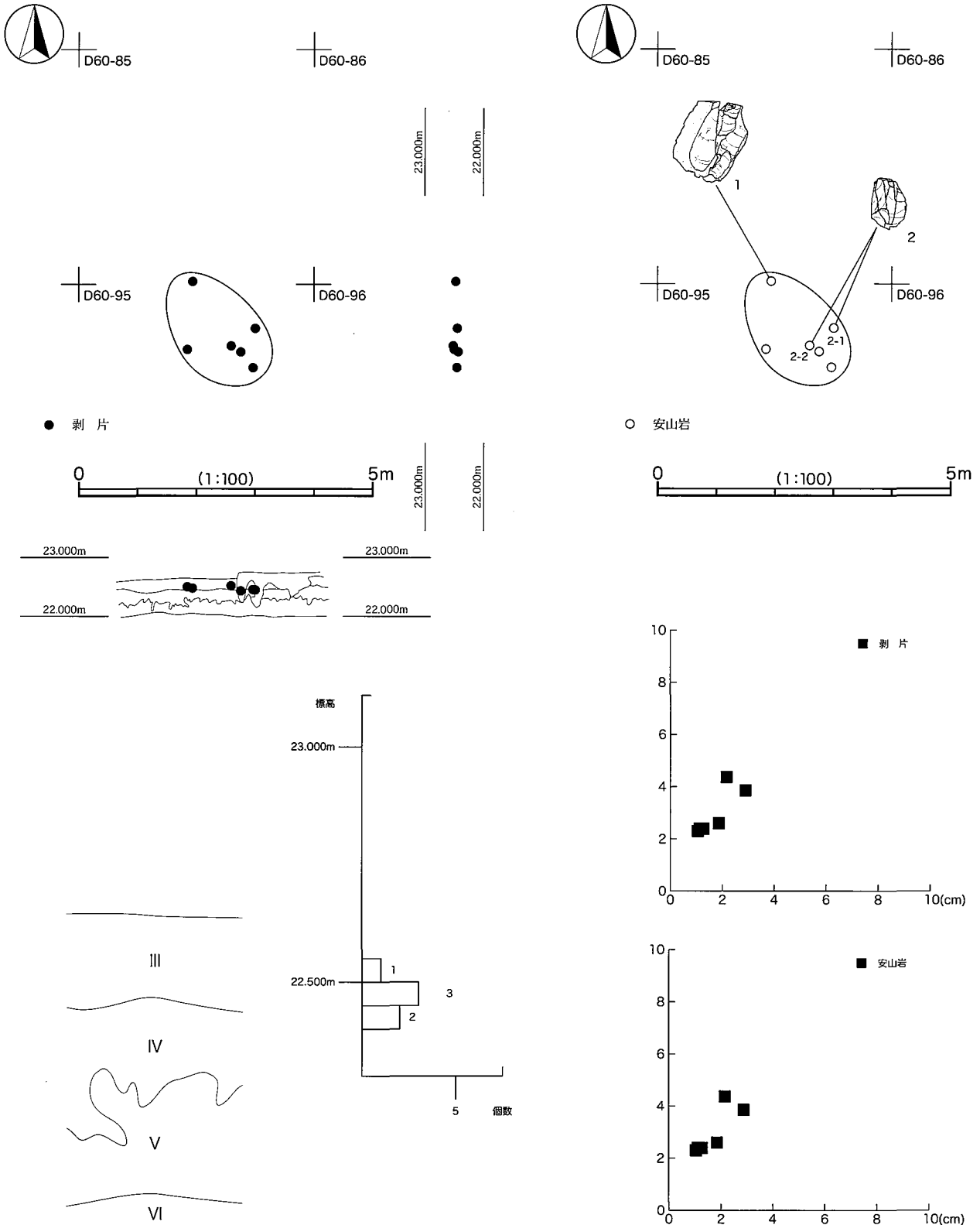


第16図 第2ブロック出土石器

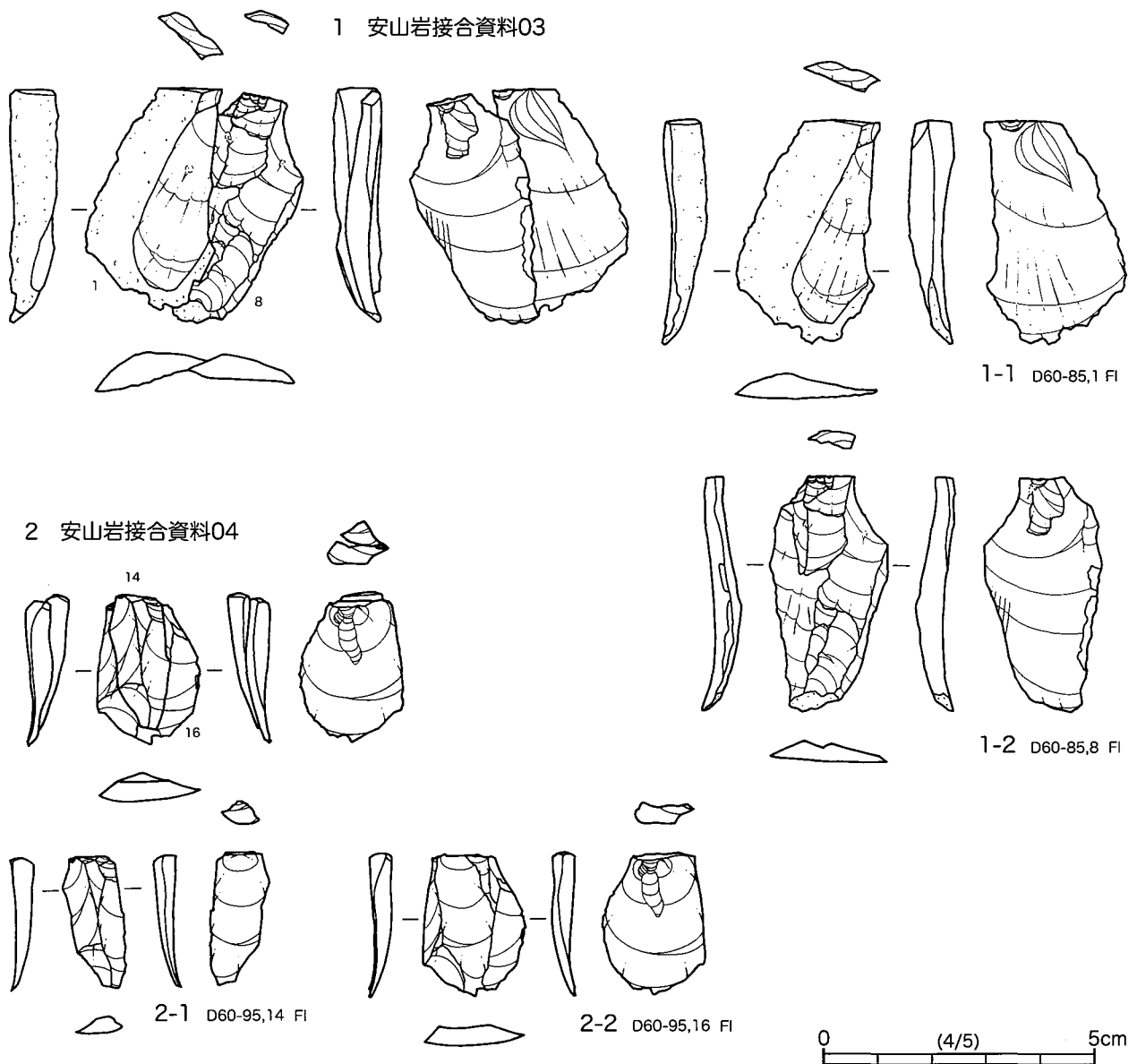
考えられるが、背面、腹面の両面から施される。

3は頁岩製の接合資料である。同一打面から連続的に作出された剥片であり、背面には礫面を有する。

4は玉髓製の接合資料である。円礫素材であり、頻繁に打面を転移し剥片剥離を行っている。



第17図 第3ブロック遺物分布



第18図 第3ブロック出土石器

第3ブロック (第17・18図、第4・13表、図版6)  
分布

D60-95グリッドから検出された。石器の平面分布は長軸2m、短軸1.5mの楕円形を呈し、石器総点数も6点と小規模なブロックである。

垂直分布のヒストグラムはⅢ層下部に最大値が認められる。石器出土レベルの最大値は22.517m、最小値は22.430m、平均は22.470mである。

器種・石材

計6点の石器はすべて安山岩製の剥片である。定型的な石器は含まれず、接合資料2個体が確認された。石器の縦横比は、1.5:1以上の縦長剥片となる傾向が認められる。

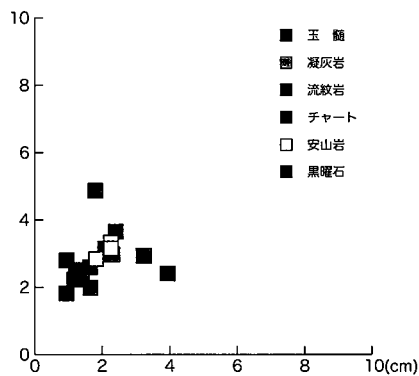
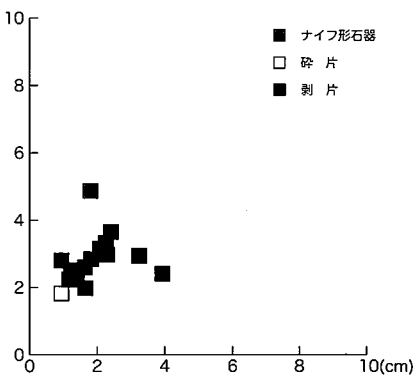
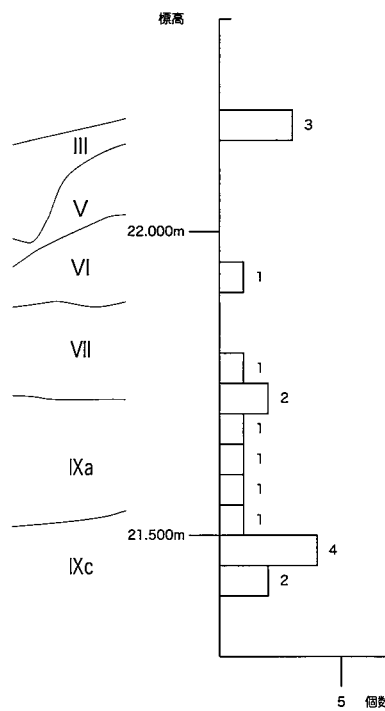
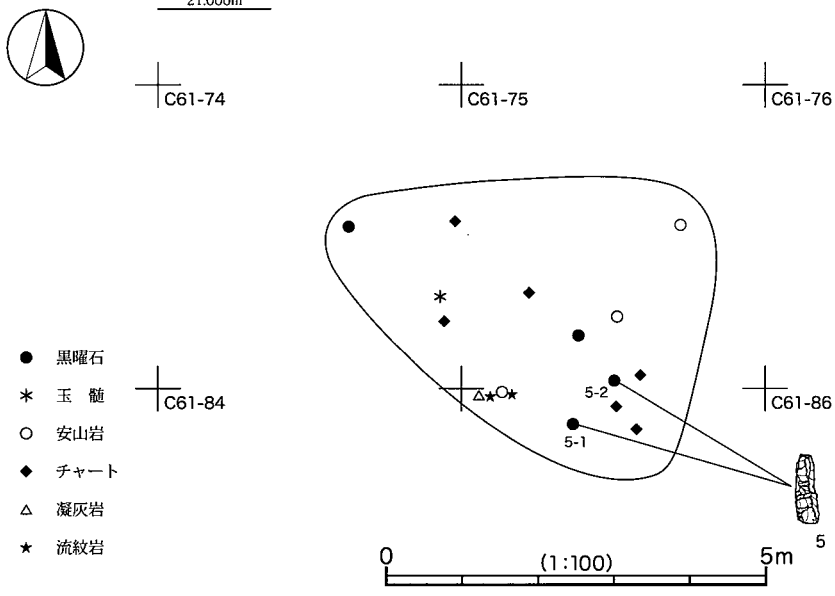
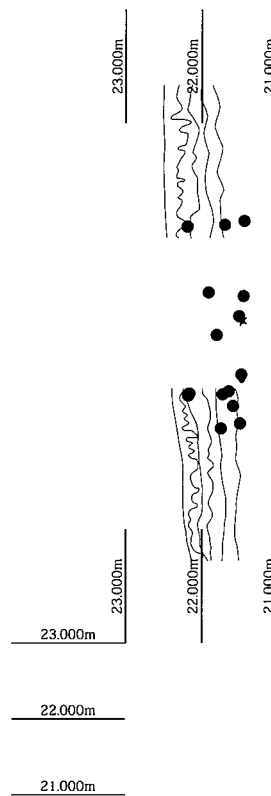
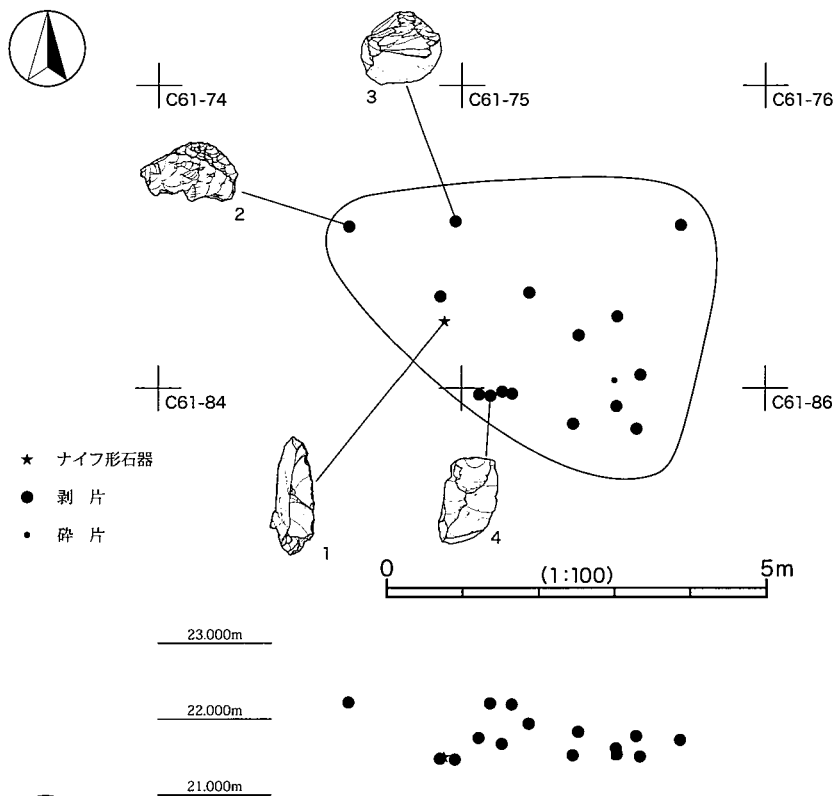
石材の特徴は、礫面、器表面ともに黄土色、欠損面は黒色を呈する。

1・2は安山岩製の接合資料である。共に剥片同士の接合であり、同一打面から連続的に作出されてい

第4表 第3ブロック石器組成表

	剥片	組成比
安山岩	6 14.8	100.00 100.00
組成比	100.00 100.00	





第19図 第4ブロック遺物分布

る。打面は平坦打であり、それぞれの背面構成も同一方向からの剥離により構成されている。

第4ブロック (第19・20図、第5・13表、図版7)

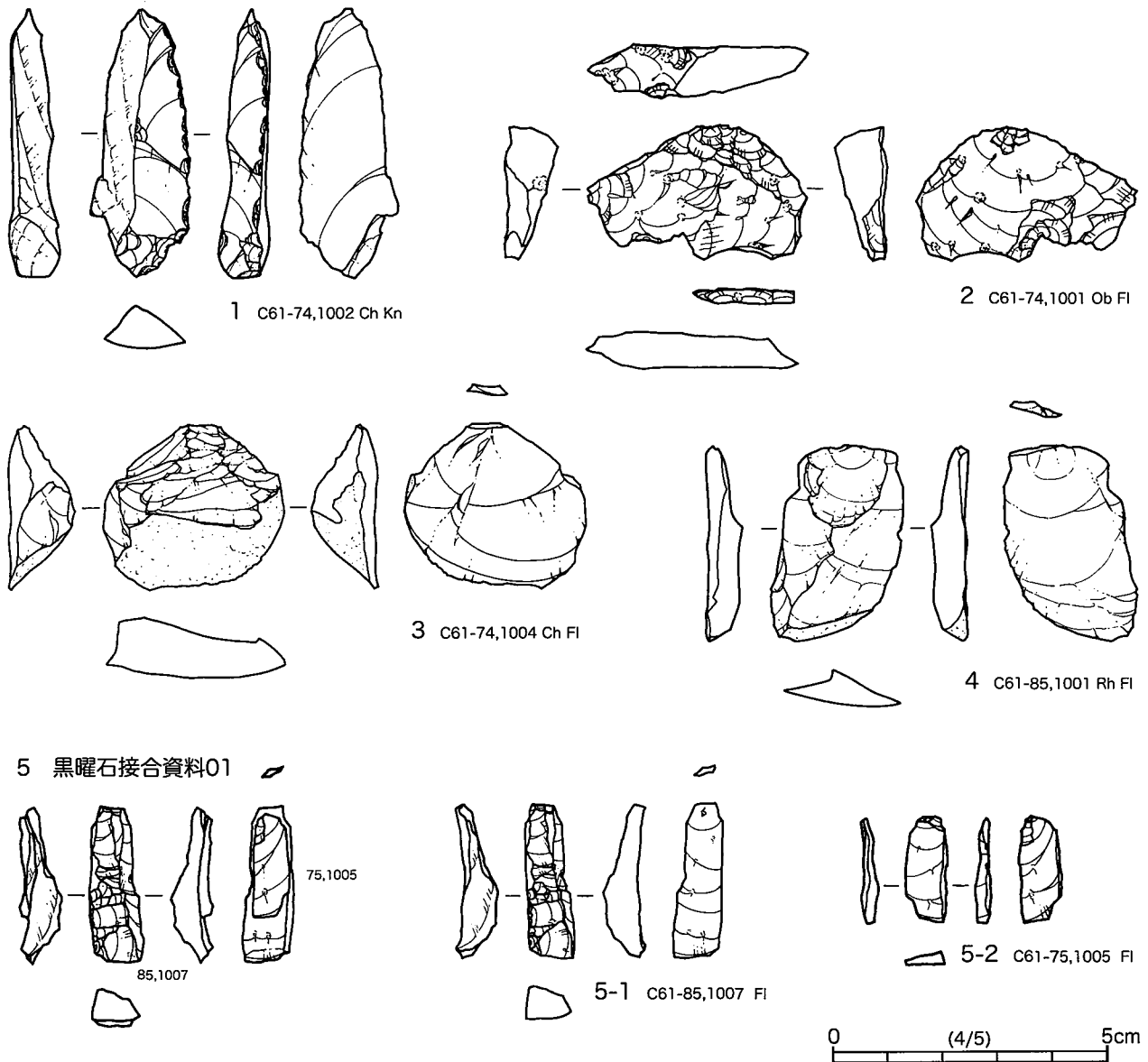
第5表 第4ブロック石器組成表

分布

C61-74グリッドからC61-85グリッドにかけて検出された。石器の分布は長軸5m、短軸4mの楕円形状を呈し、C61-85グリッド北西隅付近に集中箇所が認められる。

石器の出土層位はⅢ層からⅨc層までと幅広いが、垂直分布のヒストグラムの最大値はⅨc層上部を示す。石器出土レベルの最大値は22.185m、最小値は21.433m、平均は21.698mである。

	ナイフ 形石器	剥片	碎片	合計	組成比
安山岩	3	13.3		3	17.65
				13.3	20.56
凝灰岩	1	6.0		1	5.88
				6.0	9.27
黒曜石	3	9.5	1	4	23.53
			0.4	9.9	15.30
チャート	1	5		6	35.29
	5.8	18.7		24.5	37.87
流紋岩	2	9.3		2	11.77
				9.3	14.37
玉髓	1	1.7		1	5.88
				1.7	2.63
合計	1	15	1	17	100.00
	5.8	58.5	0.4	64.7	100.00
組成比	5.88	88.24	5.88	100.00	
	8.96	90.42	0.62	100.00	



第20図 第4ブロック出土石器

## 器種・石材

計17点のうちチャート製のナイフ形石器1点を石器組成に含み、他は剥片、碎片で構成される。石材は多種にわたり、安山岩、凝灰岩、黒曜石、流紋岩、玉髄が使用されるが、ナイフ形石器を含むチャート製の石器が点数、重量比でもそれぞれ35%、37%となる。

石器の形状は1.5：1ほどのやや縦長となる傾向が認められるが、縦4cm以下のものがほとんどであり、概して小型であるといえる。

チャートの器表面は青灰色を呈し、一部節理の混入が認められるが、細かい節理ではなく面的な節理の混入である。凝灰岩の器表面は明灰色を呈し、肌理は細かく均一である。黒曜石は透明感があるが不純物の混入が著しく、器表面は脆弱である。流紋岩の器表面は白色を呈し、石英粒の混入が認められる。玉髄は半透明を基調とし、橙色の部位が混入する。

1はチャート製のナイフ形石器である。縦長剥片の打面を除去し、除去部位を中心に調整を施す。右側縁の調整は連続的であるが微細な調整である。

2は黒曜石製の横長剥片である。節理の混入が著しく、器表面の剥離の観察は困難である。背面を構成する剥離は打面方向からの微細な剥離の他、左側縁側からの剥離のみにより構成され、打面転移後に作出された剥片であることが理解できる。

3はチャート製、4は流紋岩製の剥片である。3は部厚な剥片で、背面は礫面および打面方向からの剥離により構成される。4の背面は、末端部に礫面が認められる他はすべて打面方向からの剥離により構成される。

5は黒曜石製の接合資料である。5-1、5-2とも両側縁に同一剥離面を有しており、幅の狭い石核から作出されていることが理解できる。

## 第5ブロック（第21・22図、第6・13表、図版7）

### 分布

F60-12グリッドから検出された。石器の平面分布は長径3.5m、短径0.8mの長楕円形状を呈する。

石器の出土層位はⅥ層上部からⅨa層にかけてであり、垂直分布のヒストグラムは、Ⅵ層とⅦ層の境界にピークが認められる。石器出土レベルの最大値は22.107m、最小値は21.940m、平均は22.042mである。

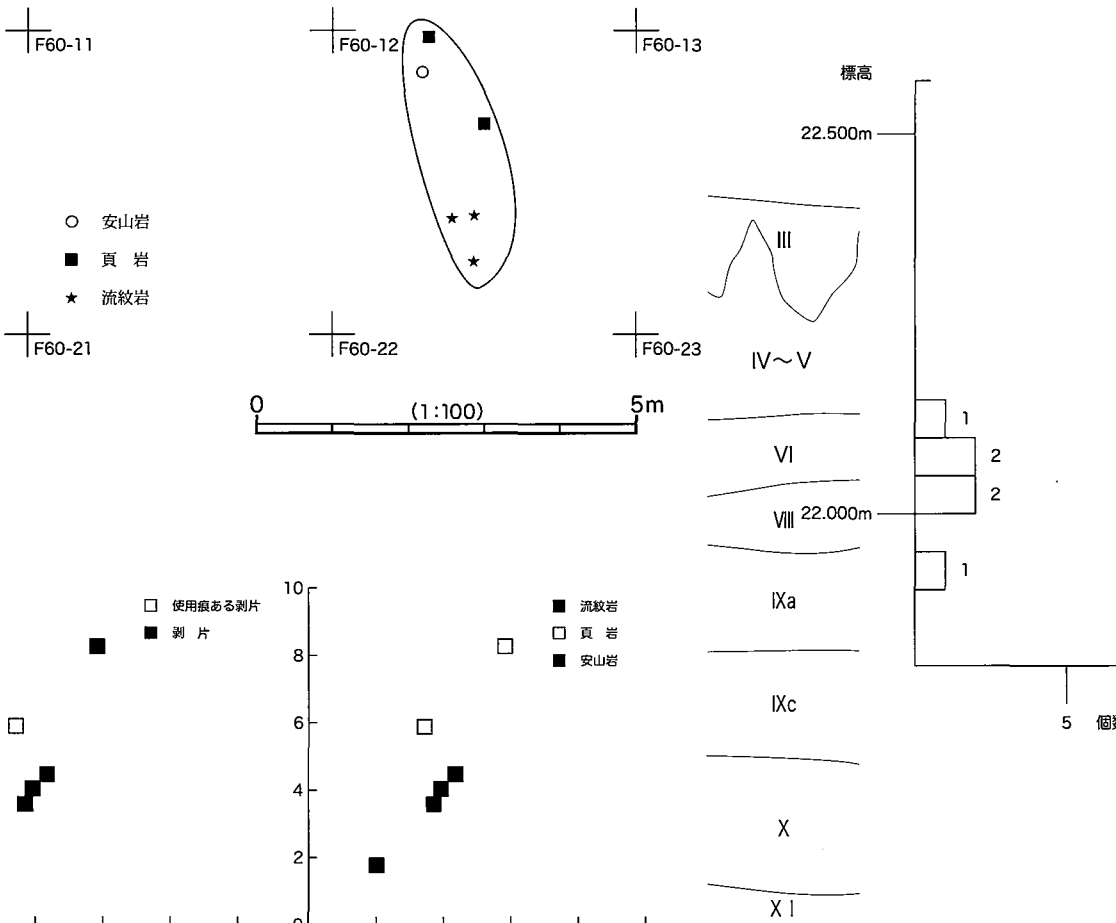
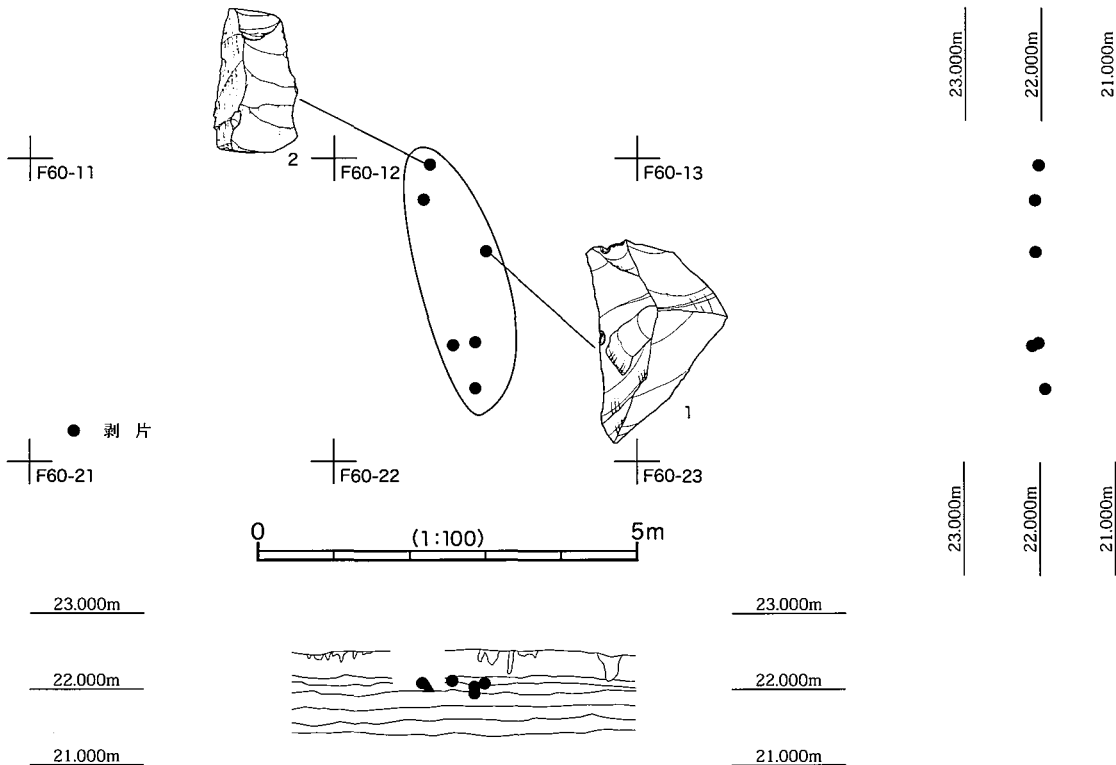
### 器種・石材

流紋岩、頁岩、安山岩の比較的大型の剥片で構成される。頁岩製の使用痕のある剥片1点以外はすべて剥片である。石器の縦横比は1：1以上の縦長傾向を示す。

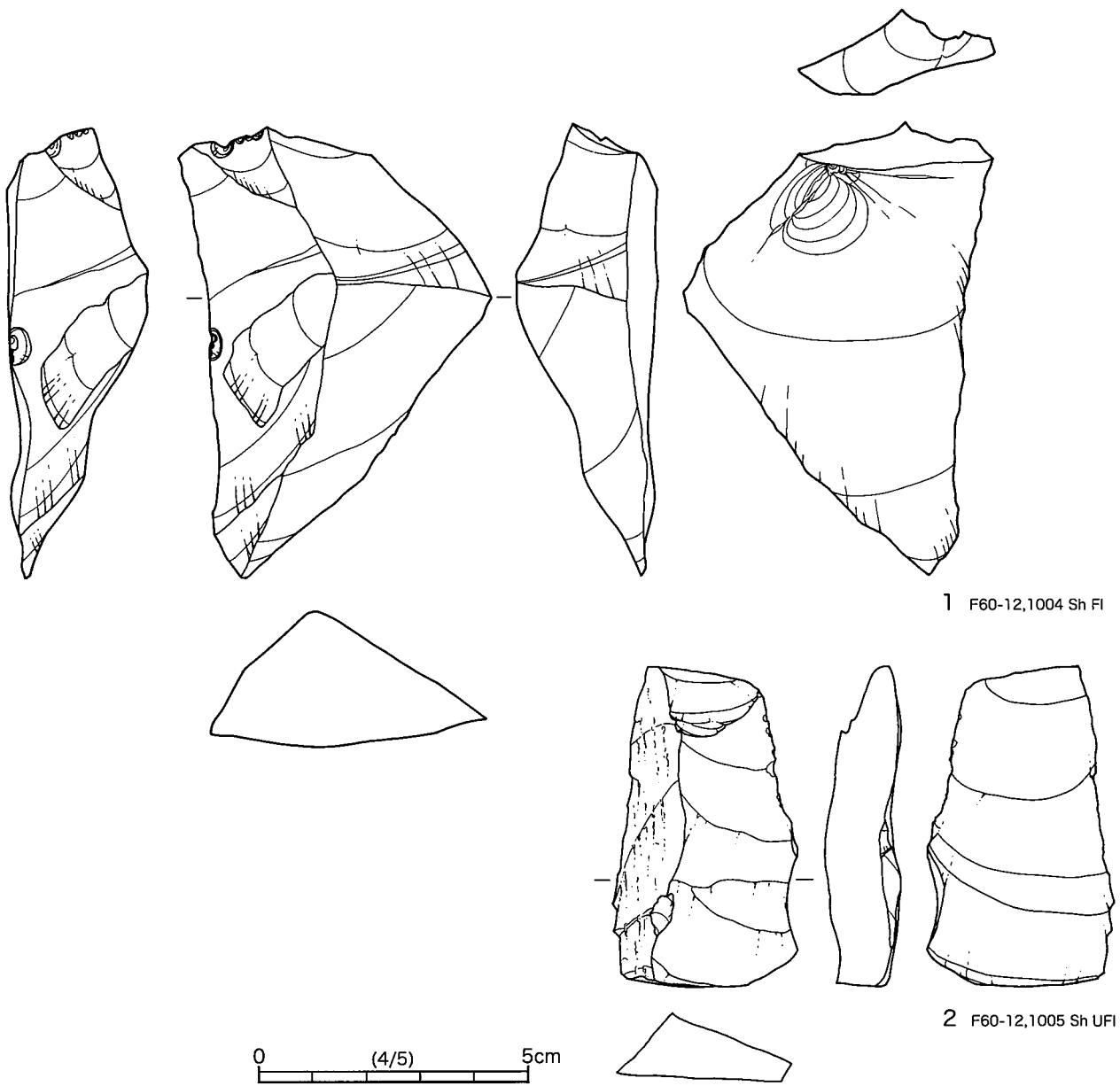
流紋岩の器表面は白色を呈し、部分的に石英粒の混入がみられる。頁岩の器表面は明るい黄土色を呈し、光沢はないが肌理は細かい。安山岩の器表面は黄土色を呈し、ざらついた感がある。

1は頁岩製の剥片である。平坦打面から作出され、背面の中央部に最大厚を有する。背面を構成する剥離の方向はほぼ打面方向からであるが、剥片剥離工程の初期段階の剥離が認められる。

2は頁岩製の使用痕のある剥片である。打面付近は剥片剥離の際に欠落したものと考えられる。微細な使用痕が右側縁の一部に認められる。



第21図 第5ブロック遺物分布



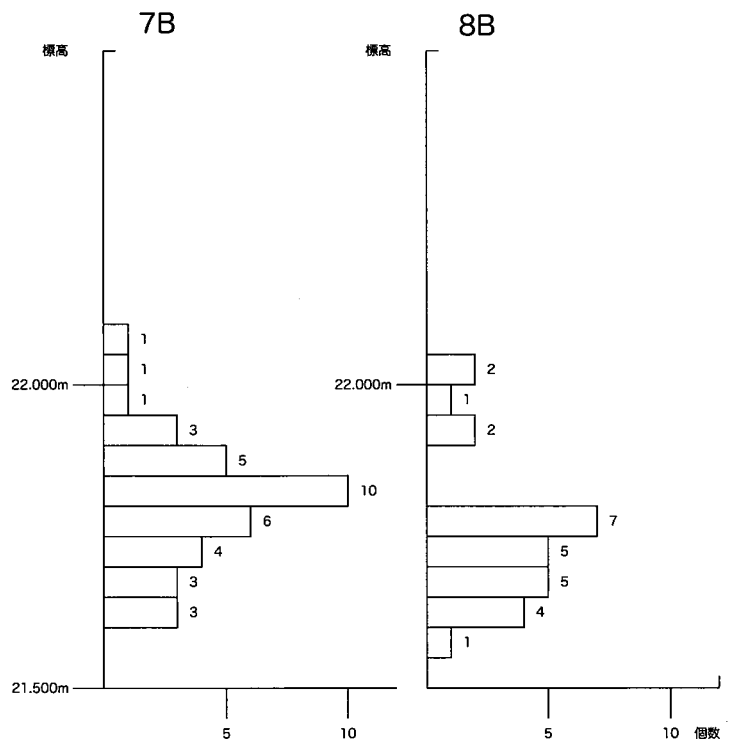
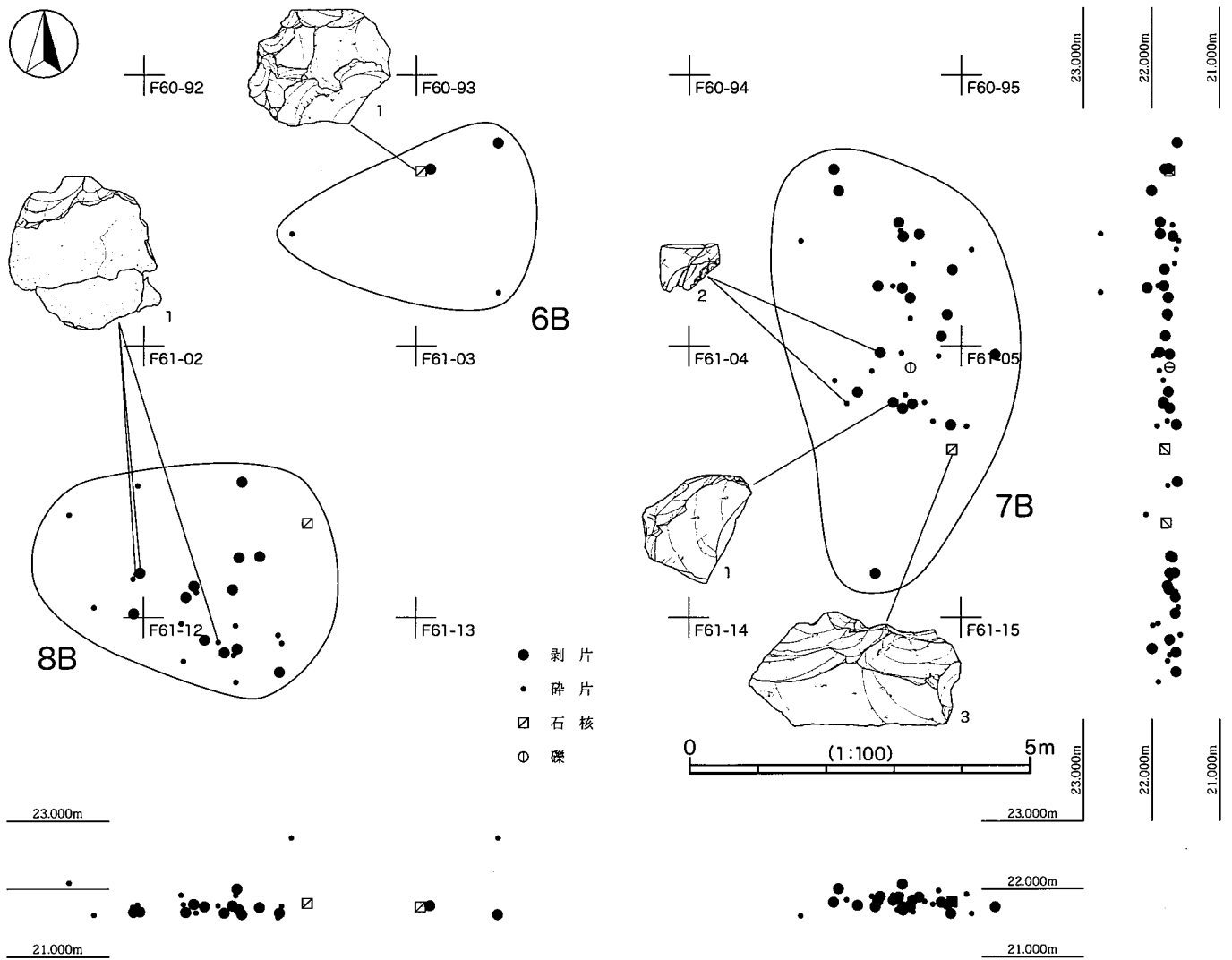
1 F60-12,1004 Sh FI

2 F60-12,1005 Sh UFI

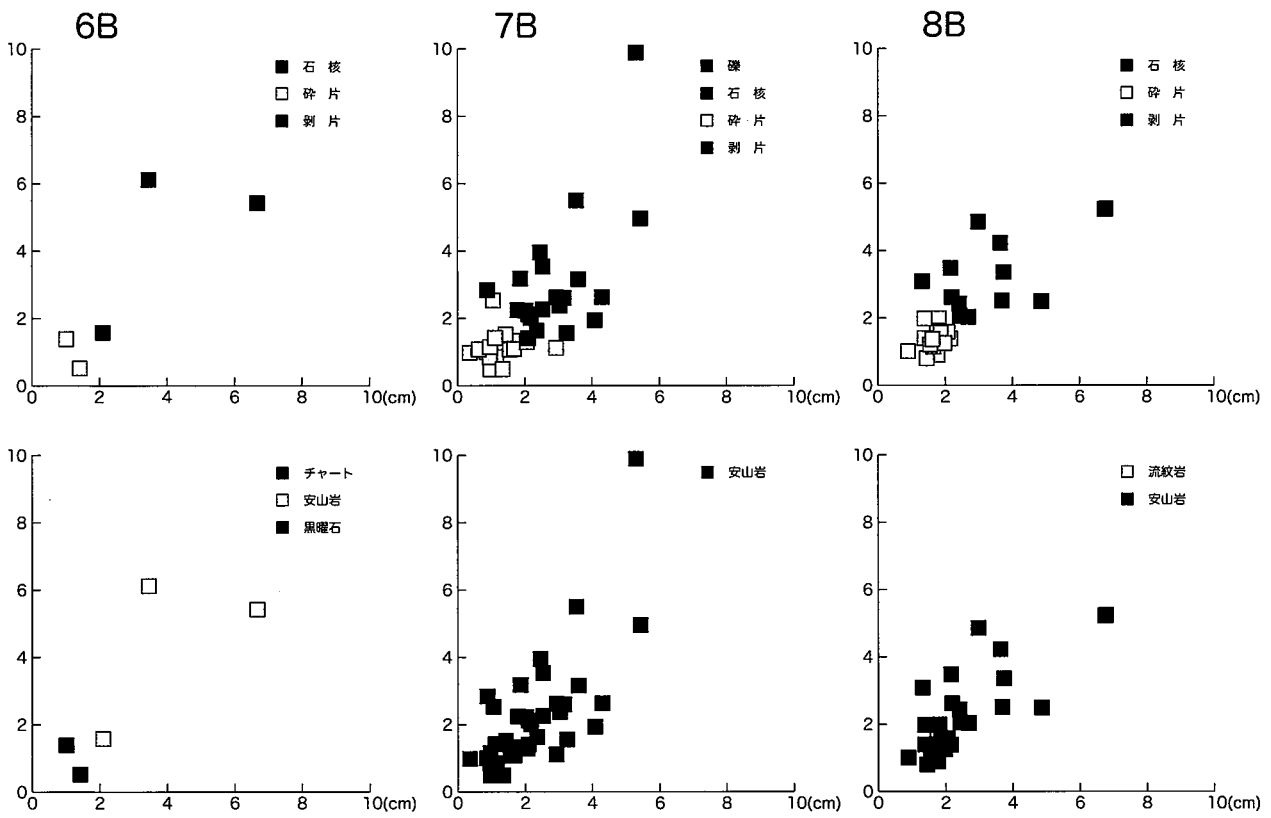
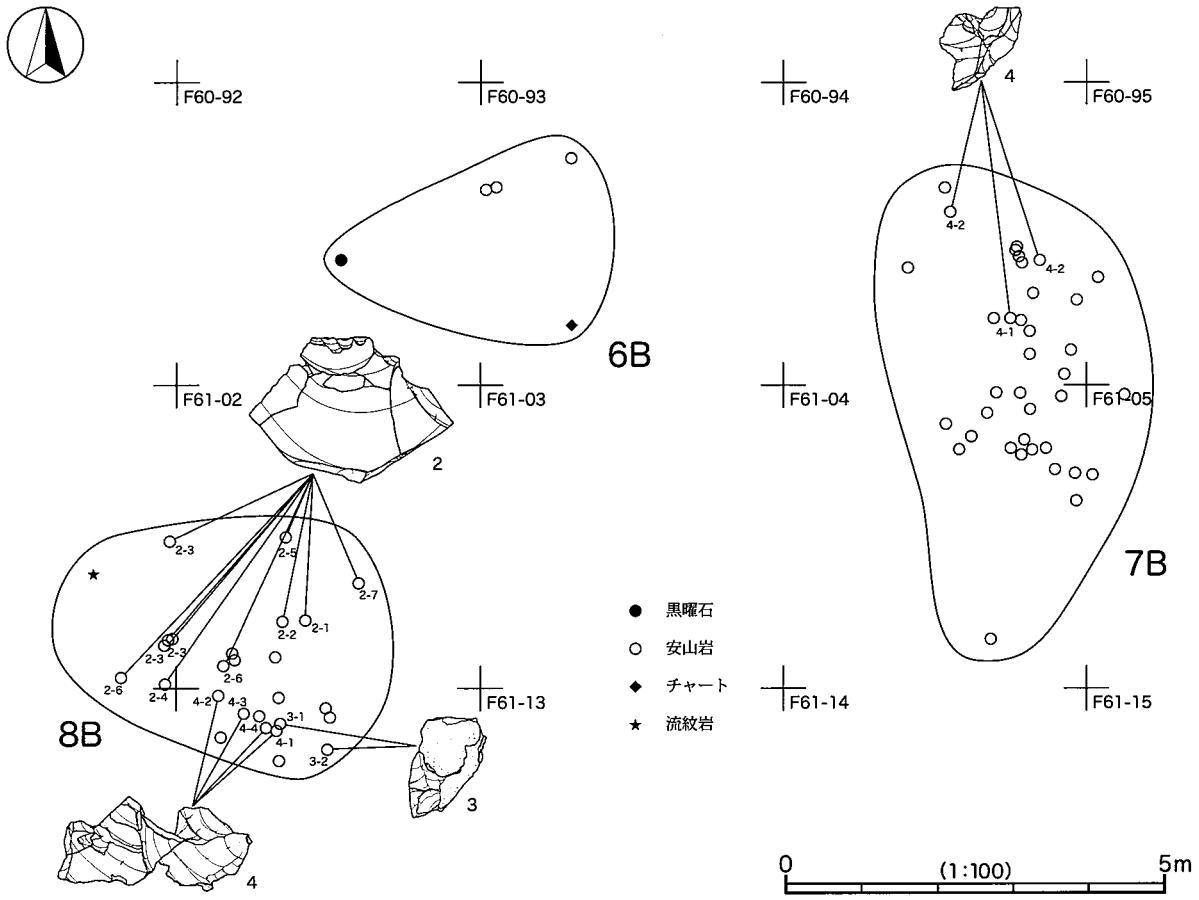
第22図 第5ブロック出土石器

第6表 第5ブロック石器組成表

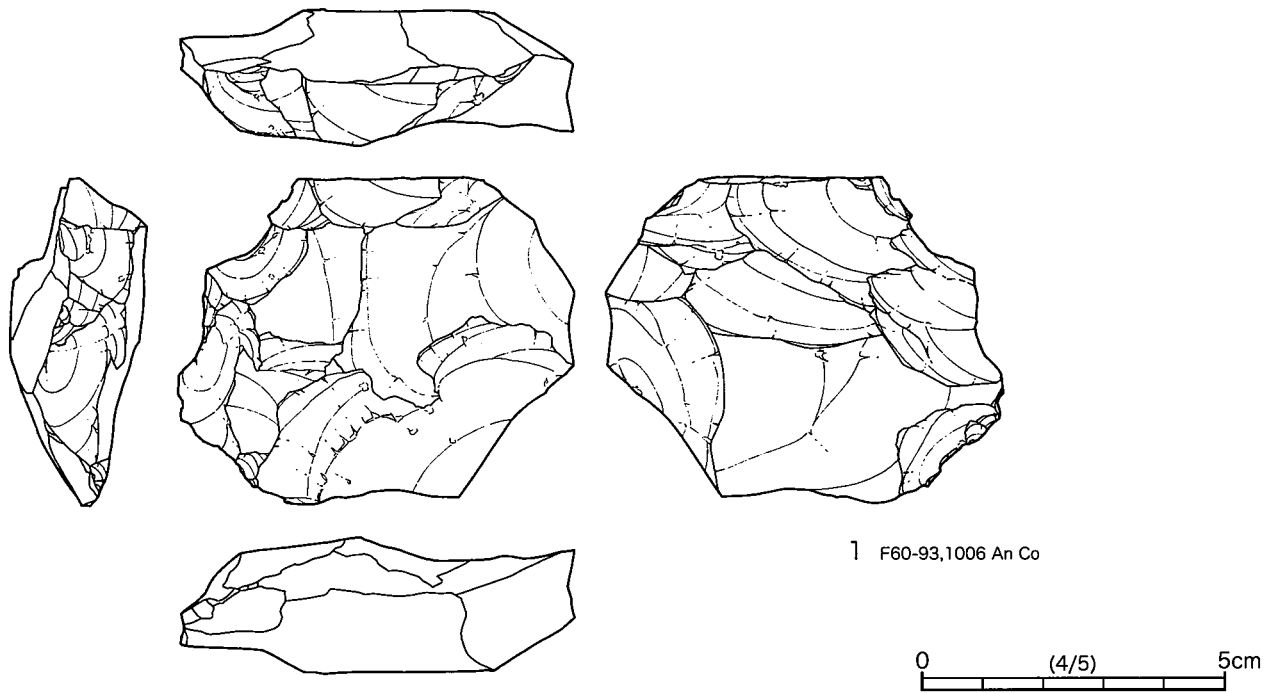
	使用痕 ある剥片	剥片	合計	組成比
安山岩		1 15.8	1 15.8	16.67 11.55
頁岩	1 24.4	1 69.5	2 93.9	33.33 68.64
流紋岩		3 27.1	3 27.1	50.00 19.81
合計	1 24.4	5 112.4	6 136.8	100.00 100.00
組成比	16.67 17.84	83.33 82.16	100.00 100.00	



第23図 第6・7・8ブロック器種別分布



第24図 第6・7・8ブロック石材別分布



第25図 第6ブロック出土石器

第6ブロック（第23～25図、第7・13表、図版7）

分布

F60-92、93グリッドで検出された。分布範囲は4 m × 3 mの範囲で、散漫な分布状況である。

出土層位は不明であるが、調査時の記述ではⅦ層からⅨc層にかけての出土となっている。石器出土レベルの最大値は22.755m、最小値は21.628m、平均は22.106mである。

器種・石材

計5点出土している石器のうち安山岩製の剥片、石核が3点であり、他の黒曜石、チャートは単体である。小点数のため傾向は把握しづらいが、安山岩製の石器は概して大型であるといえる。

1は安山岩製の石核である。扁平な作りであり、背面、腹面ともに全周からの求芯的な剥離で構成される。最終剥離面は背面左側縁部の剥離であり、すべて腹面側からの剥離となる。

第7ブロック（第23・24・26図、第8・13表、図版7・8）

分布

F60-94、95グリッドからF61-04、05グリッドにかけて検出された。石器は長軸7 m、短軸4 mの範囲に分布し、分布範囲のなかでも北側に集中する感がある。

出土層位は調査時の記述ではⅦ層からⅨ層の出土とあるが、詳細は不明である。ヒストグラムのピーク

第7表 第6ブロック石器組成表

	剥片	碎片	石核	合計	組成比
安山岩	2 24.3		1 70.0	3 94.3	60.00 99.05
黒曜石		1 0.2		1 0.2	20.00 0.22
チャート		1 0.7		1 0.7	20.00 0.73
合計	2 24.3	2 0.9	1 70.0	5 95.2	100.00 100.00
組成比	40.00 25.52	40.00 0.95	20.00 73.53	100.00 100.00	

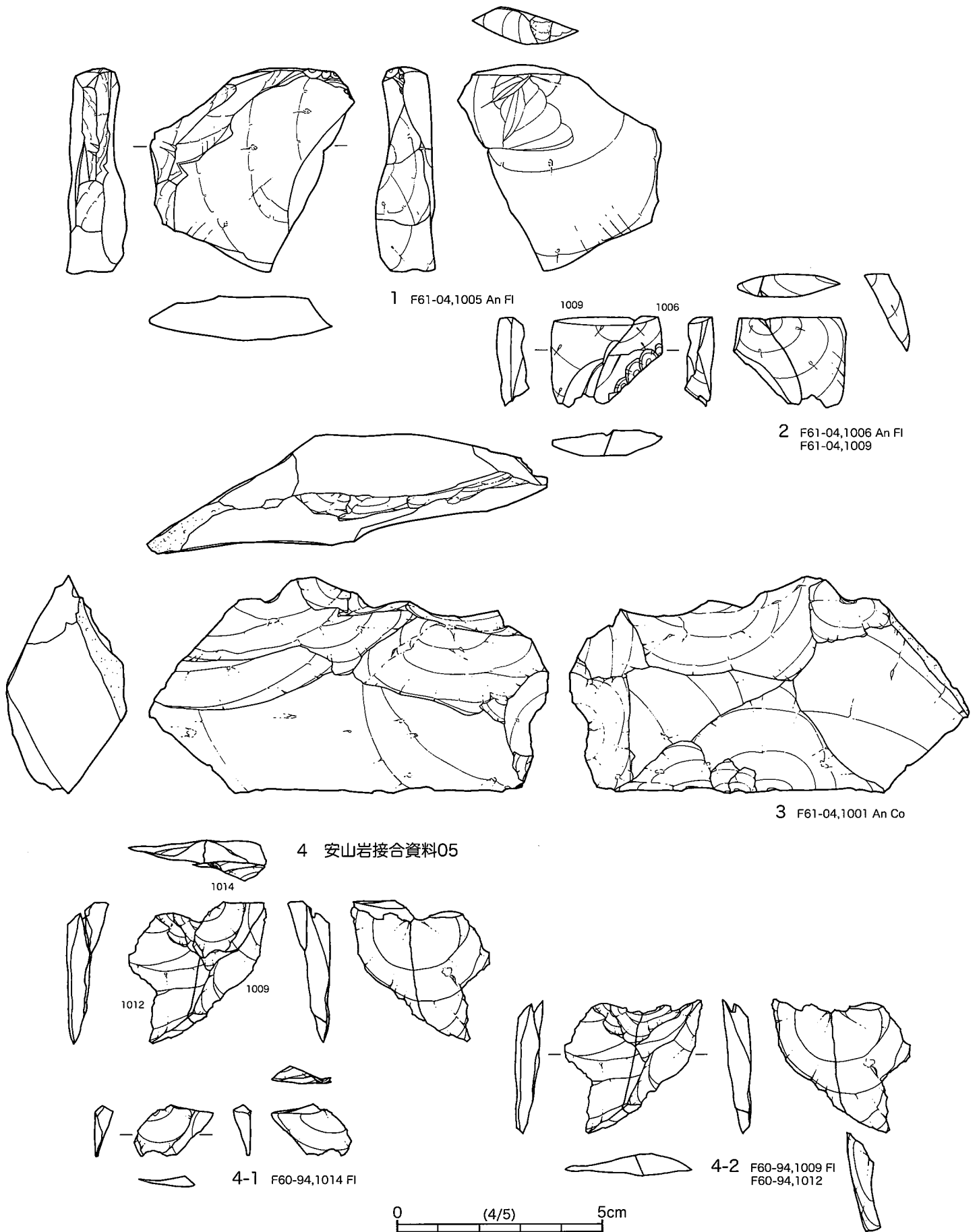
第8表 第7ブロック石器組成表

	剥片	碎片	石核	礫	合計	組成比
安山岩	19 136.3	16 10.2	1 108.0		36 254.5	100.00 100.00
組成比	52.78 53.55	44.44 4.01	2.78 42.44		100.00 100.00	
				1 9.5		

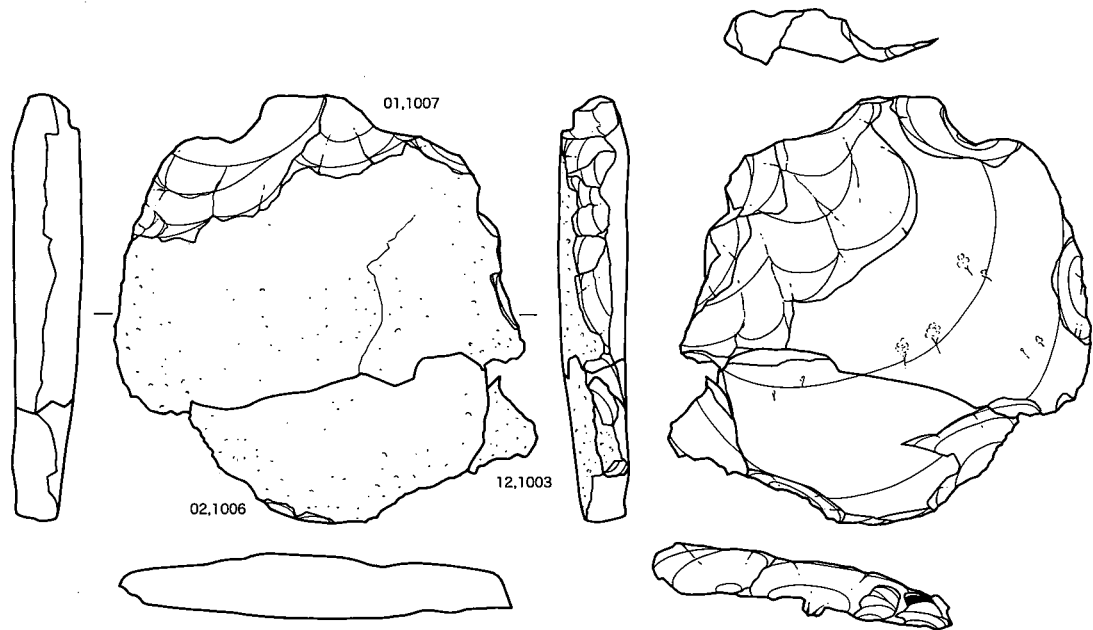
第9表 第8ブロック石器組成表

	剥片	碎片	石核	合計	組成比
安山岩	12 122.2	13 11.5	1 54.5	26 188.2	96.30 99.47
流紋岩		1 1.0		1 1.0	3.70 0.53
合計	12 122.2	14 12.5	1 54.5	27 189.2	100.00 100.00
組成比	44.45 64.59	51.85 6.61	3.70 28.80	100.00 100.00	



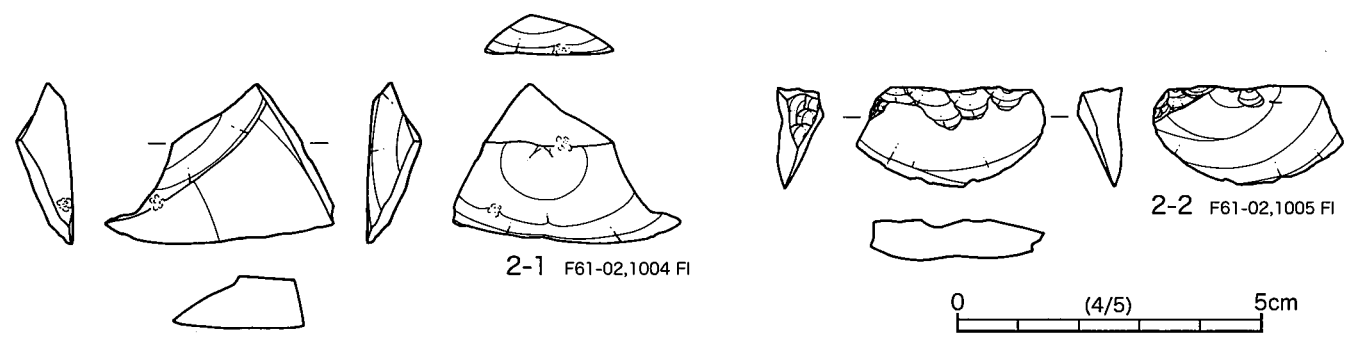
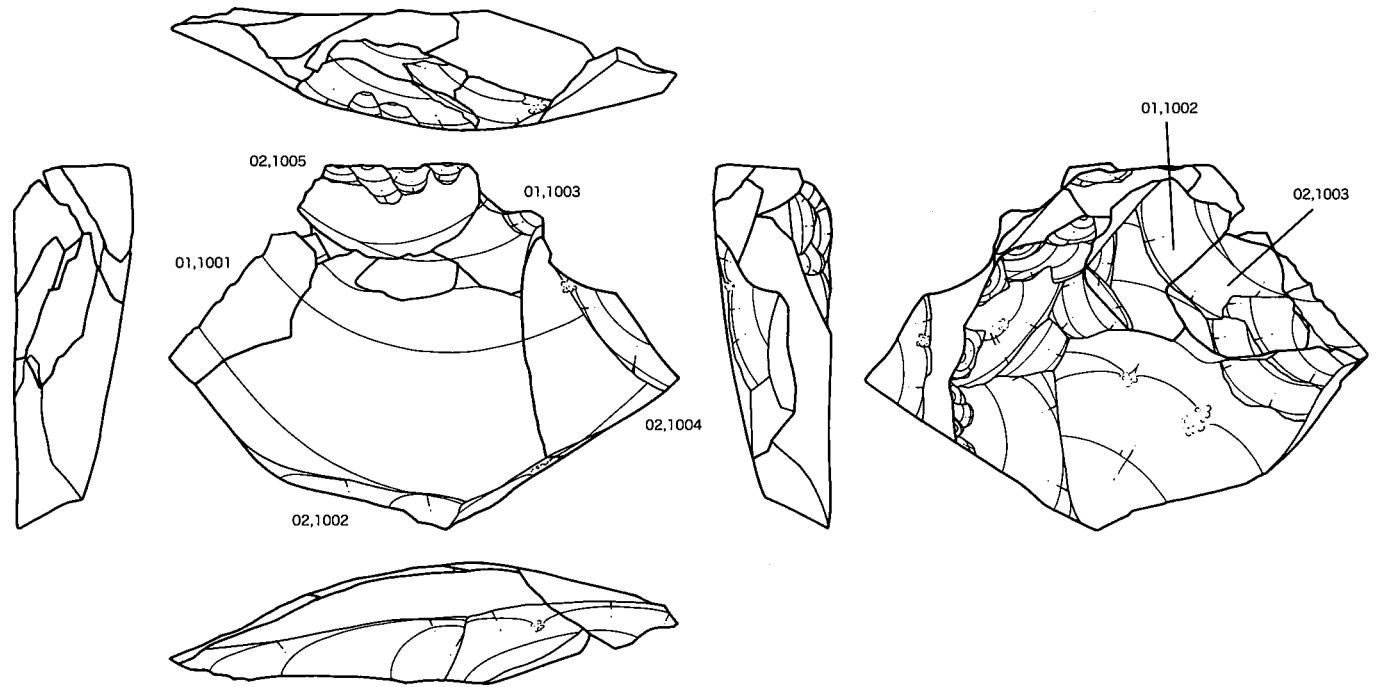


第26図 第7ブロック出土石器



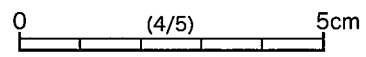
2 安山岩接合資料06

1 F61-01,1007 An Fl  
F61-02,1006  
F61-12,1003

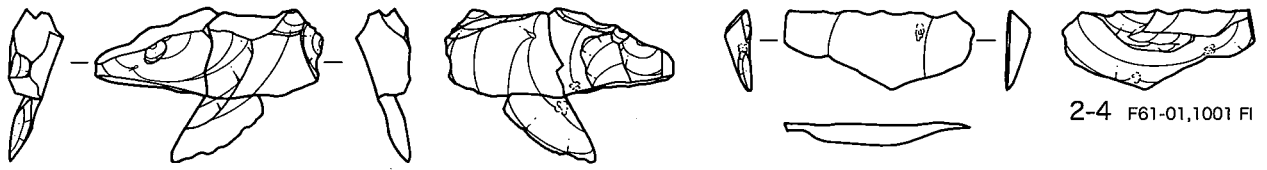


2-1 F61-02,1004 Fl

2-2 F61-02,1005 Fl

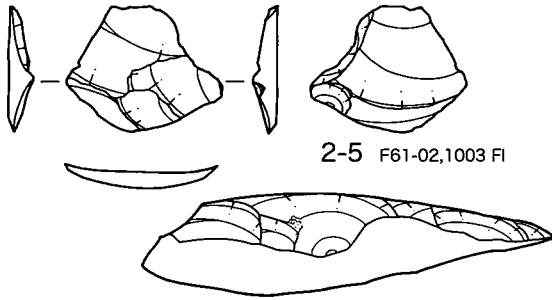


第27図 第8ブロック出土石器(1)



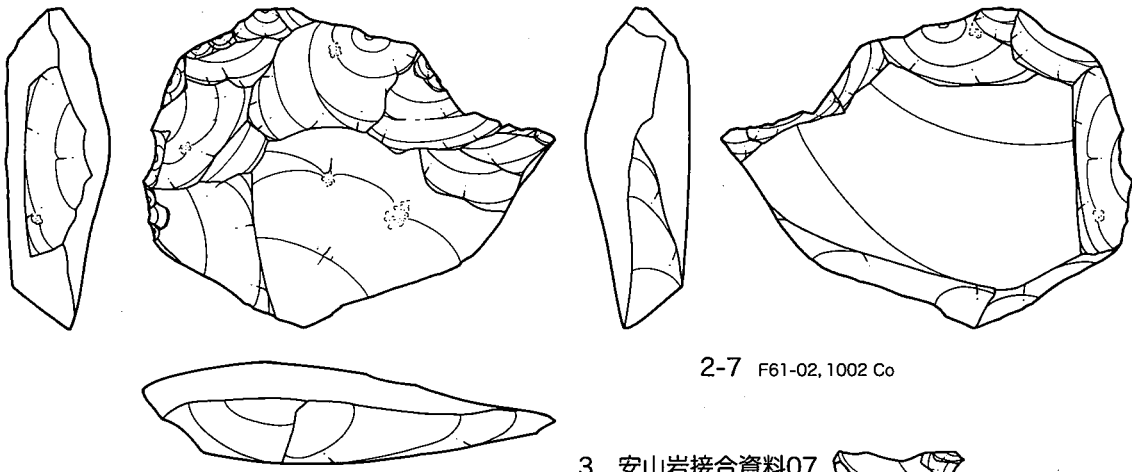
2-3 F61-01,1003 FI  
1005  
1006

2-4 F61-01,1001 FI



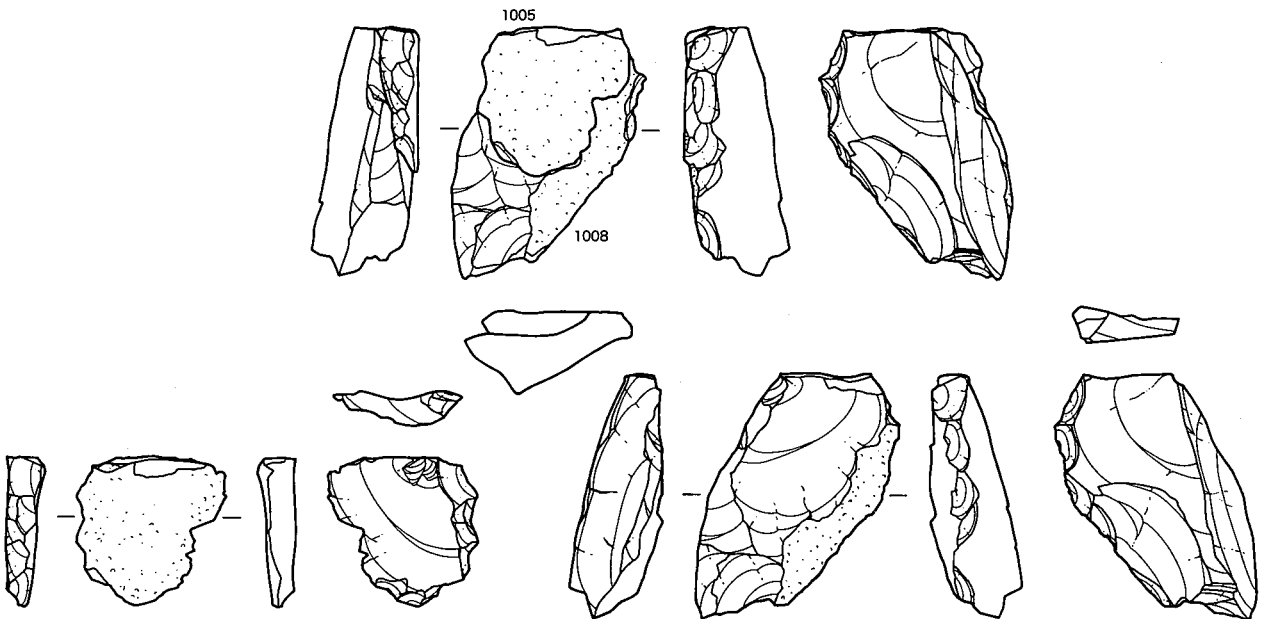
2-5 F61-02,1003 FI

2-6 F61-01,1002 FI  
02,1008



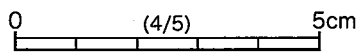
2-7 F61-02,1002 Co

3 安山岩接合資料07



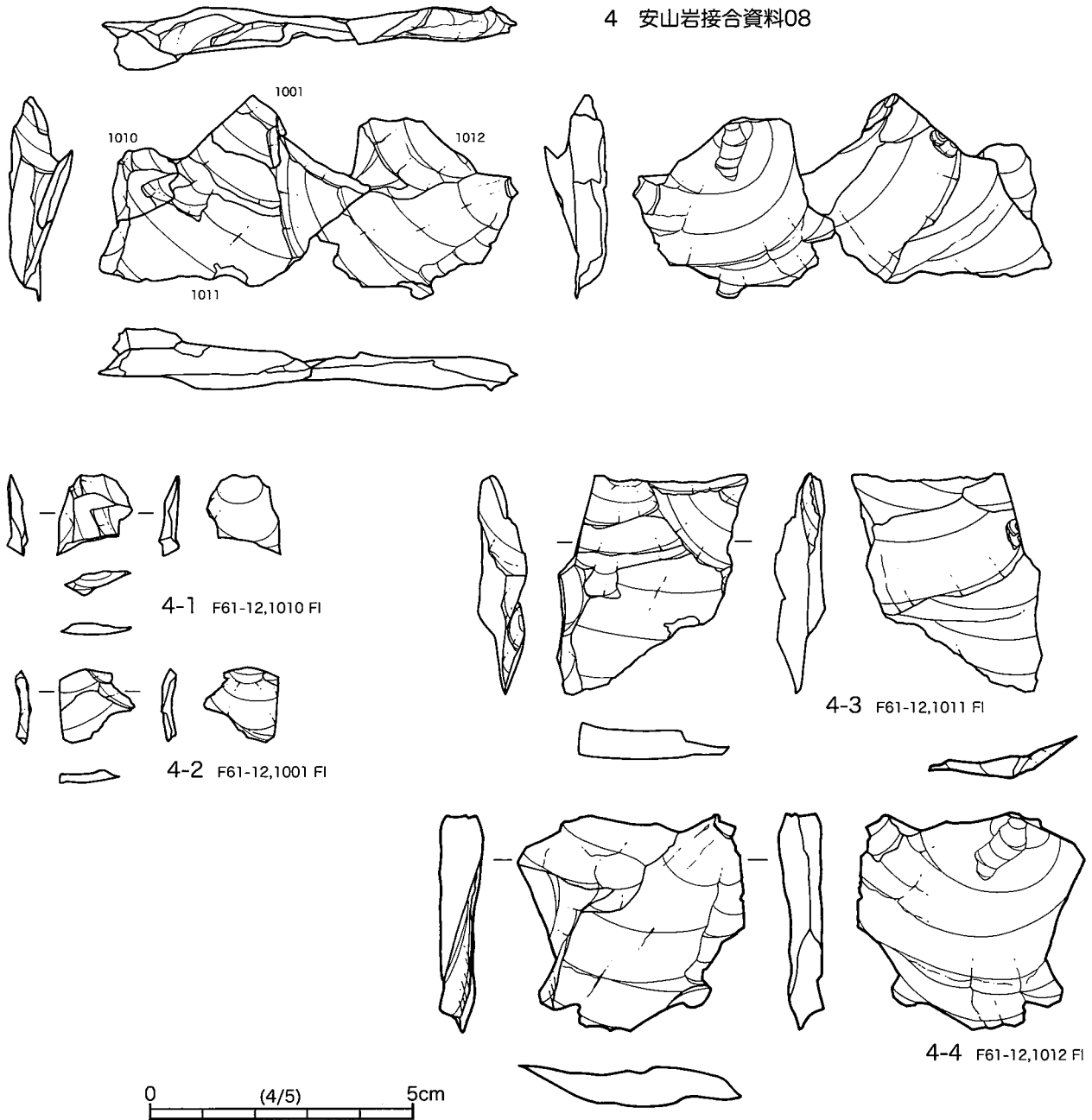
3-1 F61-12,1005 FI

3-2 F61-12,1008 FI



第28図 第8ブロック出土石器(2)

4 安山岩接合資料08



第29図 第8ブロック出土石器(3)

は21.8m付近を示し、後述する第9～11ブロックと対比するとⅨa層上部に該当するため、標高差を考慮するとⅨa層下部に属すると考えられる。石器出土レベルの最大値は22.071m、最小値は21.606m、平均は21.809mである。

器種・石材

計36点すべて安山岩製の剥片、碎片、石核で構成される。石器の縦横比は横長系統にやや偏るものの4cm×4cmの範囲内に分散しているのが理解できる。

石器の器表面は灰色を呈し、白色の不純物が混入する石材であり、すべての個体に共通する。

1・2は剥片である。1は厚みのある不定形剥片で、両側面には剥片剥離工程の前段階の剥離が面的に

認められる。2は剥片剥離の際に打点から2分している。

3は石核である。一部に礫面が認められるが大型剥片を転用した石核である。剥片剥離は背面、腹面の両面に対し、周囲から求芯的に行われている。

4は接合資料である4-1、4-2ともに打面を共有し、単純打面から連続して剥片剥離を行っている。4-2は剥片剥離の際に打点から2分している。

## 第8ブロック（第23・24・27～29図、第8表、図版8・9）

### 分布

F61-01、02、11、12グリッドから検出された。径4mのほぼ円形状に石器が分布するが、特に分布範囲の南側、F61-12グリッド北西部に集中箇所が認められる。

出土層位は調査時の記述ではⅦ層からⅨ層の出土とあるが、詳細は不明である。ヒストグラムピークは21.7m付近を示し、隣接する第7ブロックより若干レベルが下降する。しかし第7ブロック同様、後述する第9～11ブロックと対比するとⅨa層上部に該当するため、標高差を考慮するとⅨa層下部に属すると考えられる。石器出土レベルの最大値は22.088m、最小値は21.583m、平均は21.756mである。

### 器種・石材

定型的な石器はなく、剥片、碎片、石核で構成される。

石器の縦横比は、第7ブロック同様、横長系統にやや偏りが認められるが、特に3cm×3cmの範囲内に集中しているのが理解できる。

石材は、安山岩が主体であり、碎片1点のみの流紋岩は極めて客体的である。安山岩の器表面は灰色を呈し、白色の不純物が混入する石材である。第8ブロック内すべての個体に共通する特徴であり、色調、質感の点では第7ブロックを構成する安山岩とほぼ同一であるが、第8ブロックの安山岩は白色不純物の混入量が多い。

1は安山岩製の大型剥片である。背面には礫面が広く残る。

2は計10点からなる安山岩製の接合資料である。大型剥片を転用し剥片剥離を行ったもので、2-1、2-2、2-3、2-4は素材剥片の末端部に対し、腹面側から剥片剥離を行っている。2-3は剥片剥離の際に3分割している。2-4の剥片作出後、作業面を変換し、数回の剥片剥離を行った後2-5、2-6が作出されている。

## 第9ブロック（第30～33図、第10・13表、図版9）

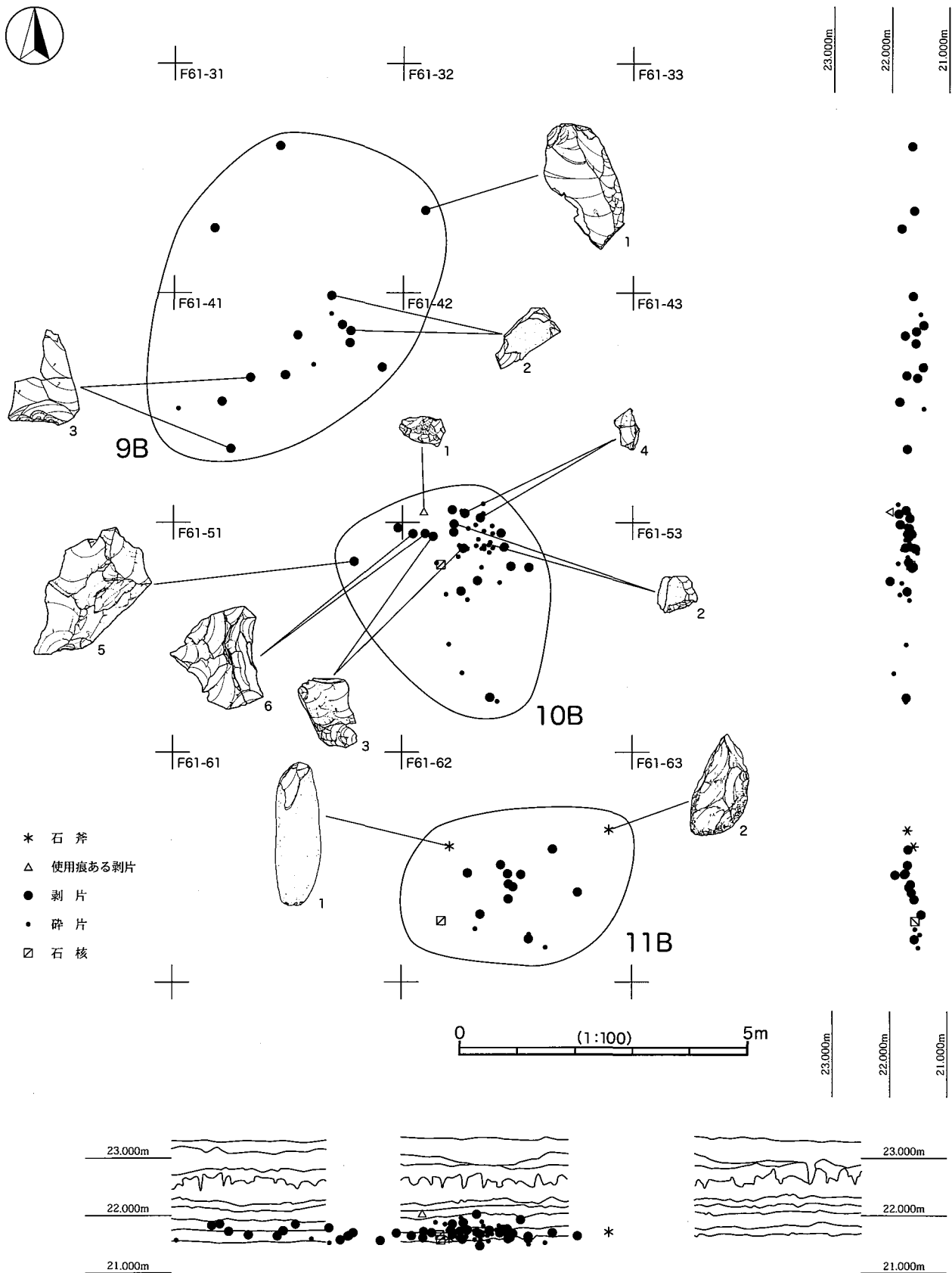
### 分布

F61-31、32、41グリッドにかけて検出された。分布は長軸6m、短径4mの不定円形を呈し、特に分布範囲の南側、F61-41グリッドに偏る傾向が認められる。

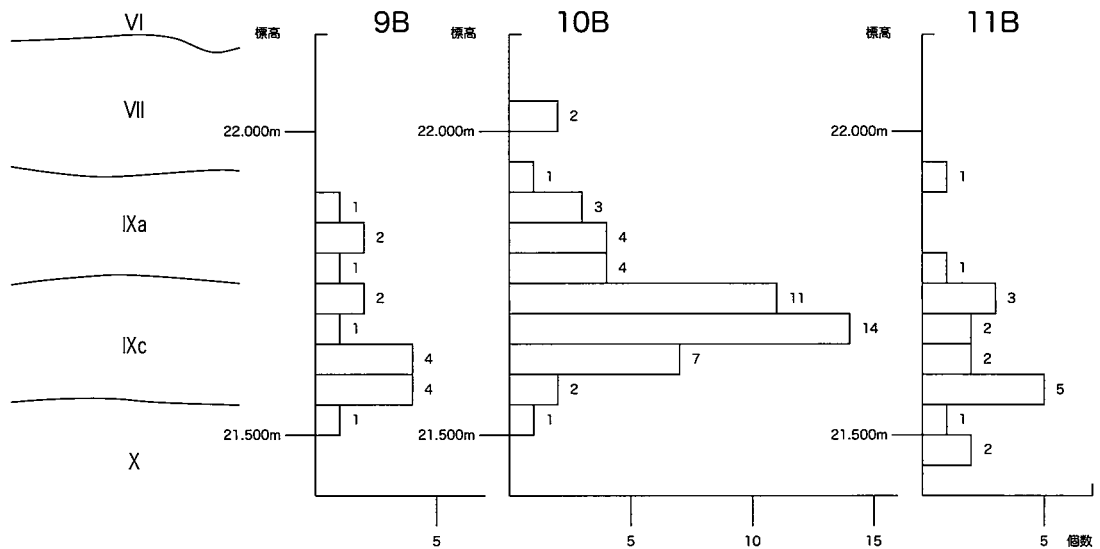
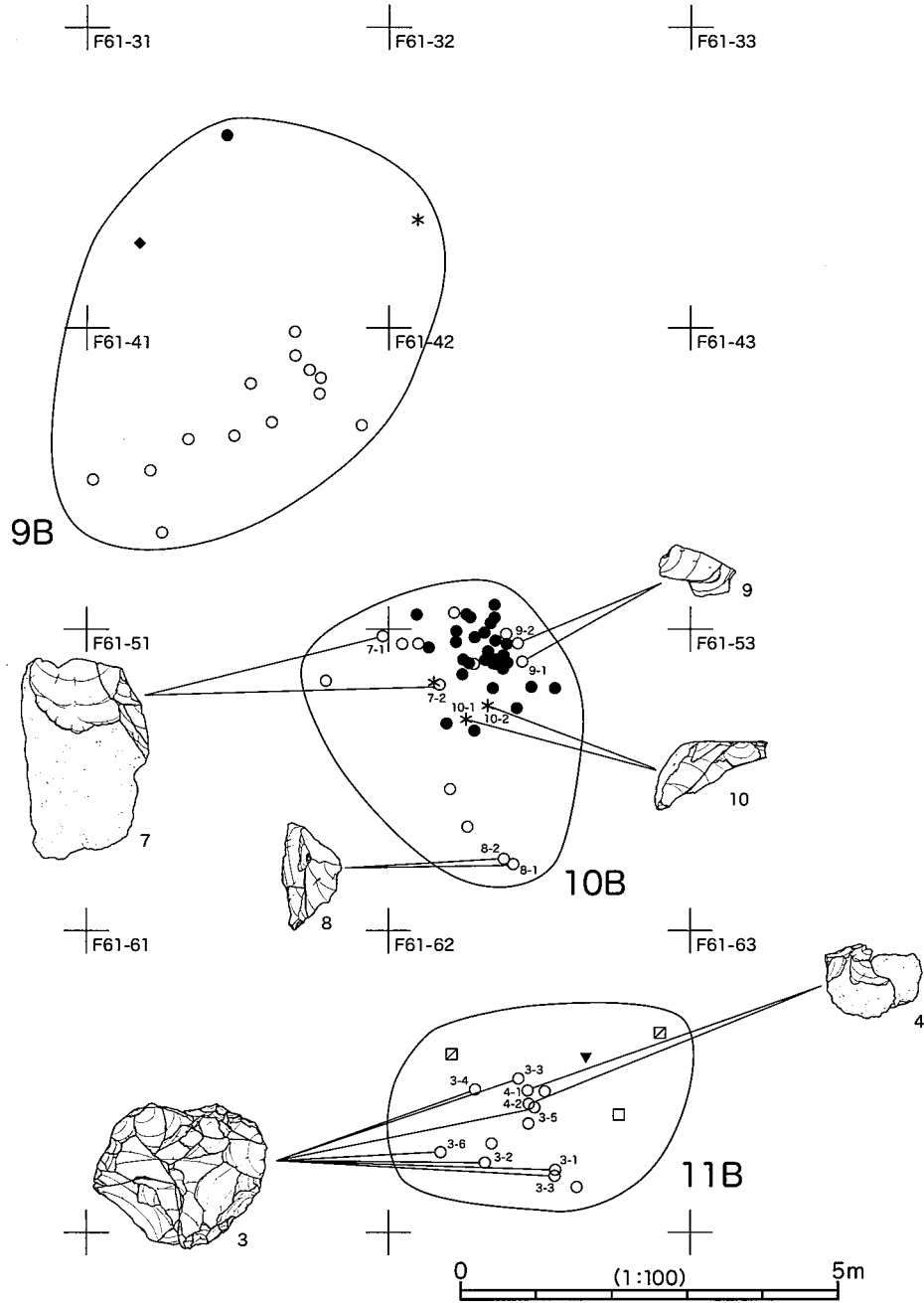
石器の出土層位はⅨa層からⅩ層にまで及ぶが、ヒストグラムは下方に集中する傾向がみられ、ピークはⅨc層下部を示す。石器出土レベルの最大値は21.851m、最小値は21.514m、平均は21.669mである。

### 器種・石材

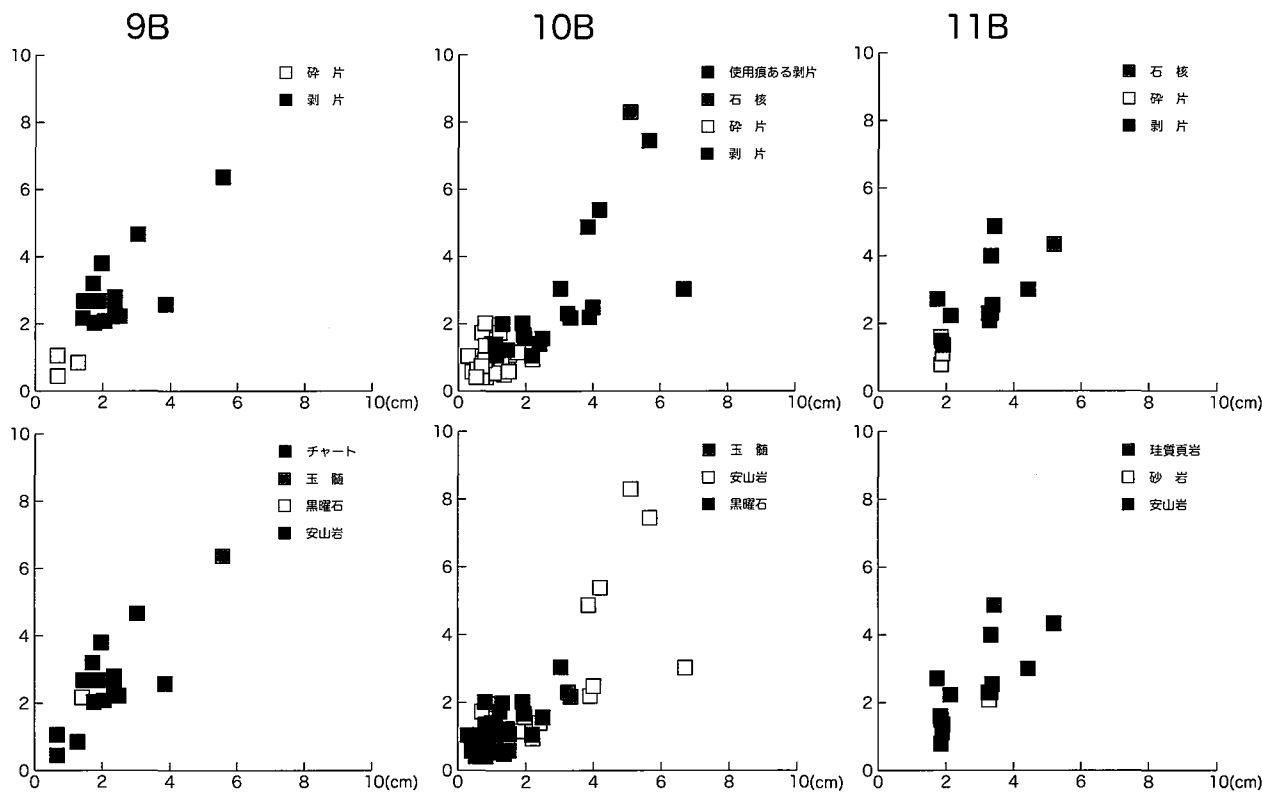
計16点のうち安山岩製の石器が13点と組成の大半を占める。他の石材は黒曜石、チャート、玉髓が使用されるが、それぞれ単体の出土であり極めて客体的である。定型的な石器はなく、器種は剥片、碎片で構



第30図 第9・10・11ブロック器種別分布



第31図 第9・10・11ブロック石材別分布



第32図 第9・10・11ブロック石器形状比

成される。

石器形状はやや縦長となる傾向が認められ、グラフでは3cm内外に集中が認められる。

各石材の特徴は、安山岩の礫面は灰色、器表面はやや茶色を帯びた灰色、欠損面は暗灰色を呈し、白色不純物を含む。チャートは緑がかった暗灰色を呈し、節理の混入は認められない。玉髄は乳白色を基調とし、一部透明部位が混入する。黒曜石は透明感に欠ける黒色であり、不純物が多く混入するものである。

1は玉髄製の剥片である。打面は礫面のみで構成される。背面は打面側からの剥離で構成される。

2・3は安山岩製の剥片である。両者とも分割しているが、剥片剥離の際に分離したものである。

### 第10ブロック

(第30～32・34～36図、第11・13表、図版9・10)

### 分布

F61-42、51、52グリッドにかけて検出された。石器の分布は径4mの範囲で収束し、分布範囲の北側、F61-52グリッド北西部に集中区が認められる。

第10表 第9ブロック石器組成表

	剥片	碎片	合計	組成比
安山岩	10 50.2	3 0.7	13 50.9	81.25 68.60
黒曜石	1 1.5		1 1.5	6.25 2.02
チャート	1 3.0		1 3.0	6.25 4.04
玉髄	1 18.8		1 18.8	6.25 25.34
合計	13 73.5	3 0.7	16 74.2	100.00 100.00
組成比	81.25 99.05	18.75 0.95	100.00 100.00	

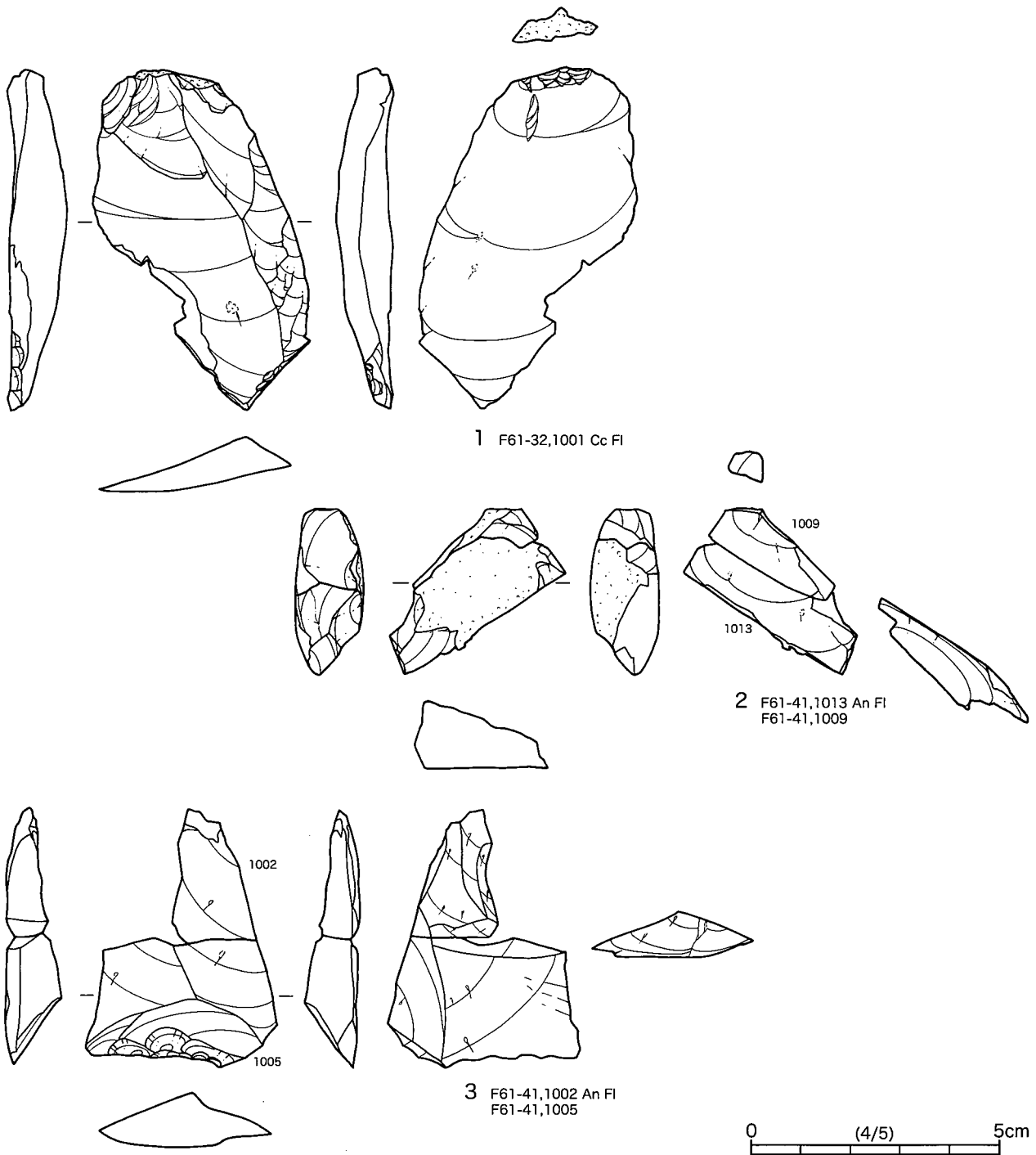
第11表 第10ブロック石器組成表

	使用痕 ある剥片	剥片	碎片	石核	合計	組成比
安山岩		8 145.7	5 2.9	1 86.1	14 234.7	28.57 88.53
黒曜石	1 1.4	8 17.4	23 4.0		32 22.8	65.30 8.60
玉髄		2 7.5	1 0.1		3 7.6	6.13 2.87
合計	1 1.4	18 170.6	29 7.0	1 86.1	49 265.1	100.00 100.00
組成比	2.04 0.53	36.73 64.35	59.19 2.64	2.04 32.48	100.00 100.00	

第12表 第11ブロック石器組成表

	石斧	剥片	碎片	石核	合計	組成比
安山岩		9 69.0	3 2.1	1 56.0	13 127.1	76.47 36.50
珪質頁岩		1 21.4			1 21.4	5.88 6.15
砂岩		1 2.9			1 2.9	5.88 0.83
変成岩	2 196.8				2 196.8	11.77 56.52
合計	2 196.8	11 93.3	3 2.1	1 56.0	17 348.2	100.00 100.00
組成比	11.77 56.52	64.70 26.79	17.65 0.61	5.88 16.08	100.00 100.00	



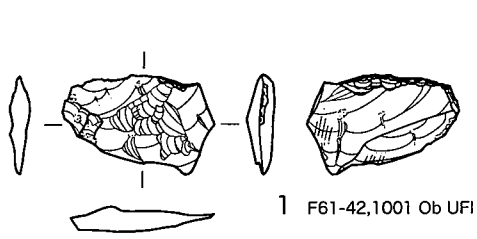


第33図 第9ブロック出土石器

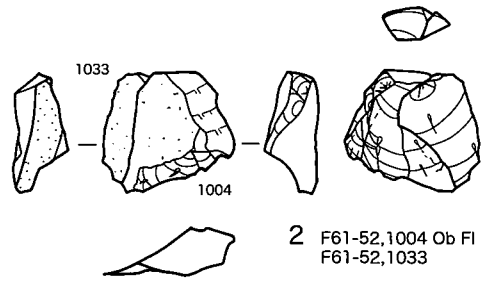
出土層位はⅦ層からⅩ層と幅が大きいですが、垂直分布のヒストグラムのピークはⅨc層上部に認められ、隣接する第9・11ブロックと比較すると上方への偏差が認められる。石器出土レベルの最大値は22.030m、最小値は21.543m、平均は21.722mである。

**器種・石材**

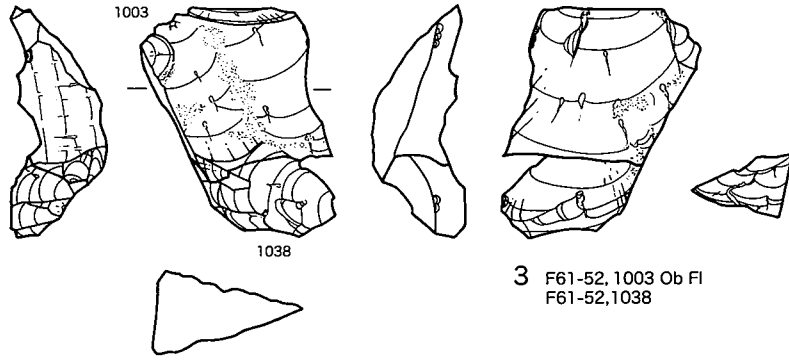
計49点出土したうち、使用痕ある剥片1点の他は剥片、碎片、石核であり、定型的な石器は出土していない。安山岩14点、黒曜石32点の2種で90%以上を占め、玉髓は客体的である。点数的には黒曜石が安



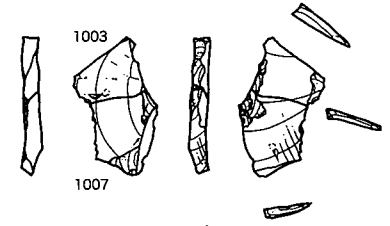
1 F61-42,1001 Ob UFI



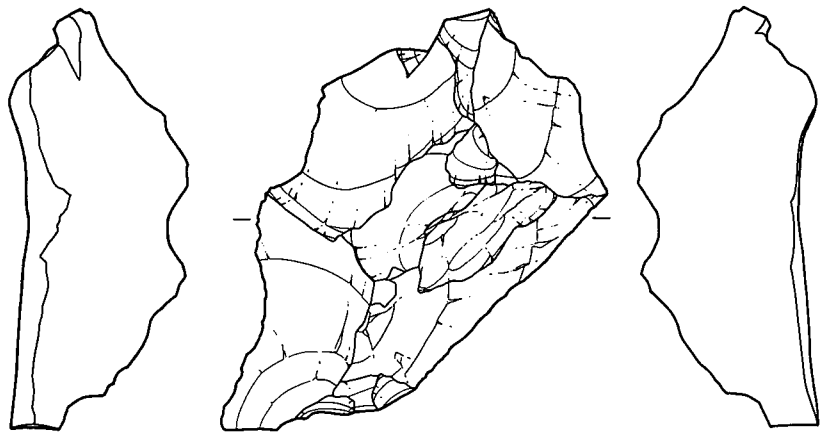
2 F61-52,1004 Ob FI  
F61-52,1033



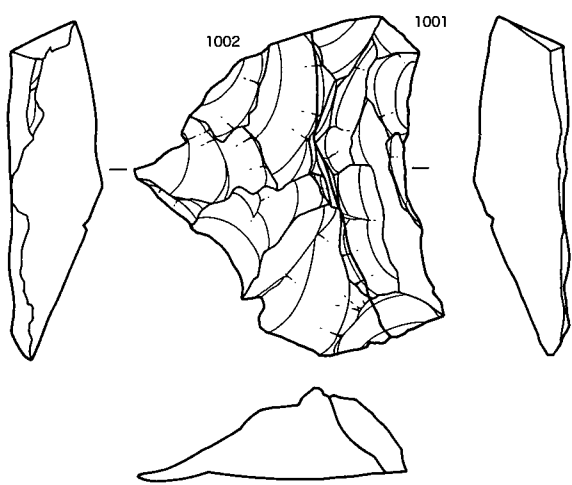
3 F61-52,1003 Ob FI  
F61-52,1038



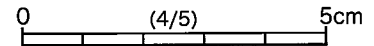
4 F61-42,1003 Ob FI  
F61-42,1007



5 F61-51,1002 An FI

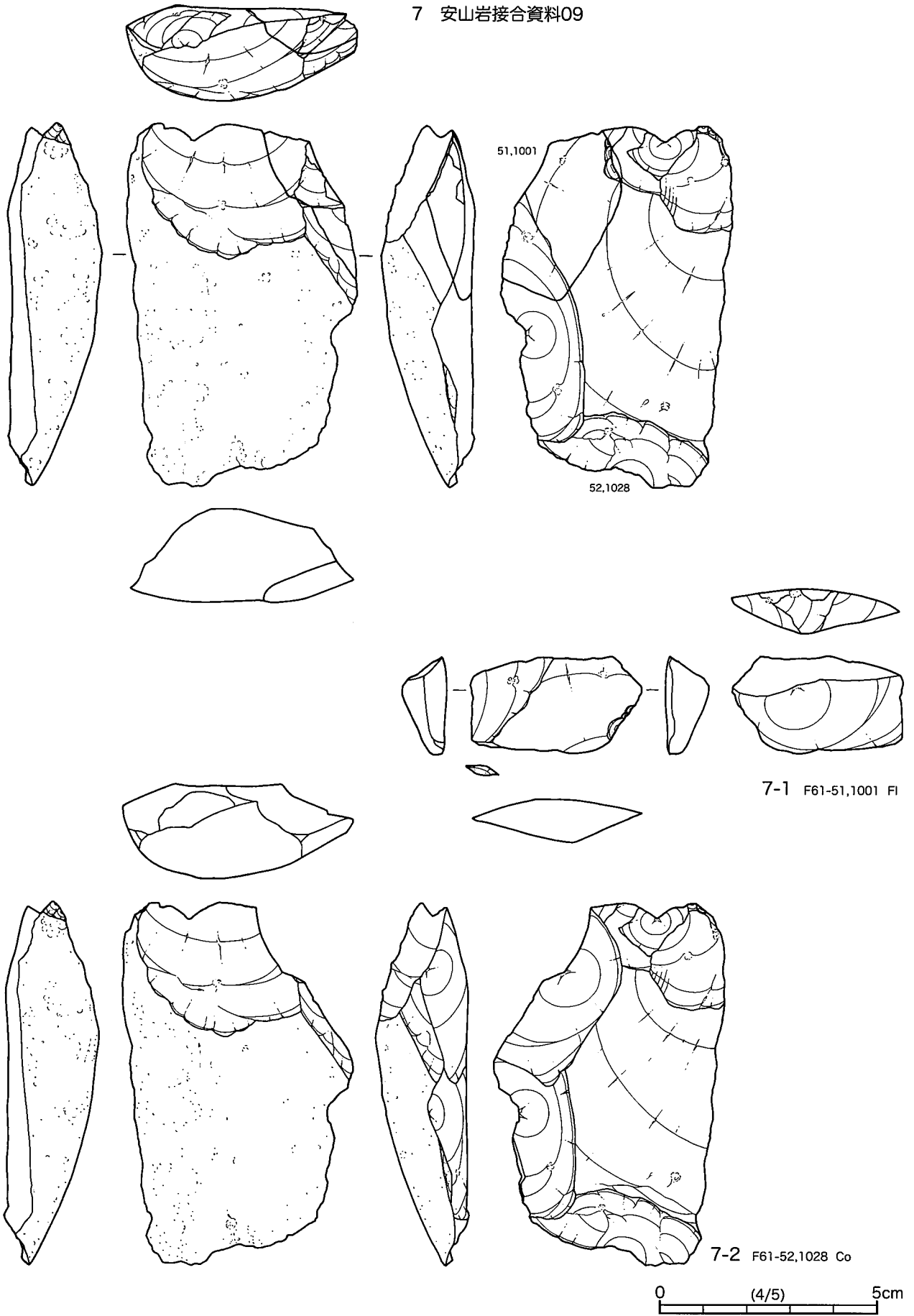


6 F61-52,1001 An FI  
F61-52,1002



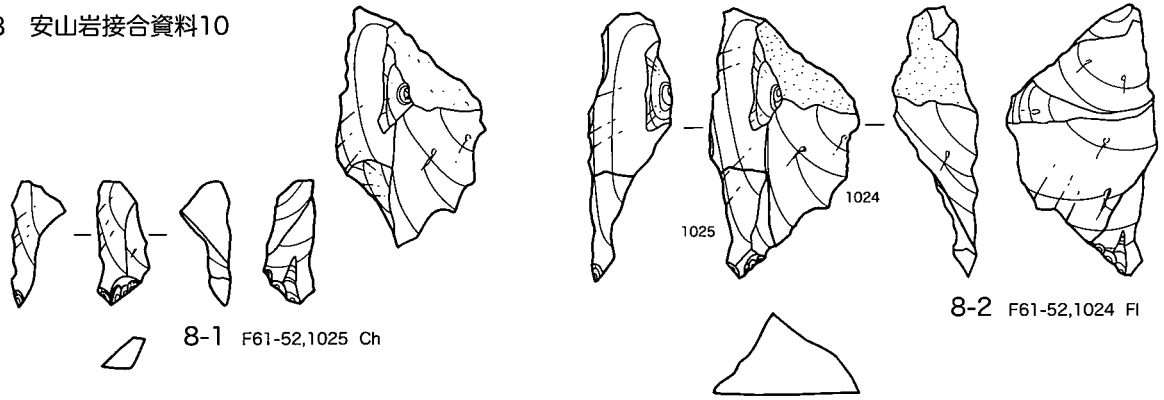
第34図 第10ブロック出土石器(1)

7 安山岩接合資料09

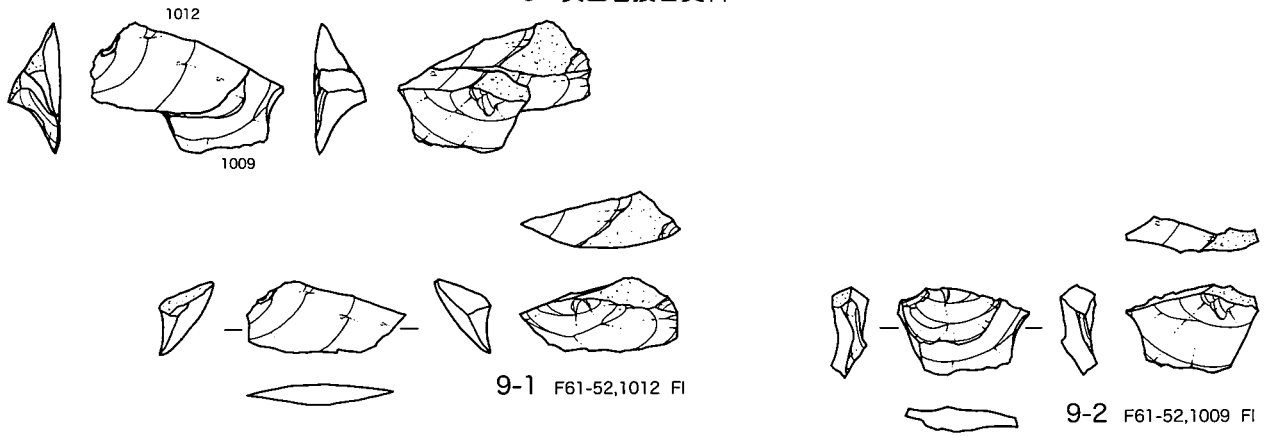


第35図 第10ブロック出土石器(2)

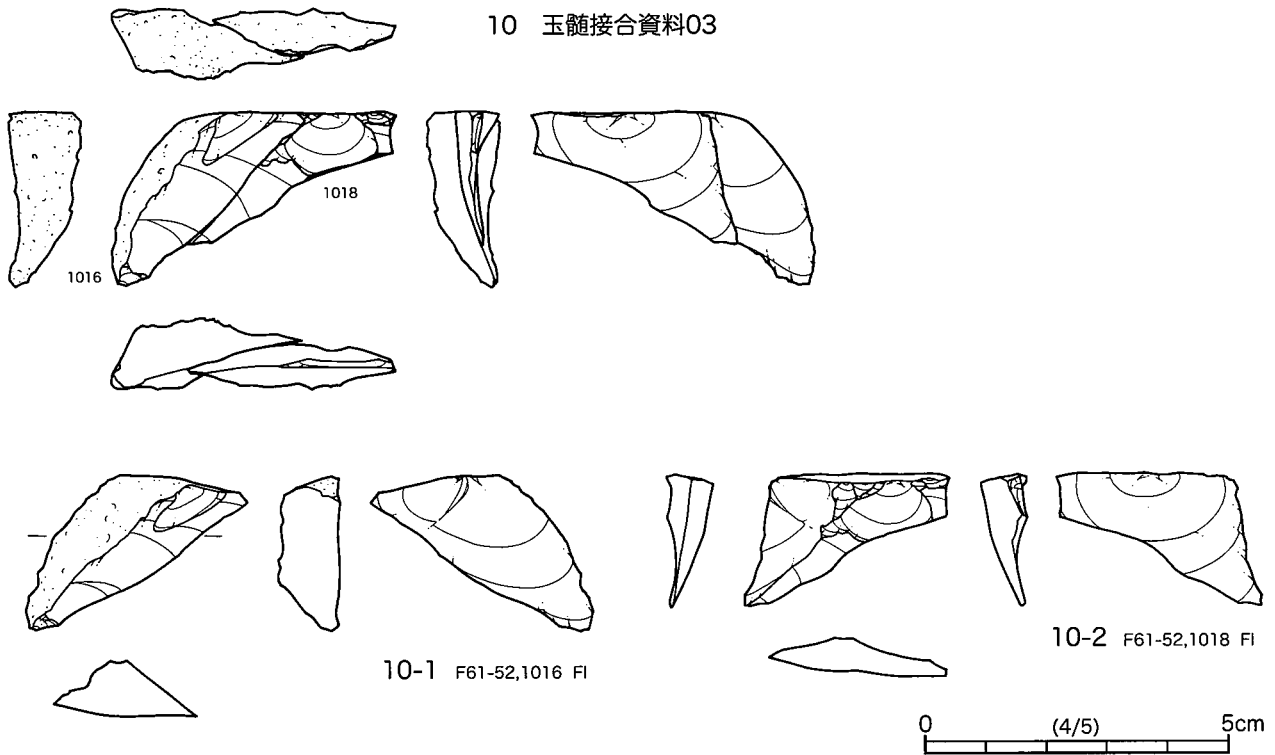
8 安山岩接合資料10



9 安山岩接合資料11



10 玉髓接合資料03



第36図 第10ブロック出土石器(3)

山岩を凌駕するが、重量比では安山岩が大半を占める。特に同数出土している剥片については安山岩が145.7g、黒曜石17.4gであり、安山岩製の石器が大型であることが理解できる。このことは縦横比グラフでも明瞭であり、黒曜石製の剥片の集中が2cm×2cmの範囲内に認められる。

石器の縦横比は大型剥片の一部に横長の系統がみられるが、1:1ほどの系統が主体となる。

各石材の特徴は、安山岩の器表面は灰色、欠損面は黒色を呈し、肌理は細かいが白色不純物を多く含む。黒曜石は透明感に欠ける黒色を呈し、不純物を多く含む。節理が多く混入し、脆弱な感がある。玉髄は乳白色を基調とし、橙色の部位が混在するものである。

1は黒曜石製の使用痕のある剥片である。打面は剥片剥離の際に欠落したと考えられ、微細な使用痕が打面側の縁辺に認められる。

2から4は黒曜石製の剥片である。夾雑物が多く混入するため剥片剥離の際に分離しているものが多い。黒曜石製の石器のなかで3の剥片が最大であり、2・4が平均的な形状である。

5・6は安山岩製の剥片である。部厚な大型剥片であり、両者ともに背面は多方向からの剥離により構成される。打面形状は単純打面であり、6は打点からではないが剥片剥離時に分離している。

7から9は安山岩製の接合資料である。7は大型剥片を石核に転用し、剥片剥離を行った接合例である。作業面は大型剥片の腹面側を対象とし、周囲から求芯的に剥片を作出しており、7-1は剥片剥離工程の最終段階に作出された剥片である。8は剥片作出後に末端部の一部を折断している。9は同一打面から連続的に作出された剥片の接合例である。

10は玉髄製の接合資料である。礫面を打面とし連続的に作出された剥片であり、両者とも主軸が傾斜するため結果的に横長剥片となる。

## 第11ブロック（第30～32・37～39図、第12・13表、図版10・11）

### 分布

F61-62グリッドで検出された。分布範囲は長軸4m、短軸3mの楕円形状を呈し、集中箇所は認められずブロック範囲から均一に出土している。

石器の出土層位はⅦ層からⅩ層上部である。石器出土レベルの最大値は21.917m、最小値は21.461m、平均は21.636mである。

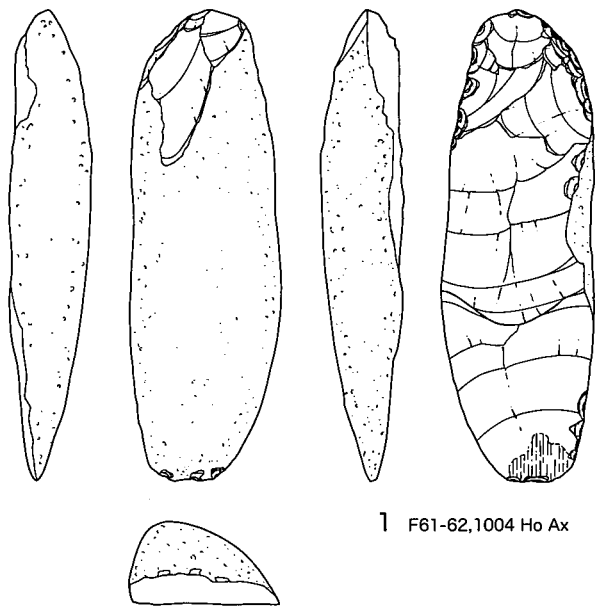
### 器種・石材

計17点のうち安山岩製の石器が13点を占め、接合資料も認められることから、第11ブロックで主体となる石材といえる。他の珪質頁岩、砂岩については単体での出土であり極めて客体的である。変成岩製の刃部磨製石斧が2点出土している。

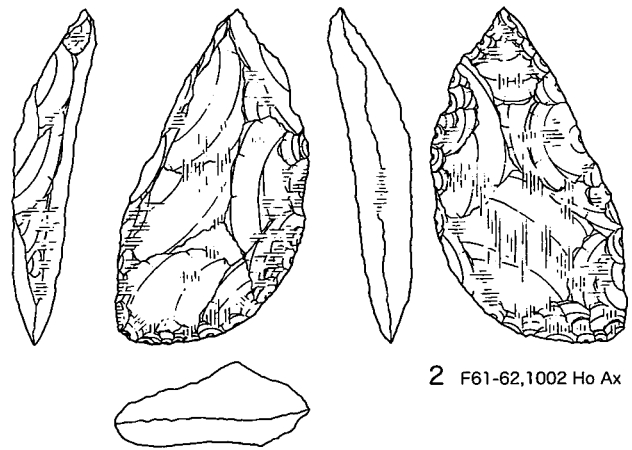
石材の特徴は、変成岩が暗灰色を呈し、黄土色の節理が所々に認められ、2の表面は1と比較して風化の度合いが大きい。安山岩の器表面は灰色、欠損面は黒色を呈し、肌理は細かいが1～2mmほどの白色不純物を含む。珪質頁岩の器表面は黄土色を呈し、肌理が細かく光沢がある。砂岩の器表面は灰色を呈し、岩石を構成する砂粒は均一で細かい。

石器の形状は、2cm以下のものについては横長となる傾向が強く窺えるが、それ以外の大型剥片については1:1前後の傾向が認められる。

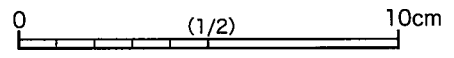
1・2は変成岩製の刃部磨製石斧である。1の表面には礫面が広く残り、裏面は刃部、基部両側からの



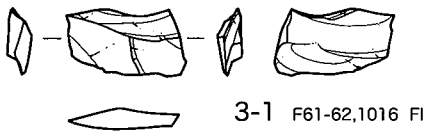
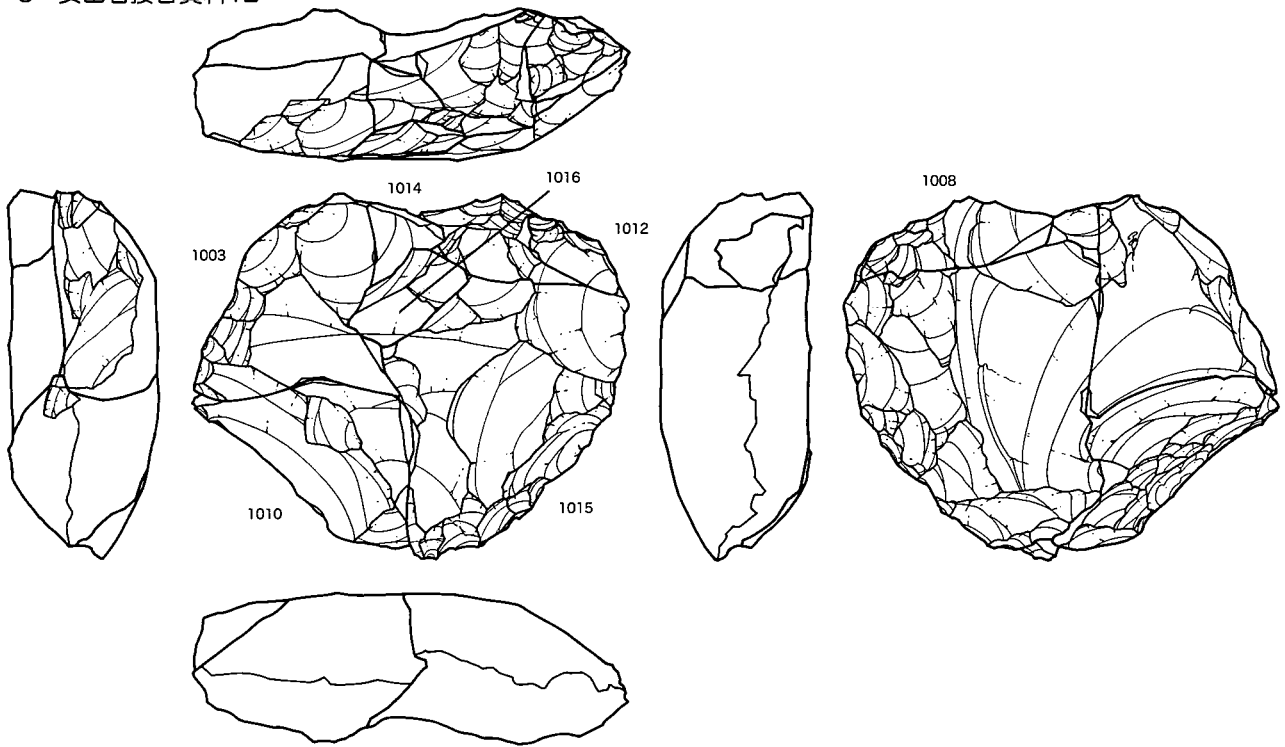
1 F61-62,1004 Ho Ax



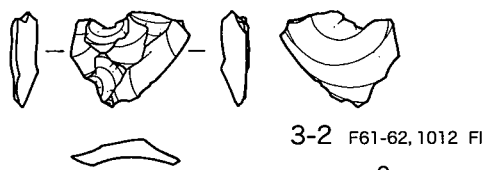
2 F61-62,1002 Ho Ax



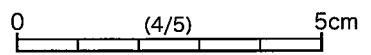
3 安山岩接合資料12



3-1 F61-62,1016 FI

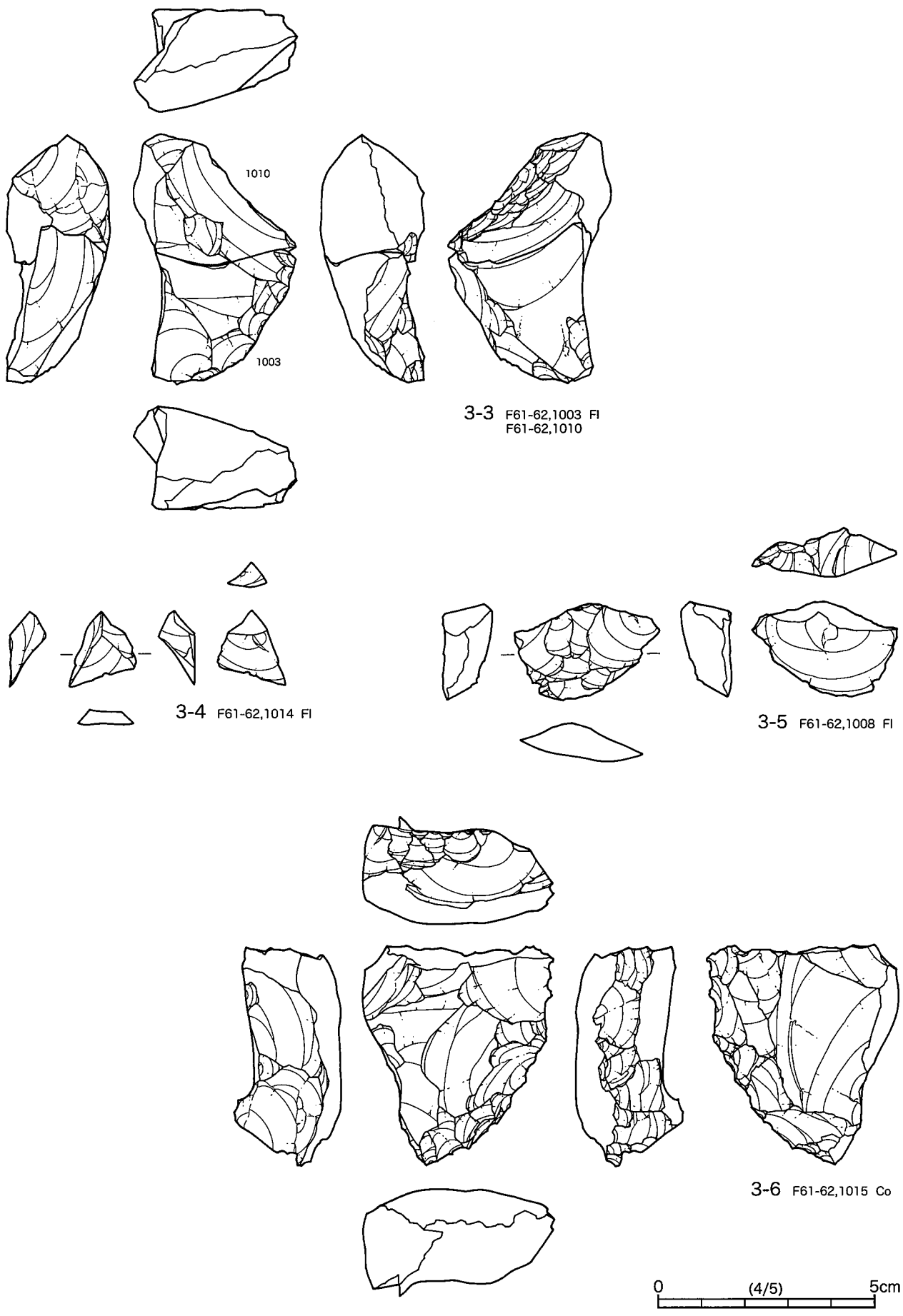


3-2 F61-62,1012 FI

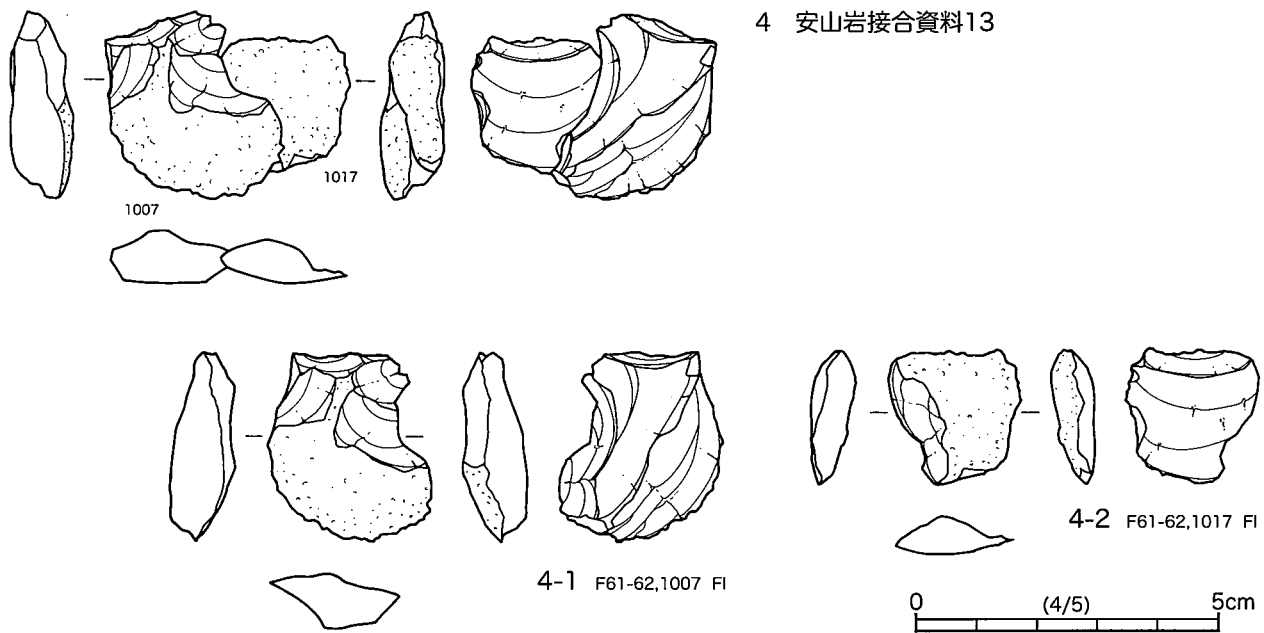


第37図 第11ブロック出土石器(1)





第38図 第11ブロック出土石器(2)



4 安山岩接合資料13

第39図 第11ブロック出土石器(3)

剥離が認められる。棒状礫を素材とし、両端からの打撃により打割されたものと考えられる。基部はさらに調整が施されるが、刃部は部分的な研磨により調整される。2は全体が剥離で構成され、刃部のみならず他の部位についても擦痕が部分的に認められる。

3・4は安山岩製の接合資料である。3は扁平な石核の全周から求芯的に剥片を作出しており、接合状態の表裏面にその痕跡が明瞭に認められる。縁辺からの剥片剥離は表裏交互に行われており、3-1、3-2では作出面が異なっている。剥片剥離作業の半ばで3-3のように石核形状が大きく変化したため、その後の3-4、3-5の剥片剥離で作業を終了している。4は礫面を有する剥片同士の接合例である。3の接合資料と同一母岩と思われ、比較的初期段階に作出された剥片と考えられる。

### 3 ブロック外出土遺物（第40図、第13表、図版11）

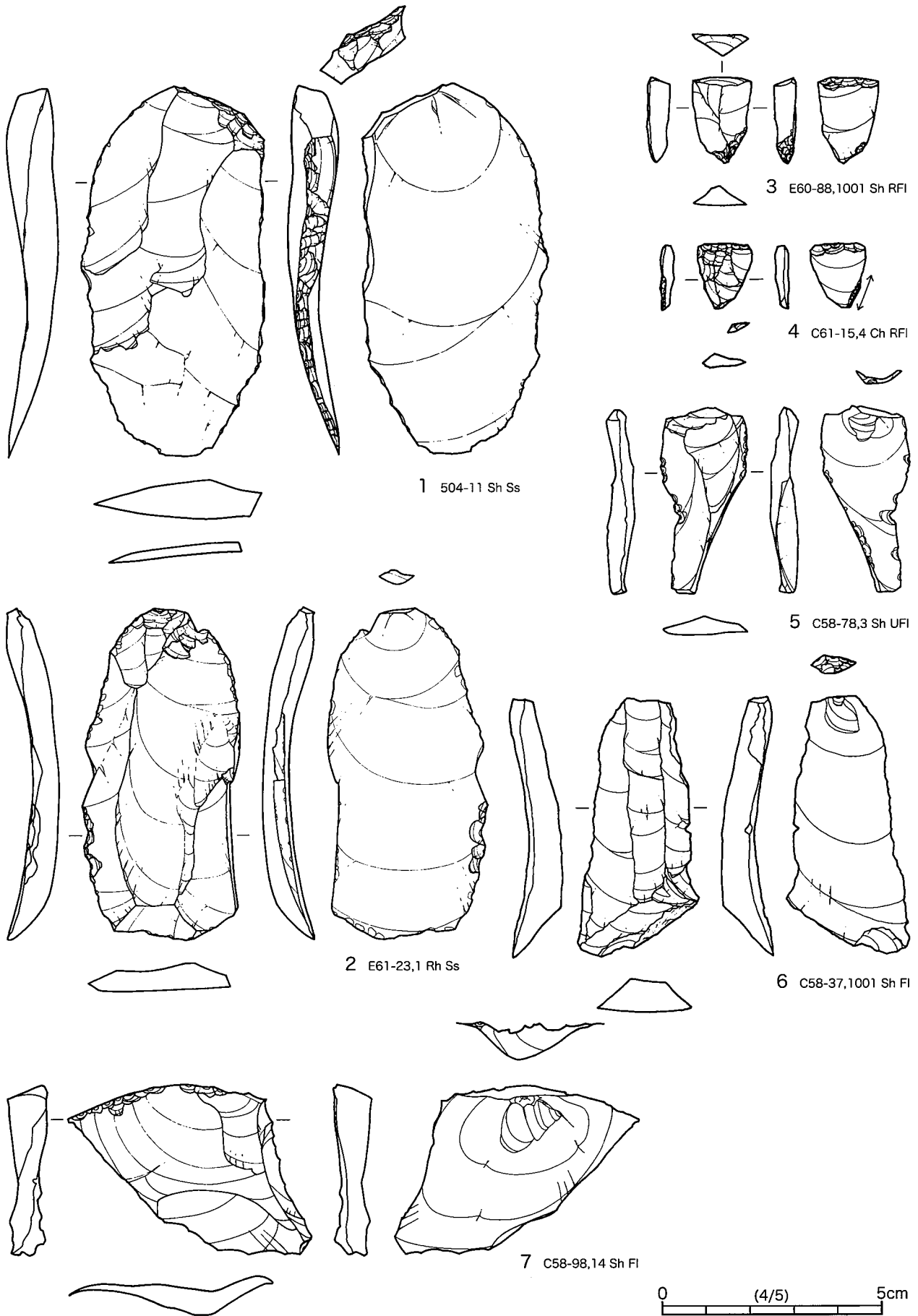
思井堀ノ内遺跡では石器集中に属さない、単独出土の石器も検出されている。これらは旧石器時代以降の遺構覆土から出土したものや、出土層位も不明であることから、前述した各ブロックに帰属させることのできない石器として一括して取り扱った。

1・2は削器である。1は頁岩、2は流紋岩製の大型剥片を素材とし、片側縁に調整を施す。1の調整は背面側から行われるが、2の調整は側縁の一部に背面・腹面の両面側から行われている。

3・4は調整痕の認められる剥片である。3は頁岩製の小型剥片の末端部に調整が施される。4はチャート製の小型剥片の打面および末端部に調整が施される。

5は頁岩製の使用痕の認められる剥片である。背面左側縁の一部に微細な剥落痕が認められる。

6・7は頁岩製の剥片である。6の背面は同一方向からの剥離痕により構成され、連続的に作出された縦長剥片であるといえる。7は不定形剥片で、背面側打面付近にみられる剥離痕は頭部調整によるものである。



第40図 ブロック外出土石器

第13表 旧石器時代石器属性表

ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
01B		D58-80	1001	Fl	Sa			3.83	3.89	1.88	17.40	-17115.433	7323.333	22.639
01B	第12図5	D58-82	1001	Fl	Tu			5.55	1.31	0.74	3.90	-17115.763	7328.626	22.159
01B	第12図4	D58-82	1002	Fl	An			8.03	3.39	1.78	52.00	-17115.344	7328.156	22.275
01B		D58-82	1003	Fl	Cc			1.86	1.94	0.50	1.50	-17115.412	7331.395	22.102
01B		D58-83	1002	Fl	An			1.94	4.02	0.74	5.10	-17115.880	7334.509	22.065
01B		D58-83	1003	Fl	Ch			3.78	4.82	1.42	25.60	-17113.264	7335.369	21.947
01B		D58-90	1001	Fl	An			5.19	3.20	1.17	18.40	-17119.537	7323.803	22.058
01B		D58-90	1002	Fl	Ch			5.78	4.35	2.02	49.20	-17118.309	7322.002	22.007
01B		D58-91	1001	Fl	An			3.12	2.15	0.29	1.60	-17116.641	7325.960	22.028
01B		D58-91	1002	Fl	An			1.91	3.05	0.61	4.60	-17116.979	7326.209	22.001
01B		D58-91	1003	Ch	An			1.38	0.81	0.47	0.40	-17117.243	7325.746	21.994
01B		D58-91	1004	Fl	An			2.05	2.43	0.39	1.80	-17118.118	7325.912	21.915
01B		D58-91	1005	Fl	An			1.78	1.72	0.52	1.20	-17118.610	7325.673	22.085
01B		D58-91	1007	Fl	An			1.66	1.46	0.39	1.10	-17116.898	7325.475	22.179
01B		D58-91	1008	Ch	An			1.43	1.23	0.38	0.60	-17117.236	7325.430	22.114
01B		D58-91	1009	Fl	An			3.14	1.88	1.08	6.80	-17119.853	7324.401	22.204
01B	第12図2	D58-92	1001	RFI	An			6.11	1.59	0.97	7.20	-17118.963	7328.501	22.160
01B	第13図8	D58-92	1002	Fl	An	安山岩01	1	3.34	1.02	0.73	2.40	-17119.492	7329.611	21.980
01B	第13図8	D58-92	1003	Fl	An	安山岩01	2	3.55	2.24	0.70	5.40	-17119.375	7330.162	22.150
01B		D58-92	1004	Ch	An			0.42	1.03	0.09	0.10	-17118.765	7330.824	22.148
01B	第13図6	D58-92	1005	Fl	Cc	玉髓01	1	1.65	3.10	0.72	2.80	-17117.787	7331.610	21.960
01B		D58-92	1006	Fl	Sh			2.94	1.24	0.37	0.90	-17116.927	7330.471	22.115
01B		D58-92	1007	Fl	Ch			3.96	3.11	1.00	11.00	-17118.735	7330.236	22.105
01B		D58-92	1008	Ch	An			1.45	0.95	0.21	0.30	-17117.618	7331.566	21.963
01B		D58-93	1001	Ch	Cc			1.49	1.57	0.64	0.90	-17117.449	7332.518	21.987
01B		D58-93	1002	Fl	An			2.37	2.27	0.31	1.80	-17117.412	7333.025	22.174
01B	第13図7	D58-93	1004	Fl	Sh	頁岩01	1	2.90	3.36	1.17	11.60	-17117.648	7333.789	22.098
01B	第13図6	D58-93	1005	Ch	Cc	玉髓01	2	1.05	1.71	0.27	0.60	-17117.464	7333.686	22.088
01B	第13図7	D58-93	1006	Fl	Sh	頁岩01	2	3.96	2.62	0.66	5.80	-17117.133	7334.201	22.015
01B	第13図7	D58-93	1007	Fl	Sh	頁岩01	3	3.45	2.16	0.82	2.90	-17116.891	7332.885	21.924
01B	第13図7	D58-93	1008	Fl	Sh	頁岩01	3					-17116.810	7332.900	21.855
01B	第12図1	D59-02	1001	Kn	An			8.88	1.96	0.85	16.40	-17120.138	7328.266	22.185
01B	第13図8	D59-02	1002	Fl	An	安山岩01	2	3.35	2.84	1.08	11.80	-17120.469	7328.957	22.220
01B		D59-02	1003	Fl	An			2.28	1.48	0.58	1.20	-17120.278	7329.824	22.085
01B		D59-02	1004	Fl	An			4.36	3.09	1.10	11.40	-17120.086	7329.913	22.345
01B		D59-02	1005	Fl	An			2.94	3.39	1.09	9.10	-17120.300	7330.199	22.322
01B	第14図9	D59-02	1006	Fl	An	安山岩02	1	9.85	3.73	1.12	18.60	-17120.954	7329.905	22.155
01B	第14図9	D59-02	1008	Fl	An	安山岩02	1				8.80	-17121.461	7329.861	22.084
01B	第14図9	D59-02	1009	Fl	An	安山岩02	1				20.20	-17121.615	7329.141	22.141
01B	第14図9	D59-02	1010	Fl	An	安山岩02	1				5.30	-17121.703	7328.795	22.438
01B	第12図3	D59-02	1007	RFI	An			7.62	3.81	1.46	37.20	-17120.770	7330.853	22.018
01B		D59-02	1014	Ch	An			0.47	1.01	0.34	0.10	-17120.285	7328.964	21.891
02B		D60-35	1003	Fl	Cc			1.97	2.09	0.35	1.30	-17172.980	7341.318	22.678
02B		D60-35	1004	Ch	Cc			0.90	0.88	0.27	0.30	-17172.985	7341.577	22.703
02B		D60-35	1005	Ch	Cc			0.95	1.10	0.24	0.20	-17173.674	7341.076	22.688
02B	第16図4	D60-35	1006	Co	Cc	玉髓02	2	3.86	5.06	4.34	102.50	-17174.093	7341.897	22.762
02B	第16図3	D60-35	1007	Fl	Sh	頁岩02	2	3.14	3.41	0.85	8.00	-17173.768	7341.357	22.731
02B		D60-35	1008	Fl	Sh			1.23	1.62	0.46	0.90	-17174.308	7341.522	22.701
02B		D60-35	1009	Ch	Sh			1.32	0.89	0.39	0.30	-17173.911	7342.310	22.686
02B	第16図4	D60-35	1010	Fl	Cc	玉髓02	1	3.70	2.60	0.92	6.20	-17174.694	7341.379	22.705
02B		D60-35	1011	Fl	Sh			3.90	2.05	0.79	3.60	-17174.903	7342.310	22.722
02B	第16図1	D60-35	1012	Kn	Cc			2.68	1.05	0.58	1.40	-17175.273	7341.517	22.729
02B	第16図3	D60-35	1013	Fl	Sh	頁岩02	1	2.86	3.74	0.72	6.00	-17175.978	7340.734	22.689
02B		D60-35	1014	Fl	Sh			1.62	1.68	0.46	1.10	-17173.051	7341.605	22.599
02B		D60-35	1015	Ch	Sh			0.97	1.76	0.25	0.30	-17173.487	7341.969	22.695

ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
02B		D60-35	1016	Fl	Sh			2.33	1.98	0.81	2.90	-17174.143	7342.104	22.762
02B		D60-35	1017	Ch	Sh			0.82	0.65	0.07	0.10	-17174.085	7342.211	22.657
02B		D60-35	1018	Fl	Rh			5.77	1.48	0.82	5.30	-17174.165	7341.974	22.717
02B	第16図2	D60-35	1019	Kn	Sh			1.16	0.90	0.40	0.20	-17174.358	7342.140	22.632
02B		D60-35	1020	Ch	Sh			1.10	1.80	0.32	0.50	-17174.198	7341.889	22.587
02B		D60-35	1021	Fl	Sh			3.60	4.06	1.01	9.70	-17174.178	7342.117	22.741
03B	第18図1	D60-85	0008	Fl	An	安山岩03	2	4.37	2.16	0.51	4.30	-17195.951	7341.940	22.475
03B		D60-95	0010	Fl	An			2.39	1.27	0.39	1.00	-17197.111	7341.857	22.498
03B	第18図2	D60-95	0014	Fl	An	安山岩04	1	2.40	1.12	0.47	0.90	-17196.749	7343.009	22.447
03B		D60-95	0015	Fl	An			3.86	2.89	0.57	5.30	-17197.419	7342.978	22.453
03B	第18図2	D60-95	0016	Fl	An	安山岩04	2	2.60	1.86	0.43	2.30	-17197.048	7342.603	22.517
03B		D60-95	0017	Fl	An			2.30	1.05	0.45	1.00	-17197.151	7342.768	22.430
04B	第20図2	C61-74	1001	Fl	Ob			2.41	3.93	0.84	6.80	-17229.871	7298.517	22.185
04B	第20図1	C61-74	1002	Kn	Ch			4.87	1.80	0.90	5.80	-17231.117	7299.774	21.470
04B		C61-74	1003	Fl	Cc			2.51	1.22	0.81	1.70	-17230.792	7299.718	21.443
04B	第20図3	C61-74	1004	Fl	Ch			2.93	3.24	1.05	10.20	-17229.800	7299.917	21.433
04B		C61-75	1001	Fl	Ch			2.23	1.40	0.27	0.80	-17230.742	7300.888	21.905
04B		C61-75	1002	Fl	Ob			2.23	1.17	0.69	1.40	-17231.304	7301.539	21.798
04B		C61-75	1003	Fl	An			2.84	1.82	0.64	3.10	-17229.849	7302.878	21.691
04B		C61-75	1004	Fl	Ch			2.60	1.64	0.81	2.70	-17231.828	7302.349	21.473
04B	第20図5	C61-75	1005	Ch	Ob	黒曜石01	2	1.82	0.94	0.25	0.40	-17231.900	7302.007	21.466
04B		C61-75	1006	Fl	An			3.33	2.26	0.84	4.50	-17231.056	7302.046	21.501
04B	第20図4	C61-85	1001	Fl	Rh			3.65	2.40	0.60	4.60	-17232.100	7300.376	22.174
04B		C61-85	1002	Fl	Rh			3.15	2.09	0.80	4.70	-17232.072	7300.663	22.159
04B		C61-85	1003	Fl	Ch			1.98	1.65	0.49	1.50	-17232.535	7302.300	21.742
04B		C61-85	1004	Fl	An			3.15	2.26	0.75	5.70	-17232.044	7300.530	21.639
04B		C61-85	1005	Fl	Tu			2.94	3.23	0.62	6.00	-17232.083	7300.227	21.718
04B		C61-85	1006	Fl	Ch			2.97	2.30	0.55	3.50	-17232.237	7302.035	21.581
04B	第20図5	C61-85	1007	Fl	Ob	黒曜石01	1	2.80	0.94	0.58	1.30	-17232.469	7301.467	21.488
05B		F60-12	1001	Fl	Rh			1.78	2.00	0.75	1.50	-17167.040	7409.866	21.940
05B		F60-12	1002	Fl	Rh			4.05	3.92	0.96	12.00	-17166.434	7409.866	22.026
05B		F60-12	1003	Fl	Rh			3.59	3.70	1.20	13.60	-17166.470	7409.576	22.107
05B	第22図1	F60-12	1004	Fl	Sh			8.27	5.82	2.54	69.50	-17165.232	7410.002	22.071
05B	第22図2	F60-12	1005	UFl	Sh			5.89	3.42	1.31	24.40	-17164.086	7409.263	22.028
05B		F60-12	1006	Fl	An			4.48	4.35	0.88	15.80	-17164.549	7409.179	22.077
06B		F60-92	1004	Ch	Ob			0.52	1.42	0.26	0.20	-17198.350	7410.171	22.652
06B		F60-93	1005	Ch	Ch			1.39	1.01	0.50	0.70	-17199.214	7413.215	22.755
06B	第25図1	F60-93	1006	Co	An			5.42	6.67	2.09	70.00	-17197.424	7412.075	21.740
06B		F60-93	1007	Fl	An			6.12	3.45	1.19	23.40	-17197.391	7412.211	21.757
06B		F60-93	1009	Fl	An			1.58	2.10	0.33	0.90	-17197.005	7413.203	21.628
07B		F60-94	1001	Fl	An			2.23	2.02	0.45	1.70	-17199.860	7419.709	21.805
07B		F60-94	1002	Fl	An			2.37	3.03	0.65	4.60	-17199.540	7419.797	21.774
07B		F60-94	1003	Ch	An			0.49	0.97	0.20	0.10	-17199.595	7419.252	21.762
07B		F60-94	1004	Fl	An			2.62	2.94	0.85	4.50	-17199.292	7419.252	21.761
07B		F60-94	1005	Fl	An			1.94	4.08	1.55	11.60	-17199.149	7419.136	22.071
07B		F60-94	1006	Fl	An			5.50	3.53	2.26	34.40	-17199.121	7418.778	21.825
07B		F60-94	1007	Ch	An			1.00	0.86	0.33	0.30	-17198.791	7419.296	21.663
07B		F60-94	1008	Fl	An			2.63	4.30	0.53	6.50	-17198.879	7419.875	21.815
07B	第26図4	F60-94	1009	Fl	An	安山岩05	2	1.56	3.25	0.56	1.80	-17198.355	7419.384	21.880
07B		F60-94	1010	Ch	An			0.98	0.36	0.30	0.10	-17198.305	7419.108	21.889
07B		F60-94	1011	Ch	An			0.85	1.15	0.34	0.40	-17198.454	7417.642	21.606
07B	第26図4	F60-94	1012	Fl	An	安山岩05	2	3.18	1.86	0.51	2.00	-17197.716	7418.199	22.005
07B		F60-94	1013	Fl	An			2.84	0.87	0.83	1.40	-17197.396	7418.127	21.807
07B	第26図4	F60-94	1014	Ch	An	安山岩05	1	1.33	1.83	0.41	0.60	-17199.121	7418.998	21.909
07B		F60-94	1015	Fl	An			2.24	1.78	0.66	2.60	-17198.388	7419.147	21.690
07B		F60-94	1016	Fl	An			2.12	2.10	0.90	3.50	-17198.179	7419.081	21.880
07B		F60-94	1017	Ch	An			0.85	0.95	0.44	0.50	-17198.223	7419.064	21.696

ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
07B		F60-95	1001	Ch	An			1.08	1.63	0.51	0.70	-17198.581	7420.161	21.639
07B	第24図3	F61-04	1001	Co	An			9.89	5.30	2.35	108.00	-17201.535	7419.869	21.809
07B		F61-04	1002	Ch	An			1.12	2.93	0.41	1.20	-17201.122	7419.588	21.775
07B		F61-04	1003	Ch	An			1.15	0.96	0.48	0.50	-17200.840	7419.467	21.818
07B		F61-04	1004	Fl	An			2.26	2.53	0.42	2.30	-17200.862	7419.285	21.837
07B	第24図1	F61-04	1005	Fl	An			4.96	5.43	1.41	34.40	-17200.840	7419.004	21.833
07B	第24図2	F61-04	1006	Ch	An			2.53	1.05	0.58	1.70	-17200.857	7418.320	21.842
07B		F61-04	1007	Ch	An			1.52	1.42	0.34	0.50	-17200.521	7418.144	21.835
07B		F61-04	1008	Ch	An			1.07	1.55	0.44	0.90	-17200.377	7418.690	21.894
07B	第24図2	F61-04	1009	Fl	An			2.01	2.17	0.61	2.20	-17200.107	7418.811	21.890
07B		F61-04	1010	Ch	An			1.09	1.68	0.15	0.40	-17200.113	7419.125	21.910
07B		F61-04	1011	Ch	An			1.42	1.11	0.30	0.60	-17200.157	7419.671	21.977
07B		F61-04	1012	Fl	An			1.63	2.35	0.65	1.80	-17203.359	7418.739	21.740
07B		F61-04	1013	Fl	An			1.41	2.10	0.45	1.30	-17201.171	7419.853	21.640
07B		F61-04	1014	Fl	An			2.60	3.16	1.41	8.10	-17200.929	7419.142	21.739
07B		F61-04	1015	Ch	An			0.49	1.34	0.17	0.10	-17200.730	7419.730	21.751
07B		F61-04	1016	Gr	An			3.95	2.45	0.70	9.50	-17200.328	7419.257	21.740
07B		F61-04	1017	Fl	An			3.16	3.59	0.57	5.30	-17200.686	7418.480	21.760
07B		F61-05	1001	Ch	An			1.29	2.06	0.70	1.60	-17201.193	7420.084	21.924
07B		F61-05	1002	Fl	An			3.53	2.53	0.85	6.30	-17200.135	7420.503	21.740
08B	第27図2	F61-01	1001	Fl	An	安山岩06	4	3.09	1.31	0.40	1.40	-17203.955	7407.861	21.660
08B	第27図2	F61-01	1002	Ch	An	安山岩06	6	1.99	1.81	0.39	1.10	-17203.866	7407.283	21.616
08B	第27図2	F61-01	1003	Ch	An	安山岩06	3	1.39	2.15	0.60	1.80	-17203.442	7407.850	21.730
08B		F61-01	1004	Ch	Rh			1.62	1.75	0.36	1.00	-17202.500	7406.919	22.088
08B	第27図2	F61-01	1005	Ch	An	安山岩06	3	1.98	1.38	0.75	2.10	-17202.070	7407.922	21.768
08B	第27図2	F61-01	1006	Ch	An	安山岩06	3	0.90	1.77	0.31	0.50	-17203.370	7407.900	21.735
08B	第27図1	F61-01	1007	Fl	An			5.22	6.75	1.17	48.40	-17203.354	7407.955	21.666
08B	第27図2	F61-02	1002	Co	An	安山岩06	7	5.24	6.78	1.68	54.50	-17202.621	7410.404	21.791
08B	第27図2	F61-02	1003	Fl	An	安山岩06	5	2.06	2.43	0.23	1.30	-17202.014	7409.445	21.628
08B	第27図2	F61-02	1004	Fl	An	安山岩06	1	2.51	3.69	0.90	5.90	-17203.111	7409.704	21.730
08B	第27図2	F61-02	1005	Fl	An	安山岩06	2	2.62	2.19	0.69	3.40	-17203.128	7409.401	21.698
08B	第27図1	F61-02	1006	Fl	An			4.86	2.98	0.88	14.40	-17203.596	7409.307	21.754
08B		F61-02	1007	Fl	An			3.48	2.16	1.03	7.00	-17203.547	7408.739	21.776
08B	第27図2	F61-02	1008	Fl	An	安山岩06	6	2.03	2.68	0.79	4.90	-17203.712	7408.623	21.658
08B		F61-02	1009	Ch	An			1.59	2.06	0.47	1.00	-17203.635	7408.772	21.650
08B	第29図4	F61-12	1001	Ch	An	安山岩08	2	1.40	1.38	0.20	0.40	-17204.100	7408.557	21.913
08B		F61-12	1002	Ch	An			0.80	1.45	0.30	0.40	-17204.651	7408.591	21.773
08B	第27図1	F61-12	1003	Ch	An			1.15	1.64	0.48	0.70	-17204.370	7409.098	21.757
08B		F61-12	1004	Ch	An			1.56	1.86	0.39	1.30	-17204.959	7409.357	21.909
08B	第28図3	F61-12	1005	Fl	An	安山岩07	1	2.43	2.41	0.58	3.60	-17204.469	7409.373	22.002
08B		F61-12	1006	Ch	An			1.01	0.89	0.29	0.30	-17204.127	7409.351	21.989
08B		F61-12	1007	Ch	An			1.25	1.97	0.28	0.80	-17204.127	7409.351	21.750
08B	第28図3	F61-12	1008	Fl	An	安山岩07	2	2.49	4.86	1.35	14.00	-17204.811	7409.996	21.647
08B		F61-12	1009	Ch	An			1.21	1.55	0.28	0.40	-17204.265	7409.974	21.583
08B	第29図4	F61-12	1010	Ch	An	安山岩08	1	1.37	1.62	0.41	0.70	-17204.563	7409.324	21.744
08B	第29図4	F61-12	1011	Fl	An	安山岩08	3	4.23	3.64	0.84	10.40	-17204.337	7408.894	21.743
08B	第29図4	F61-12	1012	Fl	An	安山岩08	4	3.36	3.74	0.62	7.50	-17204.524	7409.186	21.649
09B		F61-31	1001	Fl	Ob			2.17	1.41	0.45	1.50	-17213.445	7405.853	21.638
09B		F61-31	1002	Fl	Ch			3.20	1.72	0.49	3.00	-17214.878	7404.706	21.825
09B	第33図1	F61-32	1001	Fl	Cc			6.37	5.58	0.81	18.80	-17214.569	7408.388	21.603
09B		F61-41	1001	Fl	An			2.42	2.36	0.68	3.40	-17217.895	7404.848	21.851
09B	第33図3	F61-41	1002	Fl	An			2.68	1.88	0.71	3.40	-17218.718	7405.002	21.720
09B		F61-41	1003	Fl	An			2.79	2.36	0.59	4.00	-17217.435	7405.954	21.729
09B	第33図3	F61-41	1005	Fl	An			2.58	3.86	0.96	9.50	-17217.479	7405.348	21.659
09B		F61-41	1006	Ch	An			1.06	0.66	0.39	0.20	-17218.016	7404.087	21.570
09B		F61-41	1007	Ch	An			0.45	0.67	0.21	0.10	-17217.255	7406.450	21.585
09B		F61-41	1008	Fl	An			4.66	3.04	0.91	10.20	-17216.876	7407.082	21.630



ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
09B	第33図2	F61-41	1009	Fl	An			2.68	1.44	0.95	3.80	-17216.667	7407.097	21.638
09B		F61-41	1010	Fl	An			2.03	1.76	1.10	4.20	-17217.295	7407.644	21.558
09B		F61-41	1011	Ch	An			0.85	1.27	0.35	0.40	-17216.370	7406.762	21.514
09B		F61-41	1012	Fl	An			2.22	2.50	0.43	2.20	-17216.741	7406.170	21.842
09B	第33図2	F61-41	1013	Fl	An			3.80	1.97	1.21	7.90	-17216.053	7406.755	21.775
09B		F61-41	1014	Fl	An			2.08	2.06	0.41	1.60	-17216.561	7406.950	21.566
10B	第34図1	F61-42	1001	UF1	Ob			1.57	2.50	0.48	1.40	-17219.809	7408.375	22.030
10B		F61-42	1002	Fl	An			3.03	6.71	1.79	19.60	-17219.784	7408.871	21.741
10B	第34図4	F61-42	1003	Fl	Ob			1.07	1.12	0.17	0.30	-17219.846	7409.088	21.866
10B		F61-42	1004	Ch	Ob			1.02	0.82	0.25	0.20	-17219.681	7409.408	21.879
10B		F61-42	1005	Ch	Ob			1.17	0.97	0.49	0.50	-17219.806	7409.036	21.710
10B		F61-42	1006	Ch	Ob			0.61	0.74	0.13	0.10	-17219.850	7409.408	21.684
10B	第34図4	F61-42	1007	Fl	Ob			1.40	1.10	0.27	0.30	-17219.923	7409.356	21.675
10B	第35図7	F61-51	1001	Fl	An	安山岩09	1	2.20	3.90	1.00	8.20	-17220.096	7407.923	21.687
10B	第34図5	F61-51	1002	Fl	An			7.45	5.67	2.67	74.50	-17220.688	7407.166	21.689
10B	第34図6	F61-52	1001	Fl	An			4.88	3.85	1.12	9.00	-17220.199	7408.184	21.639
10B	第34図6	F61-52	1002	Fl	An			5.39	4.20	1.59	23.40	-17220.195	7408.397	21.712
10B	第34図3	F61-52	1003	Fl	Ob			3.05	3.03	1.27	8.10	-17220.247	7408.537	21.693
10B	第34図2	F61-52	1004	Fl	Ob			2.03	1.90	0.69	2.10	-17220.030	7408.900	21.843
10B		F61-52	1005	Ch	Ob			0.77	0.70	0.22	0.10	-17220.111	7409.147	21.721
10B		F61-52	1005	Ch	Ob			0.59	0.41	0.10	0.10	-17220.111	7409.147	21.721
10B		F61-52	1006	Ch	Ob			1.05	0.38	0.21	0.10	-17220.048	7409.276	21.721
10B		F61-52	1007	Ch	An			0.95	1.46	0.38	0.60	-17220.067	7409.562	21.764
10B		F61-52	1008	Ch	Ob			0.84	0.55	0.15	0.10	-17220.199	7409.569	21.759
10B	第36図9	F61-52	1009	Fl	An	安山岩11	2	1.58	1.96	0.52	1.50	-17220.191	7409.716	21.686
10B		F61-52	1010	Ch	Ob			0.49	1.36	0.23	0.20	-17220.298	7409.323	21.751
10B		F61-52	1011	Ch	Ob			1.08	1.51	0.35	0.70	-17220.466	7409.434	21.805
10B	第36図9	F61-52	1012	Fl	An	安山岩11	1	1.41	2.41	0.61	1.70	-17220.434	7409.775	21.750
10B		F61-52	1013	Ch	Ob			1.06	0.29	0.15	0.10	-17220.601	7408.983	21.703
10B		F61-52	1014	Ch	Cc			0.97	1.28	0.11	0.10	-17220.711	7408.605	21.870
10B		F61-52	1015	Ch	Ob			0.42	0.82	0.27	0.10	-17221.254	7408.772	21.840
10B	第36図10	F61-52	1016	Fl	Cc	玉髓03	1	2.31	3.25	0.94	4.70	-17221.199	7409.033	21.715
10B		F61-52	1017	Ch	Ob			0.59	1.50	0.34	0.20	-17221.349	7409.143	21.674
10B	第36図10	F61-52	1018	Fl	Cc	玉髓03	2	2.18	3.33	0.68	2.80	-17221.019	7409.316	22.011
10B		F61-52	1019	Ch	Ob			0.61	0.80	0.27	0.10	-17221.052	7409.702	21.809
10B		F61-52	1020	Fl	Ob			1.06	2.18	0.95	2.00	-17220.769	7409.897	21.605
10B		F61-52	1021	Fl	Ob			1.23	1.45	0.59	0.70	-17220.787	7410.209	21.626
10B		F61-52	1022	Ch	An			0.95	2.20	0.22	0.40	-17222.125	7408.819	21.730
10B		F61-52	1023	Ch	An			1.16	1.77	0.18	0.40	-17222.624	7409.051	21.946
10B	第36図8	F61-52	1024	Fl	An	安山岩10	2	2.49	4.00	1.32	7.80	-17223.051	7409.533	21.730
10B	第36図8	F61-52	1025	Ch	An	安山岩10	1	1.97	1.05	0.40	0.70	-17223.120	7409.658	21.737
10B		F61-52	1026	Fl	Ob			2.00	1.31	0.79	1.30	-17220.173	7408.897	21.658
10B		F61-52	1027	Ch	An			1.75	0.71	0.75	0.80	-17220.463	7409.137	21.618
10B	第35図7	F61-52	1028	Co	An	安山岩09	2	8.30	5.11	2.15	86.10	-17220.739	7408.679	21.651
10B		F61-52	1029	Ch	Ob			1.41	1.00	0.48	0.40	-17220.350	7409.528	21.685
10B		F61-52	1030	Ch	Ob			0.54	1.05	0.14	0.10	-17220.450	7409.578	21.667
10B		F61-52	1031	Ch	Ob			1.36	0.81	0.21	0.20	-17220.787	7409.386	21.567
10B		F61-52	1032	Ch	Ob			0.66	0.56	0.08	0.10	-17220.155	7409.419	21.645
10B	第34図2	F61-52	1033	Ch	Ob			1.74	1.23	0.27	0.30	-17220.400	7409.503	21.638
10B		F61-52	1034	Ch	Ob			0.42	0.70	0.31	0.10	-17220.408	7409.423	21.690
10B		F61-52	1035	Ch	Ob			2.03	0.80	0.17	0.30	-17220.411	7409.285	21.675
10B		F61-52	1036	Ch	Ob			0.93	0.79	0.16	0.10	-17220.405	7408.993	21.600
10B		F61-52	1037	Ch	Ob			0.75	0.69	0.31	0.10	-17220.458	7409.390	21.661
10B	第34図3	F61-52	1038	Fl	Ob			1.68	1.94	0.79	2.60	-17220.455	7409.071	21.576
10B		F61-52	1039	Ch	Ob			0.43	0.53	0.10	0.10	-17220.527	7409.520	21.543
11B		F61-62	1001	Fl	Sa			2.08	3.28	0.51	2.90	-17225.693	7410.624	21.690
11B	第37図2	F61-62	1002	Ax	Ho			8.36	6.43	1.52	71.50	-17225.359	7411.602	21.700

ブロック	挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	X座標	Y座標	標高 (m)
11B	第38図3	F61-62	1003	Fl	An	安山岩12	3	3.99	3.33	1.62	20.80	-17225.965	7409.728	21.700
11B	第37図1	F61-62	1004	Ax	Ho			12.40	3.97	2.18	125.30	-17225.642	7408.842	21.592
11B		F61-62	1005	Fl	Ssh			4.87	3.43	1.64	21.40	-17226.443	7411.058	21.633
11B		F61-62	1006	Fl	An			2.30	3.26	1.29	6.50	-17226.134	7410.077	21.917
11B	第39図4	F61-62	1007	Fl	An	安山岩13	1	2.54	3.37	1.05	8.00	-17226.123	7409.849	21.754
11B	第38図3	F61-62	1008	Fl	An	安山岩12	5	2.30	3.33	1.10	6.20	-17226.347	7409.941	21.675
11B		F61-62	1009	Fl	An			1.49	1.86	0.54	1.50	-17226.560	7409.860	21.584
11B	第38図3	F61-62	1010	Fl	An	安山岩12	3	3.00	4.43	1.42	19.60	-17227.255	7410.209	21.582
11B		F61-62	1011	Ch	An			0.79	1.85	0.29	0.30	-17227.402	7410.499	21.514
11B	第37図3	F61-62	1012	Ch	An	安山岩12	2	1.60	1.84	0.46	1.00	-17227.079	7409.283	21.570
11B		F61-62	1013	Fl	An			2.72	1.74	0.62	2.10	-17226.825	7409.371	21.461
11B	第38図3	F61-62	1014	Fl	An	安山岩12	4	1.36	1.91	0.72	1.10	-17226.108	7409.154	21.738
11B	第38図3	F61-62	1015	Co	An	安山岩12	6	4.33	5.20	2.09	56.00	-17226.939	7408.695	21.568
11B	第37図3	F61-62	1016	Ch	An	安山岩12	1	1.11	1.89	0.40	0.80	-17227.174	7410.216	21.487
11B	第39図4	F61-62	1017	Fl	An	安山岩13	2	2.23	2.13	0.73	3.20	-17226.299	7409.863	21.646
11B		F61-62	1018	Ch	An			1.92	1.27	0.70	1.20	-	-	-
B外		D60-85	0001	Fl	An			3.14	2.20	0.45	1.60	-	-	-
B外		F60-93	1008	Ch	Ob			0.92	1.33	0.31	0.40	-	-	-
B外		F61-02	1010	Ch	An			1.49	0.77	0.35	0.40	-	-	-
B外		D58-82	0043	Fl	Ch			3.11	1.08	0.44	1.30	-	-	-
B外		E61-59	1001	Fl	Rh			3.23	3.75	0.95	8.10	-17221.978	7397.953	21.677
B外		E61-59	1002	Fl	Rh			4.00	3.70	0.95	11.60	-17222.596	7398.626	21.791
B外		E61-69	1002	Fl	Rh			3.24	3.97	0.74	9.40	-17224.763	7397.193	21.659
B外	第40図6	C58-37	1001	Fl	Sh			5.92	2.64	0.79	12.00	-	-	-
B外	第40図5	C58-78	0003	UF1	Sh			4.00	2.20	0.40	3.30	-	-	-
B外		C58-87	0036	Fl	An			2.99	2.70	0.69	4.30	-	-	-
B外	第40図7	C58-98	0014	Fl	Sh			4.42	4.75	0.66	10.40	-	-	-
B外		C58-98	0032	Fl	Sh			1.91	2.84	0.40	2.10	-	-	-
B外		C61-15	0001	Fl	Ch			1.66	2.03	0.25	1.00	-	-	-
B外		C61-15	0002	Fl	Ch			1.42	2.89	0.40	1.30	-	-	-
B外		C61-15	0003	Fl	Tu			1.82	1.66	0.31	0.60	-	-	-
B外	第40図4	C61-15	0004	RF1	Ch			1.48	1.21	0.23	0.50	-	-	-
B外		C61-15	0005	Fl	Tu			1.15	1.87	0.41	0.80	-	-	-
B外		C61-15	0006	Ch	Tu			0.76	1.38	0.38	0.50	-	-	-
B外		C62-05	1001	Fl	Cc			1.70	1.89	0.55	1.60	-17241.805	7302.049	21.686
B外	第40図1		504-11	Ss	Sh			8.01	5.04	1.04	30.40	-	-	-
B外		E60-66	1001	Ch	An			1.01	1.48	0.21	0.30	-17186.107	7385.879	22.674
B外	第40図3	E60-88	1001	RF1	Sh			1.94	1.32	0.50	1.10	-17194.455	7393.325	22.488
B外	第40図2	E61-23	0001②	Ss	Rh			7.43	3.76	0.71	20.20	-	-	-
B外		F60-62	1001	Ch	Ob			1.07	1.52	0.57	0.40	-17187.716	7411.216	22.594
B外		F60-72	1002	Fl	Rh			2.68	1.71	1.39	5.70	-17188.630	7411.771	22.720
B外		F60-73	1001	Fl	Cc			3.29	2.00	0.70	3.20	-17189.203	7413.864	22.668
B外		F60-73	1003	Ch	Sl			1.32	0.90	0.24	0.30	-17188.067	7414.360	22.605
B外		F60-81	1001	RF1	Ob			1.27	2.45	0.77	2.10	-17193.781	7404.611	22.548
B外		F61-03	1003	Fl	An			2.76	3.83	0.96	6.00	-	-	-
B外		F61-03	1004	Fl	An			4.16	4.44	1.08	24.00	-	-	-
B外		F61-03	1006	Ch	An			1.29	2.19	0.39	0.90	-	-	-
B外		F61-21	1001	Fl	An			2.58	0.88	0.38	0.80	-	-	-
B外		F61-21	1002	Fl	An			3.98	5.54	1.15	24.40	-	-	-
B外		F61-44	1001	Fl	An			4.99	4.49	2.06	40.60	-17218.038	7416.516	21.736
B外		F61-50	1001	Fl	Ob			1.61	1.55	0.61	1.10	-	-	-
B外		F61-50	1002	Fl	An			2.69	1.88	0.70	3.90	-	-	-
B外		F61-50	1003	Fl	Ob			3.29	3.34	0.79	4.00	-	-	-
B外		F61-50	1004	Fl	Ob			4.22	3.32	1.99	21.00	-	-	-
B外		F61-56	0002	RF1	Sh			7.16	3.02	1.33	23.20	-	-	-
B外		D59-00	0002	Fl	An			3.44	3.22	0.84	7.70	-	-	-

## 第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は竪穴住居跡、炉穴、陥穴、土坑がある。住居跡の分布密度は散漫であり、調査区中央部（舌状台地の基部付近）にまとまる傾向である。

### 1 竪穴住居跡

SI-440（第41・43図、図版12・28）

調査区の中央付近、E61-99～E62-09グリッドに跨って位置する。住居跡の北側の一部は奈良・平安時代の439号住居跡と重複している。平面形は隅丸方形で、長軸3.7m、短軸3.7mである。床面はほぼ平坦だが踏み固めと思しい硬化面は確認されていない。確認面からの深さは16～30cmである。炉は地床炉で北側に偏在している。平面形は形の崩れた楕円形で、長径85cm、深さ13cmである。底面は良く焼けてロームが焼土化している。柱穴は内寄りに3基、壁際に22基が検出されている。内寄りの3基のうち、炉と対面する1基は長径50cm、深さ17cm、その中間の2基は長径30～45cm、深さ60～65cmである。壁際に位置する柱穴はいずれも径20cm前後、深さ10cm前後の小規模なもので、南側から西側の柱穴間の間隔が開いている。遺物は土器片が出土した。縄文時代早期末から前期後半のものが混在しているが、前期前半黒浜式に相当するものが最も多いことから、住居跡の時期も黒浜式期と思われる。

遺物 1は波状口縁の深鉢で、LRの縄文を器面全体に施している。2は平縁の口縁部で、幅広の無文帯をおいてRLの縄文を施している。3はRL、4はLの縄文を施す胴部片である。5は口縁上端に円形刺突が加えられる。6は底部で、RLの縄文が全面に施される。

SI-457（第41・43図、図版12）

調査区の中央付近、F63-01～F63-12グリッドに跨って位置する。西側の一部は調査区外に延び、かつ南側は炉穴469号と470号が存在するため全体を検出していない。残存部の平面形はやや不定形であるが全体では隅丸方形になると考えられる。規模は長軸4.3m、短軸4.2mである。床面は全体に軟質で、わずかに起伏が認められる。確認面からの深さは約18cm～12cm前後と浅い。炉は地床炉で、中央からやや西に偏在して設けられている。平面形は楕円形で、長径67cm、深さ10cmである。底面は良く焼けて、下層に焼土が堆積していた。炉の南側に廃棄された貝がわずかに堆積していた。柱穴と思われるピットは11基検出された。径22～38cm、深さ7cm～78cmと一様でなく、配置も住居の平面形とやや異なり不規則である。遺物は土器片と石鏃等が出土した。縄文時代早期後半と前期前半のものが混在しているが、前期前半黒浜式に相当するものが最も多いことから、住居跡の時期も黒浜式期と思われる。

遺物 1は口縁部で、口唇部直下からLRの縄文が施される。2～4は胴部である。2はLR、3はL、4はLの縄文と上端にわずかだが沈線を加えている。5、6は口縁部で、Lの縄文を地文として口縁直下に沈線が加えられる。8～10は沈線文が主体のもので、8は斜格子状の沈線文となっている。12、13は底部で、12はR、13はRLの縄文を全面に施している。以上は黒浜式である。なお、7は内外面に貝殻条痕文を施す早期後半のものである。

SI-463（第42・44図、図版13・28）

調査区の中央付近、E61-13グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区外に延びるため全体を検出していない。また、掘り込みが浅く壁面や床面の遺存状況が悪いため、平面形も不明瞭であり遺物の出土した範囲を住居跡として捉えた。その範囲は5.6m×2.8mで、確認面からの深さは10cm前後である。柱穴と思われるピットが6基、土坑が3基検出されている。ピットは径29～43cm、深さ0.14～1.09mと一様でな

い。土抗3基のうち2基は中央付近に掘り込まれ、うち1基は調査区外にかかるため全体の形状が不明である。北東側の1基は平面形が不整楕円形を呈する。長径1.53m、深さ0.31mである。この土抗内及び上面付近からは土器片、剥片類がまとまって出土した。土器片は縄文時代早期後半の条痕文系のものが多いことから、住居跡の時期も早期後半と思われる。

遺物 1は深鉢である。貝殻条痕文を地文として、外反する口縁部の上端に押捺を入れ、その下位に貝殻腹縁を縦に押しつけ、帯状の文様に仕上げている。2は丸みのある波状口縁で、内外面に貝殻条痕文を施している。3は内外面共に無文で、口唇部上端に刻み目を加える。

SI-464 (第42・44図、図版13・28)

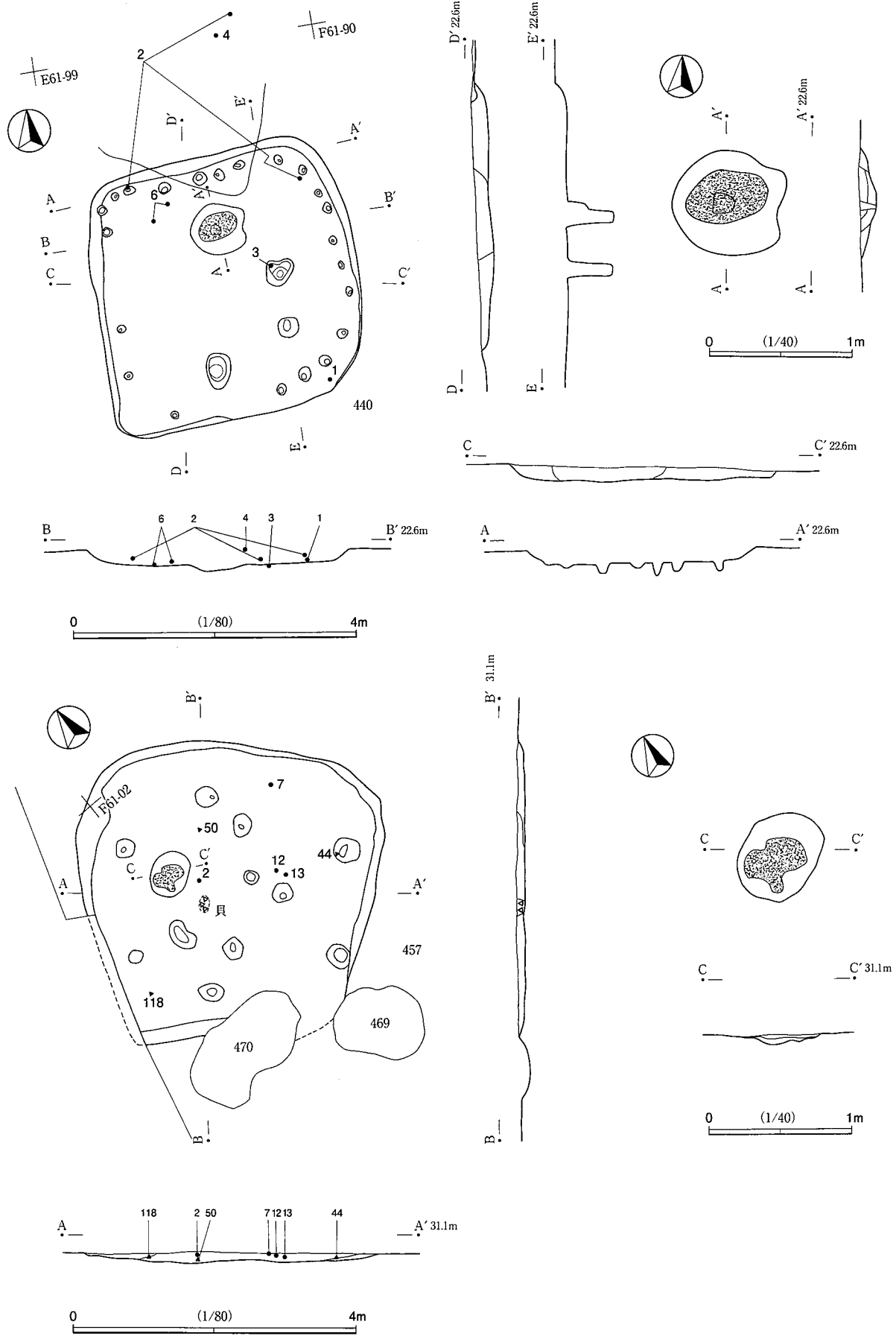
調査区の中央付近、E60-95～E61-06グリッドに跨って位置する。平面形は長方形を基本とするが、南東隅が矩形を呈している。住居の規模は長辺5.38m、短辺4.12mで、確認面からの深さは15cm～20cmである。床面は全体に軟質で、硬化面はない。炉は長軸方向に沿って連なるように2基の地床炉が設けられている。住居の中央寄りに位置する炉1は長軸長74cm、深さ10cmの楕円形に掘り窪められる。全体に火熱を受け、底面に焼土が5cm程堆積していた。北寄りの炉2は径40cmの円形で、掘り込みが5cmと浅い。焼土の痕跡がごく僅かに観察された。柱穴と思われるピットは7基検出された。径30cm～55cm、深さ17cm～76cmと一様でないが、各辺の方向に沿った配置状況である。遺物は住居内と周辺グリッドから土器片及び石器が比較的多く出土し、土器片の一部はグリッド出土の土器片と接合している。グリッド出土石器も本住居跡と関連性が高いと思われる。土器片は前期中葉の黒浜式が主体となるため、住居の時期も黒浜式期と思われる。

遺物 1～4は口縁部である。文様はいずれも縄文のみであり、1・3がRL、4がLR、2がLである。5～8は胴部片で、これらも縄文のみが施される。5はLの縄文で、結節が認められる。6はL、7は不明瞭だがLRとRLの羽状縄文を構成すると思われる。8はLの縄文で下端に2条の沈線が加えられる。9は平底の底部で、端部にわずかだがLの縄文が見られる。

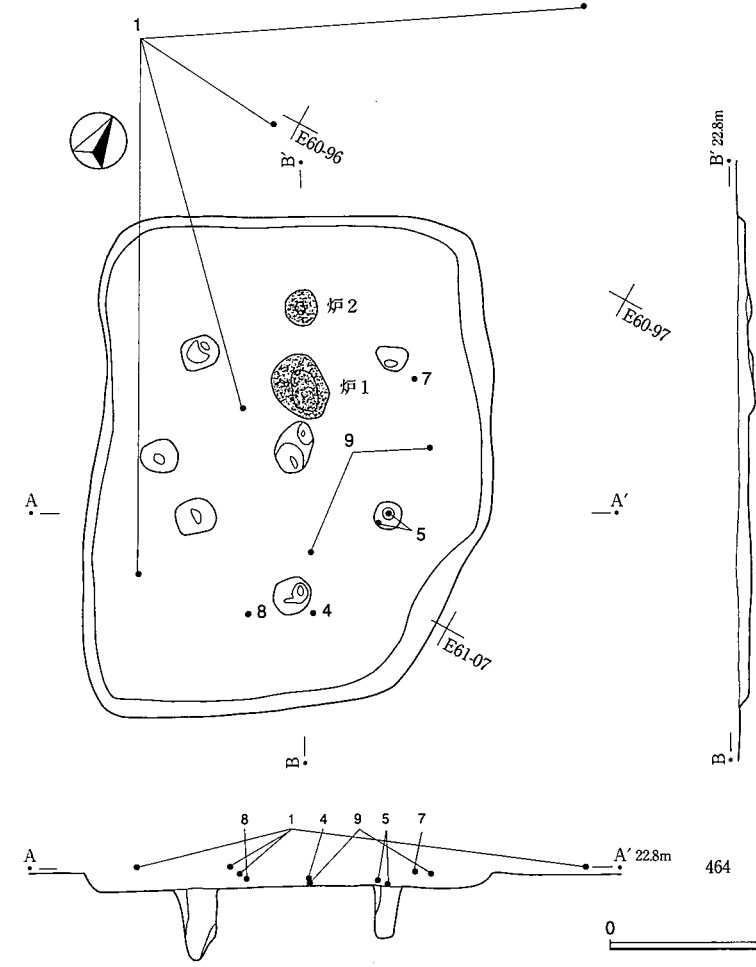
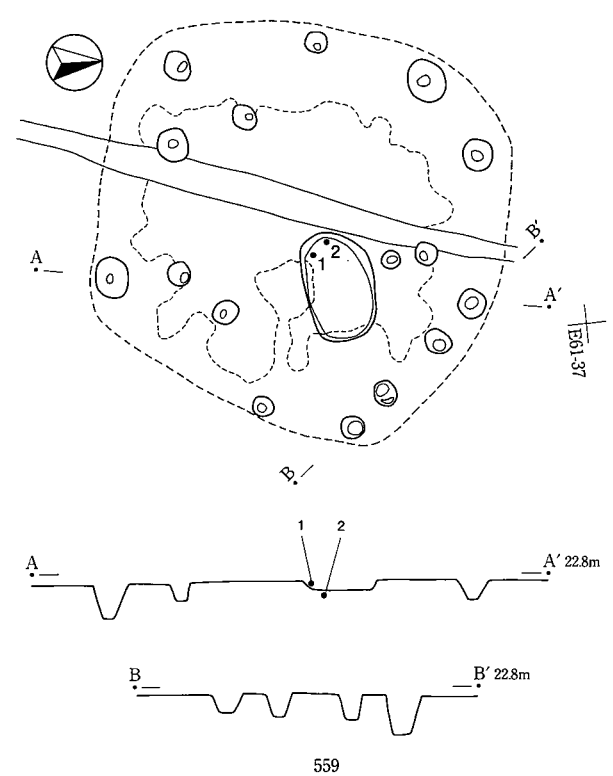
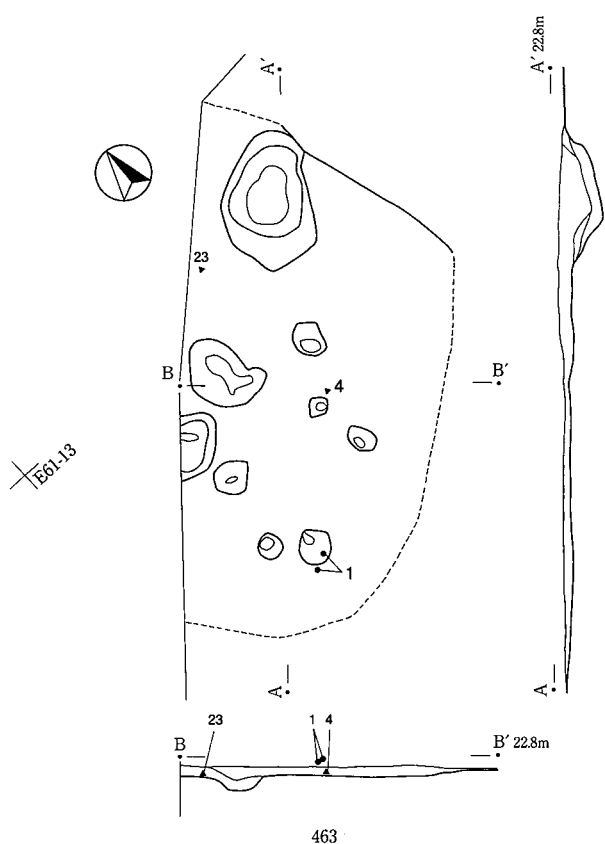
SI-559 (第42・44図、図版13・28)

調査区の中央付近、E61-36～E61-46グリッドに跨って位置する。壁の掘り込みは確認されず、床面と思われる硬化面と柱穴と思われるピット16基及び土抗1基を検出した。硬化面はピット列に囲まれた内側に広がっており、ピットの配置と硬化面の広がりから住居跡であると判断した。想定される住居の平面形と規模は、一辺の長さが4m程度の方形に近い平面形になると思われる。ピットは径25～50cm、深さ15cm～64cmと一様ではないが、基本的には住居の壁面に沿って配置されたと思われる。土抗は硬化面の下層から検出された。長軸長1.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは13cmである。遺物は11基のピットと土抗の覆土中から土器片が出土した。ピット内出土土器と土抗内出土土器は共に縄文時代早期後半に相当するため、住居の時期も早期後半と思われる。

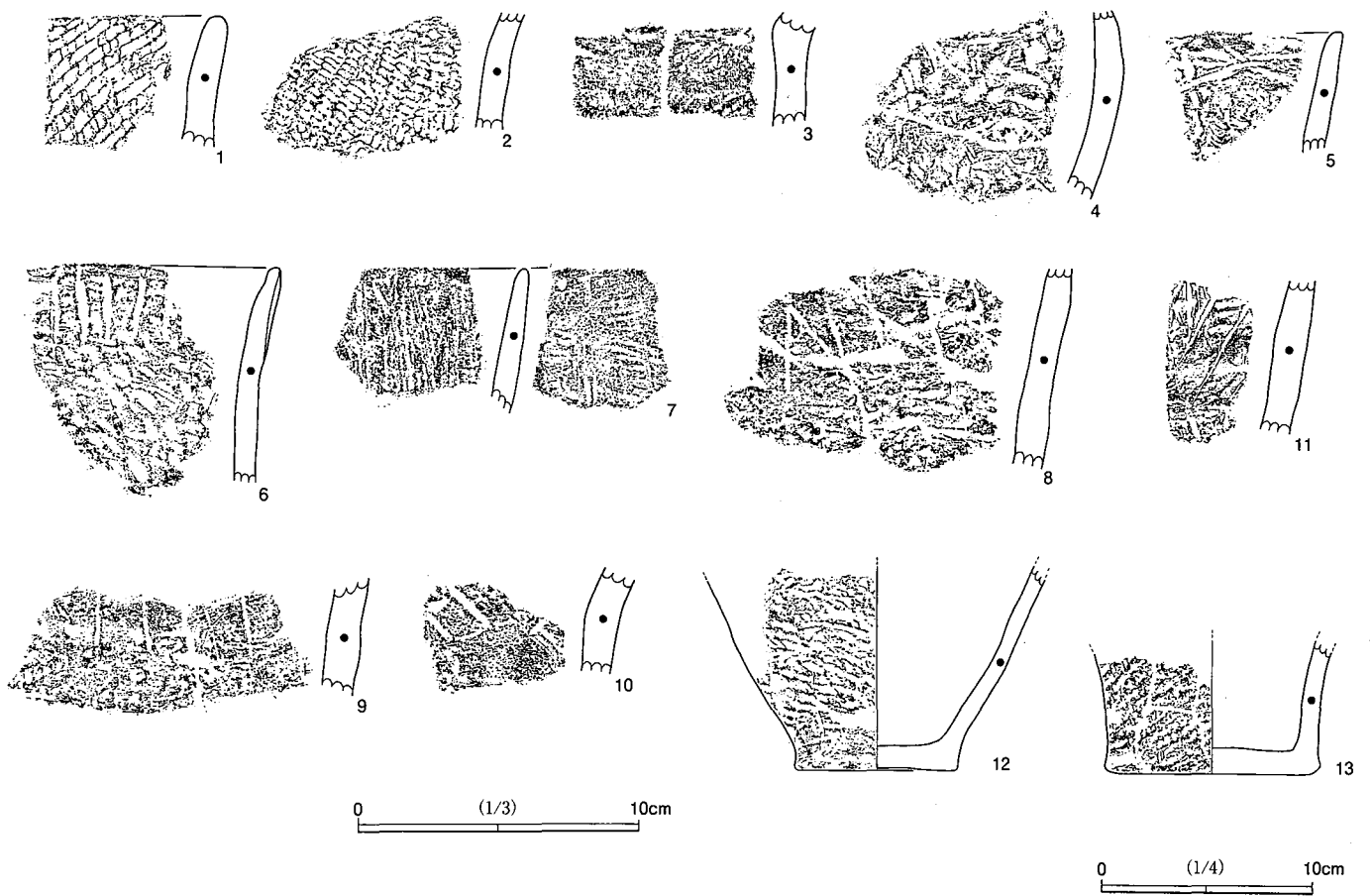
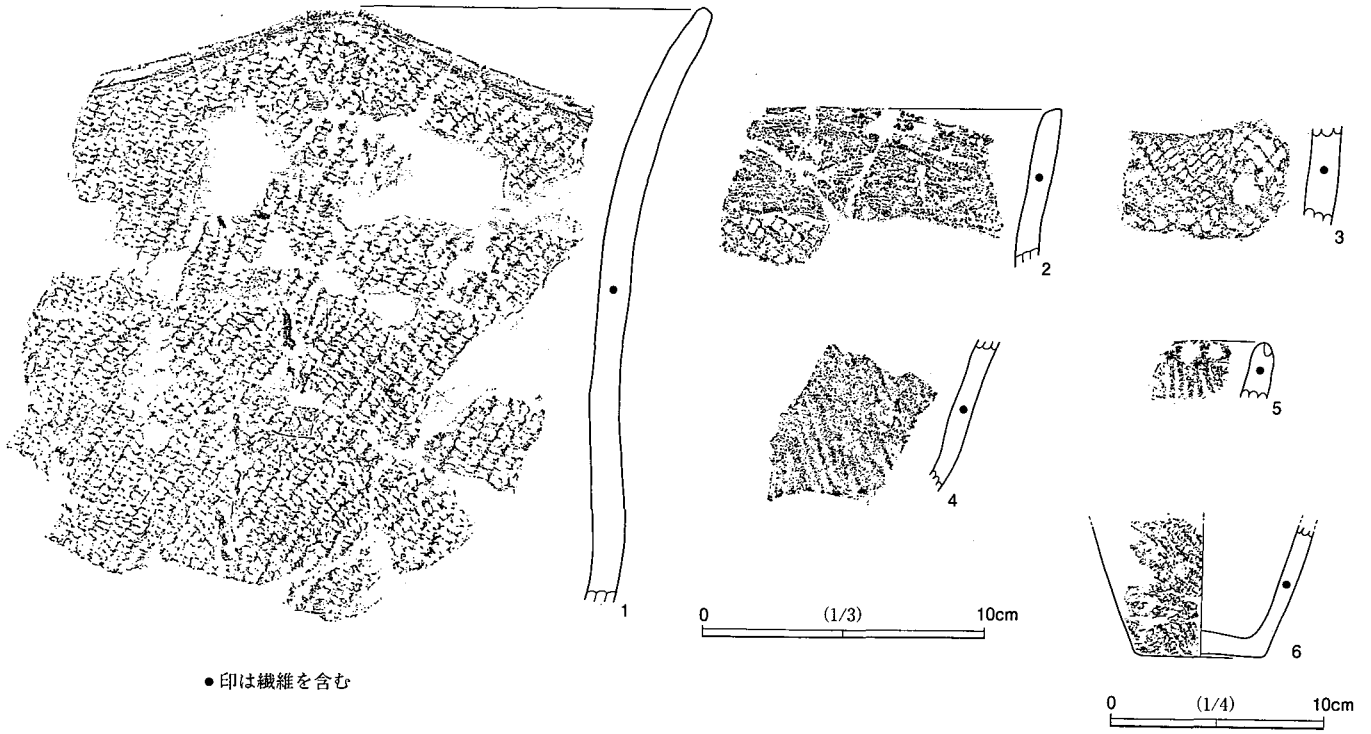
遺物 1は内外面に縦方向の貝殻条痕文が施される。2の口縁部は内外面とも無文である。3はわずかに弧状の沈線文が認められる。両者とも内面は丁寧にナデが施される。



第41图 SI-440·457

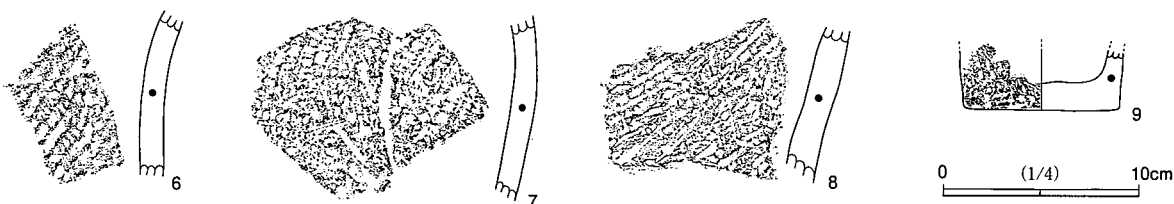
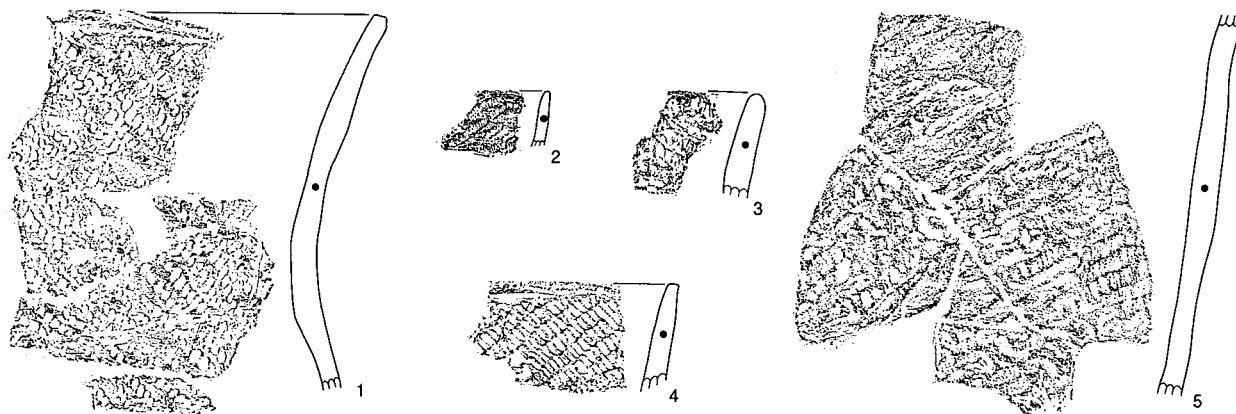


第42图 SI-463·464·559

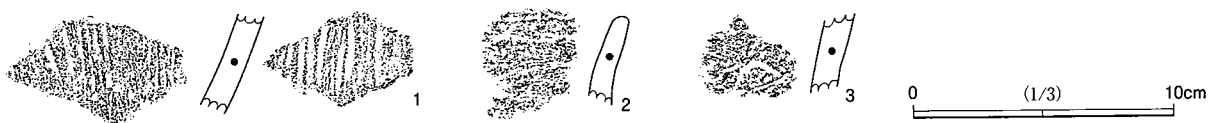


第43図 竪穴住居跡出土土器(1)





0 (1/4) 10cm



0 (1/3) 10cm

第44图 竖穴住居跡出土土器(2)

## 2 炉穴

### SK-294 (第45・52図、図版14・29)

F61-70グリッドに位置する。遺構の大半を溝285号に切られているため、全体を検出することはできなかった。検出範囲での規模は長軸2.24m、短軸0.72mで、長軸方向を東～西方向に向けて掘り込まれている。確認面からの深さは15～33cmで東から西に向かって深くなっている。火床部は西側にあり、周囲より一段深く掘り窪めている。火床面の範囲は62cm×36cmである。覆土下層には焼土を多く含む黄褐色土が堆積していたが、純粋な焼土の堆積は認められなかった。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が少量出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 いずれも胴部の破片で、胎土に繊維を含む。1、2の文様は細隆起線による区画状文と集合沈線で構成され、内面に貝殻条痕文が施される。野島式に比定される。3は外面に貝殻条痕文を施し、内面は無文である。

### SK-298 (第45図、図版14)

C53-37～C53-48グリッドに跨って位置する。一部に木根による攪乱を受けていたが遺存状況は概ね良好であった。平面形は楕円形を呈し、長軸1.62m、短軸0.94mである。長軸方向を北～南方向に向けて掘り込まれており、底面全体に起伏が認められる。確認面からの深さは15～32cmである。火床部は北側にあり、50cm×47cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土、黄褐色土が主体である。遺物は出土していないが、周辺で早期後半の条痕文系土器が出土しているため、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

### SK-300 (第45・52図、図版14・29)

C58-88グリッドに位置し、中世の134号及び136号柱穴と重複する。これにより遺構の大半は失われており火床部の一部と焼土及び土器片を検出したに過ぎない。火床部の残存範囲は16cm×23cmで、わずかに窪む程度であった。遺物は火床部の南東側から土器片がまとまって出土した。いずれも早期後半の条痕文系土器であるため、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1、2は口縁部である。内外面に貝殻条痕文を施すが、1では主に横方向、2では縦方向となっている。3～8は胴部の破片で、内外面の全体に貝殻条痕文を施している。

### SK-323 (第45・52図、図版14・29)

F61-61グリッドに位置する。平面形は細長い楕円形を呈し、長軸2.41m、短軸1.17mである。長軸方向を北西～南東方向に向けて掘り込み、火床部を南東側に設けている。底面は北西から南東(火床部の方向)に向かって徐々に傾斜し、火床部分で平坦面を形成している。確認面からの深さは24cm～52cmである。火床部は22cm×24cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土、暗黄褐色土が主体である。遺物は早期後半の条痕文系土器の小破片と礫が出土している。遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1は胴部の破片で、内外面を縦方向の条痕で施文している。

### SK-324 (第45・52図、図版14・29)

F61-52～53グリッドに跨って位置し、中世の285A号溝と重複する。これにより遺構の大半は失われており、火床部と掘り込みの一部を検出したに過ぎない。確認面からの深さは51cmである。火床部は径68cm×67cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土、黄褐色土が主体である。遺物は早

期後半の条痕文系土器の小破片が出土しており、遺構もこの時期に相当すると思われる。

SK-360 (第46図、図版14)

D60-78グリッドに位置し、358号住居跡の南東側に隣接する。火床部を南西側と北東側の2カ所に設けているため、検出当初は南西側を360号、北東側を364号と呼称して調査を進めたが、土層断面の観察では両者の切り合い関係が認められなかったため、1基の炉穴と判断した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.46m、短軸1.09mである。長軸方向を北東～南西方向に向けて掘り込まれている。北東側の火床部は25cm×43cm、南西側は25cm×35cmの範囲が焼けて赤化していた。確認面からの深さは13cm～19cmである。覆土は焼土粒を含む褐色土、黄褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-361 (第46・52図、図版14・29)

D60-77～87グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.36m、短軸0.78mである。長軸方向を北東～南東方向に向けて掘り込み、火床部は南東側に設けている。底面は北西から南東(火床部の方向)に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは4cm～19cmである。火床部は54cm×62cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む褐色土が主体である。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。遺物 1は直線的に開口縁部で、内外面に貝殻条痕文が施される。外面の条痕は横～斜方向である。2は胴部で、縦方向の条痕が内外面に施される。

SK-366 (第46図)

D60-85～86グリッドに跨って位置する。遺構の西側部分は攪乱を受けて損壊しているため、全体の状況は不明である。残存する火床部の位置からみると、本来の長軸方向は西～東に向いていたと推定される。火床部は60cm×70cmの範囲が焼けて赤化し、焼土が約10cm堆積していた。確認面からの深さは13cmである。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-367B (第46図、図版14)

D60-57グリッドに位置し、竪穴住居SI-367Aと重複する。全体の約1/2が住居側にかかっているが、竪穴住居跡の掘り込みが浅いため、かろうじて火床部が住居の床面下に残存していた。残存部の平面形は楕円形を呈し、長軸0.88m、短軸0.58mである。長軸方向を北～南方向に向けて掘り込み、火床部は南側に設けている。確認面からの深さは5cm～8cmである。火床部は40cm×52cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-369 (第46図、図版14)

D60-39グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形を呈し、長軸1.23m、短軸0.96mである。長軸方向を西～東方向に向けて掘り込んでいるが、足場施設を伴うような炉穴ではない。火床面は土抗西側と中央部の上下2層に分かれて存在する焼土層で、西側焼土層は底面から10cm程上位で検出され、中央部焼土層は底面で検出されている。このことから本跡では新旧2回の活動が行われたと考えられる。なお、被熱範囲は明瞭ではない。確認面からの深さは中央部で30cmである。覆土は焼土粒を含む黒褐色土、赤褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-422 (第47・52図、図版14・29)

D58-30グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸0.96mである。長軸方向を南西～北東方向に向けて掘り込み、火床部は北東側に設けている。底面は起伏があり火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは8cm～14cmである。火床部は37cm×45cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土はローム粒、焼土粒を含む暗黄褐色土が主体である。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が少量出土している。遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1は胴部片で、内外面に貝殻条痕文が施される。内面の条痕は浅く、まばらである。

SK-423 (第47図)

D58-40グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.67m、短軸0.57mである。底面はわずかに起伏があり、確認面からの深さは5cm～9cmである。火床部は明確ではなかったが30cm×35cmの範囲で焼土が集中していた。覆土は焼土粒、ローム粒を含む暗黄褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-424 (第47図、図版14)

D58-40グリッド、SK-423の南東約5mの距離に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.92m、短軸0.77mである。長軸方向を北東～南西方向に向けて掘り込み、火床部を中央からやや北東側に設けている。底面はわずかに起伏があり、火床部分で平坦となっている。確認面からの深さは8cm～11cmである。火床部は48cm×67cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒、ローム粒を含む暗黄褐色土である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-431 (第47・52図、図版15・29)

E60-66グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.72m、短軸1.03mである。長軸方向をほぼ北～南方向に向けて掘り込み、火床部は北側に設けている。底面は南から北に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは10cm～31cmである。火床部は48cm×67cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む黒褐色土、暗褐色土が主体で、底面に焼土が厚く堆積していた。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器、前期中葉の黒浜式土器が出土しているが、遺構の時期は早期後半に相当すると思われる。

遺物 1は胴部片である。内面の条痕は顕著であるが、外面は不明瞭である。

SK-432 (第47図、図版15)

E60-77～87グリッドに跨って位置する。北側にはSK-433、434、西側にSK-435の3基の炉穴が近接している。平面形は不整楕円形を呈し、長軸2.31m、短軸1.39mである。長軸方向を北～南方向に向けて掘り込み、火床部は南側に設けている。底面は火床部で最も深く窪み、上端に向かって緩やかな傾斜となる。確認面からの深さは38cmである。火床部は67cm×78cmの範囲が焼けて赤化し、底面に焼土が堆積していた。覆土は焼土粒を含む黒褐色土、暗褐色土が主体である。遺物は土器片少量が出土している。いずれも早期後半の条痕文系土器であるが細片のため図示できなかった。遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

SK-433 (第48・52・53図、図版15・29)

E60-77～78グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸2.22m、短軸1.25mである。長軸方向を南西～北東方向に向けて掘り込み、火床部は北東側に設けている。底面はから（火床部の方

向)に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは22cmである。火床部は不明瞭だが0.77m×1.07mの範囲に焼土が堆積していた。覆土は焼土粒を含む黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土が主体である。遺物は焼土中及び覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土している。遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1、2、4はともに胴部片である。内外面に貝殻条痕文が施されるが、内面は浅く不明瞭である。3は口縁部で、直線的に開く器形となる。外面の貝殻条痕文は口唇部を横、その下位を縦に施文している。  
SK-434 (第47図、図版15)

E60-77~78グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.57m、短軸0.98mである。長軸方向を南西~北東方向に向けて掘り込み、火床部は北東側に設けている。底面は全体に起伏があり、火床部分で深く窪んでいる。確認面からの深さは21cmである。火床部は37cm×48cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-435 (第48図、図版15)

E60-76~77グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸2.33m、短軸1.67mである。長軸方向を北東~南西方向に向けて掘り込み、火床部は中央と南側に2か所設けている。底面は東から西に向かって徐々に傾斜している。確認面からの深さは5cm~22cmである。2か所の火床部は、35cm×66cmと37cm×47cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む黒褐色土、暗褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-458 (第48・53図、図版15・29)

F60-83グリッドに位置する。遺構の東側は溝285Aと重複するが、全体的な遺存状況は比較的良い。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.95m、短軸1.17mである。長軸方向をほぼ北~南方向に向けて掘り込み、火床部は南側に設けている。底面は北から南に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは45cm~53cmである。火床部は50cm×69cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む褐色土が主体である。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土している。遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1・2は口縁部、3・4は胴部片で内外面に貝殻条痕文が施されている。

SK-461A・B (第48・53図、図版29)

E61-22グリッドに位置する。2基の炉穴が繋がって北側と南側に存在することから、北側をA、南側をBとした。全体の平面形は不整楕円形の2基が繋がって「く」の字状を呈している。Aは長軸2.18m、短軸1.25m、長軸方向を南西~北東方向に向けて掘り込み、火床部は北東側に設けている。底面は南西から北東に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。火床部は50cm×69cmの範囲が焼けて赤化していた。確認面からの深さは7cm~20cmである。Bは長軸1.10m、短軸1.03mである。長軸方向を南東~北西方向に向けて掘り込み、火床部は北西側に設けている。Bの火床部は39cm×55cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土の状況からAが古く、Bが新しいことが判明したがそれほどの時間を置かず利用しているものと思われる。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器と石鏃が出土している。遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1は内外面に貝殻条痕文が施される。

SK-466A～D（第49・53図、図版15・29）

E61-99～F62-19グリッドに跨って位置する。4基の炉穴が隣接する一群で、それぞれをA～Dと呼称した。このうちCは中世の遺構と重複するため全体の状況が不明である。Aの平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸1.42mである。長軸方向を北東～南西方向に向けて掘り込み、火床部を中央からやや北東側に設けている。火床部の範囲は57cm×57cm、確認面からの深さは7cm～24cmである。

Bの平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.10m、短軸1.03mである。長軸方向を南東～北西方向に向けて掘り込み、火床部は北西側に設けている。火床部は37cm×41cmの範囲が焼けて赤化していた。確認面からの深さは22cmである。

Cは全体の状況が不明である。検出範囲の規模は0.62m×0.45m、確認面からの深さは10cmである。覆土中に焼土粒が多く認められたが、火床部は検出されなかった。

Dの平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.54m、短軸1.12mである。長軸方向は南西～北東に向けて掘り込み、全体にすり鉢状を呈している。火床部は0.73m×1.10mの範囲が被熱して赤化していた。一部が木根により攪乱を受けて確認面からの深さは25cmである。遺物はA、B、Dの覆土中からそれぞれ早期後半の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。なお、炉穴Dから出土した土器は細片のため図示できなかった。

遺物 1は炉穴Aから出土した口縁部で、口唇部を横方向にナデ、その下に貝殻条痕文を施している。内面は無文である。2・3は炉穴Bから出土した。何れも内外面に貝殻条痕文を施すが、2の外面は条痕が浅い。

SK-467（第49図、図版15）

E61-32グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸2.01m、短軸1.20mである。長軸方向を北～南方向に向けて掘り込み、火床部を北側に設けている。底面は南から北に向かって徐々に傾斜し、火床部分で窪んでいる。確認面からの深さは5cm～20cmである。火床部は28cm×36cm範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体で、南側にも焼土が堆積していた。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

SK-469（第49・53図、図版29）

F61-12グリッドに位置し、北側の一部はSI457号跡と重複している。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.20m、短軸1.19mである。長軸方向を南東～北西方向に向けて掘り込み、火床部は北西側に設けている。底面は南西から北西に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは5cm～16cmである。火床部は50cm×53cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は覆土中から早期末の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1・2とも胴部の破片で、内外面に貝殻条痕文を施している。

SK-470（第50図）

F61-01～12グリッドに跨って位置し、SI-457号跡と重複している。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.82m、短軸1.10mである。長軸方向を東～西方向に向けて掘り込み、火床部は東側に設けている。底面は全体に緩やかな起伏があり、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは11cm～14cmである。火床部は39cm×50cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土が主体で、西側底面

にも焼土が堆積していた。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

#### SK-474 (第50図、図版15)

F61-32~33グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.21m、短軸0.94mである。長軸方向を西~東方向に向けて掘り込み、底面はほぼ平坦となっている。火床部は不明瞭であった。確認面からの深さは17cmである。覆土は焼土粒を含む赤褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

#### SK-475B (第50・53・54図、図版15・29)

E61-23~24グリッドに跨って位置する。長軸方向が異なる2基の炉穴が重複しており、これを一群として遺構番号を付した。また、北側には奈良・平安時代の土坑SK-475A号跡が重複しているため、全体の形状は不明である。なお、ここでは便宜的に西側の炉穴を①、東側を②として説明する。

①は検出された範囲での規模が長軸2.10m、短軸0.89mである。長軸方向を北東~南西方向に向けて掘り込み、火床部は北東側に設けている。底面は南西から北東に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは24cm~37cmである。火床部は51cm×69cmの範囲が赤化していた。

②は検出された範囲での規模が長軸2.25m、短軸1.15mで、長軸方向を西~東方向に向けて掘り込み、火床部は東側に設けている。底面は緩やかな起伏があり、火床部分でわずかに窪んでいる。確認面からの深さは19cm~25cmである。火床部は37cm×50cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は①、②ともに焼土粒を含む黒褐色土が主体であり、土層断面での新旧関係の確認が困難であった。おそらくそれほどの時期を置かず両方の炉穴が利用されたと思われる。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1、2は波状を呈する口縁部である。口唇部に棒状工具による刺突を加え、細隆起線による区画文と条線文で文様を構成している。区画内は棒状工具により条線文を充填し、細隆起線間はナデで無文部を作出している。内面はまばらに貝殻条痕文を施している。3~5は貝殻条痕文を内外面に施文している。1、2は野島式に比定される。

#### SK-487 (第50図)

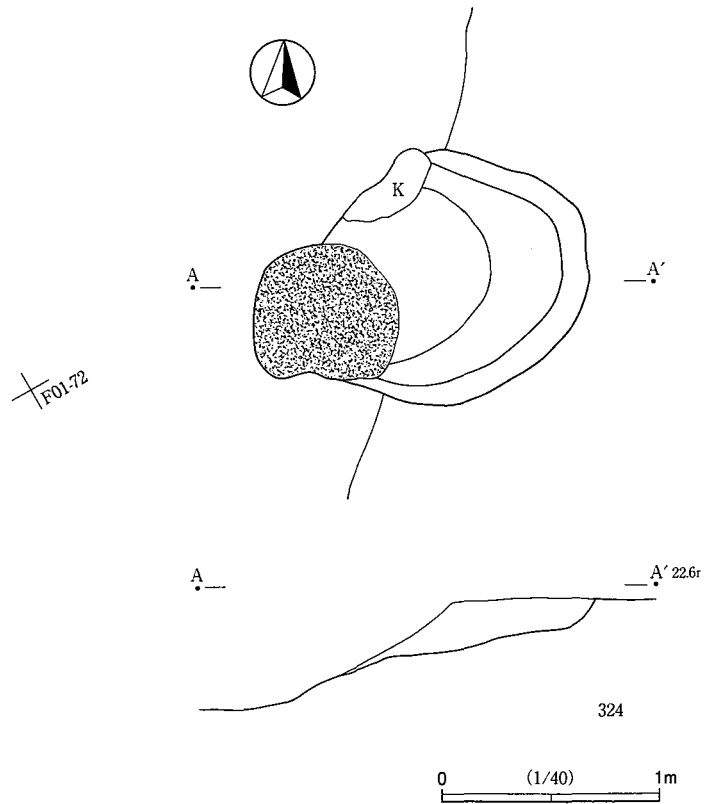
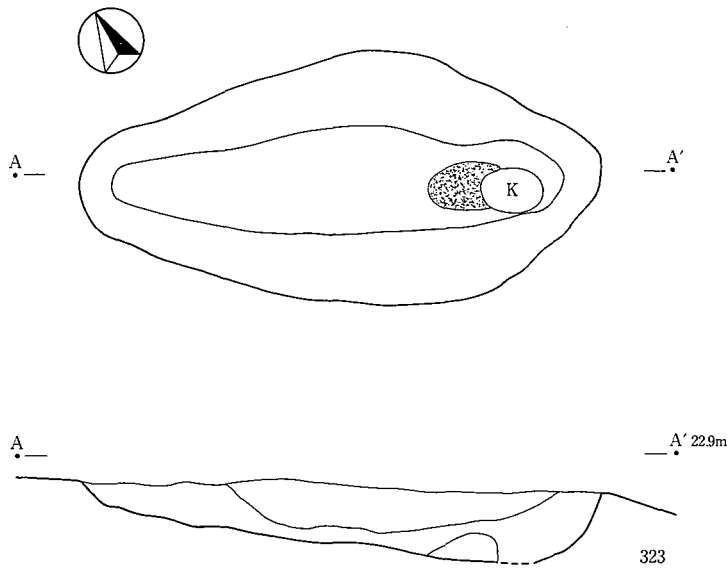
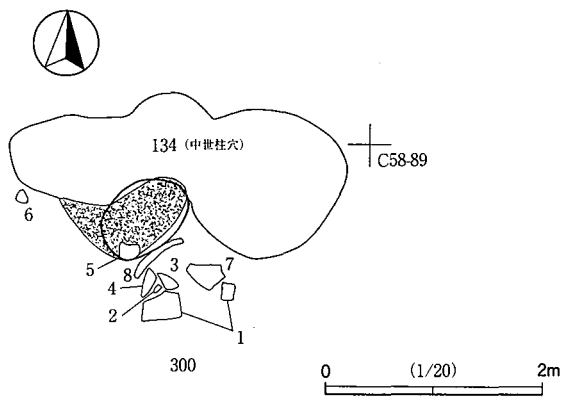
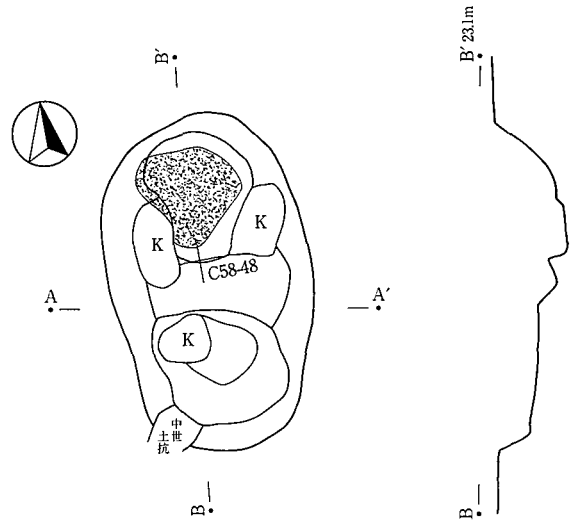
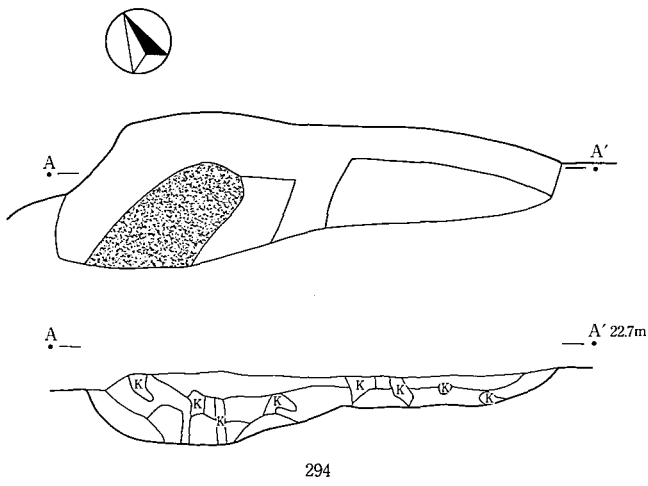
D61-70~80グリッドに跨って位置し、東側にSI485号跡が存在する。炉穴の火床部分だけが遺存したものである。平面形はほぼ円形を呈し、規模は51cm×50cmである。掘り込みはすり鉢状の単純な形態で確認面からの深さは6cmである。覆土は焼土粒を多量に含む暗褐色土が主体である。遺物は出土していないが他の炉穴と同様に早期後半の所産と思われる。

#### SK-500 (第51・54図、図版15・29)

F60-74グリッドに位置する。南北に2基の炉穴が重複している一群で、北側は溝285Bに切られている。説明の都合上、ここでは北側を①、南側を②とする。

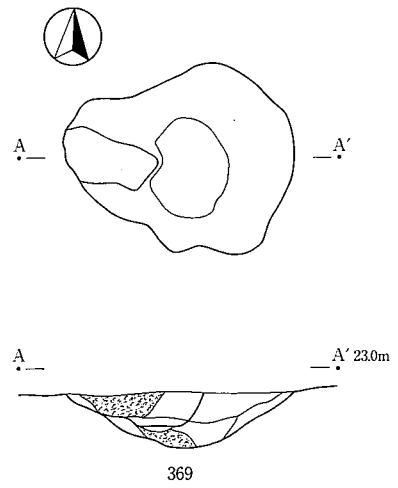
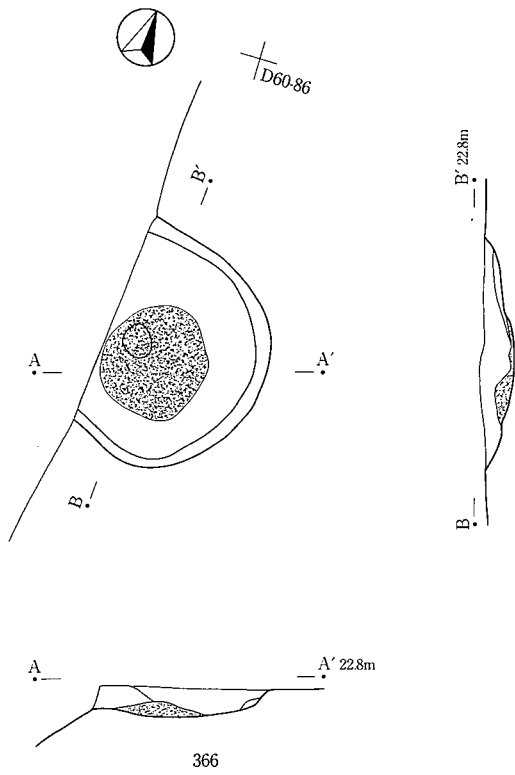
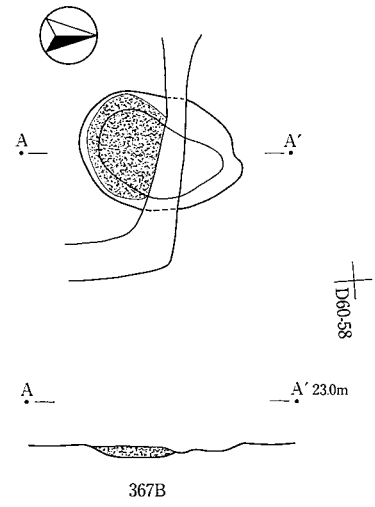
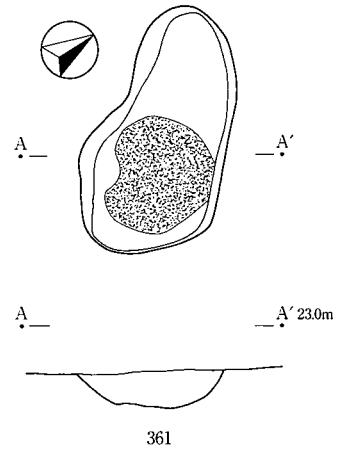
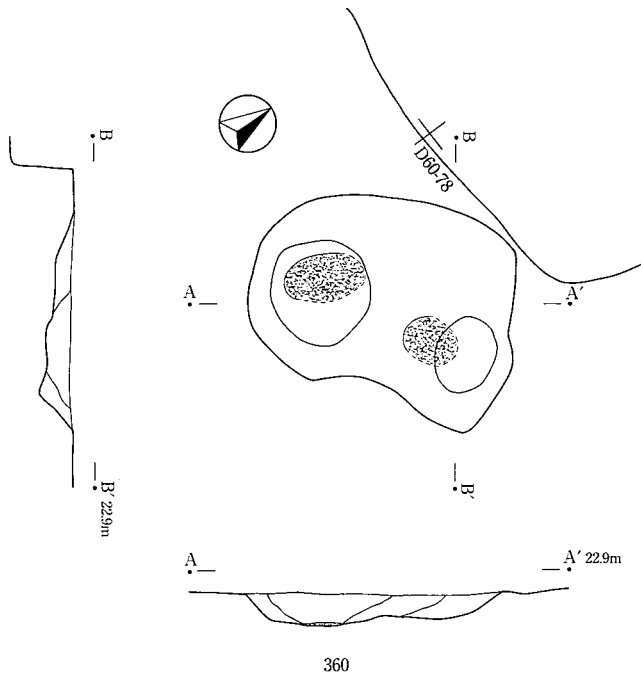
①は火床部分と堀方の一部が残存する。掘り込みは長軸0.78m、短軸0.67m、深さ7cmである。火床部の範囲は65cm×74cmで、全体に良く焼けて赤化していた。

②は長軸1.01m、短軸0.79mである。長軸方向を北東~南西方向に向けて掘り込み、火床部は南西側に設けている。底面は北東から南西に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは6cm~14cmである。火床部は71cm×72cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む黒褐色土、暗褐色土が主体である。調査時の土層断面観察では①が古く②が新しいと推定されたが、それほど



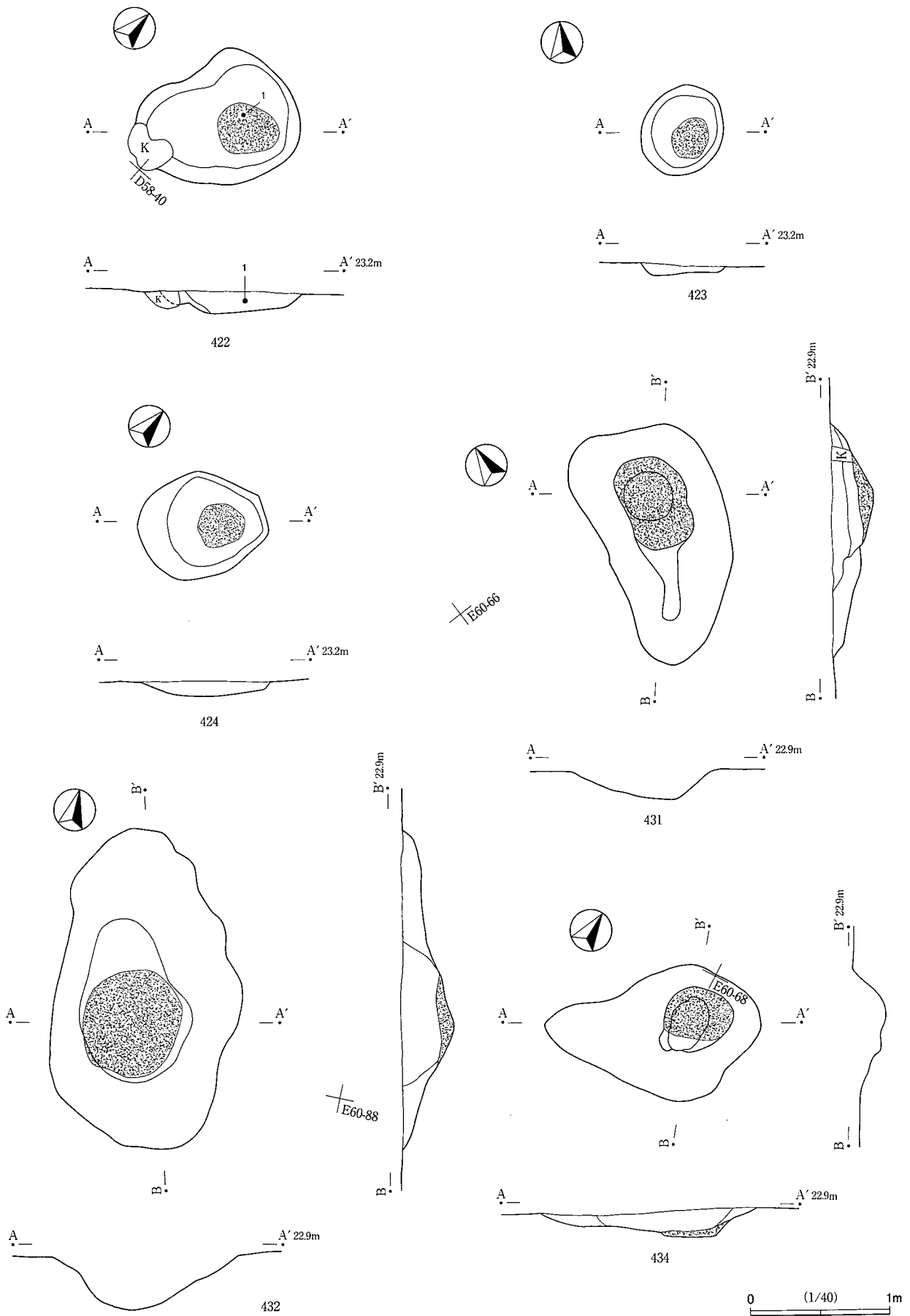
第45图 SK-294·298·300·323·324



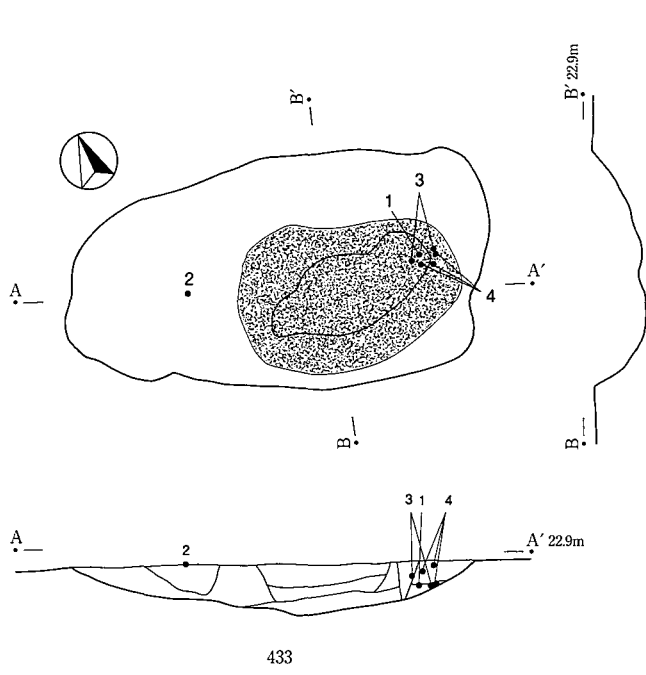


0 (1/40) 1m

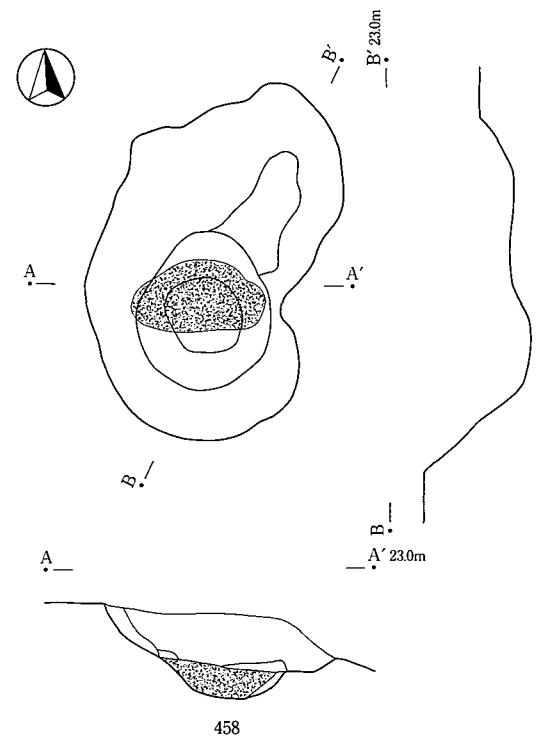
第46图 SK - 360 · 361 · 364 · 366 · 367B · 369



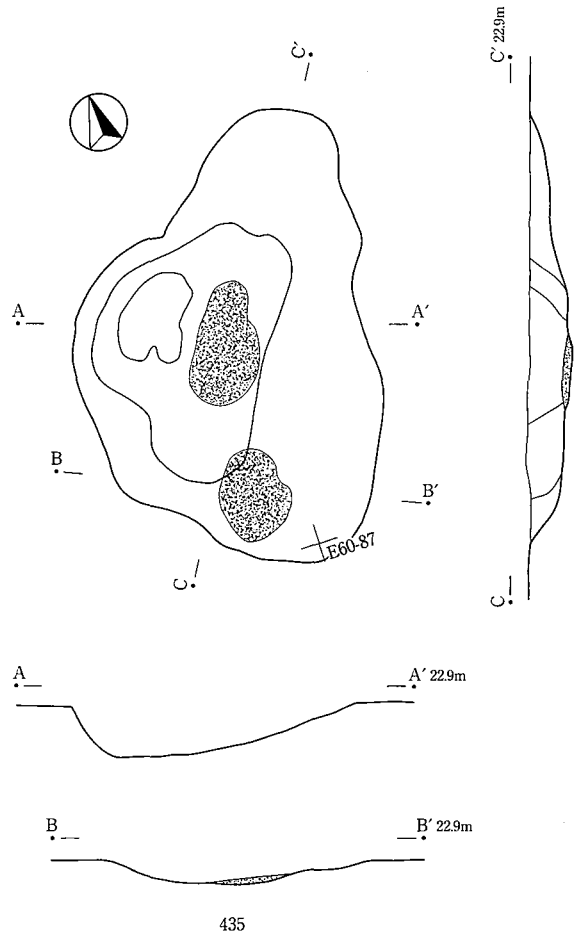
第47図 SK - 422~424 · 431 · 432 · 434



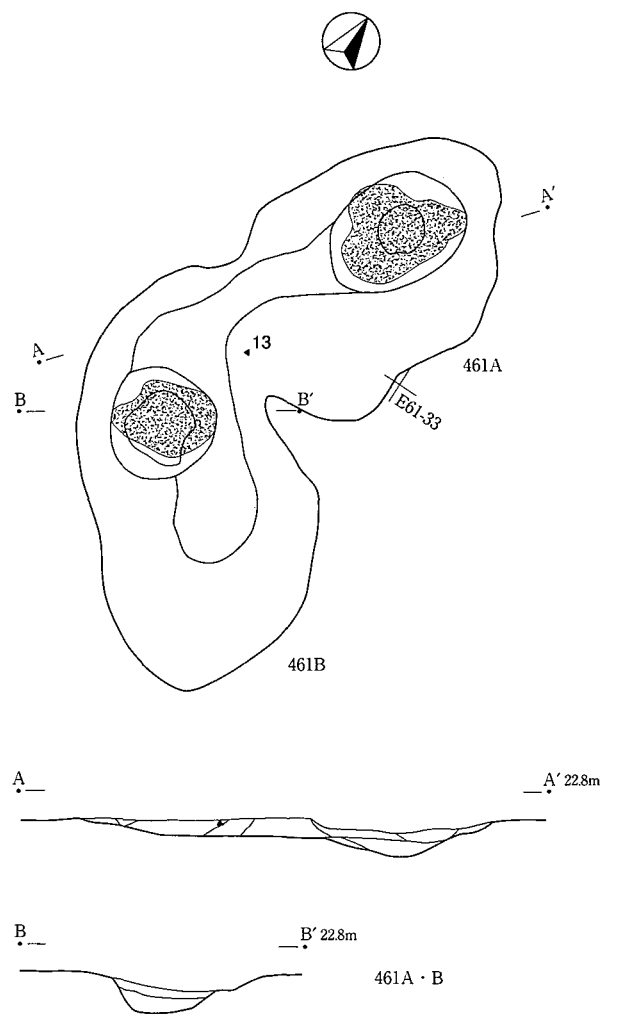
433



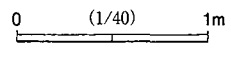
458



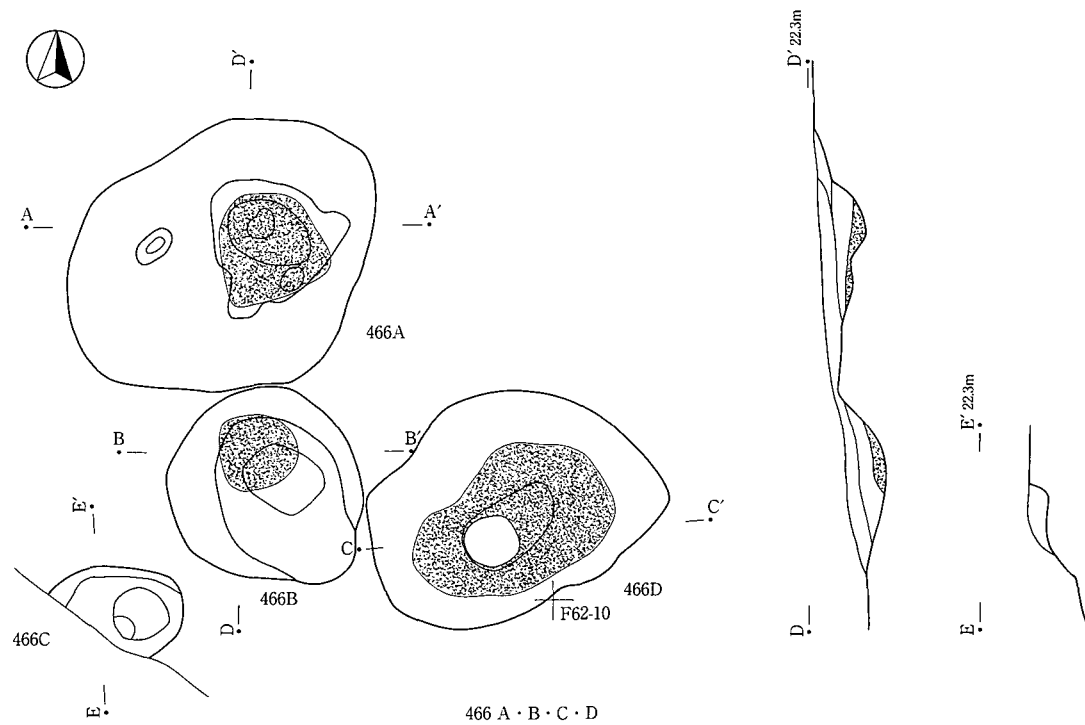
435



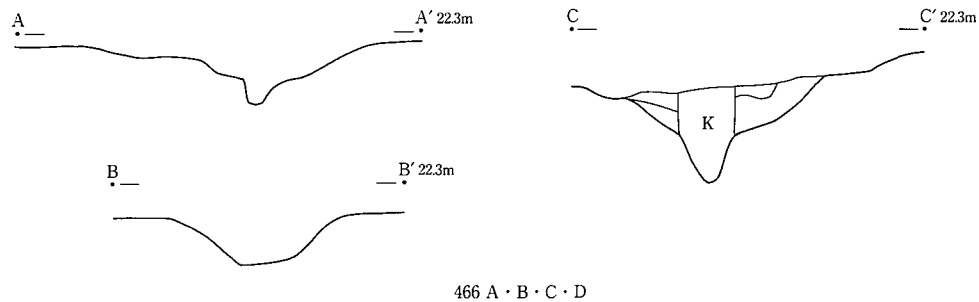
461A · B



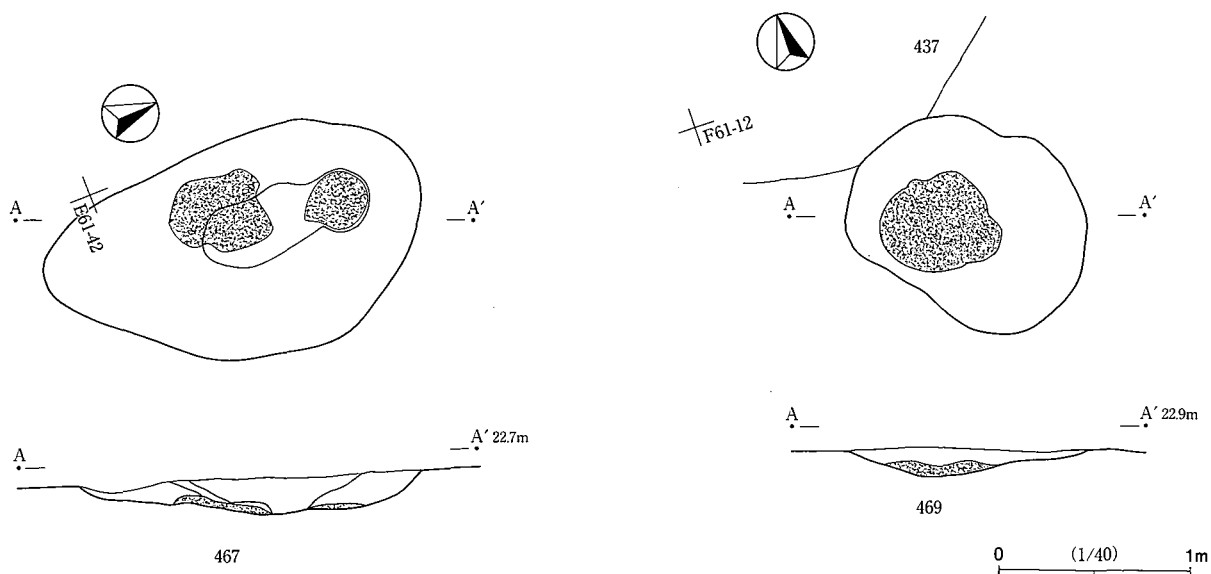
第48図 SK - 433 · 435 · 458 · 461A · B



466 A · B · C · D



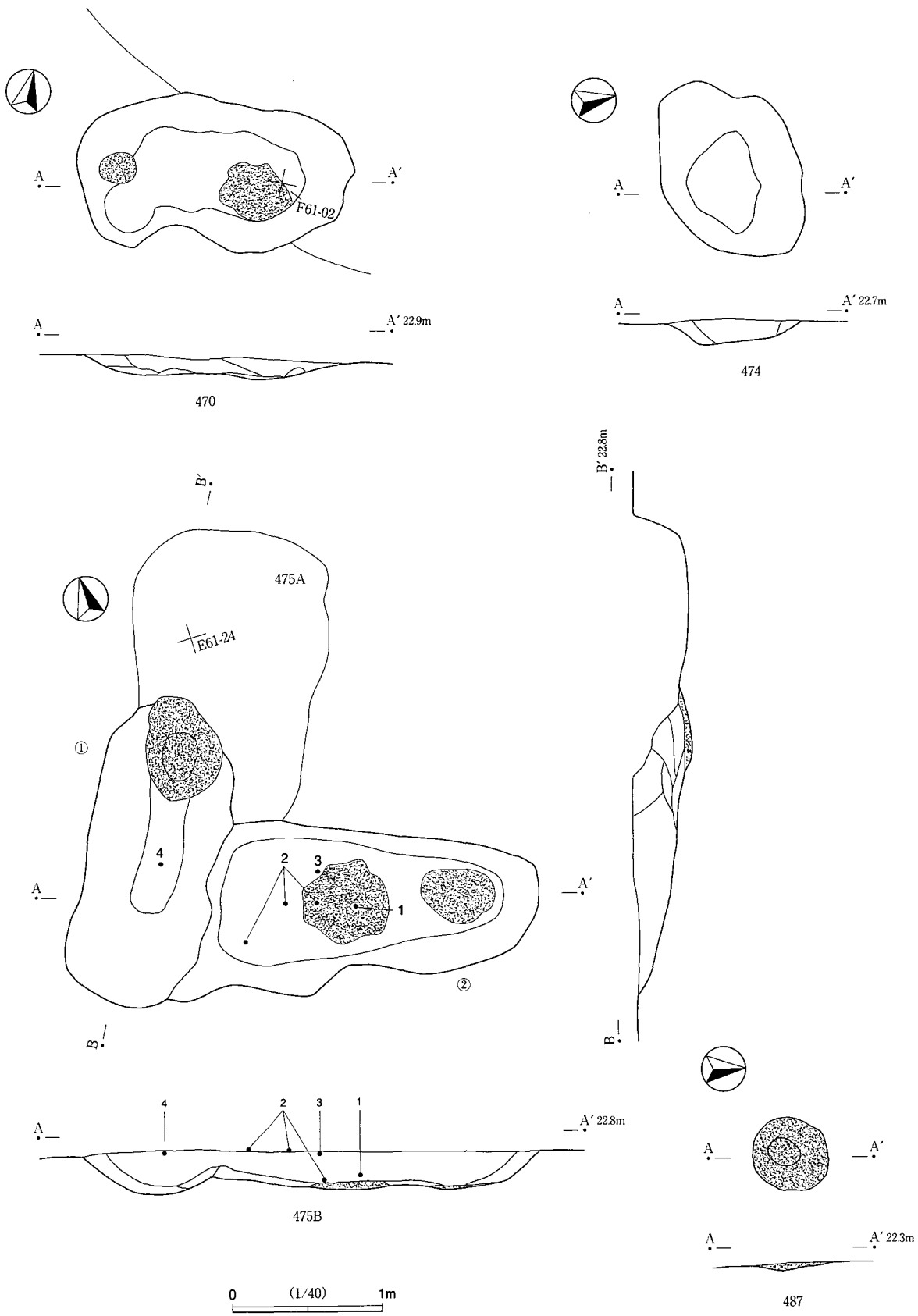
466 A · B · C · D



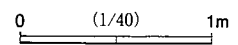
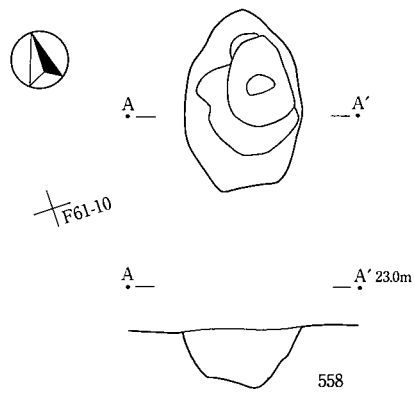
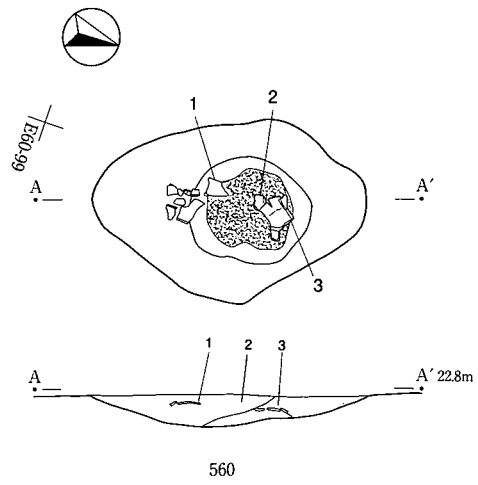
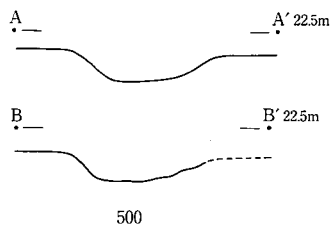
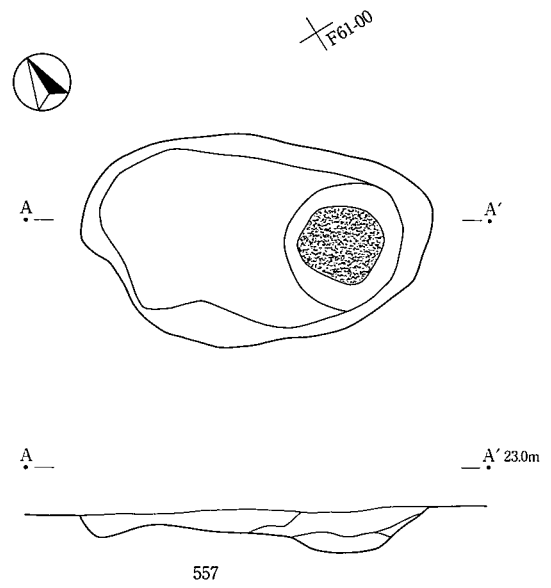
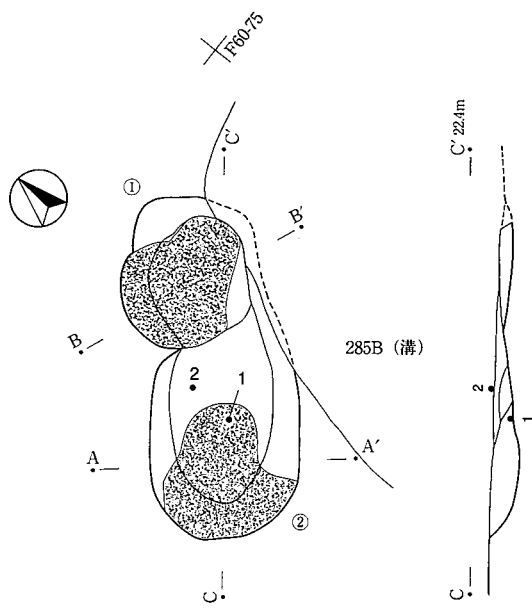
467

469

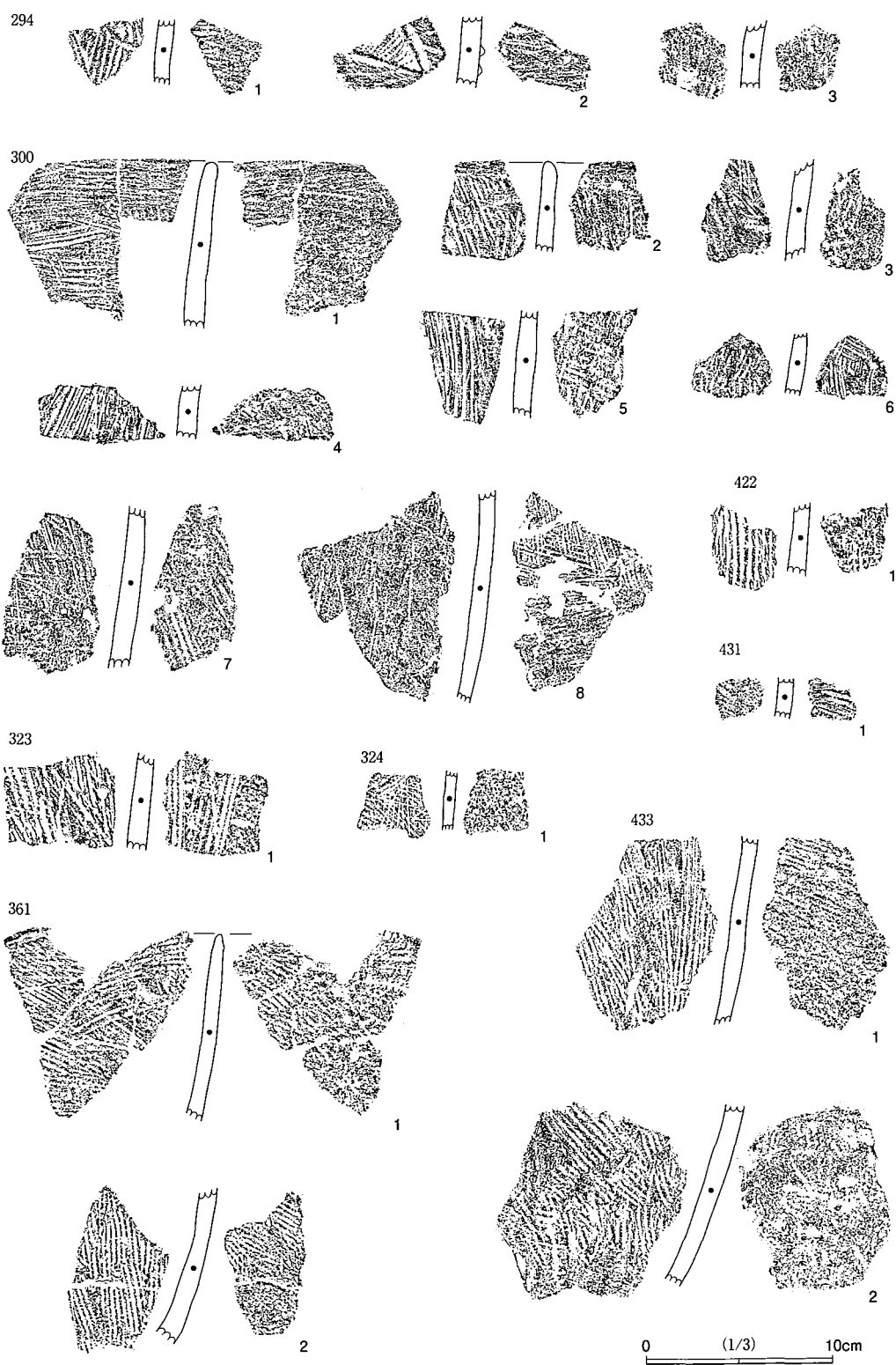
第49图 SK-466A~D · 467 · 469



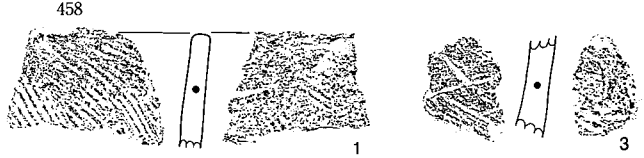
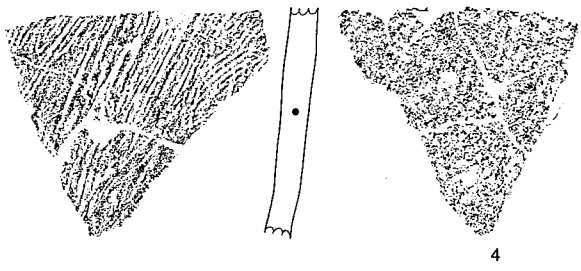
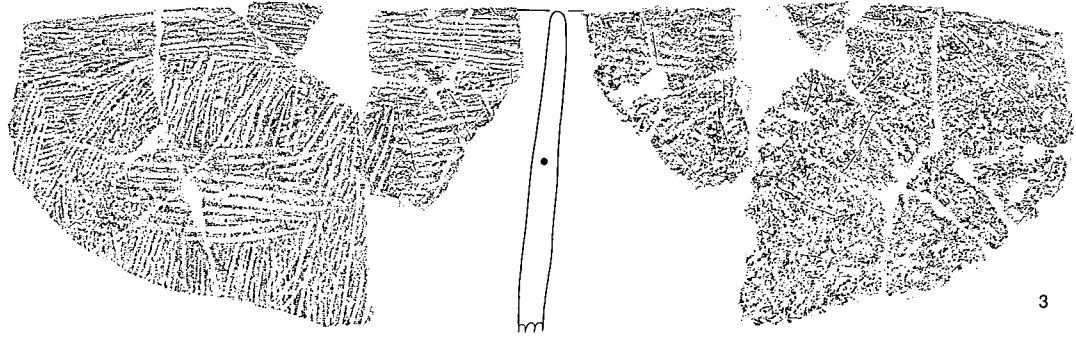
第50図 SK-470・474・475B・487



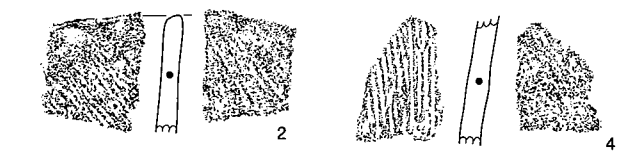
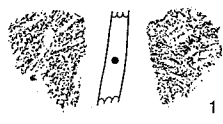
第51図 SK-500・557・558・560



第52图 炉穴出土土器(1)



461



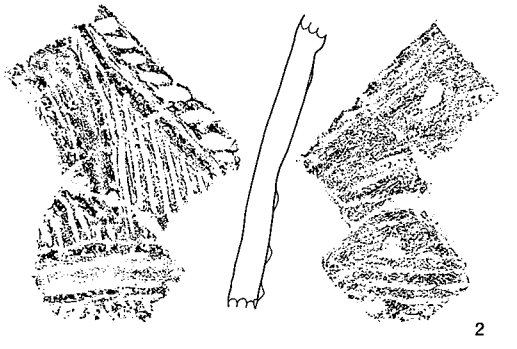
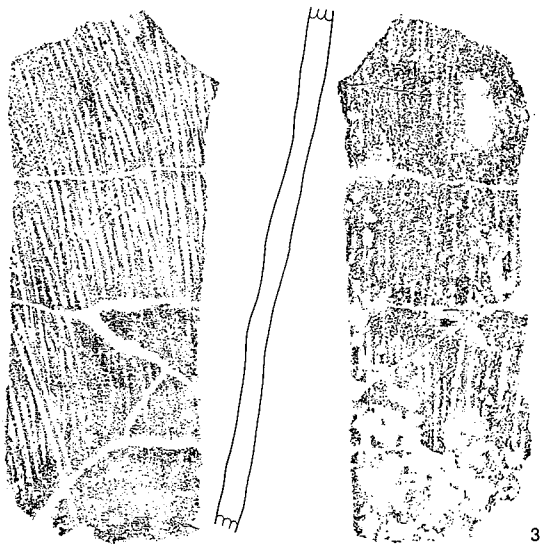
469



466



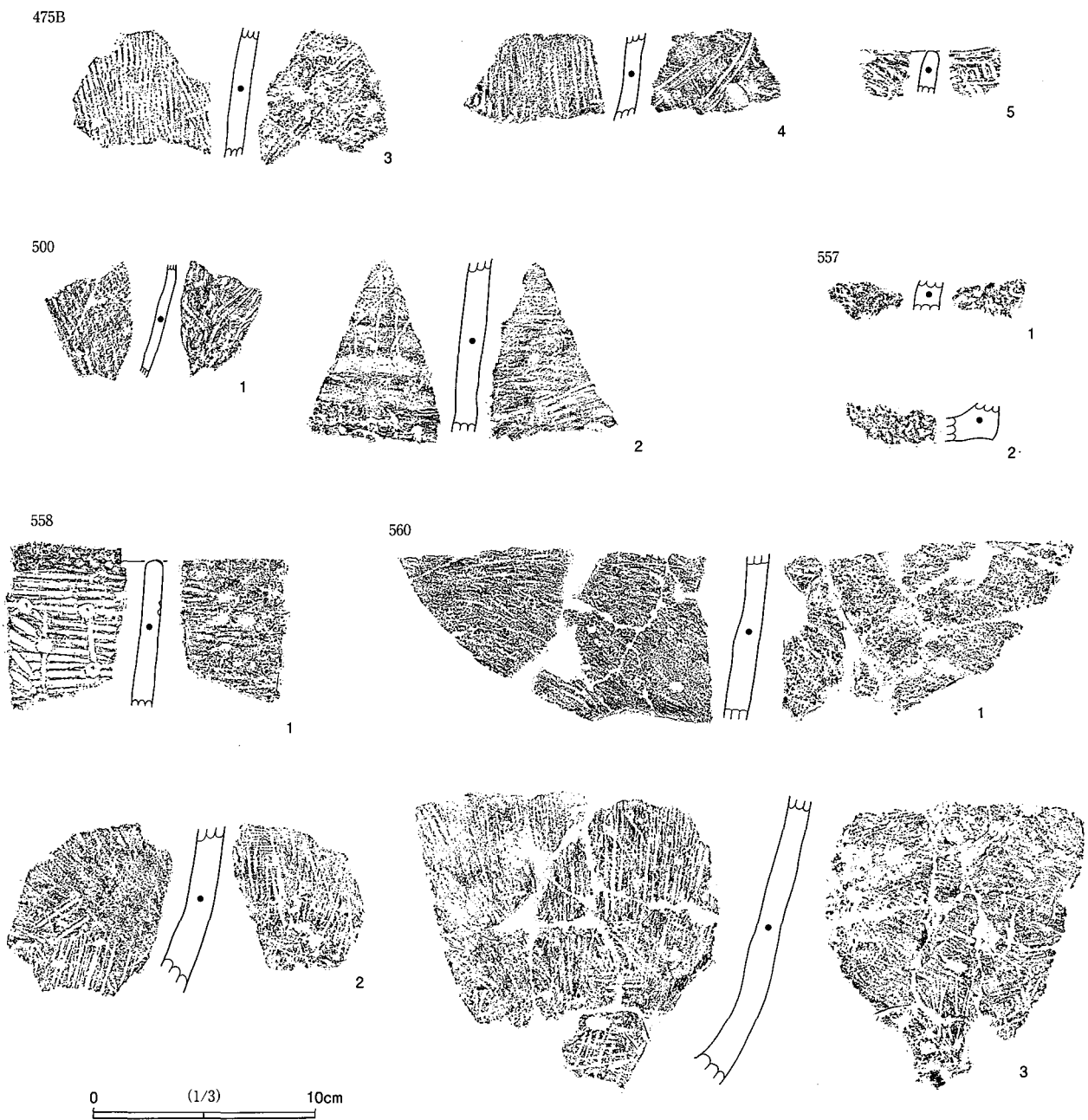
475B



0 (1/3) 10cm

第53图 炉穴出土土器(2)





第54图 炉穴出土土器(3)

の時期を置かず営まれたと思われる。遺物は②の覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1、2ともに深鉢形土器の胴部の破片である。1は胎土に繊維を含み、内外面に貝殻条痕文が施される。2は指頭で横方向に浅くなぞり、その上位に細い斜格子状の条線文と竹管状の工具による円形刺突文を加えている。内面は貝殻条痕文が施される。

SK-557 (第51・54図、図版15・29)

F60-99グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.80m、短軸1.14mである。長軸方向を北西～南東方向に向けて掘り込み、火床部は南東側に設けている。底面は北西から南東に向かって徐々に傾斜し、火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは9cm～23cmである。火床部は39cm×40cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土はローム粒を含む黒褐色土、焼土粒を含む暗褐色土が主体である。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1は胴部片で、不明瞭ながら内外面に貝殻条痕文を施している。2は平底の底部片である。内外面ともに無文である。1・2ともに胎土に繊維を含んでいる。

SK-558 (第51・54図、図版16・29)

F61-00～10グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.93m、短軸0.62mである。掘り込みはすり鉢状の単純な形態で、確認面からの深さは26cm～31cmである。火床部は不明瞭であった。覆土はローム粒を含む褐色土が主体である。遺物は覆土中から早期末の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1は口縁部である。平縁の口唇部に細かな刻み目があり、その下位は貝殻条痕文を地文として、縦横の沈線と円形刺突文で区画状文を構成している。内面は貝殻条痕文が施される。鶺鴒ガ島台式に比定される。

SK-560 (第51・54図、図版16・29)

E60-88～89グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.34m、短軸0.94mである。長軸方向を北～南方向に向けて掘り込み、火床部はほぼ中央に設けている。底面は中央部の火床部分で一段深く窪んでいる。確認面からの深さは10cm～18cmである。火床部は40cm×45cmの範囲が焼けて赤化していた。覆土は焼土粒を含む暗褐色土、黒褐色土が主体で、底面に焼土が堆積していた。遺物は覆土中から早期後半の条痕文系土器が出土しており、遺構の時期もこの時期に相当すると思われる。

遺物 1～3はいずれも胴部の破片である。胎土に繊維を含み、内外面に貝殻条痕文を施している。2、3は底部に近い部位であり、条痕が粗くなっている。

### 3 陥穴

SK-030 (第55・58図、図版16・30)

調査区の西側、D60-13グリッドに位置し、上部を溝に切られている。平面形は長楕円形で、開口部の長さ2.34m、幅1.35m、長軸方位はN-40°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、長さ1.08m、幅51cm～56cm、確認面からの深さは2.72mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で大きく広がっている。壁面は崩落により凹凸が目立っている。覆土は7層に分けられるが、ローム塊を含む暗褐色土が主体を成す自然堆積である。遺物は覆土中層から上層で土器片が出土し、縄文時代早期末から前期後半のものが混在している。

遺物 1～3は条痕文を主文様とし、胎土に繊維を含むものである。1には円形の刺突文と区画状文を構成すると思われる沈線が認められる。3の胴部は弱く屈曲する。1は鶴ヶ島台式である。4・5は単節LR縄文を主文様とし、胎土に繊維を含む。黒浜式である。6は細い沈線で斜格子文が施されている。7は竹管状工具で区画文を描き、その内側に貝殻文を充填している。興津式である。8・9は三角文が重層的に施される。浮島式である。10は半裁竹管によって斜方向の平行沈線が施されている。

SK-031 (第55・58図、図版16・30)

調査区の西側、D60-32・33グリッドに跨って位置する。平面形は楕円形で、開口部長さ1.87m、幅1.42m、長軸方位はN-21°-Eを指す。底面は概ね平坦で、開口部に比べかなり狭い。長さ70cm、幅55cm、確認面からの深さは2.50mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で大きく広がっている。壁面は崩落により凹凸が目立っている。覆土は自然堆積で7層に分けられ、ローム塊が混入する暗褐色土と黄褐色土が主体である。上層に比べ下層のしまりが弱く、粘質土が堆積する。遺物は土器片及び打製石斧が出土している。

遺物 1～4は貝殻条痕文を主文様として、胎土に繊維を含む。1は口縁直下が弱く屈曲し、微隆起上に貝殻腹縁による押捺を施す。裏面にも浅い条痕が認められる。5は貝殻腹縁による波状文を施す。浮島式である。打製石斧は第80図に掲載した。

SK-207 (第55・58図、図版16・30)

調査区の北西、D59-01グリッドに位置し、後世の柱穴等と重複する。遺構の南側部分は調査区外にかかるため、全体を検出していない。開口部の幅は1.82mで、長軸方向はほぼ北を指すと思われる。底面は全体に硬質で起伏があり、壁面側から中央に向かって高くなりっている。確認面からの深さは2.04mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で大きく広がっている。覆土は自然堆積で5層に分けられる。ロームブロックやローム粒が混入する黒褐色土が主体である。遺物は50点ほどの土器片が出土しており、縄文時代早期後半から前期後半のものが混在している。

遺物 1～6は条痕文を施し、胎土に繊維を含むものである。1は口縁部で、表面は浅い条痕に加え縦方向と斜方向に交差する沈線を施す。2の口唇部は内削ぎ状となる。6の底部は丸底状で、条痕が疎らである。7・8は縄文を主文様とし、胎土に繊維を含む。黒浜式である。9は櫛歯状の工具で横、山形状の条線文を施し、刺突文を加えている。10は外反する口縁部に斜条線を巡らせ、その下段に連続三角文を施す。浮島式である。

SK-296 (第55・58図、図版16・30)

調査区の北西、C58-75・76グリッドに跨って位置し、遺構東側の大部分を001号溝状遺構に切られている。従って、遺構確認面まで壁面が残っていたのは西側の一部分だけである。遺存部分での規模は長さ2.91m、幅1.31mで、確認面からの深さは2.94mである。開口部の平面形は長楕円形になると思われ、長軸方位はN-32°-Eを指す。底面はやや凹凸があり、中央部が窪んでいる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かって大きく広がるが、南側の一部分は中程で大きく崩落し抉れている。覆土は黒褐色土、黄褐色土が主体で、特にロームブロックの混入土が多い自然堆積である。遺物は土器片が出土している。

遺物 1～3は胎土に繊維を含むものである。1は半裁竹管により木葉文風の文様を施す。2・3は細い条線を縦或いは斜方向に施す。以上は黒浜式である。4はLの細かな撚糸文をまばらに施すもので、後期後半に相当すると思われる。

SK-297 (第56・58図、図版16・30)

調査区の北西、C58-68グリッドに位置する。調査時の平面形状は歪みのある長楕円形であるが、北西側で中世の掘立柱建物跡と重複し、南西側では後世の攪乱を受けているため、本来の形状や規模は損なわれている。現況では開口部の長さが3.0mであるが、本来は2m強程度の長さであったと思われる。幅1.3m～1.8m、長軸方位はN-40°-Eを指す。底面はやや偏った位置にあり、開口部に比べかなり狭小となっている。確認面からの深さは3.13mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中程から徐々に広がり開口部へと至る。覆土は自然堆積で、ロームブロックが多く混入する黒褐色土、暗黄褐色土が主体である。遺物は土器片が少量出土している。時期的には早期後半の条痕文系、前期中葉から後半の土器片が混在している。

遺物 1は早期後半の条痕文系土器で、胎土に繊維を含み内外面に条痕文が施される。2・3はRの縄文が施される。4は緩やかな波状となる口縁部である。無文で丁寧に撫でられている。以上は胎土に繊維を含み、黒浜式である。5は無文で、調整痕が顕著に認められる。

SK-299 (第56・59図、図版16・30)

調査区の北西、C58-88グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、開口部長さ3.3m、幅1.0m、長軸方位はN-43°-Wを指す。底面は概ね平坦で開口部に比べかなり幅狭く、長軸側の両端の壁面は抉れが大きい。長さ3.4m、幅35cm、確認面からの深さは1.82mである。長軸にそった壁面は底面から垂直に立ち上がり、開口部で大きく広がっている。覆土は黒褐色土が主体で、これにロームブロックが多く混入する、自然堆積である。遺物は土器片が少量出土している。小破片のため多くは図示できなかったが、早期後半の条痕文系土器、前期中葉から後半の土器片が混在している。

遺物 1は無文で、調整痕と思われる擦痕が認められる。器面の特徴から前期後半に相当すると思われる。

SK-426 (第56・59図、図版16・30)

調査区の中央付近、F61-08グリッドに位置する。平面形は楕円形で、開口部は長さ1.65m、幅1.0m、長軸方位はN-2°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは2.62mである。壁は底面から開口部に向かって徐々に広がって立ち上がり、所々に崩落が認められる。覆土は自然堆積で、ロームブロックが多く混入する黒褐色土、暗黄褐色土が主体である。遺物は土器片約100点及び石鏃が出土している。時期的には早期後半の条痕文系が多く、これに前期中葉から後半の土器片が混在している。

遺物 早期後半の条痕文系土器は1～12である。1は口唇端から垂下する粘土紐の貼り付けによる細隆起線で文様帯を縦に区画し、区画内は丸棒状の工具による条線文が充填される。胎土に繊維を微量含む。野島式である。2～5は細隆起線あるいは沈線による区画文を有するもので、区画の線上には円形刺突文が加えられる。鷓ガ島台式である。6～8・10・12は内外面に横あるいは斜め方向の貝殻条痕文が施される。9・11は内外面ともに擦痕が認められる。胎土に繊維を含み、条痕文系土器群に伴うものである。13は胎土に繊維を含み、外面に単節RLの縄文が施される。14はLRとRLの羽状縄文が施される。この2点は黒浜式である。15は輪積みと思われる有段口縁で、段の部分に三角形の刺突を加える。16～18は貝殻腹縁による波状貝殻文を施す一群で、浮島式に比定される。

SK-428 (第57図、図版16)

調査区の北側、D58-84グリッドに位置する。遺構上部の西側約1/3程度を下層調査の際に削平して

しまったため、全体の平面形状は不明であるが残存する部分から推定すると、楕円形になると思われる。残存部分の規模は、長さ1.3m、幅1.04mである。底面は中央部分で窪んでおり、確認面からの深さは2.04mである。壁は垂直に立ち上がり、上部の開口部付近で大きく広がっている。覆土は自然堆積で、ロームブロックを多く混入した黒褐色土、黄褐色土が主体である。遺物は土器片が少量出土している。小破片のため図示できなかったが、早期後半の条痕文系と前期中葉のものが混在している。

SK-473 (第57・59図、図版17・30)

調査区の中央付近、F61-32グリッドに位置する。平面形は楕円形で、開口部は長さ2.0m、幅1.3m、長軸方位はN-7°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは3.07mである。壁は底面から上方に向かって徐々に広がり、開口部付近で大きく広がっている。遺物は土器片が出土しており、早期後半の条痕文系、前期、後期前半の土器片が混在している。

遺物 1～8は胎土に繊維を含む条痕文系の土器である。1・3は沈線、2は細隆起線による区画文を有し、区画内を半截竹管による刺突文あるいは押し引き文で充填する。鵜ガ島台式である。4～8は内外面に貝殻条痕文を施し、7の口唇部には刻み目が加えられている。9は貝殻腹縁の頂部を押し当てて連続爪形文を施す浮島式である。10は底部で、外面上部には縦方向の細いヘラ状工具と思われる調整痕が認められ、内面も丁寧に調整されている。後期前半の所産と思われる。

SK-488 (第57・60図、図版17・30)

調査区の中央付近、D61-61グリッドに位置する。遺構の上部は中世の486号溝状遺構に切られ、また一部に攪乱を受けているため本来の形状や規模は損なわれている。現況での平面形は楕円形で、開口部の長さ1.88m、幅1.24m、長軸方位はN-58°-Eを指す。底面はほぼ円形に近い形状に掘り込まれ、僅かに起伏が認められる。確認面からの深さは2.24mである。壁は底面から徐々に広がって立ち上がり、東側の一部は崩落している。覆土は自然堆積で、ロームブロックを多く混入した暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土が主体である。遺物は土器片少量が出土している。

遺物 1は底部付近で、胎土に繊維を含み、外面に貝殻条痕文が施される。2は2段の輪積みがある口縁部で、前期後半に相当すると思われる。

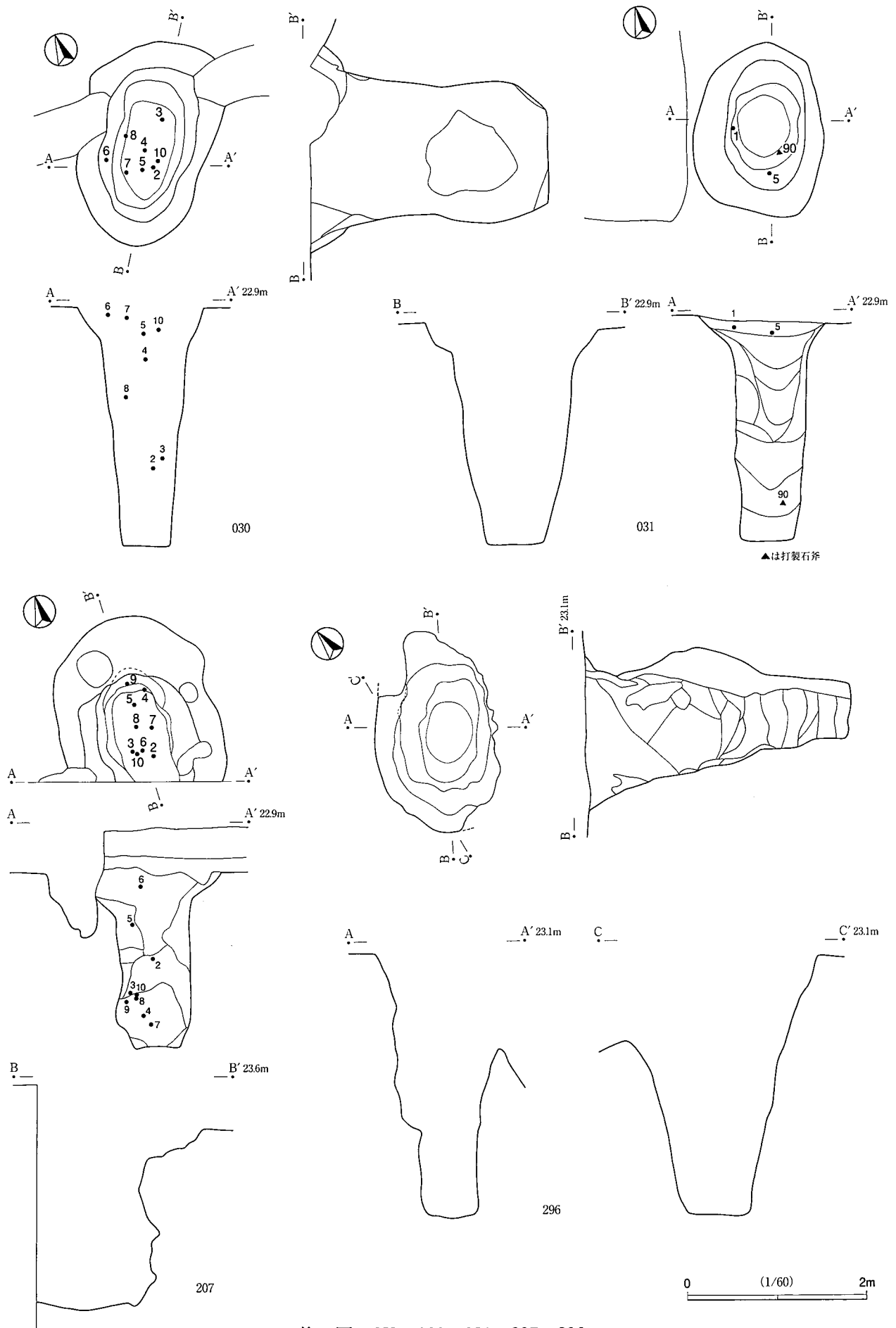
SK-510 (第57図、図版17)

調査区の西側、D60-45、55グリッドに跨って位置する。平面形は楕円形で、開口部は長さ1.86m、幅1.11m、長軸方位はN-39°-Eを指す。底面はほぼ円形に掘り込まれ、中央部が皿状に窪んでいる。確認面からの深さは、2.16mである。壁は長軸側で二段に、短軸側ではほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積で黒色土、黒褐色土が主体である。遺物は出土していない。

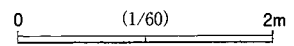
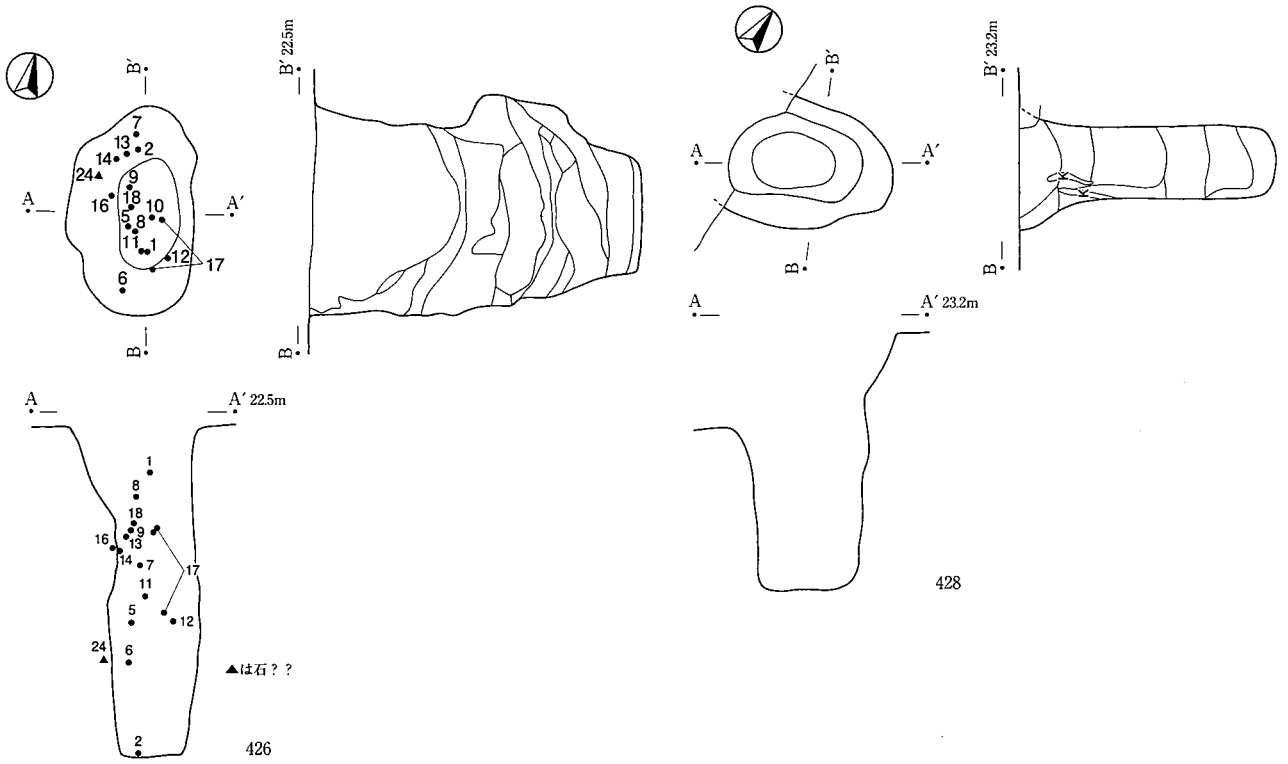
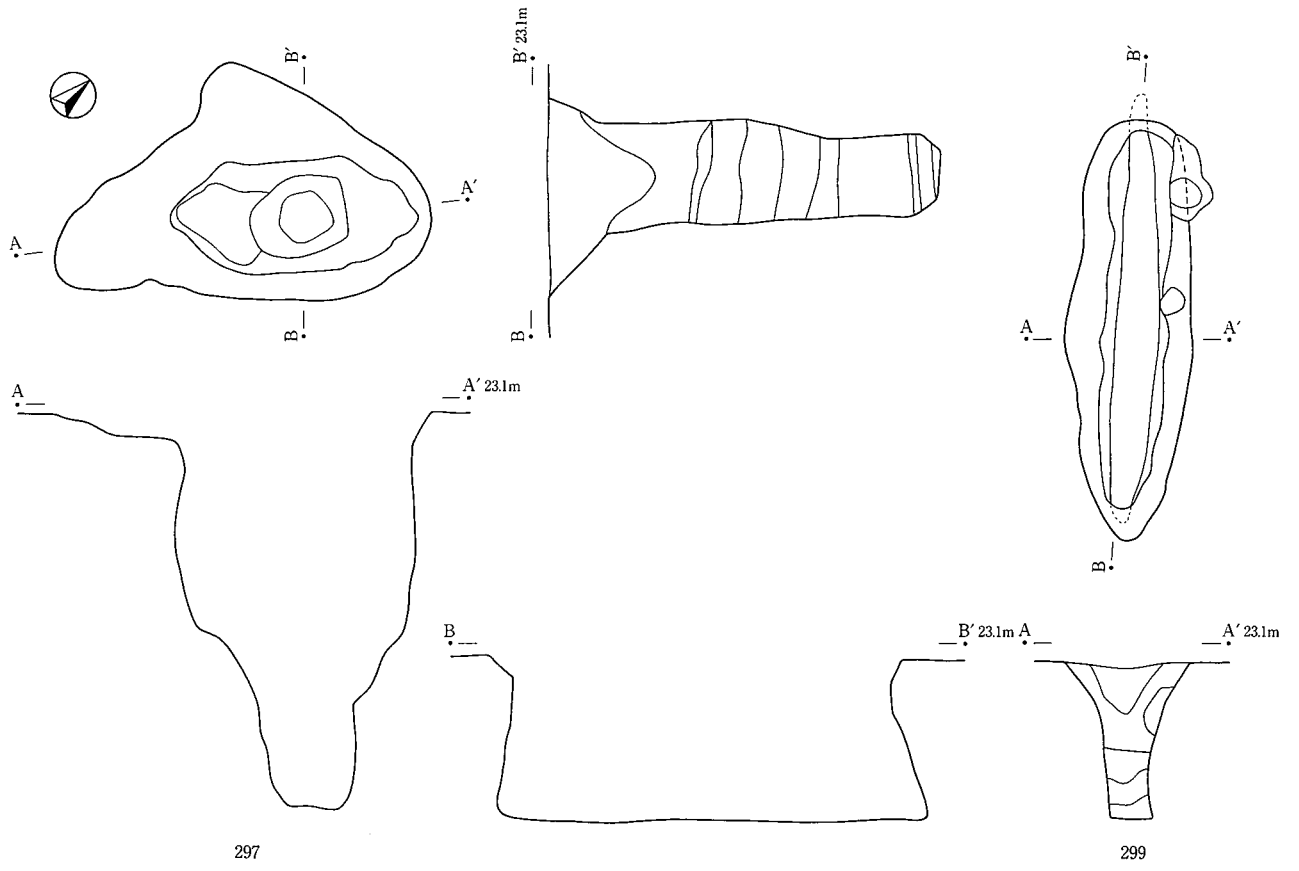
本遺構は縄文時代の遺構として掲載しているが、覆土の状況が土質全体に粘りのある点やロームブロックの混入がない点、さらに底面の形状や壁面の掘り方等構造からも他の陥穴の状況と異なるため、陥穴ではなく、例えば井戸のような用途を考慮しておきたい。従って遺構の時期も古代もしくは中世まで下る可能性が高いと思われる。

SK-592 (第57・60図、図版17・30)

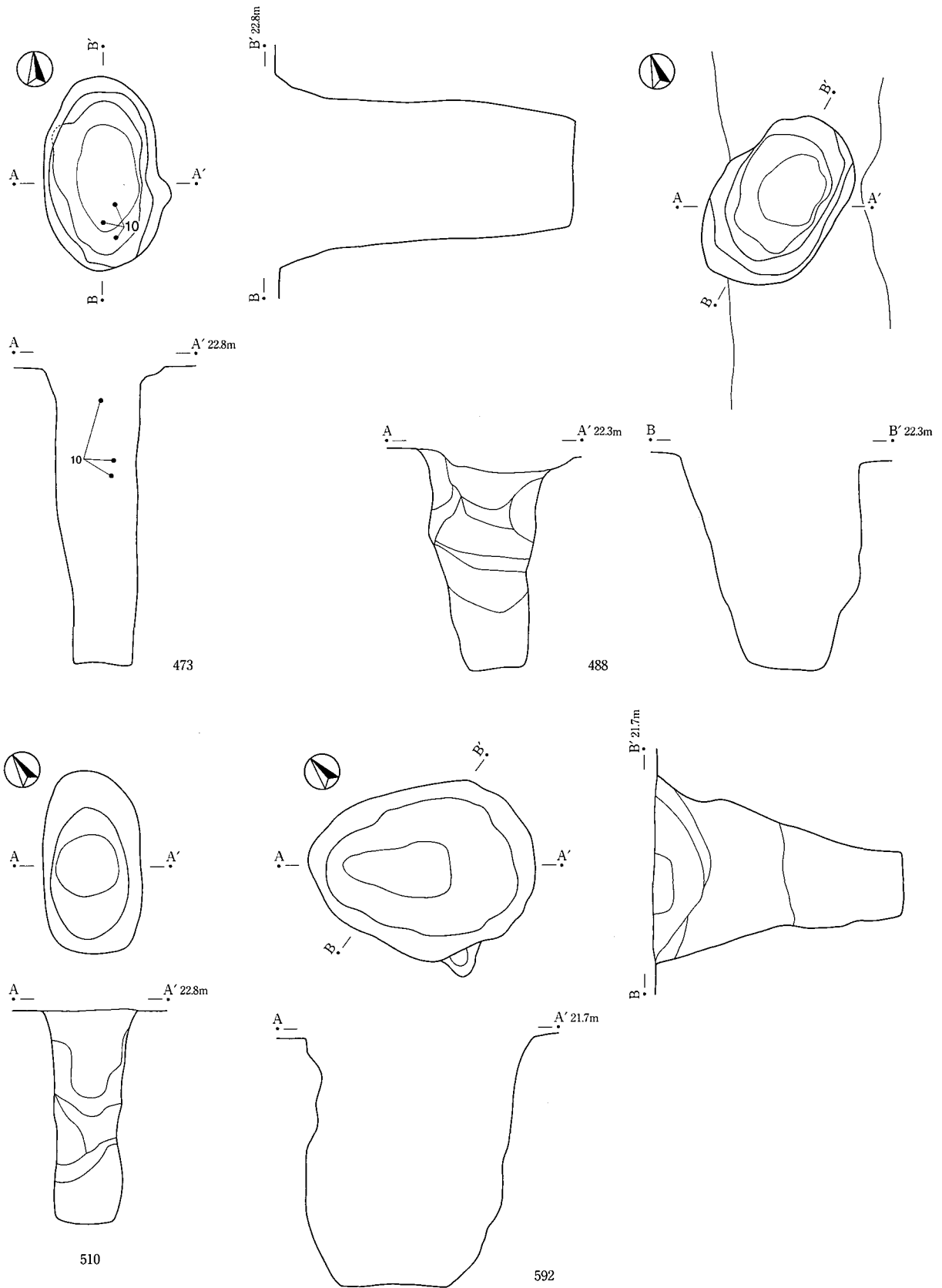
調査区の東側、F61-56グリッドに位置する。平面形は楕円形で、開口部は長さ2.34m、幅1.8m、長軸方位はN-50°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは1.29mである。壁は開口部に向かって徐々に広く立ち上がっており、長軸側北面の一部が大きくオーバーハングしている。なお、南側壁面に



第55図 SK-030・031・207・296



第56図 SK-297・299・426・428

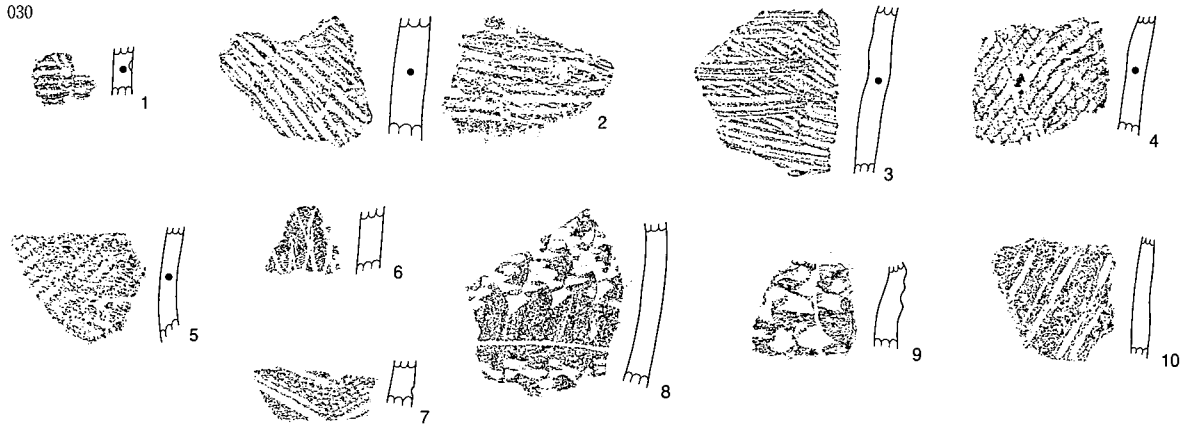


0 (1/60) 2m

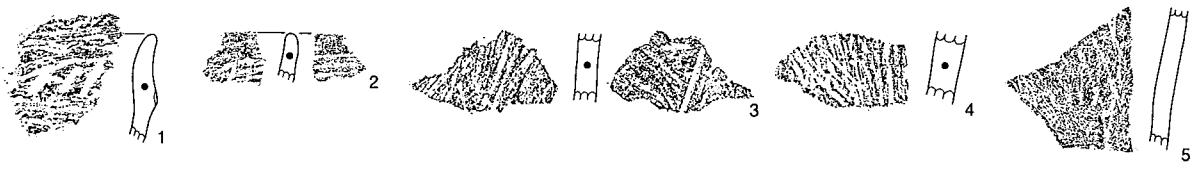
第57图 SK-473·488·510·592



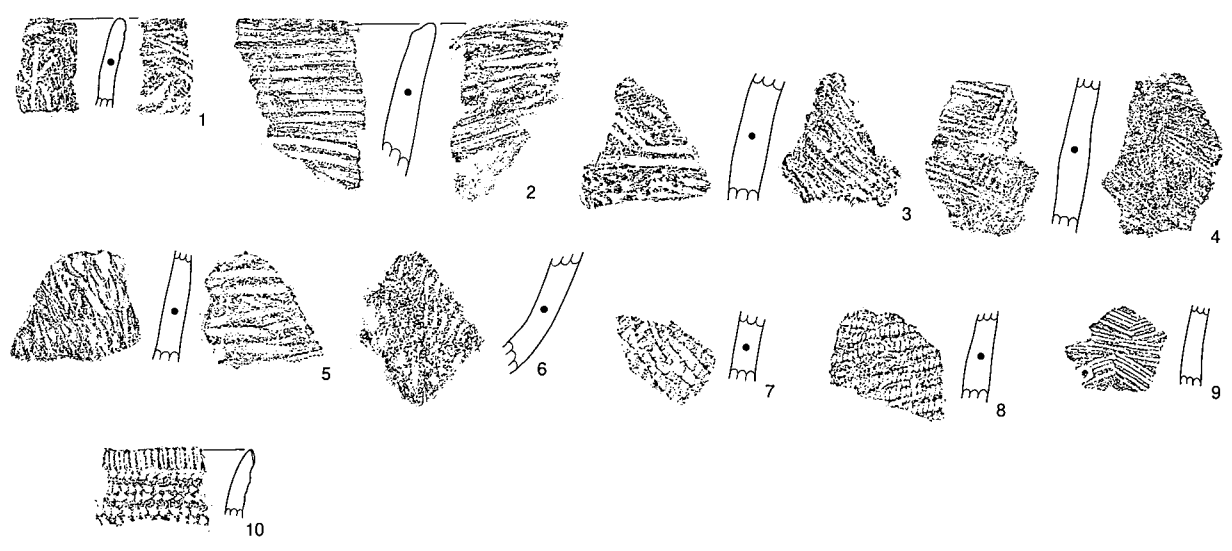
030



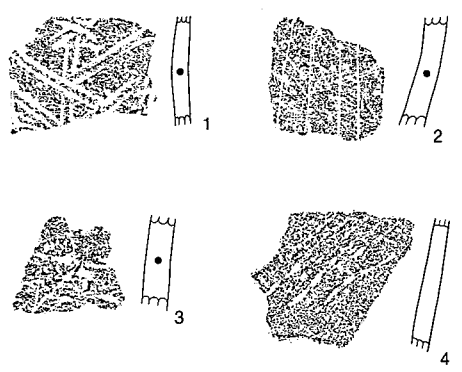
031



207



296



297

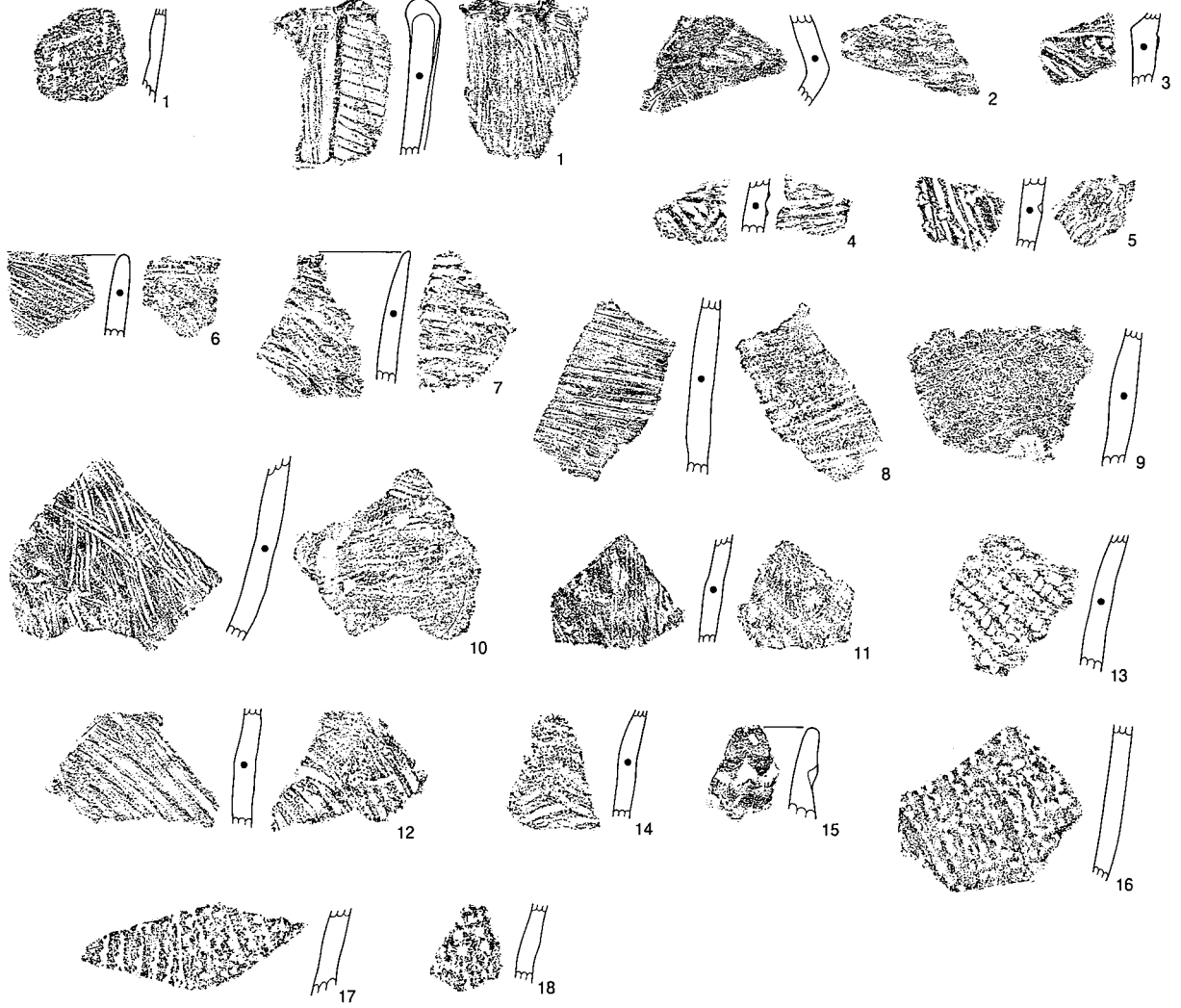


0 (1/3) 10cm

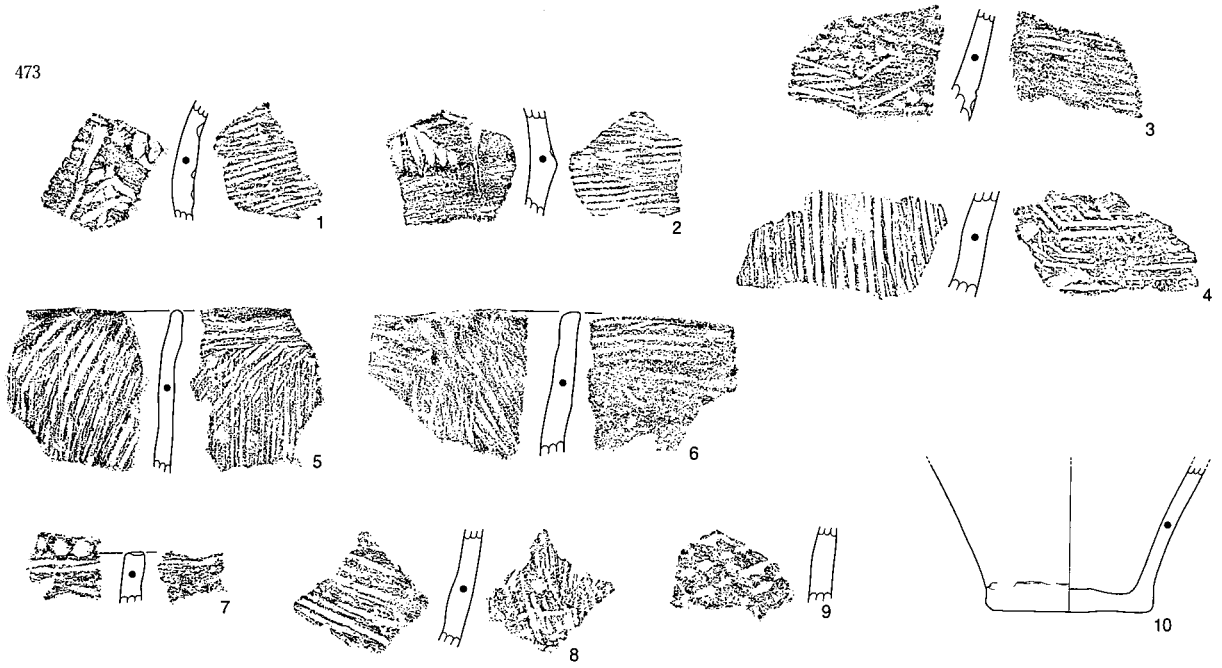
第58图 陷穴出土土器(1)

299

426



473



0 (1/3) 10cm

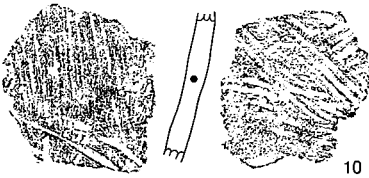
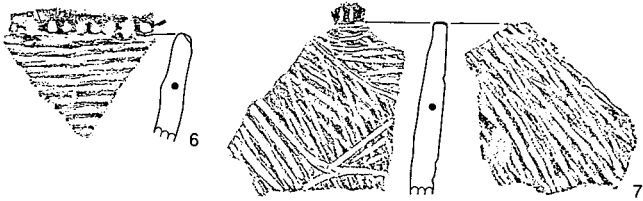
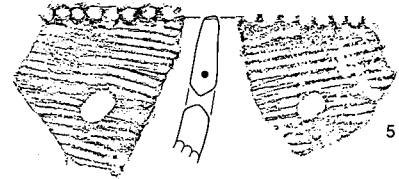
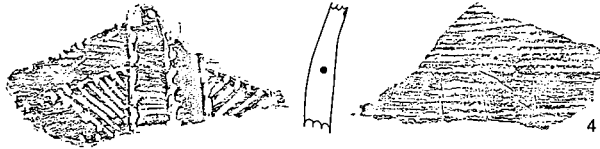
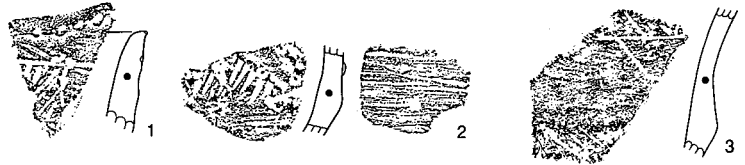
0 (1/4) 10cm

第59图 陷穴出土土器(2)

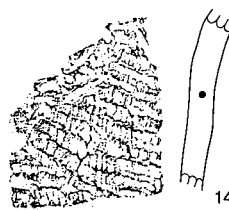
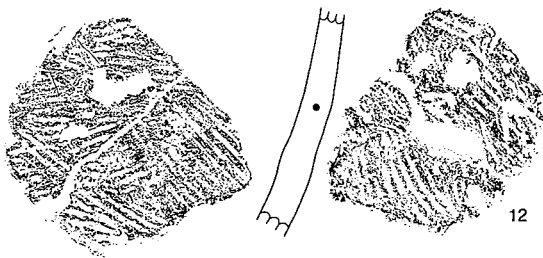
488



592



0 (1/4) 10cm



0 (1/3) 10cm

第60図 陥穴出土土器(3)

接するピット状の遺構は、後世のものと思われる。覆土は自然堆積で、ロームブロックを多く混入した暗褐色土、黒褐色土が主体である。遺物は土器片が比較的多く出土している。早期後半の条痕文系と前期中葉の土器片が混在しているが、条痕文系のものが多い。

遺物 1～4は細隆起線あるいは沈線による区画文を有するもので、区画の線上には円形刺突文が加えられる。4は細隆起線上に連続して刻み目が施される。鶉ガ島台式である。5～12は貝殻条痕文を主とする一群である。5～7は口唇部上端に刻み目を施す。8は口唇部直下に刺突が加えられる。15はこれらに伴う尖底の底部である。13は口唇部上端にL Rの縄文、14はRの縄文が全面に施される。黒浜式と思われる。

#### 4 土抗

SK-436 (第62図、図版17・30)

調査区の中央付近、E60-97グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で長さ1.88m、幅1.72mである。

底面は平坦で、確認面からの深さは35cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、皿状の断面形状を呈している。覆土は自然堆積で、全体に暗褐色土が多く、底面付近の下層では締まりのある暗黄褐色土が堆積している。遺物は土器片が少量出土し、早期後半の条痕文系と前期中葉のものが混在している。

遺物 1は沈線による区画文を有し、線の上に円形刺突文が加えられ、区画内は連続刺突文が充填される。2は内外面に貝殻条痕文が施される。3は底部付近、4は胴部の破片である。いずれも浅い貝殻条痕文がわずかに観察される。

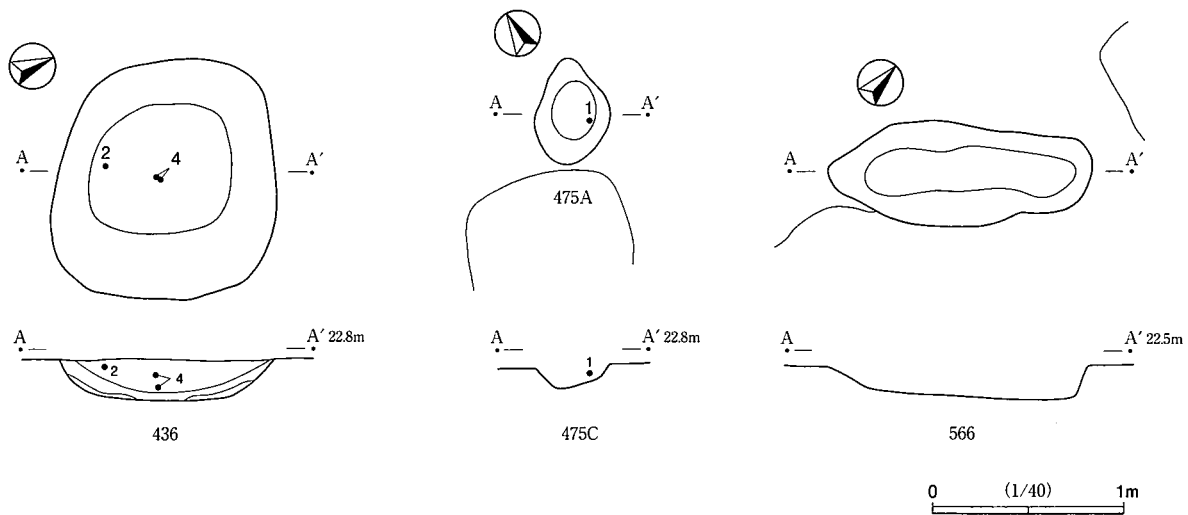
SK-475C (第62図、図版30)

調査区の中央付近のE61-14グリッド、奈良・平安時代の土抗475Aの北側に位置する。平面形は楕円形を基調とするが全体に歪んだ形で、長さ84cm、幅59cmである。底面は東側から西側に向かって傾斜し、確認面からの深さは最大で18cmである。遺物は早期後半の条痕文系の土器片が少量出土している。

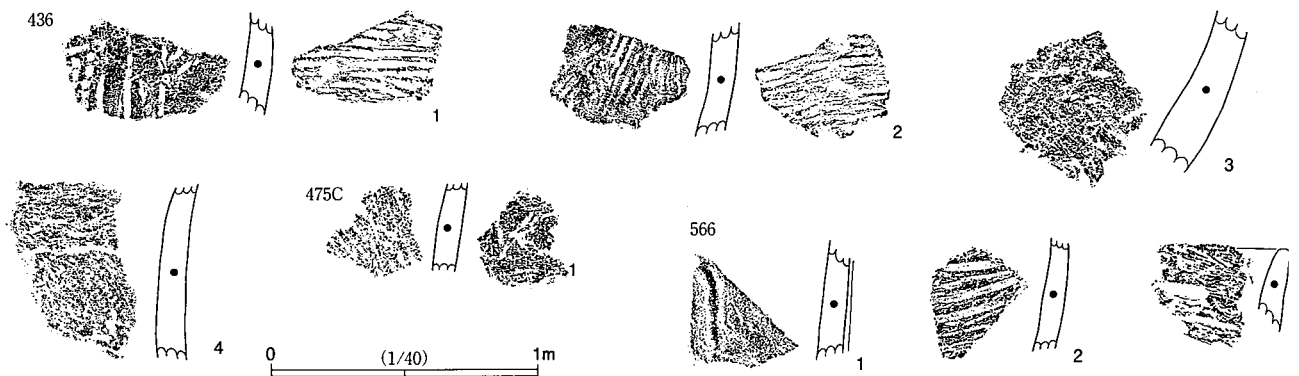
遺物 1は内外面に貝殻条痕文が施される。

SK-566 (第62図、図版17・30)

調査区の南東部、E61-69グリッドに位置する。中世の148溝状遺構と重複しているため本来の形状や規模は損なわれている。現況での平面形は細長い楕円形で、長さ2.09m、幅0.82mである。底面は西側から東側になだらかに傾斜しており、確認面からの深さは最大で45cmである。遺物は早期後半の条痕文系と前期中葉の土器片が少量出土している。



第61図 SK-436・475C・566



第62図 土坑出土土器

遺物 1は深鉢の口縁部付近と思われる破片で、微隆起線が縦位に垂下する。野島式である。2は胎土に繊維を含み、横方向に条痕文が施される。3は深鉢の口縁部である。胎土に繊維を含み、横方向に細かい条線文が施される。黒浜式である。

## 5 グリッド出土土器

本遺跡で出土した縄文時代の土器は早期後半から後期中葉までに及ぶ。本項では、グリッドを単位として取り上げられた遺構外出土土器及び奈良・平安時代その他遺構に伴わない縄文土器について、基本的に下記のⅠ～Ⅳ群に分け、さらに細別できるものについてはそれぞれ分類した。

第Ⅰ群 縄文時代早期の土器

第Ⅱ群 縄文時代前期の土器

第Ⅲ群 縄文時代中期の土器

第Ⅳ群 縄文時代後期の土器

### 第Ⅰ群 縄文時代早期の土器

第1類 早期の撚糸文系土器である。(第63図1・3、図版31)

出土した量は極めて少ない。1は口唇部が肥厚し、その直下の凹線部で無文帯を形成する。その下段にRの撚糸文が左右斜めに施文される。稲荷原式とおもわれる。3は底部付近の破片でLの撚糸文が施文されている。

第2類 早期の沈線文系土器である。(第63図4、図版31)

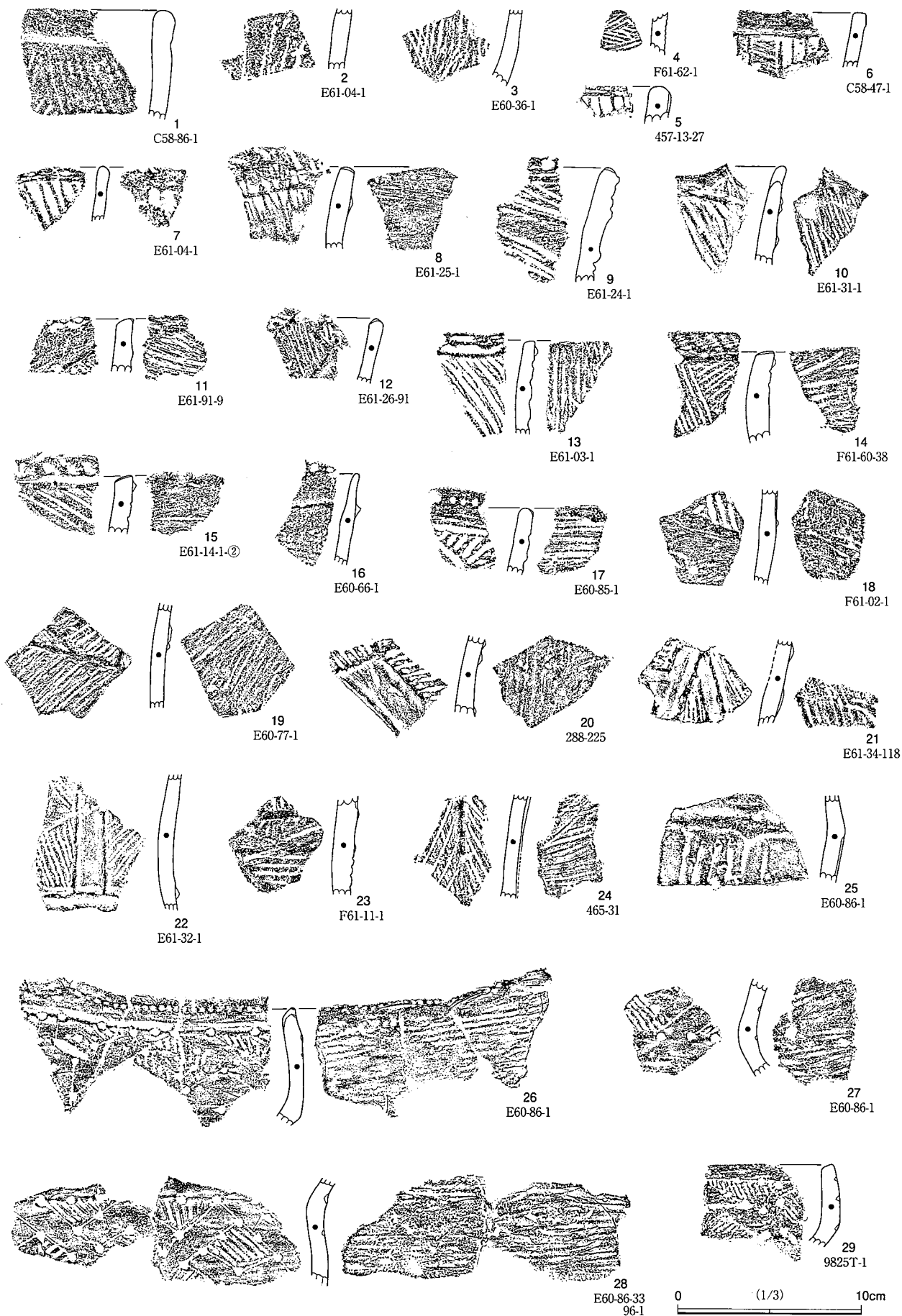
この類も極めて少なく、図示できたのは4のみである。細い櫛歯状工具により矢羽根状の沈線が施される。田戸下層式と思われる。

第3類 早期の条痕文系土器である。(第63図5～第64図53、第70図159・168 図版31・33)

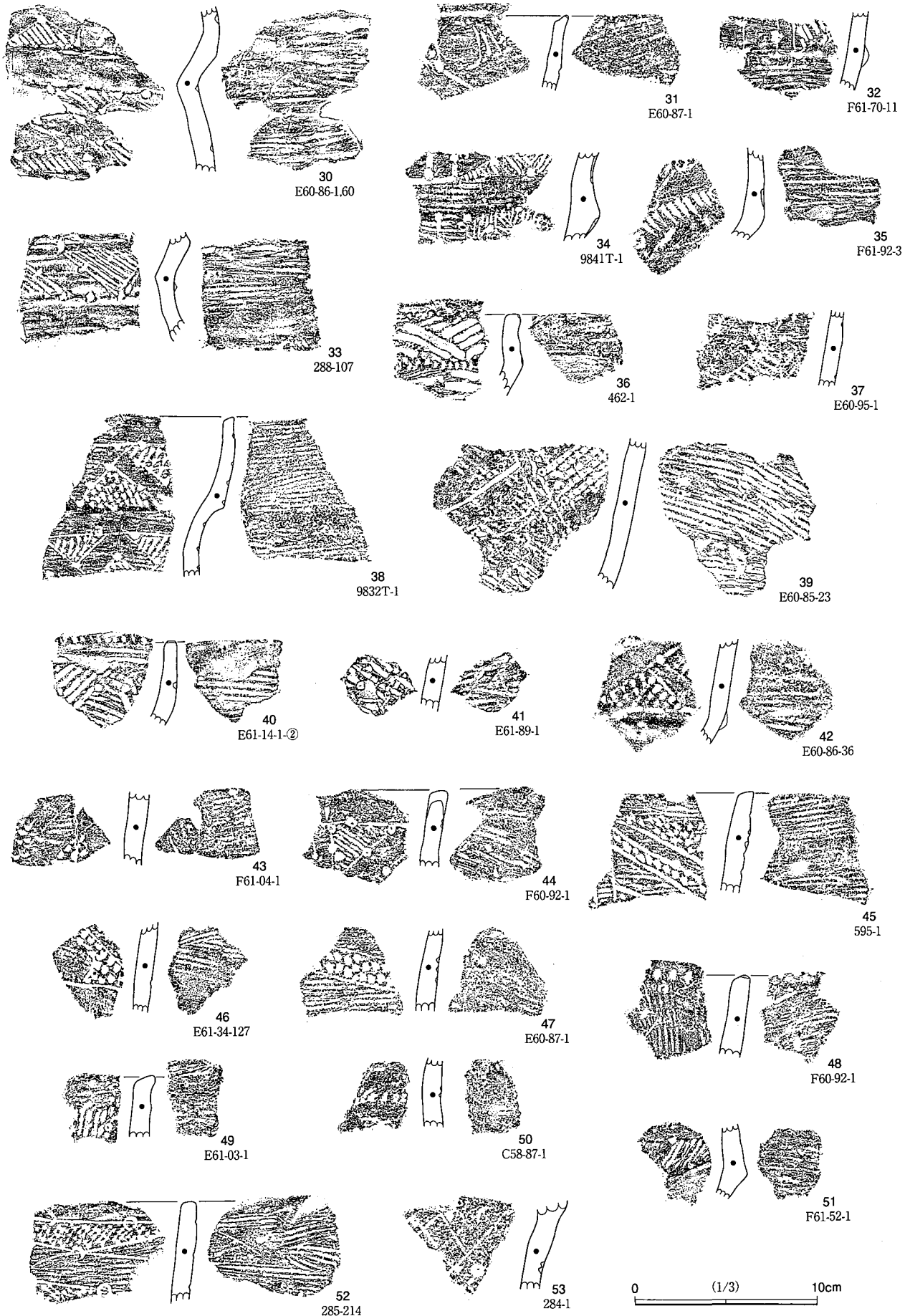
本遺跡で最も多く出土している。調査区北西のC58、D58区の南側及び調査区中央のE61・62区が分布の中心で、当該期の遺構の分布域と重なっている。

5～24、168は野島式に比定される。細隆起線による区画文と集合沈線で文様が構成されるもので、胎土に微量の繊維を含んでいる。口縁部は平縁と山形の波状口縁があり、口唇部上端に刻み目を加えるものがある。5～8は区画内を幅広の角棒状工具で浅く窪め、微隆起の条線を作成している。集合沈線は太く間隔の比較的広い13・17、細く比較の間隔の広い14・15・20・23・24、細く間隔が狭い12・19・21・22がある。168は波状口縁の上端に刻み目を入れ、その頂部から細隆起線が垂下する。

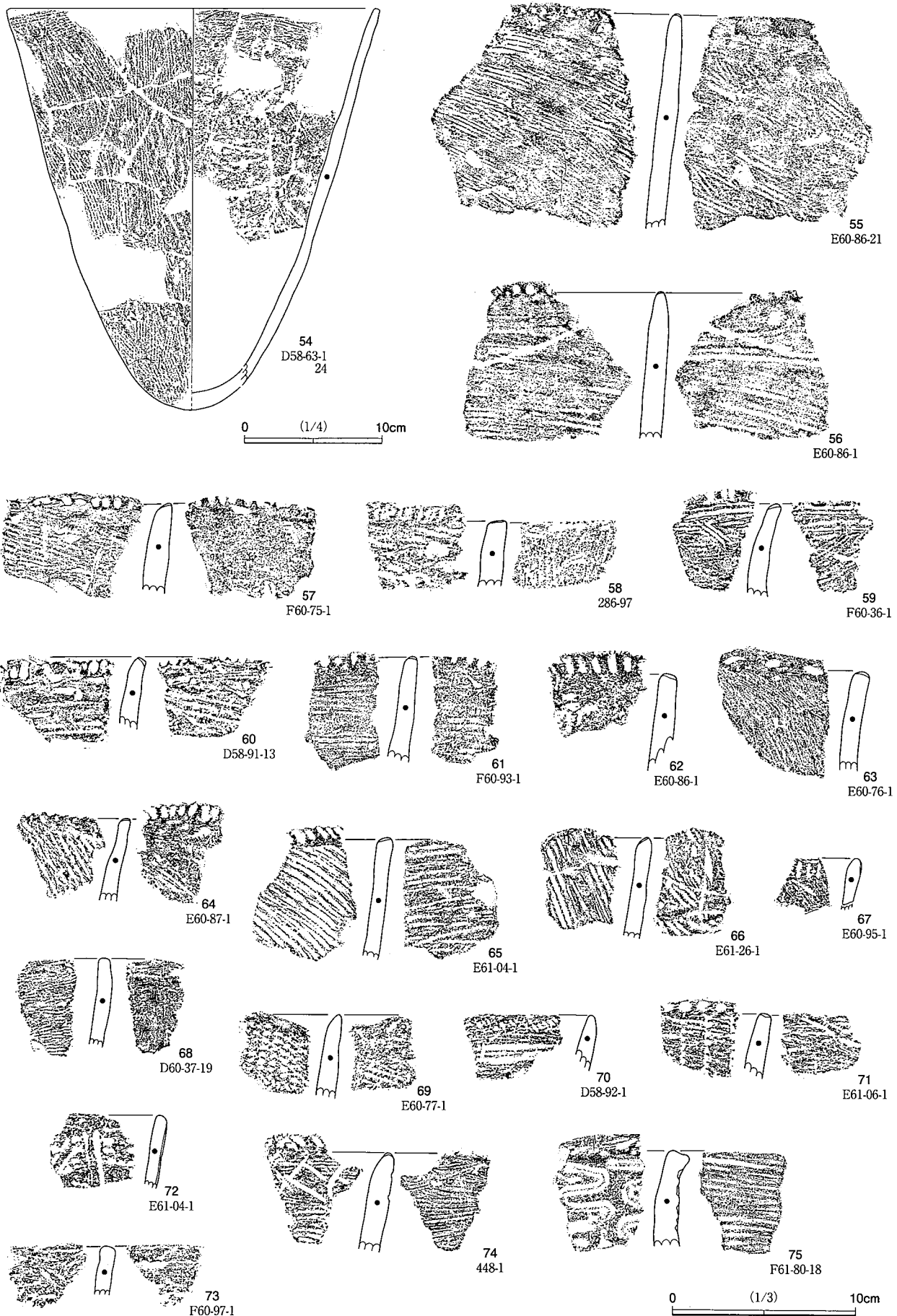
26～47・49～53は鶴ガ島台式に比定される。外面の基本的な文様は細隆起線あるいは沈線によって文様帯を構成し、沈線による区画線上の要所に円形刺突文、区画内を集合沈線で飾るものである。胎土に繊維を含み、内面は貝殻条痕文が施文される。全体の器形がわかるものはないが、口縁部がやや内傾して立ち上がり、胴部との境に強い屈曲部を有している。なお、胴部以下の破片はその多くが貝殻条痕文で覆われるため、後で述べる広義の茅山式で扱った。26は口唇部上端には刻み目を施す口縁部である。細隆起線で横位文様帯を構成し、沈線で櫛状の区画を作成し要所に円形刺突文を加えている。区画内は棒状施文具により集合沈線が施される。同類に27・28・30・33・51がある。29・34・38は横位文様帯を沈線で区画する。31は口唇部が内削ぎ状で、上端に刻み目が加えられる。横位文様帯を構成する細隆起線等はなく、沈線と円形刺突文だけで区画し、集合沈線が口唇部まで達している。32・34・35は胴部上位の屈曲部であ



第63図 グリッド出土土器(1)

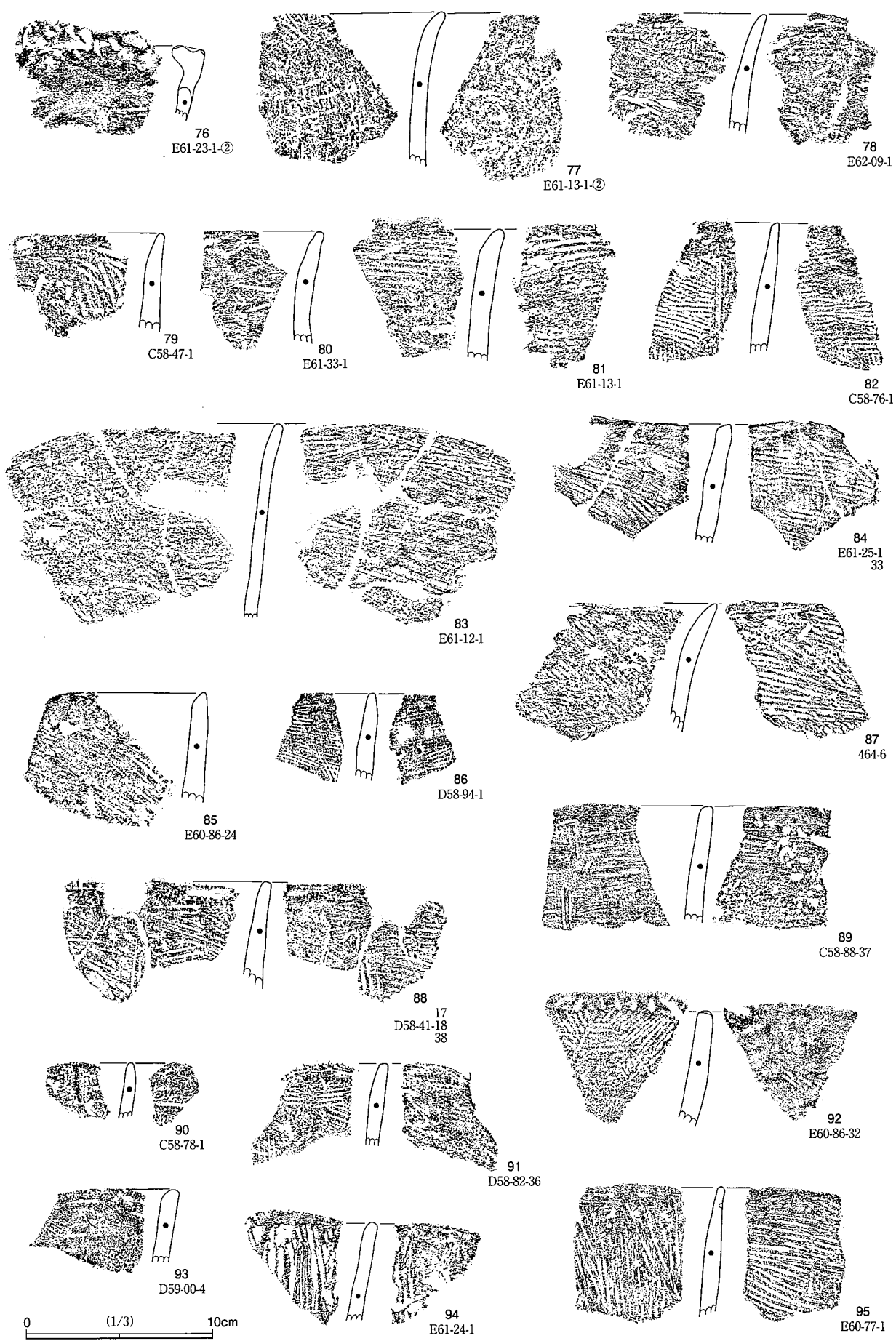


第64図 グリッド出土土器(2)

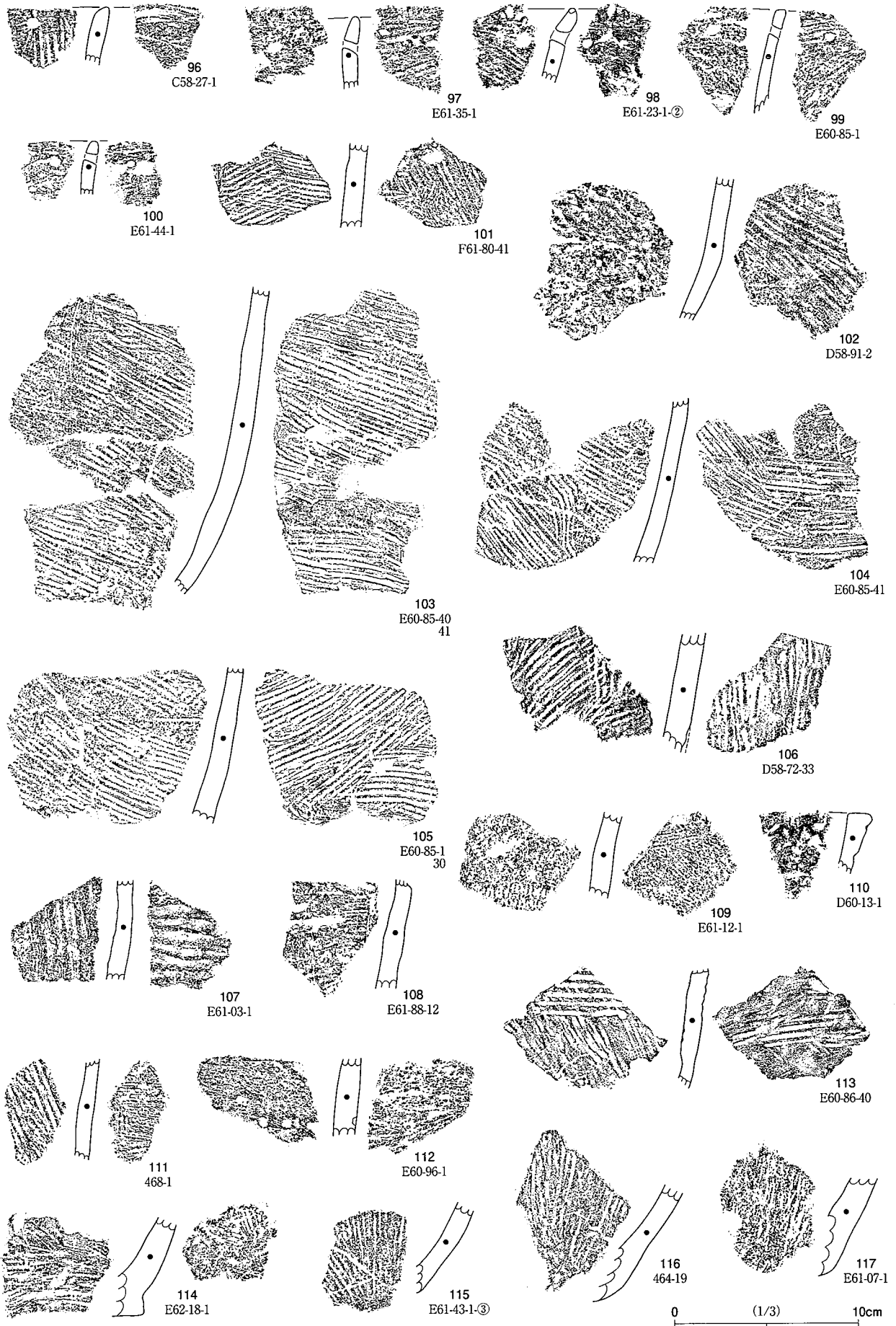


第65図 グリッド出土土器(3)

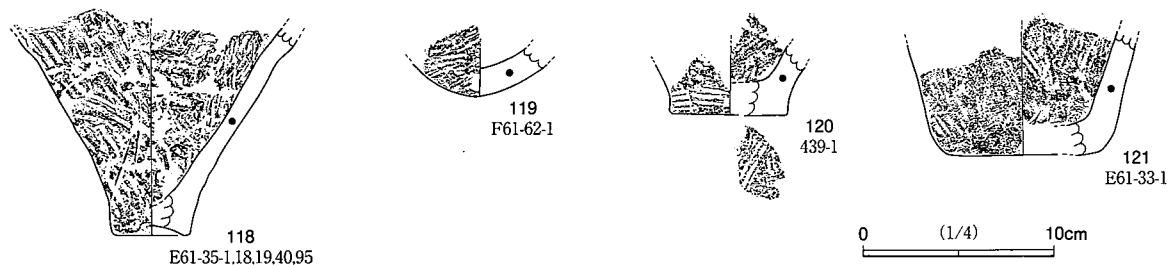




第66図 グリッド出土土器(4)



第67図 グリッド出土土器(5)



第68図 グリッド出土土器(6)

る。35は屈曲部の凸面が文様帯を区画する要素となっている。36は口縁部上部の屈曲部に連続して刻み目を入れ幅広の集合沈線を施している。区画内に充填される集合沈線は、棒状施文具による直線的なものや38~44のような押し引き状のもの、あるいは45~47のように縦列に刺突文を施すものがある。52は横位文様帯や縦の区画文が崩れ、2列単位の刺突文を加えるものが見られる。53では区画文が見られず、格子状の沈線文に円形刺突が唐突に加えられている。159は連続する刺突文で文様を構成するもので、茅山下層式と思われる。

第4類 器面全体に貝殻条痕文が施されたものを一括した。(第65図54~第68図121、図版31・32)

54は図上ではあるが唯一全体を復元できた土器である。推定口径cm、器高cm、器形は平縁の口縁部から次第にすぼまって丸底の底部となる。外面は縦方向、内面は横方向の貝殻条痕文が全面に施される。55~65・92は平縁の口縁部で、口唇部に刻み目を施すものである。66は丸みのある山形の口縁部で、口唇部内面に刻み目を加えている。67~71は口縁部あるいは口唇部に貝殻腹縁によるの押捺、刺突を施すものである。72~76は半截竹管あるいは棒状工具で沈線を施すもので、75は曲線文となっている。また、76は厚くした口唇部上端に沈線を施している。77~91・93~100は平縁で口唇部に刻み目を持たないもので、98には補修孔が認められる。101~113は内外面に貝殻条痕文が施される胴部である。条痕の方向は様々で、またその間隔も施文具により幅広のもの、狭いものがある。114~121は底部である。丸みを帯びた尖底のものと平底のものがある。

第Ⅱ群 縄文時代前期の土器

第1類 関山式に比定されるもの(第69図122~135、図版32)

122は双頭の波状口縁で、口縁に沿って刻み目のある細隆起線を配し、その下位に細隆起線による直線、蕨手文と細隆起線上に瘤状貼付文を加えている。123~128は梯子状沈線文に瘤状貼付文が付されるものである。29も沈線が明瞭ではないが、梯子状沈線文の類である。130~135は縄文が主となるものである。131は平縁の口縁に沿ってコンパス文が一条入り、その下位にはLの縄文が施される。130・132は組紐文、133~135は環付末端縄文が施される。

第2類 黒浜式に比定されるもの(第69図136~第70図158・160~167・169~182、図版32・33)

136~143は平縁の口縁部で、縄文が主文様となるものである。縄文は136・139・140がLR、138・140がL。142はLRとRLの羽状縄文を地文として、沈線が加えられる。143は撚糸文か?。144は波状口縁に頂部、145は口唇部内面に刻み目のある隆帯が付されている。146は口唇部上端に刻み目、147は口縁部に

沿って円孔が連続して穿たれている。148は横方向の隆帯に沿って、棒状工具による沈線が施される。149～158、160～165は縄文が主となるもので、原体によって様々な文様効果が出されている。150・153・154は2条単位の撚糸付加条縄文、151・152は羽状縄文、155・158は短方向に施文されている。157は結節文が認められる。160・161は反撚りの縄文、162・164は撚糸文、163は軸繩に撚りの異なる二種類の繩を付加したものである。166～175は沈線を主文様としたものである。169・170は細い棒状工具により格子状あるいは直線的な沈線を施している。166・167・172・173は半截竹管による沈線で山形あるいは木の葉状の文様を施し、174・175は連続爪形文を施している。176・177は無文の口縁部である。胎土に繊維を含むことや焼成、色調、内面の調整等が本類に近似する。178～182は底部である。平底を基本とし、180のように上げ底のものがある。

第3類 前期後半のものを一括した。(第63図2・第71図183～221、第72図231・235・236、図版31・33・34)

本類の型式としては諸磯式、浮島式、興津式の範疇に入るものである。183は半截竹管による有節平行沈線に円形刺突が加えられる。184・185は弧状の平行沈線に円形刺突が加えられる。186・187は縄文を地文として有節平行沈線が施される。188・187・181は刻み目のある浮線文が施文される。192は口縁部に沿って半截竹管による平行沈線が施される。以上は諸磯b式である。

193～199は撚糸文を地文として半截竹管による平行沈線で文様を施す。浮島I式。200～203、212～214は縦方向の連続する刻み目が口縁部に施されるもので、200の下位には変形爪形文、212～214では棒状工具による連続刺突が加えられる。204・205は有段口縁の一部である。2、206～209は波状貝殻文あるいは貝殻文が施されるものである。210には三角文が施される。以上は浮島式II～III式である。215～218は密集する貝殻文に半截竹管による沈線が加えられる興津II式である。219～221は底部である。231・235は半截竹管による変形爪形文を施すものである。236は波状口縁の頂部に突起を持ち、口縁に沿って半截竹管による平行沈線、刻み目のある隆帯、有節平行沈線、円形刺突文が施される。

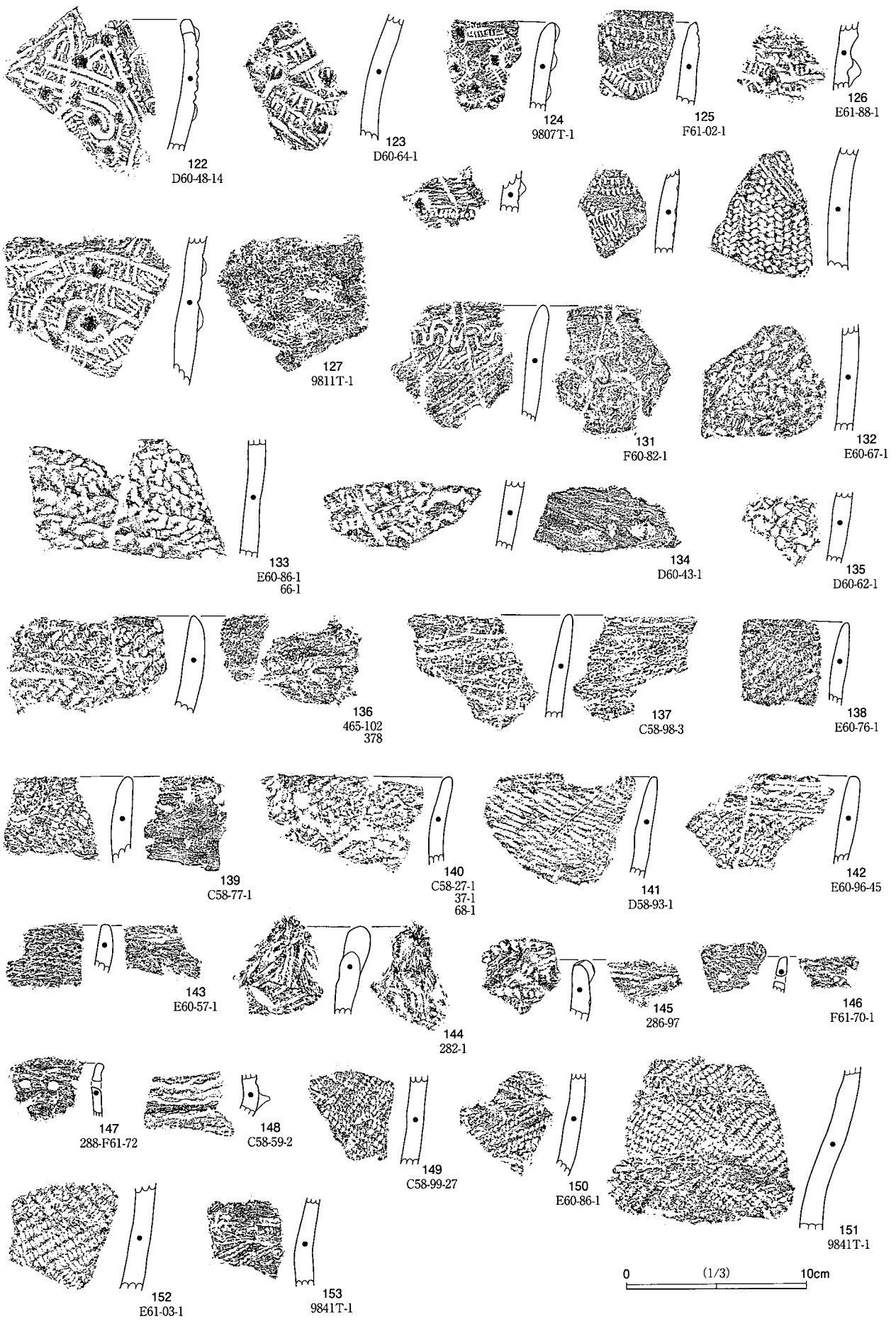
### 第Ⅲ群 縄文時代中期の土器

第1類 中期初頭の土器 (第72図222～230・232～234、237・238、図版33・34)

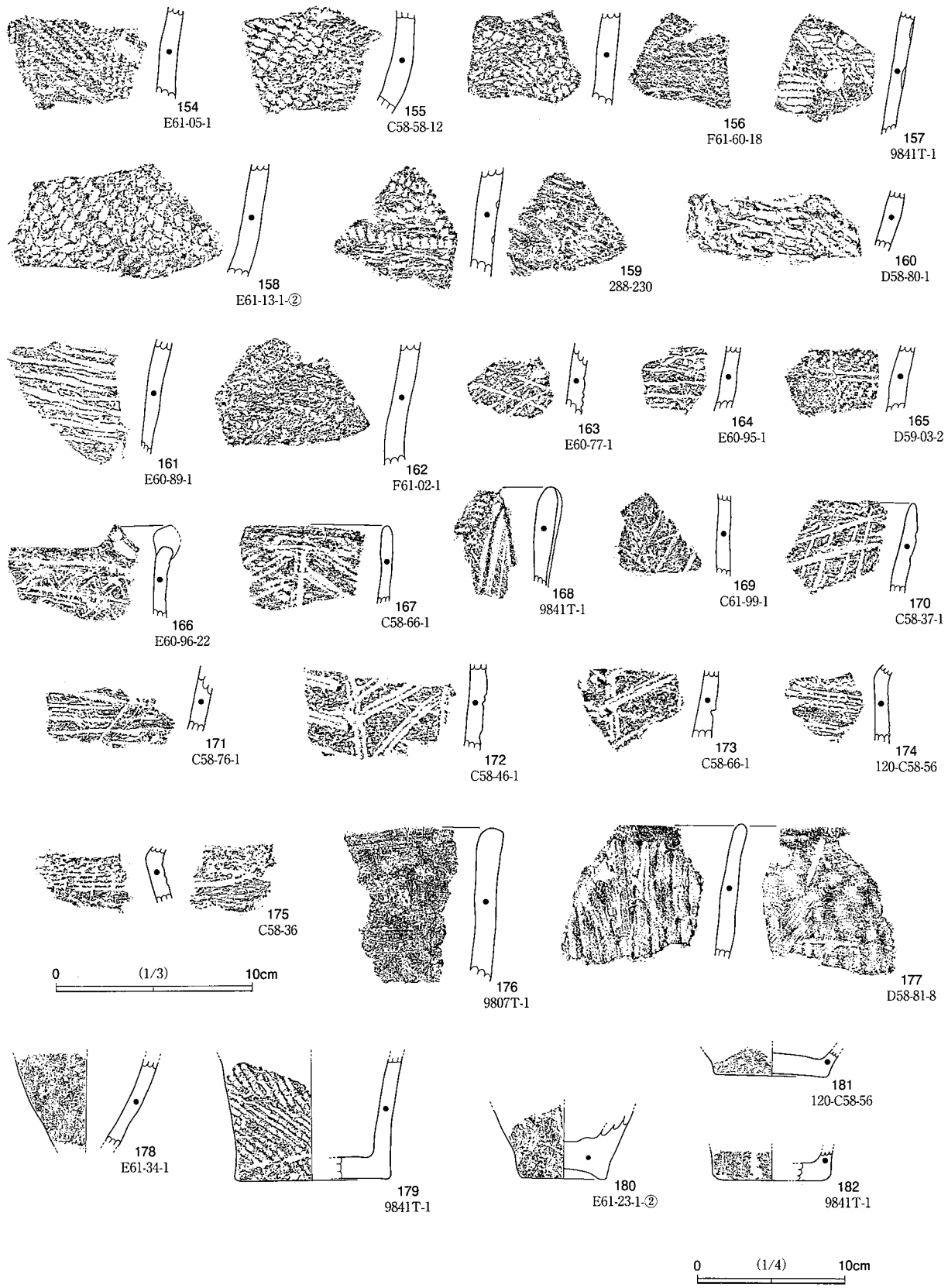
本類は前期末～中期初頭と思われる土器を一括したが、その帰属が不明な土器も扱った。222は口唇部上端に連続する刺突文を施し、口縁部に棒状工具により横、縦方向の沈線文を加える。内面は弱い擦痕が認められる。また、胎土に白色粒を含む。223・224は同一個体と思われるもので、口縁部とその下位に隆帯を持ち、隆帯上に細く深めの沈線が入る。224は223の下段になるが、隆帯下に半截竹管により渦巻文状の文様を配している。器壁が厚く、胎土に白色粒を多く含む。225は半截竹管を2～3本束にしたような工具で横方向の波状文を施す。胎土に砂粒が多く、器面に荒れが目立つ。226は波状口縁の頂部で口唇部上端から縄文が施される。胎土に白色粒が目立つ。227～230は口縁に沿って横方向の撚糸文が施されるもので、227には結節文が認められる。下小野式と思われる。232はLの縄文地に結節文が認められる。233はRLの縄文が全面に施される。234は口唇部が肥厚して外傾する口縁部である。237は隆帯下位に細い沈線文が施される。238はわずかに外反する口唇部に刻み目を施し、その下位はLR縄文が施される。

第2類 加曾利E式土器 (第72図239～245、図版34)

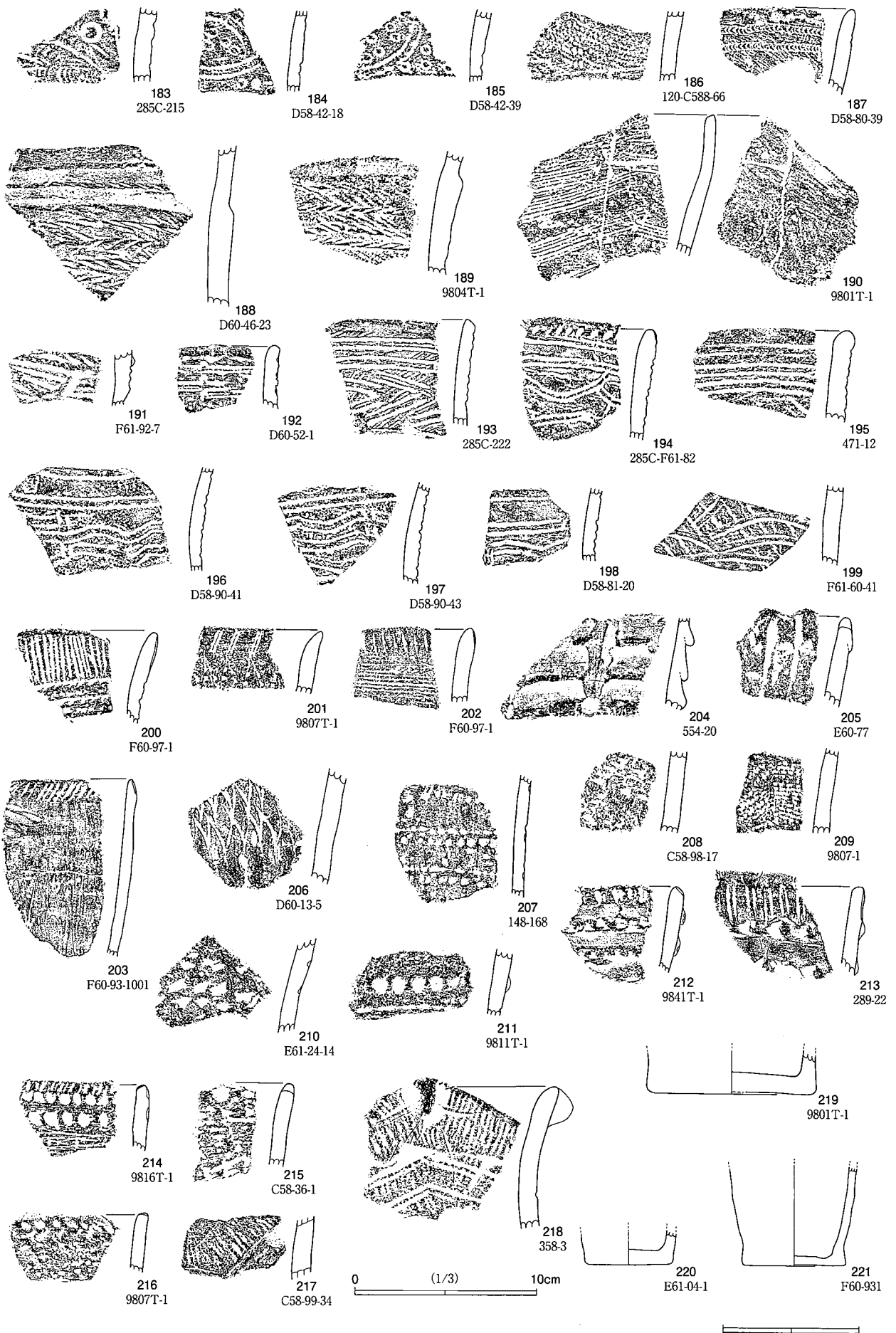
239はキャリパー形の口縁で、隆帯による渦巻き状文と杵状文に沿って沈線を施し、杵内に縄文が充填される。240は口縁に沿って沈線で杵状文を区画し、杵内に撚糸文が充填される。241は口縁に沿って2列の円形刺突文が施される。242は列点文の下位に沈線による逆U字状の杵状文が垂下するもので、杵内に



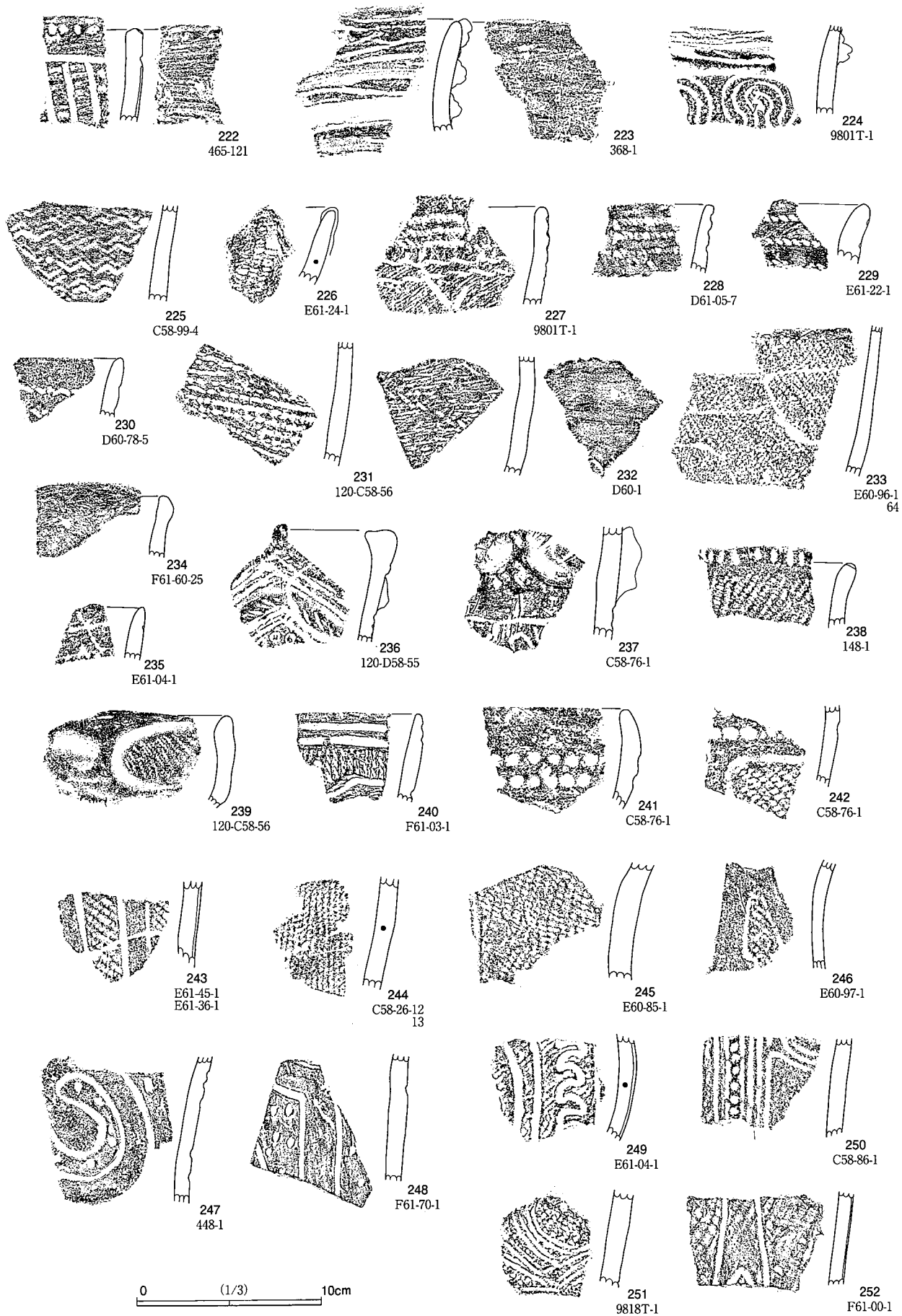
第69図 グリッド出土土器(7)



第70図 グリッド出土土器(8)



第71図 グリッド出土土器(9)



第72図 グリッド出土土器(10)



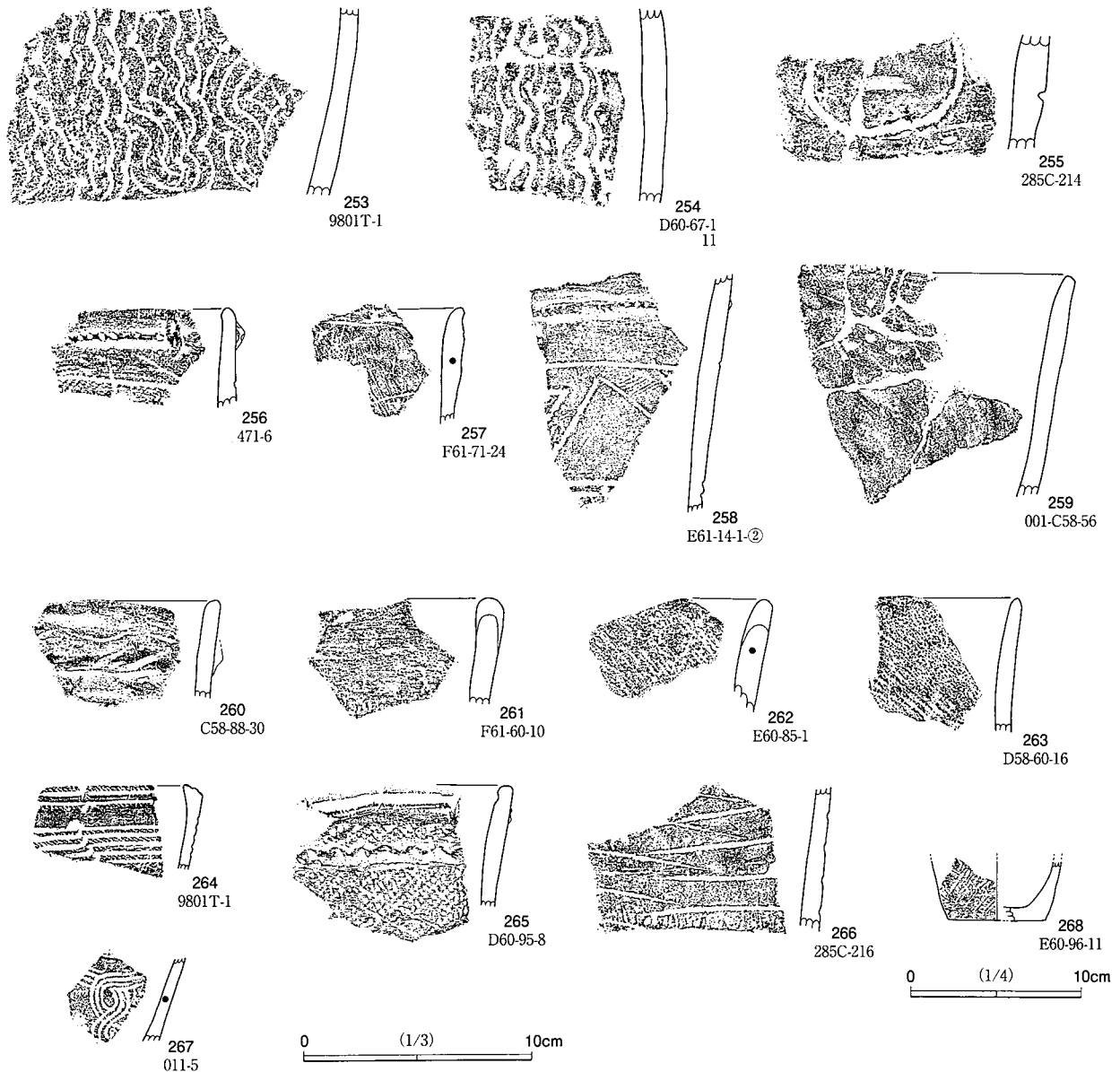
LR縄文が充填される。243・245は縄文を地文として胴部に沈線が垂下し、沈線間が磨り消される。246もその類である。

第IV群 縄文時代後期の土器（第72図246～252・第73図253～268、図版34）

縄文時代後期の土器を一括した。量的には少なく、称名寺式・堀之内式・加曾利B式がある。

246～248は称名寺式である。棒状工具による沈線で意匠文を描き、その内部に縄文あるいは列点文を充填する。

249～263・267は堀之内式である。249～252は縄文を地文として、半截竹管あるいは棒状工具による沈線



第73図 グリッド出土土器(11)

で直線、曲線を施す。250には刻み目のある細い隆帯が垂下する。253・254は半截竹管による波状沈線を縦に施す同一固体である。255は杵状の沈線文を施文する。256・258は刻み目のある細い隆帯に8字形の小突起が付され、その下位に沈線による幾何学状の意匠文が配される。257は細い条線文を斜めに交差させる。259は直線的に開く口縁部で、無文地に小さな刺突文が縦方向に施される。267は櫛歯状工具により入り組み文を施す。260は横走する隆帯と口唇部の間に半截竹管による波状文を施す。261・262は無文の波状口縁である。

263～266・268加曾利B式である。263は細かいLRの縄文が全体に施される。264は口唇部上端と口縁部に細い平行沈線を施し、口縁部は沈線間を縦に区切る。265は縄文を地文として、口縁部に沿って細隆線を貼り付け、隆線上に押捺を加えている。266は幅広の条線文が斜めに施される。268は底部で細かいLRの縄文が施される。

## 6 縄文時代石器（第74～87図、図版35～39）

思井堀ノ内遺跡の調査では、石鏃等の剥片石器、敲石等の礫石器が多数検出された。遺構出土の石器もみられるが、ここでは縄文時代所属の石器について一括して記載する。

1から55は石鏃である。1から20は平面形状が二等辺三角形となり、基部の挟りがほとんど認められない形状である。21から45は同様に二等辺三角形となる平面形状であるが、基部の作出が明瞭である。特に36から38については、先端部から基部付近までの角度が鋭く、両基部が張り出す形状である。46から54は平面形状が正三角形に近く、概して基部の作出も明瞭である。55は尖頭器状を呈する形状である。使用される石材はチャートを主体とし、黒曜石、安山岩である。頁岩、玉髓については少数である。

56から75は石鏃未製品である。56から67は先端部もしくは基部を意識して調整が施され、かつ面的な調整により石鏃本来の形状となる。68から71の調整は、やはり先端部、基部を意識しているが、縁辺のみに留めるものである。72から75は素材剥片の剥離面を多く残しており、調整も周縁のみに止まる。使用される石材は石鏃同様にチャート、黒曜石が多用され、安山岩、玉髓は少数である。

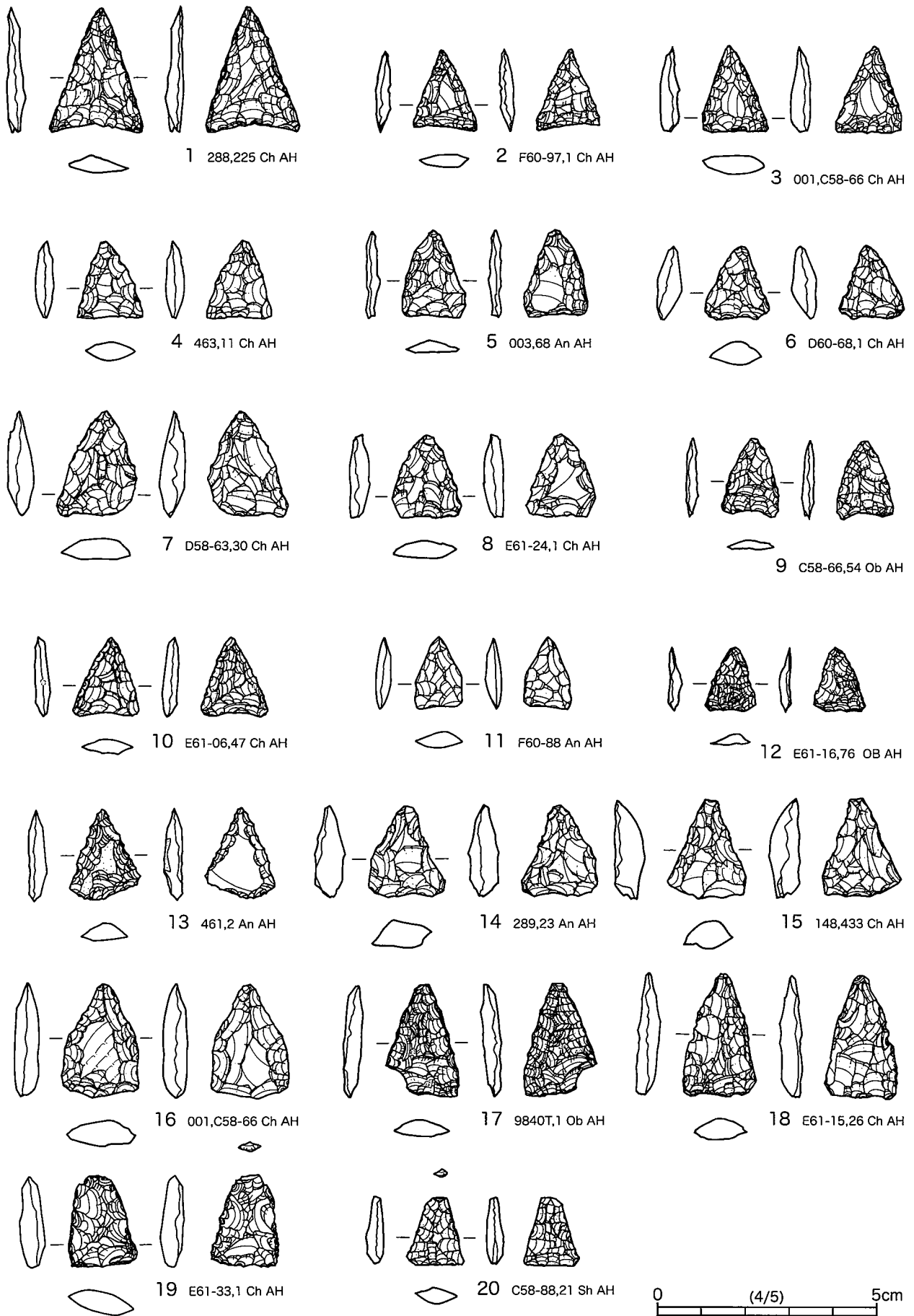
76は石錐である。チャート製の縦長剥片を素材とし、断面形状を正方形に整形する調整が施される。思井堀ノ内遺跡から出土した石錐はこの1点のみである。

77から84は調整痕ある剥片である。78、79のように刃部の作出を目的とした感のあるものは少数で、他のものについては調整目的は不明である。あるいは85、86のように石核となる可能性も考えられる。77の黒曜石を除き、他はすべてチャート製である。

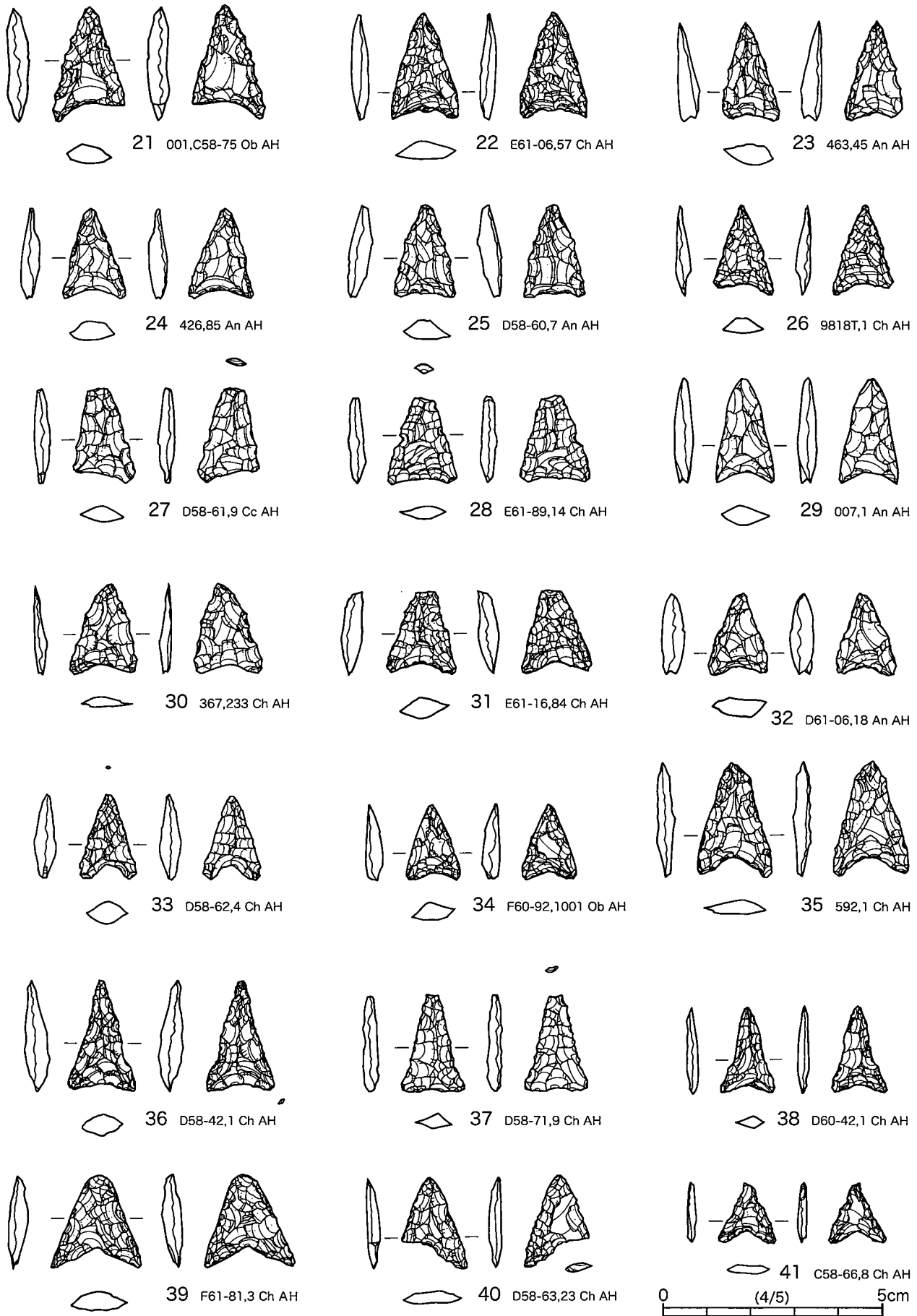
85から87は石核である。85、86はチャート製の円礫を素材とし、85の表裏面には上下両端から剥片を作出した痕跡が認められる。86は素材礫の縁辺に対し剥片剥離を行っている。87は黒曜石製で、頻繁に打面を転移し剥片剥離を行っている。

88から108は打製石斧である。大別して剥片素材と扁平礫素材に分類できる。剥片素材については、88から95、97、102から105、108であり、表面の一部もしくは全面に礫面を有するものもみられる。主要剥離面の剥離の方向は主軸方向がほとんどである。扁平礫素材は96、98から101、106、107であり、刃部のみの調整（98、99、101）、刃部および側縁の調整（96、100、106、107）がみられる。変成岩、安山岩、砂岩が多用される傾向がみられるが、希少な石材として粘板岩（91）、頁岩（99）があげられる。

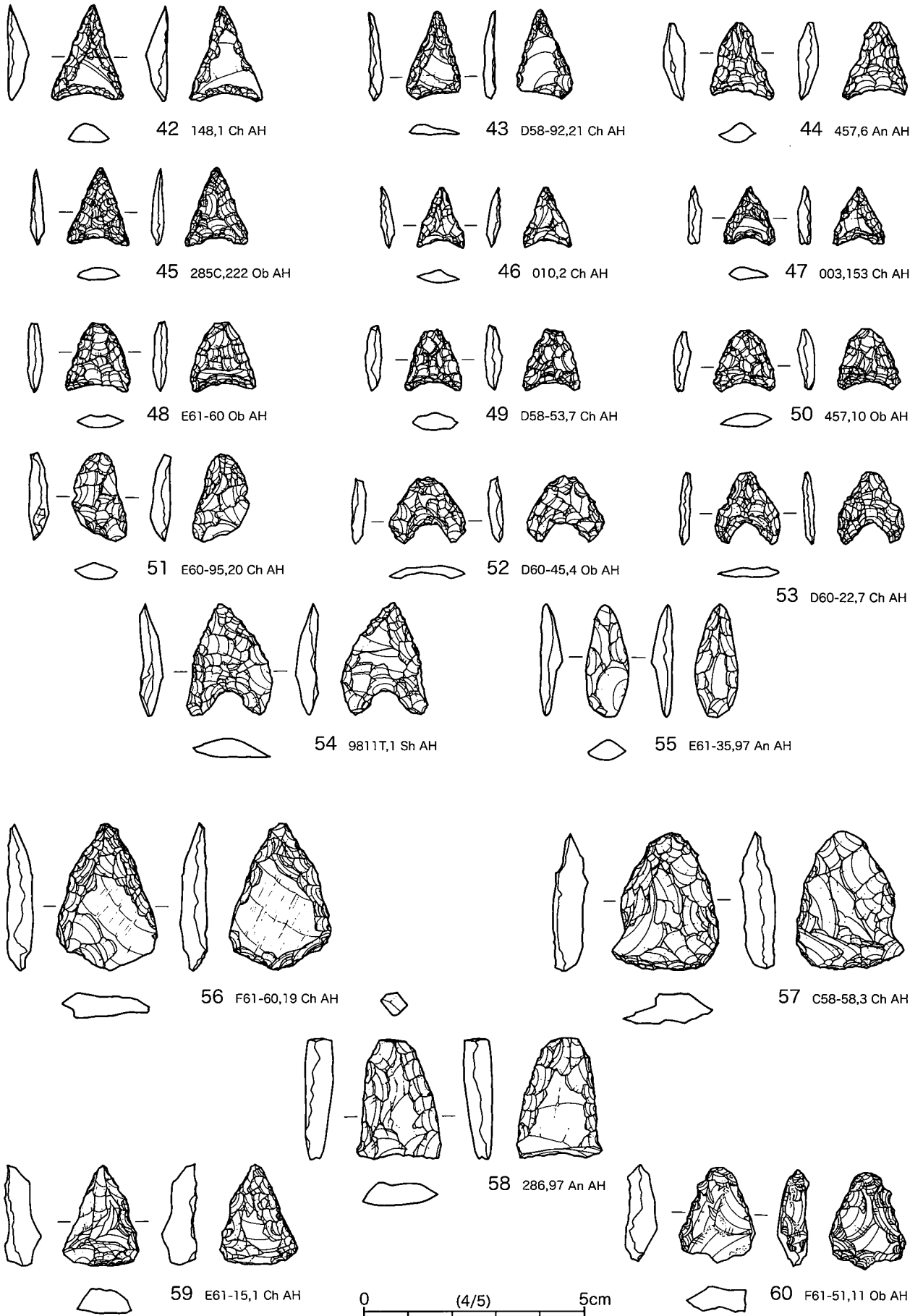
109から117は磨製石斧である。全個体とも研磨により整形される。ほとんどが欠損品であるが、112、114のように刃部欠損、剥落後に再度調整を施し利用している個体もみられる。使用される石材は、緑泥



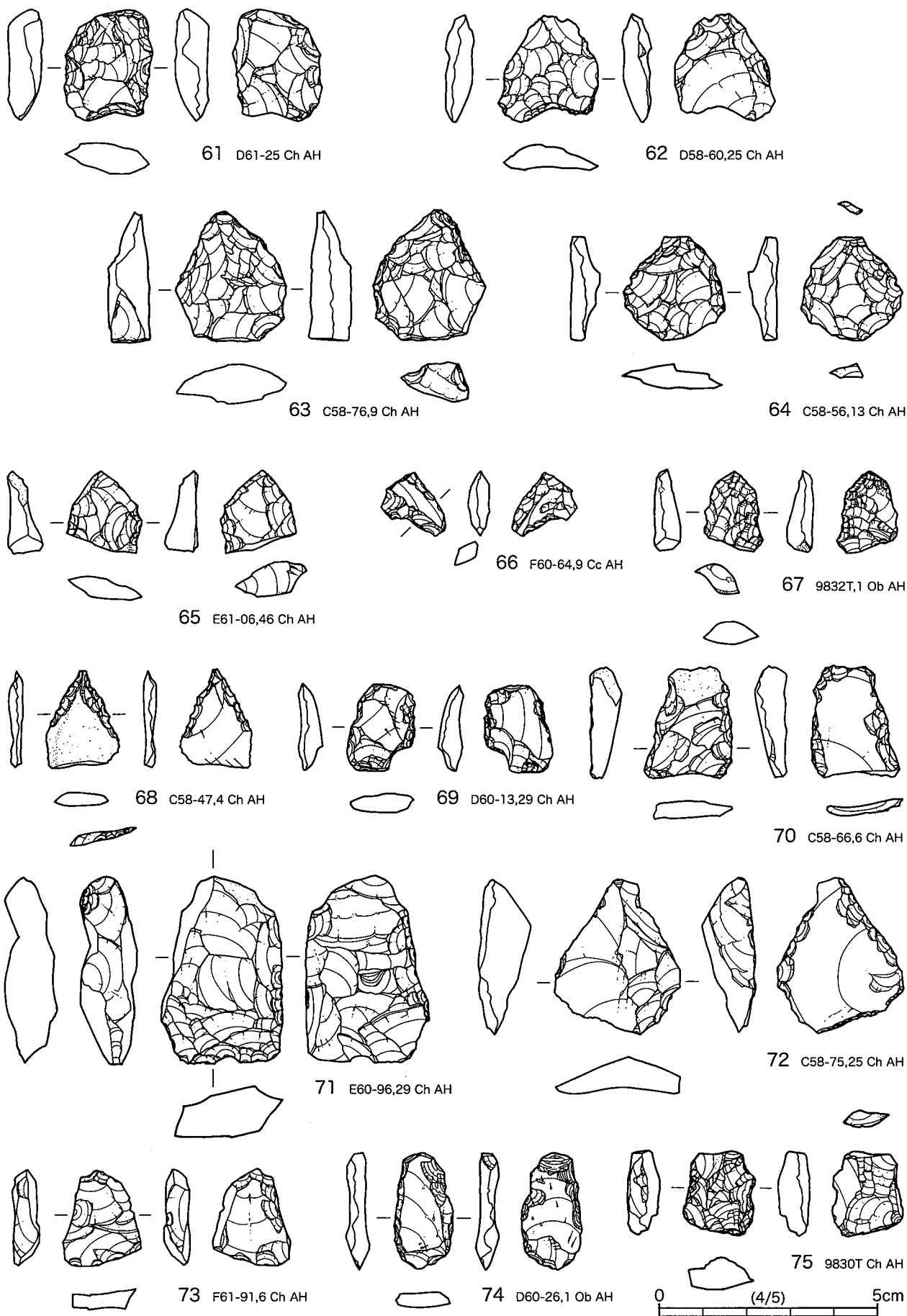
第74図 縄文時代石器(1)



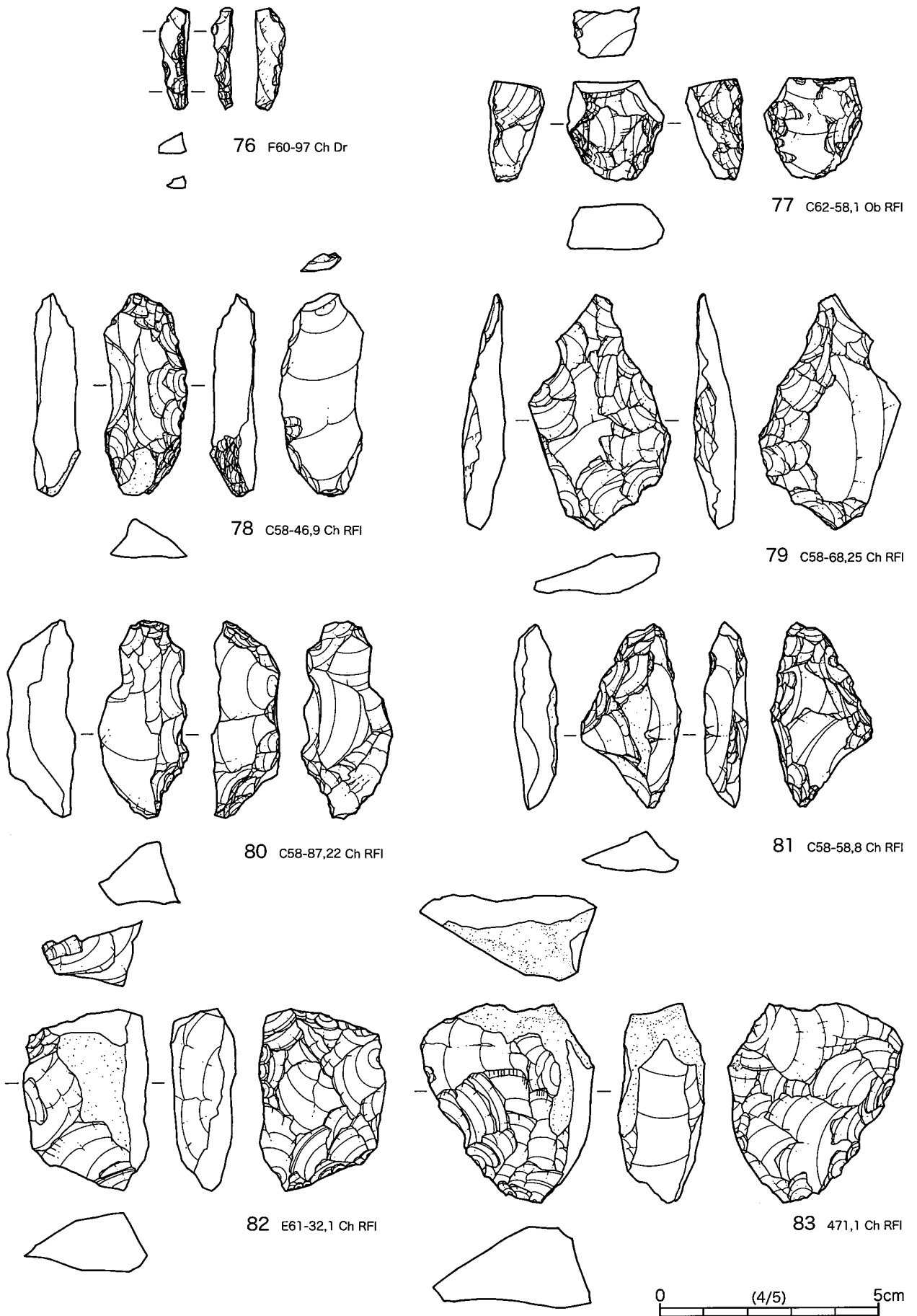
第75図 縄文時代石器(2)



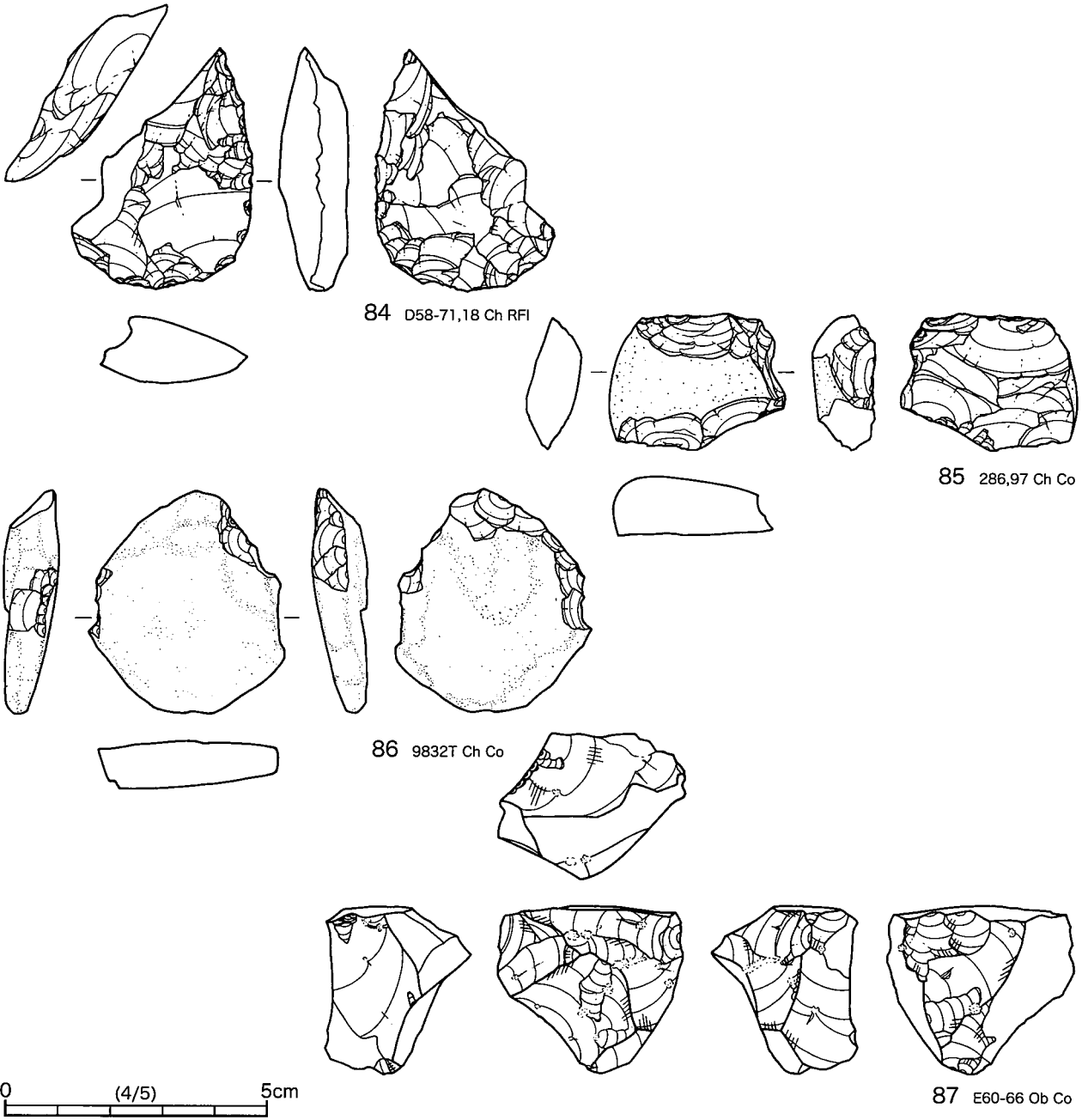
第76図 縄文時代石器(3)



第77図 縄文時代石器(4)

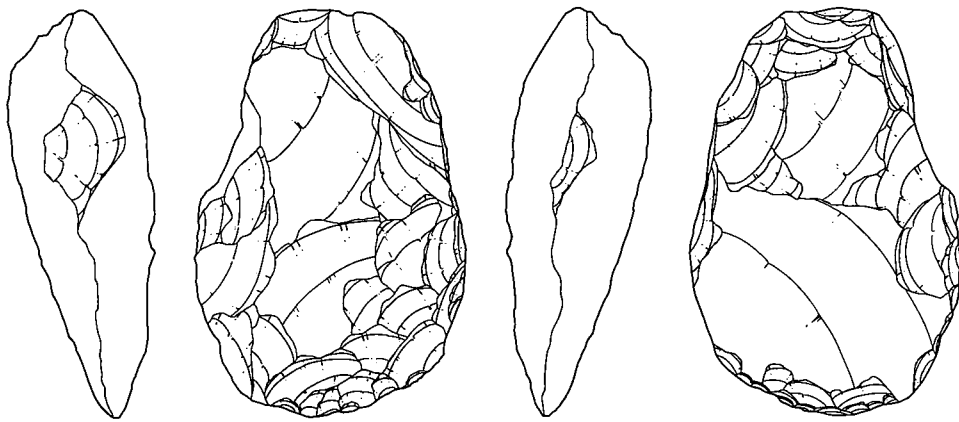


第78図 縄文時代石器(5)

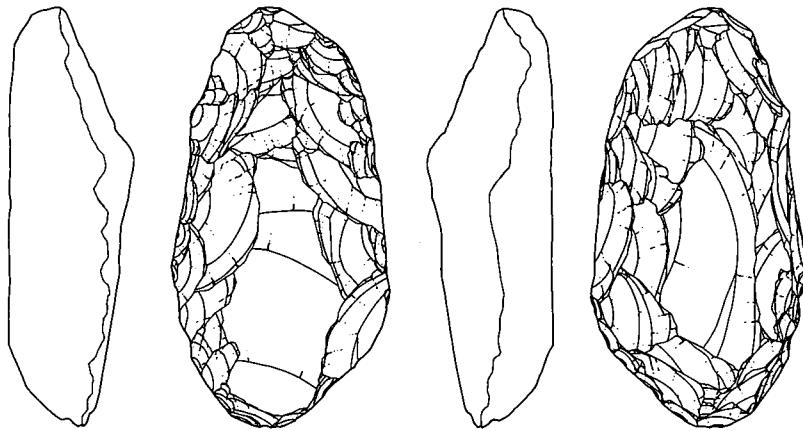
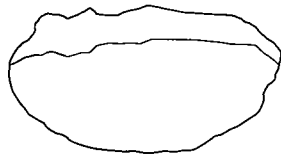


第79図 縄文時代石器(6)

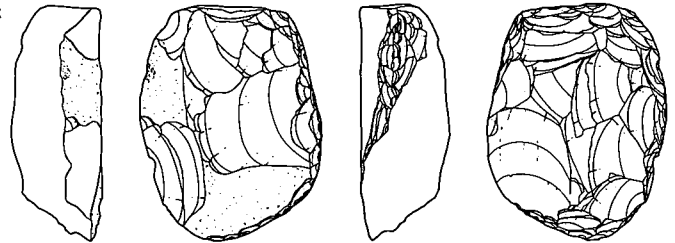
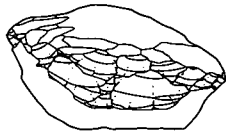




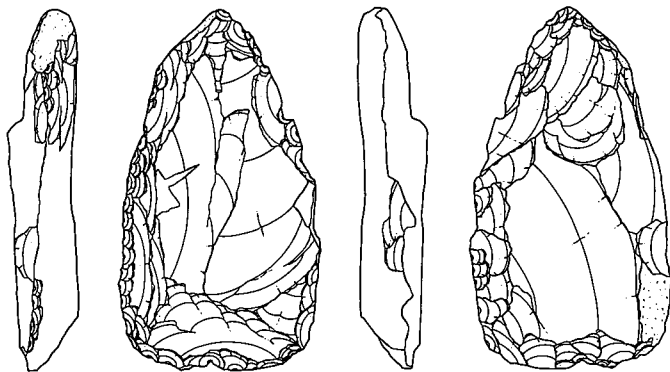
88 425,104 Ho Ax



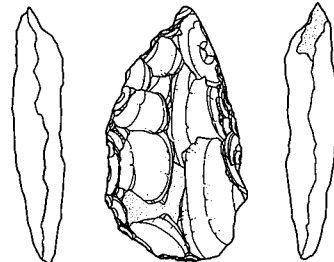
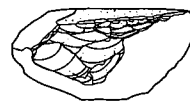
89 E61-15,1 Ho Ax



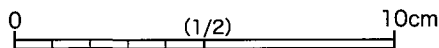
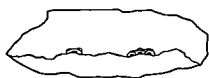
90 031,10 An Ax



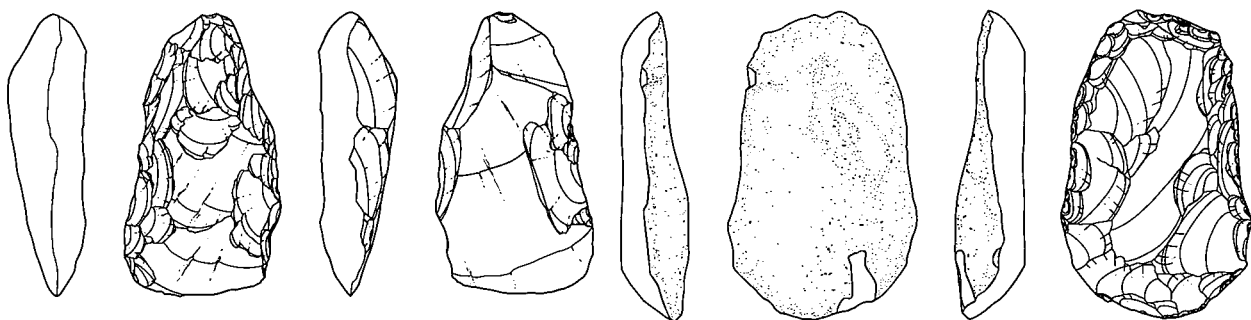
91 F61-81,9 Si Ax



92 D60-86,6 An Ax

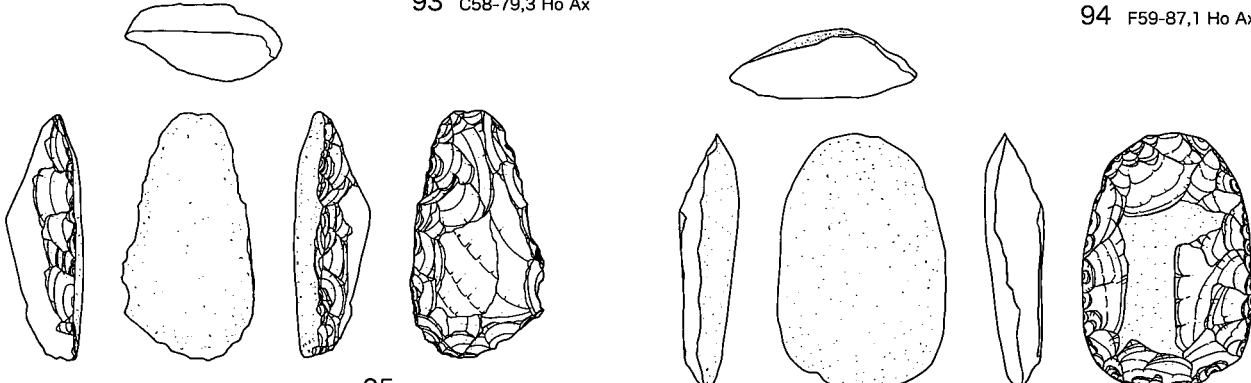


第80図 縄文時代石器(7)



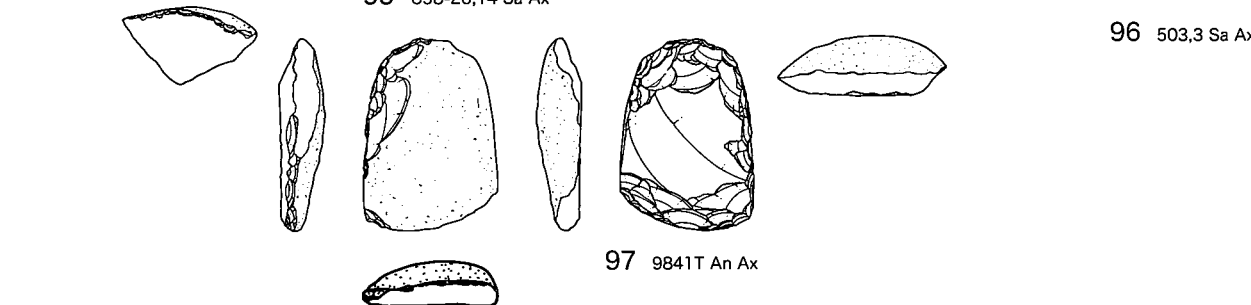
93 C58-79,3 Ho Ax

94 F59-87,1 Ho Ax



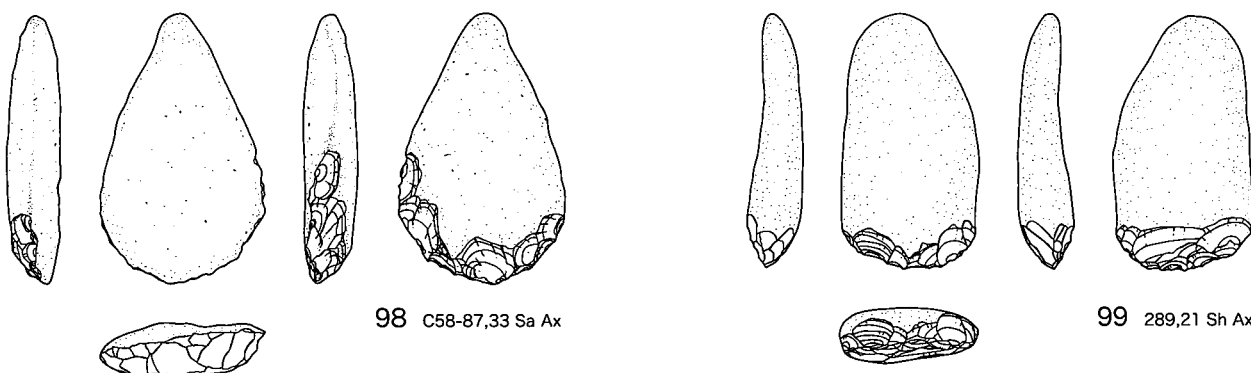
95 C58-26,14 Sa Ax

96 503,3 Sa Ax



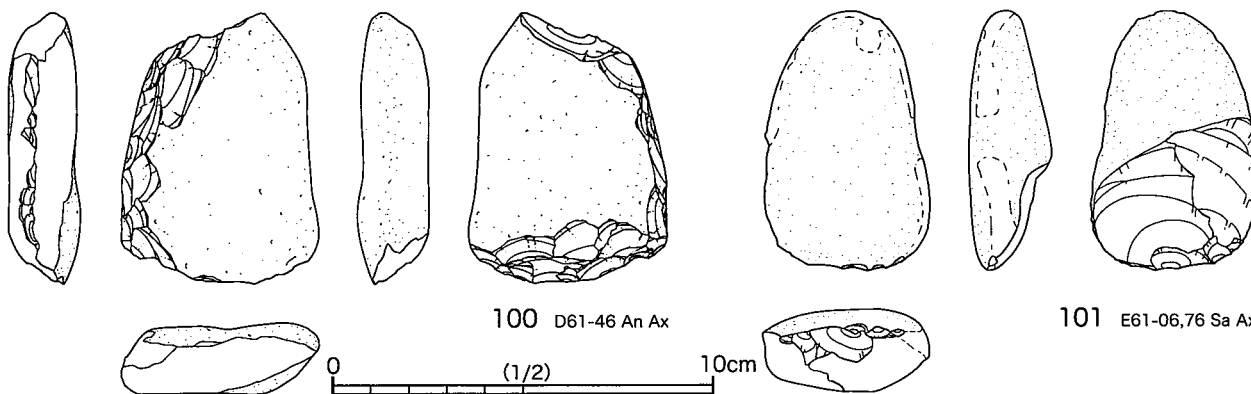
97 9841T An Ax

98 C58-87,33 Sa Ax

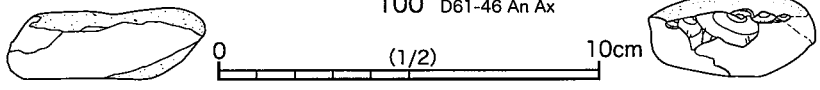


99 289,21 Sh Ax

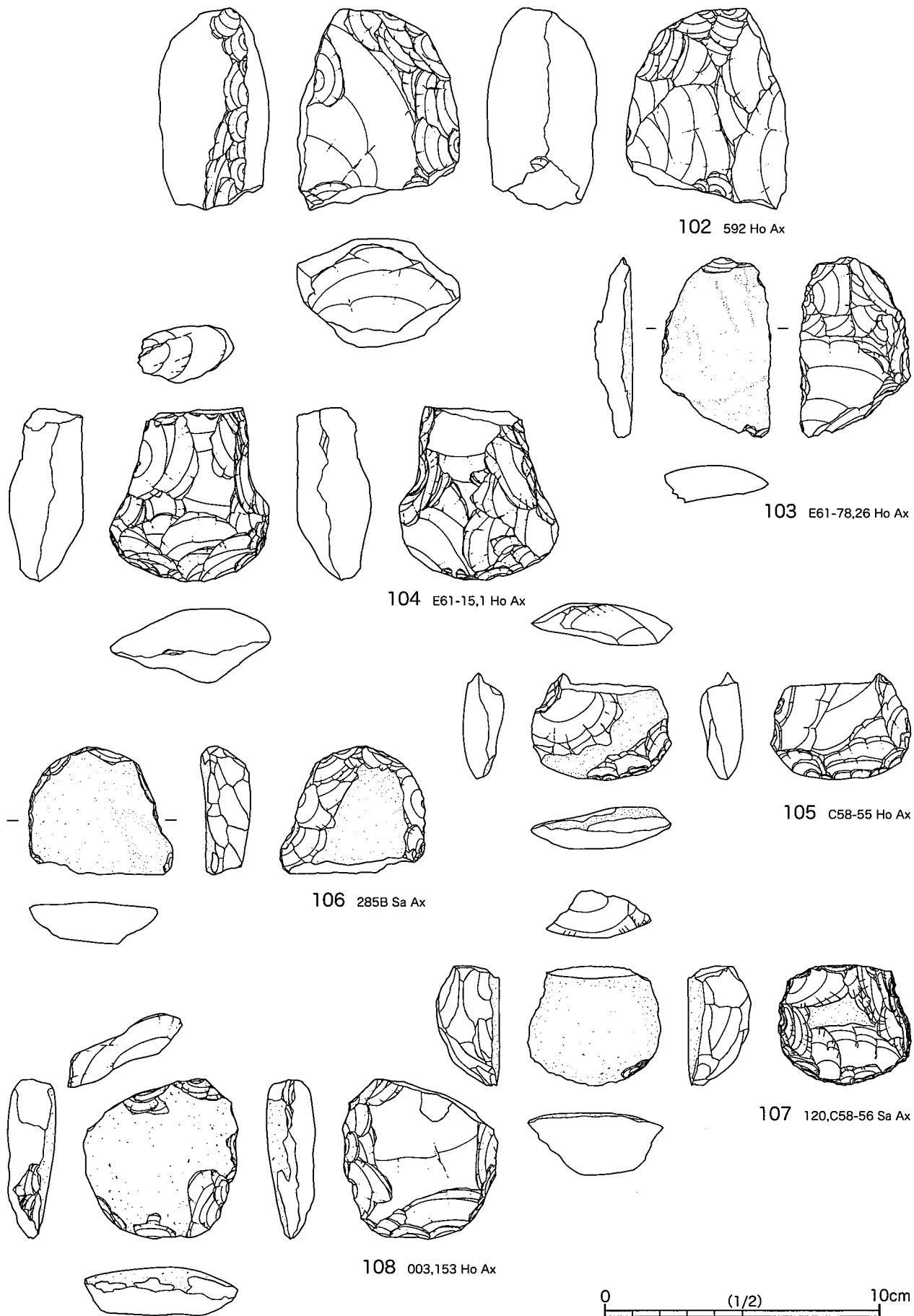
100 D61-46 An Ax



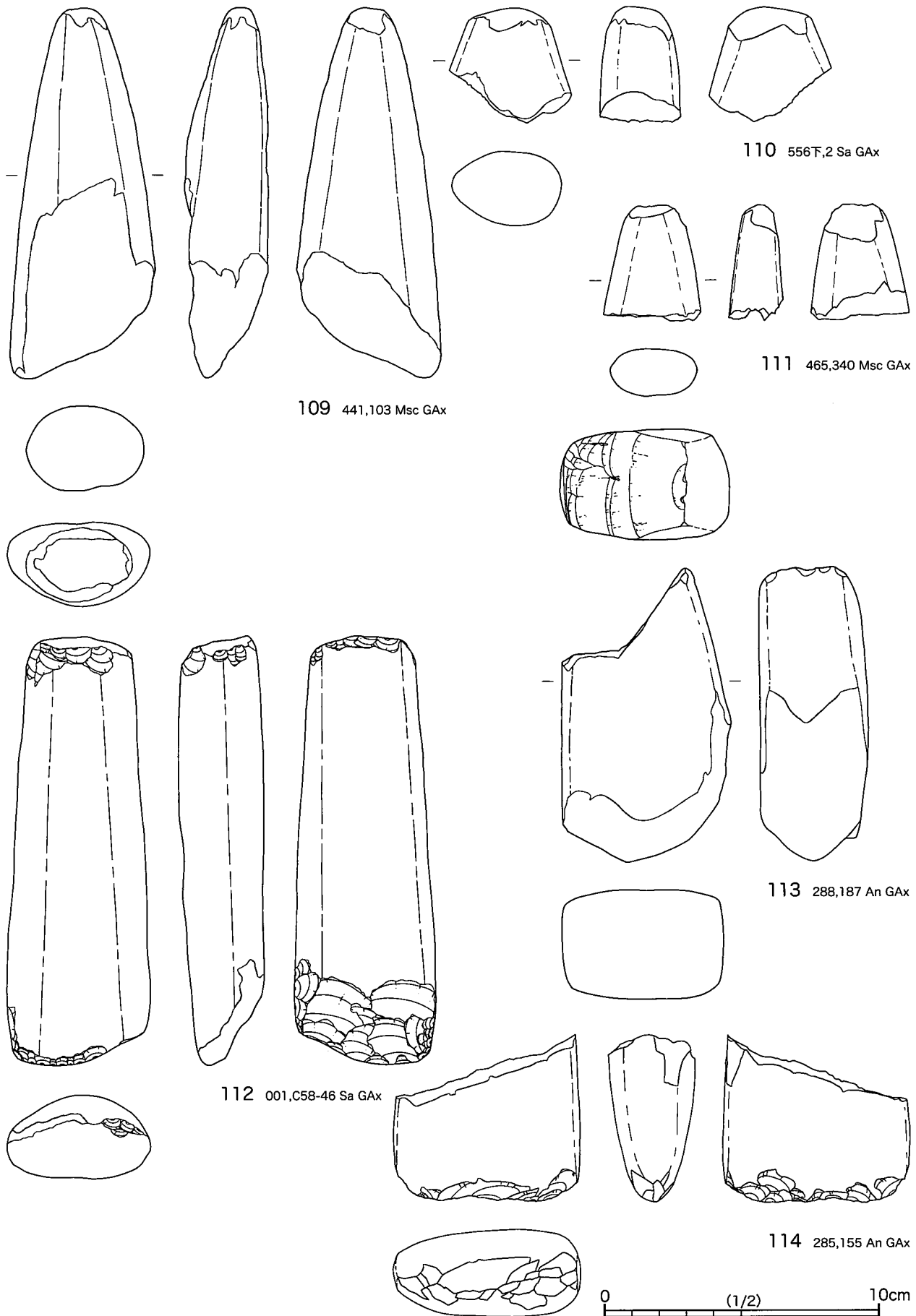
101 E61-06,76 Sa Ax



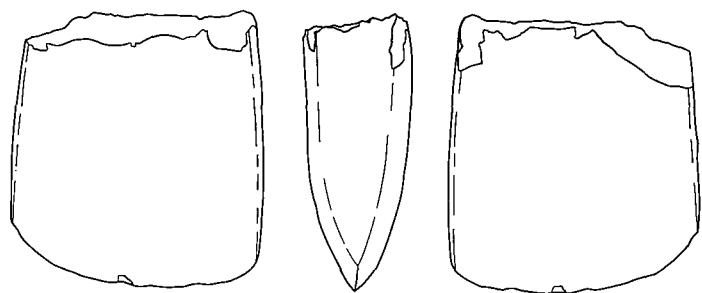
第81図 縄文時代石器(8)



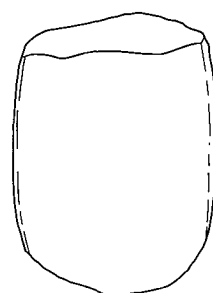
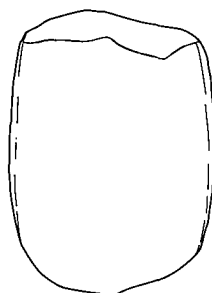
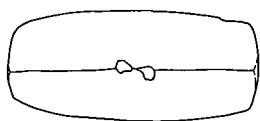
第82図 縄文時代石器(9)



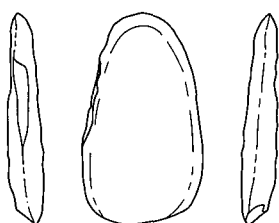
第83図 縄文時代石器(10)



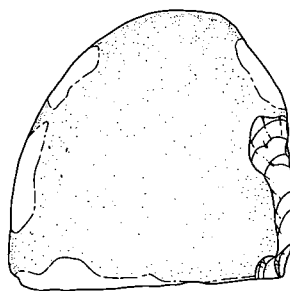
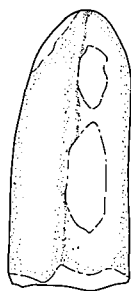
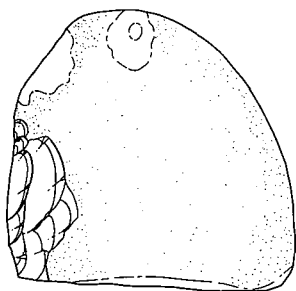
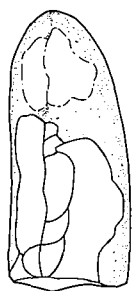
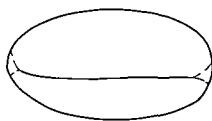
115 593,1 Se GAx



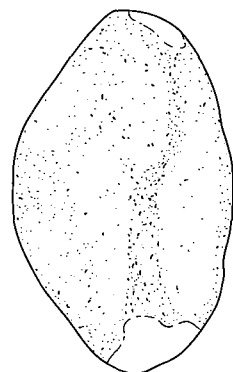
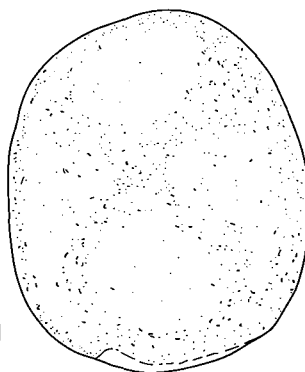
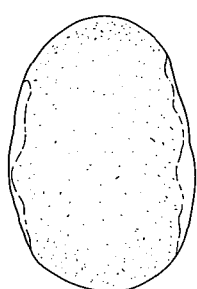
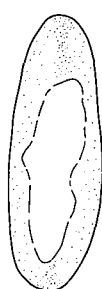
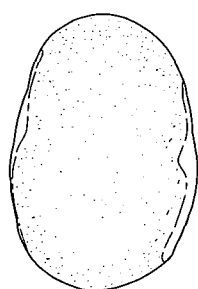
116 E61-23,1 Sa GAx



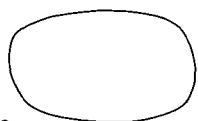
117 E60-96,59 Gn GAx



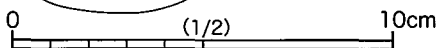
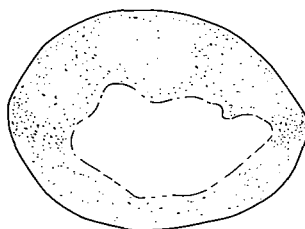
118 457,18 Sa St



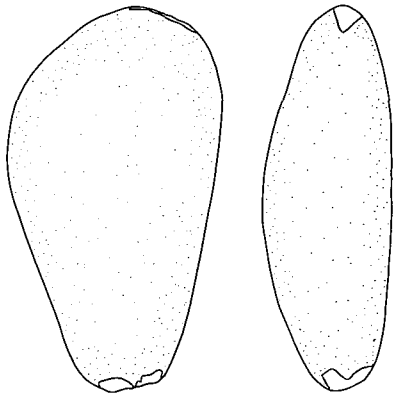
120 D58-60,18 Qp HS



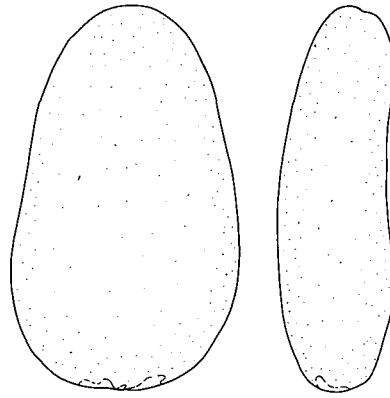
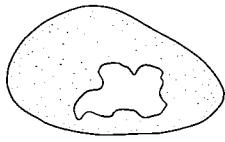
119 D58-92,38 Sa HS



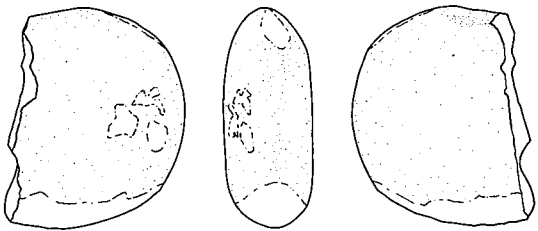
第84図 縄文時代石器(11)



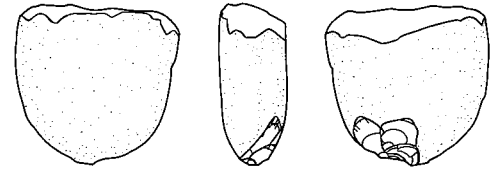
121 D58-62,15 Sa HS



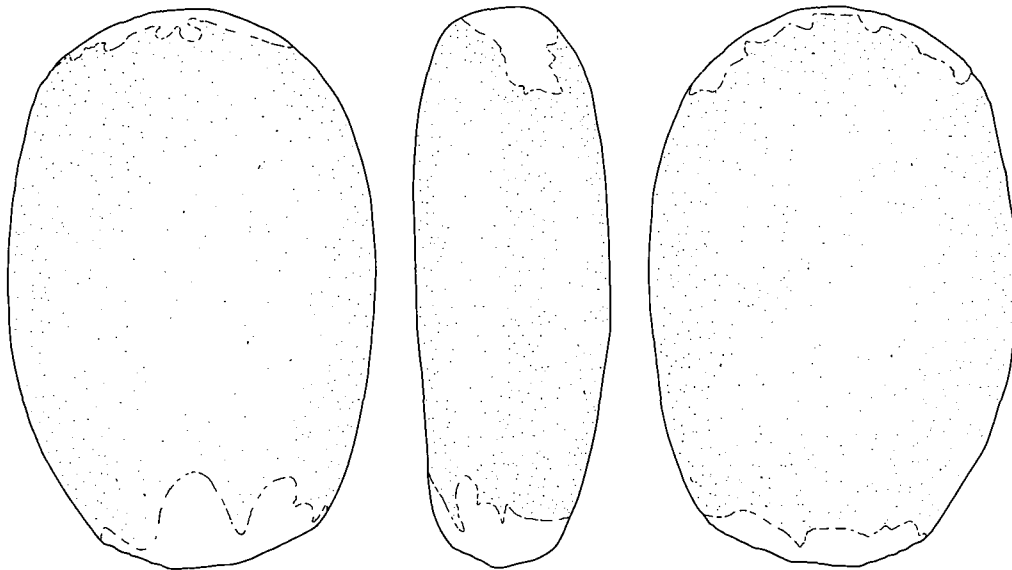
122 E60-87 Sa HS



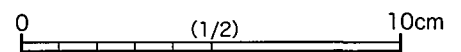
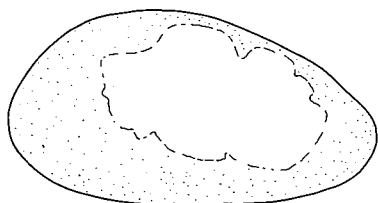
123 E61-16,1 Sa HS



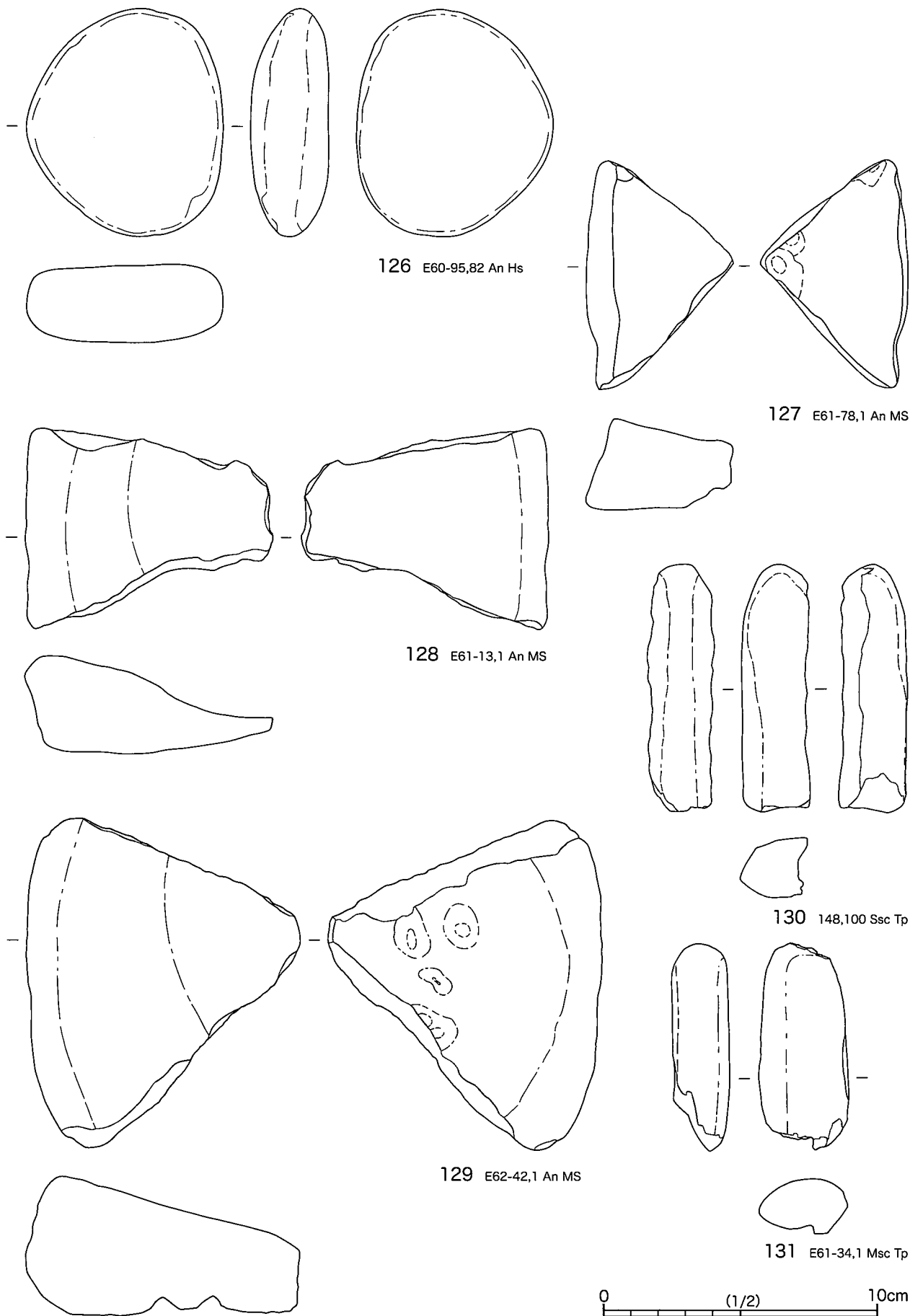
124 E61-42,1 Sa HS



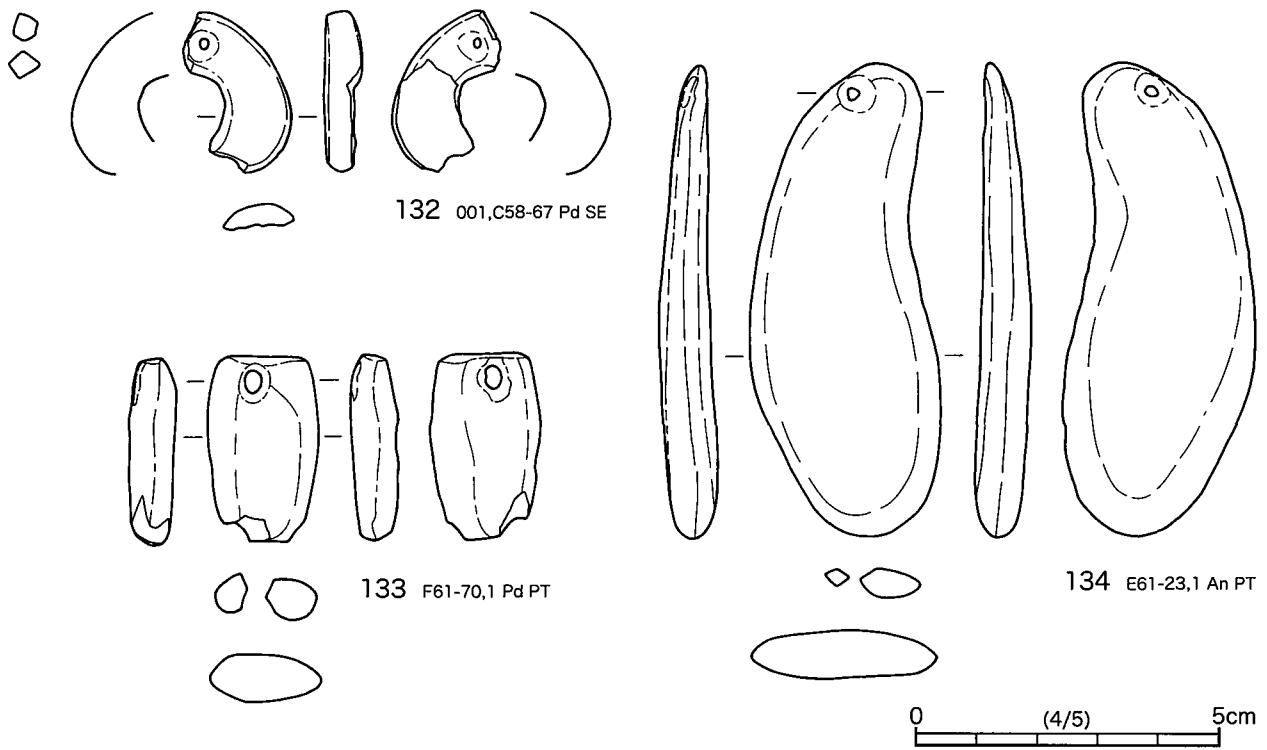
125 E60-97,3 Sa HS



第85図 縄文時代石器(12)



第86図 縄文時代石器(13)



第87図 縄文時代石器(14)

片岩 (109、111)、砂岩 (110、112、116)、安山岩 (113、114)、蛇紋岩 (115)、片麻岩 (117) と多様である。

118から126は敲石である。砂岩製の礫が多用されるが、120の石英斑岩製、126の安山岩製のものもみられる。作用部は主に上下両端であるが、側縁を作用部としたもの (118、119) や全周を作用部としたもの (126) が認められ、敲打痕についても明確な剥落痕 (118、121、124) や細かい潰れ状の敲打痕があるものと様々である。118については欠損面を平滑に整形しており、所謂「スタンプ形石器」とも考えられる。

127から129は石皿である。すべて多孔質安山岩製である。一部のみの遺存のため全体形状は不明である。表裏面ともに研磨され、127・129の裏面には凹痕が認められる。

130・131は石棒もしくは石剣である。130は絹雲母片岩、131は緑泥片岩製である。両者とも研磨による整形が施されるが、研磨痕は可視的には認められない。

132は球状耳飾である。暗灰色を呈する滑石製で、全体に研磨痕が認められる。穿孔は表裏両面から行われている。

133・134は石製垂飾品である。133は滑石製で研磨により整形され、全体に明瞭な研磨痕が認められる。穿孔は表裏両面から行われている。器表面の色調は暗灰色を呈する。134は安山岩製で研磨により整形されるが、研磨痕は不明瞭である。穿孔は表裏両面から行われている。器表面の色調は灰色を呈する。



第14表 縄文時代石器属性表

挿図 番号	出土地 番号	遺物番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	288	225	AH	Ch	2.83	1.98	0.41	1.80
2	F60-97	1	AH	Ch	1.86	1.39	0.28	0.70
3	001	C58-66	AH	Ch	1.95	1.45	0.40	1.20
4	463	11	AH	Ch	1.76	1.49	0.47	1.00
5	003	68	AH	An	1.95	1.40	0.30	0.90
6	D60-68	1	AH	Ch	1.70	1.43	0.52	1.10
7	D58-63	30	AH	Ch	2.41	1.74	0.54	2.10
8	E61-24	1	AH	Ch	1.87	1.52	0.40	1.10
9	C58-66	54	AH	Ob	1.73	1.20	0.26	0.60
10	E61-06	47	AH	Ch	1.80	1.47	0.37	0.90
11	F60-88	-	AH	An	1.63	1.05	0.31	0.50
12	E61-16	76	AH	Ob	1.46	1.08	0.15	0.30
13	461	2	AH	An	2.05	1.57	0.41	1.10
14	289	23	AH	An	2.11	1.72	0.67	2.20
15	148	433	AH	Ch	2.29	1.81	0.67	2.40
16	001	C58-66	AH	Ch	2.59	1.74	0.54	2.80
17	9840T	1	AH	Ob	2.49	1.61	0.40	1.30
18	E61-15	26	AH	Ch	2.79	1.61	0.51	2.20
19	E61-33	1	AH	Ch	2.15	1.55	0.55	1.90
20	C58-88	21	AH	Sh	1.57	1.23	0.33	0.60
21	001	C58-75	AH	Ob	2.58	1.60	0.46	1.60
22	E61-06	57	AH	Ch	2.32	1.49	0.36	1.20
23	463	45	AH	An	2.23	1.28	0.47	1.00
24	426	85	AH	An	2.00	1.42	0.39	0.90
25	D58-60	7	AH	An	2.08	1.32	0.44	1.20
26	9818T	1	AH	Ch	2.05	1.35	0.36	0.70
27	D58-61	9	AH	Cc	2.17	1.38	0.34	0.90
28	E61-89	14	AH	Ch	1.94	1.53	0.35	0.90
29	007	1	AH	An	2.35	1.31	0.42	1.00
30	367	233	AH	Ch	2.08	1.46	0.27	0.60
31	E61-16	84	AH	Ch	1.87	1.53	0.49	1.20
32	D61-06	18	AH	An	1.88	1.33	0.48	1.20
33	D58-62	4	AH	Ch	1.91	1.22	0.49	0.80
34	F60-92	1001	AH	Ob	1.70	1.20	0.39	0.60
35	592	1	AH	Ch	2.64	1.66	0.33	1.20
36	D58-42	1	AH	Ch	2.51	1.52	0.52	1.40
37	D58-71	9	AH	Ch	2.16	1.41	0.30	0.80
38	D60-42	1	AH	Ch	1.94	1.21	0.24	0.40
39	F61-81	3	AH	Ch	2.05	1.93	0.41	1.10
40	D58-63	23	AH	Ch	2.09	1.44	0.25	0.60
41	C58-66	8	AH	Ch	1.35	1.27	0.18	0.20
42	148	1	AH	Ch	2.17	1.59	0.42	1.00
43	D58-92	21	AH	Ch	2.02	1.19	0.23	0.60
44	457	6	AH	An	1.79	1.40	0.47	0.90
45	285C	222	AH	Ob	1.73	1.35	0.31	0.50
46	010	2	AH	Ch	1.38	1.05	0.29	0.30
47	003	153	AH	Ch	1.28	1.12	0.32	0.40
48	E61-60	-	AH	Ob	1.57	1.44	0.34	0.70
49	D58-53	7	AH	Ch	1.37	1.30	0.36	0.60
50	457	10	AH	Ob	1.38	1.38	0.36	0.60
51	E60-95	20	AH	Ch	1.98	1.23	0.40	1.00
52	D60-45	4	AH	Ob	1.51	1.69	0.29	0.70
53	D60-22	7	AH	Ch	1.68	1.45	0.24	0.50
54	9811T	1	AH	Sh	2.52	1.94	0.48	1.90
55	E61-35	97	AH	An	2.54	0.95	0.43	1.00
56	F61-60	19	AH	Ch	3.30	2.23	0.53	4.20
57	C58-58	3	AH	Ch	3.12	2.27	0.80	5.80
58	286	97	AH	An	2.80	1.87	0.65	3.60
59	E61-15	1	AH	Ch	2.29	1.71	0.73	2.60
60	F61-51	0011	AH	Ob	2.17	1.66	0.68	2.30
61	D61-25	-	AH	Ch	2.57	2.04	0.73	4.50
62	D58-60	25	AH	Ch	2.50	2.23	0.62	3.20
63	C58-76	9	AH	Ch	3.00	2.50	0.98	8.10
64	C58-56	13	AH	Ch	2.26	2.16	0.71	3.70
65	E61-06	46	AH	Ch	1.84	1.70	0.73	1.80
66	F60-64	0009	AH	Cc	1.55	1.32	0.45	0.80
67	9832T	1	AH	Ob	1.79	1.35	0.57	1.30

挿図 番号	出土地 番号	遺物番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
68	C58-47	4	AH	Ch	2.22	1.64	0.29	1.30
69	D60-13	29	AH	Ch	2.00	1.48	0.51	1.70
70	C58-66	6	AH	Ch	2.50	2.01	0.34	3.00
71	E60-96	29	AH	Ch	2.81	4.30	1.26	19.80
72	C58-75	25	AH	Ch	2.75	3.38	1.09	8.70
73	F61-91	0006	AH	Ch	2.11	1.75	0.62	2.70
74	D60-26	1	AH	Ob	2.59	1.33	0.43	1.90
75	9830T	1	AH	Ch	1.92	1.56	0.74	2.60
76	F60-97	-	Dr	Ch	2.31	0.65	0.37	0.80
77	C62-58	1	RFI	Ob	2.26	2.18	1.23	7.20
78	C58-46	9	RFI	Ch	4.57	1.85	0.88	8.30
79	C58-68	25	RFI	Ch	5.28	3.35	0.94	13.40
80	C58-87	22	RFI	Ch	4.52	2.08	1.59	12.40
81	C58-58	8	RFI	Ch	4.04	2.19	0.93	7.50
82	E61-32	1	RFI	Ch	4.14	2.86	1.39	20.40
83	471	1	RFI	Ch	3.53	4.69	1.95	36.00
84	D58-71	18	RFI	Ch	4.59	3.48	1.27	16.80
85	286	97	Co	Ch	2.55	3.35	1.13	12.00
86	9832T	1	Co	Ch	1.09	4.29	3.67	20.60
87	E60-66	-	Co	Ob	3.21	3.63	2.66	25.60
88	425	104	Ax	Ho	10.76	7.26	3.46	333.20
89	E61-15	1	Ax	Ho	11.00	5.82	3.17	228.30
90	031	10	Ax	An	6.21	4.74	2.31	90.50
91	F61-81	9	Ax	Sl	9.48	5.25	1.65	102.00
92	D60-86	6	Ax	An	6.71	3.57	1.27	33.20
93	C58-79	3	Ax	Ho	7.34	4.23	1.75	63.00
94	F59-87	1	Ax	Ho	8.21	5.01	1.75	85.50
95	C58-26	14	Ax	Sa	6.54	3.52	2.07	49.90
96	503	3	Ax	Sa	6.74	4.43	1.53	53.00
97	9841T	1	Ax	An	5.18	3.61	1.15	31.00
98	C58-87	33	Ax	Sa	7.03	4.28	1.38	49.00
99	289	21	Ax	Sh	6.81	3.63	1.36	45.60
100	D61-46	-	Ax	An	7.15	5.25	1.68	102.20
101	E61-06	76	Ax	Sa	6.81	4.40	2.26	78.50
102	592	-	Ax	Ho	7.57	6.02	4.01	208.50
103	E61-78	26	Ax	Ho	6.30	4.07	1.35	39.60
104	E61-15	1	Ax	Ho	6.20	5.80	2.69	103.30
105	C58-55	-	Ax	Ho	3.91	5.14	1.44	35.60
106	285B	-	Ax	Sa	5.06	4.95	1.77	52.50
107	120	C58-56	Ax	Sa	4.22	4.72	2.22	56.00
108	003	153	Ax	Ho	5.74	5.74	1.67	75.00
109	441	103	GAX	Msc	13.67	5.31	3.07	301.50
110	556F	2	GAX	Sa	4.20	4.40	2.93	64.30
111	465	340	GAX	Msc	4.27	3.53	1.96	43.80
112	001	C58-46	GAX	Sa	15.36	5.16	3.08	438.80
113	288	187	GAX	An	10.15	6.23	3.93	444.90
114	285	155	GAX	An	6.04	6.66	3.27	205.30
115	593	1	GAX	Se	7.10	6.61	2.91	232.30
116	E61-23	1-①	GAX	Sa	7.43	5.39	2.89	172.30
117	E60-96	59	GAX	Gn	5.56	3.16	0.95	21.80
118	457	18	HS	Sa	6.99	7.51	3.19	252.60
119	D58-92	38	HS	Sa	7.19	4.90	2.54	124.70
120	D58-60	18	HS	Qp	9.35	7.82	5.80	591.80
121	D58-62	15	HS	Sa	10.13	5.52	3.40	239.00
122	E60-87	-	HS	Sa	10.06	5.92	3.03	258.40
123	E61-16	1	HS	Sa	5.70	4.93	2.36	92.50
124	E61-42	1	HS	Sa	4.17	4.25	1.83	47.80
125	E60-97	3	HS	Sa	14.59	9.60	5.07	
126	E60-95	82	HS	An	7.15	8.20	2.84	244.70
127	E61-78	1	MS	An	8.33	5.16	3.35	150.40
128	E61-13	1	MS	An	7.16	9.03	4.37	125.40
129	E62-42	1-②	MS	An	11.85	9.88	5.00	616.10
130	148	100	TP	Ssc	8.95	2.65	2.36	83.00
131	E61-34	1	TP	Msc	7.61	3.25	2.10	86.00
132	001	C58-67	SE	Pd	2.62	1.89	0.63	3.10
133	F61-70	1	PT	Pd	3.06	1.82	0.78	7.20
134	E61-23	1-①	PT	An	7.79	3.01	0.85	30.60

### 第3節 奈良・平安時代

#### 1 竪穴住居跡

本遺跡からは、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡6棟などが検出された。

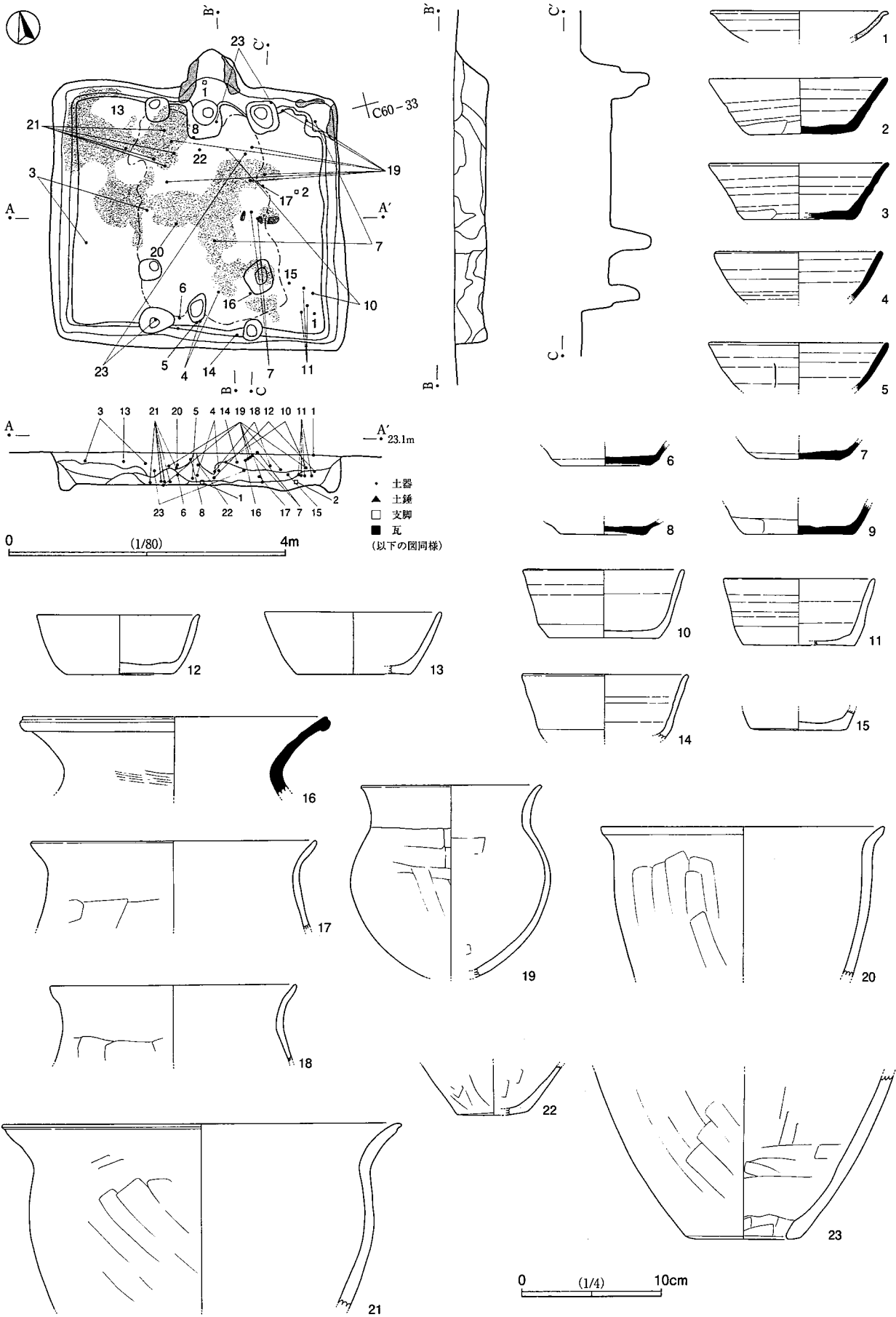
SI-004 (第88図、図版17・18・40)

D60-33グリッド付近に位置する。規模は長軸4.3m、短軸3.9mを測り、平面形は東西にやや長い長方形形状を呈する。床面はやや起伏が認められるもののほぼ平坦で、カマド前面から柱穴間にかけて硬化面が広がる。確認面からの深さは0.5m前後で、床面積16.1㎡を測り、主軸方向はN-20°-Eを指す。主柱穴は、カマド両袖外側に2本と南壁側に2本掘り込まれ、深さ0.6~1.0mといずれも深い掘り方である。南壁に接してみられる2本のピットは深さ1mほどあり、出入り口に伴う柱穴、その間のピットはその位置から梯子ピットになると思われる。壁溝は幅0.2m、深さ0.1mほどで全周する。カマドは、北壁ほぼ中央と北東コーナーの2か所に掘り込まれが、いずれも袖等遺存は不良である。中央のカマドは煙道部を壁外に設け、火床部も比較的深く掘り込まれるのに対し、コーナーカマドは煙道部の掘り込みがなく、火床部も周溝を僅かに広げた程度で短期的な使用と思われる。焼土が、北西コーナーから中央にかけての床面直上に遺存し、カヤと思われる炭化物が僅かにみられる。

遺物は、カマド前面と南東コーナー付近に集中する傾向が強いが、床面直上から覆土上層にかけて散在する。

#### 出土土器

1は灰釉陶器の皿片である。器肉は薄く、口唇部が強く外反する。胎土中に白色粒子を多く含み、焼成は良好である。猿投産と思われる。2~9は須恵器の杯である。2は推定口径13.1cmを測り、体部は直線的に開く。底部は回転ヘラ切りで、体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施される。胎土中に石英粒を多く含み、灰褐色の色調を呈する。3も同様の調整であるが、赤褐色の色調となる。2に比して底部と体部の境が明瞭で、体部がやや外反する。雲母粒の混入が目立つ。2・3とも新治産と思われる。4・5は底部を欠くが、2・3に比して器肉が薄く、調整は丁寧である。胎土は緻密で、混入物も少ないが、白色針状物が僅かにみられ、武蔵産と思われる。6~9は底部片である。6・8の底部は回転糸切り無調整で、6は灰褐色、8は灰白色を呈する。7はヘラ切りで、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。胎土中に石英粒や白色針状物を多く含む。常陸産であろう。9は3と同様赤褐色の色調を呈し、雲母粒を多く含む。底部はヘラ切りとなり、体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施される。10~15は土師器の杯である。10・11はいわゆる箱形を呈し、口径11.0cm、底径8.0~8.2cm、器高4.8~4.9cmを測る。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。12・13も箱形に近いが、器高がやや浅くなる。摩耗により外面の調整は不明であるが、底部は全面回転ヘラケズリされる。13は小片であるが、体部の開きがやや大きくなる。14は底部を欠くが、やはり箱形となる。体部内面にロクロ目が明瞭に残り、体部下端に回転ヘラケズリがみられる。15も箱形となる杯の底部である。16は須恵器壺の口頸部片である。口唇部は肥厚し、端部に沈線状の凹みが巡る。頸部下端から胴部にかけて平行叩きが施される。胎土中に石英粒・雲母粒を多く含む。新治産であろう。17~22は土師器の甕である。17・18は器肉の薄い武蔵型甕である。口縁部内外面とも丁寧なナデで、胴部外面にはヘラケズリが施される。17はやや砂質を帯びる胎土である。22も武蔵型甕の底部片である。19は小形甕で、やはり器肉が薄く仕上げられる。全体に器面の荒れが激しいため詳細な調整は不明であるが、ヘラケズリ後ナデが加えられているよう



第88図 SI-004

である。底部は焼成後の穿孔のようにも見受けられるが、胴部下端に丁寧なナデが巡っている状況から、台付きとなる可能性もある。20・21は口唇部に最大径を有する甕で、いずれも口唇端部が短く摘み上げられる。その形状から、甌となる可能性もある。23は単孔となる甌の底部片である。調整や色調等から、21と同一個体となろう。

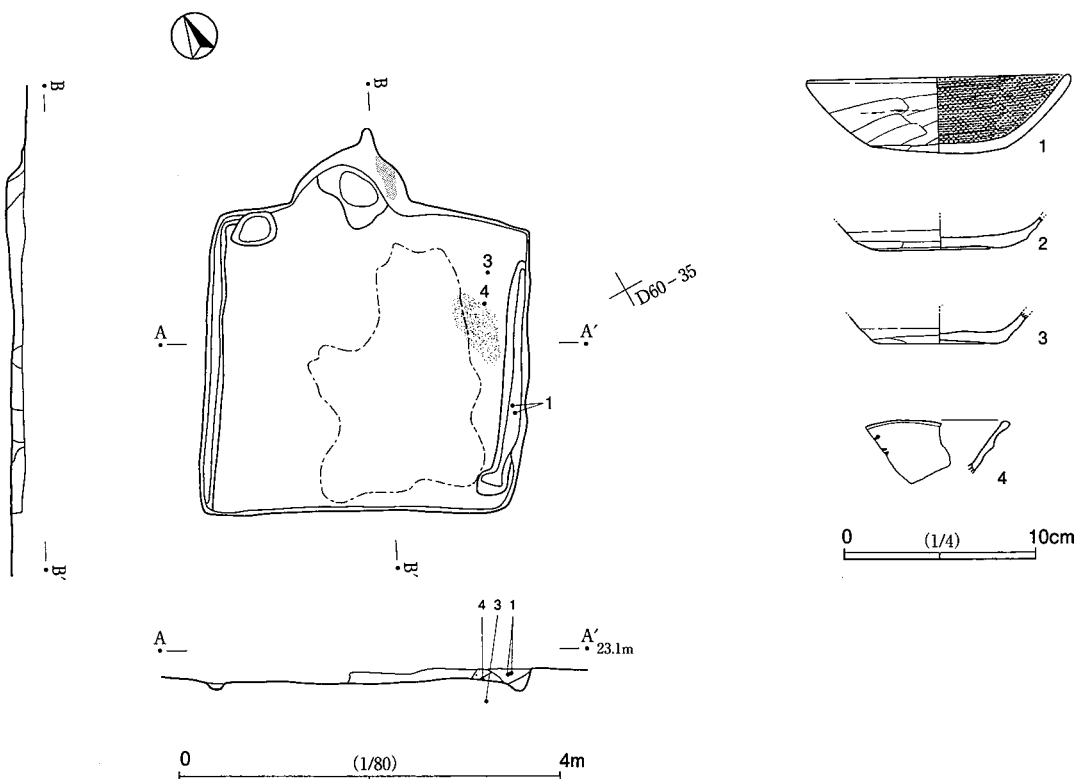
SI-007 (第89図、図版18・40)

D60-35グリッド付近に位置する。全体に耕作による攪乱が及んでいるため、確認面からの深さは浅くなっている。規模は、長軸3.4m、短軸3.2mを測り、ほぼ正方形を呈する。床面はほぼ平坦で、全体に硬化しているが、特に床面東側が堅緻である。確認面からの深さは、最深で15cmほどと浅い。床面積は10.9㎡を測り、主軸方向はN-31.5°-Eを指す。壁溝は、幅0.2m、深さ6cmほどで東西壁に掘り込まれている。柱穴は確認されなかった。カマドは北東壁ほぼ中央に位置する。攪乱のため遺存はきわめて不良で、右袖側の白色粘質土がわずかにみられるのみである。煙道部は、壁を60cmほど掘り込んで設けられ、火床部の硬化が認められるが、使用による赤化はあまりみられない。東壁側に焼土の薄い堆積があり、床面は被熱により赤変している。

遺物の出土は少なく、東壁際の床面から覆土中層にかけて遺存している。

#### 出土土器

1は口径13.9cmを測る土師器の杯で、全体に歪みがみられる。内面は雑なミガキで、黒色処理され、外面は口縁下までヘラケズリが加えられる。胎土は密であるが、長石粒を多く含む。2・3は杯の底部片で、いずれも回転糸切りされるが、3はほぼ全面ヘラケズリされる。4は杯の体部に墨書の残画がわずかにみられる。



第89図 SI-007

SI-008 (第90図、図版18・19・40)

D60-44グリッド付近に位置する。規模は、長軸3.7m、短軸3.3mを測り、東西にやや長い長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、白色砂質土やロームブロックを含む土を突き固めた貼り床が施される。確認面からの深さは0.5~0.6mと深い。床面積は11.9㎡を測り、主軸方向はN-34°-Eを指す。壁溝は、幅0.3mと広く、カマド右側を除き全周する。主柱穴となるようなピットは認められず、西壁際に深さ10cm以下のピットが2本設けられる。床面上にあるピットは深さ88cmと深い。根による攪乱の可能性はある。南壁際のピットは出入り口の伴うものであろう。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。部分的に攪乱を受けているが、遺存は比較的良好である。壁を30cmほど掘り込んで煙道部を形成し、火床部は壁より内側に位置する。袖は、両側とも地山を袖の形に掘り残して基壇とし、その上に山砂と白色粘土の袖を構築している。覆土中全体にハードロームブロックやローム粒が含まれており、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

遺物の出土は多く、床面から覆土上層にかけて全体に分布している。

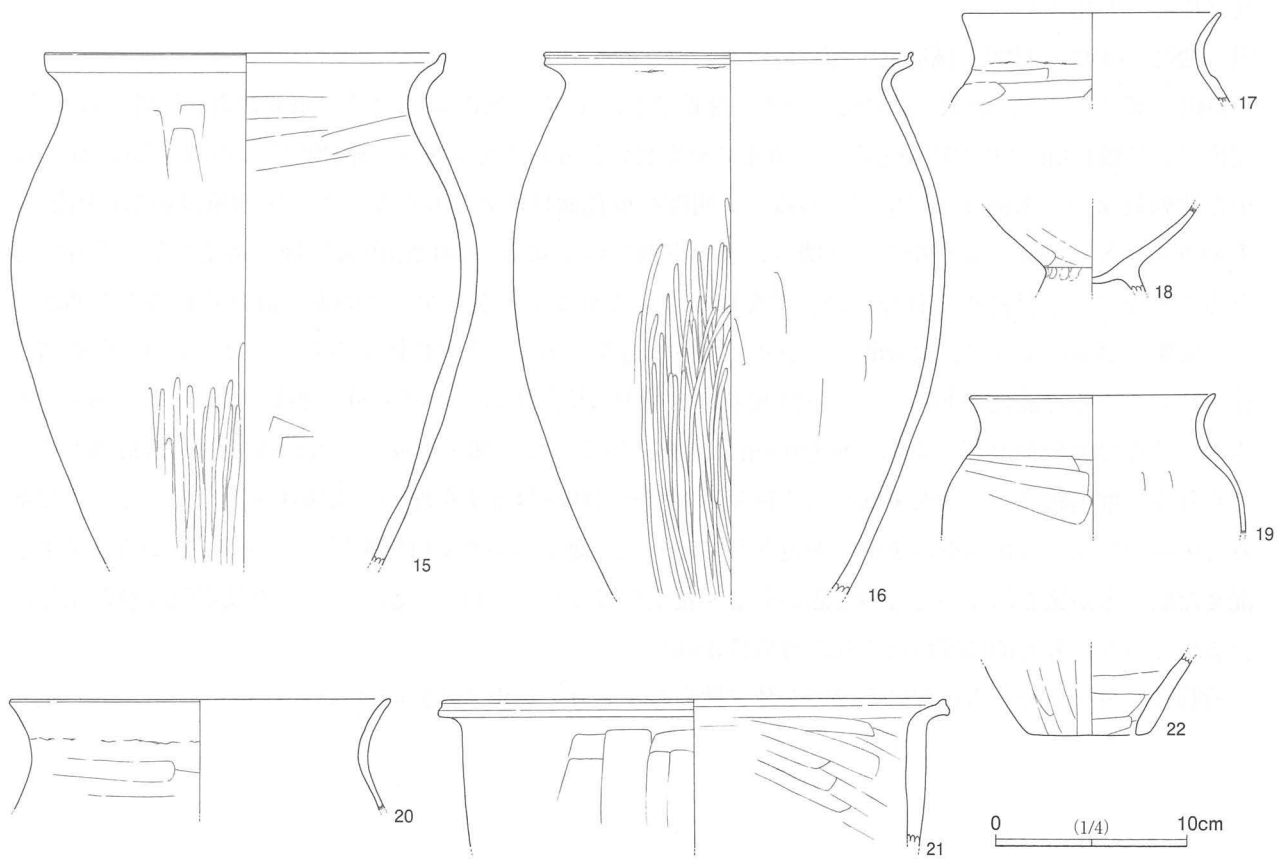
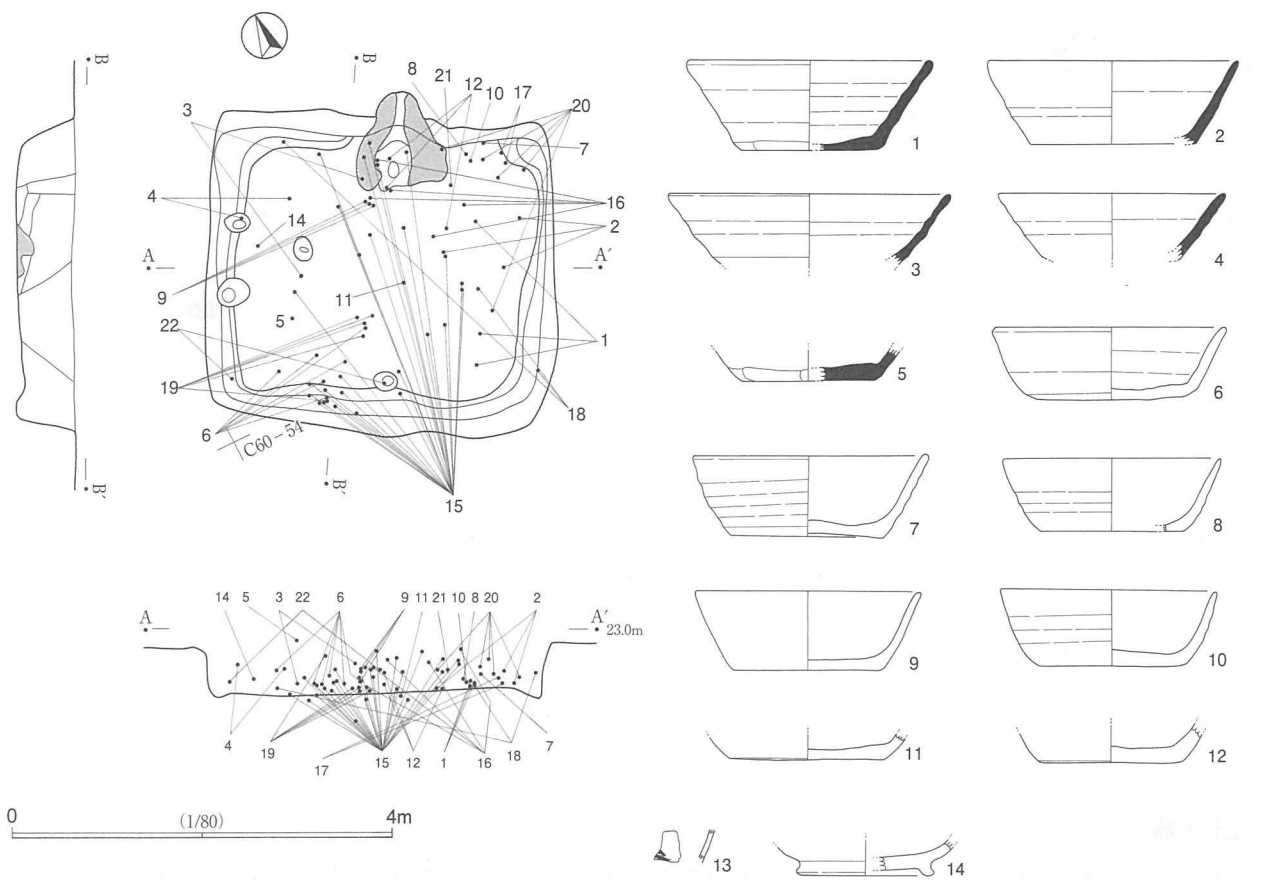
出土土器

1~5は須恵器の杯である。1は赤褐色を呈するが、胎土中に長石・雲母粒を多く含むことから須恵器とした。器肉は比較厚く、体部下端にヘラケズリが施される。2~5は還元焰焼成の須恵器で、体部は直線的に開くが、2の開きは少ない。4・5は長石粒の混入が目立ち、2・3は混入は少ないがいずれも新治産と思われる。6~12は土師器の杯である。6は浅い箱形を呈し、丁寧に仕上げられる。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。赤褐色の色調を呈し、底部に焼成時の黒斑が広がる。器形や調整は須恵器的である。7~10も箱形に近い器形である。いずれも底部は全面回転ヘラケズリされ、胎土中に長石粒などの混入物を多く含み、ザラついた器面となる。7は外面にロクロ目が明瞭に残る。11・12は底部片で、やはり底部全面回転ヘラケズリとなる。12には混入物が目立つが、11は少ない。13は残画が僅かに残る墨書土器片である。14は高台付きの杯であろう。高台は低く、底部との差がほとんどないタイプである。やはり胎土中に長石・雲母粒を多く含む。15・16はいわゆる常総型の甕である。いずれも長石粒・雲母粒を多く含み、胴部下位に縦位のミガキが施される。口唇部は短く摘み上げられるが、16はS字状に屈曲する。15は器肉が比較厚く、黄褐色の色調を呈することから、典型的な常総型甕であるが、16は器肉が薄く、暗褐色の色調を呈する。17~20はヘラケズリにより器肉が薄く仕上げられており、武蔵型となる甕である。19は胴部に最大径を有するもので、18の台部と同一個体となる可能性がある。17も同様のタイプであろう。20は口縁部が大きく、頸部に輪積み痕が残る典型的な武蔵型の甕である。21は口唇部に最大径を有し、内外面ともヘラケズリが顕著にみられる。器形から甕となる可能性が高く、22の単孔の底部と同一個体となろう。

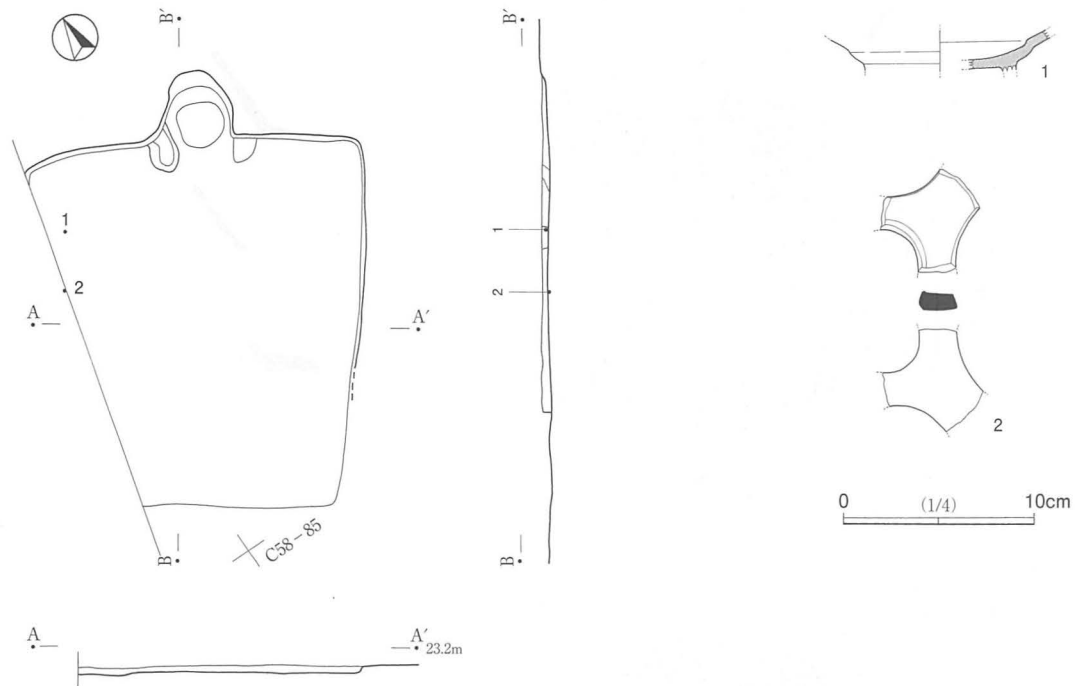
SI-012 (第91図、図版19)

C58-75グリッド付近に位置し、西側は調査区外、東側は中世のSD-001に接する。規模は、現存する南北長で3.9mを測る。確認面からの掘り込みは0.1m以下ときわめて浅い。床面はⅡ層下部の暗褐色土中に形成され、明確な硬化面は認められないものの全体に堅緻である。床面積は11.3㎡と推測され、主軸方向はN-40°-Eを指す。壁溝・柱穴は確認されなかった。カマドは北東壁中央に位置するが、確認面が浅いため遺存はきわめて不良である。壁を0.7mほど掘り込み煙道部が形成され、火床部は壁外の位置に相当する。袖の痕跡と思われる山砂が薄く残り、左側の袖には基壇と思われる地山の高まりがみられる。

遺物の出土は少なく、北西コーナー側に2点みられるのみである。



第90图 SI-008



第91図 SI-012

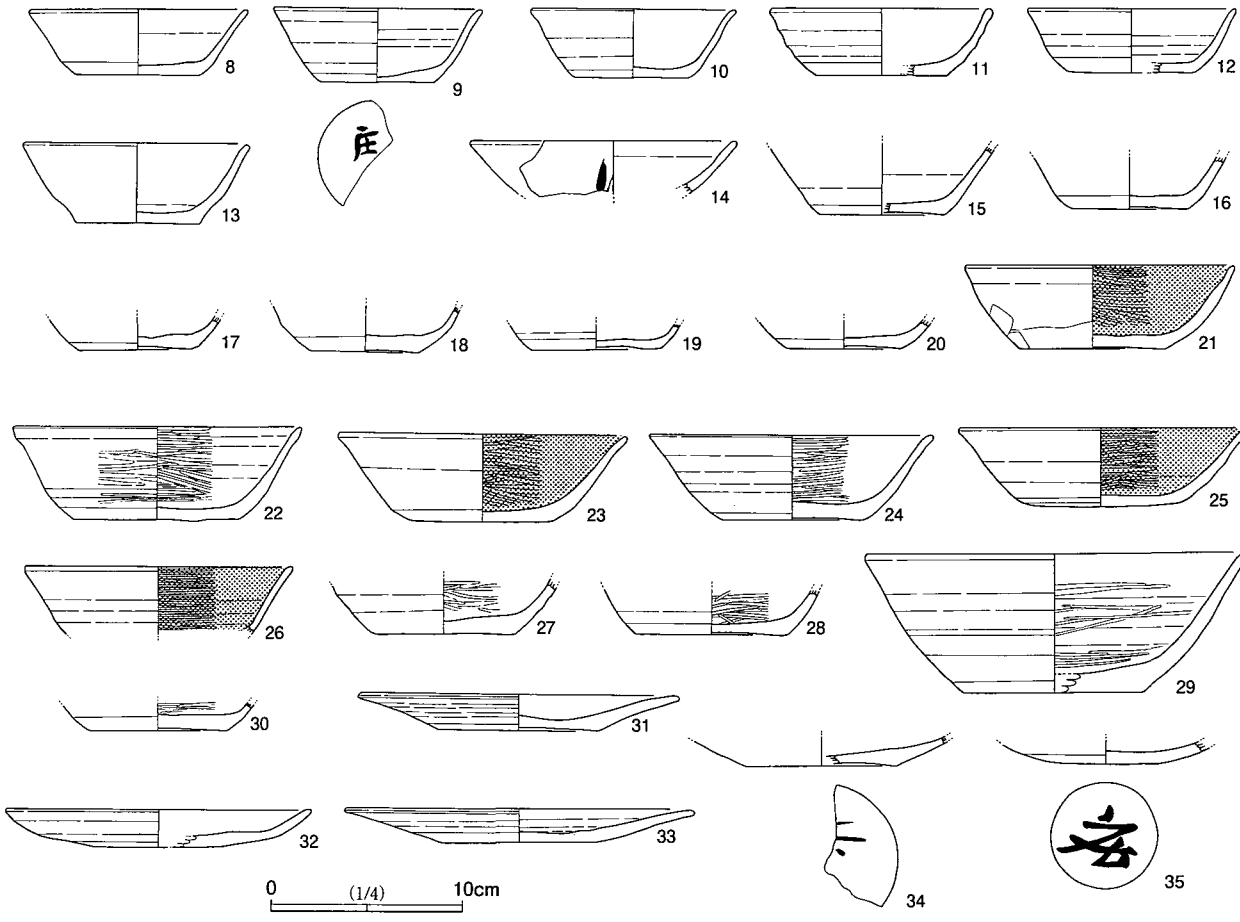
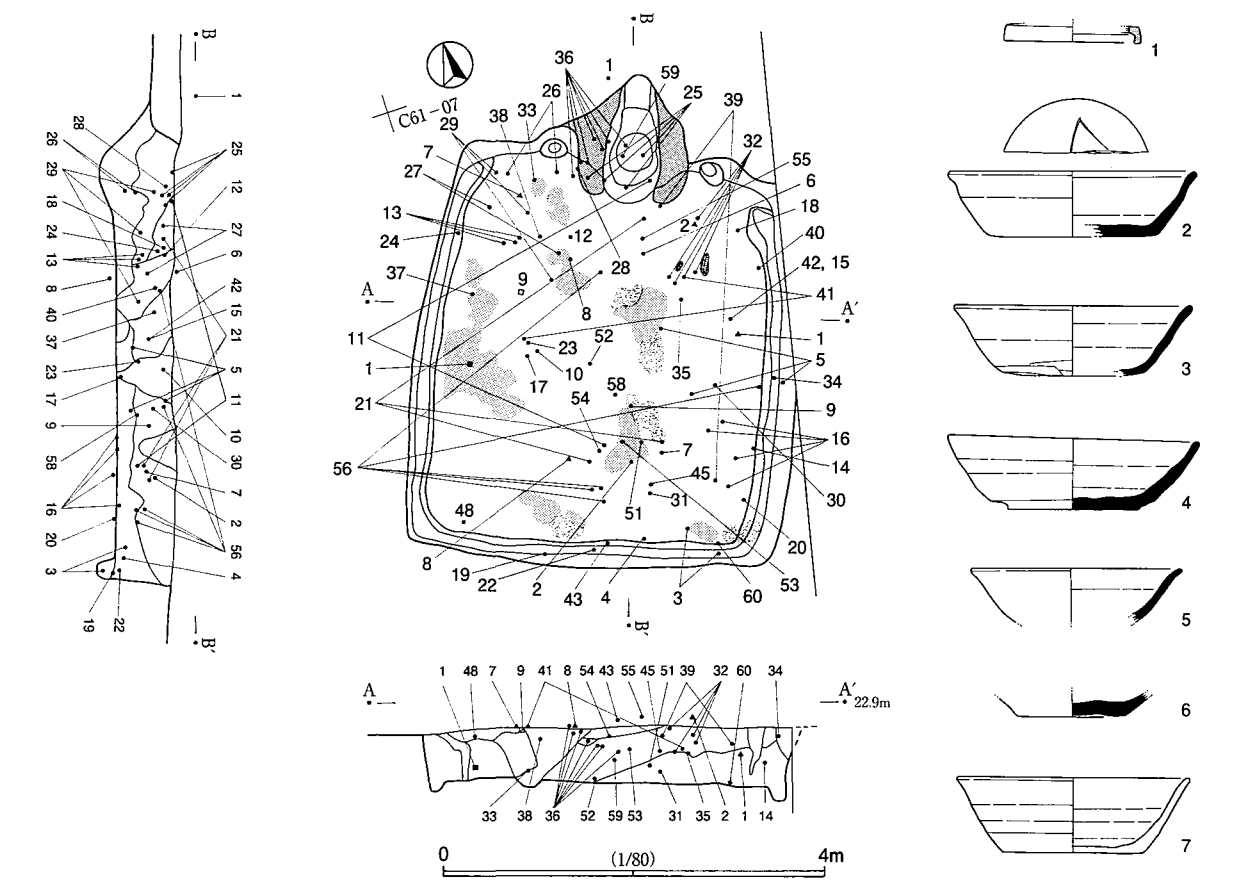
#### 出土土器

1は灰釉陶器の段皿片である。小片のため詳細は不明であるが、猿投産と思われる。2は須恵器の甑の底部片で、五孔となる。

SI-282（第92・93図、図版19・40・41）

D61-07グリッドに位置し、北西コーナー付近で上部をSI-283に切られる。東側は調査区外に接する。規模は、長軸4.3m、短軸3.9mを測り、南北にやや長い長方形を呈する。確認面からの深さは0.5m～0.7mと比較的深い。床面はほぼ平坦であるが、明確な硬化面は確認されなかった。床面積は16.7㎡を測り、主軸方向はN-29.5°-Eを指す。壁溝は、カマド側の壁を除き、幅0.2m前後で掘り込まれる。支柱穴となるようなピットは認められないが、壁を切るような小ピットがカマドの両側に設けられる。西側が37cm、東側が21cmの深さで、比較的しっかりした掘り込みである。その位置からみて、カマドの上屋構造に伴う柱穴になる可能性がある。カマドは北壁はほぼ中央に位置する。上部をSI-283の床面により削平されるが、遺存は比較的良好である。壁を0.8mほど掘り込んで煙道部を形成し、火床面は壁の延長線上に設けられる。堆積状況から、火床部を深く掘り込んだ後に10cmほど土を埋めて火床面を設けているようである。床面上には、炭化物や白色粘土が遺存しており、床面全体がやや白色を呈していることから、粘土を混ぜた貼り床が施されていたものと思われる。覆土中にはハードローム粒・ブロック及び焼土粒が全体に含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は、覆土上層から床面にかけて全体に散在しており、集中する傾向はない。

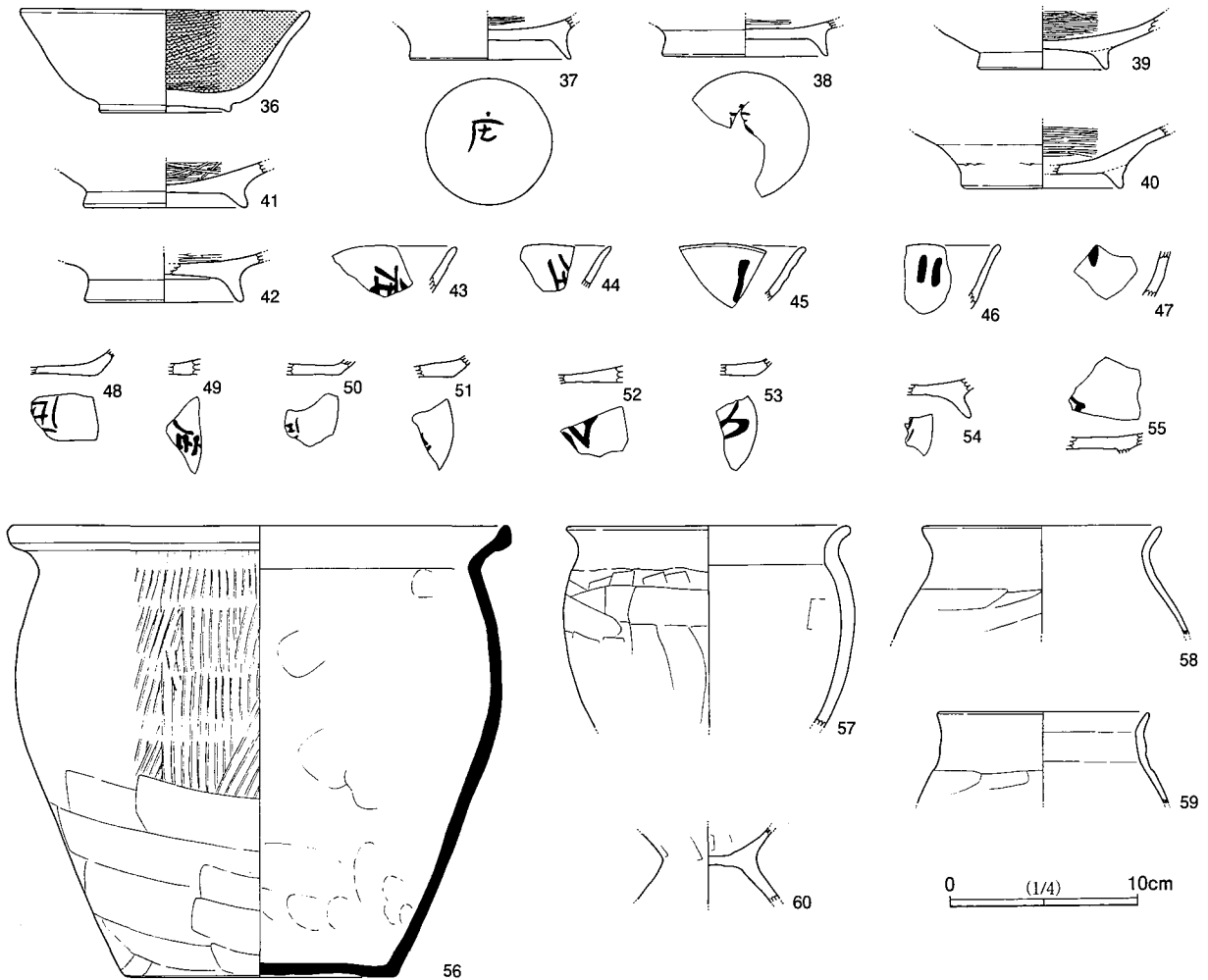


第92図 SI-282(1)



出土土器

1は灰釉陶器の蓋片である。小片のため詳細は不明である。2～6は須恵器杯である。2・4・6は底部回転糸切り離し無調整となるタイプである。2は口径に比して器高が低く、口縁部で外反するのに対し、4は内湾気味に体部が開き、底部が若干突出する。2の底部内面には焼成前のヘラ書きがみられる。半分だけの遺存であるがヘラ記号となろう。6も底部回転糸切り未調整であるが、赤褐色の色調を呈する。切り離し技法と胎土から須恵器とした。3は黒褐色の色調を呈する。底部の切り離しは不明であるが、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが加えられる。5は推定口径11.6cmを測る小形品で、焼成は良好であるが、胎土中に比較的粒子の大きな長石を含む。2・4は武蔵産、5は常陸産であろうか。7～30は土師器の杯である。7～12は底部回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが施される一群である。7～10はほぼ直線的に開く体部から口唇部でやや外反する同様の器形を呈するが、11は体部が内湾気味に開く特徴を有する。器肉も比較的厚く、ロクロ目が明瞭に残る。9の底部外面には「庄」の墨書がみられる。13は調整・器形が異なり、底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリが加えられ、突出する。体部下端の二次調整は施されない。14は体部の開きが大きい杯で、体部に墨書土器の残画がみられる。倒位に書かれているようであり、他の例から「宗」と推測される。15～20は杯の底部片である。



第93図 SI-282(2)

21～28は口径が大きくなり、内面にミガキが施される一群である。原則的に内面黒色処理となる。回転糸切り後、21は体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ、22～25は回転ヘラケズリが施される。26は体部のみの遺存であるが、器肉が薄く仕上げられる。29は口径20.2cmを測る大形の杯で、内面にミガキが施されるが、黒色処理は認められない。底部は回転糸切りで、体部下半から底部周縁に回転ヘラケズリが加えられる。31～35は無高台の皿である。31・33は体部が外反気味に開き、ロクロ目が明瞭に残るのに対し、32は口縁部でやや内屈する。調整は同様で、底部回転糸切り後体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリが施される。34・35は底部外面に墨書が記載され、35は「庄」、34は残画のみであるが、他の墨書の例から、「宗」と想定される。調整は前述の皿と同様である。36は高台付き椀である。高台は削り出しで低く、内面黒色処理される。底部は回転糸切り後周縁に回転ヘラケズリが施される。胎土は砂質を帯び、大粒のスコリアを多く含む。37～42は高台部片で、多くは皿の器形と思われる。内面にミガキが施されるが、黒色処理は認められない。37・38とも底部外面に「庄」の墨書がみられる。43～55は墨書土器片である。小片のため明確に判読できるものは少ないが、字形から、43・44・48～52は「庄」と思われる。56は須恵器の甕で、口縁部と胴部最大径がほぼ同様である。口唇部は肥厚し、受け口状の口縁部となる。胴部外面上半には平行叩き、下半は手持ちヘラケズリ、内面には当て具痕が残る。底部には敷物の痕跡がみられ、周縁部にはヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で、長石・雲母の小砂粒を多く含む。黒褐色の色調を呈する。57～60は小形の甕である。57は器肉が厚く、在地の甕となるが、58・59は器肉が薄くなり、武蔵甕の系譜を引くものであろう。60は台付きとなり、やはり武蔵型と思われる。

SI-283 (第94・95図、図版20・41)

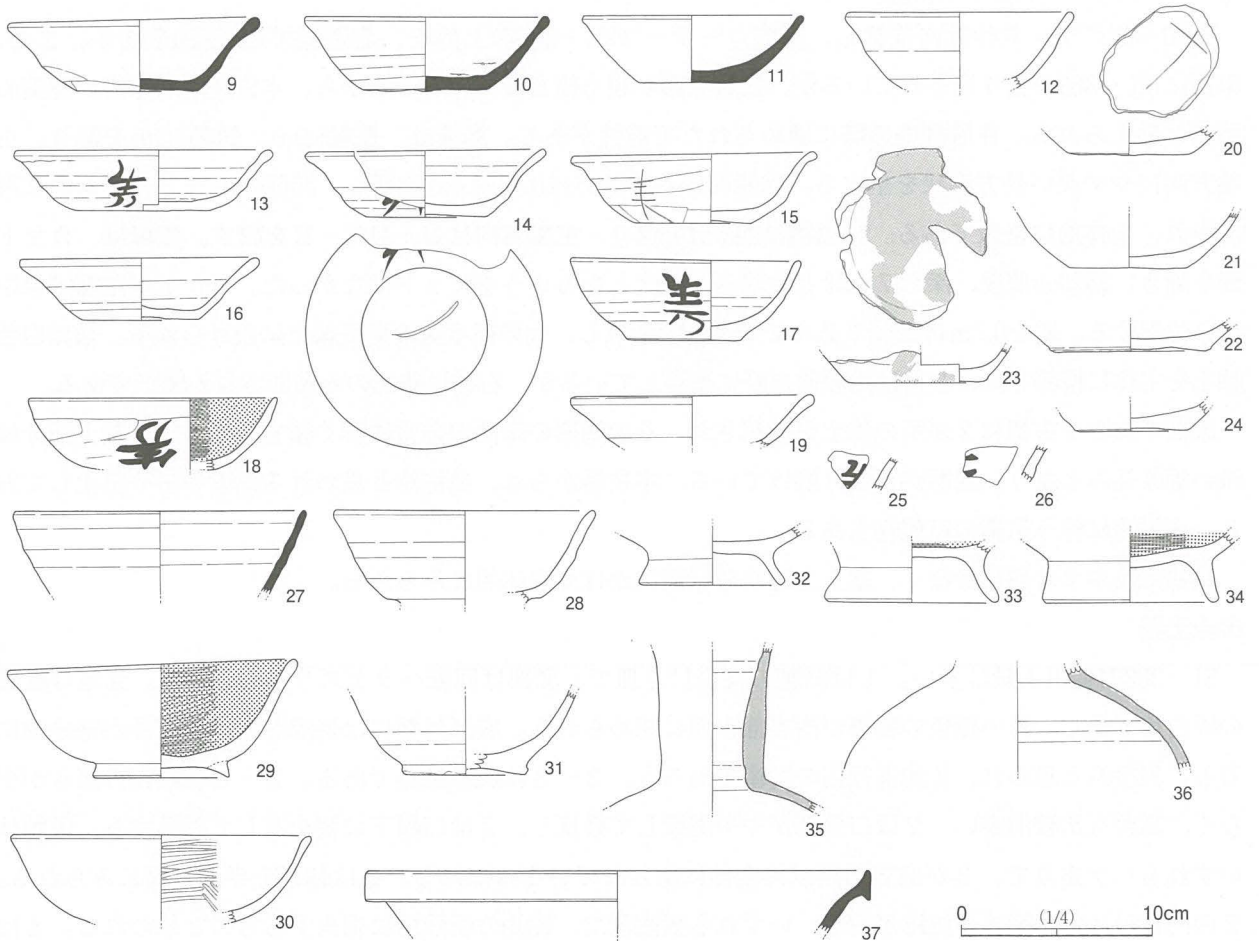
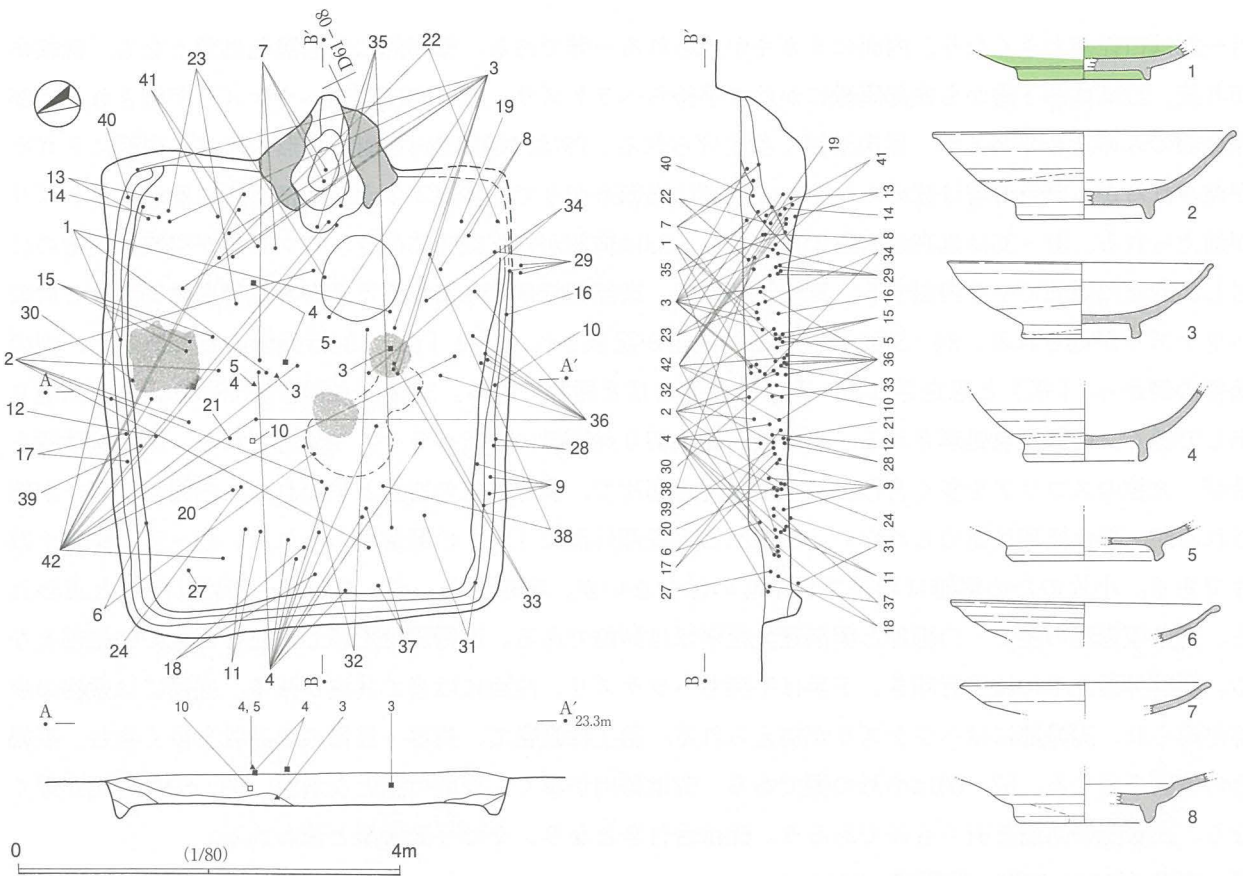
D60-97グリッド付近に位置し、南東コーナーでSI-282の上部を、北壁側でSI-284を切る。また、床面にSK-365が掘り込まれているが、土坑上面が硬く締まっていることから、本住居よりも古い時期の所産と考えられる。住居構築の際に埋められた可能性がある。規模は、長軸5.0m、短軸4.2mを測り、主軸方向にやや長い長方形形状を呈する。確認面からの深さは0.3～0.6mを測る。床面はハードローム中に形成され、全体的に堅緻である。床面積は20.6㎡を測り、主軸方向はN-116°-Eを指す。壁溝は、カマド側を除き、幅20cm前後、深さ7cmほどで巡る。柱穴となるようなピットはなかった。カマドは東壁ほぼ中央に位置する。壁を0.7mほど掘り込んで煙道部を形成し、火床部は壁の延長線上に設けられる。袖は白色粘土を主体に構築され、左袖は比較的良好に遺存しているが、右袖は基部のみ確認される程度である。

床面中央やや南側に2か所の焼土が確認され、その周囲の床面が非常に硬く締まっている。焼土部分は浅い掘り込みとなり、底面がかなり焼けている。本住居からは、発泡滓と思われる遺物が多く出土しており、小鍛冶に伴う遺構の可能性もある。

遺物は集中する傾向はなく、覆土上層から床面にかけて全体的にみられる。

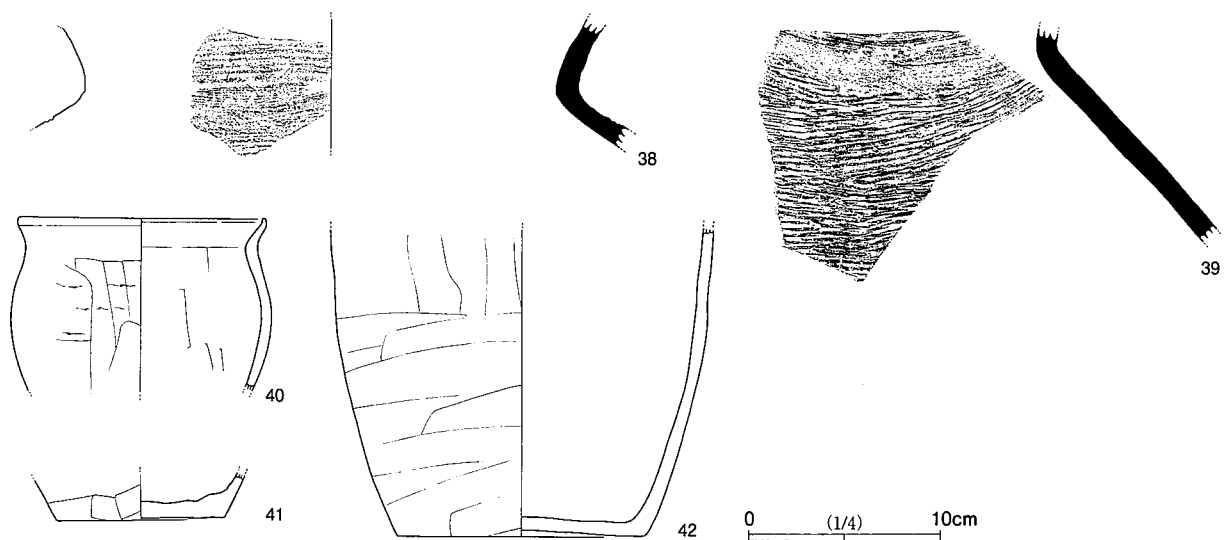
#### 出土土器

SI-282同様出土量は多い。1は緑釉の高台付き皿で、底部は回転ヘラケズリが施される。素地は軟質の灰白色を呈し、薄い緑色の釉薬が遺存部全面に認められる。底部外面には焼成前のヘラ記号が部分的に残る。猿投産と思われ、K90併行期の所産であろう。2～8は灰釉陶器である。2・3は高台の開きが少なく、高台も比較的高い。2は口唇部がやや肥厚して外反し、3は口縁下に稜を有して外反する。灰釉はいずれもハケ塗りで、3が底部外面以外全体に塗られているのに対し、2は体部上半内外面にみられる。2の内面には重ね焼きの痕跡が残る。いずれも猿投産で、K90の新段階に相当するものと思われる。4は



第94図 SI-283(1)

前者に比して高台が高く、体部が深くなる。5は高台部のみの遺存であるが、高台径が大きく、皿となるものであろう。6・7は皿の口縁部片である。8は段皿で、高台は高く開きが少ない。9～11は酸化焰焼成の須恵器杯である。胎土中に長石粒を多く含み、9・11は雲母粒も多くみられる。9は底部回転糸切りで、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。10・11は回転ヘラ切りとなり、体部下端の調整はみられない。10には火釋きが残る。12～19は土師器の杯である。13は器高が浅く、底部は回転ヘラ切りとなる。体部に正位で「生万」の墨書が記される。14は全体に歪みがみられ、体部上半が大きく外反する。体部下半のロクロ目は強く残り、回転糸切り後、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが施される。底部外面には焼成前のヘラ記号がみられる。15は器形的に14と類似するが、底部は回転糸切り未調整で、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。体部外面に焼成後の線刻がみられ、その字形から、「生万」の合わせ文字と思われる。16は底部が小さく、体部が大きく開くタイプである。回転糸切り後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが施され、胎土に雲母粒を多く含む。須恵器となる可能性もある。17は、回転糸切り未調整の底部がやや突出し、体部は内湾気味に開く。ロクロ目が比較的強く残り、体部の二次調整も施されない。体部外面に「生万」の墨書がみられる。18は体部外面ヘラケズリで、内面黒色処理される。体部外面に倒位で墨書されるが、「生万」の合わせ文字であろう。20～24は杯の底部片である。20の底部内面には焼成後の記号と思われる線刻、23には油煙と思われる痕跡が認められる。23の油煙は、その質感から漆となる可能性も考えられる。25・26は墨書土器の体部小片である。25・26とも「生」と判読されよう。27は体部の小片であるが、比較的大形の須恵器の杯であろう。青灰色の色調を呈する。28～31は土師器の碗である。28は体部が直線的に開き、底部の残存状況から、高台が付くものと思われる。31は回転糸切り未調整の底部が突出し、体部が深くなる形態と想定される。いずれも砂質の胎土で、赤色スコリアを含む。29は削りだし高台で、高台は低く、口縁部でやや外反する。内面黒色処理され、胎土は28に類似する。32～34は高台部片である。35・36は灰釉の長頸瓶で、同一個体と思われる。37～39は須恵器の甕である。37は口縁部片で、器肉は比較的薄く、丁寧に仕上げられる。38・39は外面に平行叩きが施される。いずれも胎土中に大粒の長石粒や小石を多く含む。37は東海産、38・39は常陸産の可能性はある。



第95図 SI-283(2)

40は小形の甕で、口唇部は短く摘み上げられる。胴部外面に輪積み痕が認められ、内面にはヘラの当たりが残る。42は長胴の甕で、胴部上位を欠く。底部は回転糸切り後中央部を残して手持ちヘラケズリされ、胴部は縦位のヘラケズリ後下位に横位の幅広ヘラケズリが加えられる。器肉は薄く、胎土中に雲母粒を多く含む。胎土からすると、須恵器的である。

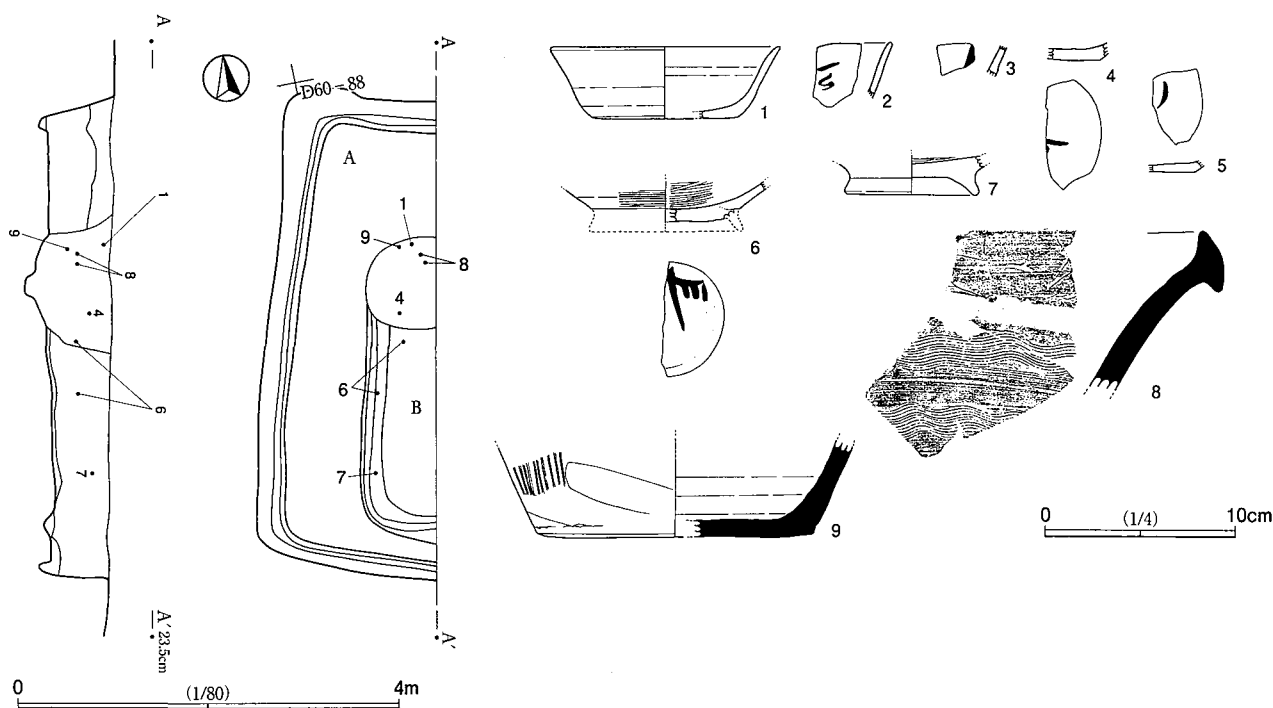
SI - 284 (第96図、図版20)

D60-88グリッド付近に位置し、東側約半分ほどが調査区外となる。中世の土坑により中央付近の床面が切られ、SI-283により南側壁を若干削平される。内部に小形の住居の壁溝及び床面の一部が検出され、外側を284A、内側を284Bとした。土層状況から、B住居に貼り床を施してA住居に拡張したものと思われる。規模は、南北壁で5.0mを測るが、東西長は不明である。確認面からの深さは比較的深く、全体的に0.6mほどを測る。南北壁を主軸方向とすると、N-17°-Eを指す。壁溝は、現存部分では全周する。カマドは調査区外に存すると思われる、柱穴は確認されなかった。

出土遺物は、覆土中層及び中世土坑内からの出土である。

### 出土土器

1は土師器杯で、口径に比して底径があまり小さいいわゆる箱形に近い形態を呈する。体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリがみられる。2～5は墨書土器片である。いずれも小片のため判読は困難である。6は高台を欠く皿であろう。内外面ともミガキが施され、底部外面には「長」と思われる墨書の残画がみられる。8・9は須恵器の甕である。8はかなり大形の甕の口縁部片である。横位の櫛描き波状文が施文される。9は底部のみの遺存であるが、平行叩き後胴部下端から底部にかけてヘラケズリが加えられる。胎土中に長石粒を多く含んでおり、常陸産の可能性はある。

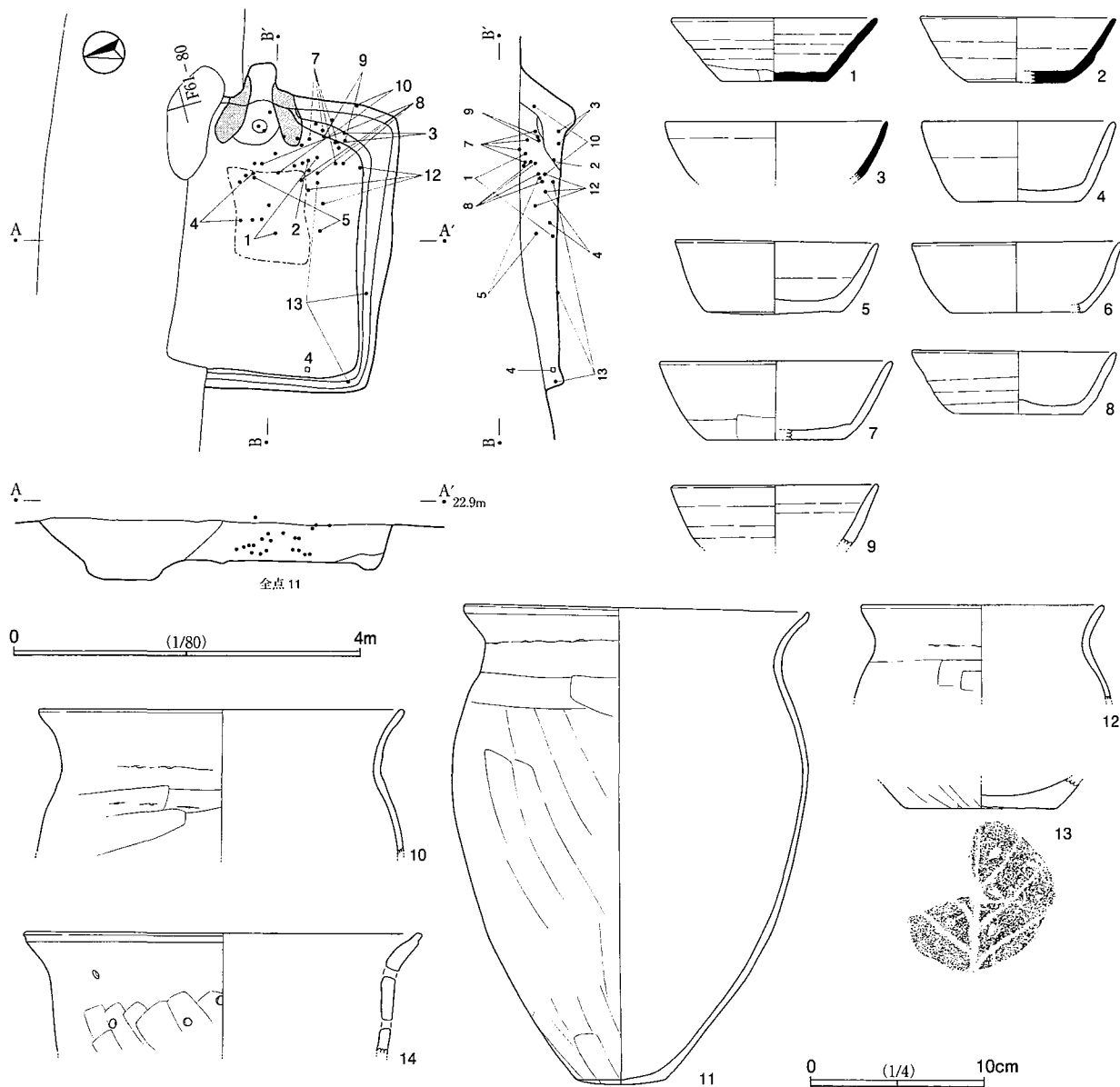


第96図 SI - 284



SI - 286 (第97図、図版41)

E61-89グリッド付近に位置し、北側を中世溝により削平される。規模は、両壁が確認される東西長で3.3mを測る。確認面からの深さは、東側で最も高く0.5m、西側で0.2mを測る。床面はほぼ平坦で、カマド前面に硬化面が認められる。主軸方向はN-66°-Wを指す。壁溝は、東側で最も広く、幅30cmほどを測り、西側が狭くなる。柱穴は確認されなかった。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、壁を30cmほど掘り込んで煙道部が形成される。火床部は床面側に設けられ、底面近くはロームブロックやローム粒により埋め戻されている。袖は掘り方面にハードロームブロックで基盤を作り、その上に白色粘土を含む土を積んで整形している。覆土はほぼ単一で、ロームブロック等を多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。



第97図 SI - 286

出土遺物はカマド右側から前面にかけて集中するが、覆土中層から上層にかけてが多く、床面出土は少ない。

#### 出土遺物

1～3は須恵器の杯である。1は体部底部が直線的に開き、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。胎土中に長石・雲母粒を含み、底部ヘラ切りと思われることから、新治産と推測される。2は体部が若干内湾気味に開き、底部は回転ヘラケズリが加えられる。1よりも胎土中の長石・雲母粒が多く含まれるが焼成は堅緻である。新治産と思われるが、下野の可能性も考えられる。3は体部片で、器肉は薄く、軟質の焼き上がりである。色調は灰白色を呈する。4～9は土師器の杯である。4はいわゆる箱形を呈する器形で、体部の開きが小さくなる。器面の摩耗のため調整は明瞭ではないが、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施されているものと思われる。胎土中に小砂粒を多く含む。5も4に類似する器形を呈するが、器高がやや浅くなる。4同様摩耗が激しいが、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが観察される。胎土は砂質を帯び、黄褐色の色調を呈する。7は口径及び体部の開きがやや大きくなる。体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。胎土中に小砂粒を多く含む、硬質の焼き上がりである。器面の荒れが顕著であるが、内外面とも赤彩されている可能性もある。8は5と胎土・調整とも同様であるが、器高が浅くなる。10～12はいわゆる武蔵型の甕である。口縁部下位に輪積み痕が残る。11は口径20.3cm、器高27.6cmを測る。口縁部はやや受け口状となり、胴部最大径とほぼ同様である。肩部には横位、以下には縦位のヘラケズリが施され、器肉はきわめて薄く仕上げられる。胎土中に小砂粒を多く含む、赤褐色の色調を呈する。口縁部にはカマド材、胴部外面片側には煤の付着がみられる。13は常総型甕の底部である。長石・雲母粒を多く含む、木葉痕が残る。14は甕あるいは甗の口縁部片である。胎土は緻密で丁寧に仕上げられる。頸部から胴部にかけて焼成後の小孔が数カ所穿たれているが用途は不明である。

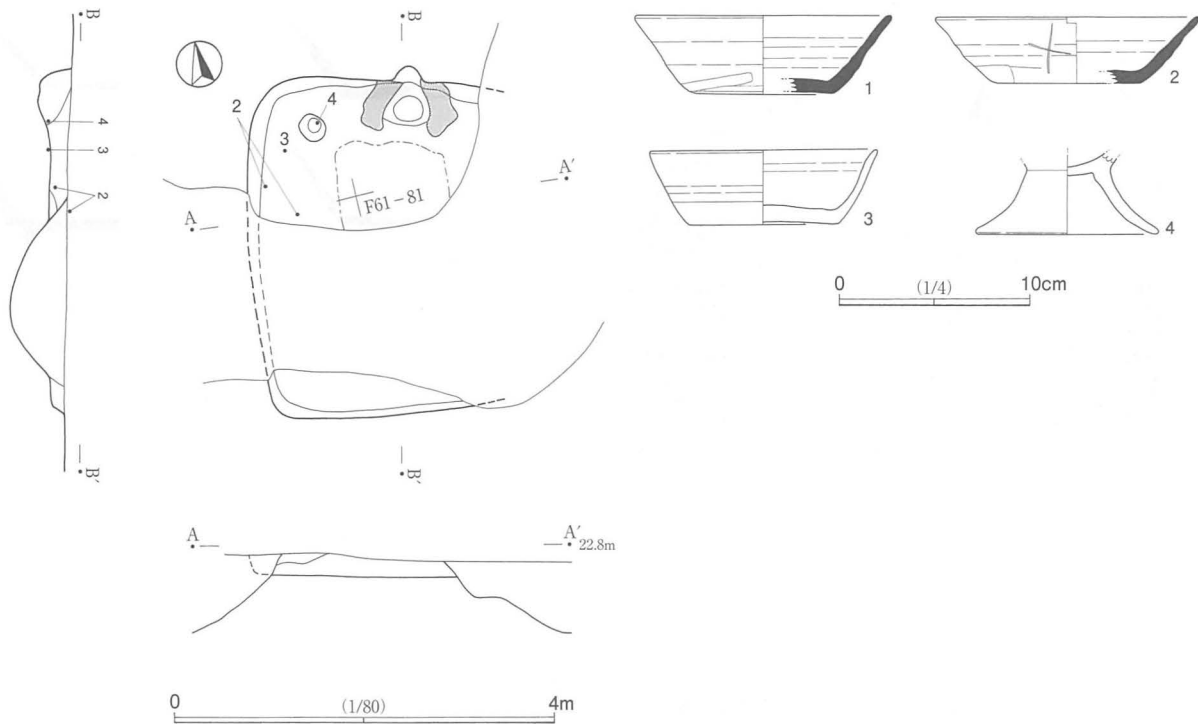
#### SI-287 (第98図、図版20・41)

F61-81グリッド付近に位置する。中世の288号溝により中央部分から東壁側を大きく削平される。規模は、カマドを通る主軸上で3.6mを測り、確認面からの深さは、北側で0.4m前後、南側で0.2mほどと比較的浅い。主軸方向は、N-12.5°-Eを指す。床面はハードローム中に形成され、全体的に堅緻であるが、特にカマド前面に硬化面が広がる。壁溝は確認されなかった。柱穴は北西コーナー側に1か所掘り込まれているが、他は中世溝により削平されているようである。径0.3m、深さ0.2mと小規模である。カマドは北壁中央に位置し、比較的良好な遺存状況である。壁への掘り込みは小さく、火床部は床面側に設けられる。袖はハードローム主体土で基底面を作り、その上に白色粘土を積み上げている。覆土はほぼ単一で、ハードロームブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物の出土は少ないが、床面直上からの検出である。

#### 出土遺物

1・2は須恵器の杯である。いずれも体部が直線的に大きく開き、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。1は胎土中に長石粒を、2は雲母粒を多く含む。新治産となろう。3は土師器の杯で、いわゆる箱形に近い形状を呈する。ヘラ切り後体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。胎土中に赤色スコリアや砂粒を多く含む、器面がざらついた感を受ける。黄褐色の色調を呈する。4は台付き甕の台部で、外面にヨコナデの痕跡が残る。武蔵型甕の台部であろう。



第98図 SI-287

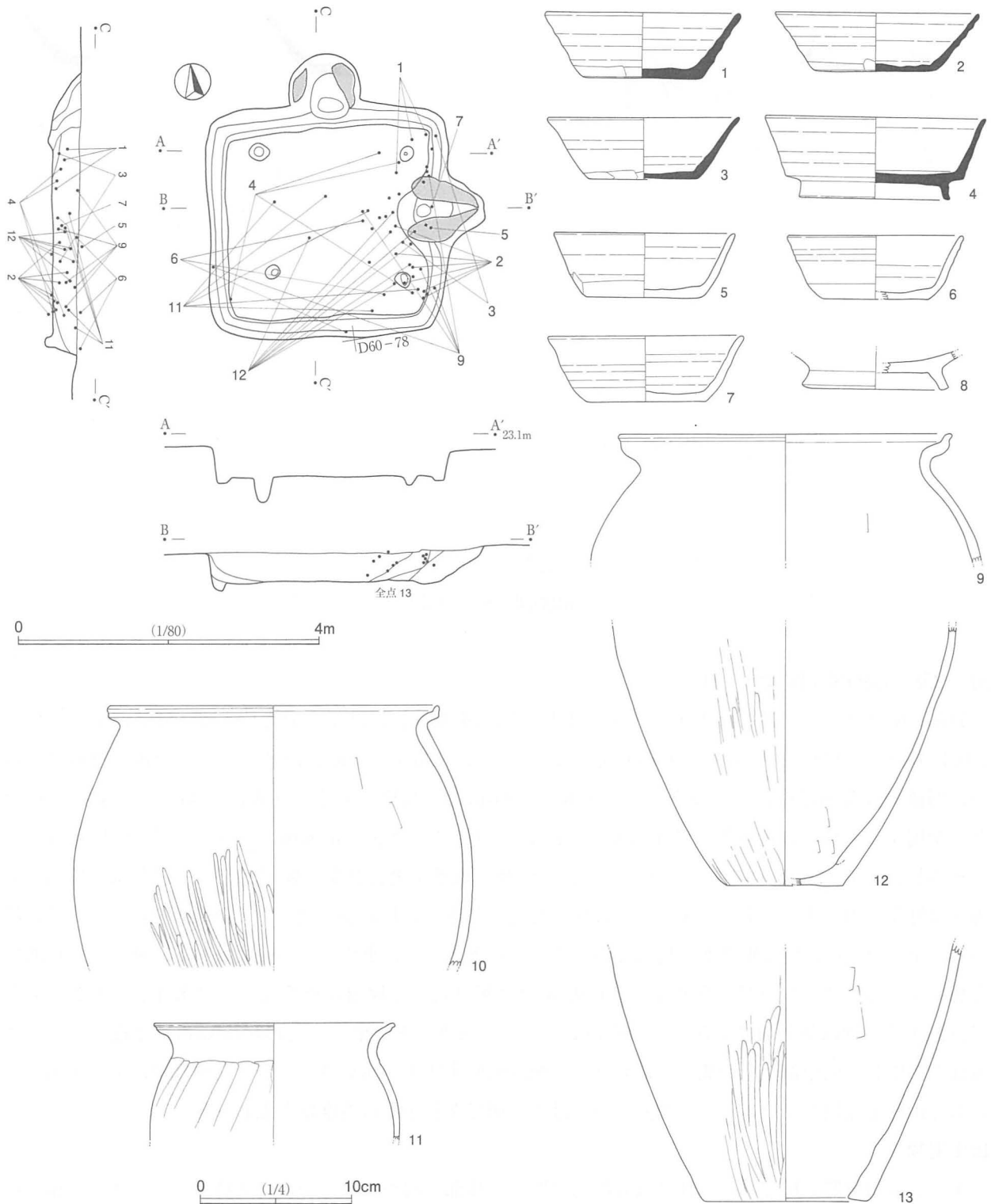
SI-358 (第99図、図版21・41)

D60-68グリッド付近に位置する。規模は1辺3.2mを測り、ほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは0.3~0.4mとほぼ均一である。主軸方向はN-7.5°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、全体に堅緻であるが、明確な硬化面は確認されなかった。床面積は9.6㎡と小規模である。壁溝は、幅0.2m、深さ0.1mほどで全周する。柱穴は対角線上に4本配置される。径0.2m、深さ0.1m前後と小さく、最も深い北西コーナーの柱穴でも0.3mほどである。カマドは、北壁及び東壁中央に2か所検出された。遺存状況は東側の方が良好なため、北カマドから東カマドに作り替えたと考えられるが、北カマドが壁溝を掘り込んで設けられ、東カマドの両側で壁溝が途切れていることから考えると、東カマドから北カマドに移行した可能性も想定できる。北カマドは、壁を半円状に0.6mほど掘り込んで煙道部を形成し、火床部が壁の延長線上に位置する。袖は部分的に遺存しているのみである。東カマドは壁を三角形状に0.5mほど掘り込んで煙道部を形成し、火床部は床面側に設けられる。袖は山砂主体土で構築されるが、左袖は地山を若干掘りくぼめて山砂を充填しているようである。覆土は単一層であるが、自然堆積と思われる。

出土遺物

1~3は須恵器の杯である。体部は直線的に開き、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。底部の切り離しはヘラ切りと思われる。胎土中に長石粒や雲母粒を多く含むことから、新治産の須恵器と思われる。1は長石粒は少なく、雲母粒が多くなる。焼成はやや軟質で、内外面に火襻き痕がみられる。2・3は胎土・焼成とも類似する。4は須恵器の高台付き杯である。胎土は3と同様長石粒を多く含む。推定口径14.8cmを測る比較的大形の杯で、作りはシャープである。高台は底部の縁辺近くに高く貼り付けされる。5~7は土師器の杯で、いずれも口径と底径の差が少ないいわゆる箱形に近い形状を呈する。底部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。5は胎土中に小砂粒を多く含み、軟質の焼き上





第99図 SI-358

がりである。器面の摩耗が激しい。6・7は比較的硬質の焼き上がりで、器面はなめらかである。8は高台付き杯の高台部片で、比較的大形の杯になると思われる。9～12は甕で、9・10・12はいわゆる常総型の甕となる。9は口縁部が大きく外反し、口唇部が摘み上げられる。肩部の広がりから、胴部は球形に近いものと思われる。胎土中に雲母粒の混入が目立つ。10の口縁部は9より短くなり、胴部は長胴に近いタ

イブである。肩部は丁寧なナデ、胴部下半には疎らなミガキが明瞭にみられる。12は底部にかけて幅広のミガキが施され、底部には木葉痕が残る。胎土中に長石粒を多く含む。二次焼成による器面の荒れや煤の付着が顕著である。11は小形の甕で、器肉が薄く仕上げられる。口唇部外面には浅い沈線状の凹みが巡る。胴部外面のヘラケズリは丁寧である。13は常総型の甕で、上半部を欠く。

SI-367A (第100図、図版21・41・42)

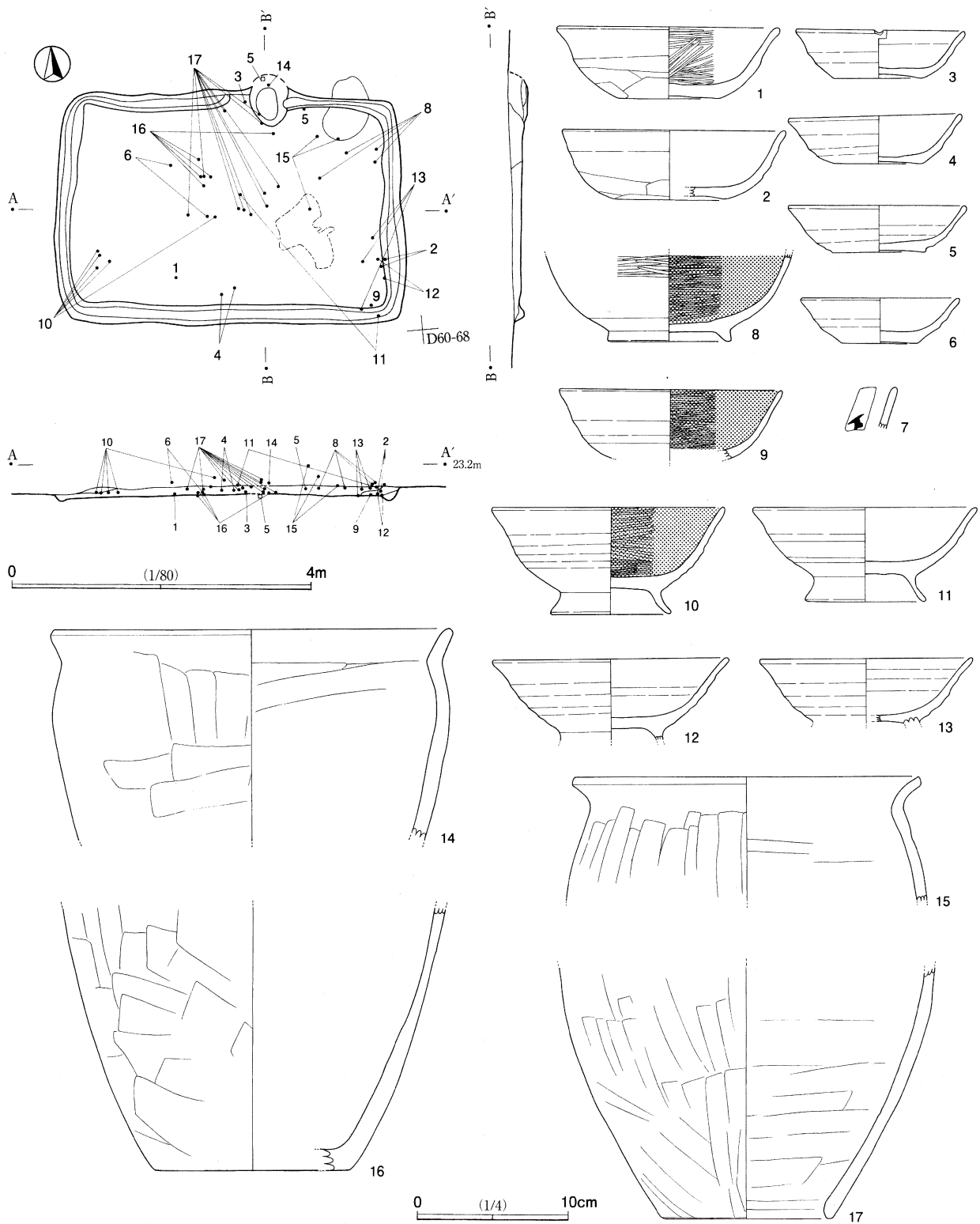
D60-57グリッド付近に位置する。南西コーナー付近でSI-368と接するが、出土土器の様相から、本住居の方が新しい時期の所産である。規模は、カマドを通る主軸上で3.1m、東西4.7mを測り、横長の長方形を呈する。主軸方位は、N-8°-Eを指す。確認面からの深さは0.1~0.2mと浅く、床面はほぼ平坦である。全体的に堅緻であるが、特に床面東側に部分的な硬化面がみられる。床面積は14.1㎡を測る。壁溝は、カマド部分を除き、幅20cm、深さ5cmほどで全周する。柱穴は確認されなかった。カマドは北壁中央よりやや東側に寄って設けられる。遺存はきわめて不良で、掘り方を検出したのみである。壁を20cmほど半円状に掘り込んで煙道部が形成される。火床部は周溝の延長線上に位置する。底面はかなり赤変しており、使用頻度が高かったことが想定される。

#### 出土遺物

1・2は口径15cmほどを測る大形の杯で、体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施されるが、底部の糸切り離し痕は大きく残されている。1は体部上半で外反し、内面に明瞭なミガキがみられる。2の体部は、内湾気味に開き、口縁部はそのまま収まる。1は使用痕があまりなく、大粒の赤色スコリアが含まれる。3~6は小形の杯である。底部は回転糸切り未調整で、ロクロ目が明瞭に残り、体部下端のヘラケズリも加えられない。6は小皿の様相を呈する。3・5には焼成時の黒斑、4には煤の付着がみられる。7は墨書土器片であるが、小片のため文字内容は不明である。8・9は内面黒色処理の高台付き椀である。高台は低く、体部下端に回転ヘラケズリ、内面に丁寧なミガキが施される。9は器高がやや浅くなるものの、形態から高台が付くものと思われる。10~13は高い高台が付く杯である。10は口径15.5cm、器高7.0cmを測り、内面が丁寧に磨かれる。不鮮明であるが、黒色処理されているようである。胎土中に小砂粒を多く含む。11・13は類似した器形で、口縁部でやや外反する。11の体部下端には回転ヘラケズリが加えられる。12は直線的に体部が開く形状で、ロクロ目が強く残る。いわゆる足高高台杯につながるものであろう。14~16は甕である。14は口縁部が短く外傾し、最大径を口縁部に有する。肩部に縦位、以下に横位のヘラケズリが施される。内面にはヨコナデ痕が明瞭にみられる。15は短い口縁部が外屈し、口唇部は平坦となる。縦位のヘラケズリがみられ、胎土中に小砂粒を多く含む。16には幅広のヘラケズリが深く施される。17は単孔の甕で、上半部を欠く。外面には縦位のヘラケズリ、内面には幅広のヘラナデがみられる。

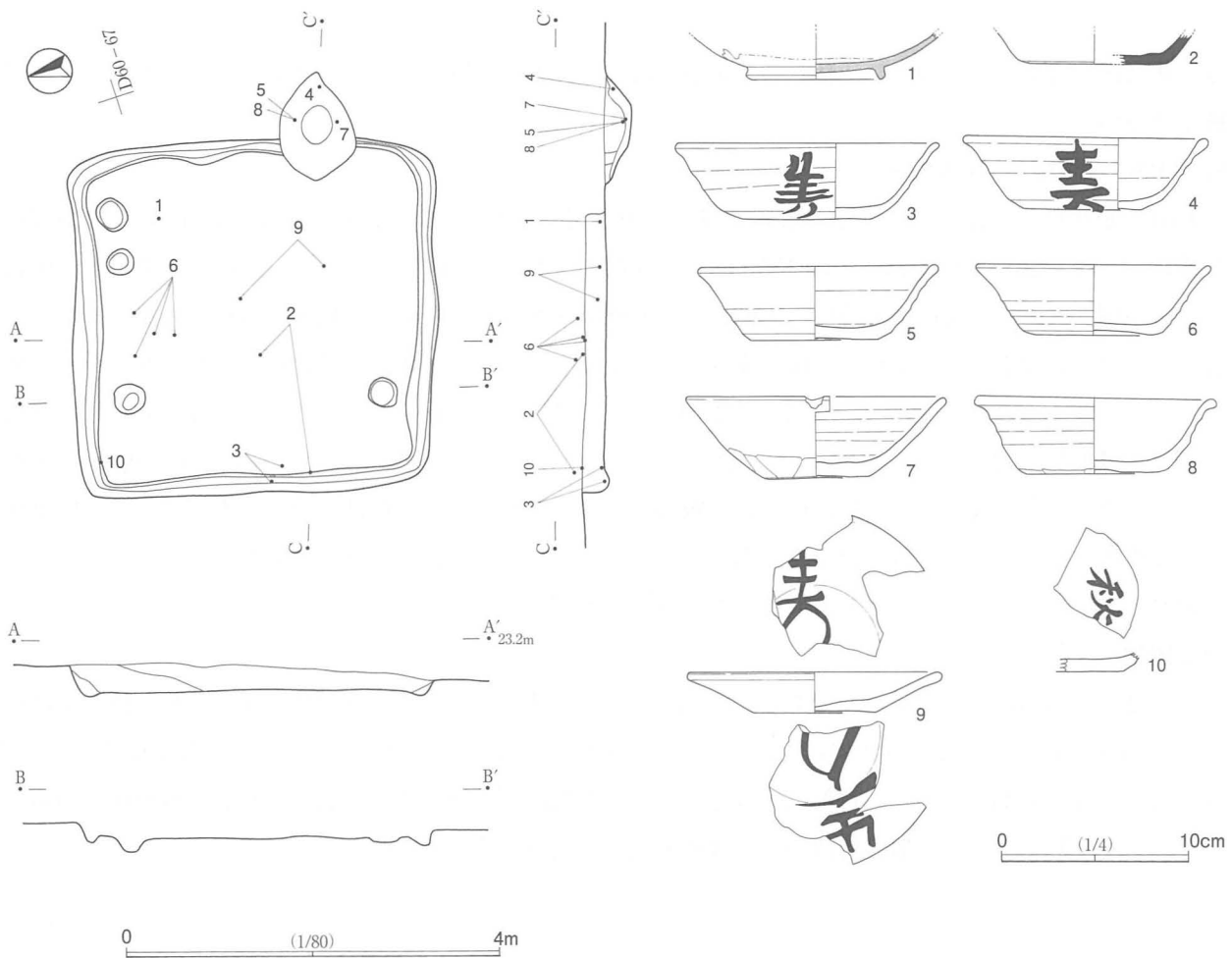
SI-368 (第101図、図版22・42)

D60-66グリッド付近に位置し、北東コーナーでSI-367と接する。規模は、長軸3.9m、短軸3.8mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位は、N-108.5°-Eを指す。確認面からの深さは0.2m前後と浅い。床面は比較的堅緻で、黒色土にローム粒・山砂を混ぜた土で貼り床を施している。床面積は15.5㎡を測る。壁溝は、カマド部分を除き、幅20cm、深さ6cmほどで全周する。柱穴は、南東コーナーを除き、対角線上に3本検出された。いずれも径30cmほどと同様であるが、深さは南西側で最深53cm、北西側で最浅14cmとばらつきがある。北壁沿いのピットは貼り床除去後に検出されたもので、性格不明である。カマドは東壁



第100図 SI-367A

中央よりやや南側に設けられる。遺存はきわめて不良で、掘り方を検出したのみである。壁を0.7mほど掘り込んで煙道部を形成し、火床部は壁の延長線の外側に位置する。カマドの覆土中には焼土粒や山砂が多量に含まれていた。覆土はほぼ単一で、ローム粒やロームブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。



第101図 SI-368

遺物の出土はあまり多くないが、カマド内より杯が4点伏せた状態で検出された。掘り方の煙道部と南北壁に等間隔で置かれ、特に北壁側には2個体が重なった状態で出土している。これらの状況は、カマド廃棄に伴う祭祀を示しているように思われる。

#### 出土遺物

1は灰釉の高台付き皿の底部片である。低い貼り付け高台で、灰釉は浸け掛けとなる。猿投産と思われる、時期的にはK90併行期であろう。2は須恵器杯の小片である。底部に線刻状の刻みがみられるが、小片のため不明である。底部は全面手持ちヘラケズリで、胎土中に長石粒を多く含む。新治産であろう。3～8は土師器の杯である。3～6は底部回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリを施す一群である。3は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開くのにに対し、4～6の口縁部は肥厚し、比較的大きく外反する。胎土は、3が砂粒の混入が少なく、器面もなめらかのに対し、4～6は砂粒の混入が多くなる。3・4の体部外面には「生万」の墨書が正位で書かれている。7・8は、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施すものである。7は底部が小さく、直線的な体部が大きく開く。長石粒を多く含み、被熱やカマド材の付着がみられる。8は体部の開きが少ないものの、口縁部で大きく外反する特徴を有する。4・5・7・8はカマド内からの出土であり、カマド材の付着や二次的被熱による器面の赤化や荒れがみられる。9は無高台の皿である。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリされ、体部のロクロ目はきわめて弱い。底部から体部にかけての内外面に大きな文字で「生万」の合わせ文字墨書が書かれ

る。10は杯の底部片で、内面に「秋」の墨書がみられる。墨書位置から、下に文字があると思われるが明確ではない。

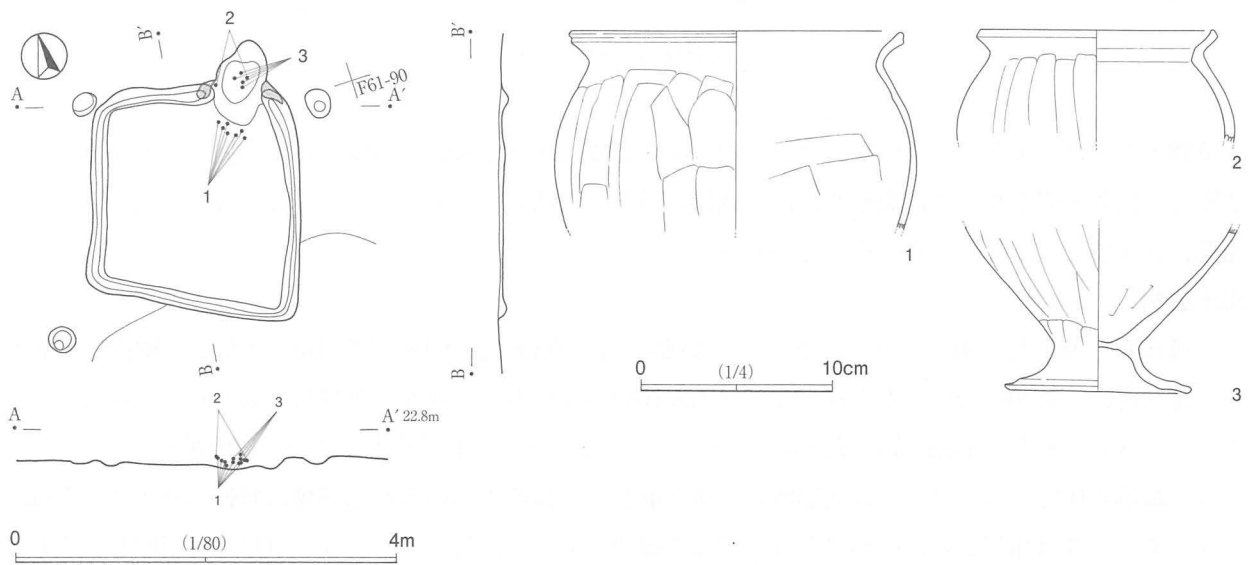
SI - 439 (第102図、図版22・42)

E61-99グリッド付近に位置し、南側で縄文時代のSI-440を切る。平面形はほぼ正方形を呈するが、規模は、長軸2.3m、短軸2.2m、床面積5.1m<sup>2</sup>ときわめて小さい。主軸方位は、N-28.0°-Eを指す。確認面からの掘り込みは10cm前後と浅い。床面は比較的堅緻であるが、明確な硬化面は認められなかった。壁溝は、カマド部分を除き、幅15cm、深さ4cmほどで全周する。柱穴は床面上には検出されなかったが、南東コーナー部を除く各コーナーの外側に深さ10cm以下の小ピットが掘り込まれている。葺きおろした屋根を受ける補助柱と思われる。カマドは、北壁の北東コーナーに近い位置に設けられる。壁を0.6mほど掘り込んで煙道部を形成し、火床部は壁の延長線の外側にまで伸びる。遺存はきわめて不良で、袖の構築材である山砂が部分的に確認されたのみである。カマドの覆土中には焼土ブロックを多く含む。

遺物の出土は少ないが、カマド前面及び掘り方内に甕が検出された。

出土遺物

1・2は甕の口縁部から胴部片である。口縁部はくの字状に屈曲し、口唇端部が平坦で若干摘み上げられる。胴部外面には縦位のヘラケズリが施され、器肉が薄くなる。二次焼成による煤の付着がみられる。3は台付き甕の底部片である。台部は大きく広がり、胴部にはヘラケズリが加えられる。器肉がきわめて薄く仕上げられており、土器の特徴から、武蔵型甕と想定される。



第102図 SI - 439

SI - 462 (第103図、図版23・42)

E61-42グリッド付近に位置し、南側は中世以降の溝により削平される。規模は、主軸方向は不明であるが、東西長3.4mを測る。主軸方位は、N-14.5°-Eを指す。確認面からの掘り込みは30cm前後と本遺跡のなかでは比較的深い。床面はほぼ平坦で、全体に比較的堅緻であるが、明確な硬化面は確認されなかった。壁溝は、カマド部分も含めて幅17cm、深さ8cmほどで全周する。柱穴は、対角線上に掘り込ま

れるが、南東側は溝により削平される。径0.3m～0.5m、深さ0.2～0.5mとばらつきが認められる。北東コーナーに接して長径42cm、深さ17cmのピットが設けられる。明確ではないが、その位置から貯蔵穴になると思われる。カマドは、北壁及び東壁に付設される。遺存状況及び東側のカマドは壁溝を埋めて設けられていることから、北側から東側にカマドを作り替えたことが伺われる。北カマドは、壁を50cmほど掘り込んで半楕円形状の煙道部を形成し、火床部は床面側に位置する。袖の遺存は僅かであるが、白色粘土を構築材としているようである。覆土中の焼土粒・ブロックの混入は少ない。東カマドは壁を30cmほど三角形状に掘り込んで煙道部を形成し、火床部は周溝の延長線上に設けられる。袖は白色粘土により構築されるが、袖の基盤となる壁溝内はローム粒を主体とする土で埋められる。住居の覆土上層から下層にかけてローム粒が多く含まれており、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

遺物は上層から下層までみられ、床面全体及び東カマドに集中する。4・6の杯や10の甕はほぼ確認面、1の杯、11の甕はカマド内からの出土である。

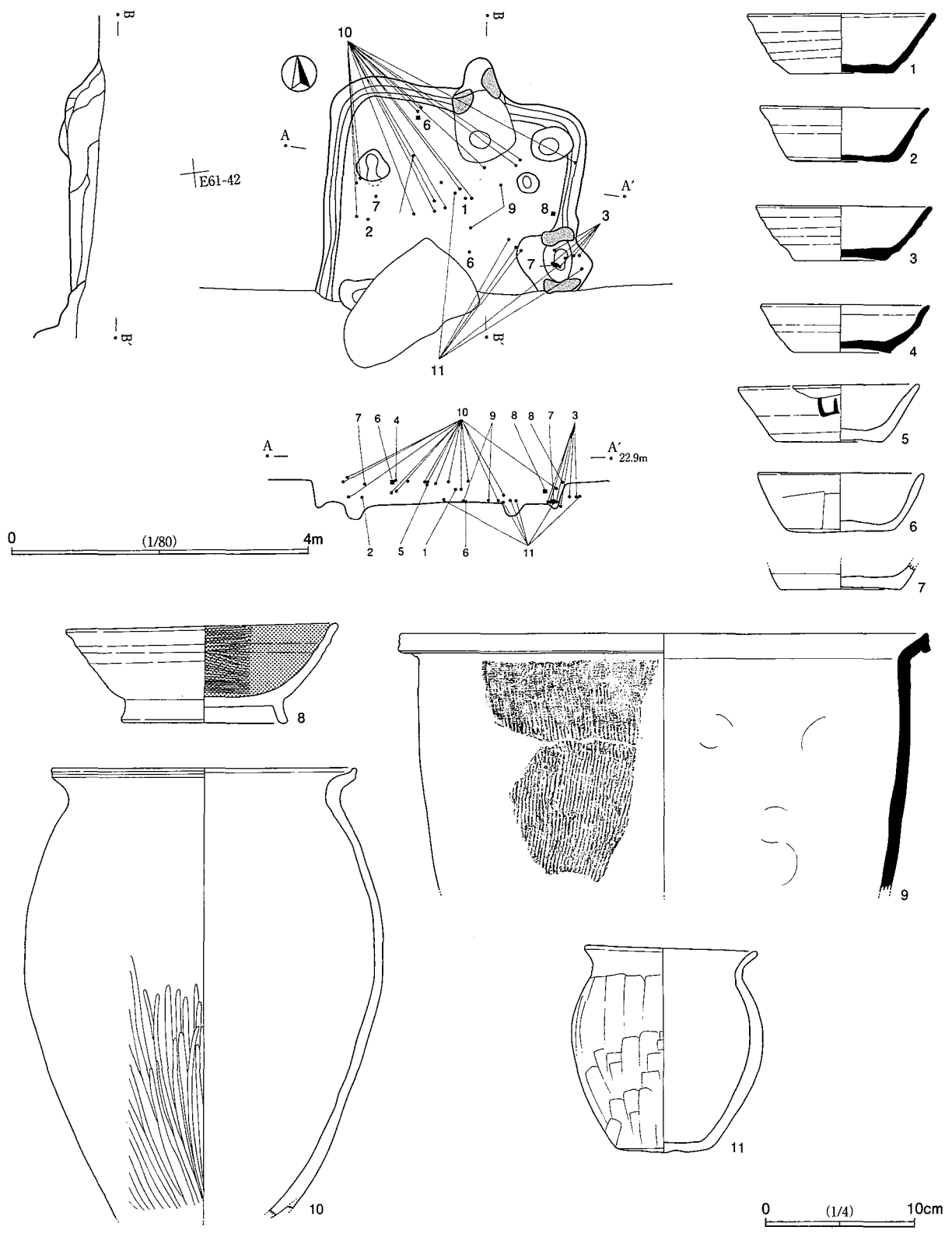
#### 出土遺物

1～4は須恵器の杯である。すべて回転糸切り離しで、2のみ底部周縁に僅かに回転ヘラケズリを加える。体部の調整もほぼ同様で、下端のヘラケズリは施されない。1・2は体部が直線的に開き、底部は平底となる。1は長石粒を多く含み、上半部が灰色、下半部が橙褐色を呈する。重ね焼きの結果、還元焰焼成になる部分と酸化焰焼成になる部分が生じたものと思われる。2は砂粒の混入が少なく、焼成は土師器的である。3・4は青灰色を呈し、胎土中に長石粒を多く含む。上げ底で、体部は内湾気味となるが、4は口縁部で外反するようになる。いずれも武蔵産の須恵器と思われる。5～7は土師器の杯である。5は体部が直線的に開き、器肉が厚い。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。胎土は緻密で、砂粒の混入も少ない。体部外面に墨書がみられるが、判読不能である。6は5と異なり、胎土中の砂粒がきわめて多く、器面がザラつく。体部の調整は明確ではないが、底部には全面に回転ヘラケズリが加えられているようである。7は底部のみの遺存であるが、底径が大きく、いわゆる箱形に近い杯になると思われる。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。8は口径18.4cmを測る大形の高台付き椀で、内面黒色処理される。高台は貼り付けされ、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。胎土は緻密で、内面は被熱による剥離が顕著である。9は須恵器の甕片で、最大径を口縁部に有する。外面に平行叩き、内面にはオサエ痕が残る。胎土中に長石粒を多く含み、酸化焰焼成により赤褐色を呈する。甑となる可能性もある。10はいわゆる常総型甕で、最大径を肩に有す。口唇部は短く摘み上げられ、胴部下半に粗いミガキが加えられる。胎土中に石英・雲母粒を多く含み、口縁部から肩部にかけて二次的被熱による器面の荒れが顕著である。11は小形の甕であるが、全体に分厚く、調整も比較的雑である。内面には、被熱による器面の剥離が顕著にみられる。

SI-465 (第104～107図、図版23・43)

E61-16グリッド付近に位置する。5軒の竪穴住居跡が複雑に重複しているのみならず、遺構の掘り込みが比較的浅く、覆土や壁の立ち上がりも明確でない部分が多いため、新旧関係を明らかにするのは困難であるが、貼り床の状況や出土土器の様相から考えると、D→C→B→E→Aの順で掘り込まれていたものと思われる。

D住居は西壁が不明であるが、長軸5.6m、短軸4.9mの南北方向に長い長形状を呈する。主軸方向は、N-15.5°-Eを指す。確認面からの掘り込みは20cm前後と浅い。床面はほぼ平坦で、全体に比較的堅緻



第103图 SI-462

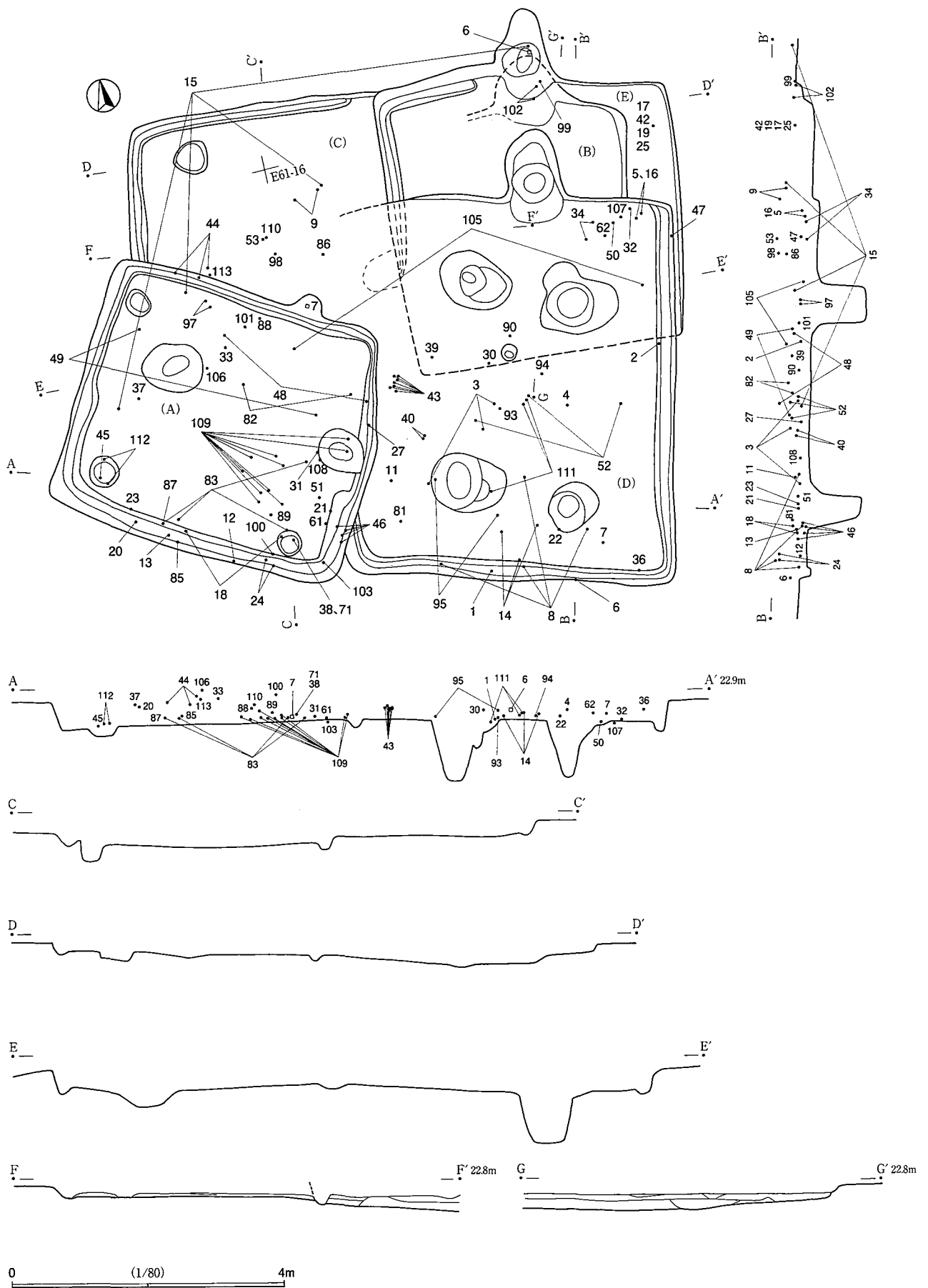
であるが、明確な硬化面は認められない。床面積は30㎡前後を測る。壁溝はカマド側の壁を除き幅20cmほどで巡る。柱穴はほぼ対角線上に4か所掘り込まれる。掘り方は大きく、径0.7m～1.2m、深さ0.8m～1.0mを測る。不整形な平面プランを呈しており、柱が抜き取られた可能性が高い。カマドは、北壁中央よりやや東側に寄った位置に設けられるが、Bの貼り床下の検出のため遺存は不良である。壁を1mほど長く掘り込んで煙道部を形成し、燃焼部は壁外に位置する。C住居はA住居に南側、E住居に東側を削平される。現状では北西コーナー付近の壁を確認したのみである。規模は不明であるが、E住居の西側に接して認められる焼けた床面の範囲がカマドとなる可能性があり、それによると、主軸長2.0mほどを測り、主軸方位はN-100°-Eを指す。確認面からの掘り込みは15cmほどと浅い。壁溝は、現存する部分では幅20cmほどで確認される。柱穴はコーナー部分に1本検出され、径0.5m、深さ14cmを測る。B住居は後述するE住居の貼り床下から検出された。北東コーナー付近及び北側のカマドの痕跡が検出されたのみで、詳細は不明である。E住居はB～C住居を切って掘り込まれている。規模は、長軸が推定4.5m、短軸4.3mを測りやや縦長となり、確認面からの深さは20cm前後とやや浅い。主軸方向はN-17°-Eを指す。壁溝は、北東コーナー付近に幅18cmほどで確認された。柱穴及び貯蔵穴等は検出されなかった。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。壁を0.8mほど長く掘り込んで煙道部を形成し、火床部は壁の延長線上に設けられる。A住居は長軸4.5m、短軸3.9mを測るやや縦長の長方形を呈する。主軸方向は、N-118°-Eを指す。確認面からの深さは、北側で10cm、南側で40cmほどを測る。床面はほぼ平坦で、全体的に堅緻であるが、硬化面は認められなかった。床面積は17.0㎡を測る。壁溝は、カマド部分を含み幅20cmほどで全周する。柱穴は北東コーナー部を除き対角線上に3本検出された。径40cm、深さ15cmほどと掘り込みは浅い。カマドは北壁と東壁の2か所に設けられる。いずれも遺存状況が不良のため新旧関係は不明である。北壁側は壁を20cmほど掘り込んで煙道部を形成するが、明瞭な火床部は確認されない。東壁側は壁への煙道部の掘り込みはなく、長さ0.7mほどの楕円形の火床部が認められるのみである。

遺物は床面直上から覆土上層にかけて多量に出土した。また、鉄滓がC住居の床面ほぼ中央からまわって検出された。

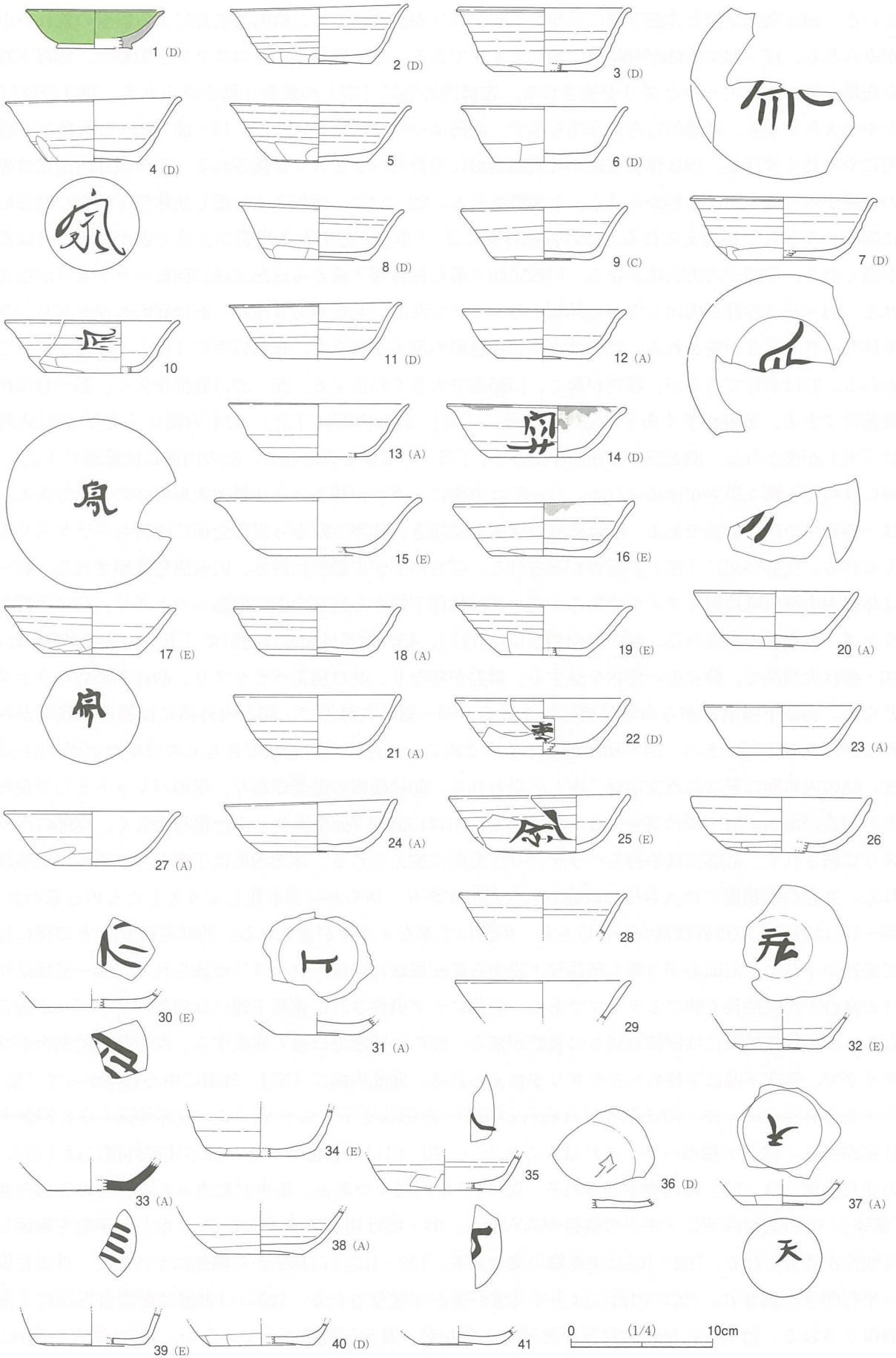
#### 出土遺物

1は推定口径9.8cmを測る畿内産緑釉の小椀で、底部は削り出し高台となる。釉薬はハケ塗りと思われ、斑がみられるが底部外面まで施される。素地は軟質な白色を呈する。2～80は土師器の杯である。2～9は口径がやや大きく、体部の開きが比較的少ないタイプである。底部は回転糸切り離しで、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリが施される。内外面のロクロ目が比較的良好に確認される。8以外は胎土中に雲母粒を僅かながら含み、2～7は口唇部を外方に摘み出す特徴を有する。3はいわゆる箱形に近い形状を呈し、雲母粒を比較的多く含む。焼成は硬質で須恵器的である。破損面に二次的な被熱の痕跡が残る。4は底部外面、7は底部内外面に「宗」の墨書が記される。10～16は体部の開きがやや大きくなる一群である。10は体部片であるが、下位に幅広の手持ちヘラケズリが施され、外面に「宗」の墨書が横位で書かれる。11は口唇部が短く外反し、作りはシャープである。底部回転糸切り離した後、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが加えられる。胎土中に雲母粒を多く含み焼成は良好である。12も11と類似する調整が施される。14は体部外面に「宗廿」と思われる墨書が正位で書かれる。口縁部外面から内面にかけて部分的に油煙が認められる。15は口径15.0cmと大きく、体部の開きや口縁部の外反度も大きくなる。底部は回転糸切りで、体部下端に回転ヘラケズリが施される。ロクロ目の痕跡はほとんどなく丁寧にナデられ



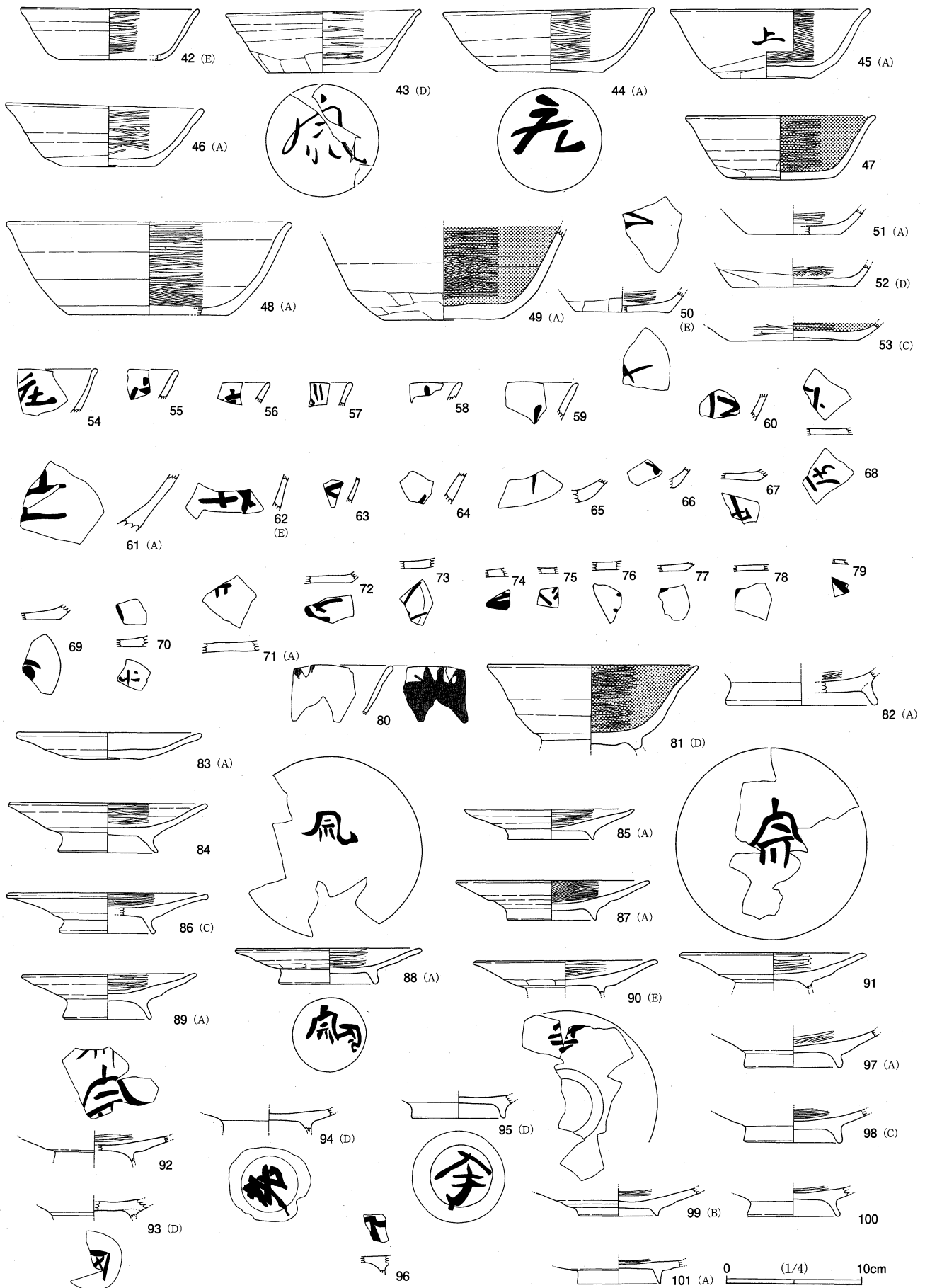


第104図 SI-465(1)



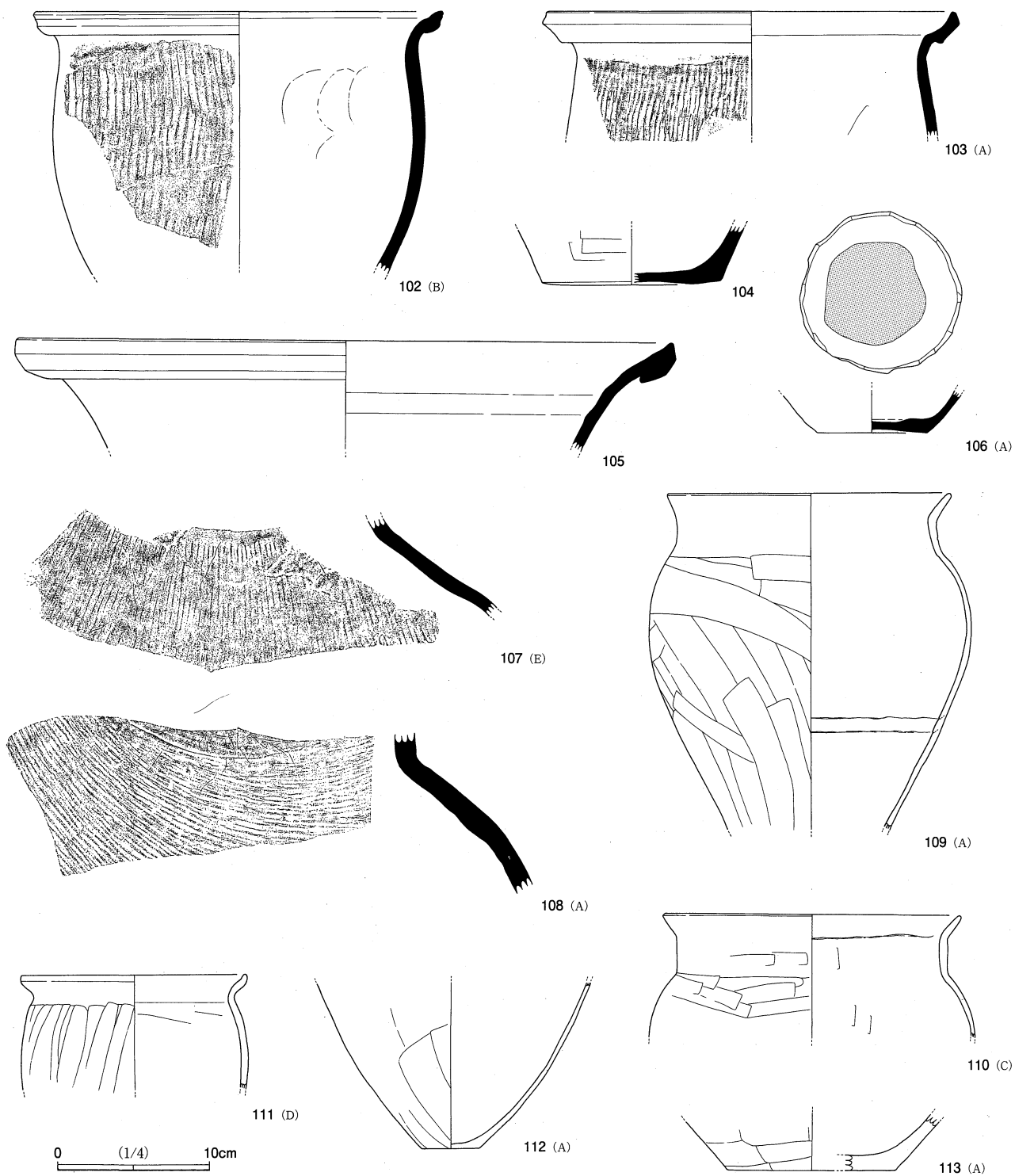
第105図 SI-465(2)

ている。16は底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリが施される。二次的な被熱による器壁の荒れや黒変がみられる。17～23は体部が直線的に開くタイプである。17は回転糸切りのロクロ土師器で、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。底部内外面に「宗」の墨書土器がみられる。18は底径7.0cmとやや大きくなり、器形的に古い様相を示す。底部はやや上げ底を呈する。19・20・22・23は体部が直線的にやや長く伸びる。19は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。20の底部内面には墨書の残画がみられるが、字形から「宗」と判断される。22・23は、回転糸切り離し後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが加えられる。22の体部外面には、「車」と思われる墨書が正位で書かれる。21は器高が高くなり、体部が内湾気味となる。回転糸切り離し後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが加えられる。24～26は体部が内湾しながら外傾するタイプである。回転糸切り後24・25は回転ヘラケズリ、26は手持ちヘラケズリが施される。25の胎土中に赤色粒の混入が目立ち、体部外面に「宗」の墨書が正位で書かれる。27は小片であるが、器肉が薄く、口縁部で大きく外反する。28・29は底部を欠く。30～41は杯の底部片である。墨書が多くあり、30は内外面に「宗」、31は内面に「上」、32も内面に「庄」、37は内外面に「天」が書かれる。33と35は残画の字形から、「宗」の墨書と思われる。36の内面には線刻で「正」、外面には判読不明な墨書が認められる。42～53は内面にミガキが施される比較的大形の杯の一群である。42は一群の中では小形品である。43は体部が直線的に開き、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが加えられる。底部外面に「宗」の墨書がみられる。47も体部が直線的に開き、内面黒色処理される。44～46は体部が内湾気味に開くタイプである。44・46は体部下端から底部全面に回転ヘラケズリ、45は手持ちヘラケズリの調整が施される。44の底部外面には「庄」、45の体部外面には正位で「上」の墨書が書かれる。48・49は大形品で、鉢に近い形状を呈する。調整が異なり、48は回転ヘラケズリ、49は手持ちヘラケズリとなる。49は不鮮明ながら内面黒色処理される。50～53は底部片で、50の内外面には墨書の残画がみられるが、判読不明である。54～80は墨書土器片である。小片のため判読できるものは少ないが、54～56、62、68の内外面に記された文字は「庄」と思われる。80は墨痕の濃淡があり、墨のパレットとして使われた可能性がある。81・82は高台付きの杯である。81は口径15.7cmを測り、高台裾部を欠く。体部のヘラケズリは施されず、底部には手持ちヘラケズリが全面に加えられる。体部内面は丁寧なミガキ後黒色処理される。高台の破損面には人為的に研磨された部分があり、何らかに再利用しようとしたものと思われる。83～101は皿で、83以外は高台が付けられ、内面に丁寧なミガキが施される。83は底径5.0cmと口径に比して底径が小さい。回転糸切り離し後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが施される。84～87は貼り付けの高台が比較的長く伸びるタイプである。全体にナデ調整され、体部下端には回転ヘラケズリが加えられる。84の底部外面には回転糸切りの痕跡が残り、86の口唇端部は強く屈曲する。88も比較的高台が高いタイプで、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられる。底部内面に「宗」、外面に中心に向かって「宗」が2文字書かれる。85・87は貼り付け高台が断面三角形状を呈するタイプで、底部外面中央に回転糸切り痕が残る。体部下端のヘラケズリはみられない。90・91は高台部を欠き、90の体部外面には「庄」、91の底部内面には「宗」の墨書が記される。92～101は底部片である。墨書が数点みられ、92の底部内面に「宗宗」、94の底部外面に「庄」の墨書がみられる。93・95は判読不明であるが、「庄」の字形を模倣した可能性が考えられる。102～108は須恵器の甕である。102・103は口縁部から胴部にかけてで、外面に縦位の平行叩きが施され、102の内面には当て具痕が僅かに確認される。103の口唇部は断面台形状に丁寧に面取りされる。胎土中に白色砂粒及び雲母粒を含むが、還元焼成されていない。105は推定口径44.0cm



第106图 SI-465(3)

を測る大形品の口縁部で、やはり還元焰焼成されず赤褐色を呈する。104・106は底部片で、104は軟質の灰白色を呈する。106は壺の底部の可能性もある。胎土中に黑色粒を多量に含み、硬質の暗青灰色を呈する。底部は回転糸切り未調整で、内面に意図的な研磨痕が広がる。107・108は肩部片で、107には縦位の叩き、108には横位の叩きを加えられ、内面はナデ調整される。107は赤褐色の色調を呈し、焼成や胎土等



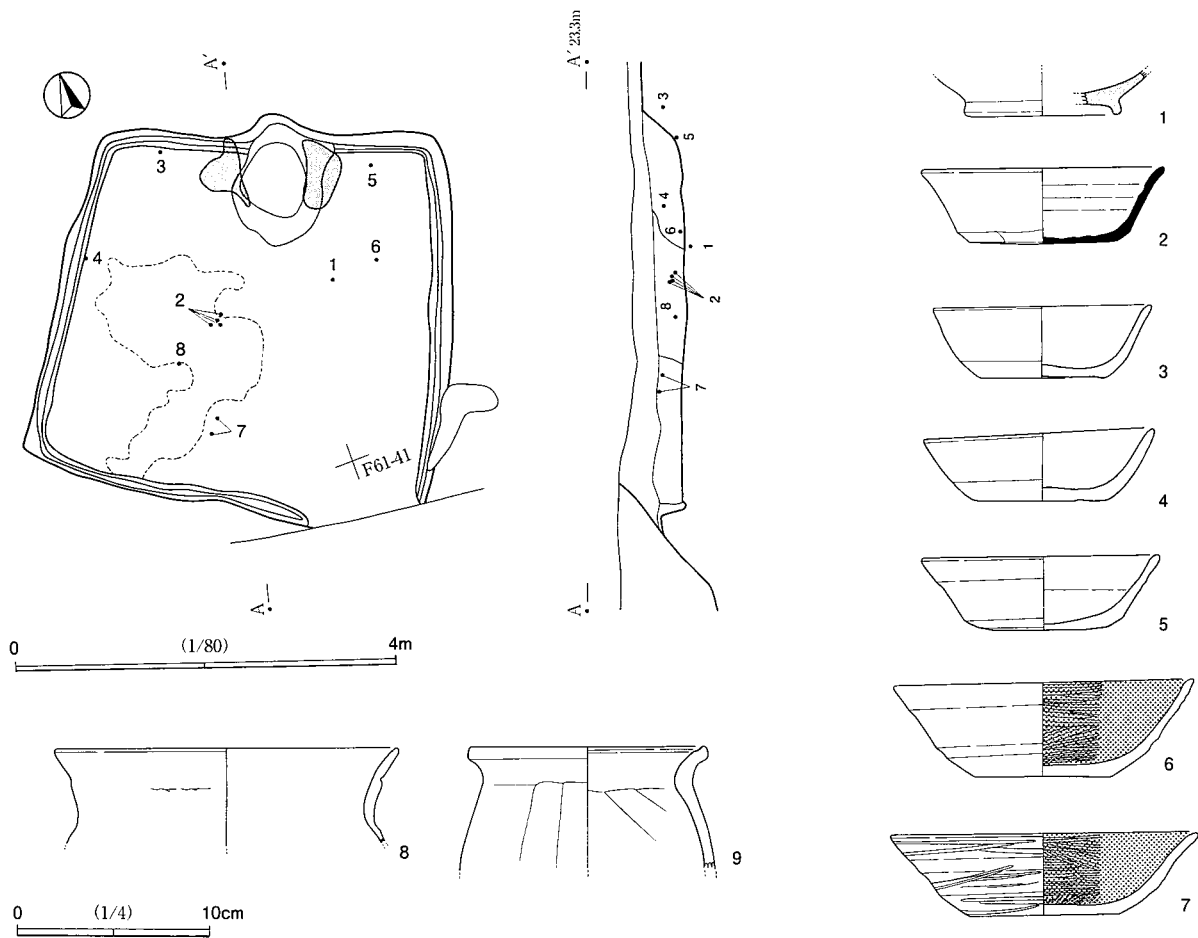
第107図 SI-465(4)

から105と同一個体となる可能性が高い。106は還元焰焼成で青灰色を呈する。109～113は土師器の甕である。109・110は口頸部がコの字状を呈し、胴部の器肉が薄く削られていることから、武蔵型を意図したものであろう。肩部に横位、以下に縦位のヘラケズリを施す点も武蔵型の特徴を有する。109の胴部上半にはカマド材、下半には煤の付着が認められる。111は小形甕で、口唇部が摘み上げられ、受け口状を呈する。胴部外面には縦位のヘラケズリが施され、全体に煤が付着する。112・113は胴部片で、底部が小さく仕上げられ、器肉はきわめて薄い。やはり武蔵型の甕となろう。

SI-471A (第108図、図版24・44)

F61-30グリッド付近に位置し、中世の溝により南東コーナー部を切られ、東壁の一部を鍛冶遺構に削平される。規模は、長軸4.0m、短軸3.8m、床面積17.4㎡を測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-30°-Eを指し、確認面からの掘り込みは0.3～0.5mと比較的深い。床面は比較的堅緻で、特に西側に明確な硬化面が確認された。壁溝は、カマド部分を除き、幅8cm、深さ3cmほどで全周する。柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁ほぼ中央に位置する。煙道部の壁への掘り込みは小さく、火床部は床面側に深さ30cmほどで広く掘り込まれる。袖は山砂で構築される。

遺物は、床面から覆土中層にかけて出土している。



第108図 SI-471A



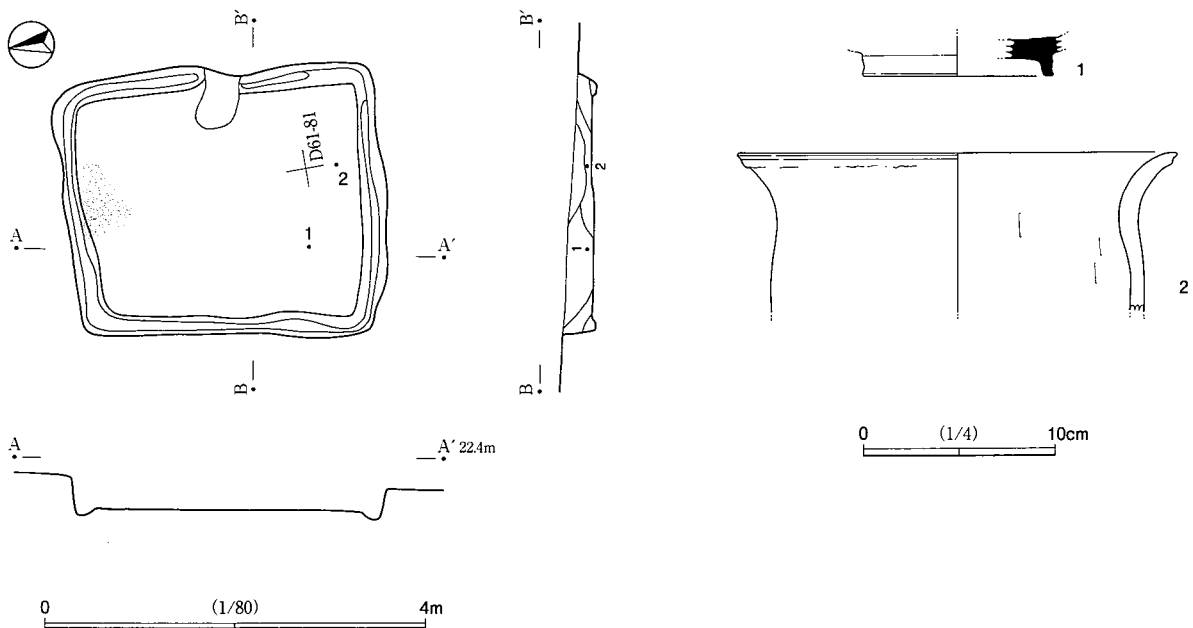
## 出土遺物

1は灰釉の高台付き椀の底部片であろう。高台は貼り付けで、内湾しながら伸びる。2は須恵器の杯で、推定口径12.8cmを測る。器面が荒れているため詳細な調整は不明であるが、底部全面から体部下端に手持ちヘラケズリが施されていると思われる。内面にロクロ目が残ри、底部はかなり薄く仕上げられる。胎土中に長石粒を多く含み、新治産となろう。3～7は土師器の杯である。3・4は同様のタイプで、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが施される。胎土中に小砂粒を多く含み、器面がざらついている。5は回転糸切り後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリを加える。体部上半がやや肥厚する特徴を有する。胎土中に雲母粒を多く含むが、器面は平滑である。6・7は内面黒色処理される大形品で、口径16cm前後を測る。体部下端及び底部全面に回転ヘラケズリが施される。ミガキは内面に顕著にみられるが、体部外面及び底部にも粗いミガキが加えられる。いずれも、長石・雲母の小砂粒を比較的多く含む。

SI-485 (第109図、図版24)

D61-70グリッド付近に位置し、中世の溝が覆土上部を切っている。規模は、長軸3.3m、短軸2.8mを測り、横長の長形状を呈する。主軸方位はN-96°-Eを指し、確認面からの掘り込みは0.2~0.4mを測る。床面は比較的堅緻であるが、明確な硬化面は確認されなかった。床面積は9.3㎡と比較的小形である。壁溝は、カマド部分を除き、幅20cm、深さ8cmほどで全周する。柱穴は検出されなかった。カマドは東壁ほぼ中央に位置する。袖等の構築物は検出されず、火床部と思われる小さな掘り込みが認められたのみである。煙道部の壁への掘り込みもほとんどなかった。中世の溝がカマド上部を走っており、溝によって削平された可能性もある。覆土中にローム粒を含むが、自然堆積と思われる。焼土が北壁中央沿いに床面直上で検出された。

遺物の出土は少ないが、ほぼ床面近くから確認された。



第109図 SI-485

## 出土遺物

1は須恵器の高台付杯の台部片で、推定裾径10.1cmを測る。高台は貼り付けで、底部からはほぼ直立し、開きは少ない。胎土中に長石の大砂粒を含み、新治産と思われる。2は口縁部に最大径を有する土師器の甕あるいは甔であろう。口唇部が外方に摘み上げられ、下端に粘土の接合痕が残る。胴部には幅広のヘラケズリが施される。

SI-551 (第110・111図、図版25・44)

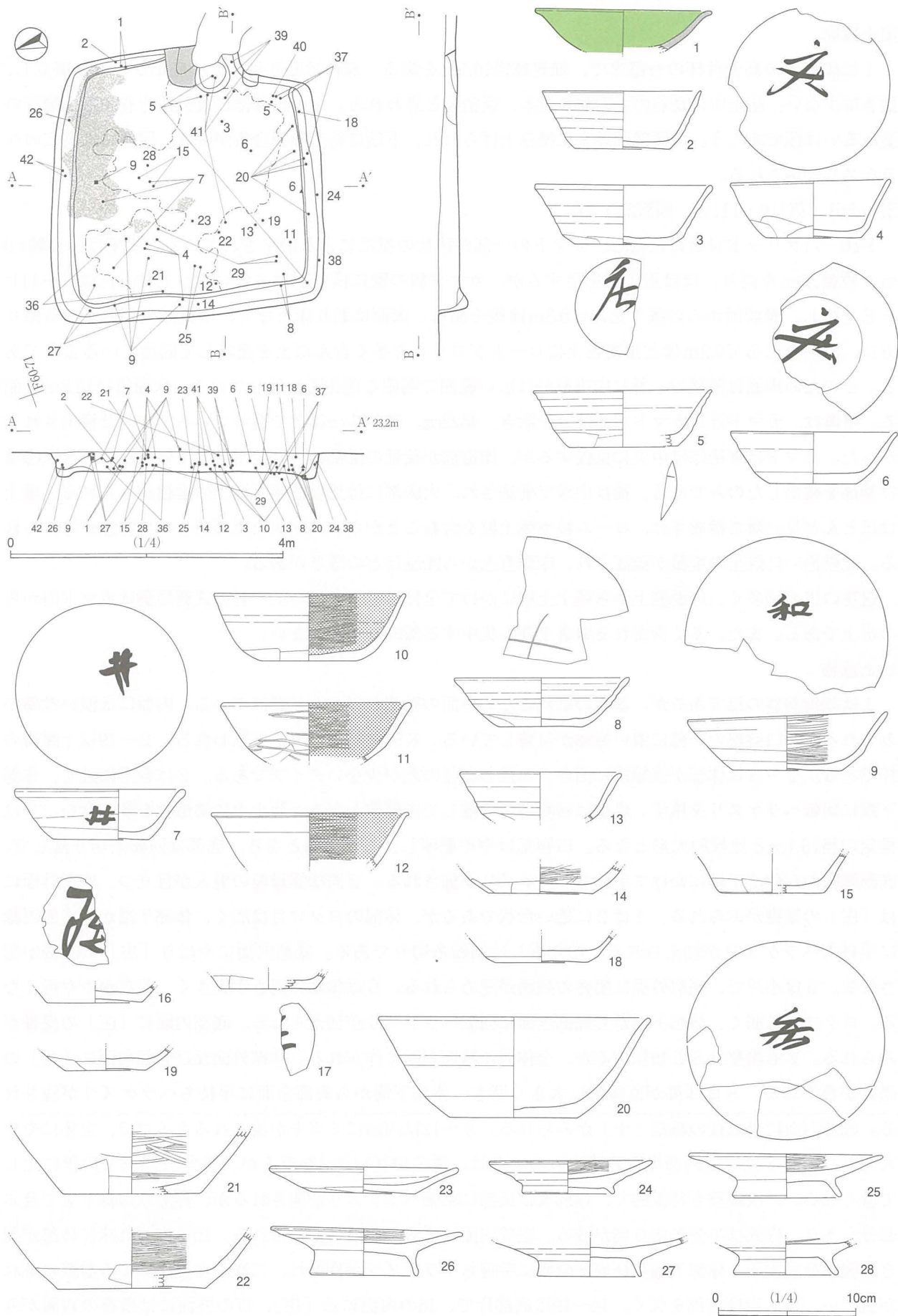
F60-71グリッド付近に位置し、カマドの一部が後世の攪乱により削平されている。規模は、長軸4.0m、短軸3.9mを測り、ほぼ正方形を呈するが、カマド側の壁に段差が生じている。主軸方位はN-111°-Eを指し、確認面からの掘り込みは0.3m前後を測る。床面は貼り床となり、中央部分が深くなる掘り方に、深いところで0.3mほど黒褐色土にロームブロックを多く含んだ土を充填して固めているようである。そのため床面は堅緻で、特に中央部分は広い範囲で明確な硬化面を示している。床面積は14.8㎡を測る。壁溝は、カマド及びカマド右側部分を除き、幅22cm、深さ6cmほどで巡っている。柱穴は検出されなかった。カマドは東壁ほぼ中央に位置するが、煙道部が後世の攪乱により削平されているため、火床部及び袖部を検出したのみである。袖は山砂で構築され、火床部には比較的厚く焼土の堆積がみられる。覆土はほとんど単一層で構成され、ローム粒や焼土粒を含むことから、人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。北壁沿いに焼土の堆積が確認され、床面直上から20cmほどの厚さがある。

遺物の出土は多く、床面直上から覆土上層にかけて全体にみられる。39・41の武蔵型甕はカマド内からの出土である。また、多く含まれる墨書土器も集中する傾向は伺われない。

## 出土遺物

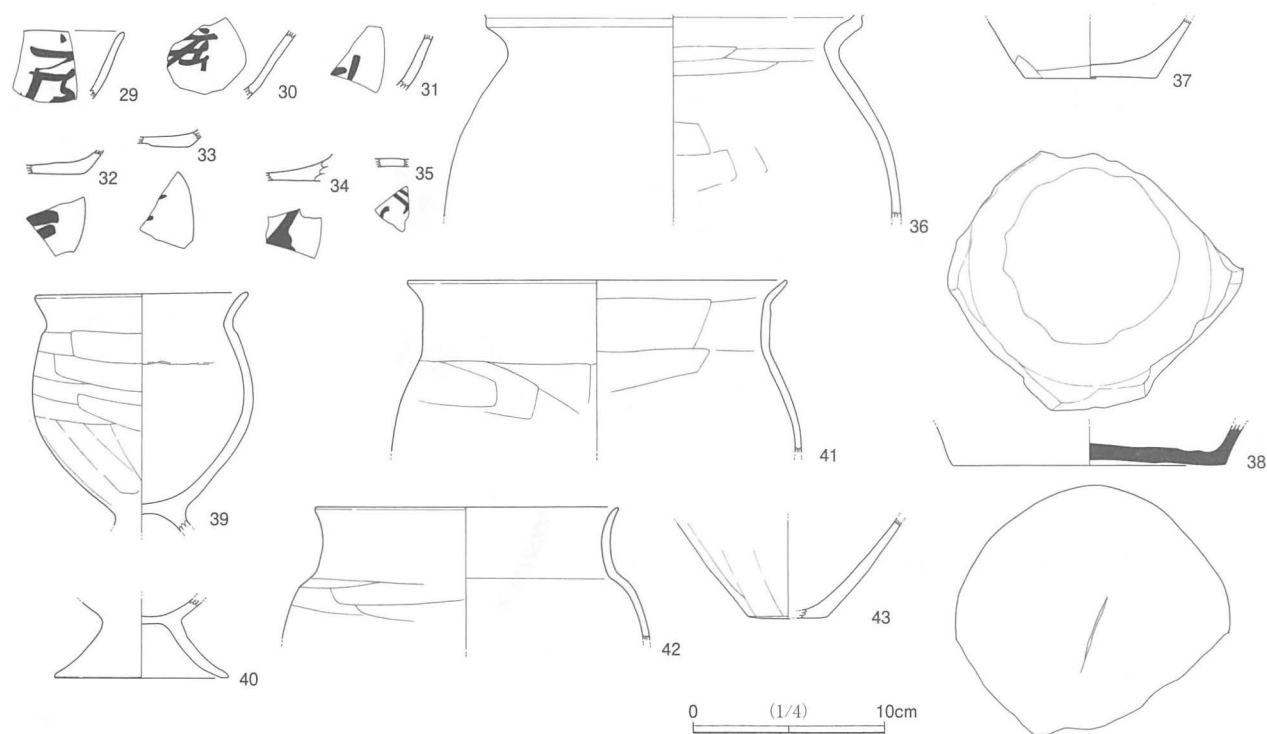
1は緑釉陶器の皿であるが、器面の摩耗のため外面の釉薬がほとんど剥げている。内面には淡い釉薬がみられるが、口唇部の一部に濃い緑釉が付着している。K90併行期の所産と思われる。2~19は土師器の杯である。2~5は体部が直線的に開き、口径と底径の差が少ないタイプである。2は箱形に近く、体部下端に回転ヘラケズリを施す。底部は回転糸切り離しで未調整となる。胎土中に雲母粒を多く含む。3は推定口径13.1cmと比較的大形となる。口唇部はやや肥厚し、外反気味となる。底部は回転糸切り離しで、底部周縁から体部下端にかけて手持ちヘラケズリが施される。2同様雲母粒の混入が目立つ。底部外面には「庄」の墨書がみられる。4は2に近い形状であるが、体部のロクロ目は弱く、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられる。切り離しは回転糸切りである。底部内面にやはり「庄」の墨書が記される。5は小片で、底部外面に墨書の残画が認められる。6は体部の開きが大きく、器高がやや低くなる。ロクロ目は弱く、体部下端から底部全面に回転ヘラケズリが加えられる。底部内面に「庄」の墨書がみられる。7も調整は6と類似するが、全体的に器肉が厚く作られる。体部外面及び底部内面に「井」の墨書が書かれる。8は体部が直線的に大きく開き、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施される。底部内面に焼成後の線刻「十」がみられる。9~12は内面にミガキが施されるタイプで、全体にやや大形となる。9以外は内面黒色処理される。9は、推定口径14.7cmを測るが、器高は4.3cmと口径に比して低くなる。二次調整も特徴的で、体部及び底部に回転ヘラケズリが施されるが、体部は口縁下まで及ぶ部分もあり、底部は半分糸切り痕が残る。底部内面に「和」の墨書がみられる。10は内湾気味に体部が開き、椀状を呈する。体部下端及び底部全面に手持ちヘラケズリが施され、二次的な被熱による器壁の荒れが激しい。11・12は底部を欠く。14~19は底部片で、16の内面には「庄」、17の外面には墨書の残画がみ





第110图 SI-551(1)

られるが、判読不明である。20は推定口径20.0cm、器高7.4cmを測る大形の杯である。体部は内湾気味に開き、口唇部で緩く外反する。体部下端に幅広の回転ヘラケズリが施されるが、底部は摩耗により調整は不明である。体部内面も摩耗が激しいが、ミガキが施されたものと思われる。21・22も大形の杯の底部片と思われるが、21は甕となる可能性もある。23～28は皿で、23以外は高台が付く。23は無高台で、体部が外反気味に開く。底部回転糸切り離し後体部下端から底部の中央部以外に手持ちヘラケズリが施される。24は口径12.1cmと皿の中では小形である。内面は井桁状のミガキ、外面は全体にナデ調整され、低い高台が貼り付けられる。底部中央には回転糸切り痕が明瞭に残る。25～28は高い高台が貼り付けられる一群で、内面にミガキが施される。調整は24とほぼ同様であるが、底部外面の糸切り痕はナデにより消されている。25の底部内面には、「庄」の文字が書かれている。29～35は墨書土器片である。29～31は体部外面に書かれ、いずれも「庄」の文字と思われる。32～35は底部外面の記載で、32・35は「庄」となる可能性が考えられる。36～43は甕で、38のみ酸化焰焼成の須恵器となる。36は常総型甕となるタイプで、口唇部が短く摘み上げられる。外面は丁寧にナデられ、黄白色の色調を呈する。38は大形の甕で、遺存する底部内面には磨られて平滑となる部分が広がっている。砥石として再利用された可能性がある。39は台部を欠く小形の台付き甕である。胴部外面は、上位に横位、下位に縦位のヘラケズリが施される。カマドに使用された可能性が高く、肩部以下にカマド部材である白色粘土が付着する。胎土は粗く、小砂粒を多く含む。形態的には武蔵型となろう。40は武蔵型の小形台付き甕の台部片である。41・42は口縁部がコの字状を呈し、器壁が薄く仕上げられる武蔵型甕である。43は底部が小さく。器壁が薄いことからやはり武蔵型甕の底部と思われる。



第111図 SI-551(2)

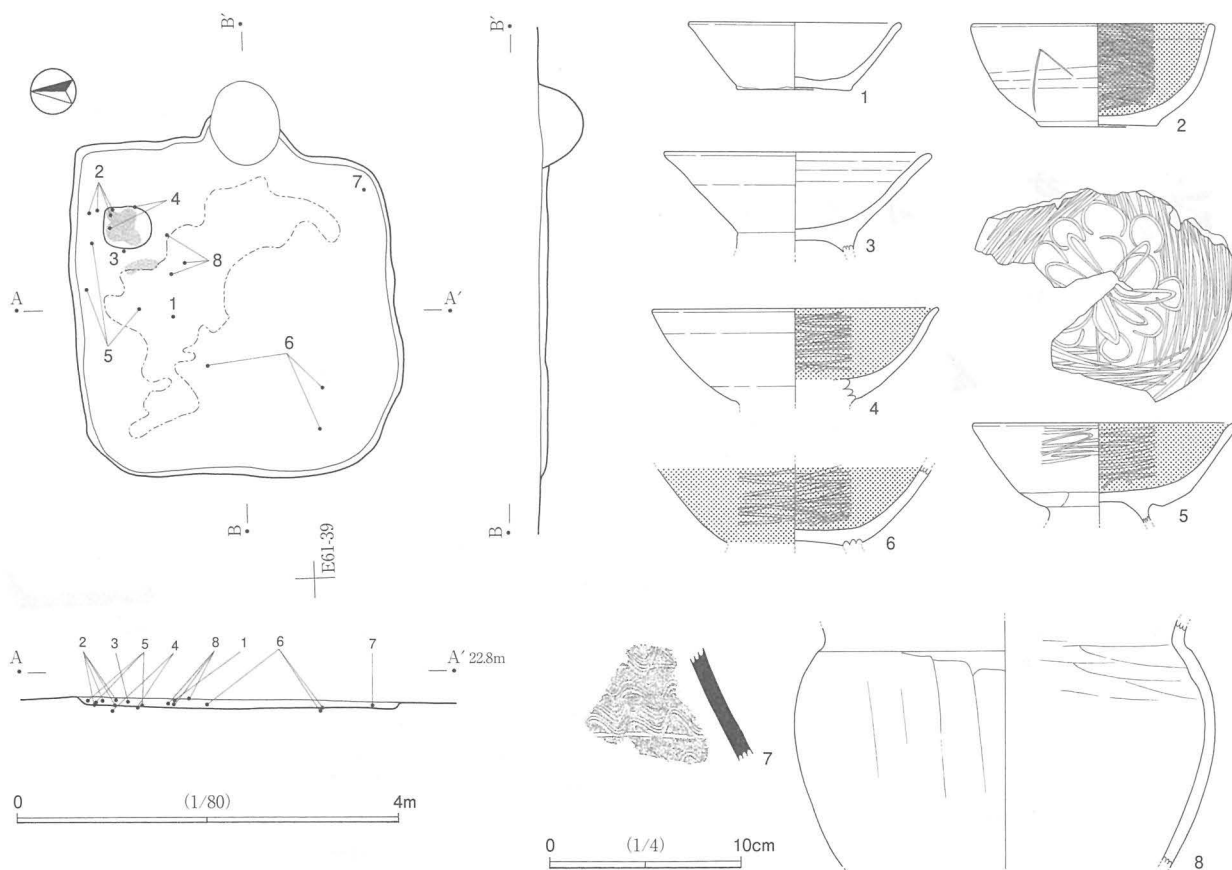
SI-554 (第112図、図版25・44)

E61-29グリッド付近に位置し、カマド部分が中世の土坑により大きく削平されている。規模は、長軸3.5m、短軸3.4mを測り、ほぼ正方形を呈するが、北東部を除き各コーナーが丸みを帯びる。主軸方位はN-91.5°-Eを指し、確認面からの掘り込みは5~10cmときわめて浅い。床面は全体的に堅緻であるが、特に床面北側に硬化面が広がっている。床面積は11.4㎡を測る。柱穴及び壁溝は検出されなかった。カマドは東壁ほぼ中央に位置するが、土坑により削平されているため詳細は不明である。床面北東側に、被熱により激しく焼けている部分が認められるが、スラグなどの遺物がないため性格は不明である。

遺物は北東コーナー付近に集中し、ほとんど床面直上からの出土である。

出土遺物

1は推定口径11.3cmを測る小形の杯で、体部は直線的に開き底部がやや突出する。ロクロ目は弱く、底部は回転糸切り離しとなるが粗雑である。2は椀形を呈する杯で、底部が若干突出する。内面には丁寧なミガキが施され、黒色処理となる。内面はナデ調整後粗いミガキが加えられる。回転糸切り離し未調整で、胎土中に小砂粒を多く含む。体部外面に焼成後のV字状線刻がみられる。3は高台部を欠くが、体部が直線的に開く形状から、いわゆる足高高台杯となるものであろう。黄褐色の色調を呈する。4~6は高台付き杯で、内面黒色処理される。6は外面にも黒色処理がみられる。5は内面に井桁状のミガキを施した後に、見込み部に螺旋状のミガキが加えられる。4は被熱による器壁の荒れが激しいが、体部外面にミガキが施された可能性が高い。7は須恵器の壺の肩部片であろう。櫛歯による波状文が施される。8は甕



第112図 SI-554

の胴部片で、幅広の縦位ヘラケズリが加えられる。

SI-562 (第113図)

E61-59グリッド付近に位置するが、中世の溝により大半部分が削平される。規模は、長軸3.8m、短軸は推定3.6mを測り、やや縦長の長形状を呈する。主軸方位は、 $N-20^{\circ}-E$ を指す。確認面からの掘り込みは10~15cmとやや浅い。床面は残存部分に関しては比較的堅緻である。壁溝は幅12cm、深さ9cmで確認される。カマドは大きく削平されているが、北壁ほぼ中央に位置する。

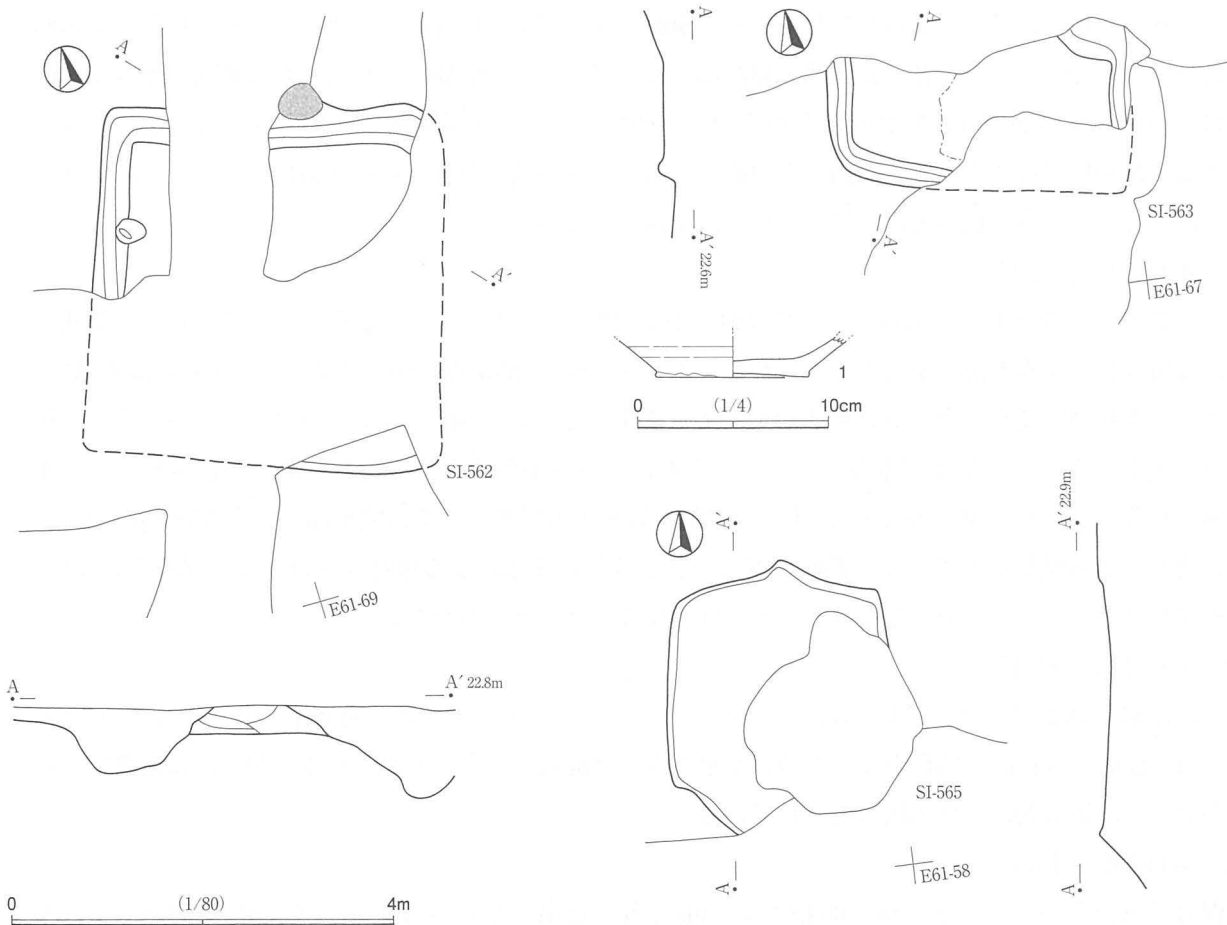
図示できるような遺物の出土はなかった。

SI-563 (第113図、図版25)

E61-56グリッド付近に位置するが、北側半分を中世の溝、南東コーナー部分を後世の攪乱により削平される。規模は、東西長で3.2mを測り、主軸方位は $N-101.5^{\circ}-E$ を指す。確認面からの掘り込みは10~20cmと浅い。床面は部分的に確認したのみであるが、東側に硬化面の広がりが見られる。遺存部では柱穴は検出されなかったが、壁溝が幅20cmほどで巡っている。カマドも部分的な遺存であるが、火床部の掘り方と思われる掘り込みが東壁に位置し、底面近くに焼土粒の堆積がみられる。

出土遺物

1は土師器の大形の杯であろうか。やや突出する底部には回転ヘラケズリが施され、体部下端の二次調整はみられない。



第113図 SI-562・563・565

## SI-565 (第113図)

E61-47グリッド付近に位置するが、中央部分を後世の攪乱、南側を中世の溝により削平される。規模は、東西長で2.2mを測る小形の住居で、南側の壁が突出する特異なプランを呈する。主軸方位はN-7.5°-Eを指す。確認面からの掘り込みは10cm以下と浅い。床面の遺存も不良で、遺存部では特に締まった状態ではなく、柱穴及び壁溝も検出されなかった。カマドは明確ではないが、北壁の三角形の掘り込みや部分的な砂質粘土及び焼土の遺存からこの部分がカマドに相当するものと思われる。

遺物の出土は少なく、図示できるものはなかった。

## 2 竪穴住居内出土遺物

住居内から出土した土器以外の遺物をまとめて報告する。

### 瓦 (第114図、図版45・46)

4軒の竪穴住居跡から出土している。1は暗灰色の平瓦の狭端部片である。凸面には撚りの弱い縄文、凹面には木口によるケズリが施される。3は平瓦の側縁部で、凸面に縄文、凹面に布目後ナデが加えられる。側縁には狭端部から広端部へのケズリが施される。4は黄褐色の色調を呈する平瓦で、凸面に平行叩きが施される。凹面は凹凸が激しく、粘土の接合面で剥離した可能性がある。2は器肉が薄く、丸瓦となろう。凸面はナデ、凹面には布目痕が残る。狭端部及び側縁部は丁寧なケズリである。黄褐色の色調を呈する。5は平瓦で、凸面縄文、凹面ケズリが施される。側面は狭端部から広端部への丁寧なケズリが加えられる。6~8は平瓦で、6・7は黄褐色、8は灰褐色の色調を呈する。いずれも、凸面縄文、凹面布目となる。6の凹面には粘土の剥離が生じている。側面は狭端部から広端部へのケズリが施される。7の凹面には粘土の糸切り痕がみられ、狭端部・側縁部とも丁寧なケズリが加えられる。8は硬質の焼きで、中央部に布の合わせ目残り、幅2cmほどの模骨痕が観察される。側縁部側には糸切り痕も若干認められる。9は平瓦の広端部片である。凸面は不明瞭であるが、粗い縄文がみられ、内面は布目をナデにより部分的に消している。黄褐色の色調を呈し、胎土は全体的に粗い。

### 土錘 (第115図、図版47)

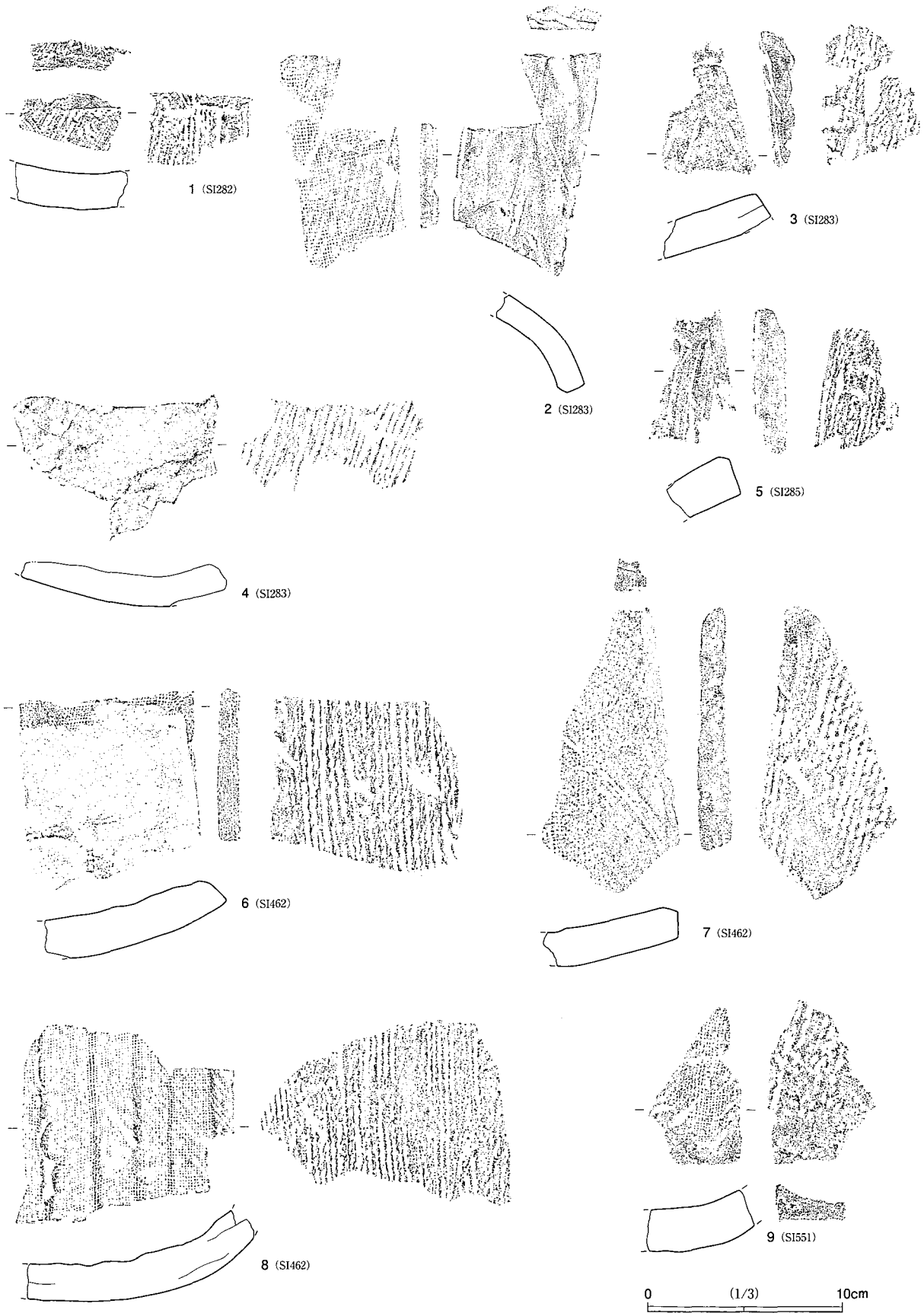
1~6は小形の管状土錘である。1・2はSI-282の出土で、ナデにより丁寧に仕上げられる。穿孔部両端には紐ズレによる摩滅痕が若干認められる。3~5はSI-283からの出土である。いずれも破損品で、4は1・2と類似するが、3・5は胎土がやや砂質を帯びる。6はSI-551からの出土で、他に比して胴部の膨らみが大きい。調整は丁寧なナデで、胎土中に長石の小砂粒を多く含む。部分的に被熱による赤化がみられる。7・8はSI-282から出土した大形の管状土錘である。7は完形品で、重さ78.0gを測る。全体に指頭による整形がなされる。器面にざらつき残り、使用による摩耗等はほとんど認められない。8は破損品で、7よりやや小形となろう。8同様摩耗はほとんどみられない。

### 羽口 (第115図、図版47)

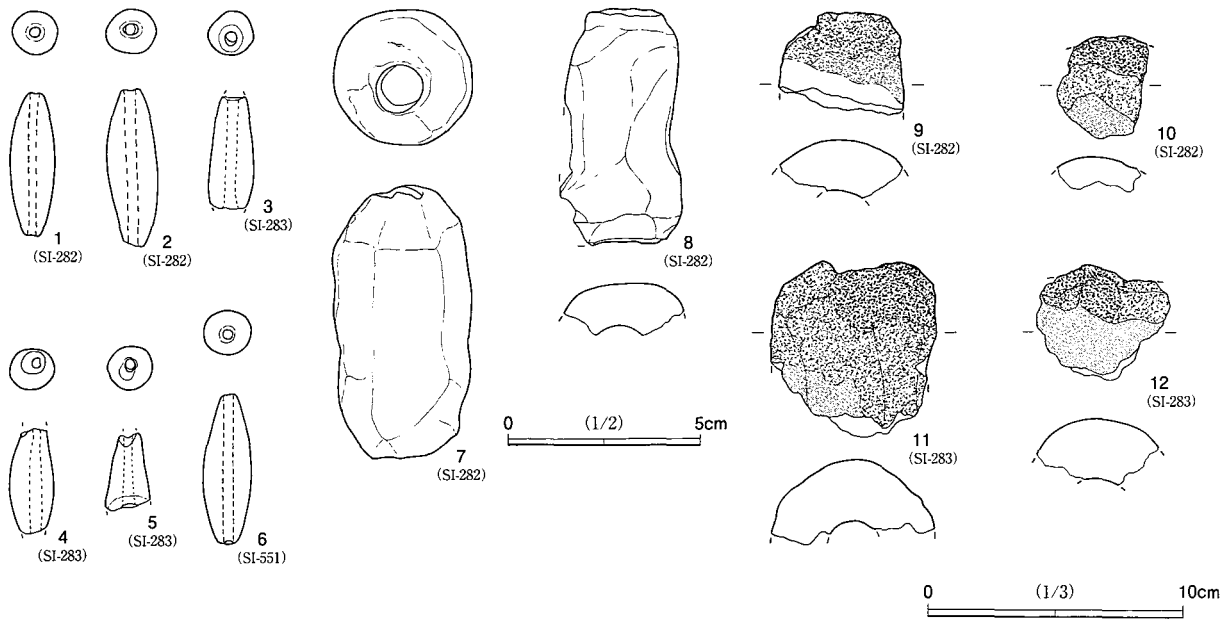
9・10はSI-282、11・12はSI-283からの出土で、いずれにもスラグ及び発泡滓を多く伴っているが、それぞれの住居には鍛冶の遺構がないため、廃棄あるいは混入したものと思われる。10は特に被熱による変色が著しく、挿入部はガラス状に変質している。

### 支脚 (第116図、図版47)

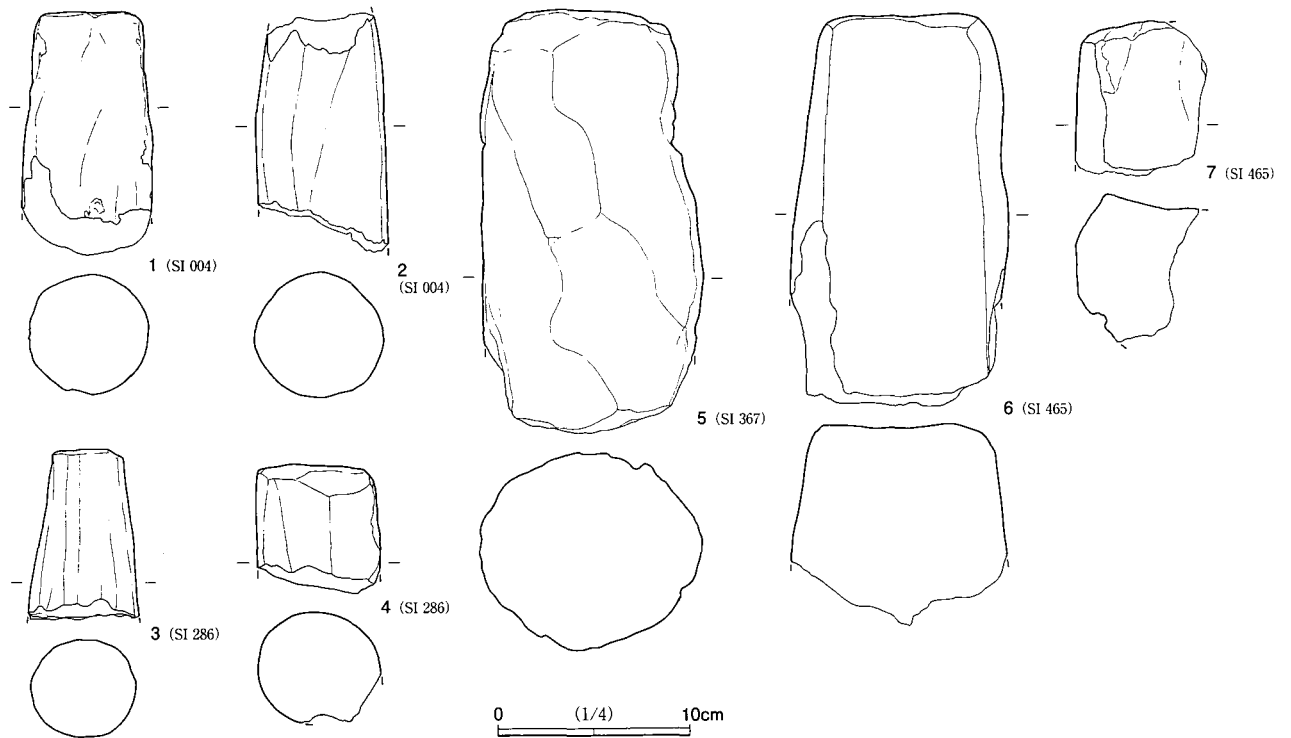
支脚はそれほど多くないが、SI-004・286・465で各2点出土している。1・2はSI-004出土で、1は上端部が遺存する。全体に砂質を帯びるが、調整は比較的丁寧である。3・4はSI-286出土で、頭部



第114図 竪穴住居跡出土瓦

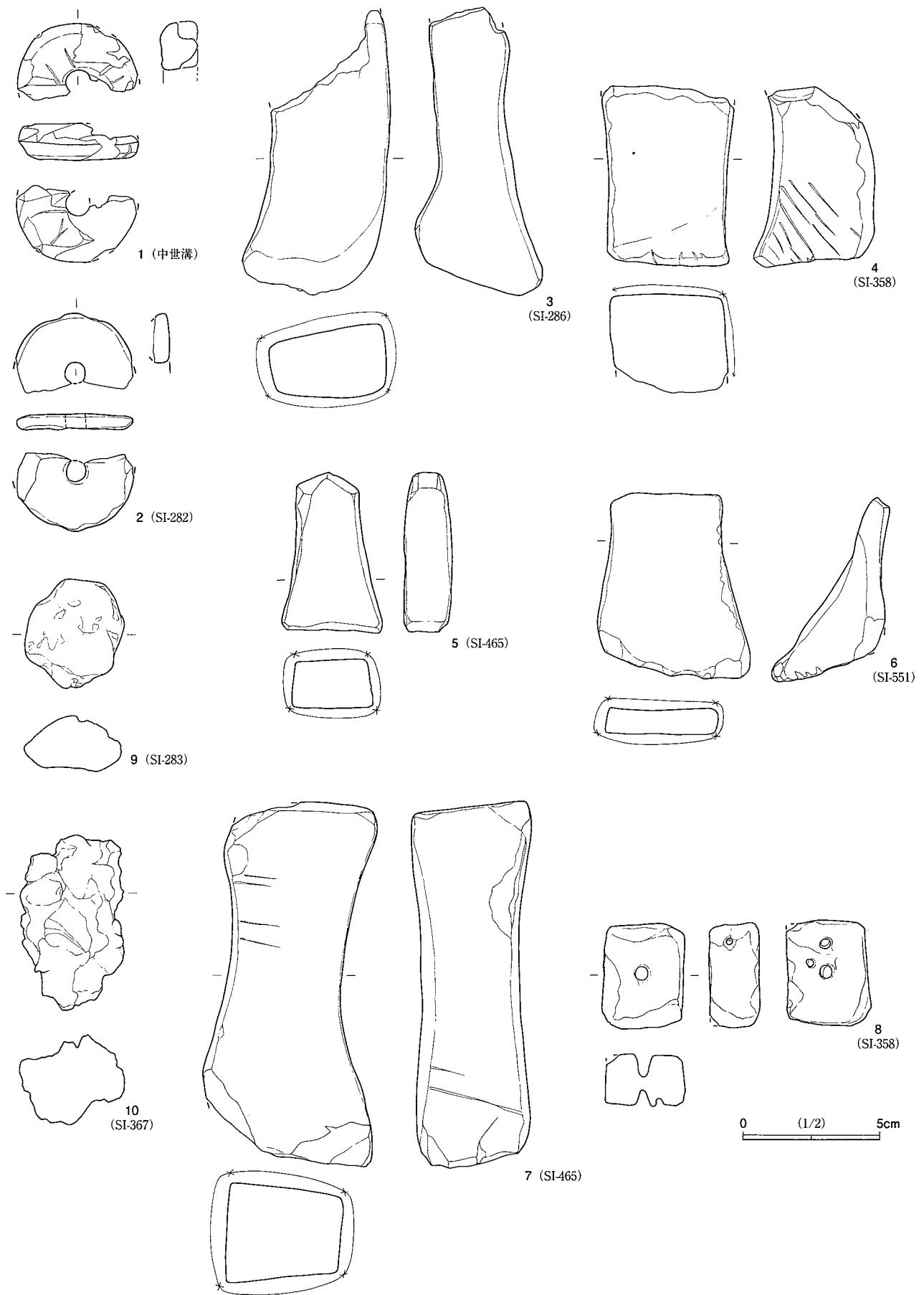


第115図 竪穴住居跡出土土錘・羽口



第116図 竪穴住居跡出土支脚

のみの遺存である。3は胎土が比較的緻密で、丁寧に調整される。小形品となろう。5はSI-367出土で、下端部を若干欠く。大形品で、スサの混入が目立つ。6・7はSI-465の出土で、いずれも大形品となろう。6は角柱状の形状を呈する。胎土は緻密で、堅緻である。

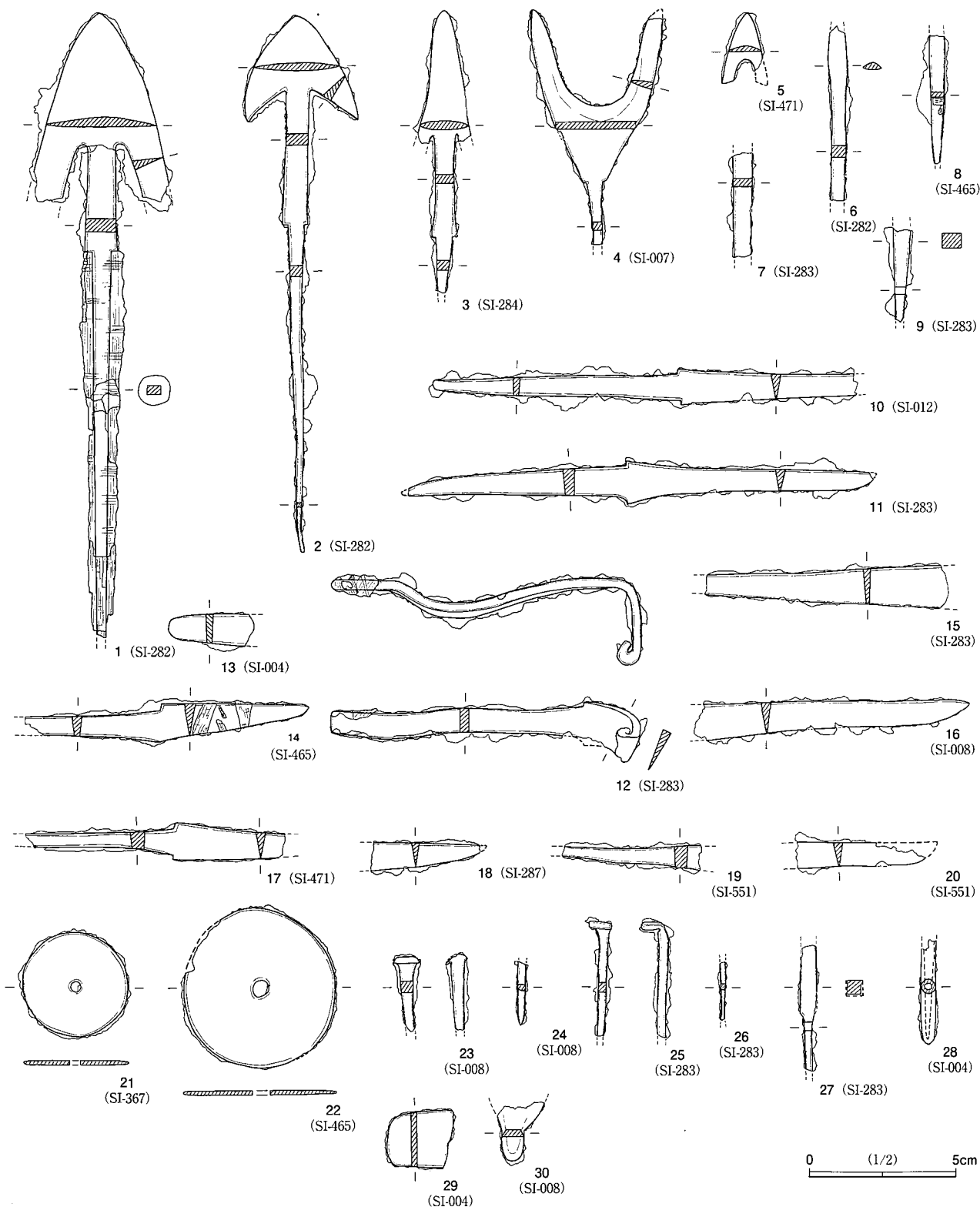


第117図 竪穴住居跡出土石製品



石製品 (第117図)

1は中世の溝から出土した紡錘車であるが、混入品であり、本来奈良・平安時代の竪穴住居に伴うものであろう。滑石製で、逆台形状の断面形を呈すると思われるが破損が激しく詳細は不明である。2も泥



第118図 竪穴住居跡出土鉄製品

岩製の紡錘車と思われるが、上下面とも剥離しており明確ではない。3～8は砥石である。石材は、3・6・7が砂岩、他は白色凝灰岩と想定される。各面ともかなり使い込まれたように摩耗しており、4・7には線状の擦痕が数条みられる。8は4面に貫通していない穿孔が確認されるが、性格は不明である。9は軽石、10は性格不明であるが、鍛冶遺構の窯壁の一部かもしれない。

#### 鉄製品（第118図、図版46）

1～9は鉄鏃である。1は片丸造りの長三角形鏃で、深い腸袂が形成されるが、腸袂端部は欠損のため形状等は不明である。茎部は長く、矢柄と思われる木質が良好に遺存している。矢柄を固定するための繊維状の巻き付けが観察される。茎尻を欠くが、現存長21.3cmを測る。2は完形品である。両丸造りの三角形鏃で、浅い腸袂が入る。篋被ぎ以下は1とほぼ同様である。全長18.3cmを測る。3は両丸造りで、柳刃鏃の範疇にあらう。端部を欠くが、1同様深い腸袂が入るものと思われる。棘部はスカート状に近くなる。4は雁又鏃で、平坦な棘が形成され、小さな茎が付く。5は片丸造りの小形の無頸鏃である。鏃身部の形状は1に近い。6は長頸鏃と思われるが、鏃身部の錆化が激しく詳細は不明である。7～9は篋被ぎ及び茎部片である。10～20は刀子である。10・11は茎部が長く、身部が小さくなっている。使用により身部が繰り返し研がれたものと思われる。11はほぼ完形で、全長15.9cmを測る。12は全体に意図的な歪みがあり、特に身部は明らかに折り曲げられている。不要となった刀子を溶解して再利用しようとしたものであらう。茎尻に木質及び不定方向の繊維痕がみられる。14は小形品で、刃部側の関が不明瞭である。身部に木質の遺存が確認される。21・22は中央に孔が穿たれており紡錘車の紡輪部と思われる。21は径3.6cm、22は5.5cmを測る。23～26は釘である。23・25にはほぼ直角に曲げられた頭部が造り出される。27～30は性格不明である。

#### 鉄滓（第119図）

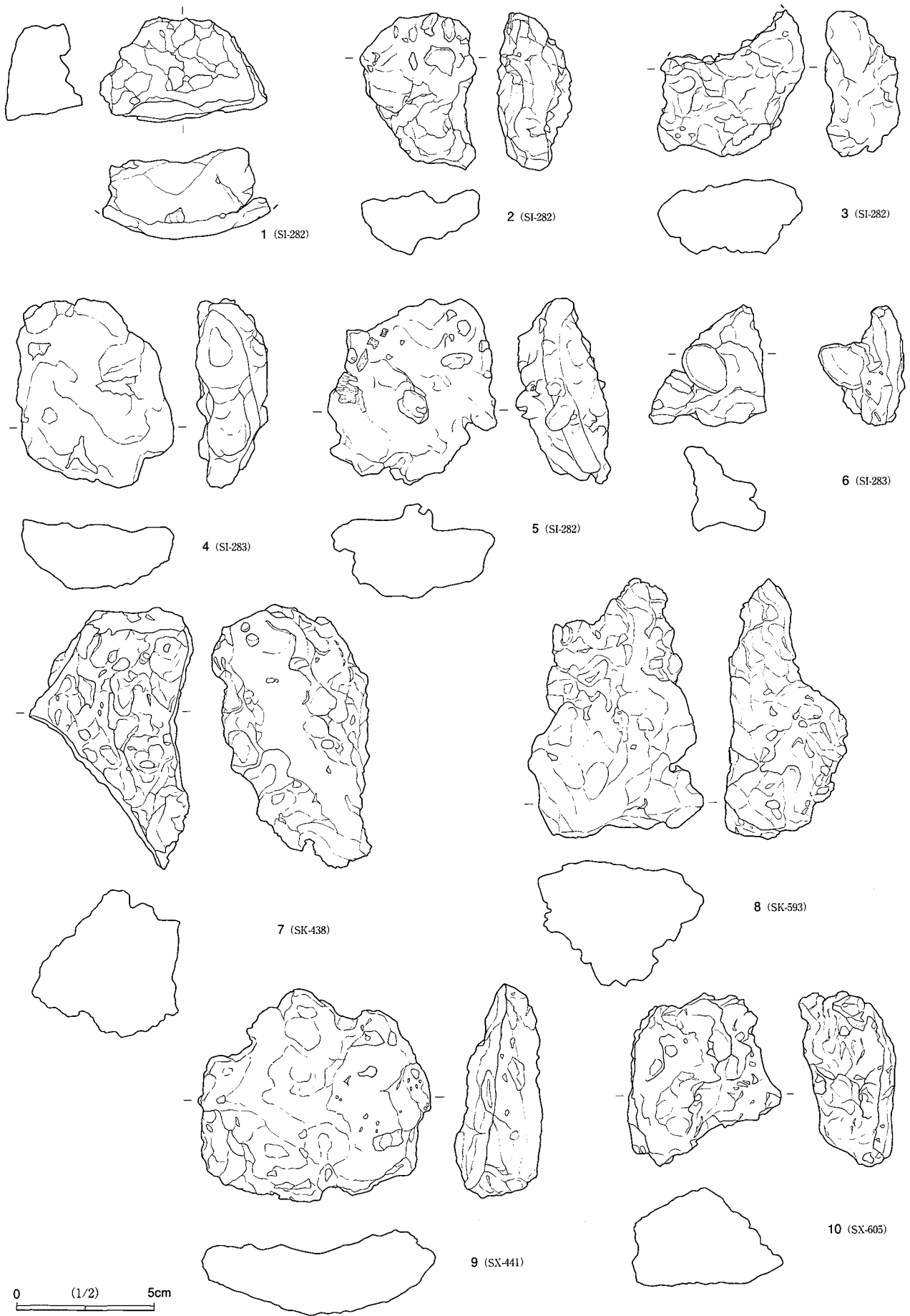
本遺跡の調査範囲内では2基の鍛冶炉が検出されたのみであるが、竪穴住居跡の覆土中や中世の溝、表土中から多くの鍛冶滓、鍛造剥片類、窯壁材など鍛冶に関連する遺物が出土している。ただ、時期を特定できるものがほとんどなく、中世のものも多く含まれていると思われ、調査がさらに進捗して遺構の様相が把握できた段階で分析を行っていききたい。ここでは、平安時代の竪穴住居跡などから出土した主な滓類を図化するにとどめた。

1～3・5は9世紀中葉頃の竪穴住居跡からの出土である。1は椀形鍛冶滓で、下面は緩やかな皿状を呈し、砂質の炉床土が付着する。上面は発砲状となり、黒錆が部分的にみられる。5も椀形となろうか。錆や発泡による瘤状の突起や小孔が特に上面に多くみられる。2・3は含鉄滓で、内部に気泡状の小孔が多く確認される。4・6は9世紀後半の竪穴住居跡出土である。4は椀形鍛冶滓で、下面は緩い皿形を呈する。6は含鉄滓で、上面に酸化した小石が付着する。7～10は中世の遺構から出土している。9・10は椀形鍛冶滓と思われ、下面は皿状に湾曲する。7は大形の鍛冶滓で、下面に炉床土が付着し、木質痕が観察される。

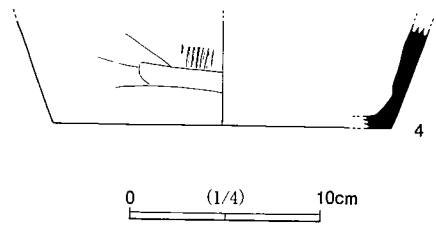
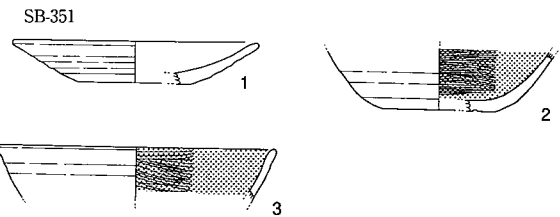
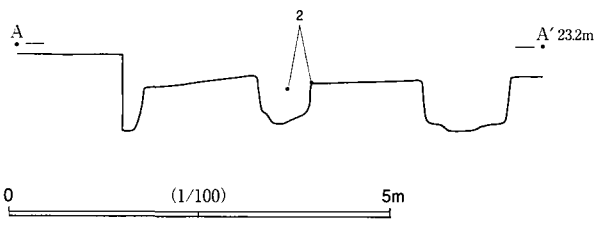
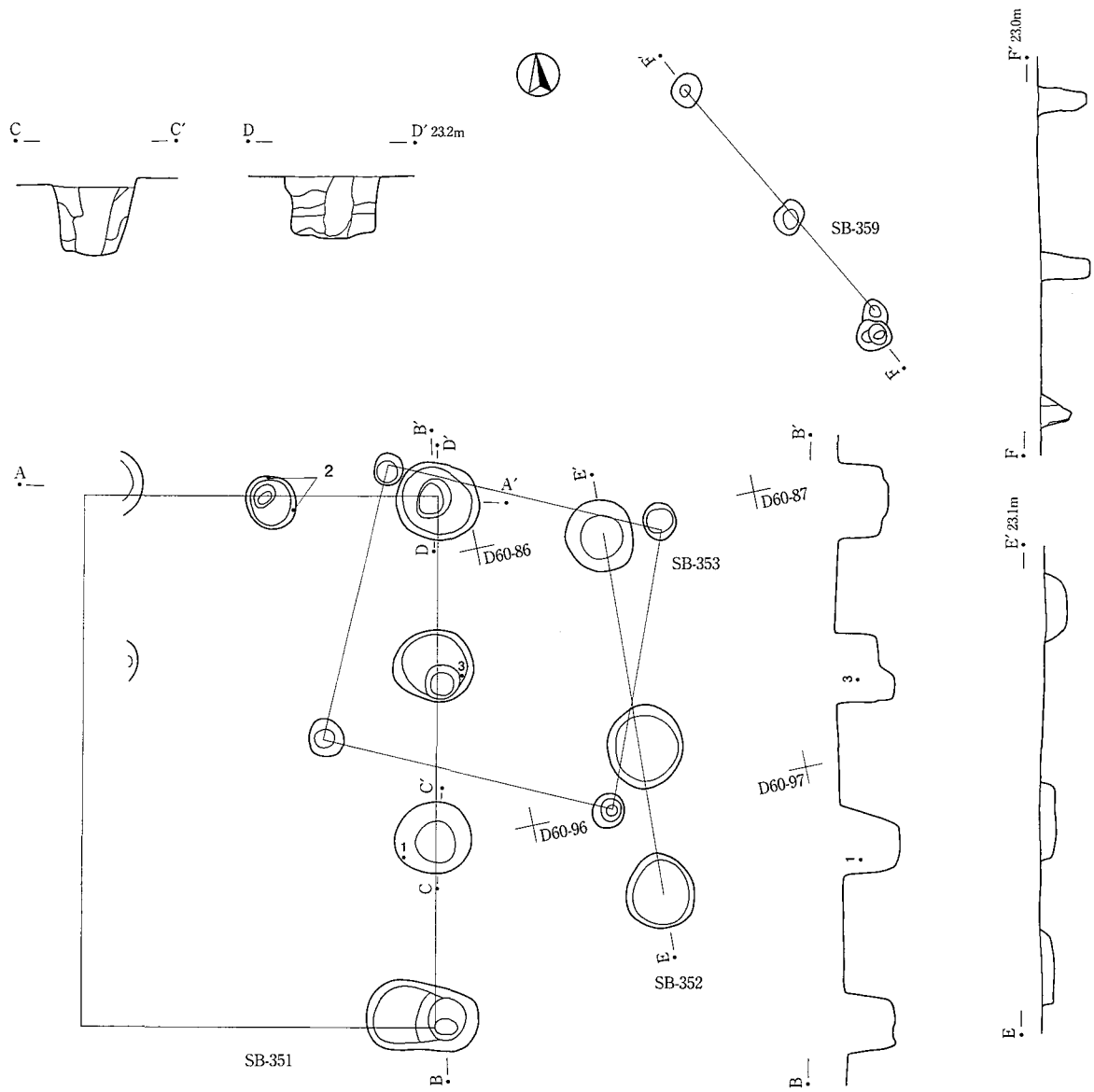
### 3 掘立柱建物跡

#### SB-351（第120図、図版26）

東側の柱穴列が調査区外となるため明確ではないが、桁行き3間、梁行き2間の南北棟となろう。桁行き全長は7.45mを測り、柱間はほぼ2.5m等間となる。梁行きは推定4.6mで、2.3m等間と想定される。心々間の平面積は34.3㎡前後となろう。桁行き方位はN-12.5°-Eを指す。柱穴の掘り方は円形を呈し、



第119図 竪穴住居跡出土鉄滓



第120図 SB - 351 ~ 353 · 359

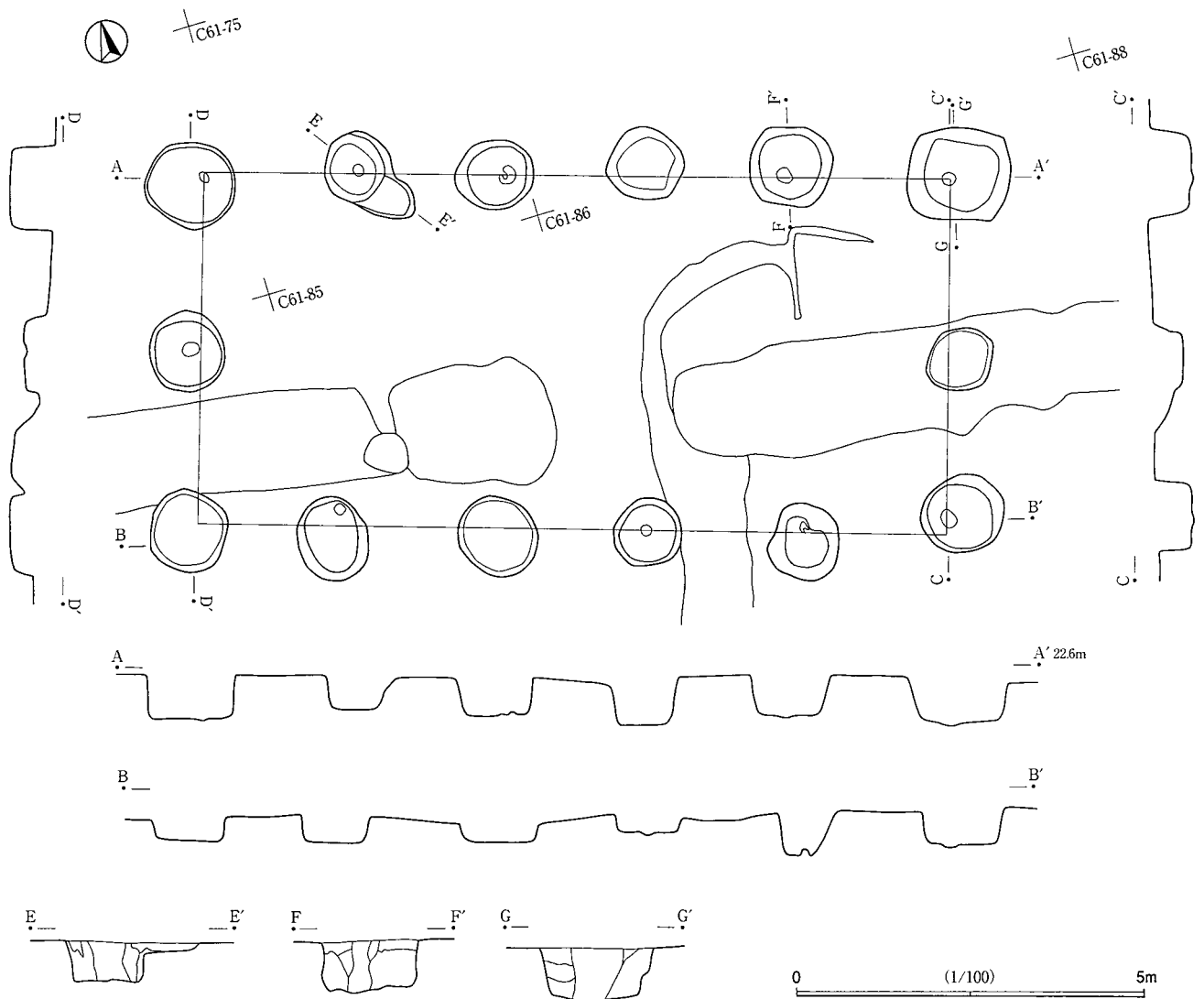
径1.1~1.2m、深さ0.7~0.8mと比較的大きいが、北側の中央の柱穴は一回り小さくなる。掘り方内には柱痕が明瞭に残り、黒色土とロームブロックにより互層に突き固められている。東側列南端の柱穴は、西側に延びる掘り込みが認められ、抜き取りが行われた可能性がある。

### 出土遺物

1は皿の小片で、器肉は比較的厚く、体部下端に回転ヘラケズリを施す。胎土中に雲母粒を含む。2・3は内面黒色処理された杯の小片である。2は体部下端及び底部周縁に回転ヘラケズリを施す。3は器肉がきわめて薄く仕上げられ、内面のミガキは丁寧である。1同様胎土中に雲母粒を含む。4は須恵器の甕の底部片で、胴部平行叩き後下端に手持ちヘラケズリが加えられる。9世紀後半の土器群と思われる。

SB-352 (第120図、図版26)

SB-351の東側に2間分検出された。掘り方の規模はSB-351とほぼ同様であるが、確認面からの深さ20cmほどと浅く、柱間も不揃いである。規模から柵や塀とは考えられず、建物の一部となる可能性が高い。確認面が浅いため、相対する柱穴が確認されなかったようである。



第121図 SB-489

#### SB - 353 (第120図)

径0.4~0.5mほどの柱穴が方形に4本検出された。時期・性格とも不明であるが、竪穴住居跡の柱穴となる可能性もある。

#### SB - 359 (第120図)

SB - 351の北東6.5mほどに位置する柱穴列で、SB - 352同様3本検出された。径0.4mほどと小規模であるが、深さ0.5~0.7mと比較的深い。目隠し塀のようなものであろうか。時期は不明である。

#### SB - 489 (第121図、図版26)

調査区南西側に位置する大形の掘立柱建物跡である。2間×5間の側柱建物で、桁行きは、長さ11.0m、柱間2.0~2.4mを測り、柱間がやや不揃いであるが、ほぼ7尺及び8尺の間隔である。梁行きは、長さ4.9mで、西側はほぼ8尺等間であるが、東側は9尺と7尺で柱間が異なっている。平面積は53.9㎡を測り、棟方向の方位はN-75°-Wを指す。柱穴の掘り方はほぼ円形を呈するが、北東コーナー部分のみ方形となる。掘り方の規模は、方形プランの柱穴が1辺1.5m、他は径1.0~1.3m、深さは0.3~0.8mと一定していない。平面規模に比して深さが浅いのは、確認面が低くなってしまったものと思われる。掘り方内は黒色土及びロームブロック土によって固められ、断面に残る柱痕から、柱の径は0.3~0.5mと推測される。時期を特定できるような遺物の出土はなかった。

#### SB - 561 (第122図、図版26)

多くのピットが掘り込まれている中から2間×3間の側柱建物を抽出した。桁行きは全長6.2mで、柱間は1.6~2.7mと不揃いである。梁行きは全長4.4mで、柱間は1.9~2.5mとやはり不揃いである。平面積は27.7㎡を測り、棟方向の方位はN-82°-Wを指す。柱穴の掘り方は径0.3~0.5mと規模の小さい不整円形を呈する。

#### 出土遺物

1・2とも土師器の皿か杯であろう。2は底部がやや突出し、上げ底となるタイプである。9世紀末頃の土器と思われる。

#### SB - 006 (第122図)

北東側の柱穴が確認されていないが、2間×3間の側柱建物となろう。桁行き・梁行きとも4.1mを測り、正方形に近い建物である。棟方向の方位はN-10.5°-Eを指す。柱穴の掘り方は径0.2mほどの円形を呈し、全体に小形の建物となる。出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。

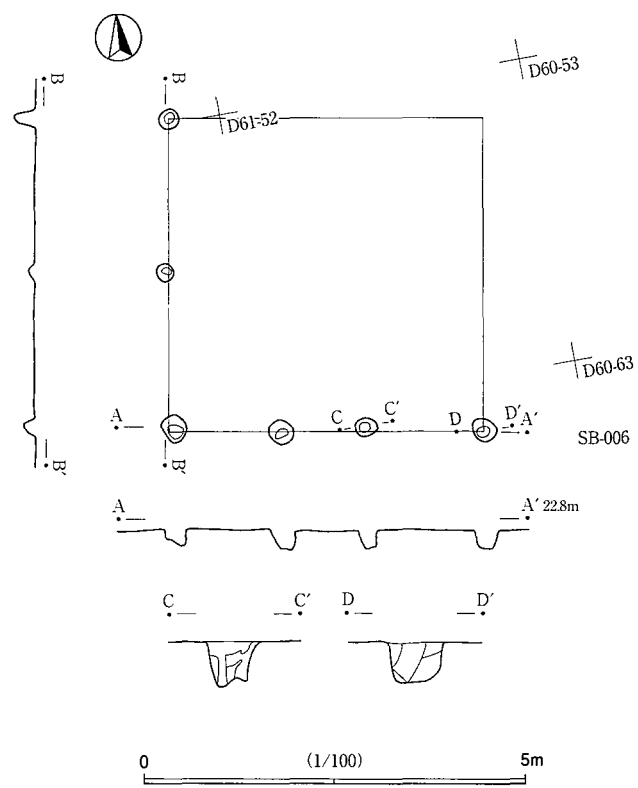
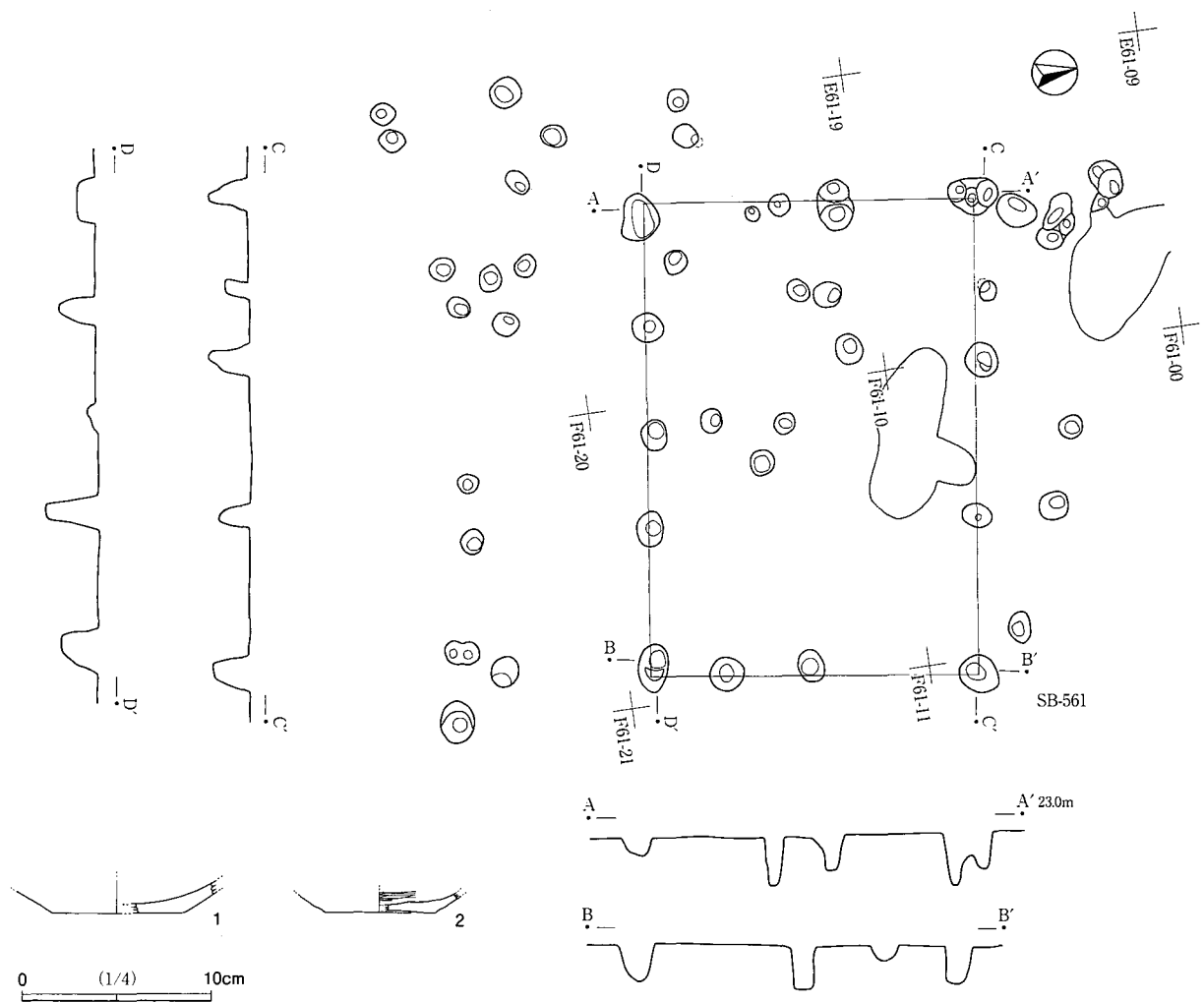
#### 4. 土器焼成遺構

#### SK - 475A (第123図、図版27)

E61-24グリッド付近に位置し、南側で縄文時代の炉穴を切っている。焼成部を北側、焚き口部を南側に有し、焼成部床面から壁の立ち上がり部にかけて被熱による赤変が顕著に認められる。長軸2.1m、短軸1.3mの楕円形を呈し、確認面からの深さは、焚き口部で0.2m、焼成部で0.4mを測る。遺物は、焚き口部から焼成部にかけての底面から覆土上層にかけて散在しており、杯・皿のみの焼成遺構と思われる。

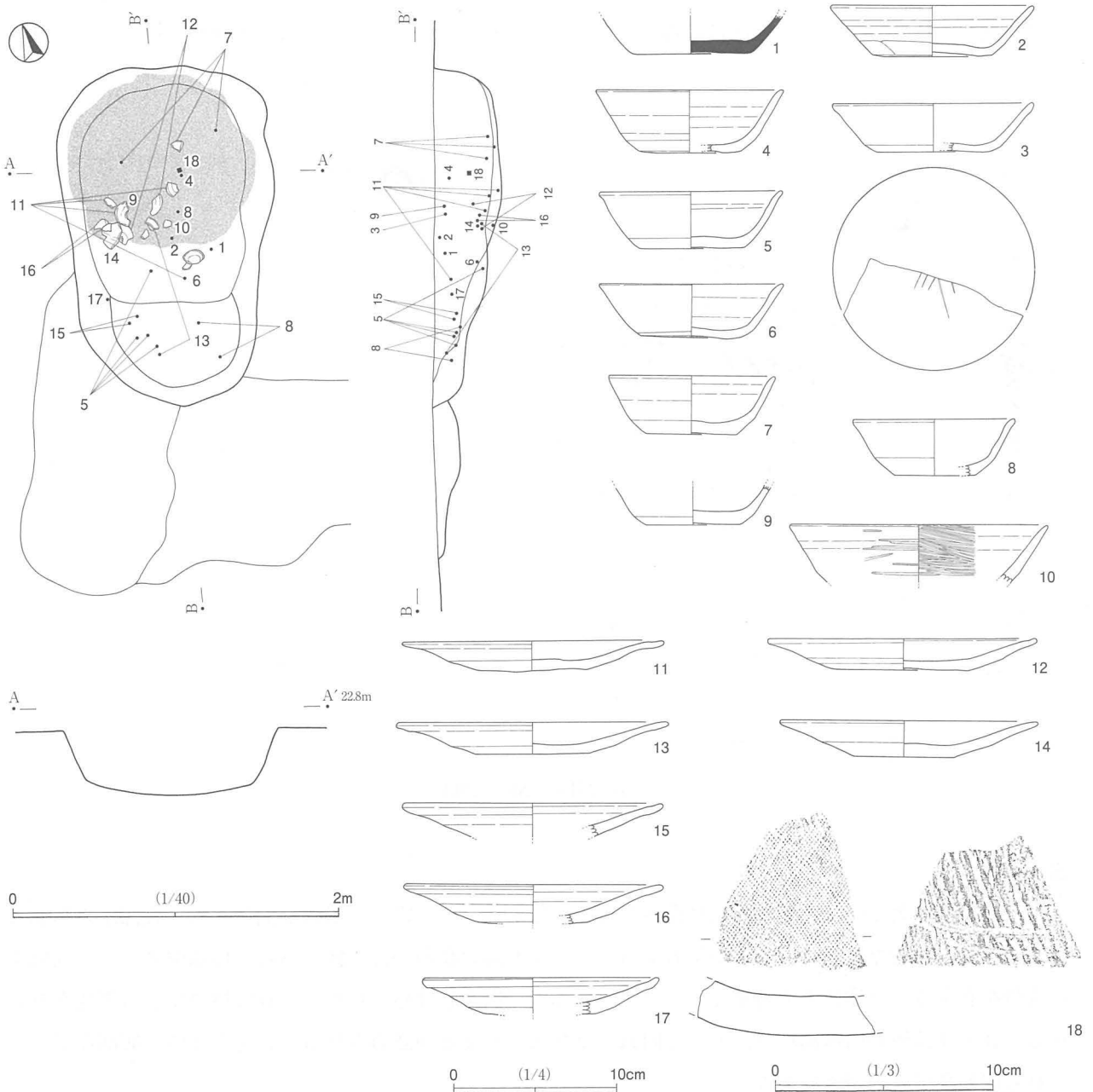
#### 出土遺物

1は須恵器の杯である。底部は回転糸切り未調整で、体部のロクロ目は弱く平滑となっている。底部内面に磨られたような痕跡が認められる。胎土中に白色針状物を含んでおり、武蔵産の可能性はある。2~8は土師器の杯である。2・3は口径に比して器高が浅くなるタイプであるが、2は体部下端から底部全



第122図 SB-561・006

面に手持ちヘラケズリが施されるのに対し、3は回転糸切り後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリを加える点、異なった調整方法を採用。4～6は口径11.4cm、器高6.3cm前後でほぼ同様の形態を示す。調整方法も同一で、体部のロクロ目は弱く、底部回転糸切り後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが施される。微細砂粒の混入が比較的多い。5は口唇部が短く外反し、外面に火襷痕がみられる。7は口径がやや小さくなるが、調整・胎土は前者と同様である。8はさらに小形となり、器肉が薄く仕上げられる。5同様口唇部が外反し、やはり火襷が認められる。10は土師器の椀であろう。内外面ともミガキが施され



第123図 SK-475A

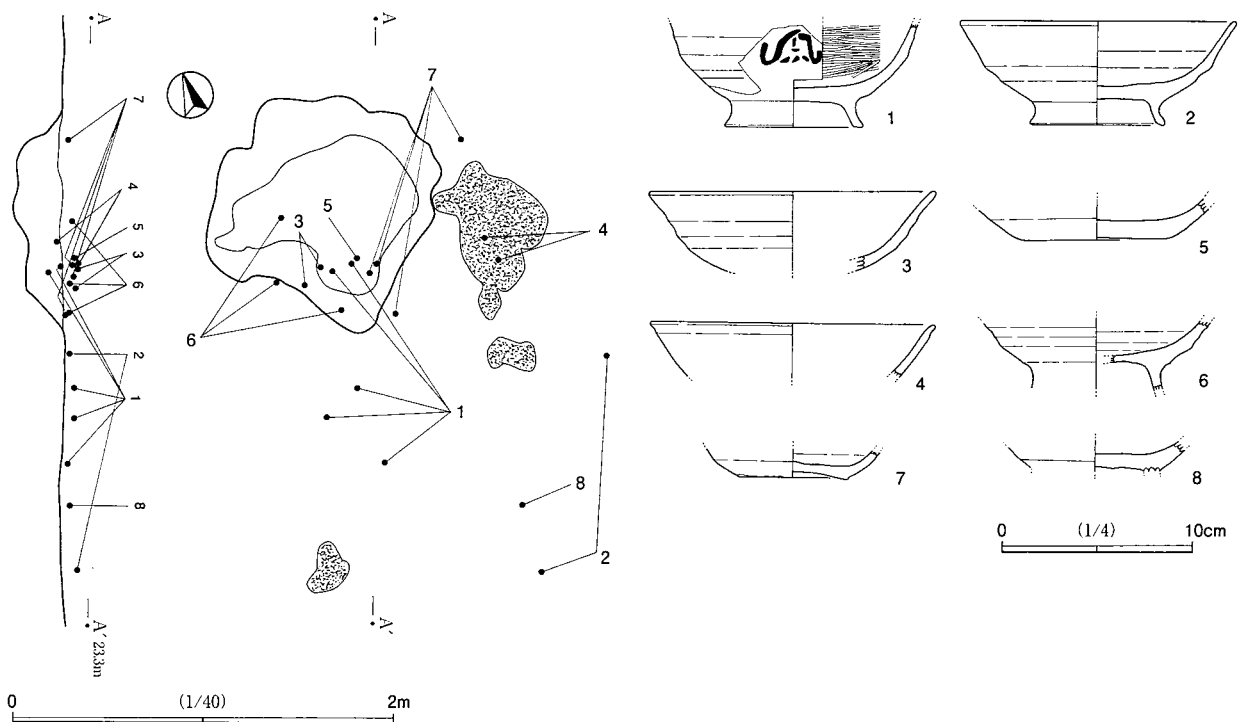


る。11～17は無高台の土師器皿である。11～16は口径16.0～16.8cmを測る大形品である。ほぼ同様の形態を呈し、口縁端部が水平に近く摘み出され、受け口状となる。調整もほぼ同様に、回転糸切り後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリを施すが、13・14は底部中央に回転糸切り痕が残らない。13・14の内面は二次的の被熱により荒れている。17は口径が小さくなるが、調整は前者と同様である。18は平瓦片である。凸面には縄文叩き、内面には布目痕がみられる。これらの土器群は、9世紀中葉の所産と思われる。

## 5 祭祀遺構

### SK-303 (第124図、図版27)

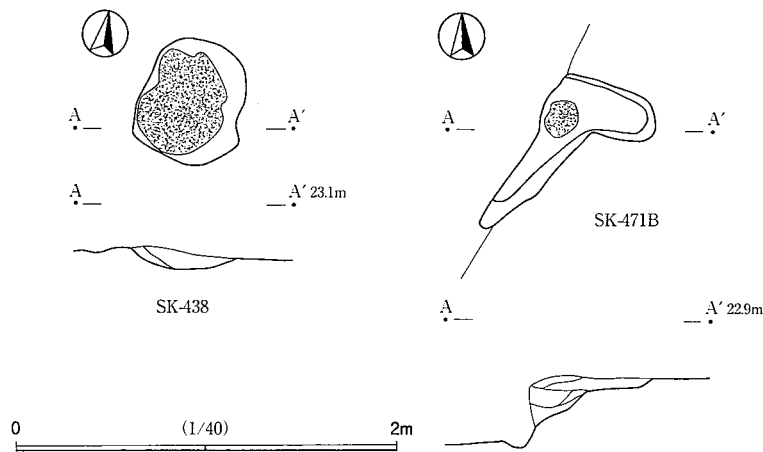
土坑と焼土周辺から9世紀末から10世紀初頭頃の土器が出土していることから、火を用いた祭祀遺構として捉えた。土坑は径1.2mほどの不整形を呈し、底面も凹凸が激しい。ロームブロック土主体の土で人為的に埋め戻されているが、内部に遺物はほとんど認められなかった。遺物は杯・碗類が確認面から検出された。



第124図 SK-303

### 出土遺物

1は口縁部を欠く碗で、比較的高い高台が付く。体部外面に「宗」の墨書が記される。底部から体部外面にかけて二次的の被熱による煤が付着する。2・6も高い高台が付く杯である。体部中央でやや内屈する特徴を有する。全体にナデ調整で、ヘラケズリ等の二次調整は施されない。6は被熱による黒変がみられる。3・4は杯の口縁部片で、下端に回転ヘラケズリの痕跡が認められる。5・7は杯の底部片で、いずれも回転糸切り未調整である。



第125図 SK-438・471B

## 6 鍛冶炉跡

### SK-438 (第125図)

D60-37グリッドに位置する。長軸0.7m、短軸0.5mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.1mと浅い。覆土は焼土で充満している。周囲から鉄滓の出土がみられるが、内部からは鍛造剥片などの鍛冶関連遺物は検出されなかった。明確に鍛冶遺構と判断するのは難しい。

### SK-471B (第125図)

F61-31グリッドに位置し、SI-471Aの東壁を切って掘り込まれる。平面形は不整形を呈し、確認面からの掘り込みは0.3mほどを測る。底面は被熱により赤変し、壁際の覆土も硬質に焼土化している。遺構内より鍛造剥片1点、鉄滓7点出土している。

## 7 土坑 (第126・127図、図版27・44)

奈良・平安時代に掘り込まれたと思われる土坑を取り上げた。円形プランがほとんどであるが、方形・長方形・楕円形のものもみられる。

### 出土遺物

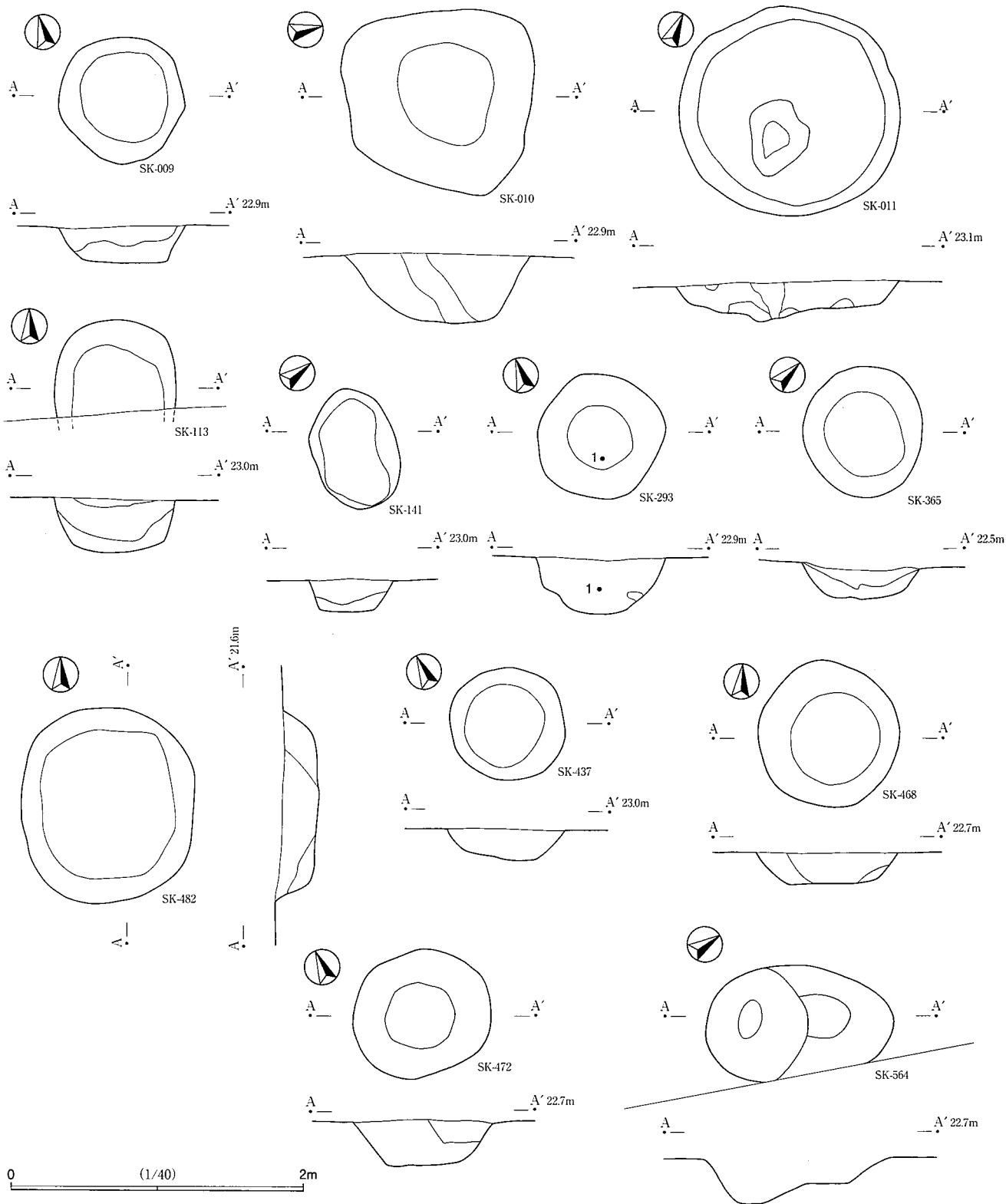
1はSK-293、2はSK-472の覆土中からの出土である。1は完形の土師器杯で、底部は回転糸切り未調整、体部は丁寧なナデで、下端に手持ちヘラケズリが若干施される。内外面に煤の付着が顕著に残る。2は高い高台が付く椀であろうか。

## 8 グリッド出土遺物

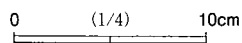
奈良・平安時代以外の遺構から出土した遺物もグリッド内として扱った。

### 土器 (第128図、図版44)

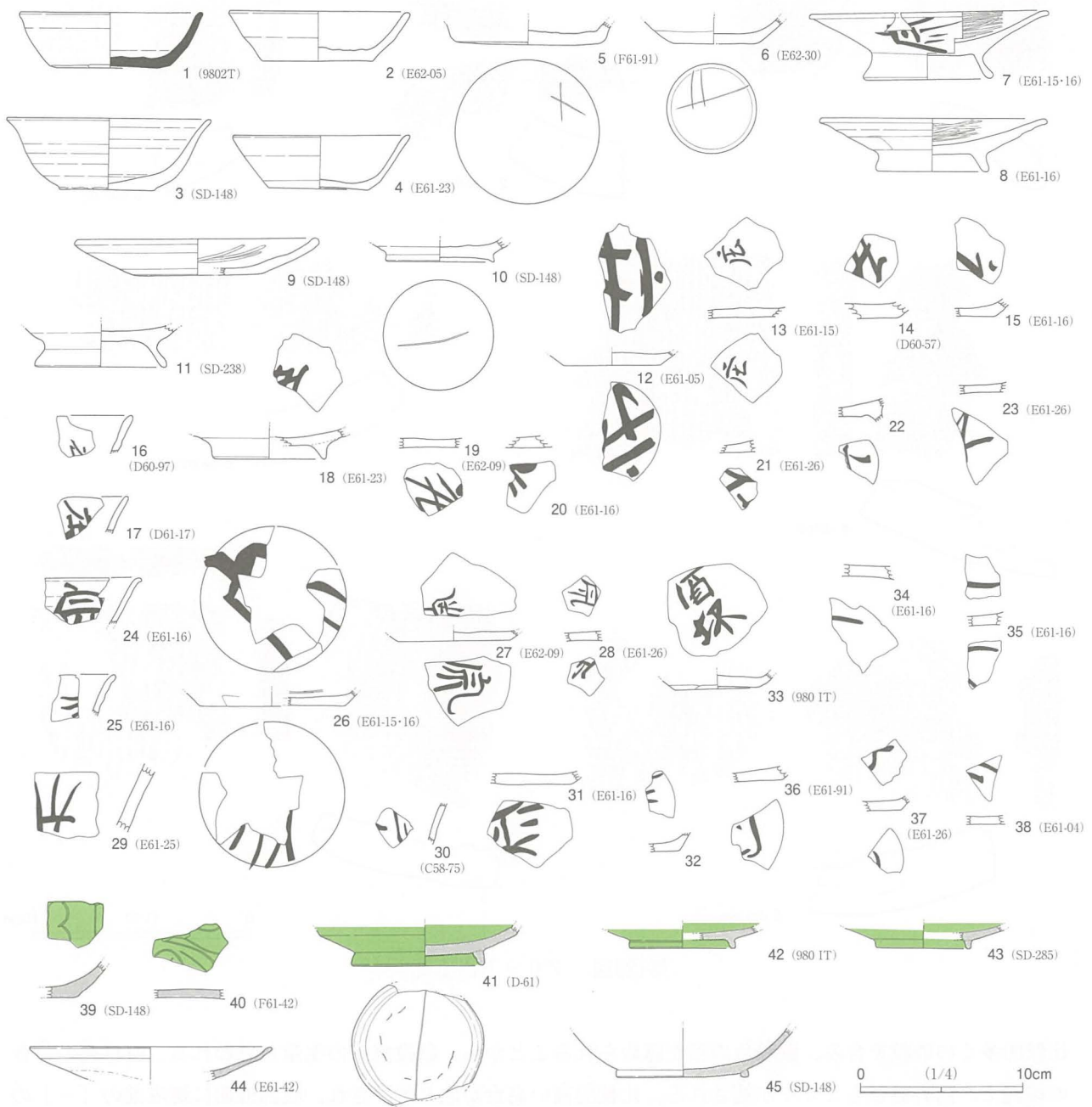
1は須恵器の杯である。体部のロクロ目は弱く、底部はヘラ切り後周縁に手持ちヘラケズリを施す。胎土中に長石の白色小砂粒を多く含む。常陸産であろうか。2は底部がやや突出し、体部は丁寧にナデられる。底部は回転糸切り未調整で、体部下端の二次調整は施されない。3は体部が膨らみを有しながら口縁部が外反するタイプの杯である。底部はやや突出し、ナデ調整が加えられる。底部から体部外面にかけて煤の付着がみられる。胎土中に長石粒・雲母粒を多く含む。4は口径11.0cmを測る小形の杯で、底部回転糸切り後体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリが施される。5・6は底部片で、記号と思われる焼成後の線刻がみられる。7・8は高台付き皿である。いずれも貼り付け高台で、口唇部が水平方向に摘み出さ



第126図 奈良・平安時代土坑

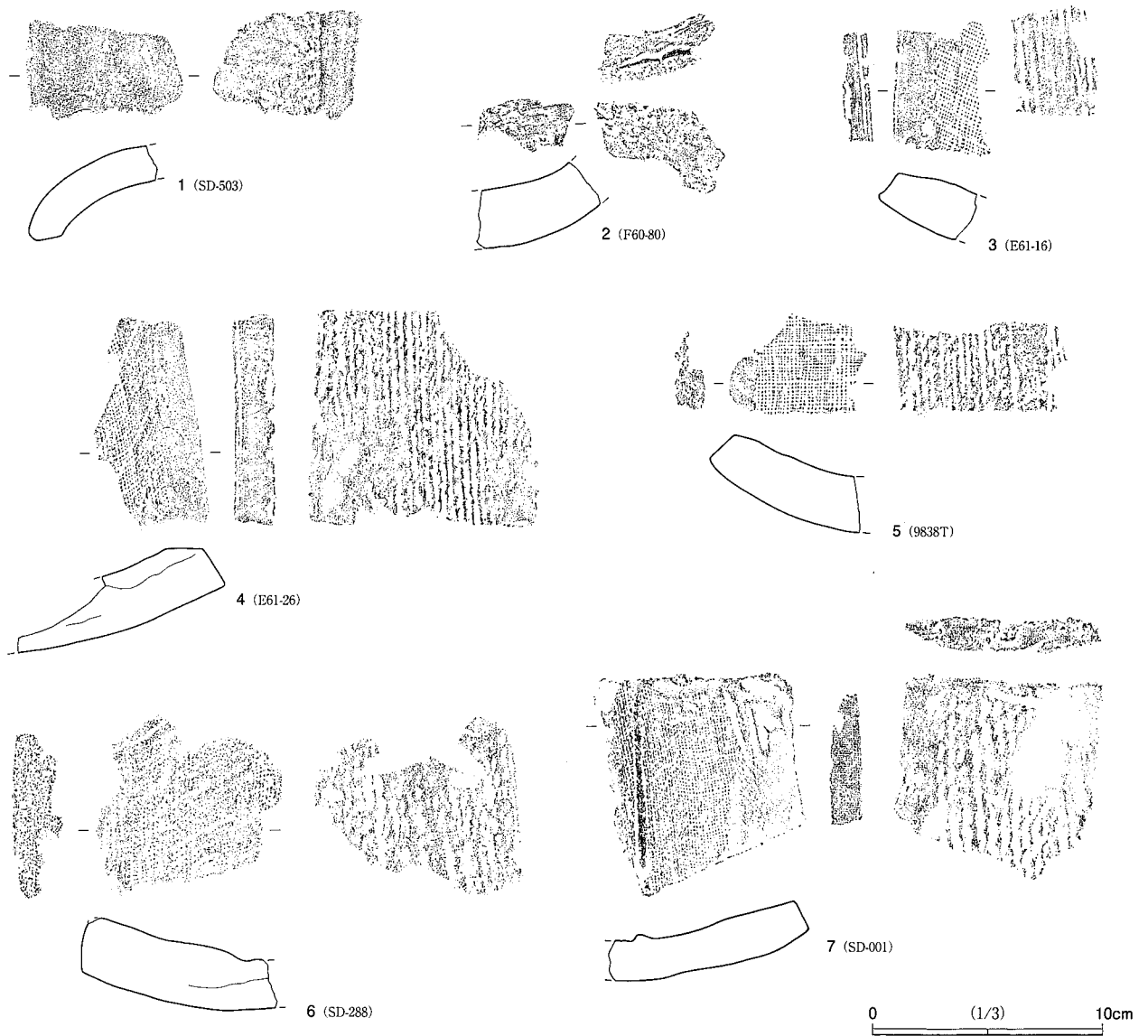


第127図 奈良・平安時代土坑出土土器



第128図 グリッド出土土器

れる特徴を有する。体部外面下端には手持ちヘラケズリ、内面には粗いミガキが施される。7の体部外面に、「宗」の墨書が横位で書かれている。9は無高台の皿片である。底部全面から体部上位にかけて回転ヘラケズリ、内面には粗い放射状のミガキが加えられる。全体に分厚い作りである。10は杯あるいは皿の底部片で、記号と思われる焼成後の線刻がみられる。11は高い高台が付く杯の底部片である。12~38は墨書土器片である。12~23は「庄」と判読される。12は底部内外面に大きな文字がみられるのに対し、13も内外面の記載であるが、12と対照的に小さな文字が記される。24~32・34~38は「宗」の文字と思われる。26・27・28は底部内外面に書かれるが、文字の大きさがそれぞれ異なる。33は底部内面に「酒坏」と記される。39~43は緑釉陶器である。39・40は陰刻花文の底部片で全容は不明であるが、暗灰色の胎土に

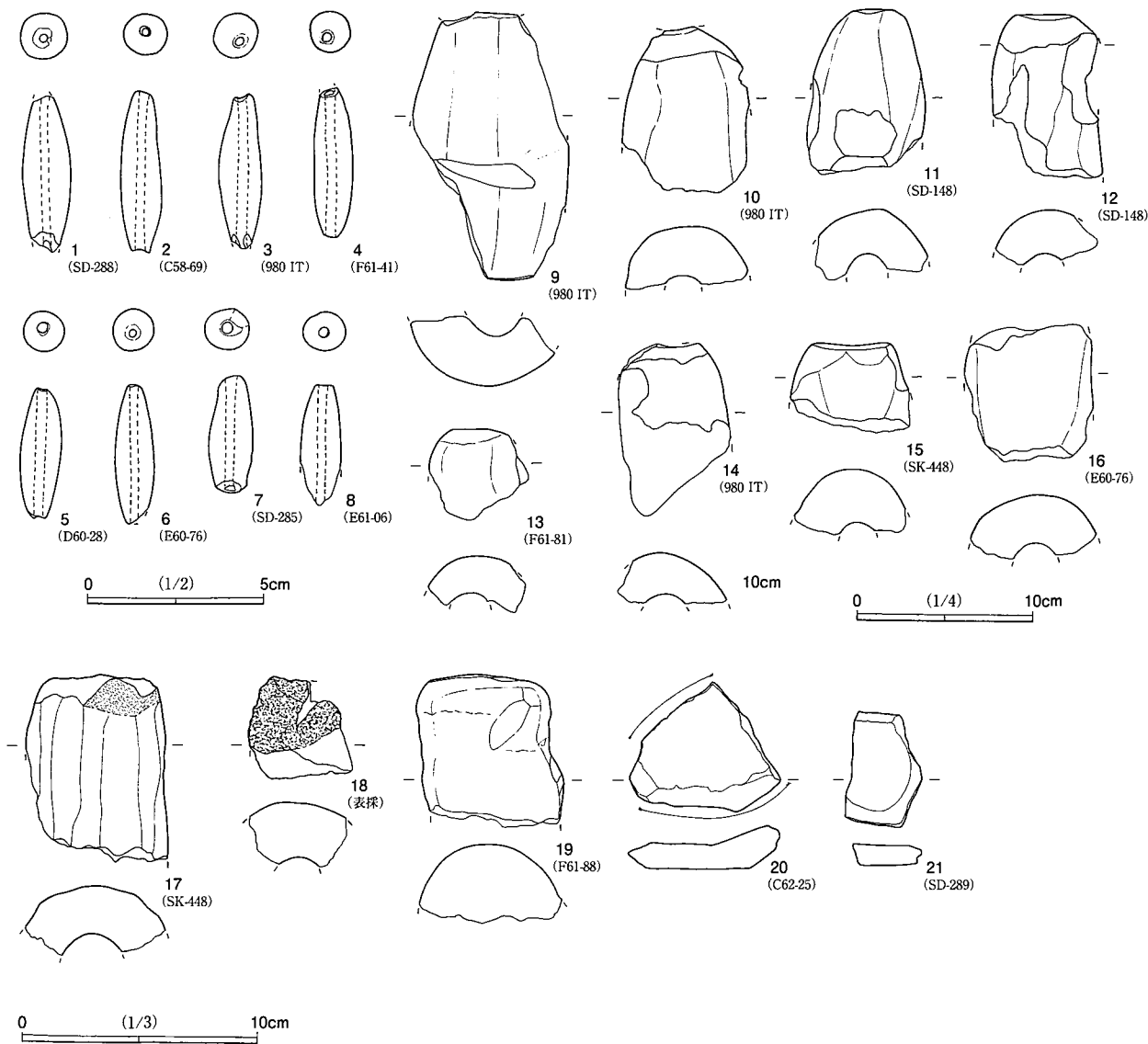


第129図 グリッド出土瓦

比較的多くの砂粒を含み、濃緑色の釉が認められることから、猿投窯系の生産と思われる。41は高台付きの稜椀で、内外面ともミガキが施される。比較的高い高台が貼り付けされ、底部外面に焼成前の「-」のヘラ書きと爪形の圧痕が巡る。胎土は灰白色を呈し、硬質の焼きである。淡緑色の釉が全面に掛かる。猿投窯系の産で、K90併行期の所産と思われる。42・43は皿であろうか。高台は低く、角高台を呈する。42は41同様全体にミガキが施され、黄緑色の釉が掛かる。44・45は灰釉陶器で、44は皿、45は椀となろう。45は低い貼り付け高台で、高台内面が窪む。内面に斑状の釉薬がみられる。

#### 瓦（第129図、図版45・46）

中世の溝から出土した瓦も含めて取り扱った。1は還元焰焼成の丸瓦で、全体に丁寧なナデが施され、無文となる。2～7は平瓦片である。2は狭端部片で、端部に粘土のはみ出しが残る。凹面部の剥離状況から、有顎となる可能性もある。3～6は凸面縄文叩き、凹面布目痕が残る。6を除き、側縁部及び凹面端部に丁寧なヘラケズリが施される。7は平瓦の狭端部側である。前者同様凸面縄文、凹面布目となり、模骨痕が明瞭に残る。



第130図 グリッド出土土製品他

土錘（第130図、図版47）

1～8は小形の管状土錘で、7以外の両端部に摩耗及び欠損がみられる。漁労に使用した際の使用痕と考えられる。9～16は大形の管状土錘で、完形となるものはない。9は器面が比較的丁寧にナデられ、平滑となるが、他は比較的粗雑な作りである。

羽口・支脚（第130図、図版47）

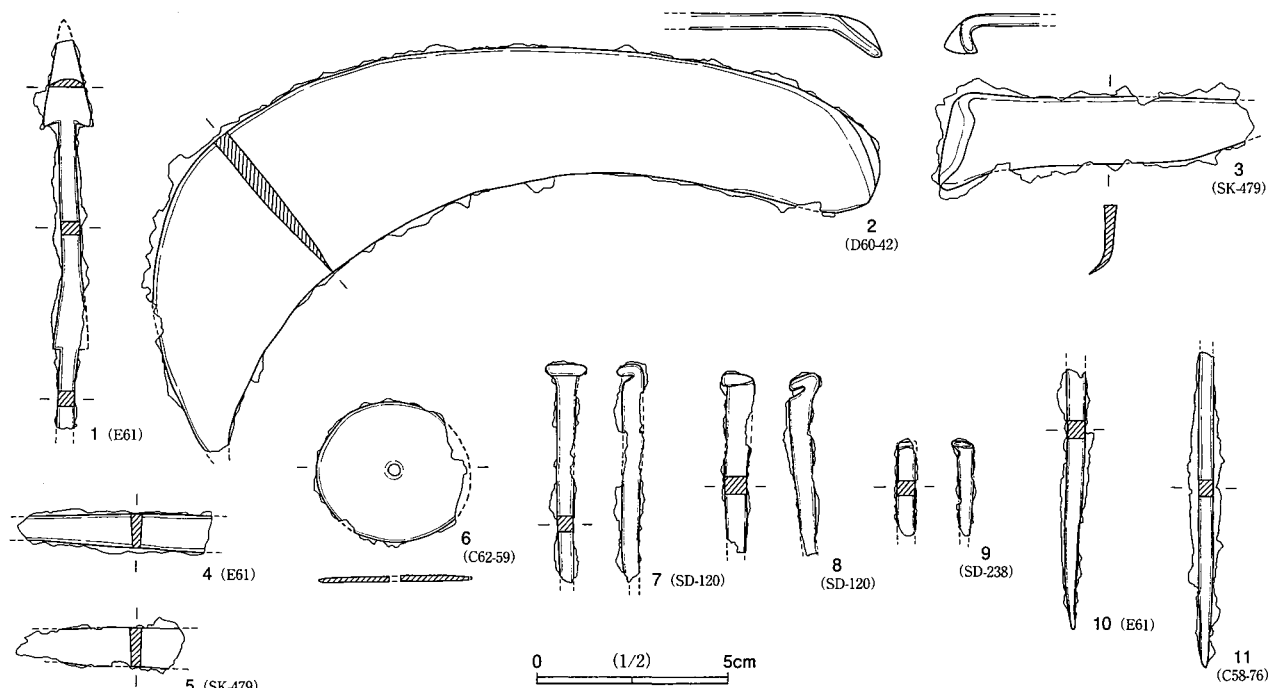
17は中世の土坑から出土した羽口で、器面には面取り状のケズリが残る。挿入部の被熱はそれほど顕著ではない。18は小片であるが、被熱により器面が鉛状に変質している部分もある。19は比較的大形の支脚片である。

転用硯（第130図）

20は須恵器の甕の底部片、21は平行叩きを有する胴部片を再利用している。肉眼では墨痕が認められないことから、転用砥石となる可能性もある。

鉄製品（第131図、図版46）

1は長頸鎌となる鉄鎌で、鎌身部は長三角形を呈し、片丸造りとなる。2は全長20cmほどを測る大形の曲刃鎌で、先端部を若干欠損する。基部の折り返しは僅かである。3も小形の鎌であろうか。刃部を意図的に折り曲げており、鉄の素材として再利用しようとした可能性がある。4・5は刀子の茎片であろう。6は径4.0cmほどを測る紡錘車である。7～9は釘で、小さな頭部が作り出されている。10・11は棒状の鉄製品で、釘と思われる。



第131図 グリッド出土鉄製品

第15表 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

遺構No	グリッド	規模 (長軸×短軸m)	主軸方向	面積 (㎡)	壁高 (cm)	柱穴深さ (長軸×短軸×深さcm)	貯蔵穴 (長径×短径×深さcm)	壁溝 (幅×深さcm)	カマド	時期 区分
SI-004	D60-33	4.3×3.9	N-20.0-E	16.1	45.0~52.0	P1 46.0×38.0×59.8 P2 32.0×30.0×76.1 P3 33.5×32.0×54.3	無	22.0×10.0	北壁・ 北東壁	I期
SI-007	D60-35	3.4×3.2	N-31.5-E	10.9	0~23.0	無	無	18.0×6.0	北東壁	III期
SI-008	D60-44	3.7×3.3	N-34.0-E	11.9	51.0~61.0	無	無	32.0×9.0	北壁	I期
SI-012	C58-75	3.9×-	N-40.0-E	11.3	3.0~10.0	無	無	無	北東壁	III期
SI-282	D61-07	4.3×3.9	N-29.5-E	16.7	48.0~110.0	無	無	22.0×17.0	北壁	III期
SI-283	D60-97	5.0×4.2	N-116.0-E	20.6	29.0~59.0	無	無	20.0×7.0	東壁	IV期
SI-284A	D60-88	5.0×-	N-17.0-E	(8.3)	15.0~58.0	無	無	13.0×12.0	無	II期
SI-284B	D60-88	3.2×-	N-17.0-E	-	1.0~11.0	無	無	23.0×8.0	無	II期
SI-286	E61-89	3.3×-	N-66.0-W	(8.1)	21.0~51.0	無	無	26.0×8.0	東壁	I期
SI-287	F61-81	3.6×-	N-12.5-E	-	13.0~65.0	P1 31.0×28.0×21.7	無	無	北壁	I期
SI-358	D60-68	3.2×3.2	N-7.5-E	9.6	24.0~42.0	P1 20.0×20.0×11.7 P2 20.0×18.0×6.6 P3 20.0×18.0×16.8 P4 27.0×23.0×32.9	無	20.0×10.0	北壁・東壁	I期
SI-367A	D60-57	4.7×3.1	N-8.0-E	14.1	15.0~41.0	無	無	20.0×5.0	北東壁	V期
SI-368	D60-66	3.9×3.8	N-108.5-E	15.5	5.0~20.0	P1 34.0×32.0×53.0 P2 32.0×32.0×14.1 P3 34.0×30.0×36.0	無	20.0×6.0	東南壁	IV期
SI-439	E61-99	2.3×2.2	N-28.0-E	5.1	6.0~44.0	無	無	15.0×4.0	北東北壁	III期
SI-462	E61-42	3.4×-	N-14.5-E	(9.7)	25.0~31.0	P1 30.0×28.0×18.7 P2 - ×40.0×24.7 P3 47.0×38.0×22.8	56.0×44.0×17.3	17.0×8.0	北壁・東壁	II期
SI-465A	E61-15	4.5×3.9	N-118.0-E	17.0	10.0~40.0	P1 39.0×38.0×22.7 P2 45.0×35.0×15.4 P3 44.0×42.0×15.4 P4 40.0×34.0×14.7	無	20.0×10.0	北壁・東壁	III期
SI-465B	E61-28	-	N-1.5-W	-	9~12.0	無	無	無	北壁・北東壁	III期
SI-465C	E61-16	-	N-100.0-E	-	14.0~44.0	P1 50.0×49.0×13.8	無	18.0×6.0	北西壁	II期
SI-465D	E61-28	5.6×4.9	N-15.5-E	(29.6)	15.5~29.0	P1 120.0×110.0×80.8 P2 75.0×70.0×83.0 P3 110.0×80.0×94.2 P4 110.0×70.0×87.7	無	18.0×12.0	北東壁	II期
SI-465E	E61-28	4.5×4.3	N-17.0-E	-	15.0~20.0	無	無	18.0×7.0	北壁	III期
SI-471A	F61-30	4.0×3.8	N-30.0-E	17.4	26.0~47.0	無	無	8.0×3.0	北壁	II期
SI-485	D61-70	3.3×2.8	N-96.0-E	9.3	18.0~37.0	無	無	20.0×8.0	東壁	I期
SI-551	F60-71	4.0×3.9	N-111.0-E	14.8	22.0~34.0	無	無	22.0×6.0	東壁	II期
SI-554	E61-39	3.5×3.4	N-91.5-E	11.4	5.0~10.0	無	無	無	東壁	V期
SI-562	E61-59	3.8×(3.6)	N-20.0-E	-	10.0~15.0	無	無	12.0×9.0	北壁	不明
SI-563	E61-56	3.2×-	N-101.5-E	-	10.0~18.0	無	無	18.0×6.0	東壁	V期
SI-565	E61-47	-×2.2	N-7.5-E	(6.3)	3.0~8.0	無	無	22.0×6.0	無	不明



第16表 奈良・平安時代出土土器観察表

遺構番号	挿入番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整外面	調整内面	底部調整	備考	
SI-004	第88図1	灰軸陶器	台付皿	32	(13.2)	-	[2.1]	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ		痕接、K90	
SI-004	第88図2	須恵器	杯	162	(13.1)	7.8	4.1	35%	灰色	密-石英・長石	ケズリ、ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ		
SI-004	第88図3	須恵器	杯	55,128	(13.2)	(8.0)	4.1	35%	灰褐色	密-雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ		
SI-004	第88図4	須恵器	杯	2,47,116	(12.2)	-	[3.6]	10%	灰色	密	ナデ	ナデ			
SI-004	第88図5	須恵器	杯	83	(13.2)	-	[3.4]	10%	灰色	密-白色針状物	ナデ	ナデ		ヘラ書き	
SI-004	第88図6	須恵器	杯	78,200	-	6.4	[1.5]	10%	灰色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整		
SI-004	第88図7	須恵器	杯	58,93	-	(6.0)	[1.4]	5%	灰色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-004	第88図8	須恵器	杯	24	-	6.2	[1.0]	10%	灰白色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整		
SI-004	第88図9	須恵器	杯	179	-	(8.0)	[2.3]	10%	褐色	密-雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ		
SI-004	第88図10	土師器	杯	3,4,29,41	(11.8)	8.0	4.9	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-004	第88図11	土師器	杯	3,36,43,76	(11.0)	(8.2)	4.8	50%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-004	第88図12	土師器	杯	1,2,4,104,105,185,186,195,198,199	-	11.9	7.8	4.3	90%	橙褐色	密	不明	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-004	第88図13	土師器	杯	21	(12.8)	(8.2)	4.6	10%	橙褐色	密	ナデ	不明	不明・回転ヘラケズリ		
SI-004	第88図14	土師器	杯	118	(12.0)	-	[4.7]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-004	第88図15	土師器	杯	39	-	6.9	[1.3]	15%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-004	第88図16	須恵器	甕	40	(22.5)	-	[5.7]	5%	灰色	密-石英	ナデ、タタキ	ナデ			
SI-004	第88図17	土師器	甕	103	(20.7)	-	[6.2]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-004	第88図18	土師器	甕	11,133	(18.0)	-	[5.5]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-004	第88図19	土師器	甕	3,4,12,13,27,67,70,108,137,202	(13.0)	-	[13.8]	60%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-004	第88図20	土師器	甕	1,106	(20.6)	-	[10.8]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-004	第88図21	土師器	甕	1,44,153,156,157,158	(29.0)	-	[15.2]	10%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		煤付着	
SI-004	第88図22	土師器	甕	4,90	-	(5.1)	[3.6]	5%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-004	第88図23	土師器	甕	79,102	-	(8.3)	[11.9]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ			
SI-007	第89図1	土師器	杯	1,11,25	13.9	7.0	4.3	90%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・手持ちヘラケズリ	黒斑・内面黒色	
SI-007	第89図2	土師器	杯	1	-	(6.0)	[1.6]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ		
SI-007	第89図3	土師器	杯	18	-	5.0	[1.6]	10%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ		
SI-007	第89図4	土師器	杯	16	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ケズリ、ナデ		体外黒書	
SI-008	第90図1	須恵器	杯	153,190,300	(13.0)	(7.4)	4.8	30%	橙褐色	密-石英・長石・雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ		
SI-008	第90図2	須恵器	杯	135,297,304	(13.3)	-	[4.8]	30%	灰色	密	ナデ	ナデ			
SI-008	第90図3	須恵器	杯	1,204,380	(14.9)	-	[3.8]	30%	灰色	密-雲母	ナデ	ナデ		内外面火だすき	
SI-008	第90図4	須恵器	杯	54,59	(12.0)	(7.0)	[3.5]	10%	灰色	粗-石英・長石・雲母	ナデ	ナデ			
SI-008	第90図5	須恵器	杯	11	-	(7.0)	[1.7]	10%	青灰色	粗-長石	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ		
SI-008	第90図6	土師器	杯	4,90,143,341,349,372,384	12.4	7.6	3.8	80%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図7	土師器	杯	388	12.5	8.0	4.3	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図8	土師器	杯	282	(12.9)	(8.8)	3.8	30%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図9	土師器	杯	386,417,421	(12.8)	(8.8)	4.2	30%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図10	土師器	杯	387	11.5	7.7	4.1	90%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図11	土師器	杯	454	-	(8.0)	1.3	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図12	土師器	杯	302,432,436	-	7.6	2.1	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図13	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		黒書	
SI-008	第90図14	土師器	高台付杯	383	-	(7.2)	[1.9]	10%	橙褐色	粗-石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-008	第90図15	土師器	甕	4,42,198,201,224,225,226,237,296,340,357,359,366,411,412,430,453,434,449,450	(21.0)	-	[26.9]	40%	橙褐色	密-雲母	ナデ、ミガキ	ナデ		外面煤付着	
SI-008	第90図16	土師器	甕	1,2,3,16,179,286,289,389,425	(18.4)	-	[28.6]	40%	黒褐色	密-雲母	ナデ、ミガキ	ナデ		外面煤付着	
SI-008	第90図17	土師器	甕	217,221	(13.6)	-	[4.7]	10%	橙褐色	密-石英	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-008	第90図18	土師器	台付甕	3,71,114,187	-	-	[4.5]	5%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、不明			
SI-008	第90図19	土師器	甕	339,348,350,367,368	(13.0)	-	[7.4]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-008	第90図20	土師器	甕	26,96,184,219,283	(20.0)	-	[5.9]	5%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-008	第90図21	土師器	瓶	2,18	(26.9)	-	[7.7]	5%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ		内外面煤付着	
SI-008	第90図22	土師器	瓶	48,121	(6.4)	-	[4.2]	5%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-012	第91図1	灰軸陶器	段皿	37	-	-	[2.2]	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-012	第91図2	須恵器	瓶	11	-	-	[0.9]	5%	黒灰色	密	無調整	ナデ			
SI-282	第92図1	灰軸陶器	台子	5	(7.2)	-	[0.9]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ			
SI-282	第92図2	須恵器	杯	700	(13.2)	(8.8)	[3.4]	30%	灰色	密-長石	ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底内ヘラ書き	
SI-282	第92図3	須恵器	杯	1,354,634	(12.6)	(7.6)	[3.8]	40%	黒灰色	密	ケズリ、ナデ	ナデ			
SI-282	第92図4	須恵器	杯	766	13.2	6.9	3.8	100%	灰褐色	密-スコリア	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	外面煤付着	
SI-282	第92図5	須恵器	杯	1,251,324,517	(11.0)	-	[2.8]	20%	灰色	密	ナデ	ナデ			
SI-282	第92図6	須恵器	杯	37	-	(5.8)	[1.2]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整		
SI-282	第92図7	土師器	杯	507	(12.3)	7.5	3.9	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図8	土師器	杯	763	11.5	6.6	3.4	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図9	土師器	杯	676	(13.0)	(6.0)	[3.9]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	底外黒書	
SI-282	第92図10	土師器	杯	231	(10.8)	6.1	3.7	50%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図11	土師器	杯	1,195,693	(11.8)	(7.0)	3.6	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図12	土師器	杯	308	(10.9)	(6.6)	3.3	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図13	土師器	杯	412,413,425	12.0	6.6	4.2	30%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ		
SI-282	第92図14	土師器	杯	297	(14.0)	-	[2.8]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書	
SI-282	第92図15	土師器	杯	767	-	(6.6)	[3.6]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図16	土師器	杯	423,442,443,445	-	(6.2)	[2.7]	20%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	内外面煤付着	
SI-282	第92図17	土師器	杯	441	-	9.9	[1.7]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図18	土師器	杯	223	-	5.8	[2.5]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ		
SI-282	第92図19	土師器	杯	653	-	6.9	[1.3]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	内面煤付着	
SI-282	第92図20	土師器	杯	451	-	6.0	[1.5]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	内面煤付着	
SI-282	第92図21	土師器	杯	193,528,689	(14.2)	7.6	4.4	70%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	黒色処理	
SI-282	第92図22	土師器	杯	765	(15.1)	(8.7)	5.0	50%	橙褐色	密	ケズリ、ミガキ	ナデ、ミガキ	回転系切り・回転ヘラケズリ		

遺構 番号	挿入番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整 外面	調整 内面	底部調整	備考
SI-282	第92図23	土師器	杯	283	(15.2)	7.7	4.6	40%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	黒色処理
SI-282	第92図24	土師器	杯	282	(15.0)	7.2	4.4	40%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図25	土師器	杯	616,620,632,733	(15.3)	8.4	4.1	60%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・ 回転ヘラケズリ	黒色処理
SI-282	第92図26	土師器	杯	660,638,不明2	(14.0)	-	[3.6]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ		黒色処理
SI-282	第92図27	土師器	杯	340,385	-	7.6	[2.9]	20%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・無調整	
SI-282	第92図28	土師器	杯	757	-	(8.0)	[2.2]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図29	土師器	杯	411,551,624	(20.2)	(9.4)	7.3	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図30	土師器	杯	164	-	7.2	[1.5]	10%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図31	土師器	皿	722	-	(16.9)	[1.9]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図32	土師器	皿	273,463,465,491	(16.0)	(6.5)	2.0	40%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図33	土師器	皿	762	18.4	8.0	1.3	60%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第92図34	土師器	皿	250	-	(8.0)	[1.3]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・ 手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-282	第92図35	土師器	皿	540	-	5.6	[1.4]	40%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	底外黒書
SI-282	第93図36	土師器	高台付椀	615,667,751,753, 754,755,778	15.5	7.0	5.5	100%	黄褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転ヘラ切り・ 回転ヘラケズリ	黒色処理
SI-282	第93図37	土師器	高台付皿	586	-	8.2	[2.3]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	不明・ナデ	底外黒書
SI-282	第93図38	土師器	高台付皿	377,148-232	-	8.9	[2.0]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・ナデ	底外黒書
SI-282	第93図39	土師器	高台付皿	130,691	-	7.1	[3.1]	20%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
SI-282	第93図40	土師器	高台付皿	462	-	(8.3)	[3.3]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・ナデ	
SI-282	第93図41	土師器	高台付皿	380,473	-	8.7	[2.5]	30%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第93図42	土師器	高台付皿	767	-	8.5	[2.6]	30%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-282	第93図43	土師器	杯	420	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書
SI-282	第93図44	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書
SI-282	第93図45	土師器	杯	674	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書
SI-282	第93図46	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書
SI-282	第93図47	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		体外黒書
SI-282	第93図48	土師器	杯	332	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・ナデ	底外黒書
SI-282	第93図49	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	回転糸切り	底外黒書
SI-282	第93図50	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	回転糸切り・ 手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-282	第93図51	土師器	杯	712	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	底外黒書
SI-282	第93図52	土師器	杯	403	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ミガキ	不明・ 手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-282	第93図53	土師器	杯	156	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	回転糸切り・ 手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-282	第93図54	土師器	高台付杯	153	-	-	[2.0]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・ナデ	底外黒書
SI-282	第93図55	土師器	高台付杯	36	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	底外黒書
SI-282	第93図56	須恵器	壺	1,159,181,237,419,460	(26.9)	(14.5)	24.2	60%	黒褐色	密	ケズリ、ナ デ、タタキ	ナデ、 当て具痕	ケズリ・敷物圧痕	
SI-282	第93図57	土師器	壺	119,126	(15.2)	-	[10.7]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		内外面煤付着
SI-282	第93図58	土師器	壺	198	(13.0)	-	[5.8]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-282	第93図59	土師器	壺	777	(11.5)	-	[4.9]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-282	第93図60	土師器	台付壺	643	-	-	[3.5]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-283	第94図1	緑釉陶器	高台付皿	119,446,552	-	(7.0)	(1.9)	20%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-283	第94図2	灰釉陶器	高台付椀	12,23,50,98,281,449	(16.2)	(7.4)	4.6	60%	灰白色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-283	第94図3	灰釉陶器	高台付椀	10,70,71,127,156, 209,308,418,440	14.2	5.4	4.1	80%	灰白色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-283	第94図4	灰釉陶器	高台付椀	31,49,64,65,84, 337,373,432,447	-	6.6	[3.8]	30%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-283	第94図5	灰釉陶器	高台付椀	298	-	9.0	[1.7]	5%	灰色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-283	第94図6	灰釉陶器	皿	42,146	(14.4)	-	[2.0]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ		
SI-283	第94図7	灰釉陶器	皿	37	(15.4)	-	[1.6]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ		
SI-283	第94図8	灰釉陶器	高台付皿	217,236	-	(6.9)	[2.0]	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-283	第94図9	須恵器	杯	1,167,187,188,213	13.3	6.4	3.9	70%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・ 手持ちヘラケズリ	
SI-283	第94図10	須恵器	杯	525	12.9	6.7	4.0	60%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・ 手持ちヘラケズリ	
SI-283	第94図11	須恵器	杯	333,363	11.7	5.6	3.5	50%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・ 手持ちヘラケズリ	
SI-283	第94図12	土師器	杯	355	(12.0)	-	[3.9]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-283	第94図13	土師器	杯	515,517	(13.5)	(7.0)	3.2	50%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・無調整	体外黒書
SI-283	第94図14	土師器	杯	52	12.7	6.3	3.6	95%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	体外黒書、 底外ヘラ書き
SI-283	第94図15	土師器	杯	452,453,458	12.9	6.0	3.8	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	体外線刻
SI-283	第94図16	土師器	杯	526	12.6	6.1	3.3	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-283	第94図17	土師器	杯	343,512	12.2	6.0	4.3	95%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	体外黒書
SI-283	第94図18	土師器	杯	1,428,471	(13.0)	-	[3.8]	20%	褐色	密	ナデ	ミガキ		体外黒書、 黒色処理
SI-283	第94図19	土師器	杯	237	(12.9)	-	[2.7]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		底内線刻、 煤付着
SI-283	第94図20	土師器	杯	144	-	6.6	[1.4]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・ナデ	
SI-283	第94図21	土師器	杯	97	-	6.3	[2.9]	50%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・ 手持ちヘラケズリ	
SI-283	第94図22	土師器	杯	1,54,317	-	(8.0)	[1.5]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	
SI-283	第94図23	土師器	杯	1,16,29,199	-	7.0	[1.8]	20%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・ 手持ちヘラケズリ	灯明皿として 使用
SI-283	第94図24	土師器	杯	259	-	5.9	1.5	20%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	回転ヘラ切り・ナデ	
SI-283	第94図25	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書
SI-283	第94図26	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書、 黒色処理
SI-283	第94図27	須恵器	杯	1,242	(15.2)	-	[4.3]	5%	青灰色	密	ナデ	ナデ		
SI-283	第94図28	土師器	高台付椀	522,523	(15.2)	-	[4.9]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-283	第94図29	土師器	高台付椀	560,571,572,576	15.2	7.2	6.4	80%	黄褐色	密	ナデ	ミガキ	不明	黒色処理
SI-283	第94図30	土師器	椀	549	(15.8)	-	[4.5]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ		
SI-283	第94図31	土師器	椀	1,520,586	-	6.5	[4.3]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・不明	
SI-283	第94図32	土師器	高台付椀	386,443	-	(7.7)	[3.1]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・ナデ	
SI-283	第94図33	土師器	高台付椀	1,43,469	-	9.8	[3.2]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	黒色処理
SI-283	第94図34	土師器	高台付椀	157,442	-	(9.2)	[3.6]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・ナデ	黒色処理
SI-283	第94図35	灰釉陶器	壺	99,241,360	-	-	[8.2]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ		

遺構番号	押印番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整外面	調整内面	底部調整	備考
SI-283	第94図36	灰釉陶器	壺	234,283,303,439,535,536,558	-	-	[5.5]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ		外面自然釉
SI-283	第94図37	須恵器	甕	86,93	(26.6)	-	[3.3]	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ		内面自然釉
SI-283	第95図38	須恵器	甕	102,192	-	-	[6.8]	5%	灰白色	密-長石・雲母	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-283	第95図39	須恵器	甕	513	-	-	-	5%	灰白色	密-長石・雲母	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-283	第95図40	土師器	甕	279	(13.1)	-	[9.1]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-283	第95図41	土師器	甕	74,296	-	8.8	[2.3]	5%	黒褐色	密	ケズリ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	
SI-283	第95図42	土師器	甕	283,338,348,364,365,423,491,516,518,519,カマドI	-	13.0	[15.9]	20%	黒褐色	密	ケズリ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	外面煤付着
SI-284	第96図1	土師器	杯	32	(6.1)	(3.7)	[3.8]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-284	第96図2	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-284	第96図3	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-284	第96図4	土師器	杯	12	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・ナデ	底外墨書
SI-284	第96図5	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	底内墨書
SI-284	第96図6	土師器	高台付皿	9,25	-	-	[2.2]	10%	橙褐色	密	ミガキ	ナデ、ミガキ	回転系切り・ナデ	底外墨書
SI-284	第96図7	土師器	高台付皿	20	-	7.1	[2.0]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SI-284	第96図8	須恵器	甕	76,81	-	-	-	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ		液状文
SI-284	第96図9	須恵器	甕	75	-	(14.4)	[5.1]	5%	黒灰色	密	タタキ、ケズリ	ナデ	無調整	
SI-286	第97図1	須恵器	杯	7,63,97	(12.0)	(6.1)	[3.6]	10%	灰色	密-長石・雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-286	第97図2	須恵器	杯	88,96	(11.2)	5.5	3.8	10%	青灰色	密-石英・長石	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	口唇部火だすき
SI-286	第97図3	須恵器	杯	45,46	(13.0)	-	[3.4]	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ		
SI-286	第97図4	土師器	杯	50,56,97	(11.2)	(7.0)	[4.6]	30%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-286	第97図5	土師器	杯	24,70,97,SI288-145,155	11.8	7.9	4.2	60%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明	
SI-286	第97図6	土師器	杯	93,94	(12.1)	(7.9)	4.0	10%	褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-286	第97図7	土師器	杯	11,19,20,37,97,不明1	(17.6)	(8.0)	4.6	40%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-286	第97図8	土師器	杯	17,25,26,72,SI288-141	11.8	7.4	3.6	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-286	第97図9	土師器	杯	22,29,97	(12.0)	-	[3.5]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-286	第97図10	土師器	甕	38,85,97	(21.1)	-	[8.3]	5%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-286	第97図11	土師器	甕	1,7,8,9,18,21,28,54,55,57,61,68,71,73,74,77,78,79,80,82,83,84,96,97,E-61-79-1,7,89-16	22.0	5.0	28.0	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		武蔵甕
SI-286	第97図12	土師器	甕	12,23,33,97	(14.0)	-	[5.4]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-286	第97図13	土師器	甕	44,48,90	-	8.8	[1.7]	5%	橙褐色	密-石英・長石・スコリア	ケズリ	ナデ	無調整	木葉痕
SI-286	第97図14	土師器	甕	92	(23.0)	-	[7.0]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		黒斑、焼成前穿孔4ヶ
SI-287	第98図1	須恵器	杯	16	(13.5)	(7.7)	4.1	30%	灰色	密-長石	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-287	第98図2	須恵器	杯	9,11	(14.5)	(8.0)	3.5	10%	灰白色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	線刻
SI-287	第98図3	土師器	杯	22	12.0	7.9	3.9	70%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-287	第98図4	土師器	台付甕	15	-	9.6	[4.2]	10%	黒褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-358	第99図1	須恵器	杯	151,152,153	(13.0)	(8.0)	[4.4]	40%	灰褐色	密-雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-358	第99図2	須恵器	杯	2,4,5,79,161,181,208,217,218,220,238,不明1	13.7	8.1	4.0	80%	黒灰色	粗-石英・長石・雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-358	第99図3	須恵器	杯	197,204	12.8	7.2	4.1	40%	黒灰色	粗-石英・長石	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-358	第99図4	須恵器	高台付杯	3,5,71,148,150,182	(14.8)	(11.0)	5.4	20%	黒灰色	密-長石	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-358	第99図5	須恵器	杯	3,158	(12.0)	(8.0)	4.4	70%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-358	第99図6	土師器	杯	5,43,92,123	(11.8)	(7.0)	4.2	30%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-358	第99図7	土師器	杯	225,229,233	(13.0)	(8.0)	4.4	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-358	第99図8	土師器	高台付杯	233	-	(9.7)	[2.5]	10%	灰褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-358	第99図9	土師器	甕	3,90,96,104,111,168	(22.3)	-	[8.3]	10%	橙褐色	粗-石英・長石・雲母	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-358	第99図10	土師器	甕	233	(22.1)	-	[17.3]	10%	橙褐色	粗-長石・雲母	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ		
SI-358	第99図11	土師器	甕	68,88,125,128,141	16.0	-	[7.8]	10%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		外面煤付着
SI-358	第99図12	土師器	甕	2,4,64,65,160,162,170,184,212,216,不明1	-	7.7	[17.2]	20%	黒褐色	粗-石英・長石・雲母・砂粒	ミガキ	ナデ		
SI-358	第99図13	土師器	瓶	5,24,25,79,95,97,100,102,116,127,132,154,177,213,227	-	(11.0)	[17.1]	20%	黄褐色	粗-石英・長石・雲母	ミガキ	ケズリ、ナデ		木葉痕
SI-367A	第100図1	土師器	杯	73	14.9	6.8	4.9	95%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ		
SI-367A	第100図2	土師器	杯	70,98,188	14.9	7.4	4.6	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	
SI-367A	第100図3	土師器	杯	77	12.3	6.1	3.4	95%	褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	口縁部に入為的欠損あり
SI-367A	第100図4	土師器	杯	74,191	11.6	6.0	3.3	95%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SI-367A	第100図5	土師器	杯	76	11.9	6.3	3.2	100%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SI-367A	第100図6	土師器	杯	17,210,233	(10.6)	5.2	3.2	40%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SI-367A	第100図7	土師器	杯	65	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		底外墨書
SI-367A	第100図8	土師器	高台付碗	51,52,91,94	-	(8.2)	[5.9]	30%	灰褐色	密	ケズリ、ナデ、ミガキ	ミガキ	不明・ナデ	黒色処理
SI-367A	第100図9	土師器	高台付碗	220,231	(15.0)	-	[4.5]	10%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ		黒色処理
SI-367A	第100図10	土師器	高台付碗	10,72,135,136,137,138,232	15.5	8.0	7.0	85%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
SI-367A	第100図11	土師器	高台付碗	49,153	(15.0)	(8.0)	[6.2]	40%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-367A	第100図12	土師器	高台付碗	75,188,189,227	(15.8)	-	[5.5]	50%	褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-367A	第100図13	土師器	高台付碗	96,103,219,231	(14.2)	-	[4.4]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-367A	第100図14	土師器	甕	225	(27.0)	-	[14.1]	5%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-367A	第100図15	土師器	甕	34,36,42,不明1	(23.4)	-	[8.3]	5%	橙褐色	密-スコリア	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-367A	第100図16	土師器	甕	85,157,193,195,202	-	(13.0)	[17.4]	5%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-367A	第100図17	土師器	瓶	68,184,194,207,208,209,212,217,218,223,224	-	11.6	[16.8]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-368	第101図1	灰釉陶器	高台付皿	38	-	(7.5)	[2.5]	10%	灰色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-368	第101図2	須恵器	杯	20,45	-	(8.0)	[1.6]	5%	黒灰色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-368	第101図3	土師器	杯	68,69	14.2	6.8	4.9	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	体外墨書

遺構番号	挿入番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整外面	調整内面	底部調整	備考
SI-368	第101図4	土師器	杯	71	13.2	6.4	3.9	100%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	体外墨書
SI-368	第101図5	土師器	杯	73	(13.0)	6.8	4.0	40%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-368	第101図6	土師器	杯	1,3,52,58,65,74	(12.7)	(6.2)	3.8	40%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	
SI-368	第101図7	土師器	杯	72	14.0	5.6	4.5	95%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	口縁部に人為的欠損あり
SI-368	第101図8	土師器	杯	73,81	13.0	7.0	4.2	70%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-368	第101図9	土師器	皿	7,39	(13.8)	(6.6)	[2.2]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-368	第101図10	土師器	杯	53	-	-	[1.0]	5%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-439	第102図1	土師器	甕	4,18,19,29,30,31,33	(17.6)	-	[10.5]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-439	第102図2	土師器	甕	1,21,26	(12.8)	-	[5.9]	5%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-439	第102図3	土師器	台付甕	23,24,25,34	-	9.8	[8.8]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-462	第103図1	須恵器	杯	14	12.3	7.0	4.1	80%	灰色	密-白色針状物	ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	
SI-462	第103図2	須恵器	杯	20	11.5	6.0	3.8	80%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	外面煤付着
SI-462	第103図3	須恵器	杯	56,60,61,63,64,66,71	11.9	6.4	3.7	50%	灰色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	
SI-462	第103図4	須恵器	杯	18	11.4	6.4	3.3	50%	青灰色	密	ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	
SI-462	第103図5	土師器	杯	16	12.3	7.2	3.9	80%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	内外面煤付着 外面煤付着 体外墨書
SI-462	第103図6	土師器	杯	1,2,33	11.3	7.4	3.9	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明	
SI-462	第103図7	土師器	杯	5	-	6.0	2.8	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	外面煤付着
SI-462	第103図8	土師器	高台付碗	44	18.4	11.2	6.8	95%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・回転ヘラケズリ・ナデ	
SI-462	第103図9	須恵器	甕	35,53	(36.0)	-	[16.3]	5%	橙褐色	粗-石英・長石・雲母・砂粒	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-462	第103図10	土師器	甕	1,4,7,11,12,13,15,22,23,24,27,30,31,46,47,48	20.6	-	[30.4]	50%	褐色	密-石英・長石・雲母	ナデ、ミガキ	ナデ		
SI-462	第103図11	土師器	甕	2,36,40,41,49,59,62,71	11.6	6.3	14.0	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-465	第105図1	緑釉陶器	高台付碗	163	(9.8)	(5.4)	[2.8]	10%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	不明	
SI-465	第105図2	土師器	杯	373,378	12.6	7.3	4.2	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図3	土師器	杯	1,3,77,85,87,E61-25-1,26-104	12.5	7.0	5.4	70%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図4	土師器	杯	326	12.6	6.5	4.6	80%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・無調整	底外墨書
SI-465	第105図5	土師器	杯	362,365	(12.9)	6.9	[4.1]	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図6	土師器	杯	308	(11.8)	(7.0)	3.9	25%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図7	土師器	杯	307,376,378	(13.4)	(7.4)	[4.5]	40%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図8	土師器	杯	72,309,314,336,376,378	11.8	7.2	[3.9]	85%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図9	土師器	杯	146,158	11.9	6.6	3.8	95%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図10	土師器	杯	5,E61-16-164,212	(12.4)	(6.8)	[3.7]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	体外墨書
SI-465	第105図11	土師器	杯	92	12.3	6.9	4.1	95%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・ナデ	
SI-465	第105図12	土師器	杯	56	11.7	6.5	3.5	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図13	土師器	杯	2,59	(12.8)	(7.5)	[3.9]	30%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-465	第105図14	土師器	杯	310,311,343	12.8	6.5	4.8	45%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	体外墨書
SI-465	第105図15	土師器	杯	3,109,124,157,180	15.0	7.0	4.1	50%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・無調整	
SI-465	第105図16	土師器	杯	362,365,378	13.0	7.3	[4.0]	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	口縁部に油煙(打明皿)
SI-465	第105図17	土師器	杯	353,381	12.2	6.8	3.4	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図18	土師器	杯	2,63,282,不明1	12.0	7.0	3.4	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-465	第105図19	土師器	杯	353,381	(12.6)	(6.0)	3.6	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図20	土師器	杯	2,39	(11.8)	(6.0)	[3.9]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図21	土師器	杯	2,161	(11.9)	6.1	[4.3]	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-465	第105図22	土師器	杯	312,E61-26-130	12.6	6.8	4.0	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	体外墨書
SI-465	第105図23	土師器	杯	38	(11.2)	(6.0)	3.5	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-465	第105図24	土師器	杯	53,55,291	12.4	7.2	3.7	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図25	土師器	杯	353	15.0	6.5	4.1	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	体外墨書
SI-465	第105図26	土師器	杯	297	(12.9)	(7.6)	3.9	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図27	土師器	杯	280,294	(12.6)	(6.4)	[3.9]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図28	土師器	杯	374	(12.0)	-	[2.9]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図29	土師器	杯	2,282,291	(12.5)	-	[2.6]	10%	黒褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-465	第105図30	土師器	杯	90	-	(8.0)	[1.0]	5%	褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図31	土師器	杯	9	-	6.0	[1.3]	20%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図32	土師器	杯	363	9.4	5.7	2.4	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図33	須恵器	杯	119	-	(6.0)	[2.0]	5%	灰褐色	密-長石・黒色粒子	ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・無調整	底外墨書
SI-465	第105図34	土師器	杯	358,359	-	(6.0)	[3.4]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図35	土師器	杯	1	-	(8.0)	[2.5]	10%	橙褐色	密-雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・無調整	底内外墨書
SI-465	第105図36	土師器	杯	303	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	底内線刻
SI-465	第105図37	土師器	杯	111	-	5.6	[1.5]	20%	橙褐色	密-雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第105図38	土師器	杯	66	-	6.0	[3.1]	20%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-465	第105図39	土師器	杯	2,5,229	-	(7.6)	[2.3]	20%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-465	第105図40	土師器	杯	81,84	-	(7.4)	[1.5]	20%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第105図41	土師器	杯	2	-	(5.6)	[1.0]	10%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	外面赤彩
SI-465	第106図42	土師器	杯	353	(11.5)	-	[3.8]	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明	
SI-465	第106図43	土師器	杯	241,257,258,259,273,274,275,277,294	14.6	8.4	4.7	90%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図44	土師器	杯	131,132,134	15.7	7.8	4.8	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・回転糸切り・回転ヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図45	土師器	杯	2,42	(14.9)	6.7	[5.2]	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・手持ちヘラケズリ	体外墨書
SI-465	第106図46	土師器	杯	260,261,262,264	14.8	7.0	4.7	100%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-465	第106図47	土師器	杯	367	(14.2)	(8.0)	4.7	15%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・回転糸切り・手持ちヘラケズリ	黒色処理

遺構番号	押図番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整外面	調整内面	底部調整	備考
SI-465	第106図48	土師器	杯	105,115,E61-15-98, 145,16-208,26-64	(21.2)	(12.0)	7.0	20%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-465	第106図49	土師器	杯	98,122	-	(9.0)	[6.9]	10%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	内面煤付着
SI-465	第106図50	土師器	杯	360	-	7.0	[1.6]	5%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第106図51	土師器	杯	46	-	(7.0)	[1.6]	10%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-465	第106図52	土師器	杯	78,323,331	-	9.2	[1.6]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	
SI-465	第106図53	土師器	杯	3,137,E61-15-60, 16-1,181	-	9.5	[1.3]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ミガキ	ミガキ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	黒色処理
SI-465	第106図54	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図55	土師器	杯	381	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図56	土師器	杯	381	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図57	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図58	土師器	杯	293	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図59	土師器	杯	398	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図60	土師器	杯	381	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図61	土師器	杯	162	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ		体外墨書、黒色処理
SI-465	第106図62	土師器	杯	354	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図63	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図64	土師器	杯	293	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ		体外墨書
SI-465	第106図65	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ		体外墨書、黒色処理
SI-465	第106図66	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		体外墨書
SI-465	第106図67	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図68	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転糸切り・無調整	底内外墨書
SI-465	第106図69	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ	不明・手持ちヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図70	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第106図71	土師器	杯	65	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
SI-465	第106図72	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図73	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ミガキ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図74	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転糸切り・無調整	底外墨書
SI-465	第106図75	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		底外墨書
SI-465	第106図76	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転糸切り・無調整	底外墨書
SI-465	第106図77	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	底外墨書
SI-465	第106図78	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ミガキ	回転糸切り・ナデ	底外墨書
SI-465	第106図79	土師器	杯	1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		底外墨書
SI-465	第106図80	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		底内外墨書
SI-465	第106図81	土師器	高台付杯	164	(15.7)	7.5	6.3	50%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	不明・手持ちヘラケズリ	欠損後に再利用している。黒色処理
SI-465	第106図82	土師器	高台付杯	7,123	-	(11.3)	[2.6]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-465	第106図83	土師器	皿	10,26,45,62	13.3	5.0	2.0	50%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転糸切り・回転ヘラケズリ	
SI-465	第106図84	土師器	高台付皿	1,378,380	(14.8)	7.4	3.7	80%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り・ナデ	
SI-465	第106図85	土師器	高台付皿	151	(15.0)	(7.2)	[3.0]	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・ナデ	
SI-465	第106図86	土師器	高台付皿	19	13.1	6.6	[3.4]	95%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	不明・ナデ	
SI-465	第106図87	土師器	高台付皿	3,128,E61-15-29, 109,118,139,149	13.9	7.4	2.7	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・ナデ	底内外墨書
SI-465	第106図88	土師器	高台付皿	60	12.6	6.5	2.3	100%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・ナデ	
SI-465	第106図89	土師器	高台付皿	45	(14.5)	6.8	[2.9]	70%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り・ナデ	
SI-465	第106図90	土師器	高台付皿	234,E61-26-106, 137,138	(13.8)	(5.4)	[5.4]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・ナデ	体外墨書
SI-465	第106図91	土師器	高台付皿	1,292,378, E61-26-134	(14.0)	-	[2.8]	35%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転糸切り・ナデ	体内墨書
SI-465	第106図92	土師器	高台付皿	1,378,E61-26-118	-	(6.0)	[2.2]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	体内墨書
SI-465	第106図93	土師器	高台付皿	96,E61-26-128	-	-	[1.2]	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	底外墨書
SI-465	第106図94	土師器	高台付皿	325	-	-	[1.7]	20%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・無調整	底外墨書
SI-465	第106図95	土師器	高台付皿	70,75	-	6.7	[1.7]	30%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・無調整	底外墨書
SI-465	第106図96	土師器	高台付皿	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ		底内外墨書
SI-465	第106図97	土師器	高台付皿	126,127	-	7.3	[2.7]	20%	黒褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
SI-465	第106図98	土師器	高台付皿	138	-	7.3	[2.5]	20%	黄白色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
SI-465	第106図99	土師器	高台付皿	188	-	(6.0)	[2.4]	20%	赤褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り・ナデ	
SI-465	第106図100	土師器	高台付皿	54	-	(7.0)	[2.1]	10%	褐色	密	ナデ	ミガキ	回転糸切り・ナデ	
SI-465	第106図101	土師器	高台付皿	244	-	6.2	[1.8]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
SI-465	第107図102	須恵器	甕	186,222,290, E61-16-195	(27.0)	-	[17.5]	5%	橙褐色	密	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-465	第107図103	須恵器	甕	3,263,282	(27.8)	-	[7.3]	5%	赤褐色	密	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-465	第107図104	須恵器	甕	381,E61-16-35, 37,154	-	(11.8)	[3.8]	5%	黄白色	密	ケズリ	ナデ	不明	
SI-465	第107図105	須恵器	甕	130,369,E61-15-62, 26-24,25-1	(44.0)	-	[7.3]	5%	赤褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-465	第107図106	須恵器	甕	6	-	7.3	[2.8]	5%	灰色	粗・長石・黒色粒子	ナデ	ナデ	回転糸切り・無調整	体外自然釉・転用甕
SI-465	第107図107	須恵器	甕	297,361	-	-	-	5%	赤褐色	密	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-465	第107図108	須恵器	甕	57	-	-	-	5%	灰白色	密	ナデ、タタキ	ナデ		
SI-465	第107図109	土師器	甕	2,12,13,14,15,17,18,50,51, 269,270,282,291,E61-25-1,26-1	19.0	-	[22.4]	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		外面煤付着
SI-465	第107図110	土師器	甕	201	(20.0)	-	[8.1]	5%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-465	第107図111	土師器	甕	1,86,322,337	15.0	-	[7.7]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		外面煤付着
SI-465	第107図112	土師器	甕	2,41,44,291	-	4.8	[11.0]	10%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-465	第107図113	土師器	甕	133	-	(11.2)	[3.8]	5%	褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-471A	第108図 1	灰釉陶器	高台付椀	10	-	(8.4)	[2.3]	5%	灰白色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-471A	第108図 2	須恵器	杯	26,27,28,30	(12.8)	(7.8)	3.0	30%	灰色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明	
SI-471A	第108図 3	土師器	杯	37	11.6	6.7	3.9	40%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	

遺構番号	挿入番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整外面	調整内面	底部調整	備考
SI-471A	第108図4	土師器	杯	38	12.2	7.2	3.8	100%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	不明	
SI-471A	第108図5	土師器	杯	1,9	12.6	6.8	3.9	100%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SI-471A	第108図6	土師器	杯	13,15	15.8	7.2	5.0	95%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明	黒色処理
SI-471A	第108図7	土師器	杯	19,20,40,SI148-453	(16.3)	(8.0)	[4.3]	70%	黒褐色	密	ケズリ、ミガキ	ミガキ	不明	黒色処理
SI-471A	第108図8	土師器	甕	25	(18.1)	-	[5.0]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-471A	第108図9	土師器	甕	18	(12.4)	-	[6.3]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-485	第109図1	須恵器	高台付杯	5	-	(10.1)	[2.1]	5%	黒褐色	密-長石	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-485	第109図2	土師器	甕	3	(23.1)	-	[8.5]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-551	第110図1	緑釉陶器	皿	148,149	(13.0)	-	[3.0]	10%	淡緑色	密	ナデ	ナデ		
SI-551	第110図2	土師器	杯	64	11.8	7.1	4.3	80%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SI-551	第110図3	土師器	杯	4,153	(13.1)	(7.0)	4.4	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-551	第110図4	土師器	杯	32,33,93,101	11.9	7.0	4.1	90%	黄褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底内黒書
SI-551	第110図5	土師器	杯	170	(14.2)	(9.0)	4.1	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-551	第110図6	土師器	杯	72	(12.2)	(6.4)	3.8	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	底内黒書
SI-551	第110図7	土師器	杯	4,45,56,142	12.6	7.0	3.7	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	底内外黒書
SI-551	第110図8	土師器	杯	2,98,120	(15.0)	(6.0)	3.6	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内線刻
SI-551	第110図9	土師器	杯	24,31,36,41	14.7	8.0	4.3	50%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	回転系切り・回転ヘラケズリ	底内黒書
SI-551	第110図10	土師器	杯	2,4,6,151,160	(14.0)	7.2	4.9	40%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-551	第110図11	土師器	杯	2,102	(14.0)	-	[4.4]	10%	褐色	密	ケズリ、ナデ、ミガキ	ミガキ		黒色処理
SI-551	第110図12	土師器	杯	3,137	(15.0)	-	[4.0]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ		
SI-551	第110図13	土師器	杯	1,2,16	(11.9)	-	[3.6]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-551	第110図14	土師器	杯	27	-	(7.6)	[2.1]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	
SI-551	第110図15	土師器	杯	54,110	-	(7.8)	[2.9]	10%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	内外面煤付着
SI-551	第110図16	土師器	杯	46	-	7.0	[1.3]	30%	橙褐色	密-雲母	ケズリ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底内黒書
SI-551	第110図17	土師器	杯	2	-	(7.0)	[1.2]	15%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-551	第110図18	土師器	杯	76	-	6.8	[2.0]	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SI-551	第110図19	土師器	杯	15	-	6.0	[1.6]	10%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
SI-551	第110図20	土師器	杯	1,3,91,92,116,117,136,139	(20.0)	(9.4)	7.4	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明	
SI-551	第110図21	土師器	杯	4,95	-	(10.0)	[4.7]	5%	黒褐色	密	ケズリ	ミガキ		
SI-551	第110図22	土師器	杯	128	-	(11.0)	[4.1]	5%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	
SI-551	第110図23	土師器	皿	19	13.9	7.4	1.9	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	
SI-551	第110図24	土師器	高台付皿	133	6.8	12.1	2.4	100%	褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転系切り・ナデ	
SI-551	第110図25	土師器	高台付皿	3,20,21	14.3	7.6	3.3	90%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	底内黒書
SI-551	第110図26	土師器	高台付皿	146	14.1	8.0	3.6	100%	橙褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転系切り・ナデ	
SI-551	第110図27	土師器	高台付皿	38,42,121	-	(7.7)	[2.9]	30%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-551	第110図28	土師器	高台付皿	97	-	7.8	[2.4]	20%	橙褐色	密-雲母	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
SI-551	第111図29	土師器	杯	4	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外黒書
SI-551	第111図30	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ		体外黒書
SI-551	第111図31	土師器	杯	4	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ		体外黒書
SI-551	第111図32	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-551	第111図33	土師器	杯	2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外黒書
SI-551	第111図34	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転系切り・無調整	底外黒書
SI-551	第111図35	土師器	杯	3	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	ナデ	回転系切り・無調整	底外黒書
SI-551	第111図36	土師器	甕	3,48,94	(20.0)	-	[11.2]	5%	黄白色	密	ナデ	ナデ		外面煤付着
SI-551	第111図37	土師器	甕	114,115,171	-	6.9	[3.0]	20%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	外面煤付着
SI-551	第111図38	土師器	甕	5	-	14.4	[2.1]	5%	褐色	密	ケズリ	ナデ	無調整	底部内面に研磨痕(転用祝)底外ヘラ書き
SI-551	第111図39	土師器	台付甕	111,158,166	11.2	-	[12.5]	90%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-551	第111図40	土師器	台付甕	1,75	-	9.2	[4.2]	5%	黒褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-551	第111図41	土師器	甕	1,112,152,156,167	(20.0)	-	[9.0]	10%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-551	第111図42	土師器	甕	105,106	(16.0)	-	[6.9]	5%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-551	第111図43	土師器	甕	2,10,34,88	-	4.2	[5.0]	5%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-554	第112図1	土師器	杯	3,28	(11.3)	(5.8)	3.5	10%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SI-554	第112図2	土師器	杯	4,7,8,33,34	(12.9)	6.4	5.4	80%	黒褐色	密	ナデ	ナデ、ミガキ	回転系切り・無調整	体外線刻、黒色処理
SI-554	第112図3	土師器	高台付杯	4,14	14.1	-	[5.3]	80%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SI-554	第112図4	土師器	高台付椀	4,9,43	(15.1)	-	[5.1]	20%	赤褐色	密	ナデ	ミガキ		
SI-554	第112図5	土師器	高台付椀	15,36,42	(13.9)	-	[5.2]	50%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	不明・ナデ	黒色処理
SI-554	第112図6	土師器	高台付椀	3,22,25,26	-	-	[4.2]	30%	黒褐色	密	ナデ、ミガキ	ミガキ	回転系切り・ナデ	内外面黒色処理
SI-554	第112図7	須恵器	壺	41	-	-	-	5%	黒灰色	密-長石・黒色砂子	ナデ	ナデ		
SI-554	第112図8	土師器	甕	12,15,17	-	-	[13.0]	5%	褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SI-563	第113図1	土師器	杯	2	-	(8.0)	[1.9]	10%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SB-351	第120図1	土師器	皿	4	(13.0)	(6.0)	2.2	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	ケズリ	
SB-351	第120図2	土師器	杯	3,4	-	(6.0)	[3.2]	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明	黒色処理
SB-351	第120図3	土師器	杯	2	(14.6)	-	[2.7]	5%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明	黒色処理
SB-351	第120図4	須恵器	甕	1	-	(18.0)	[5.5]	5%	黒褐色	密	タタキ、ケズリ	ナデ	不明・無調整	
SB-561	第122図1	土師器	皿	6	-	7.5	[1.8]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明	圧痕
SB-561	第122図2	土師器	皿	8	-	6.0	[1.1]	5%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	回転系切り・無調整	
SK-475A	第123図1	須恵器	杯	9	-	(7.3)	[2.3]	10%	灰色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SK-475A	第123図2	土師器	杯	1,34,E61-24-1	(12.6)	7.2	[3.2]	30%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	
SK-475A	第123図3	土師器	杯	38	(12.2)	(7.0)	[3.0]	20%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	体外線刻、体外黒書
SK-475A	第123図4	土師器	杯	37	(11.6)	(6.2)	[3.9]	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図5	土師器	杯	1,19,29,30,31	11.3	6.4	3.5	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図6	土師器	杯	43	11.4	6.2	3.4	100%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図7	土師器	杯	2,15,42,53	(10.4)	(5.6)	[3.6]	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	

遺構番号	挿入番号	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整外面	調整内面	底部調整	備考
SK-475A	第123図8	土師器	杯	21,32	(8.0)	(5.2)	(3.5)	15%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図9	土師器	杯	6	-	5.8	(2.3)	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図10	土師器	椀	55	(16.0)	-	(3.6)	5%	赤褐色	密	ナデ、ミガキ	ミガキ	不明	
SK-475A	第123図11	土師器	皿	33,47,48,56	16.2	6.8	1.8	95%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図12	土師器	皿	46,49	16.7	8.4	2.0	90%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図13	土師器	皿	22,45	(16.8)	(5.0)	2.0	20%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図14	土師器	皿	50	16.0	6.2	2.2	50%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図15	土師器	皿	23,24	(16.0)	-	(2.1)	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明	
SK-475A	第123図16	土師器	皿	51,52	(16.0)	-	(2.4)	20%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SK-475A	第123図17	土師器	皿	12	(15.6)	(7.6)	(2.3)	10%	赤褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
SK-303	第124図1	土師器	高台付椀	12,13,103,121,122	-	(7.3)	(5.5)	20%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・ナデ	体外墨書
SK-303	第124図2	土師器	高台付杯	74,14	(14.6)	(7.0)	(5.5)	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SK-303	第124図3	土師器	杯	22,23	(15.0)	-	(4.2)	10%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ		
SK-303	第124図4	土師器	杯	11,157	(15.0)	-	(2.9)	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		
SK-303	第124図5	土師器	杯	24	-	7.6	(2.1)	10%	赤褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SK-303	第124図6	土師器	高台付杯	15,28,29	-	-	(4.6)	20%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
SK-303	第124図7	土師器	杯	25,26,48,126	-	(5.5)	(1.5)	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	
SK-303	第124図8	土師器	高台付杯	37	(11.6)	(6.2)	(3.9)	10%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
SK-293	第127図2	土師器	杯	2	13.2	6.8	3.4	100%	黒褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	内外面煤付着
SK-472	第127図2	土師器	高台付椀	1	-	7.7	(2.9)	10%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	
グリット	第128図1	須恵器	杯	9802T-2	(11.4)	6.3	3.5	45%	黒灰色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	
グリット	第128図2	土師器	杯	E62-05-23	(11.3)	7.0	(3.1)	40%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・ナデ	
グリット	第128図3	土師器	杯	SD148-447	(12.6)	(6.0)	(4.4)	30%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	
グリット	第128図4	土師器	杯	E61-23-1	11.0	6.3	[3.5]	60%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・回転ヘラケズリ	
グリット	第128図5	土師器	杯	F61-91-9	-	(8.8)	(1.5)	20%	褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外線刻
グリット	第128図6	土師器	杯	E60-30-1	-	-	-	40%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・ヘラケズリ	底外線刻
グリット	第128図7	土師器	高台付皿	E61-15-82,141 E61-16-213,230,不明1 188,190,228	14.7	8.1	4.2	90%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	体外墨書
グリット	第128図8	土師器	高台付皿	E61-05-75,E61-16-1, 188,190,228	(14.6)	7.1	3.4	70%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ミガキ	不明・手持ちヘラケズリ	
グリット	第128図9	土師器	皿	SD148-456	(15.2)	(8.0)	[2.3]	-	-	密	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	不明・回転ヘラケズリ	
グリット	第128図10	土師器	高台付皿	SD148-415	-	6.7	[1.4]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	底外線刻
グリット	第128図11	土師器	高台付杯	12	-	(8.0)	[2.6]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	
グリット	第128図12	土師器	杯	E61-05-78	-	(6.0)	[0.8]	5%	橙褐色	密・雲母	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
グリット	第128図13	土師器	杯	E61-15-156	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
グリット	第128図14	土師器	杯	D60-57-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	不明	不明	不明	底内墨書
グリット	第128図15	土師器	杯	E61-16-123	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内墨書
グリット	第128図16	土師器	杯	D60-97-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	体外墨書
グリット	第128図17	土師器	杯	D61-17-53	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	体外墨書
グリット	第128図18	土師器	高台付杯	E61-23-1	-	(7.0)	[1.9]	5%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ	不明・ナデ	底内墨書
グリット	第128図19	土師器	杯	E62-09-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	-	回転系切り・不明	底外墨書
グリット	第128図20	土師器	杯	E61-16-18	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底外墨書
グリット	第128図21	土師器	杯	E61-16-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	回転系切り・無調整	黒色処理・体外墨書
グリット	第128図22	土師器	杯	SD503-2	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	底外墨書
グリット	第128図23	土師器	杯	E61-26-136	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外墨書
グリット	第128図24	土師器	杯	E61-16-206	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	体外墨書
グリット	第128図25	土師器	杯	E61-16-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	体外墨書
グリット	第128図26	土師器	杯	E61-15-114,E61-16-27, 77,163,179	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ	回転系切り・不明	底内外墨書
グリット	第128図27	土師器	杯	E62-09-1	-	(7.0)	[6.0]	5%	橙褐色	密	ナデ	ケズリ	回転系切り・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
グリット	第128図28	土師器	杯	E61-26-999	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
グリット	第128図29	土師器	杯	E61-25-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ミガキ		黒色処理・体外墨書
グリット	第128図30	土師器	杯	C58-75-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		体外墨書
グリット	第128図31	土師器	杯	E61-16-63	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ	ミガキ	不明・回転ヘラケズリ	黒色処理・底外墨書
グリット	第128図32	土師器	杯	E61-16-78	-	-	-	5%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	底内墨書
グリット	第128図33	土師器	杯	9801T-1	-	5.2	[0.9]	30%	橙褐色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	回転系切り・無調整	底内墨書
グリット	第128図34	土師器	杯	E61-16-183	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ミガキ	-	底外墨書
グリット	第128図35	土師器	杯	E61-16-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
グリット	第128図36	土師器	杯	E61-91-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底外墨書
グリット	第128図37	土師器	杯	E61-26-999	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	不明・手持ちヘラケズリ	底内外墨書
グリット	第128図38	土師器	杯	E61-04-1	-	-	-	5%	橙褐色	密	-	ナデ	不明・回転系切り・不明	底内墨書
グリット	第128図39	緑釉陶器	鉢	SD148-399	-	-	[1.2]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	無調整	緑の釉の色調から三彩となる可能性有り
グリット	第128図40	緑釉陶器	不明	F61-42-7	-	-	[0.8]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	無調整	緑の釉の色調から三彩となる可能性有り
グリット	第128図41	緑釉陶器	高台付椀	SB061-2	-	7.1	[2.5]	10%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	-	底外線刻・円形に爪形圧痕・猿投K90併行期
グリット	第128図42	緑釉陶器	高台付皿	9801T-1	-	(6.6)	[1.4]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	-	灰釉掛け掛け
グリット	第128図43	緑釉陶器	高台付皿	103	-	(6.0)	[1.5]	5%	緑灰色	密	ナデ	ナデ	-	内外面緑釉
グリット	第128図44	灰釉陶器	皿	E61-26-22	(15.0)	-	[2.0]	15%	緑灰色	密	ケズリ、ナデ	ナデ	不明・回転ヘラケズリ	灰釉掛け掛け
グリット	第128図45	灰釉陶器	台付椀	SD148-359	-	(8.0)	[3.1]	15%	灰色	密	ナデ	ナデ	不明・ナデ	猿投K14併行期

## 第3章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

思井堀ノ内遺跡の調査では、計11地点のブロックが検出された。これらのブロックは文化層の様相を明確にする定型的な石器が少なく、かつ、調査時の土層柱状図が不備な地点があり、出土層位が不明瞭なブロックもあるが、大別して次のように文化層分けができる。以下にその文化層と文化層ごとの特徴を明記し、まとめとしたい。

Ⅲ層下部：第3ブロック

安山岩を主体とし、主に縦長剥片で構成される。

Ⅳ層：第2ブロック

頁岩製、玉髓製の不定形剥片で構成される。

Ⅶ層：第5ブロック

使用される石材は、流紋岩、安山岩、頁岩と多種である。主に縦長剥片で構成される。

Ⅸ層上部：第1ブロック

安山岩を主体とし、主に縦長剥片により構成される。

Ⅸc層：第4、6、7、8、9、10、11ブロック

安山岩が主体であり、盤状石核から求芯的に作出された横長剥片が認められる。基部加工のナイフ形石器（第4ブロック）、刃部磨製石斧（第11ブロック）が組成に加わる。

上記の文化層のうち、最下層に所属するⅨc文化層は所属するブロック数が最も多く、台地南東部の緩斜面部に集中する傾向が認められる。

Ⅸc層文化層各ブロックで主体的に使用される安山岩は、質感が極めて類似するため、原産地を同じくするものと考えられる。接合関係は認められないが、各ブロック相互に有機的な関係が窺える。また、第11ブロックからは2点の刃部磨製石斧が出土しており、定型的な石器の出土点数は希少であるが、狭範囲でのブロック群として把握できる。思井堀ノ内遺跡は未調査区が多く、このⅨc層文化層ブロック群周辺についても同様であり、さらなる同一文化層に属するブロックの広がりが予想される。

### 第2節 奈良・平安時代

#### 1 出土土器と集落の変遷

該期の集落から出土した土器は、土師器・須恵器の他、緑釉陶器や灰釉陶器が比較的豊富に含まれている。以下で、集落の動向を考えるうえで基準となる土器の編年を考えてみたい。また、出土土器をもとにして集落の変遷を述べていくが、部分的な調査のため全体的な傾向を示すまでにはならず不十分なものとならざるをえない部分が多い。



## 出土土器（第132・133・134図）

出土土器を概観すると、出現時期は8世紀後半頃で、終息時期は10世紀前半頃と考えられる。ここでは、便宜的に第Ⅰ期から第Ⅴ期に分けて杯類を中心とした変化をみている。

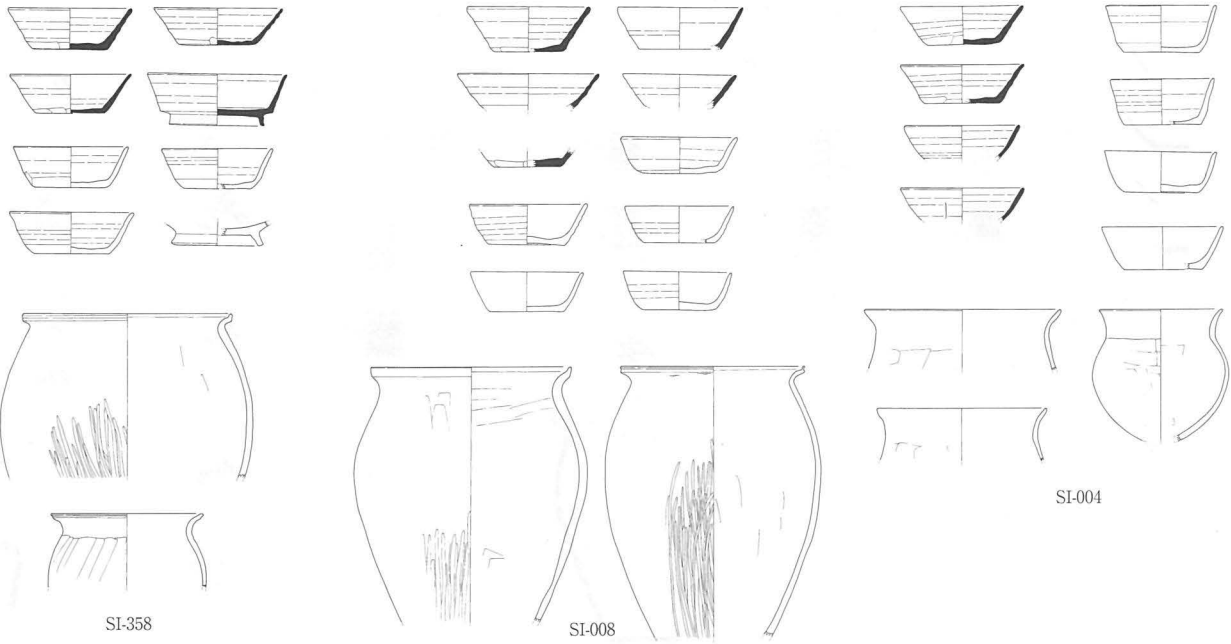
まず第Ⅰ期は、SI-358に代表されるように、口径13cm前後の比較的少量の大きな新治産や在地産と思われる須恵器杯とともに武蔵産のものも客体的にみられる。杯類全体の中に占める須恵器の割合が高いのが本期の特徴である。土師器杯は、SI-004のような箱形を呈するタイプとSI-008やSI-358のような体部が直線的に開くものの、口径と底径の差が少ないタイプが主体となる。SI-004から灰釉陶器の碗の小片が出土しているが、遺構確認面からの出土で、時期的には猿投編年のK90頃と思われ、混入品であろう。土師器の甕は、この段階では胴部にヘラミガキを施す常総型が主体的であるが、SI-004のように武蔵型甕もみられる。体部が直線的に開く新治産の須恵器及び口径と底径の差が少ない土師器の特徴から、本期は8世紀後半から末にかけての所産と考えられる。

第Ⅱ期は資料数が多くなる。第Ⅰ期ほどではないが、本期も比較的須恵器の占める割合が高い。須恵器杯は、第Ⅰ期の形態を踏襲するSI-471のようなものもみられるが、SI-462に含まれるように、底径と口径の差が大きくなるものや体部が内湾気味になるタイプも出現するようになる。土師器杯は、SI-551のように第Ⅰ期に類似する口径の大きなタイプも残るが、須恵器杯と同様に、口径と底径の差が大きくなり、体部が内湾気味に開くタイプが姿を表すようになる。この時期になると、新たに内面黒色処理の椀形の杯や高台杯及び皿が出現してくる。本期は8世紀後半の様相を継承するものもみられるが、杯などに後出の様相を有するものが多くなることから、9世紀前半に相当すると思われる。土師器の甕は、SI-551にみられるように、第Ⅰ期とは異なり、武蔵型甕が主体的、常総型甕がむしろ客体的な存在となっている。この段階になって墨書土器が使用されるようになり、文字は「庄」と「宗」にほぼ限定される。

第Ⅲ期は、SI-282やSI-465Aに良好なセットがみられる。SI-282の須恵器杯は、第Ⅱ期と同様に新旧混在した状況である。土師器杯は、第Ⅰ期の箱形の後継と思われる底径と口径の少ないものも残るが、第Ⅱ期に出現した体部が内湾気味に開き、口縁部で外反するタイプが多くなる。また、内面にミガキを施した椀形に近い杯も多くなっていく。本期は第Ⅱ期と明確な差は認められないが、後出の様相が多くなることから、9世紀中葉頃と想定される。土師器の甕は個体数が少ないが武蔵型甕がみられる。本期の墨書土器は、第Ⅱ期と同様「庄」及び「宗」が主体である。

第Ⅳ期は、前時期までと比較して須恵器の割合が少なくなるとともに、SI-283のように須恵器杯の口径と底径の差が大きくなり、より後出の様相を呈するようになる。土師器杯も前時期までと比較して口径と底径の差が大きくなり、体部が内湾気味に開き、口縁部が外反するようになるタイプが主体となる。高台付き杯はより椀形が強くなり、皿は高台が付くものが多くなる。高台の貼り付けは、前時期までと比較して底部のより内側に位置するようになる。土師器甕の資料は少ないが、常総型や武蔵型のような他地域の資料はほとんどみられなくなり、在地的なものが多いようである。施釉陶器は、SI-283に良好な資料がみられる。高台は三日月高台となり、体部の丸みが弱く、口唇部の外反が認められないことから、K90併行期と思われる。施釉陶器の年代観及び土師器杯の様相から、本期は9世紀後半に相当すると思われる。本期の墨書土器は、前期までの「庄」や「宗」が姿を消し、新たに「生万」が主体となる。

第Ⅴ期は、調査された範囲の集落としては最終末の時期となる。須恵器は姿を消し、土師器の杯は小形で、体部下端にヘラケズリを施さないタイプで占められる。高台付き椀は高台が高く、体部の湾曲も強く

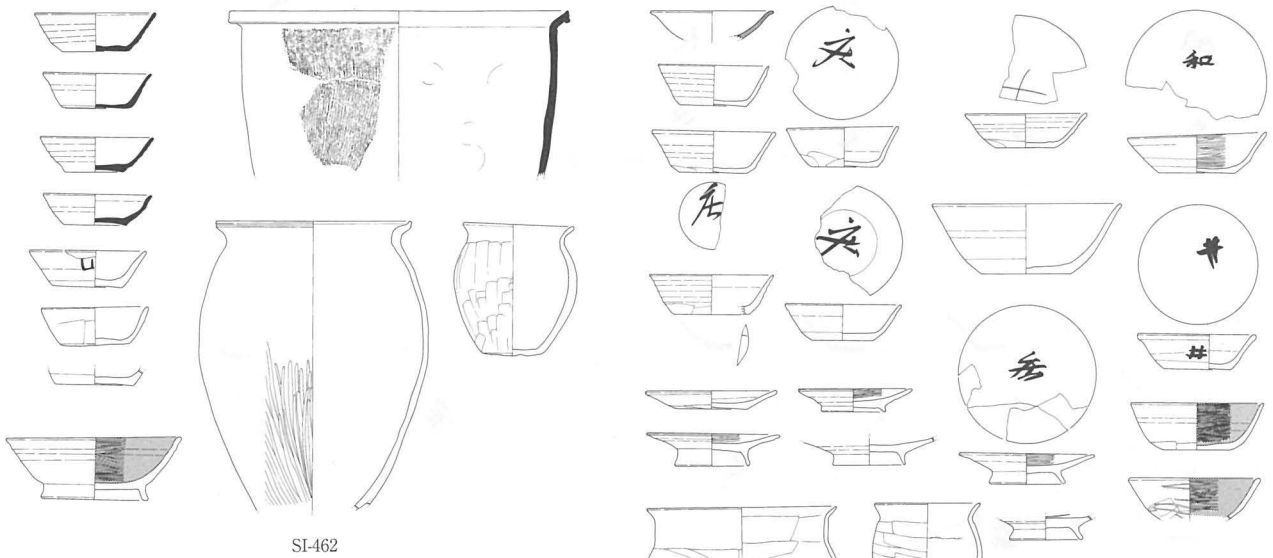


SI-358

SI-008

SI-004

I期 (8世紀後半)



SI-462

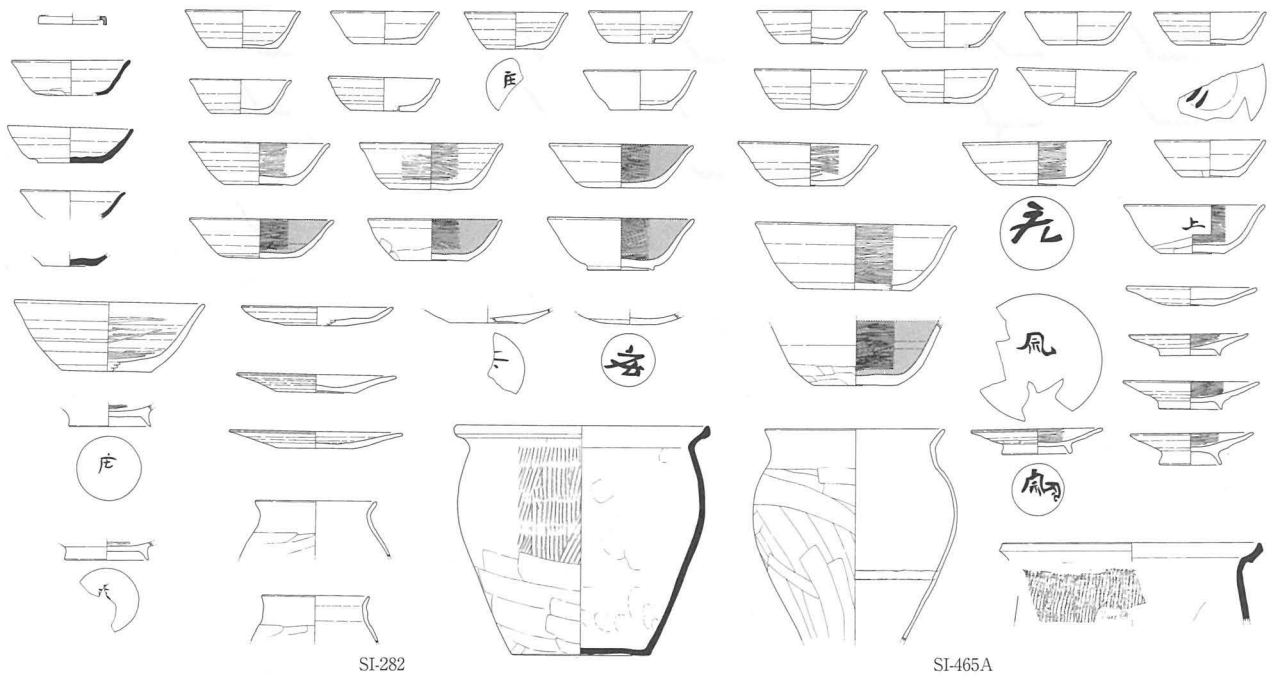
SI-551

SI-465C

SI-465D

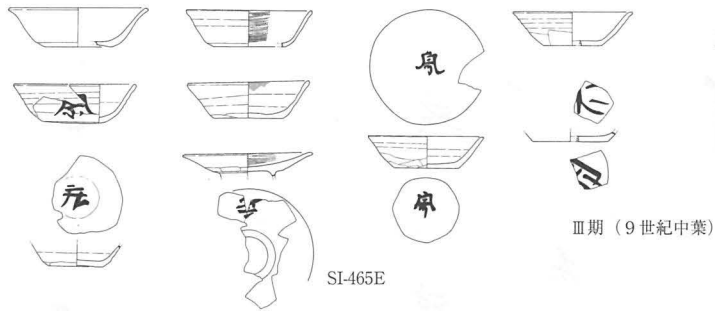
II期 (9世紀前半)

第132図 竪穴住居跡出土土器変遷図(1)



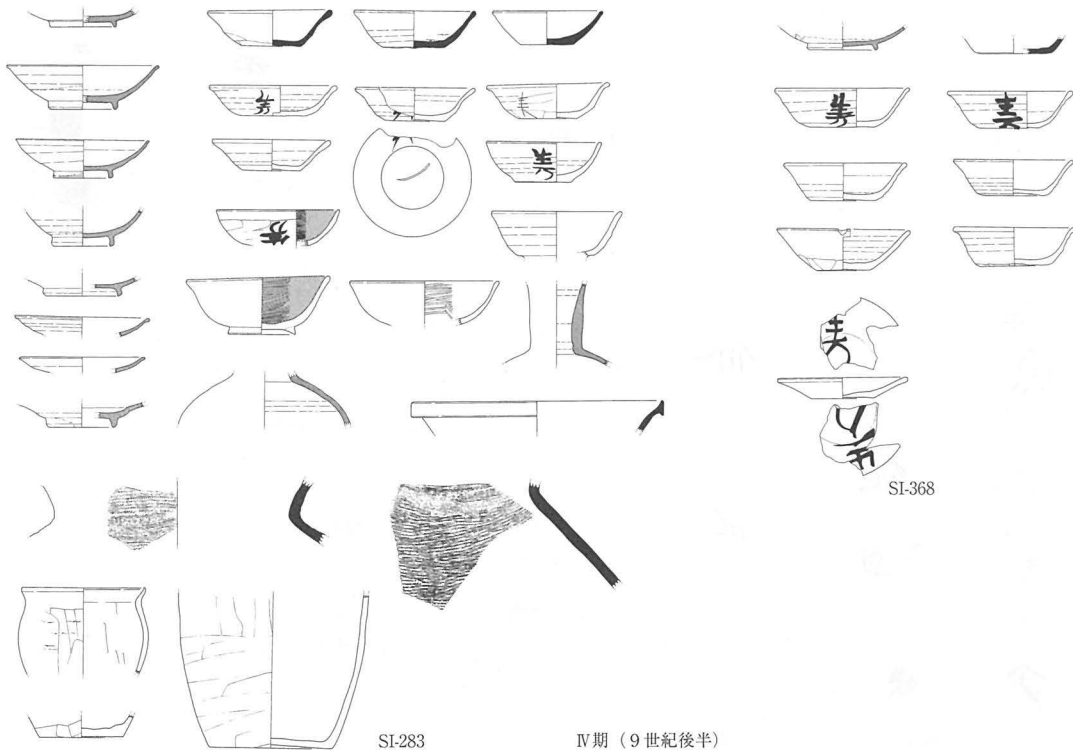
SI-282

SI-465A



SI-465E

Ⅲ期 (9世紀中葉)

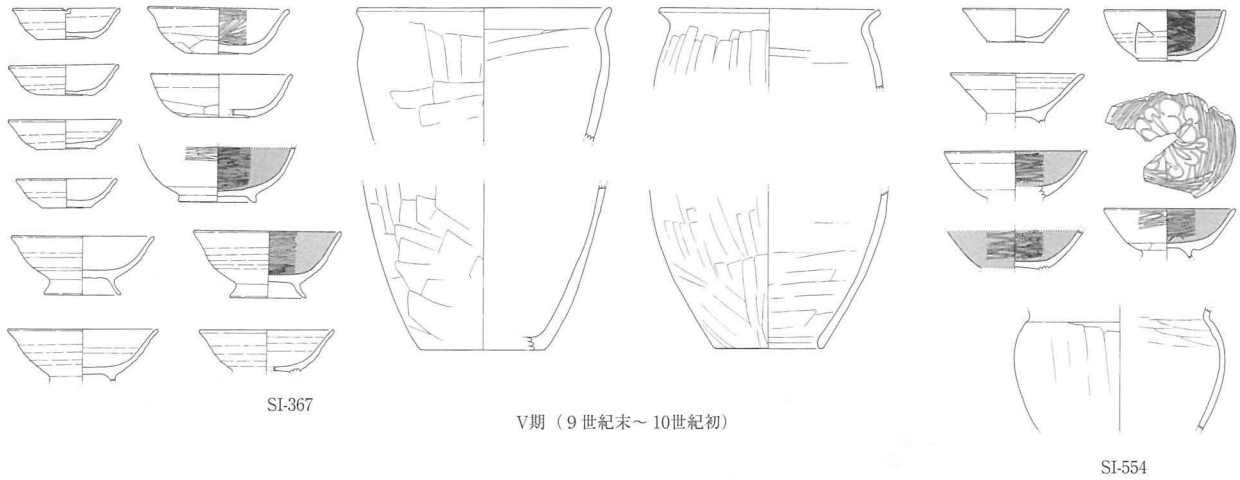


SI-283

SI-368

Ⅳ期 (9世紀後半)

第133図 竪穴住居跡出土土器変遷図(2)



第134図 竪穴住居跡出土土器変遷図(3)

なり、新たに、足高高台付き杯がセットの中に含まれてくる。土師器の甕は第IV期に引き続き在地的なものとなる。本期は、小形化した杯や足高高台の出現などにより、9世紀末から10世紀初頭の年代が想定される。

#### 集落の変遷 (第135図)

前述した出土土器の様相から集落の変遷を考えてみるが、限定された調査範囲のため部分的な傾向を呈示するにとどまらざるをえない。

本集落の出現時期である第I期(8世紀後半)は、SI-004・008・358の3軒のグループとSI-286・287の2軒、単独のSI-485の3グループに分けられる。西側の3軒はカマドを北側に向けるが、東側は北カマドと東カマド両者が存在する。東側では、SI-286の出土土器がやや新しい様相を示していることから、北カマドから東カマドに変化した可能性が考えられる。調査区南西側にある2間×5間の規模を有するSB-489は、出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、掘り方の規模が大きいことやSI-004やSI-008の主軸方向と梁行き方向がほぼ一致していることなどから、第I期に属するものと想定される。なお、SI-485の主軸方向と桁行き方向がほぼ一致することから、竪穴住居と掘立柱建物がセットとなる可能性もある。次の第II期(9世紀前半)になると、住居軒数が多くなり、東側の比較的広い範囲に集中する傾向が伺える。北カマドがほとんどであるが、「庄」の墨書土器を多く出土したSI-551のみ東カマドとなる。次の第III期(9世紀中葉)では、住居軒数は第II期とほぼ同様であるが、集中する傾向はなくなり、調査区全体に散在するようになる。SI-007・012・282・439の4軒のカマドの主軸方向はN-30°~40°-Eにまとまる。この時期になって土師器焼成遺構が伴ってくる。第IV期(9世紀後半)はSI-283・SI-368の竪穴住居2軒と少なくなるが、調査区西寄りにまとまり、いずれも東カマドとなる。第V期(9世紀末から10世紀初頭)は調査区内では集落の消滅時期にあたり、SI-563・SI-554が一つのグループとなり、単独でSI-367が営まれる。掘り方の小さな3棟の掘立柱建物も本期に含まれると想定される。

#### 2 墨書土器の様相

本調査区内では、総数137点の墨書土器が出土している。ここでは、墨書土器の変遷などいくつかの観点からその特徴などを考えてみたい。



第135图 集落变迁图



第136図 文字資料一覽(1) (S=2/3)



第137図 文字資料一覽(2) (S=2/3)

第17表 出土文字資料一覽表

番号	遺構番号	挿図番号	器質	器形	积文	部位	方向
1	SI-007	第89図4	土師器	杯	不明	体部外面	
2	SI-008	第90図13	土師器	杯	不明	体部外面	
3	SI-282	第92図9	土師器	杯	庄	底部外面	
4	SI-282	第92図14	土師器	杯	宗力	体部外面	倒位
5	SI-282	第92図34	土師器	皿	宗	底部外面	
6	SI-282	第92図35	土師器	皿	庄	底部外面	
7	SI-282	第93図37	土師器	高台付皿	庄	底部外面	
8	SI-282	第93図38	土師器	高台付皿	庄	底部外面	
9	SI-282	第93図43	土師器	杯	庄	体部外面	横位
10	SI-282	第93図44	土師器	杯	庄	体部外面	横位
11	SI-282	第93図45	土師器	杯	不明	体部外面	
12	SI-282	第93図46	土師器	杯	不明	体部外面	
13	SI-282	第93図47	土師器	杯	不明	体部外面	
14	SI-282	第93図48	土師器	杯	庄	底部外面	
15	SI-282	第93図49	土師器	杯	庄	底部外面	
16	SI-282	第93図50	土師器	杯	庄力	底部外面	
17	SI-282	第93図51	土師器	杯	庄力	底部外面	
18	SI-282	第93図52	土師器	杯	庄	底部外面	
19	SI-282	第93図53	土師器	杯	不明	底部外面	
20	SI-282	第93図54	土師器	高台付杯	不明	底部外面	
21	SI-282	第93図55	土師器	高台付杯	庄力	底部内面	
22	SI-283	第94図13	土師器	杯	生方	体部外面	正位
23	SI-283	第94図14	土師器	杯	生万力	体部外面	
24	SI-283	第94図15	土師器	杯	生万	体部外面	正位
25	SI-283	第94図17	土師器	杯	生万	体部外面	正位
26	SI-283	第94図18	土師器	杯	生万	体部外面	倒位
27	SI-283	第94図25	土師器	杯	生	体部外面	
28	SI-283	第94図26	土師器	杯	不明	体部外面	
29	SI-284	第96図2	土師器	杯	不明	体部外面	
30	SI-284	第96図3	土師器	杯	不明	体部外面	
31	SI-284	第96図4	土師器	杯	不明	底部外面	
32	SI-284	第96図5	土師器	杯	不明	底部内面	
33	SI-284	第96図6	土師器	高台付皿	不明	底部外面	
34	SI-367A	第100図7	土師器	杯	不明	体部外面	
35	SI-368	第101図3	土師器	杯	生万	体部外面	正位
36	SI-368	第101図4	土師器	杯	生万	体部外面	正位
37	SI-368	第101図9	土師器	皿	生万	体部内外面	正位
38	SI-368	第101図10	土師器	杯	秋	底部内面	
39	SI-462	第103図5	土師器	杯	不明	体部外面	
40	SI-465	第105図4	土師器	杯	宗	底部外面	
41	SI-465	第105図7	土師器	杯	宗	底部内外面	
42	SI-465	第105図10	土師器	杯	宗	体部外面	横位
43	SI-465	第105図14	土師器	杯	宗	体部外面	正位
44	SI-465	第105図17	土師器	杯	宗	底部内外面	
45	SI-465	第105図20	土師器	杯	宗力	底部内面	
46	SI-465	第105図22	土師器	杯	車	体部外面	正位
47	SI-465	第105図25	土師器	杯	宗	体部外面	正位
48	SI-465	第105図30	土師器	杯	宗	底部内外面	
49	SI-465	第105図31	土師器	杯	上	底部内面	
50	SI-465	第105図32	土師器	杯	庄	底部内面	
51	SI-465	第105図33	須恵器	杯	宗	底部外面	
52	SI-465	第105図35	土師器	杯	宗	底部内外面	
53	SI-465	第105図37	土師器	杯	天	底部内外面	
54	SI-465	第106図43	土師器	杯	宗	底部外面	
55	SI-465	第106図44	土師器	杯	庄	底部外面	
56	SI-465	第106図45	土師器	杯	上	体部外面	正位
57	SI-465	第106図50	土師器	杯	不明	底部内外面	
58	SI-465	第106図54	土師器	杯	庄	体部外面	正位
59	SI-465	第106図55	土師器	杯	庄力	体部外面	正位
60	SI-465	第106図56	土師器	杯	庄力	体部外面	
61	SI-465	第106図57	土師器	杯	宗力	体部外面	
62	SI-465	第106図58	土師器	杯	不明	体部外面	
63	SI-465	第106図59	土師器	杯	不明	体部外面	
64	SI-465	第106図60	土師器	杯	庄力	体部外面	
65	SI-465	第106図61	土師器	杯	不明	体部外面	
66	SI-465	第106図62	土師器	杯	庄力	体部外面	
67	SI-465	第106図63	土師器	杯	不明	体部外面	
68	SI-465	第106図64	土師器	杯	不明	体部内面	

番号	遺構番号	挿図番号	器 質	器 形	釈 文	部 位	方 向
69	SI-465	第106図65	土師器	杯	不明	体部外面	
70	SI-465	第106図66	土師器	杯	不明	体部外面	
71	SI-465	第106図67	土師器	杯	庄	体部外面	
72	SI-465	第106図68	土師器	杯	庄	底部内外面	
73	SI-465	第106図69	土師器	杯	不明	底部外面	
74	SI-465	第106図70	土師器	杯	不明	底部内外面	
75	SI-465	第106図71	土師器	杯	上	底部内面	
76	SI-465	第106図72	土師器	杯	庄カ	底部外面	
77	SI-465	第106図73	土師器	杯	宗カ	底部外面	
78	SI-465	第106図74	土師器	杯	不明	底部外面	
79	SI-465	第106図75	土師器	杯	不明	底部外面	
80	SI-465	第106図76	土師器	杯	不明	底部外面	
81	SI-465	第106図77	土師器	杯	不明	底部外面	
82	SI-465	第106図78	土師器	杯	不明	底部外面	
83	SI-465	第106図79	土師器	杯	不明	底部外面	
84	SI-465	第106図80	土師器	杯	不明	体部内外面	
85	SI-465	第106図88	土師器	高台付皿	宗	底部内外面	
86	SI-465	第106図90	土師器	高台付皿	庄	体部外面	倒位
87	SI-465	第106図91	土師器	高台付皿	宗	底部内面	
88	SI-465	第106図92	土師器	高台付皿	宗宗	底部内面	
89	SI-465	第106図93	土師器	高台付皿	庄	底部外面	
90	SI-465	第106図94	土師器	高台付皿	庄	底部外面	
91	SI-465	第106図95	土師器	高台付皿	庄	底部外面	
92	SI-465	第106図96	土師器	高台付皿	庄カ	底部内面	
93	SI-551	第110図 3	土師器	杯	庄	底部外面	
94	SI-551	第110図 4	土師器	杯	庄	底部内面	
95	SI-551	第110図 5	土師器	杯	不明	底部外面	
96	SI-551	第110図 6	土師器	杯	庄	底部内面	
97	SI-551	第110図 7	土師器	杯	井	体部外面・底部内面	正位
98	SI-551	第110図 9	土師器	杯	和	底部内面	
99	SI-551	第110図16	土師器	杯	庄	底部内面	
100	SI-551	第110図17	土師器	杯	不明	底部外面	
101	SI-551	第110図25	土師器	高台付皿	庄	底部内面	
102	SI-551	第111図29	土師器	杯	庄	体部外面	正位
103	SI-551	第111図30	土師器	杯	庄	体部外面	正位
104	SI-551	第111図31	土師器	杯	不明	体部外面	
105	SI-551	第111図32	土師器	杯	庄カ	底部外面	
106	SI-551	第111図33	土師器	杯	不明	底部外面	
107	SI-551	第111図34	土師器	杯	不明	底部外面	
108	SI-551	第111図35	土師器	杯	庄カ	底部外面	
109	SK-475A	第123図 3	土師器	杯	宗カ	体部外面	線刻
110	SK-303	第124図 1	土師器	高台付碗	宗	体部外面	正位
111	グリット	第128図 7	土師器	高台付皿	宗	体部外面	横位
112	グリット	第128図12	土師器	杯	庄	底部内外面	
113	グリット	第128図13	土師器	杯	庄	底部内外面	
114	グリット	第128図14	土師器	杯	庄	底部内面	
115	グリット	第128図15	土師器	杯	庄	底部内面	
116	グリット	第128図16	土師器	杯	庄	体部外面	横位
117	グリット	第128図17	土師器	杯	庄	体部外面	
118	グリット	第128図18	土師器	高台付杯	庄	底部内面	
119	グリット	第128図19	土師器	杯	庄	底部外面	
120	グリット	第128図20	土師器	杯	庄	底部外面	
121	グリット	第128図21	土師器	杯	庄カ	底部外面	
122	グリット	第128図22	土師器	杯	庄	底部外面	
123	グリット	第128図23	土師器	杯	庄カ	底部外面	
124	グリット	第128図24	土師器	杯	宗	体部外面	正位
125	グリット	第128図25	土師器	杯	宗カ	体部外面	横位
126	グリット	第128図26	土師器	杯	宗	底部内外面	
127	グリット	第128図27	土師器	杯	宗	底部内外面	
128	グリット	第128図28	土師器	杯	宗	底部内外面	
129	グリット	第128図29	土師器	杯	宗カ	体部外面	
130	グリット	第128図30	土師器	杯	不明	体部外面	
131	グリット	第128図31	土師器	杯	宗	底部外面	
132	グリット	第128図32	土師器	杯	宗カ	底部内面	
133	グリット	第128図33	土師器	杯	酒杯	底部内面	
134	グリット	第128図34	土師器	杯	不明	底部外面	
135	グリット	第128図35	土師器	杯	不明・宗	底部内外面	
136	グリット	第128図36	土師器	杯	庄カ	底部外面	
137	グリット	第128図37	土師器	杯	庄カ・不明	底部内外面	
138	グリット	第128図38	土師器	杯	不明	底部内面	



「庄」

A 1  
(SI 465 44)

A 2  
(SI 282 35)

A 3  
(SI 551 4)

B  
(SI 551 25)

C 1  
(SI 465 32)

C 2  
(SI 282 35)

D 1  
(SI 465 68)

D 2  
(SI 282 37)

E  
(SI 465 95)

「生万」

「宗」

A 1  
(SI 465 4)

A 2  
(SI 465 10)

B  
(グリット 29.66)

C  
(SI 465 88)

A  
(SI 283 17)

B  
(SI 283 13)

第138図 主要な文字資料の字形

墨書土器の字体と変遷（第136～138図、第17表、図版48～50）

本遺跡から出土した墨書土器の文字種類は少なく、総数137点のうち、「庄」あるいは「庄」と想定されるものが41点、「宗」あるいは「宗」と思われるもの40点、「生万」7点で、他は「酒杯」・「井」・「上」などが数点みられるのみである。

「庄」の字体としては大きく5種類に分けられる。「庄」A類は比較的大きな文字を書く特徴があり、4画目の横棒が部首まだれの左側に突き出ている。記載位置は底部となる。詳細にみていくと、A 1は4画目の横棒の上に5画目が突き出していないのに対し、A 2・A 3は突き出て6画目の横棒の右側に点がつくいわゆる「ム」に近い字形となる。A 3は筆の運びが繊細で、A 1・A 2に比べて細身となる。起筆と終筆が明確な書体である。B・C類はA類よりやや小さく書かれる。B類はSI-551のみにみられる書体で、「土」の最後の画が「つ」のような字形になる。記載位置は、底部2点、体部1点である。C 1とC 2の違いは、4画目の横棒がまだれを切って伸びているかいないかである。C 1はA 1やA 2に類似し、C 2は「土」が楷書体となる。記載位置は、C 1が底部内面に多く、C 2はすべて体部外面に記されるように、対照的な記載位置を示す。Dはさらに小さな文字となり、記載位置は底部の内外面がほとんどである。D 1は「土」の字形がB類と類似するのに対し、D 2はC 2に近い。E類はSI-465に2点みられ、判読が難しい字形であるが、1画目がないまだれと「土」の模倣形と推測して「庄」と判断した。文字を習熟した書き手によるものではなかろう。「庄」の文字は9世紀前半から中葉までに限定され、字形による変遷は明確ではないが、傾向としてはA・B類からC・D類、すなわち大きな文字から小さな文字へと変化しているようである。

一方「宗」にもいくつかのバリエーションがみられるが、「宀」の両側が「示」を囲むように下まで伸びる特徴がある。また、第136図にあげた40字のうち18文字、すなわち31個体のうち9個体が底部内外面に記載される。このような記載方法は、「庄」に比して「宗」が圧倒的に多い。「宗」A 1類は、「庄」A 3に筆致が類似し、細身の文字で起筆と終筆が明らかな字形である。ただ、A 1とA 2は習熟度に違いがあるようであり、A 2の書き手はA 1の字形を模倣した可能性がある。B・C類は、「示」の字形がA類とは異なり、「庄」のC類に近くなる。BとCの相違点は、1画目の点の有無のみでありあまり違いが認めら

れないが、CがBの模倣形と思われる。年代的には「庄」同様9世紀前半から中葉のみにみられる。A1類は9世紀前半のみ、B・C類は9世紀前半から中葉まで確認されるが、傾向としてはAからB・Cへと推移していくようである。

「生万」は9世紀後半のみにみられる文字で、体部外面に正位で記されるのがほとんどであるが、SI-283の18は倒位、SI-368の9は唯一皿で、体部内外面に書かれる。A類は「生」と「万」の2文字で表現されるが、B類は「生」の最後の画と「万」の1画目が同一となる合わせ文字の書体を採る。SI-283には線刻の合わせ文字が含まれる。A・B類とも同一の竪穴住居跡に混在しているが、SI-283に比してSI-368の方がやや先行する時期と思われることから、AからBへと変化する傾向が伺われる。

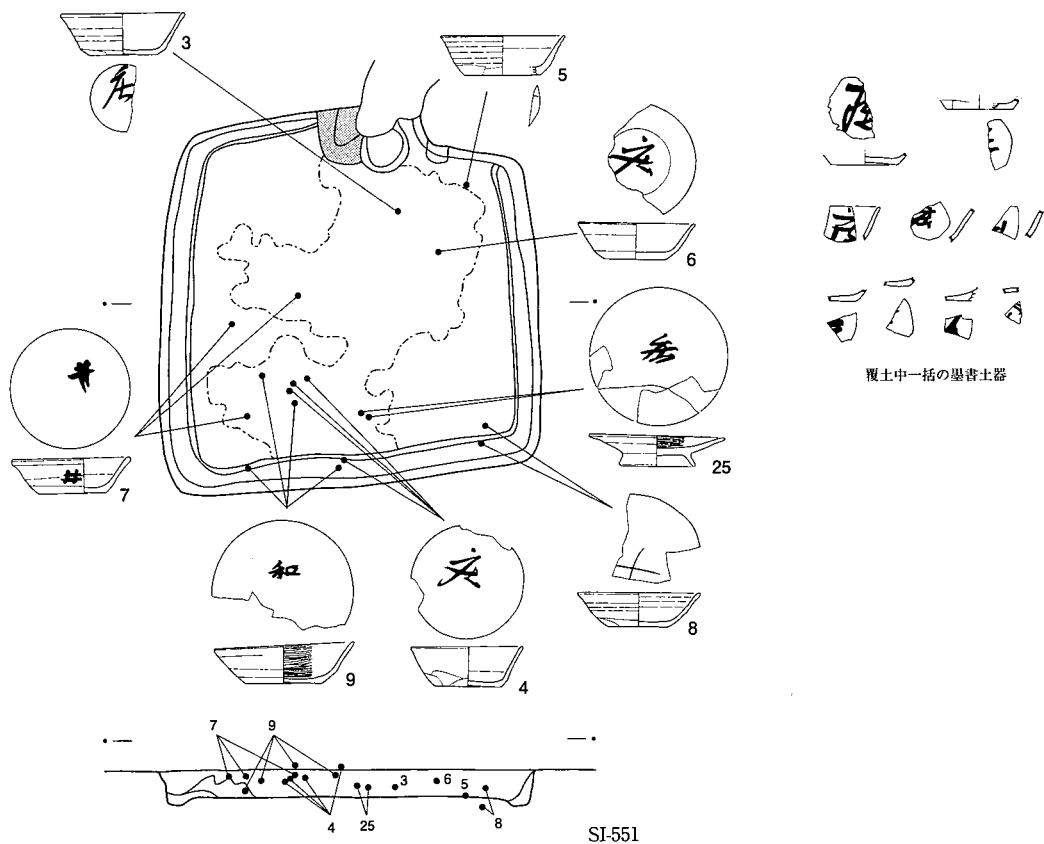
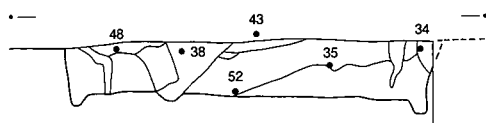
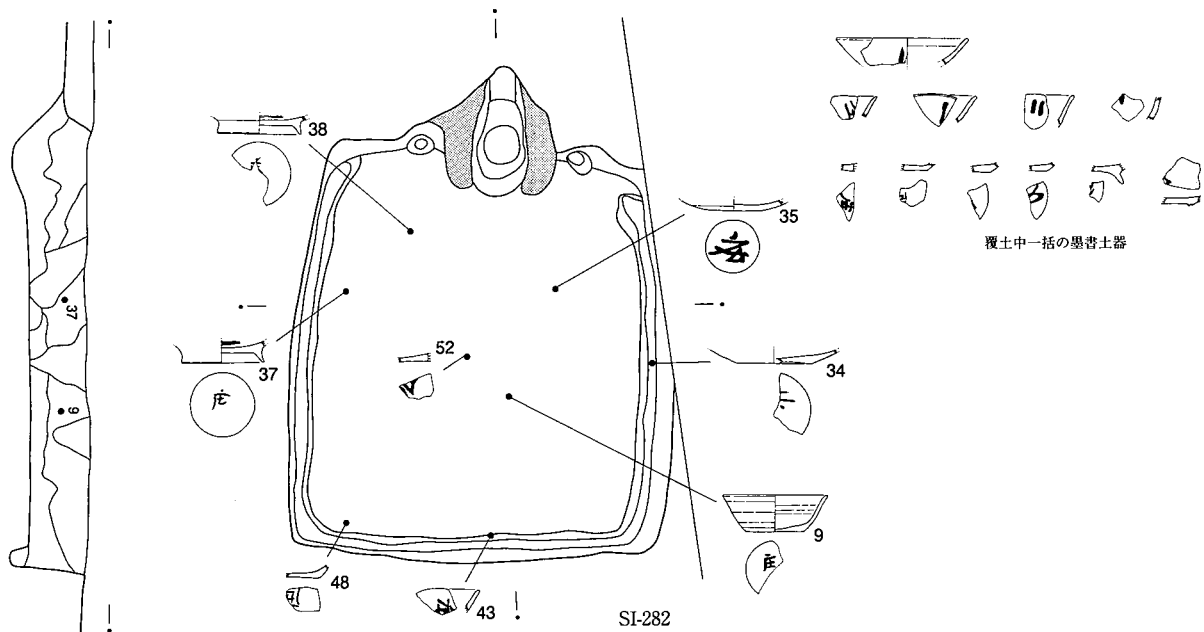
#### 出土状況（第140～142図）

まず、「庄」の文字を多く出土したSI-551とSI-282を検討してみる。SI-282は不明な文字を除くと「庄」の墨書のみで構成され、出土状況の明らかな8点の墨書土器は、52の小片以外すべて覆土中層から上層にかけての出土である。出土地点の数値記録がない小片も覆土中からの出土と考えられる。本住居は人為的に埋め戻された可能性が想定できることと考え合わせると、これらの墨書土器は、竪穴住居を埋めた際に混入したものかあるいは埋めた竪穴住居が浅い窪地状態になった場所に廃棄されたことが考えられる。いずれにしても、この竪穴住居個別で「庄」の墨書土器を使用していたとは思われない。SI-551はほとんどが「庄」で、他に「井」・「和」がみられる。これらの出土状況を見ると、SI-282同様覆土中層から上層にかけてがほとんどであることから、墨書土器の廃棄状況はSI-282と同様のことが想定される。

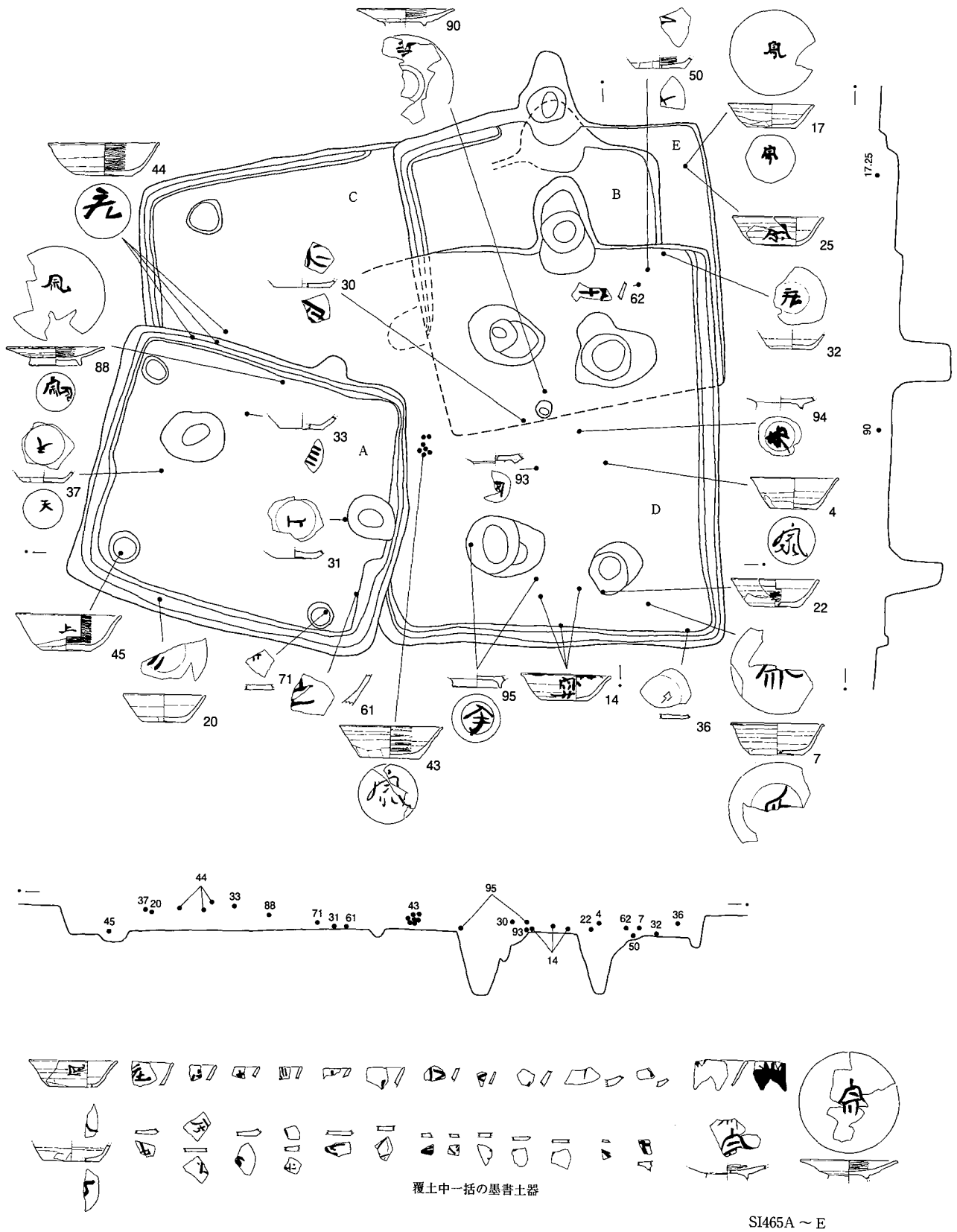
一方、「生万」が主体となるSI-283とSI-368は様相が異なってくる。SI-283は判読不能の1点を除き、3点の「生万」は覆土中層以下で、13は床面直上の出土状況である。なお、「庄」と思われる25は覆土中からの出土であり、南側で重複するSI-282からの混入の可能性が高い。また、SI-368も同様で、3点の「生万」は床面直上あるいはカマド内から出土している。北西コーナーから出土している「秋」は遺構確認面からの検出であり、本住居に伴うものではなかろう。このような状況からは、「生万」はそれぞれの住居に伴うものであり、個別の家単位で使用されたものがそのまま廃棄されたものと考えられる。

「宗」を主体とするSI-465は、9世紀前半から中葉までの間に拡張あるいは建て替えが繰り返された結果5軒の竪穴住居が複雑に重複しており、覆土中層から上層にかけての墨書土器が多く、混入した可能性も考えられるため、明確に帰属を捉えることは難しいが、平面的な分布から各住居の墨書土器を検討してみる。この住居群で最も新しい時期の構築と思われるA住居からは他の住居にはみられない「上」や「天」が出土し、「上」2点はいずれも床面直上からの検出である。この状況は、先述した「生万」と類似した出土状況であり、住居内での個別的な使用と思われる。他の4軒からは「宗」と「庄」が出土しているが、傾向としては、「庄」が床面直上から出土するものもみられるが、「宗」はほとんど覆土中からの出土である。この出土状況は、先述したSI-282やSI-551と同様であり、これらの住居単位で使用された可能性は低いと思われる。

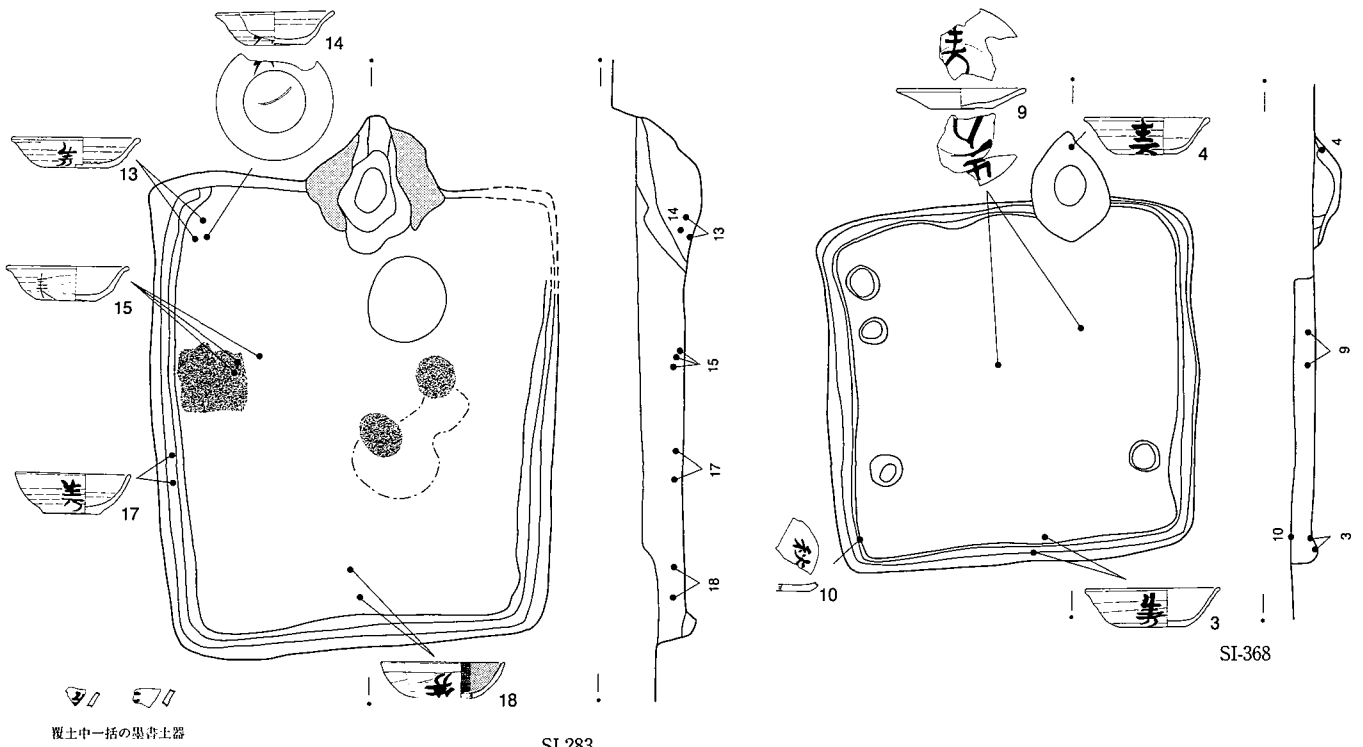
以上、比較的多くの墨書土器を出土した竪穴住居の出土状況を検討してみた結果、墨書土器の文字内容によって個別の住居に伴うものと住居廃絶後に混入したもの、すなわち個別の住居単位で完結しないものに分けられることが明らかとなった。このことは、9世紀後半にみられる「生万」・「上」・「天」と9世紀前半から中葉に限定される「庄」・「宗」の使用目的の違いに起因していると思われ、前者は家単位、後者は集落全体に関わる墨書土器として理解しておきたい。



第140図 文字資料出土状況(1)



第141図 文字資料出土状況(2)



第142図 文字資料出土状況(3)

### 3 遺跡の性格

調査が集落全体に及んでいないため、明確な性格付けは危険性を孕んでいるが、総数41点にも及ぶ多量の「庄」墨書土器の存在は大きな意味を呈示しており、いわゆる初期荘園を想起させるものである。天野努氏は、本遺跡の中世編の報告書のなかで、13世紀後半頃の掘立柱建物群を矢木郷に所在する「地頭八木式部大夫胤家」の居館と推定し、矢木郷は、康永4（1345）年3月の「造宮所役注文」に「矢木庄役所」とみえることから14世紀中頃にはすでに荘園化されていたことを想定している<sup>1)</sup>。在地有力者の居館を荘所機能を伴った建物とするあり方は、東日本の中世の荘園では比較的多くみられるもので、中世の本遺跡は、まさしく在地有力者が主導する典型的な荘園となるであろう。ところが、本書で扱った奈良・平安時代の集落は、荘園という性格としては共通するものの、4世紀ほどの空白期間があり、まったく別の荘園、すなわち初期荘園と中世荘園に分けられ、相関関係はなかったものと思われる。それでは、初期荘園としての本遺跡はどのような様相であったのであろうか。

宇野隆夫氏によると、古代から中世にかけての主要な荘園遺跡・関連遺跡のうち、「庄」あるいは荘園に関連する文字資料を出土した遺跡は32か所あり、民衆の経営拠点型、在地有力者層主導型、有力寺社主導型、民衆の屋敷・在地有力者の居館型の4つの類型に分けている<sup>2)</sup>。本遺跡がどの類型に入るかは全容が明らかでない現状では明言を避けざるおえないが、以下でその可能性を考えてみたい。

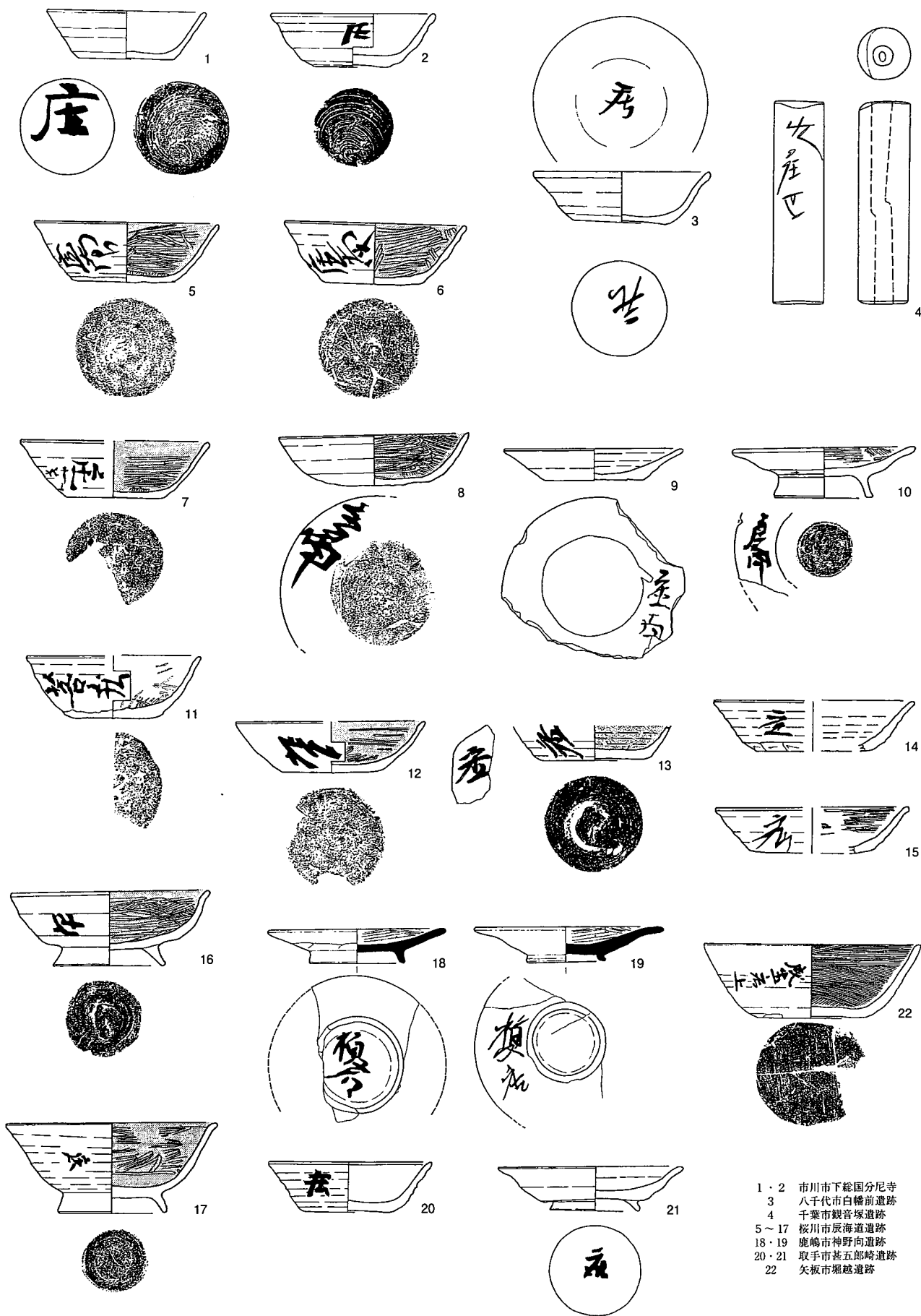
初期荘園としては、東大寺領加賀国横江荘である石川県上荒尾遺跡や東大寺領越中国丈部荘と推定されている福井県じょうべのま遺跡など、東大寺領の荘園遺跡が広がる北陸地方がよく知られている。一方、関東ではこれまで明らかな初期荘園遺跡の存在はあまり知られていなかったが、近年いくつかの遺跡が目されるようになった。

栃木県矢板市堀越遺跡では、平安時代の竪穴住居跡41軒、掘立柱建物16棟などが検出された。時期的には9世紀中葉から10世紀前半までの比較的短期間に形成され、9世紀後半の時期に「成生庄 上」の墨書土器が出土している。他に、猿投窯の灰釉陶器や緑釉陶器、中国越州窯産の水注もみられる。津野仁氏は、この遺跡の開発主体者として、「実力的郷長の後裔を含む実質的な地域支配や山間地の荒廃田・空闲地の開発を行えた者」とし、さらに越州窯産水注の出土から「中央との関連を持ち、消費財などの独自の交易ルートを持った者」としている<sup>3)</sup>。また、茨城県西茨城郡瀬町辰海道遺跡は弥生時代から継続する大規模な集落であるが、8世紀後葉から「庄」の墨書土器が出土し始めており、この頃から荘園遺跡として機能していたことが想定されている。この遺跡では、「庄」以外にも「善庄」・「庄南」・「西宅」などの墨書土器もみられ、非常に多くの灰釉陶器・緑釉陶器が検出されている。集落内には鍛冶や漆工・紡織などに関連する遺構や遺物も認められており、荘園経営に関わる手工業も行われていた。辰海道遺跡は、9世紀後半以降も存続し、むしろ拡大傾向にある。越田真太郎氏は、荘園の開発主導者として、妙法寺にある薬師三尊像の製作年代等を検討し、「郡寺に準ずる機能を持つ寺院およびその建立者が隣接する荘園とまったく無関係であるとは想定しづらい。むしろ、積極的に関係を考え、妙法寺前身寺院を建立し、外護した人物こそ荘園の開発・経営主導者ととらえたい」としている<sup>4)</sup>。

千葉県内で初期荘園として捉えられた遺跡は現在まで確認されていないが、県内において「庄」の墨書土器を出土した遺跡は、本遺跡以外に市川市下総国分尼寺と八千代市白幡前遺跡の2遺跡があげられる。他に、千葉市観音塚遺跡からは、「九カ庄世カ」と線刻された管玉が出土している。この遺跡では墨書土器もみられ、その中に「在」と報告されたものが含まれている。字形をみると、明確ではないが「庄」と読める可能性もある。ただ、いずれも1点のみの出土であり、本遺跡のようにこれほど多量の「庄」と書かれた墨書土器が出土した例は、県内のみならず東国に広げてもみられない量である。多量に検出された「庄」の意味するものは、まさしく本遺跡が初期荘園として機能していたことを示している。本遺跡の集落動向をみると、縄文時代の集落が形成された後は、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物はなく、長い空白期間を置いて8世紀後半頃に突如として集落が形成され、10世紀初頭頃に終息する比較的短期間の集落となる特徴がある。「庄」・「宗」の墨書土器が9世紀前半から中葉にみられ、9世紀後半を主体とした緑釉

第18表 関東地方の文字資料「庄」出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	主な遺構	主な遺物	主な文字資料
1	思井堀ノ内遺跡	千葉県流山市	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土器焼成遺構・鍛冶炉・祭祀遺構	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・羽口・土錘・砥石	庄・宗・酒杯
2	下総国分尼寺	千葉県市川市	寺域区画・伽藍地区画・尼坊跡・付属雑舎	二彩小壺・土師器・須恵器・瓦	庄・尼寺・佛・窪苑・鎚 正麻呂
3	白幡前遺跡	千葉県八千代市	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	三彩小壺・灰釉陶器・土師器・須恵器・瓦塔・鉄製品	庄・生・生堤・継・入・圓・廓・饒・豊・牧万・丈部人足召代
4	観音山遺跡	千葉県千葉市	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・和同開珎・羽口・土錘・砥石	九カ庄世カ・子驛口・在カ
5	辰海道遺跡	茨城県桜川市(旧岩瀬町)	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・鍛冶工房跡・溝跡	緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・須恵器・円面硯・鉄製品・鉄滓・平瓦	庄・庄南・善庄・飯岡東家・井刀・新室・西宅・御屋万得・井上
5	神野向遺跡(昭和61・62年度)	茨城県鹿嶋市	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・竪穴状遺構	土師器・須恵器・銅印	榎庄・鹿厨・神宮・館・介・東殿・榎万・田倍
6	甚五郎崎遺跡	茨城県取手市	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器	庄・山本・得
7	堀越遺跡	栃木県矢板市	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯青磁・土師器・須恵器	成生庄 上・成生・南上



- 1・2 市川市下総国分尼寺
- 3 八千代市白幡前遺跡
- 4 千葉市観音塚遺跡
- 5～17 桜川市辰海道遺跡
- 18・19 鹿嶋市神野向遺跡
- 20・21 取手市基五郎崎遺跡
- 22 矢板市堀越遺跡

第143図 関東地方の「庄」文字資料

陶器や灰釉陶器、小鍛治跡や土器焼成遺構にみられる生産活動、祭祀遺構にみられる宗教活動など、短期間ではあるが豊富な内容を有している。9世紀後半には「庄」墨書土器が姿を消すが、この時期にはそれまで確認されていない施釉陶器にみられる流通や生産活動・宗教活動が具現化しており、荘園機能としての本格化はむしろ9世紀後半段階にあるのではないと思われる。

宇野隆夫氏は荘園遺跡の諸相として、類型化とともに生産と流通及び宗教をあげている。本遺跡はまさしくこのような諸相を含んだ荘園遺跡として捉えることができよう。また、同氏の呈示した類型のどれに相当するかは調査が全体に及んでいないため明確ではないが、出土した遺物のなかで注目されるのが平瓦の存在である。これらの瓦は本遺跡から北西6.5kmに所在する流山廃寺から供給されたものと思われる。流山廃寺は一部調査されたものの土取りにより消滅しているが、辻史郎氏は、一堂程度の瓦葺き建物で構成される小規模な寺跡と想定し、出土瓦が下総国分寺創建に関わる瓦窯から供給されていることから、同国分寺との密接なつながりの可能性を指摘している<sup>5)</sup>。また、観音塚遺跡では、千葉寺系の屋瓦が多く出土し、多量の緑釉陶器や灰釉陶器の出土とともに製鉄関連遺物もみつまっている。遺跡の様相としては思井堀ノ内遺跡と類似するものが認められる。観音塚遺跡は、「子驛□」の墨書土器の出土から駅家関連遺跡として報告されている<sup>6)</sup>が、遺跡の様相からみると、初期荘園の荘所という可能性も考えられるのではなかろうか。

このように、荘園関係の文字資料とともに出土する国分寺や郡寺クラスの古代瓦の存在からは、宇野氏の呈示した分類のなかの有力寺社主導型という範疇に含まれる初期荘園となる可能性が高い。下総国分尼寺からは2点の「庄」が出土しており、墨書土器の年代は、8世紀末から9世紀初頭と9世紀後半に相当する。この年代は、思井堀ノ内遺跡の存続時期と一致する。すなわち、本遺跡が8世紀後半頃に突如として営みを開始する背景には、荘園開発を主導していった下総国分寺の関与が強かった可能性が高いと思われる。

あくまで限定された調査範囲のため断定できる状況ではないが、調査の進捗によってより具体的な様相が明らかになった時点で再度検討していきたい。

#### 注

- 1) 天野 努 2006 『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1 -流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)-』 財団法人千葉県教育振興財団
- 2) 宇野隆夫 2001 『荘園の考古学』 青木書店
- 3) 津野 仁 2007 「下野国成生庄と開発 -栃木県堀越遺跡をめぐって-」 『古代文化』 第59巻第2号 財団法人古代学協会
- 4) 越田真太郎 2007 「常陸国の地域開発 -真壁郡の集落の展開-」 3) に同じ
- 5) 辻 史郎 1998 「流山廃寺」 『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』 千葉県
- 6) 白井久美子 2004 『千葉市観音塚遺跡・地藏山遺跡(3) -都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV-』 財団法人千葉県文化財センター



# 写 真 图 版



遺跡周辺航空写真（約1/10,000 昭和42年撮影）

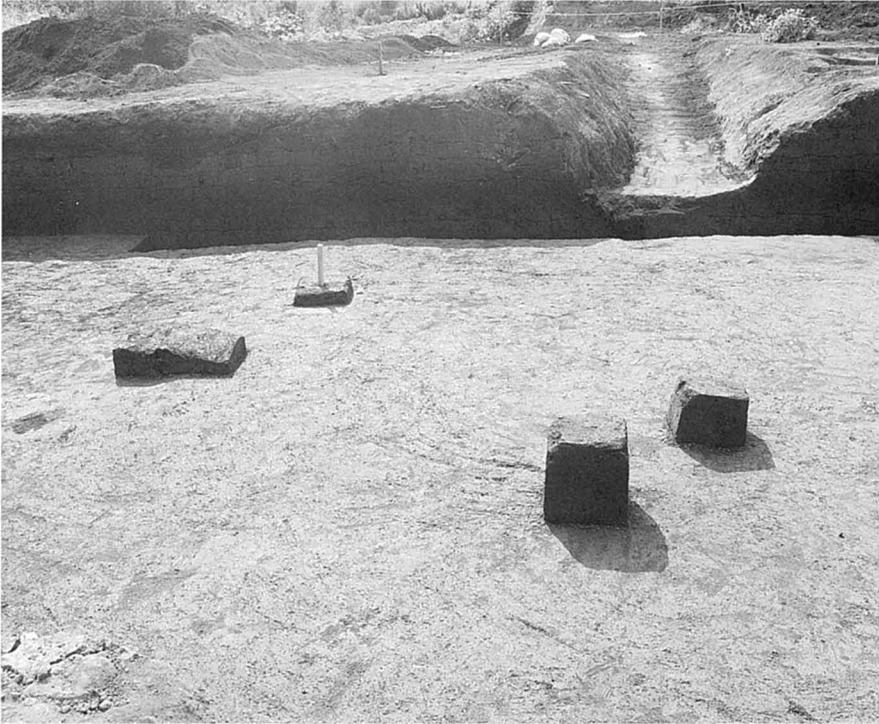


遺跡全景





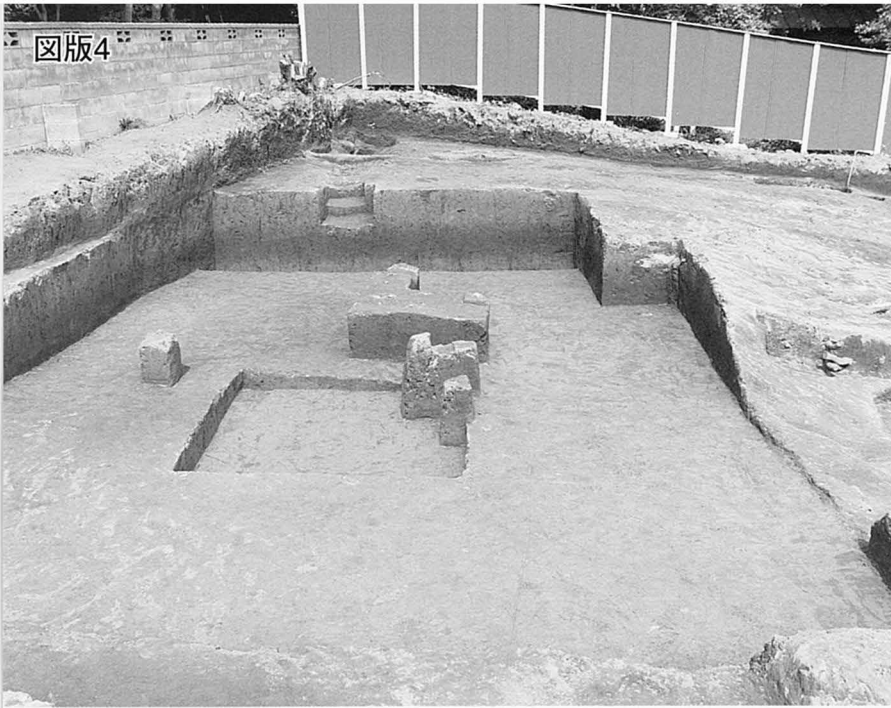
第1ブロック



第3ブロック



第4ブロック



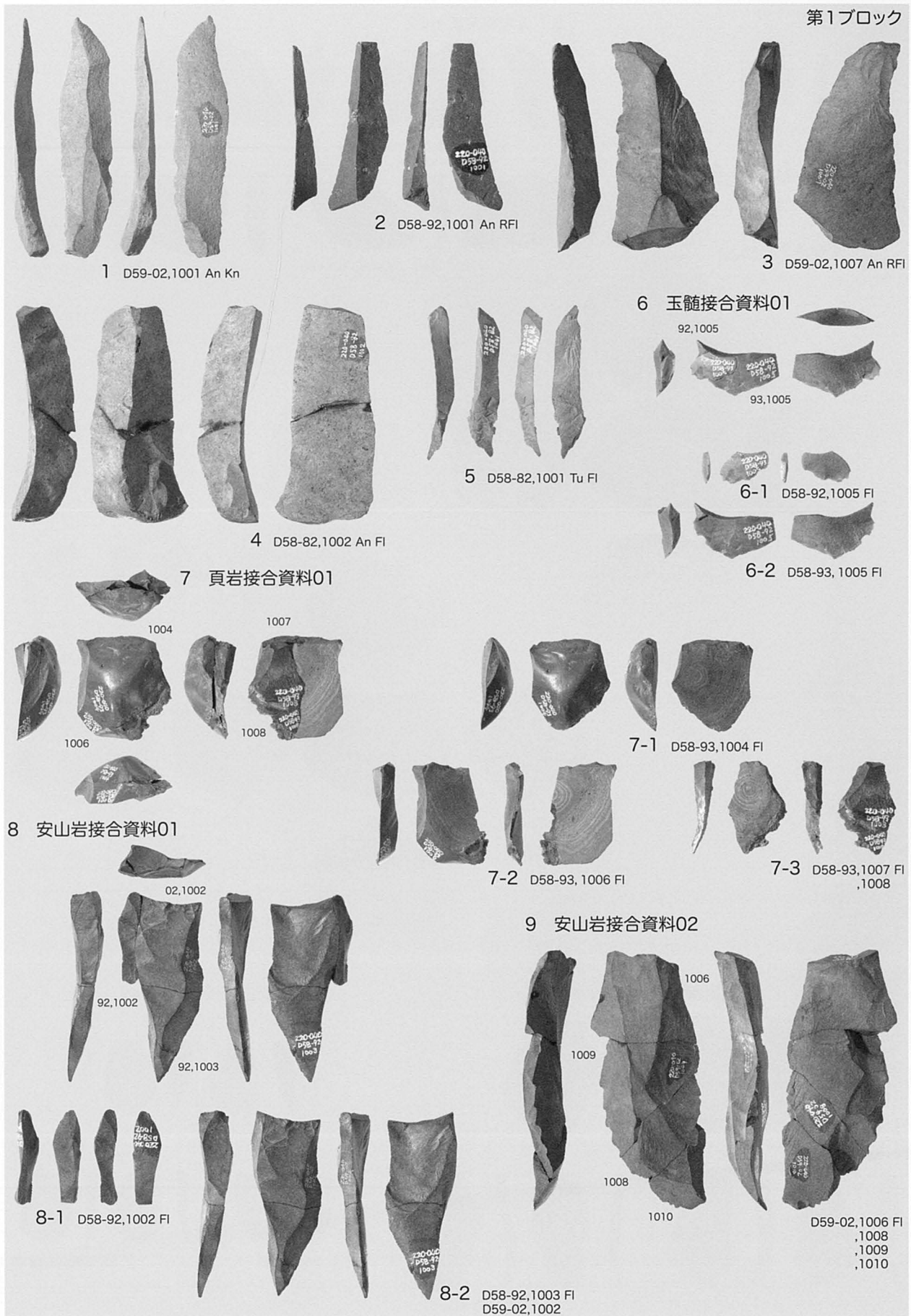
第5ブロック



第6～8ブロック



第9ブロック



旧石器時代石器(1)



第2ブロック



1 D60-35,1012 Cc Kn



2 D60-35,1019 Sh Kn

3 頁岩接合資料02



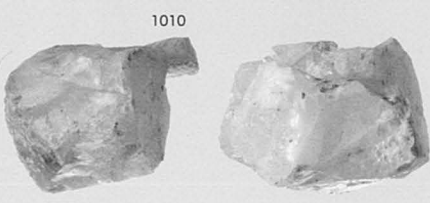
1013  
1007



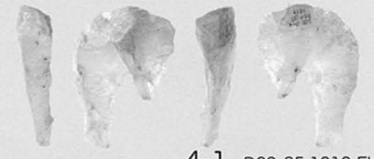
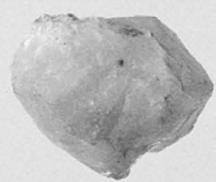
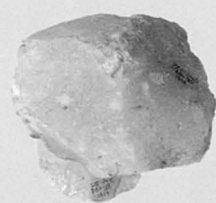
3-1 D60-35, 1013 FI

3-2 D60-35,1007 FI

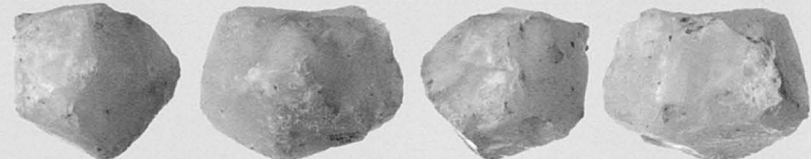
4 玉髄接合資料02



1010  
1006



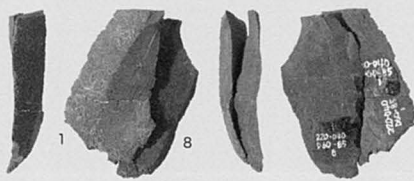
4-1 D60-35,1010 FI



4-2 D60-35,1006 Co

第3ブロック

1 安山岩接合資料03



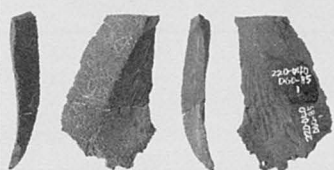
1 8

2 安山岩接合資料04



14

16



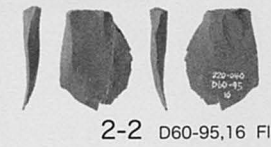
1-1 D60-85,1 FI



1-2 D60-85,8 FI

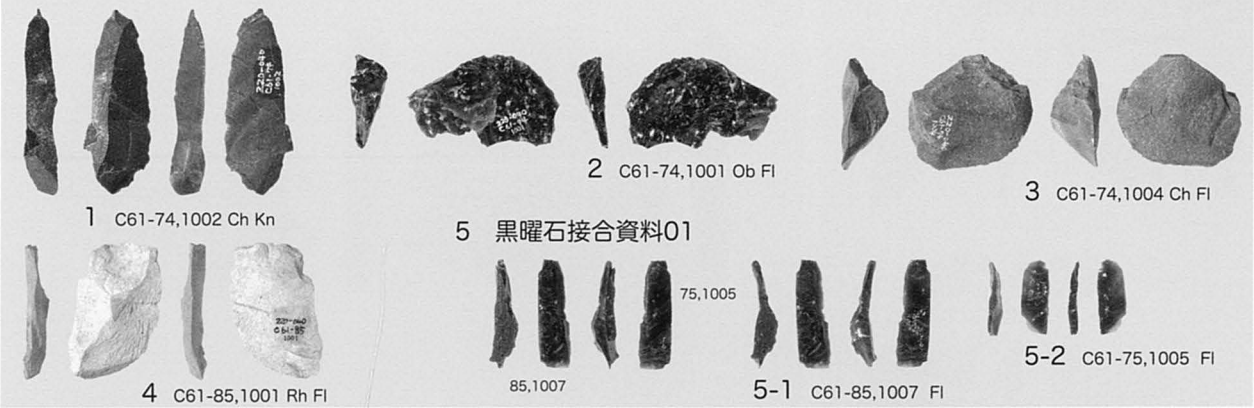


2-1 D60-95,14 FI

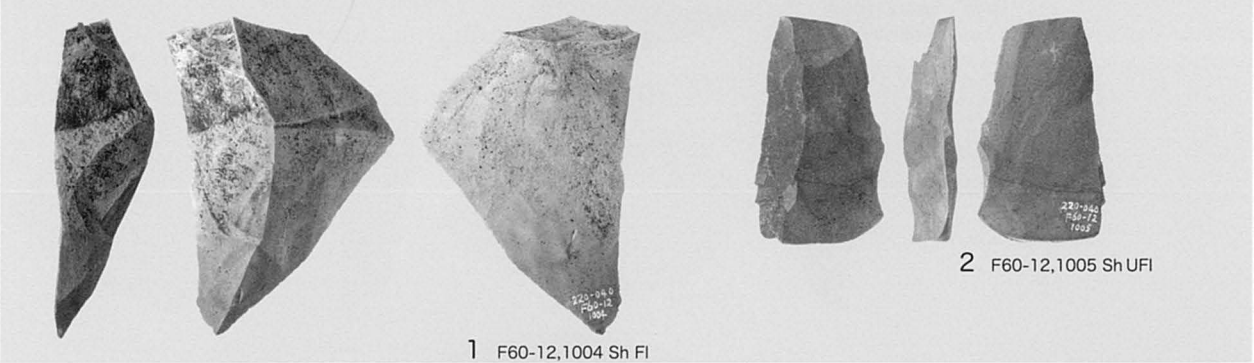


2-2 D60-95,16 FI

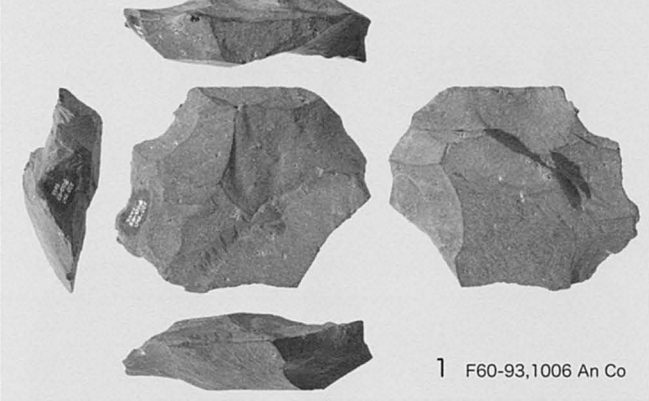
第4ブロック



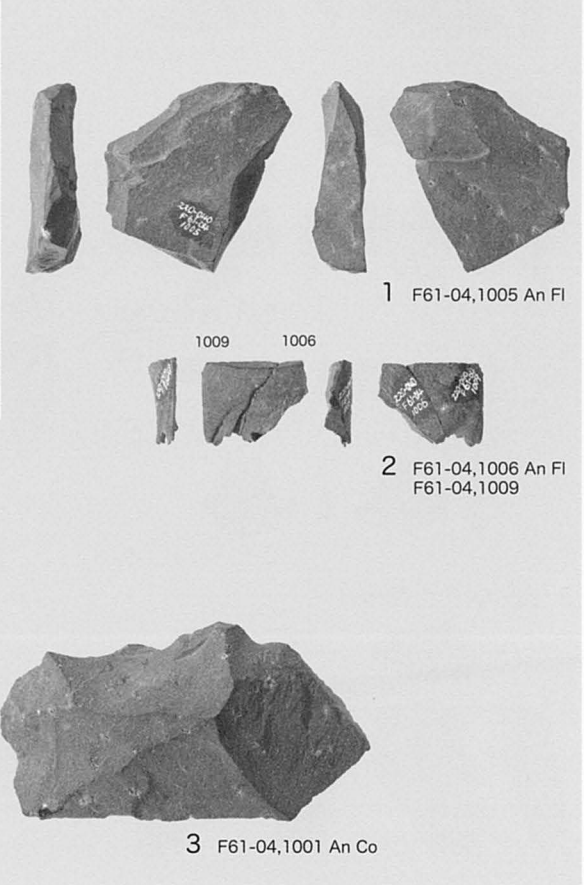
第5ブロック



第6ブロック



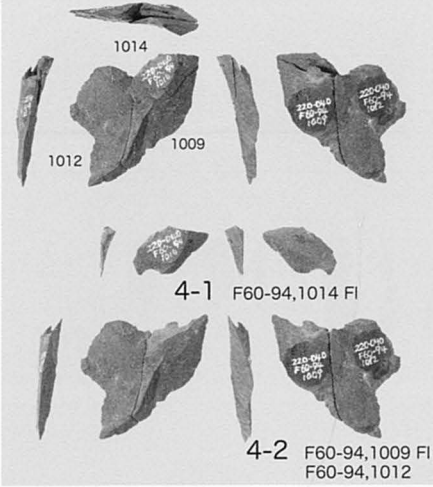
第7ブロック-1



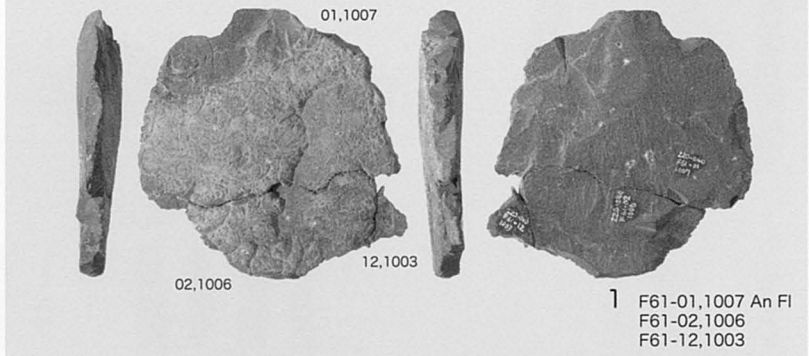
旧石器時代石器(3)



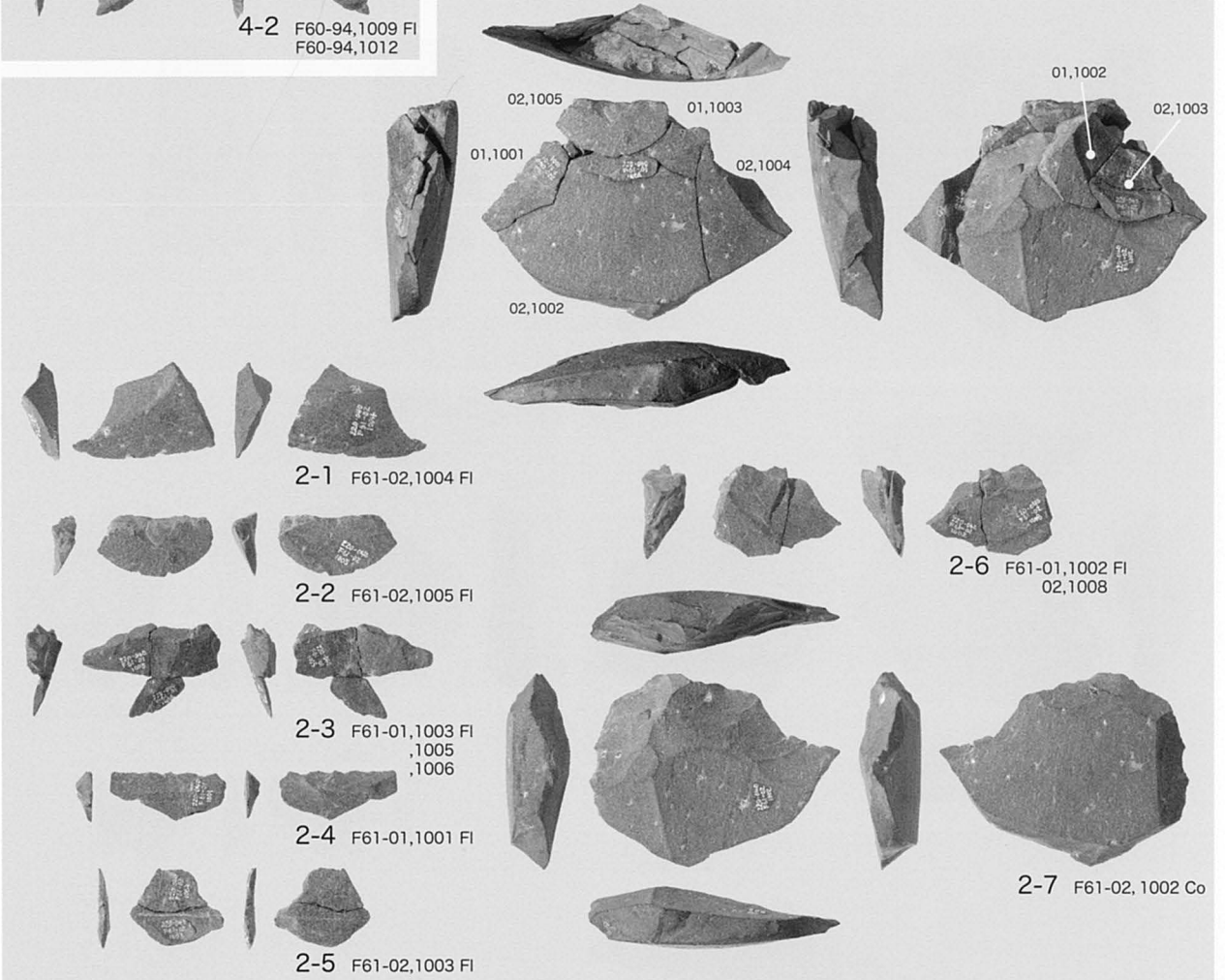
第7ブロック-2  
4 安山岩接合資料05



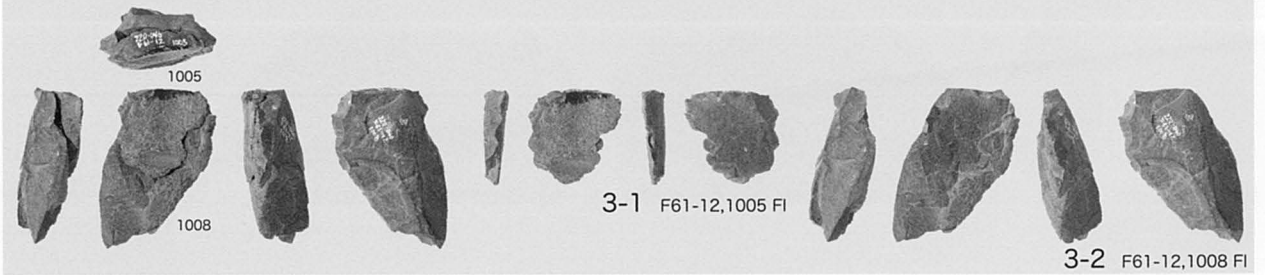
第8ブロック-1



2 安山岩接合資料06

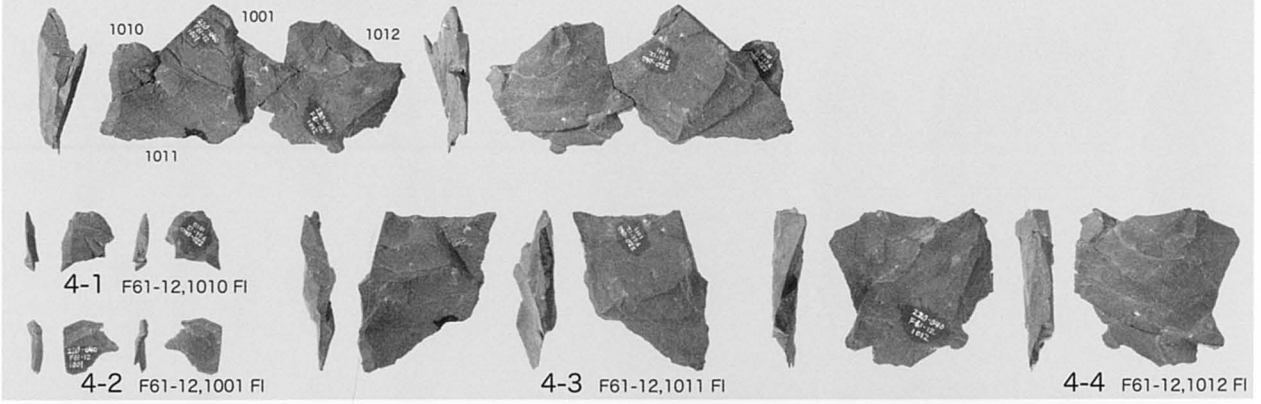


3 安山岩接合資料07

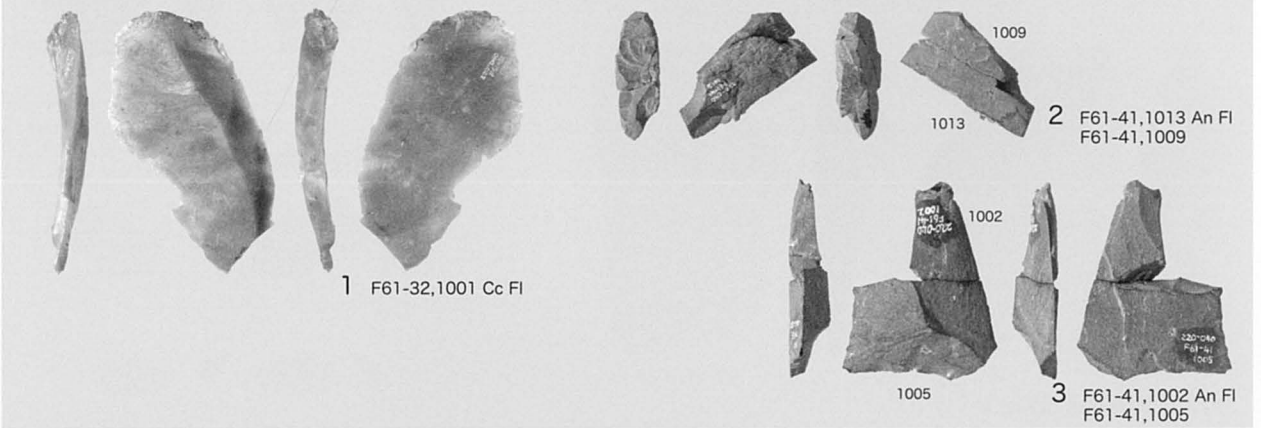


第8ブロック-2

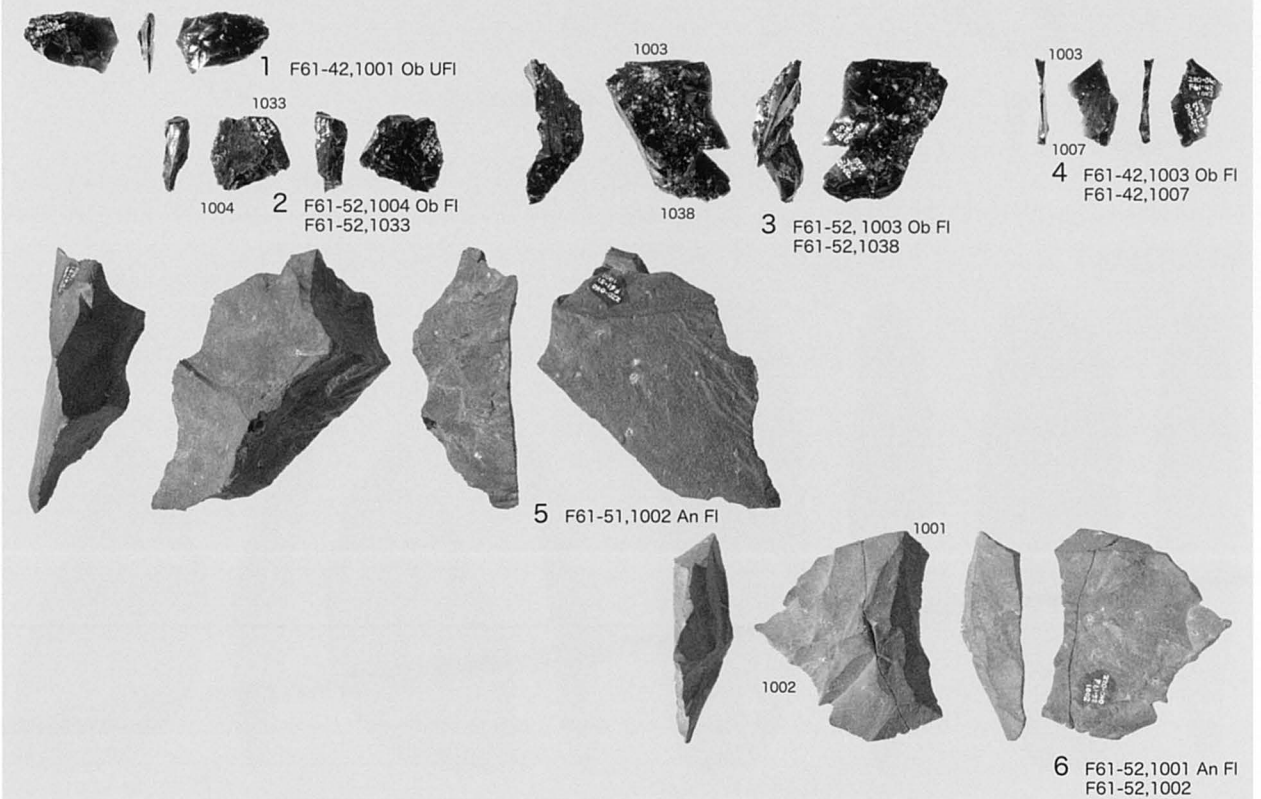
4 安山岩接合資料08



第9ブロック



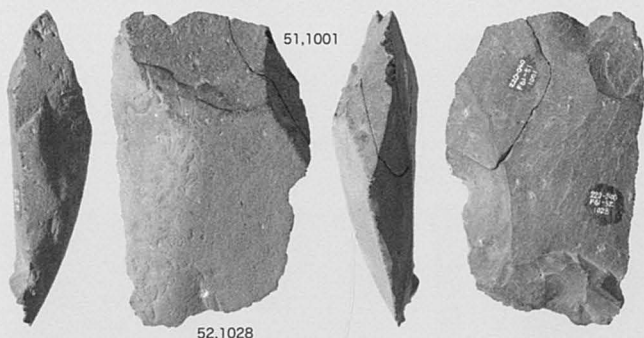
第10ブロック-1



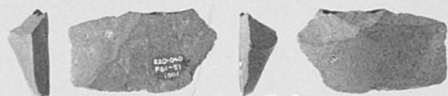
旧石器時代石器(5)

第10ブロック-2

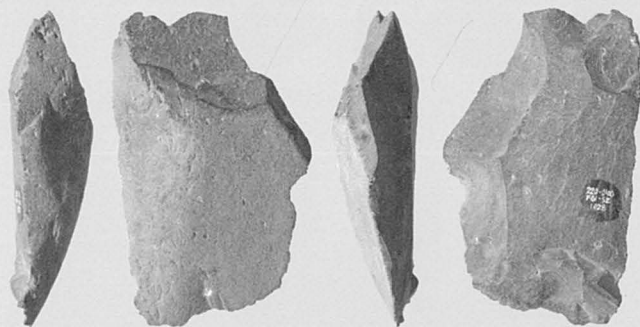
7 安山岩接合資料09



52,1028



7-1 F61-51,1001 FI



7-2 F61-52,1028 Co

10 玉髄接合資料03



1016

1018



10-1 F61-52,1016 FI

10-2 F61-52,1018 FI

8 安山岩接合資料10



1024

1025



8-1 F61-52,1025 Ch



8-2 F61-52,1024 FI

9 安山岩接合資料11



1012

1009

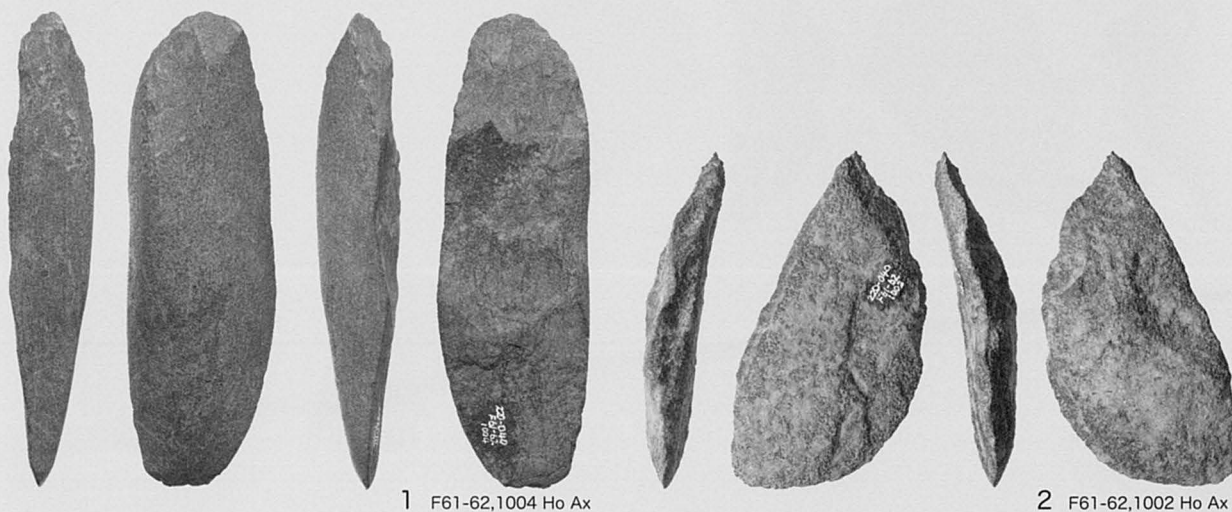


9-1 F61-52,1012 FI



9-2 F61-52,1009 FI

第11ブロック-1

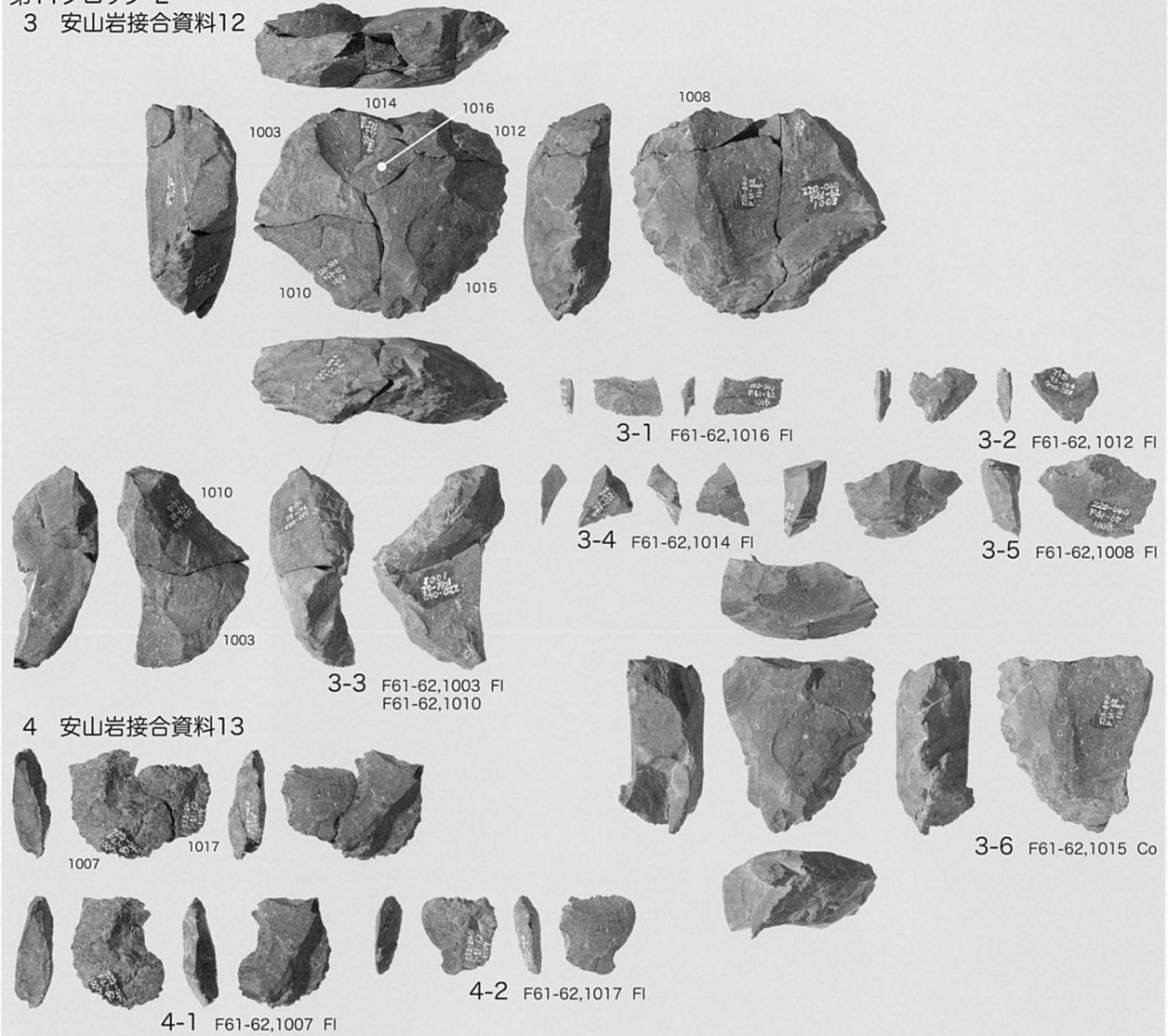


1 F61-62,1004 Ho Ax

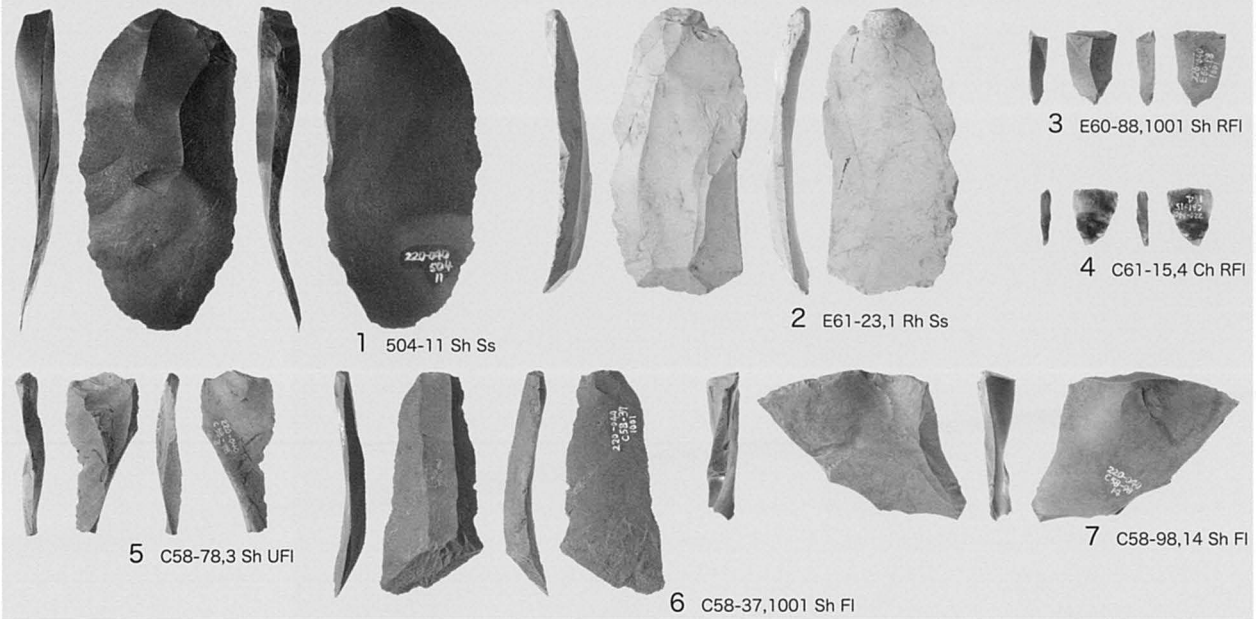
2 F61-62,1002 Ho Ax



第11ブロック-2  
3 安山岩接合資料12



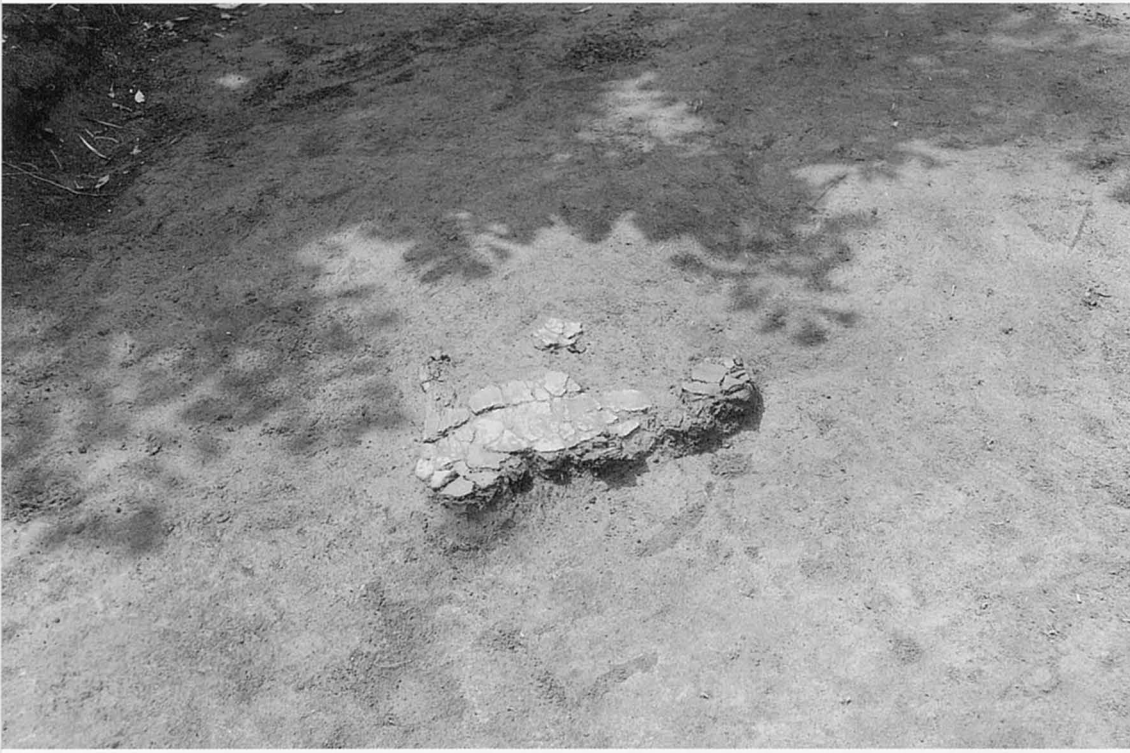
グリッド出土石器



旧石器時代石器(7)



SI-440



SI-440  
遺物出土状況



SI-457





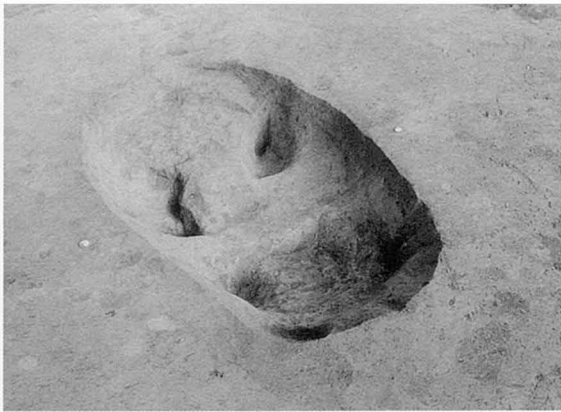
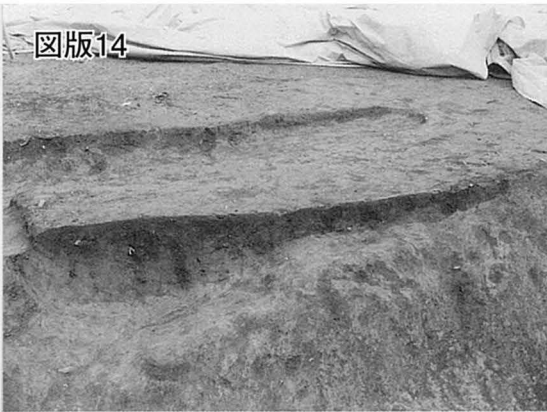
SI-463



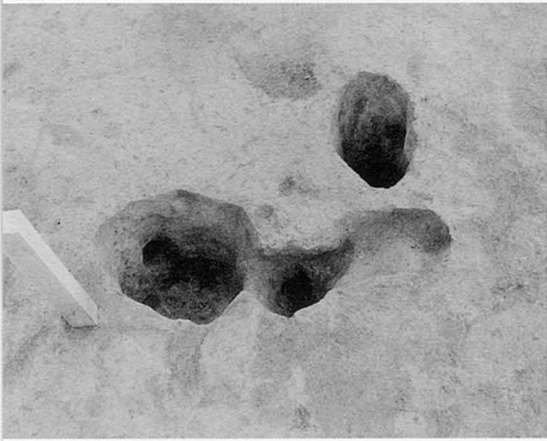
SI-464



SI-559



(左) SK-294  
(右) SK-298



(左) SK-300  
(右) SK-323



(左) SK-324  
(右) SK-360·364



(左) SK-367  
(右) SK-369



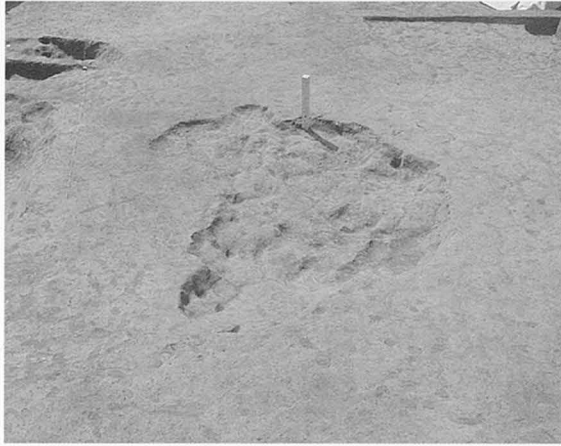
(左) SK-422  
(右) SK-424



(左) SK-431  
(右) SK-432·433·434



(左) SK-435  
(右) SK-458



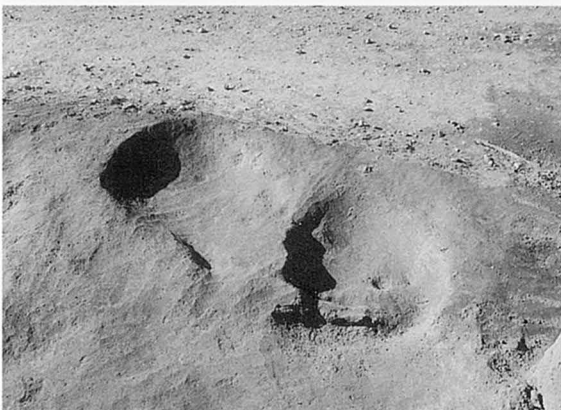
(左) SK-466  
(右) SK-467



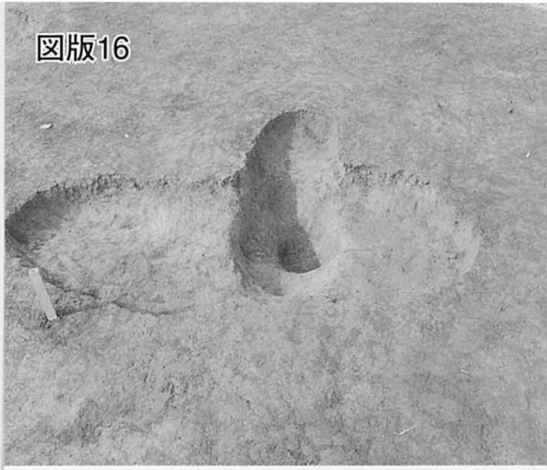
(左) SK-474  
(右) SK-475B·C



(左) SK-500  
(右) SK-557







(左) SK-558  
(右) SK-560



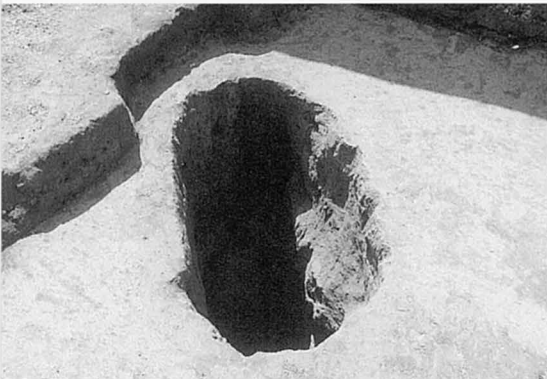
(左) SK-030  
(右) SK-031



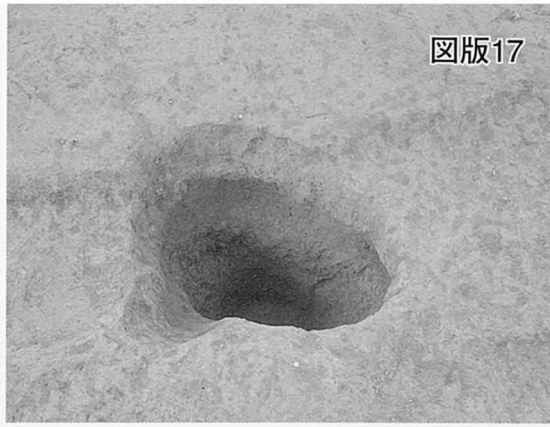
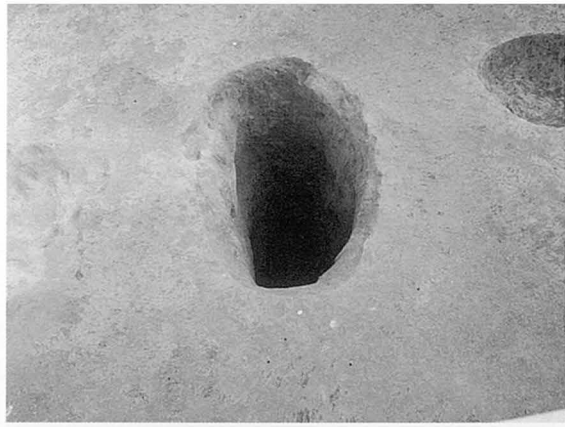
(左) SK-207  
(右) SK-296



(左) SK-297  
(右) SK-299



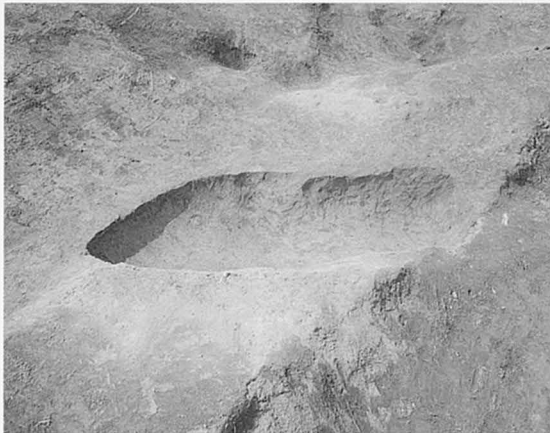
(左) SK-426  
(右) SK-428



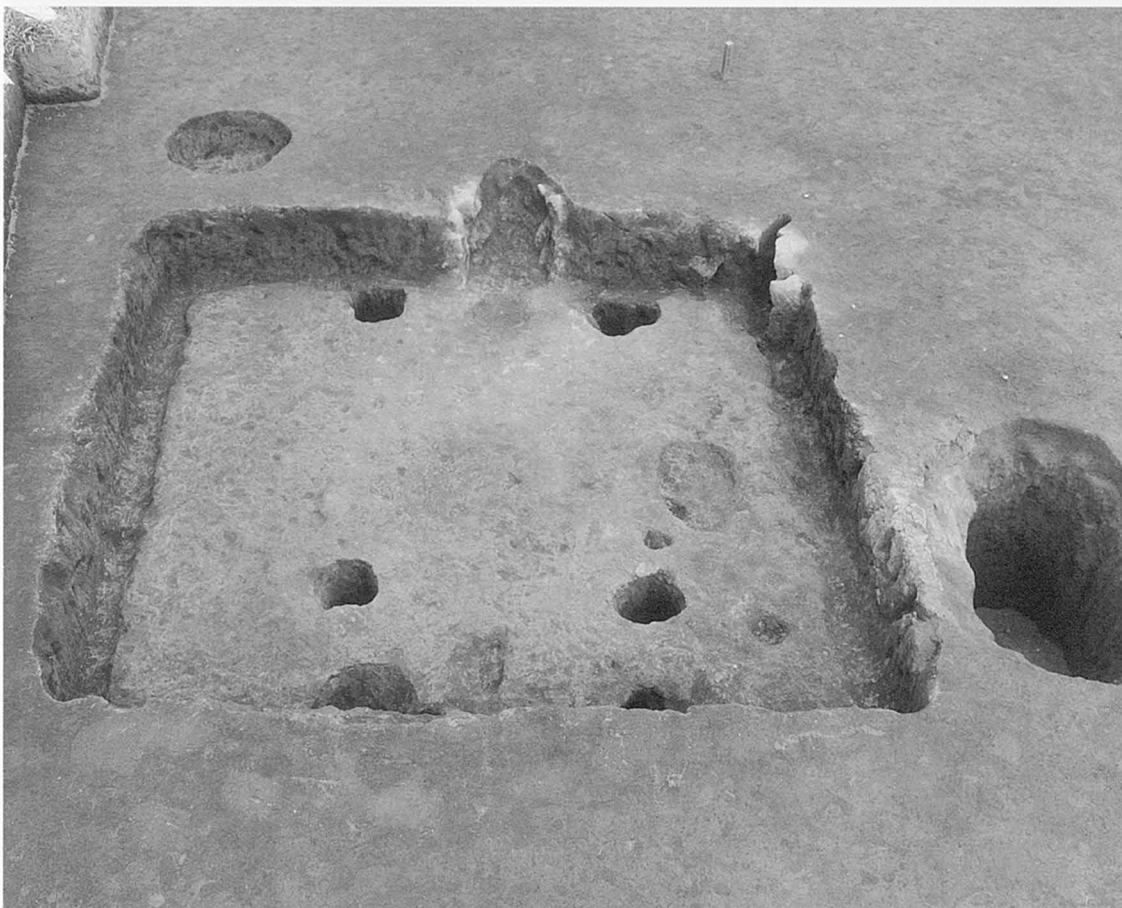
(左) SK-473  
(右) SK-488



(左) SK-510  
(右) SK-592



(左) SK-436  
(右) SK-566



SI-004

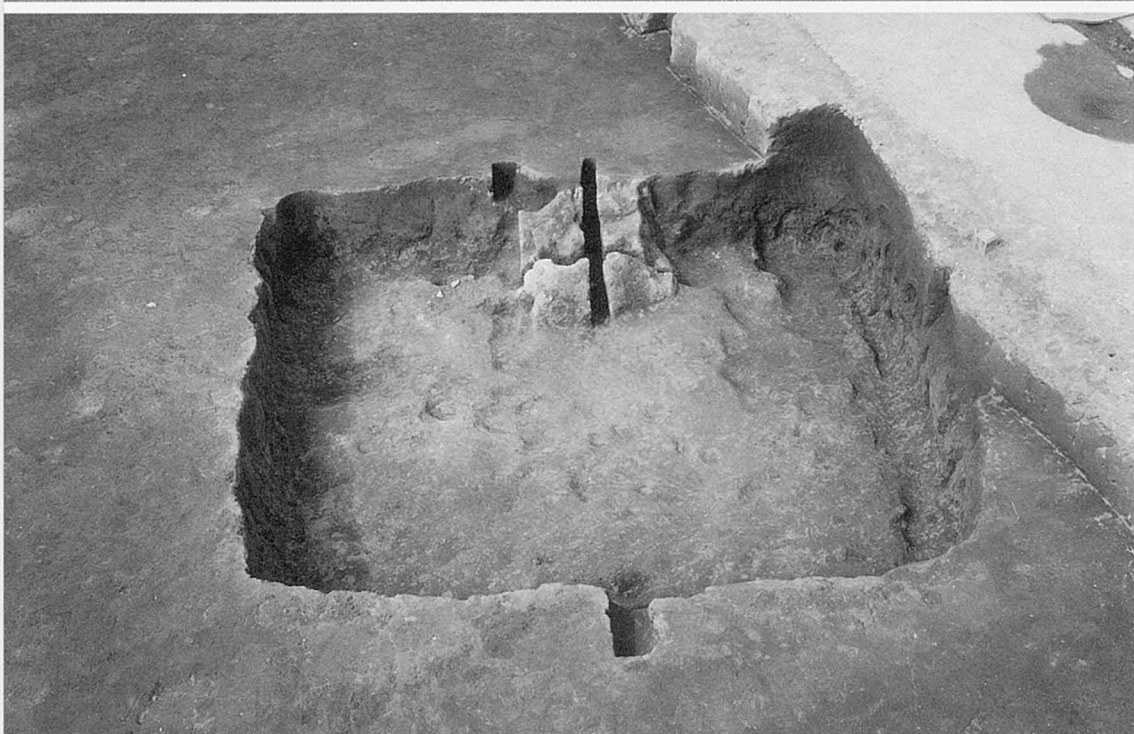




SI-004カマド



SI-007



SI-008



SI-008  
遺物出土状況



SI-012



SI-282





SI-283



SI-284



SI-287



SI-358



SI-358  
カマド内遺物出土状況



SI-367A





SI-368



SI-368  
カマド内遺物出土状況



SI-439



SI-439  
カマド内遺物出土状況



SI-462



SI-465





SI-471A  
(平成13年度分)



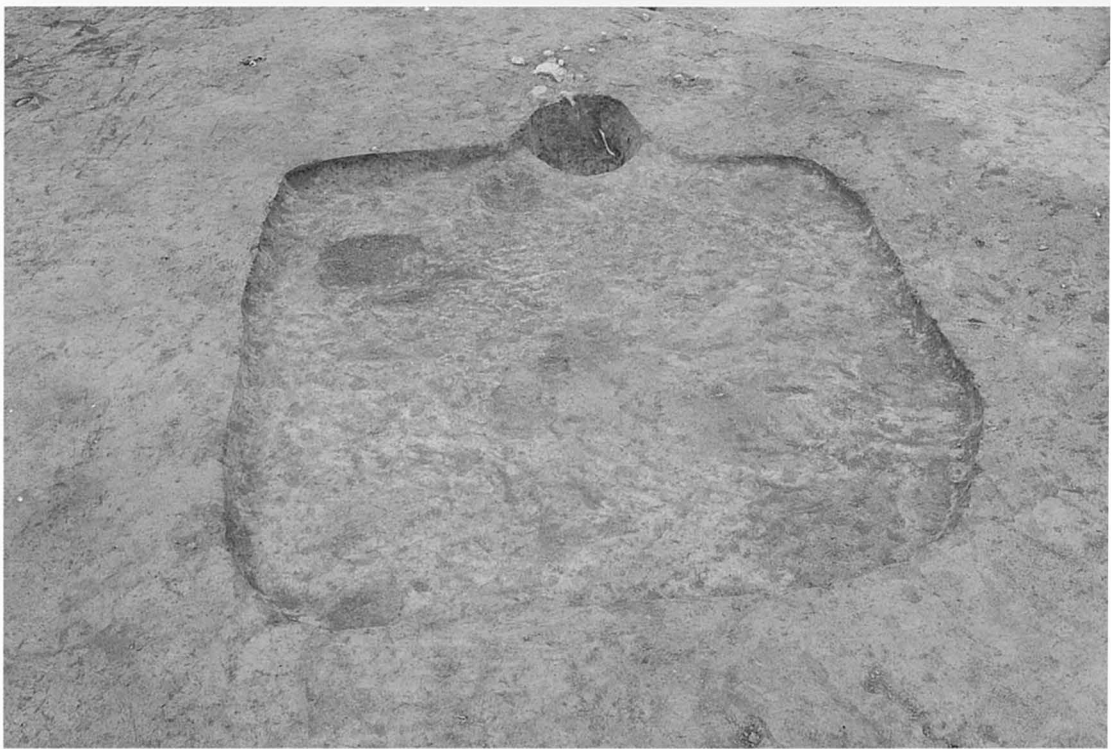
SI-471A  
カマド内遺物出土状況



SI-485



SI-551



SI-554



SI-563





SB-351 · 352

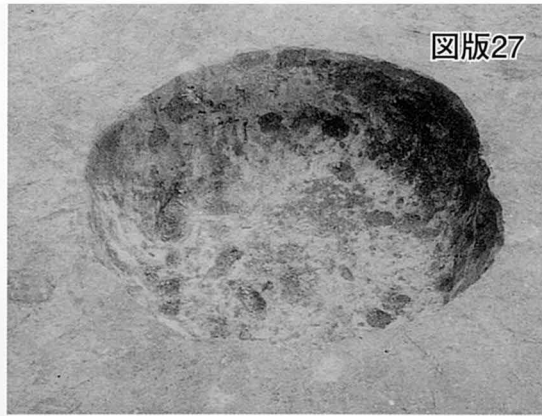


SB-489



SB-561

(左) SK-475A  
遺物出土状況  
(右) SK-009



(左) SK-010  
(右) SK-011



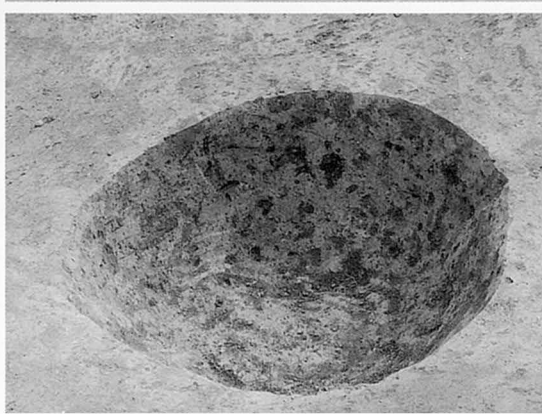
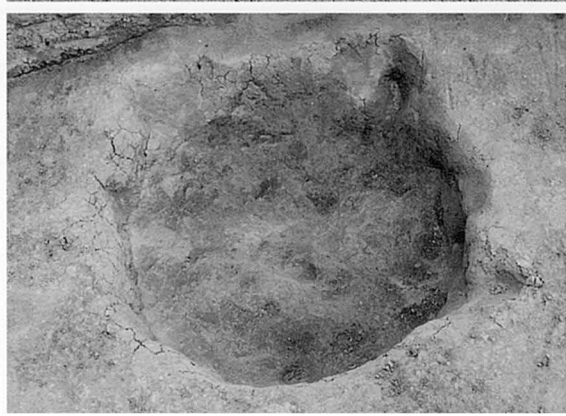
(左) SK-293  
(右) SK-303



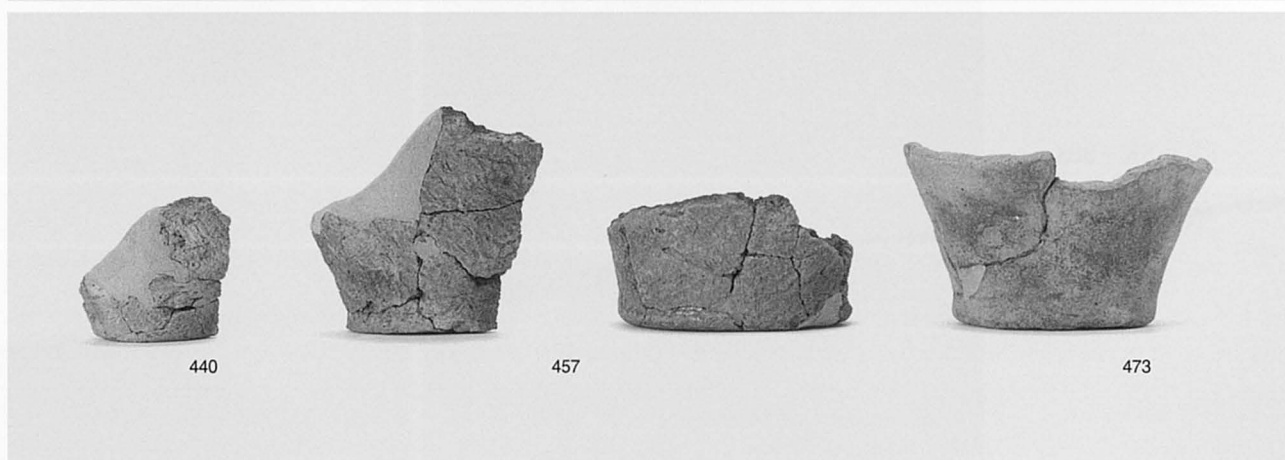
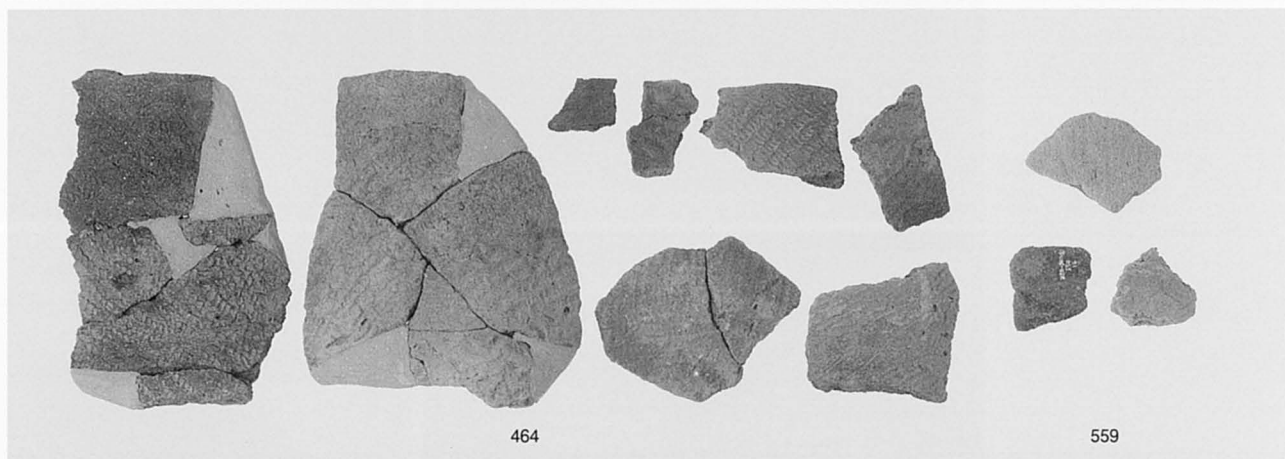
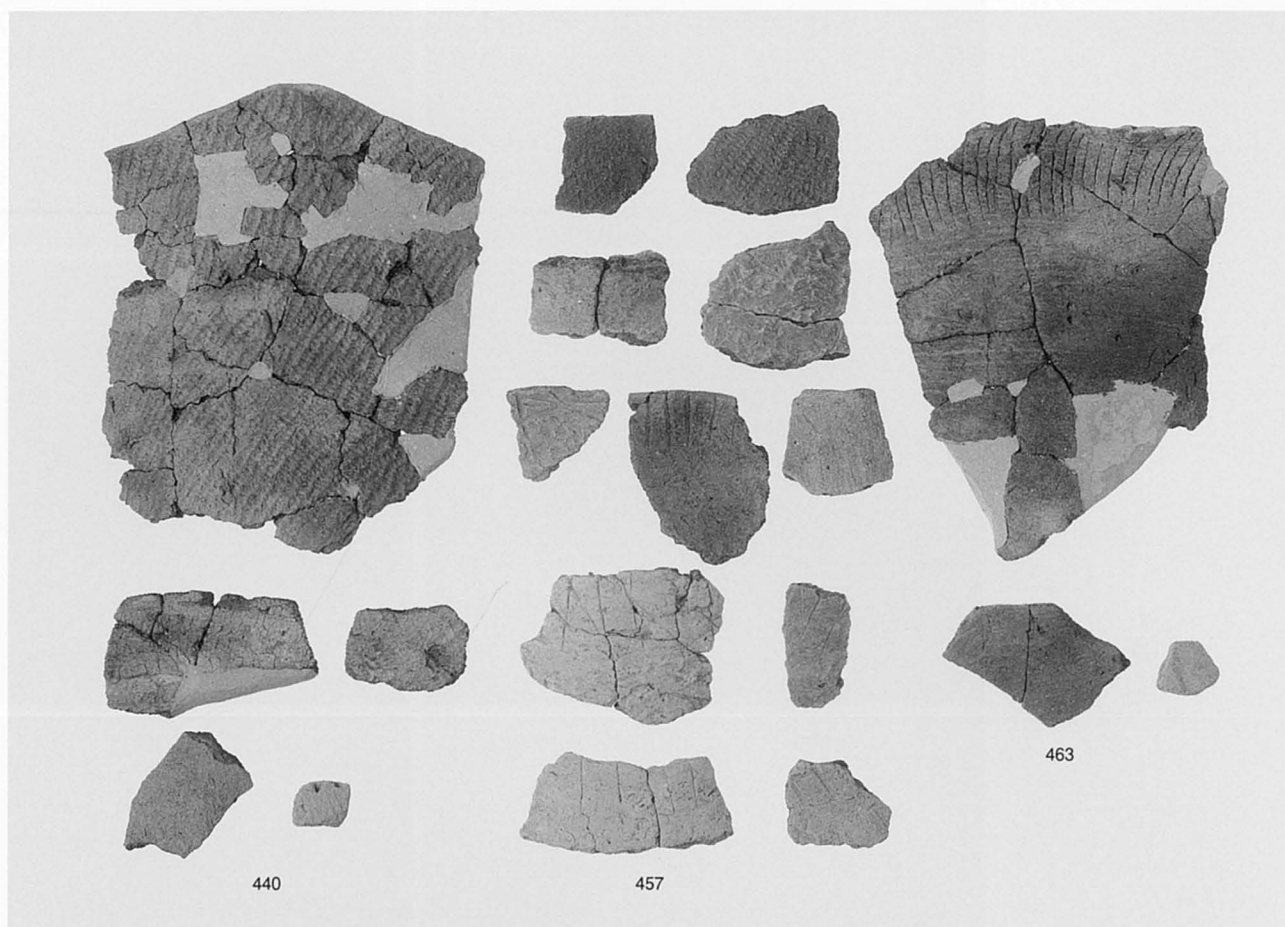
(左) SK-303  
遺物出土状況  
(右) SK-365



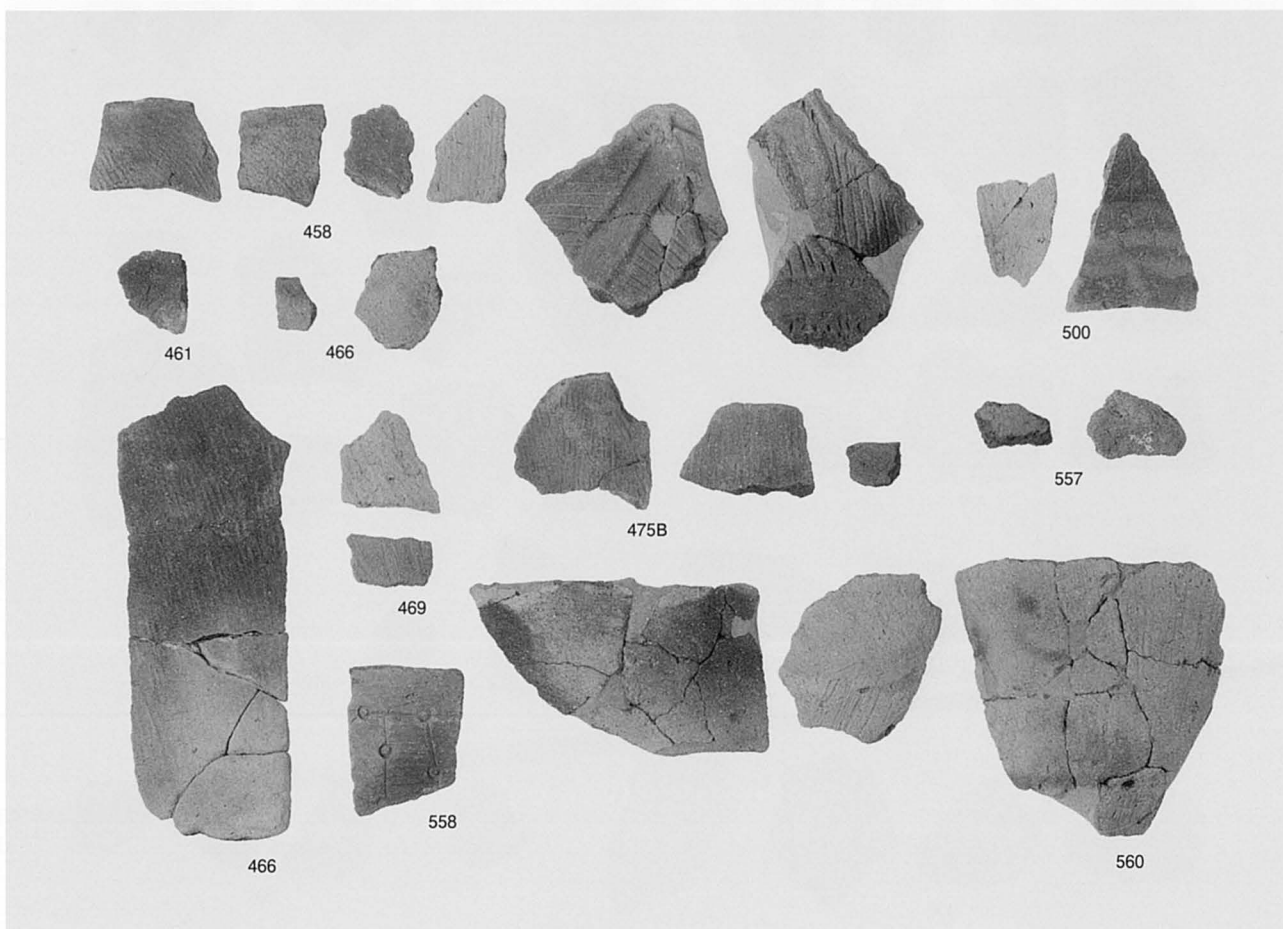
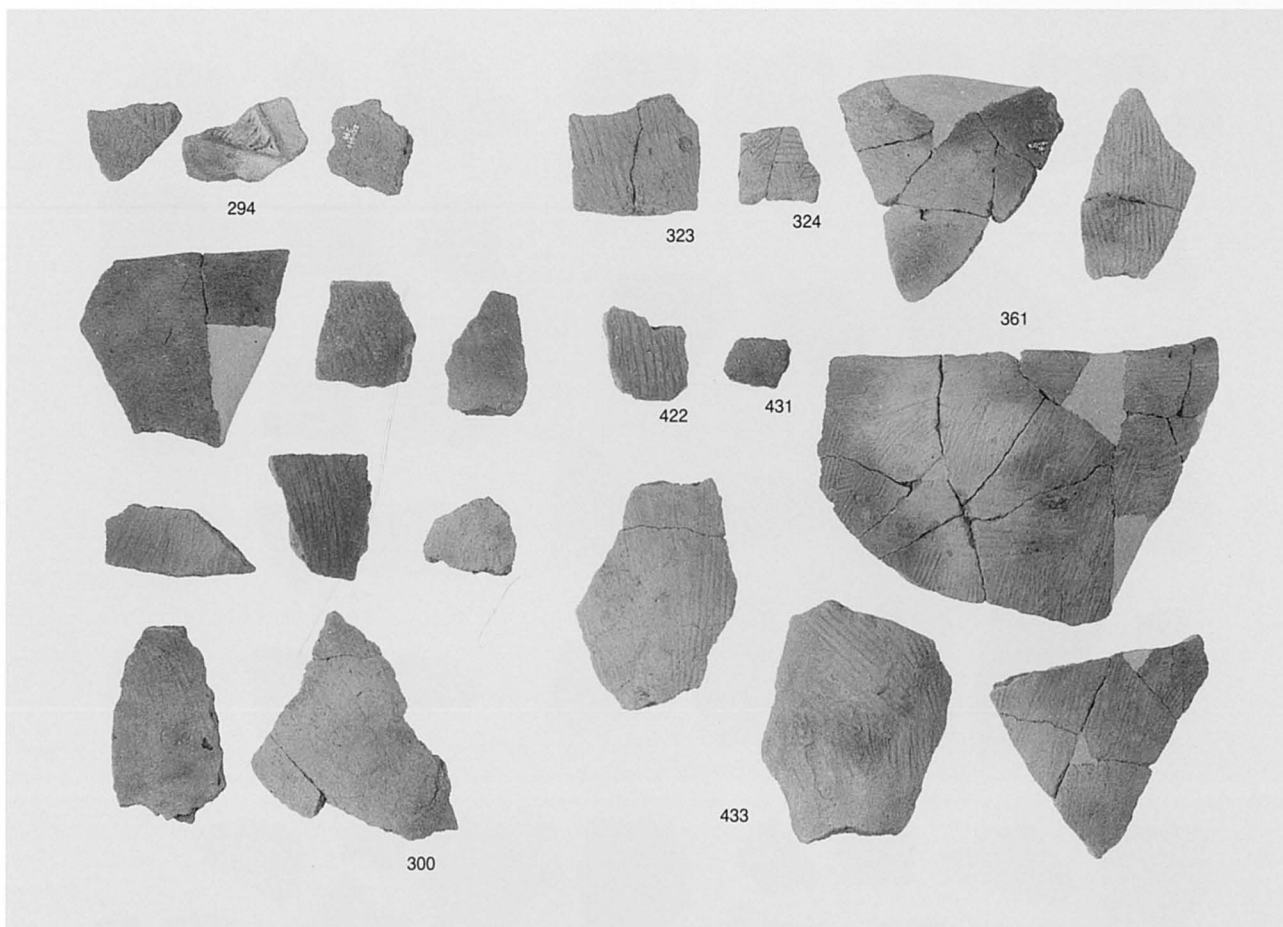
(左) SK-437  
(右) SK-472



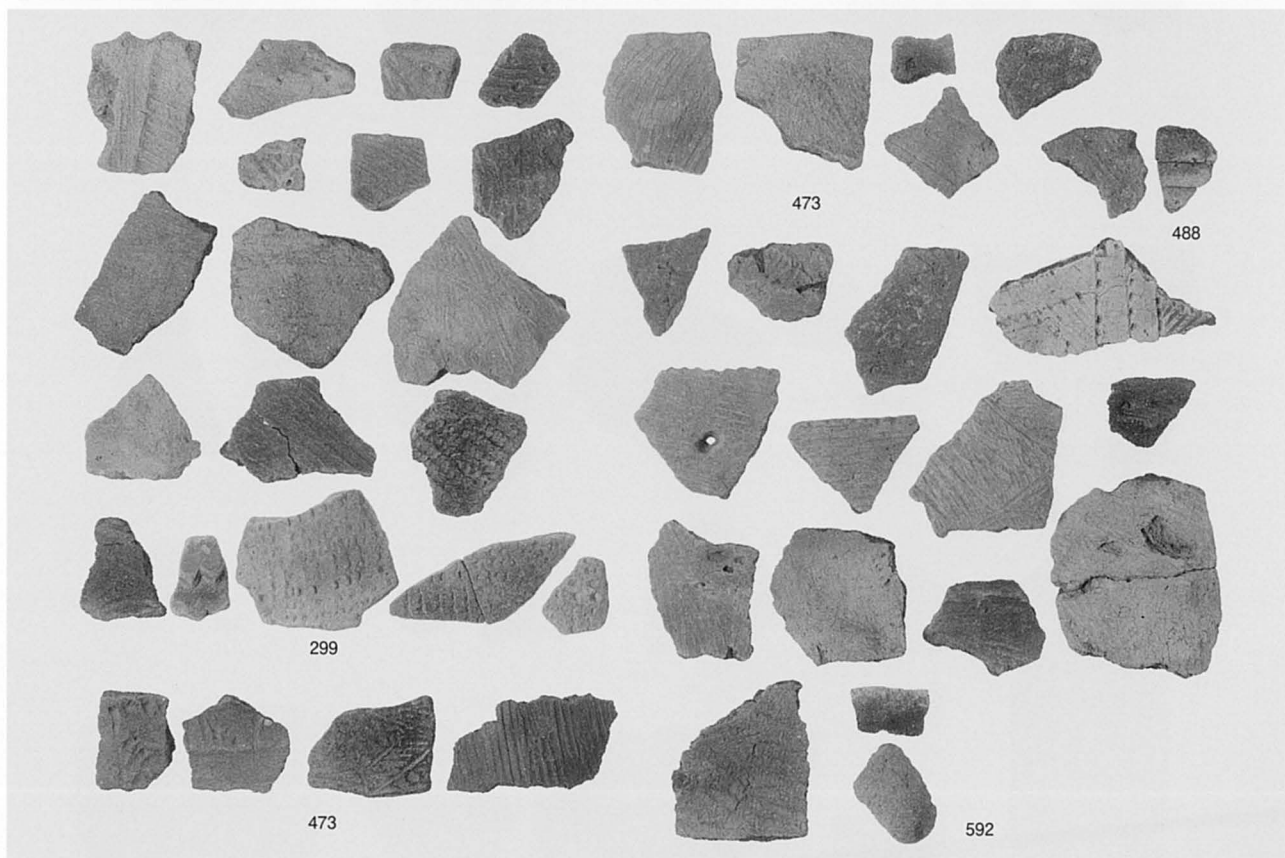
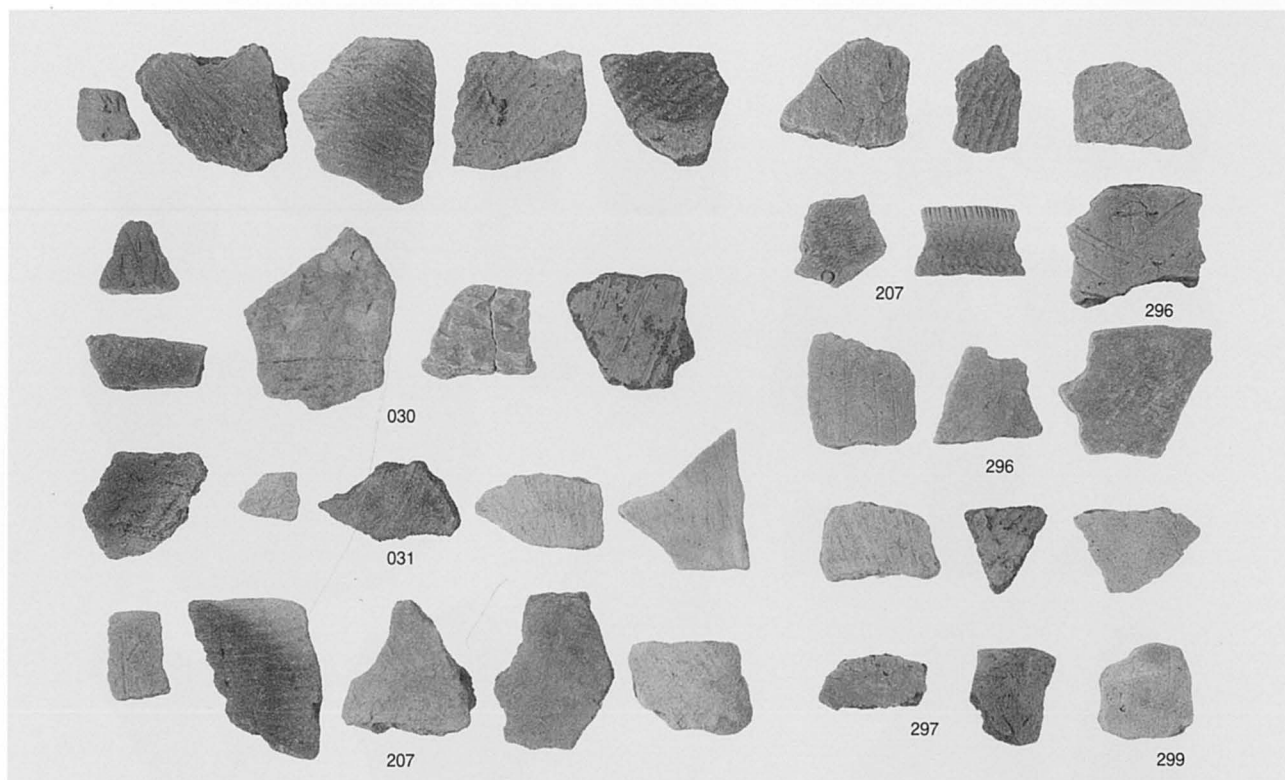




遺構出土縄文土器(1)

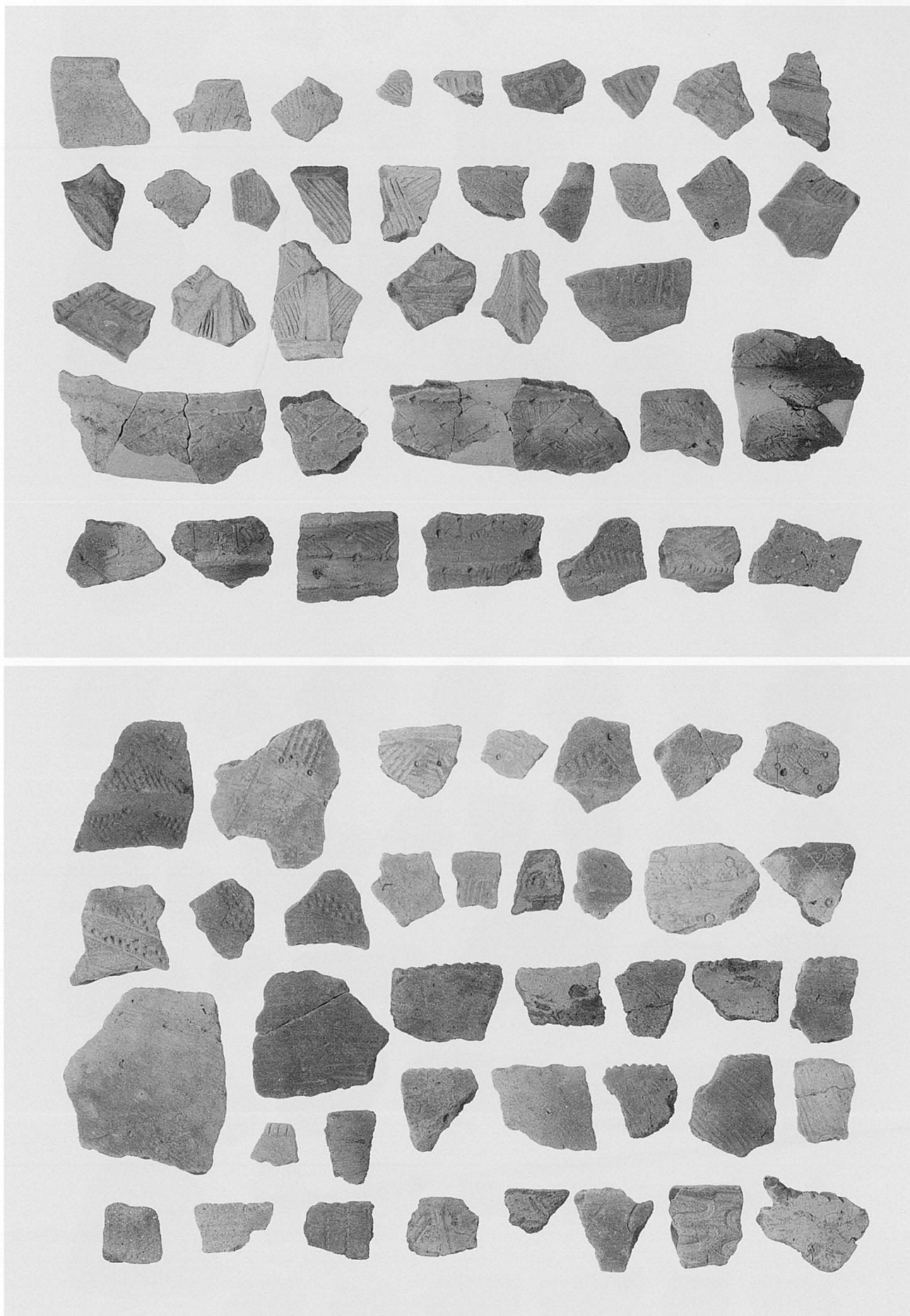


遺構出土縄文土器(2)



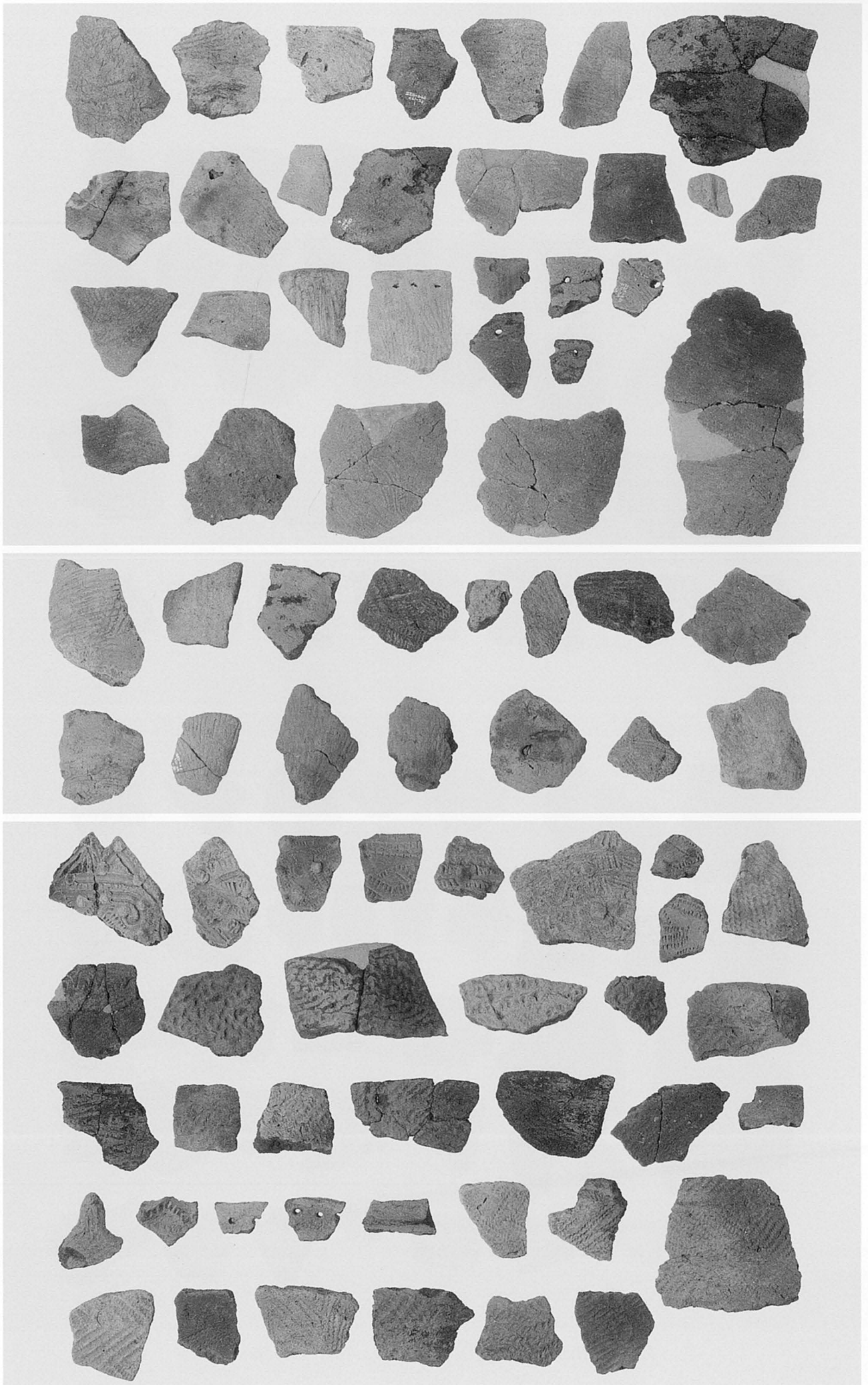
遺構出土縄文土器(3)



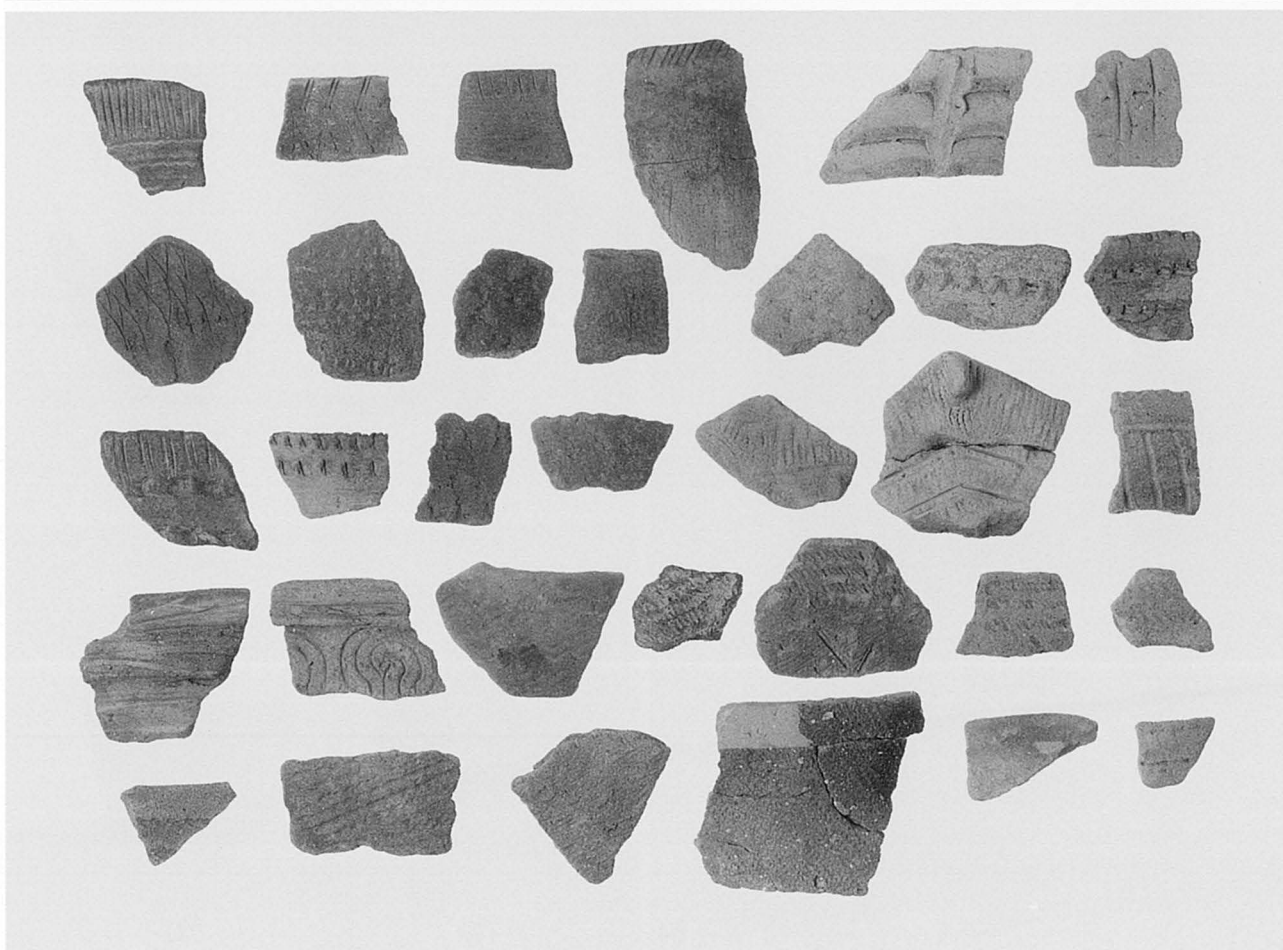
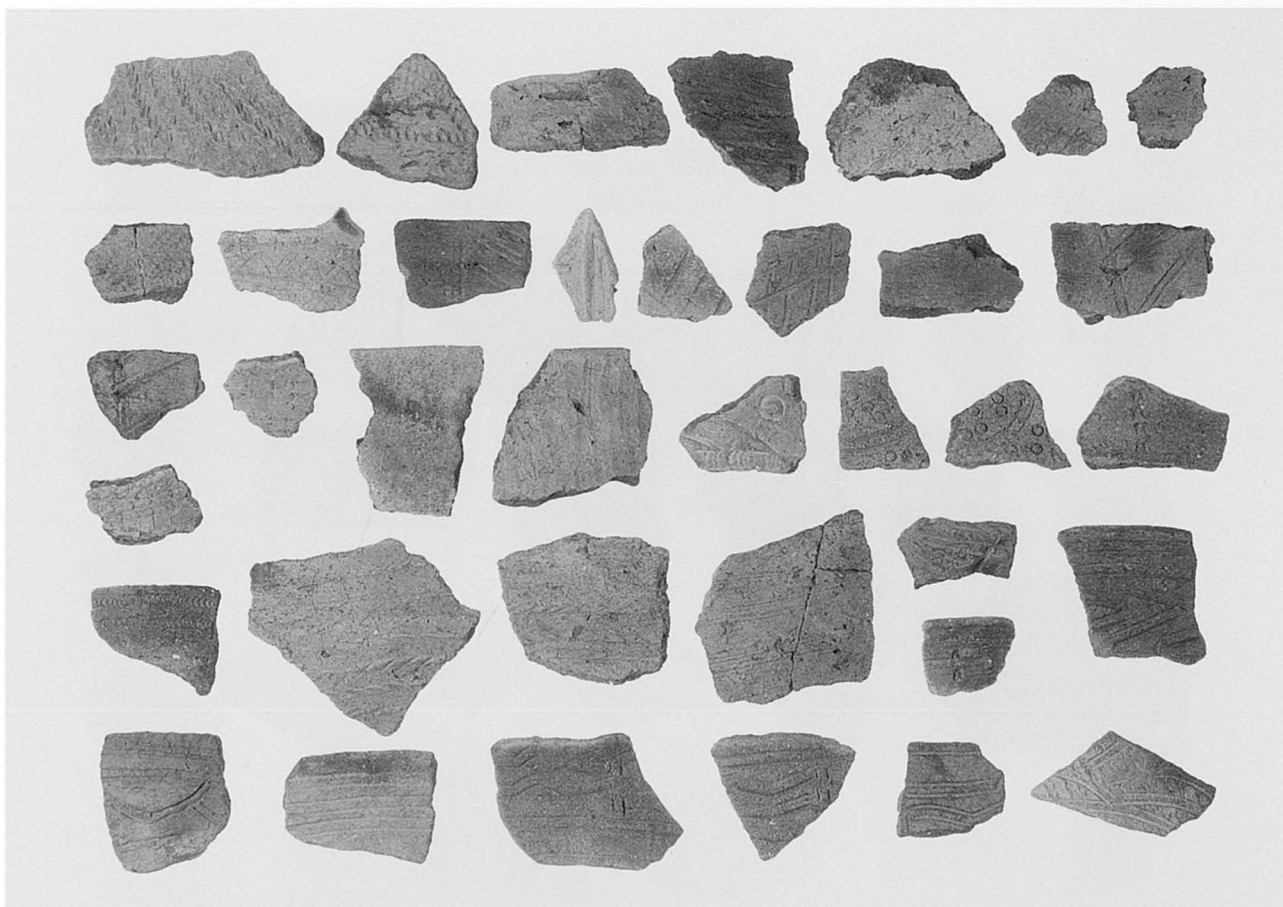


グリッド出土縄文土器(1) (上1~37、下38~53・55~76)

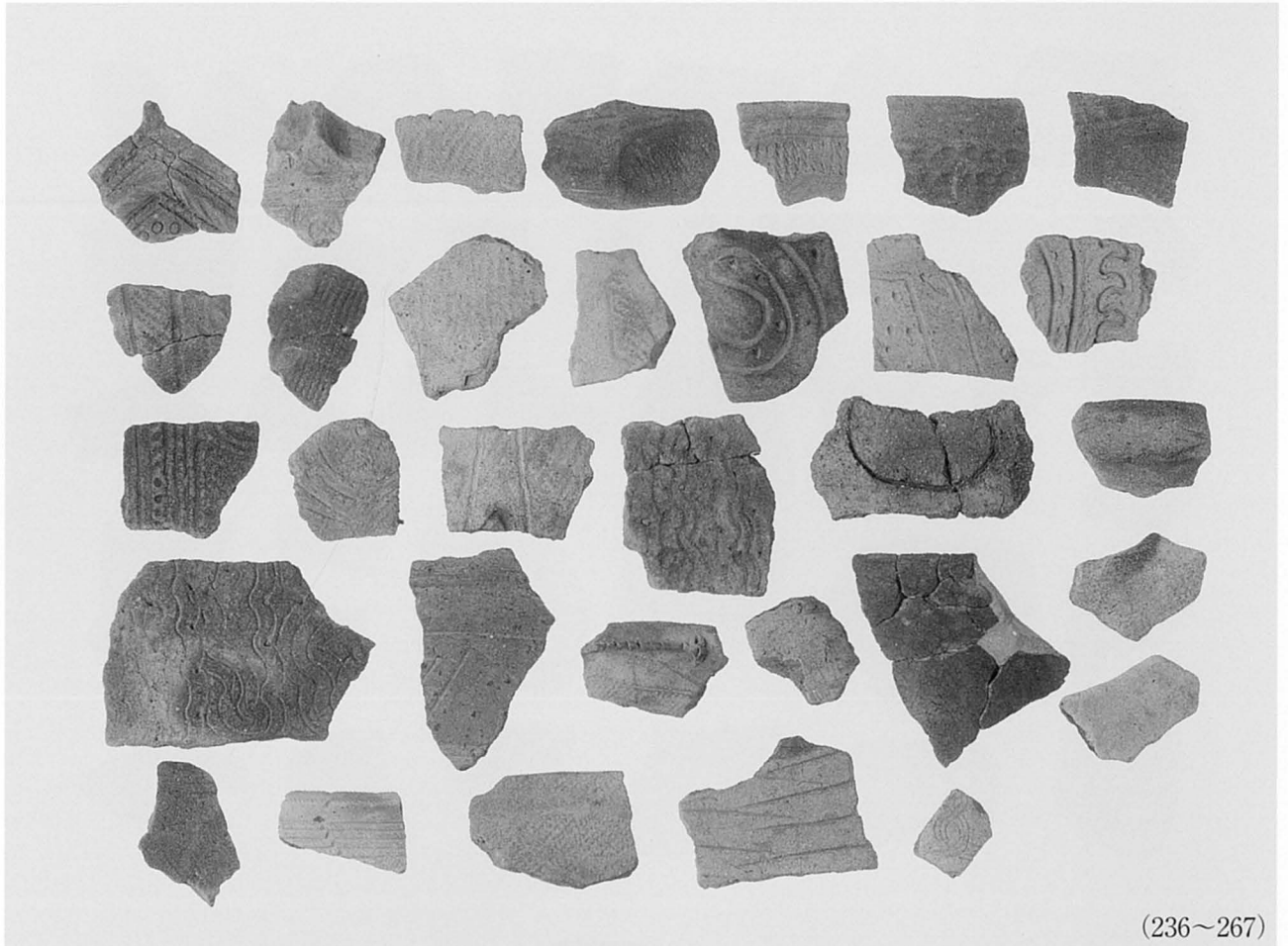




グリッド出土縄文土器(2) (上77~105、中106~117・119~121、下122~157)



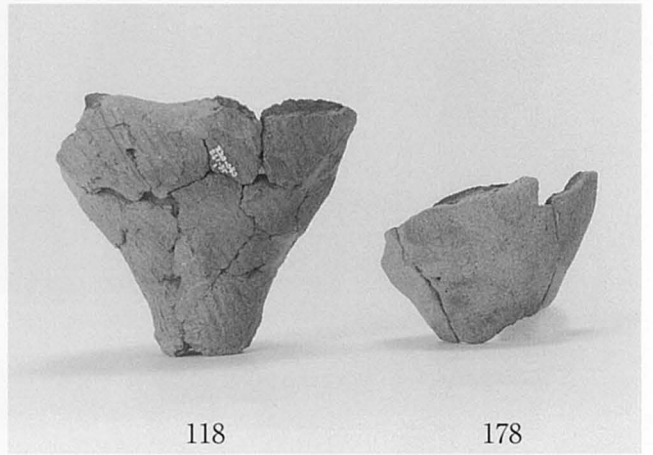
グリッド出土縄文土器(3) (上158~177・183~199、下200~218・222~235)



(236~267)

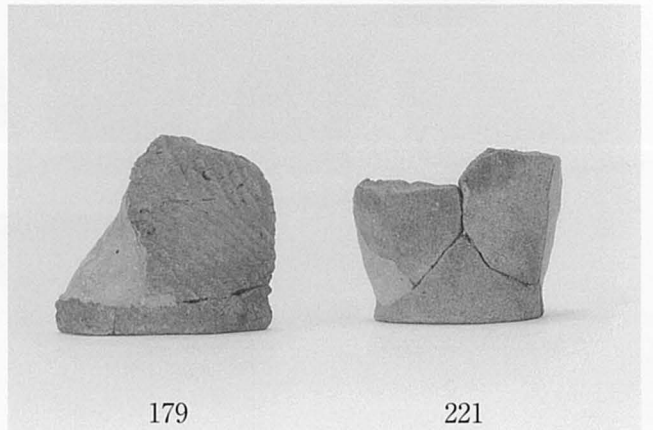


54



118

178

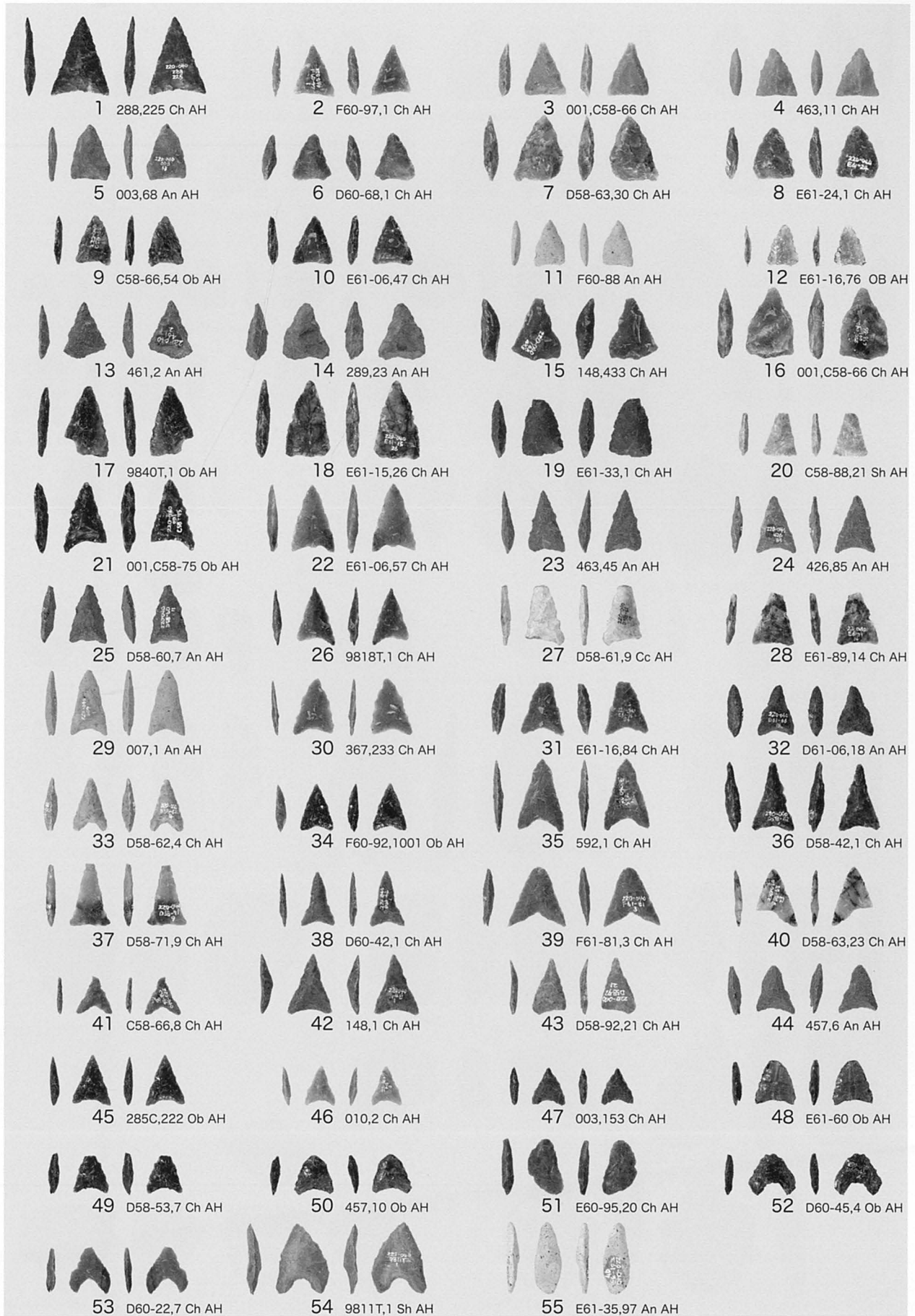


179

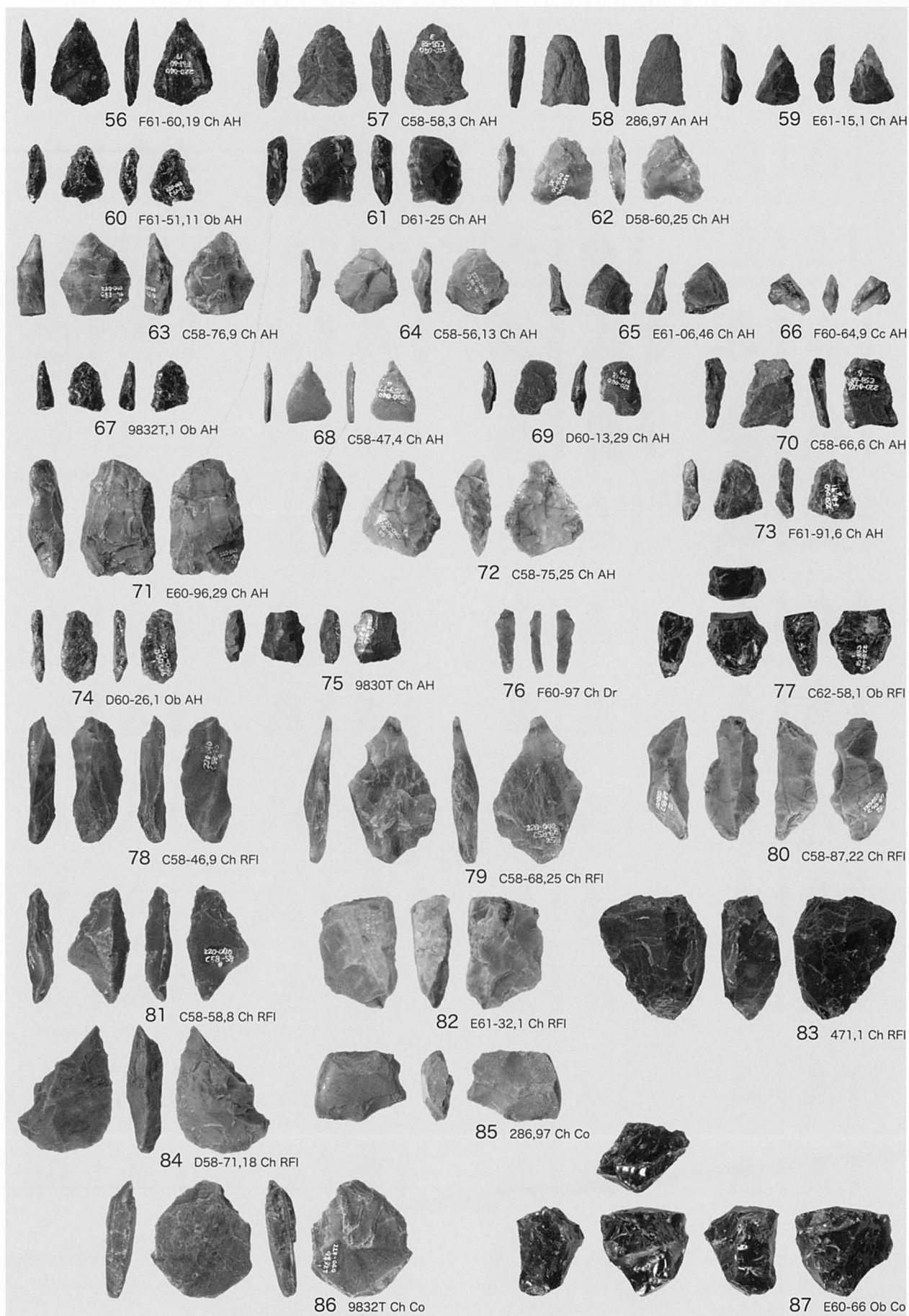
221

グリッド出土縄文土器(4)

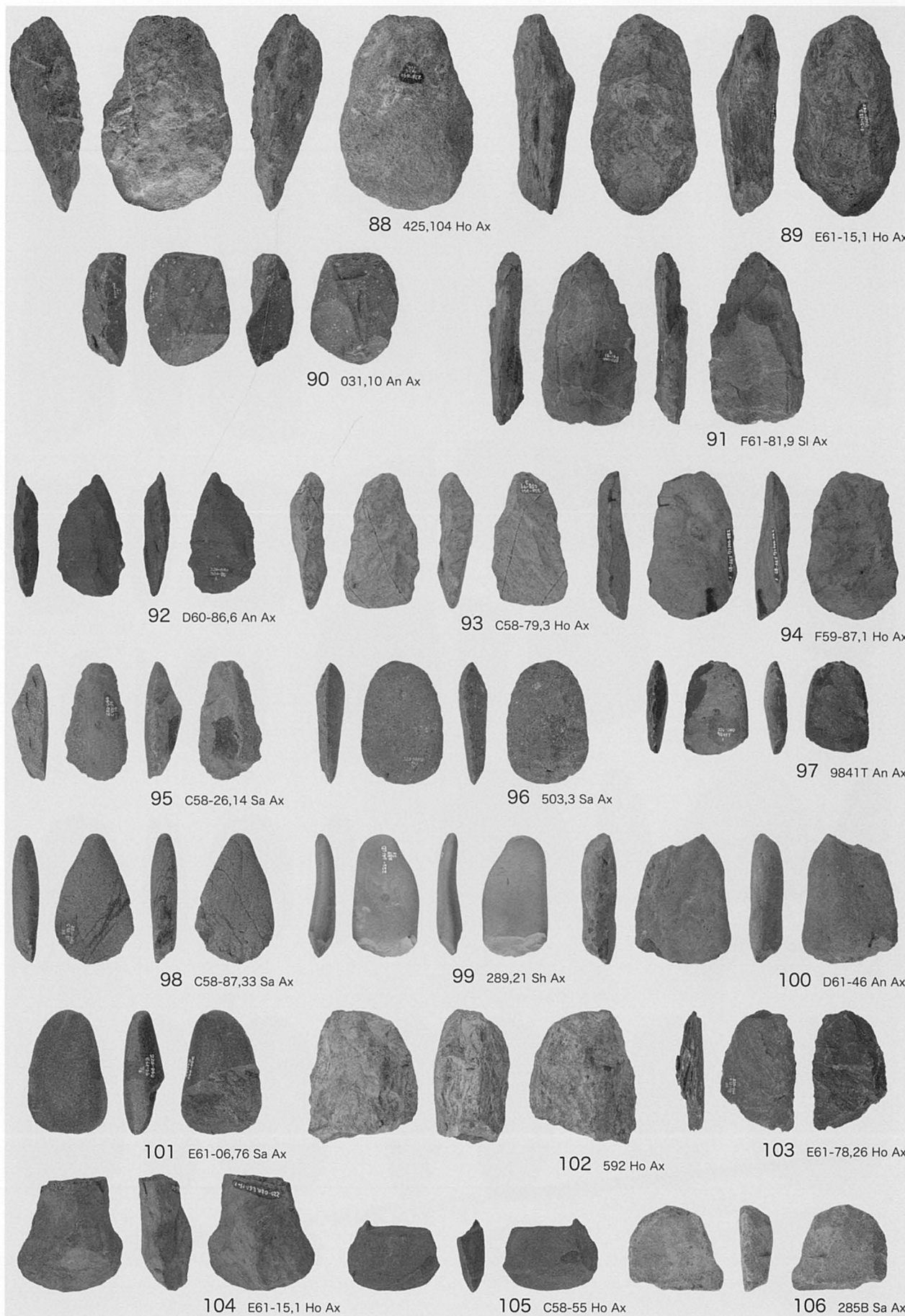




縄文時代石器(1)

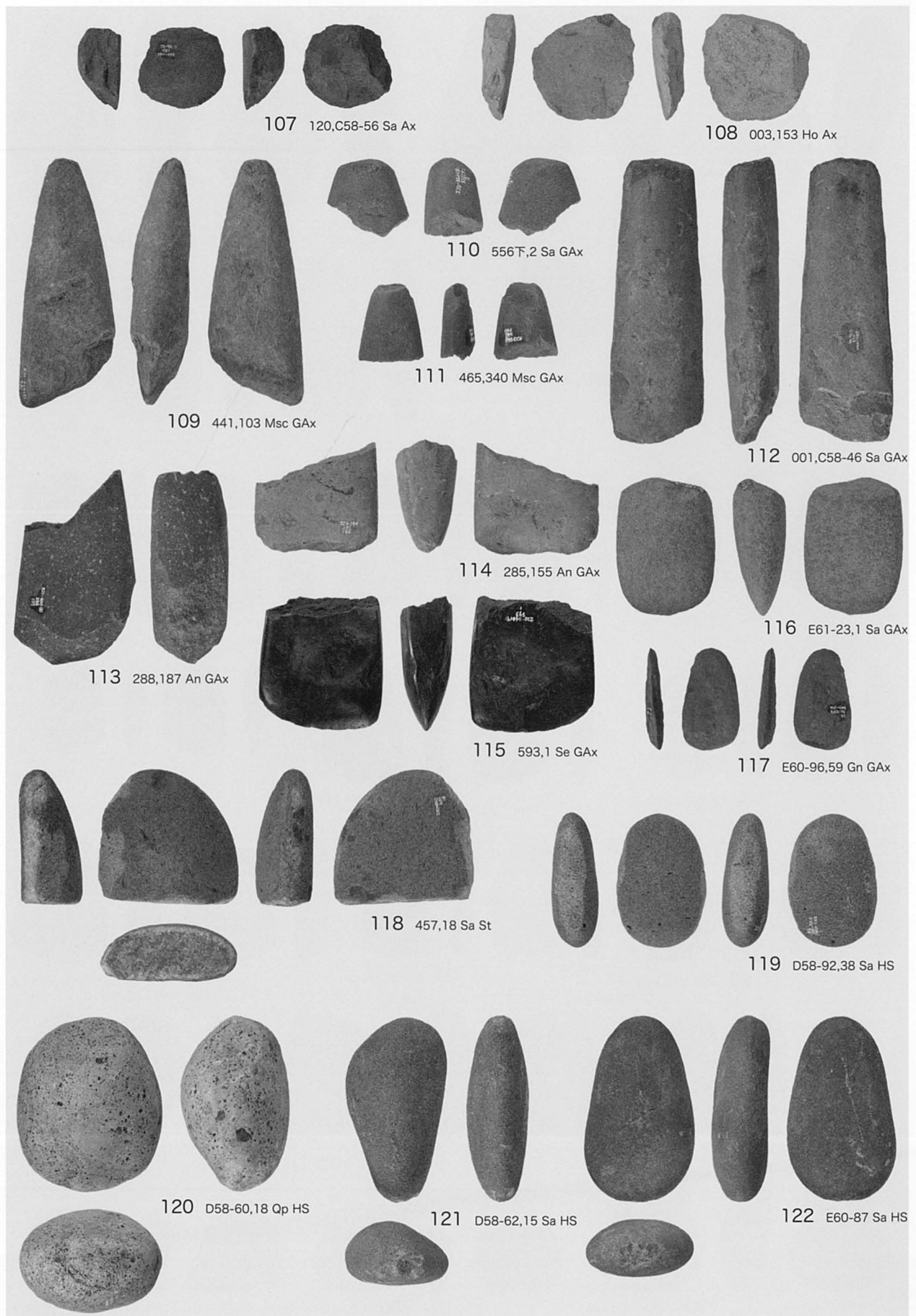


縄文時代石器(2)



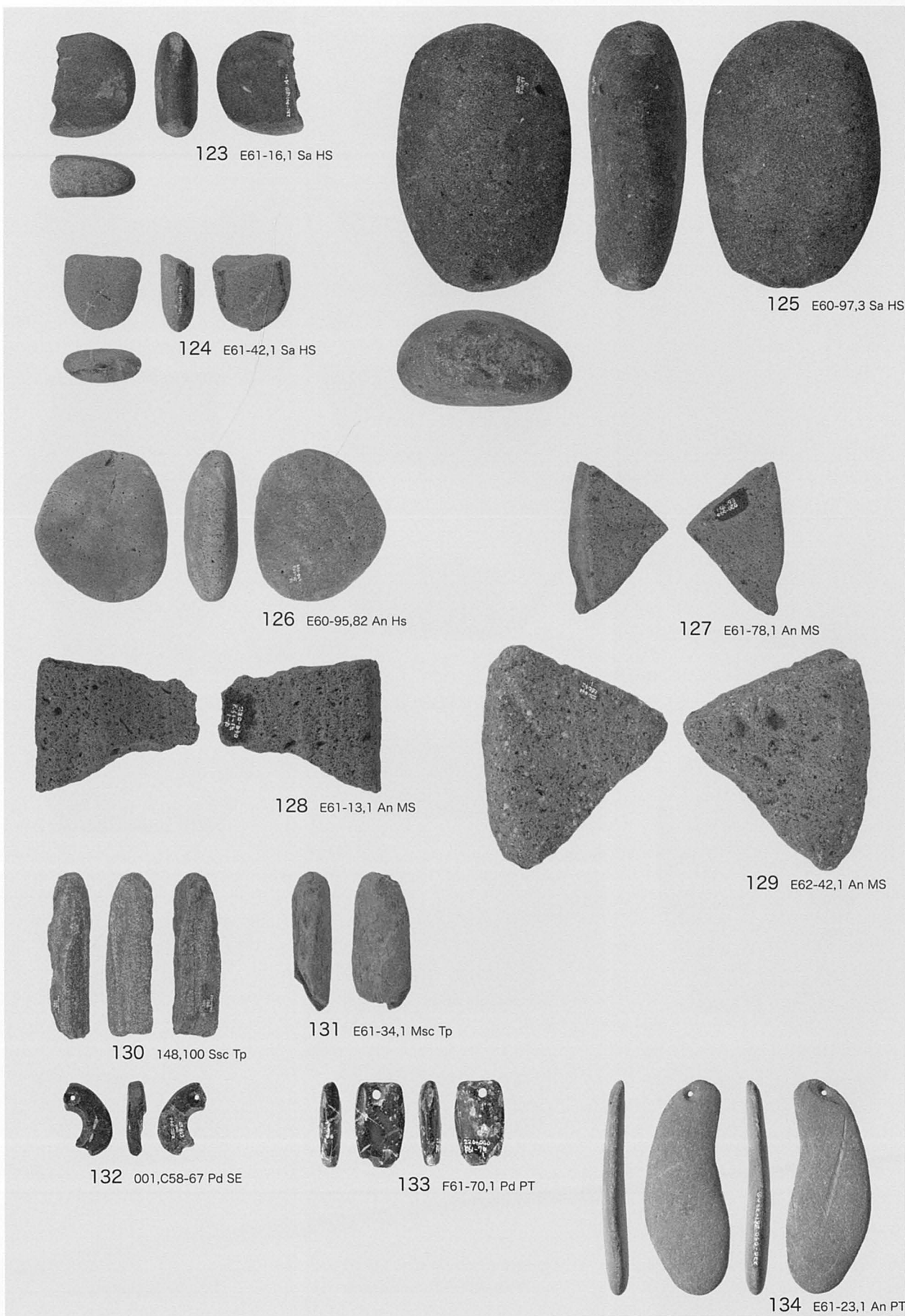
縄文時代石器(3)



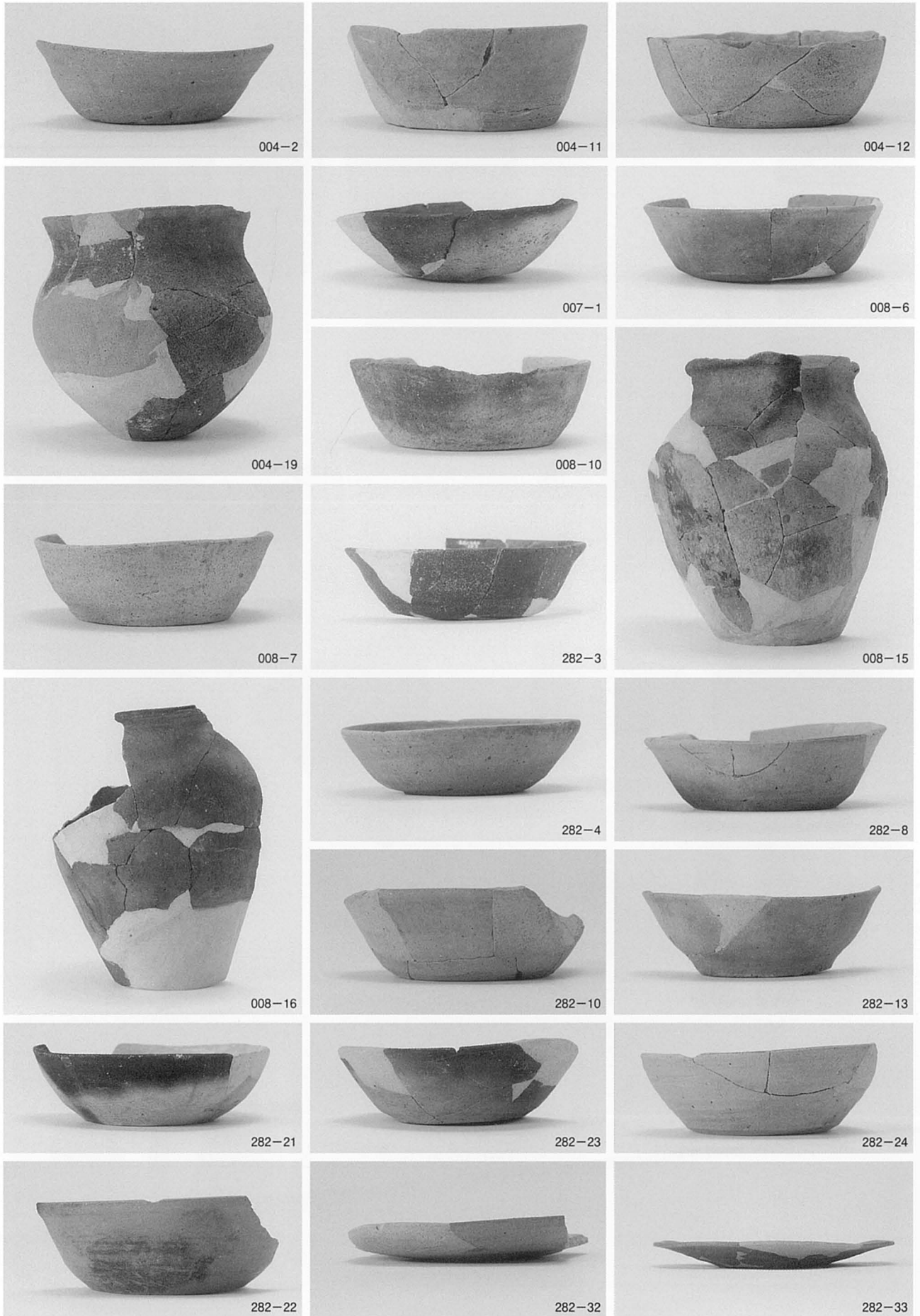


縄文時代石器(4)





縄文時代石器(5)



奈良・平安時代土器(1)



282-29



282-56



283-9



282-36



283-10



283-13



283-15



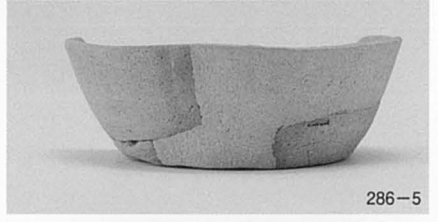
283-17



283-29



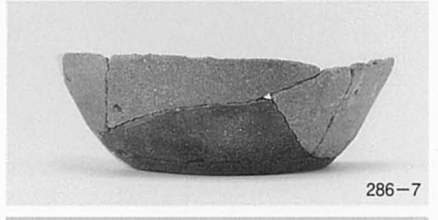
283-42



286-5



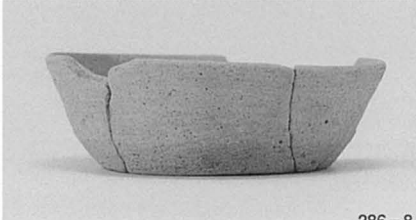
286-2



286-7



286-11



286-8



287-3



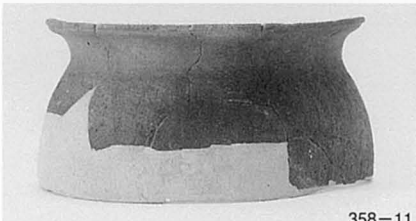
358-3



358-7



358-2



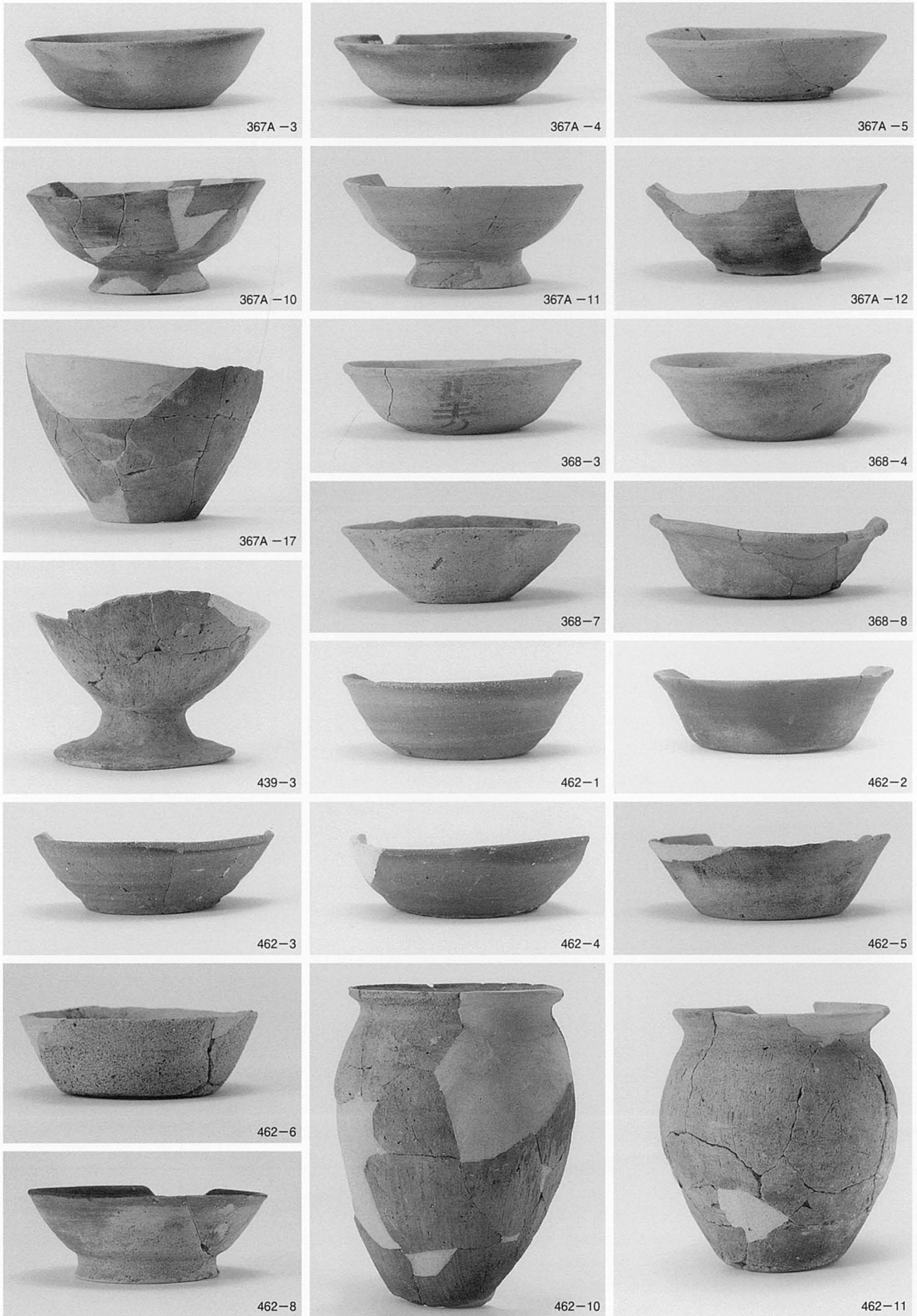
358-11



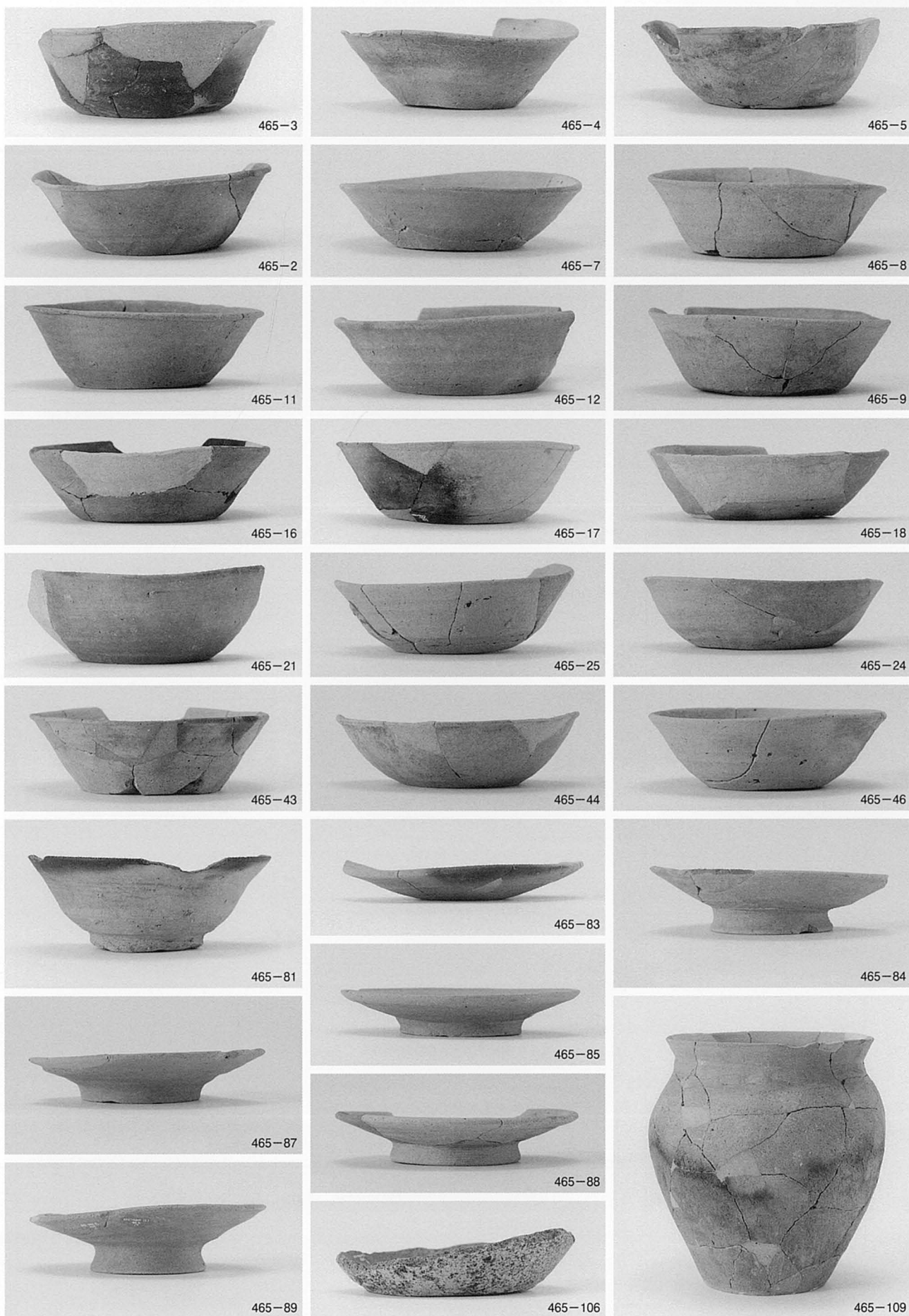
367A-1

奈良・平安時代土器(2)

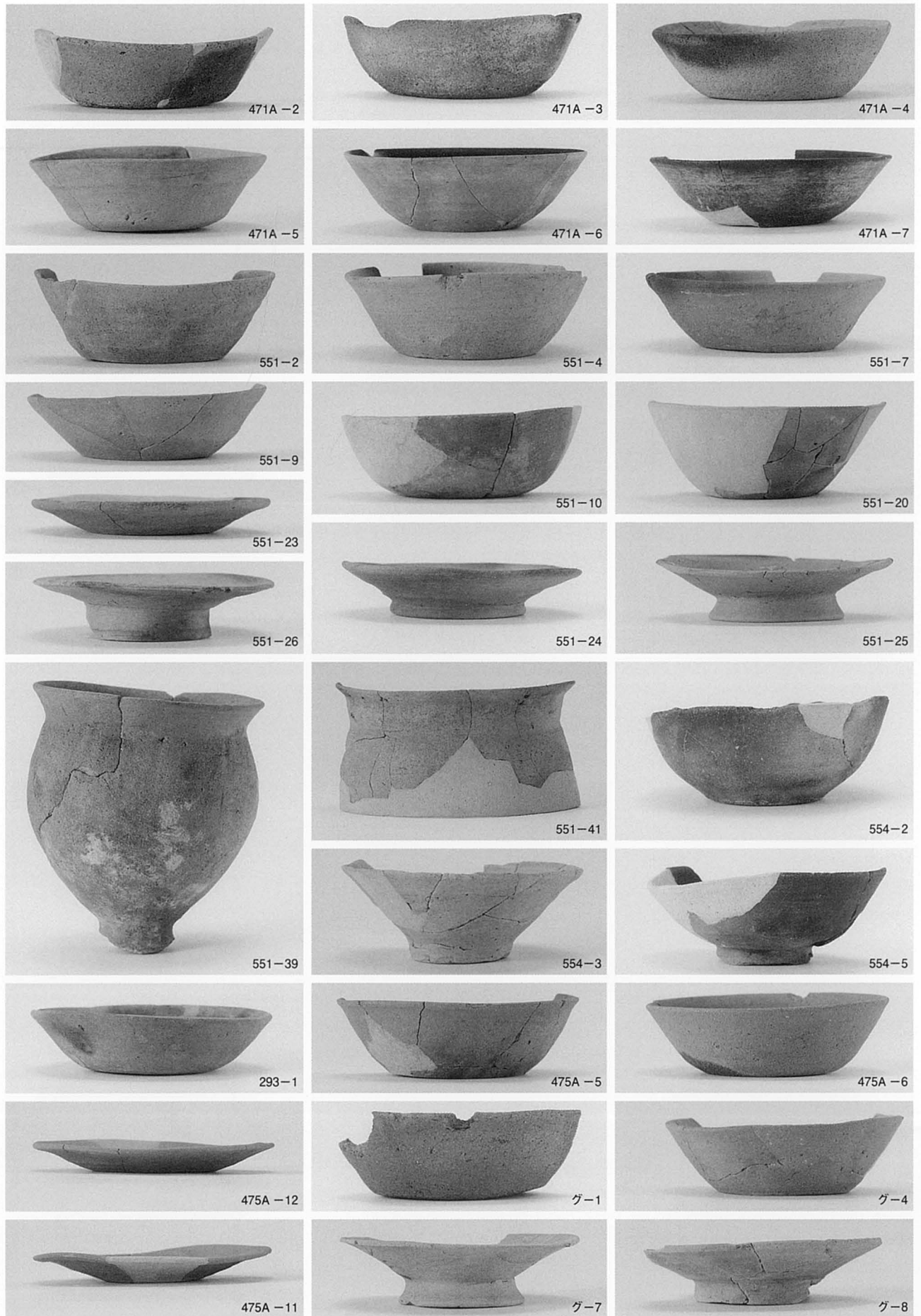




奈良・平安時代土器(3)



奈良・平安時代土器(4)



奈良・平安時代土器(5)



(凸面)

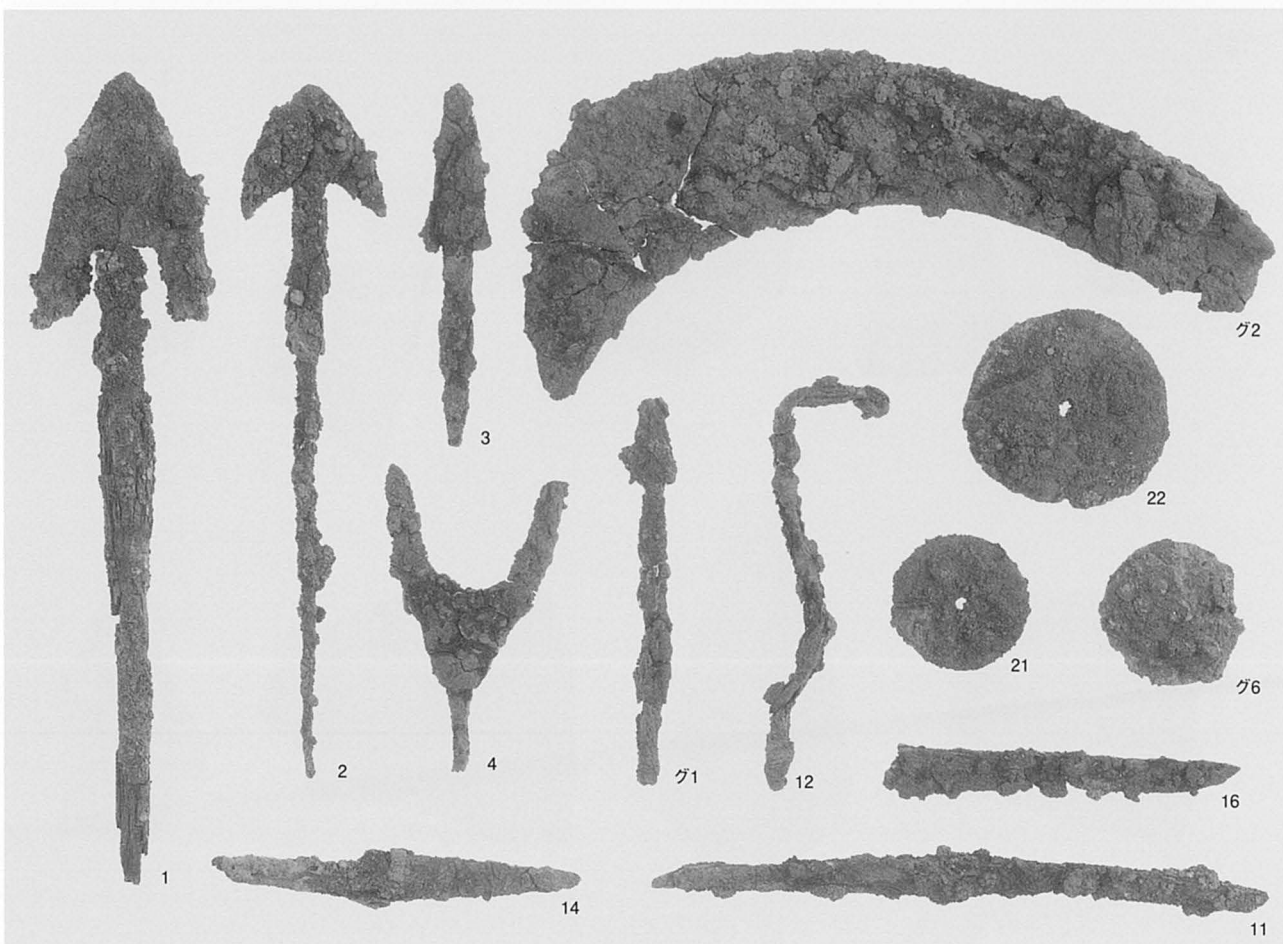
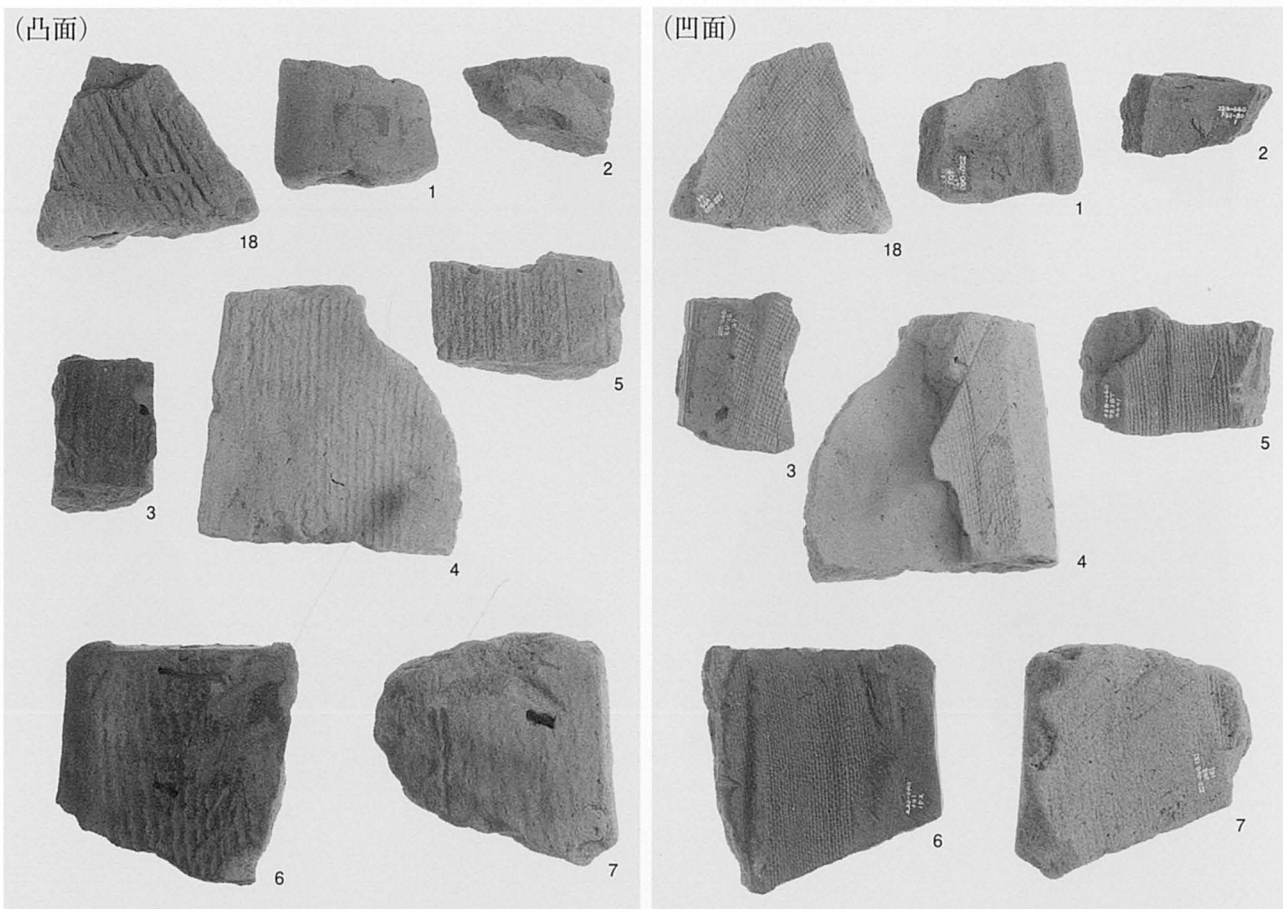


(凹面)



竖穴住居跡出土瓦

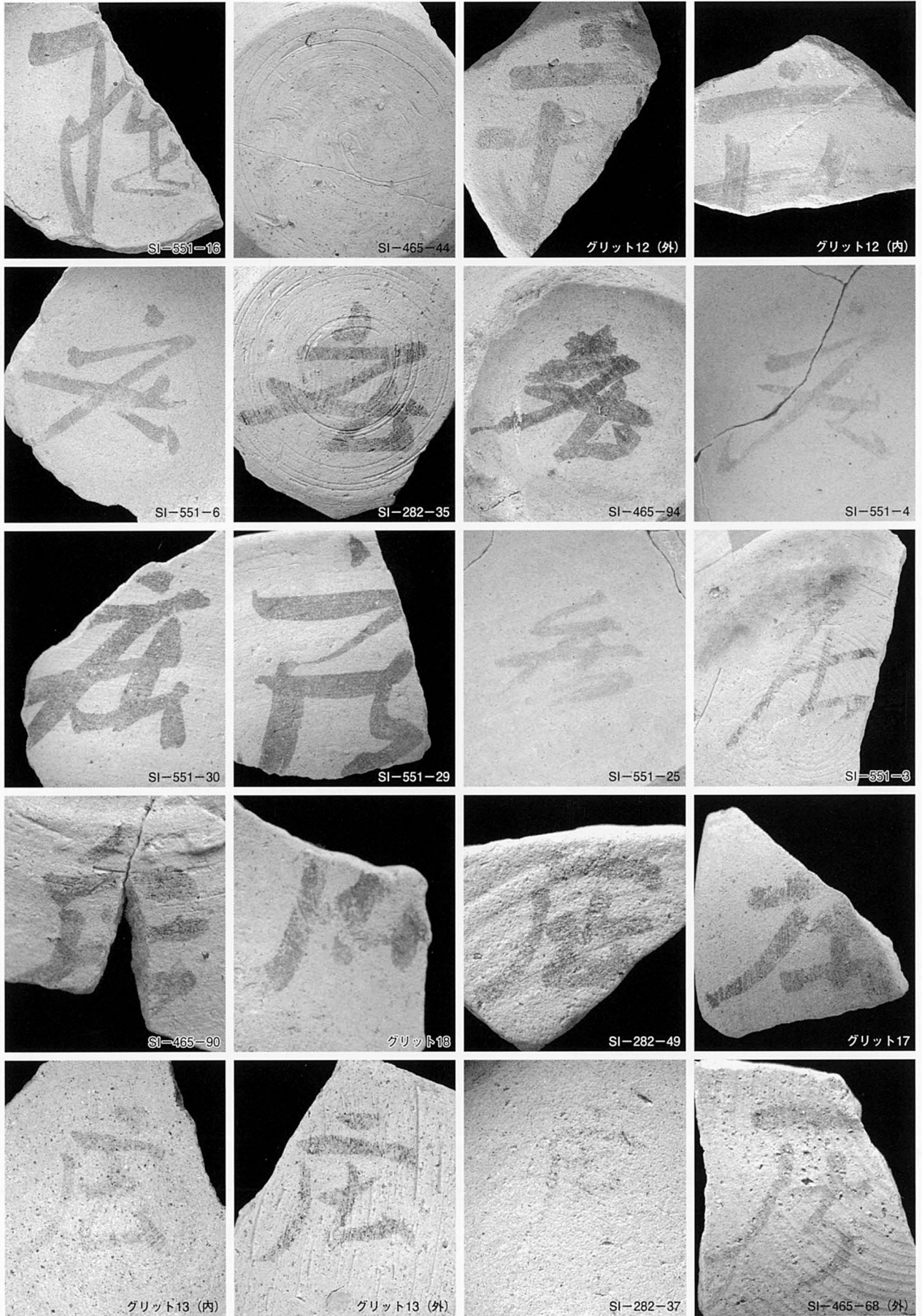




土坑・グリッド出土瓦（上段）、竪穴住居跡・グリッド出土鉄製品（下段）



土製品



墨書土器赤外線写真(1)





墨書土器赤外線写真(2)



墨書土器赤外線写真(3)

報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第635集							
編著者名	伊藤智樹・栗田則久・落合章雄							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043 (424) 4848							
発行年月日	西暦2010年 1月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おもいほり うち 思井堀ノ内 いせき 遺跡	ち ばけんながれやまし 千葉県流山市 おもいあざほり うち 思井字堀ノ内 523-1ほか	12220	040	35度 50分 43秒	139度 54分 53秒	19990201～ 20040227	21,896㎡	土地区画整理 事業に伴う埋 蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
思井堀ノ内	包蔵地  集落跡	旧石器時代  縄文時代  奈良・平安 時代	石器集中地点11か所  竪穴住居跡 5軒 炉穴 35基 陥穴 8基 土坑 3基  竪穴住居跡 26軒 掘立柱建物跡 6棟 柵列 1基 土器焼成遺構 1基 祭祀遺構 1基 小鍛冶炉 2基 土坑 12基		ナイフ形石器、 石核、剥片  縄文土器、石器、 挾状耳飾り  土師器、須恵器、 緑釉陶器、灰釉 陶器、墨書土器、 瓦、鉄製品、鉄 滓、支脚、羽口、 管状土錘、砥石		縄文時代の早期から前期 にかけての集落が営ま れた後は台地上から姿を 消し、奈良・平安時代 になって突如として集落 が出現するようになる。時 期的には8世紀後半から 10世紀初頭頃までの比較 的短期間に形成された集 落である。その中で、9 世紀前半から中頃にか けての「庄」及び「宗」の 墨書土器が各40点ほど 集中して出土している。こ れらの墨書土器や比較的 多くの施釉陶器の出土及 び土器焼成遺構や鍛冶 炉・紡錘車などの手工業 に関連する遺構・遺物の 検出は、まさしく初期 荘園の存在を伺わせる重 要な遺跡となった。	
要約	旧石器時代は、Ⅲ層からⅩ層にかけての多時期にわたる石器群が11か所認められた。また、縄文時代の集落は、早期後半から黒浜期にかけての竪穴住居跡とともに早期の炉穴群が多く検出された。弥生・古墳時代は空白期間となり、奈良・平安時代になって再び集落が営まれる。当該時期には、「庄」墨書土器が多く出土しており、この遺跡が初期荘園として機能していたことが想定される。							

千葉県教育振興財団調査報告第635集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書 2

－流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）－

---

平成22年 1 月25日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発 行 千 葉 県 県 土 整 備 部  
千葉県中央区市場町1番1号

財団法人 千葉県教育振興財団  
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正 文 社  
千葉県中央区都町1丁目10番6号

---